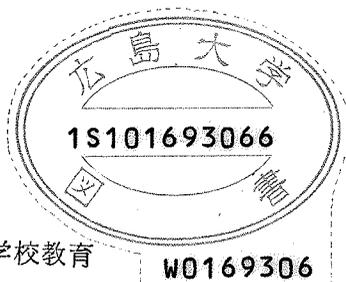


昭和日本語方言の総合的研究

第三卷

方言文末詞〈文末助詞〉の研究

(上)



広島方言研究所

藤原与一

春陽堂

## 緒 言

ここに、「方言文末詞<文末助詞>」の研究を発表する。今、一つの宿願をはたそうとすることに、自身、いささかの感慨を禁じ得ない。

発表は、上・中・下の三巻とする。

ただし、上巻と中巻との区わけは、単純にページ数計算によった。

日本語の方言の研究にあたって、「文末詞<文末助詞>」を重視すべきことは、すでにたび重ねて強調してきた。わが国の方言研究の一点は、文末詞研究におかれてしかるべきだと、私は確信している。——多くの新学徒が、方言研究の道にたつて、しかも現地の方言生活に謙虚に面を向けた時、一挙に、観察・調査の重要性を自覚するのは、じつに文末詞においてであるのは、何をものがたるか。

西洋近代の諸言語に比照しては、私どもはますます、日本語についての文末詞研究の重要性を痛感する。彼我の言語間での、文表現構造の相違に明らかなおりとおり、文末詞なるものは——また、文末詞の活動する文表現末尾の特定文末部なるものは、まったく、日本語にとっての特質的なものである。私は、わが文末詞の研究にしたがうことによって、近代言語学の一翼に参加しうることを愉快とし、かつは、このような方法で、日本語に依拠する一般言語学を開拓しうるのを欣快とする。

私が、年来の企図にしたがって本書に叙述するところは、私なりに言って、文末詞研究の高次共時論である。

高次共時論に関しては、旧著『方言学』の、「高次共時方言学」に関する所説をご参照くださるならばさいわいである。

なお、前著『方言敬語法の研究』は、その緒言にもしるしたとおり、私が「高次共時論の実践」とするものである。

私の文末詞研究のあゆみをふりかえってみる。昭和二十四年刊の『日本語方言文法の研究』で、私は、文表現末尾にはたらく特定の表現要素に注目し、その実態をとらえて、品詞論的には、これを「文末助詞」とした。同書では、文末助詞を記述するところが多大である。昭和現代の日本語方言諸分野にたちいって、その実態を視るにつれ、私には、文末助詞とその活動とが、かぎりもなくつよくせまってきた、これへの関心は、敬語法への関心とともに成長した。しかも、文末助詞の活動もまた人間の待遇表現の重要部面をになうものであるため、文末助詞研究と敬語法研究とは、私にあって、まさに方言研究の車の両輪のようなものになった。

最初に文末助詞研究をまとめたのは、昭和二十一年（1946年）である。その時の標題は、『日本語表現法の方处的研究 第二』というのであった。恩師土井忠生先生のご指導による。（これには特別の事情もあった。先生のたてられた「敬語の歴史の方处的研究」という研究主題の「方处的」のところ、私に付与された。当時の文部省科学研究費の恩恵によるものである。その「敬語の方处的研究」を承けて、私は、つぎに、敬語法に密着した「文末助詞表現法」を、『日本語表現法』の名でとらえて、『日本語表現法の方处的研究 第二』をまとめた。）上の研究物は、「ナ行音文末詞」「ヤ行音文末詞」「サザ行音文末詞」にわたる。この範囲の研究は、やがて修成されることになり、昭和二十七年には、ひとまずその業がおわった。（広島文理科大学の研究室に属して、教室でその研究の一端を発表し得たのは、私の感謝にたえないところである。）

待遇表現法因子ともしうる文末助詞、これに関する表現論的な研究をまとめて、私は、早期には、『相手をよぶ文末表現法』という中間的な発表物をまとめたこともある。これに類するものでは、また、のちにまとめた『日本語対話表現の文末機構』というのものもある。

このようないとなみに並行して、私は、しだいに、文末助詞を文末詞とよぶようになった。対話の訴えかけ成分は、文表現にあって、まず最初に分別特立されるべき表現要素であって、これを成さしめているものは、けっして辞的因子ではないと考えられる。このことを、しだいに明確にしてきたのであった。昭和三十一年末には、『文末詞の研究』の出版を用意している。

「文末詞」の名は、いまだ人々の目にこと新しいものでもあろうか。

名辞よりも実体である。要するに、しかるべき実体が正しく把握されていればよい。

『方言文末詞<文末助詞>の研究』の名の本の発表を目ざして、直接の準備をはじめたのは、昭和四十七年五月である。（ここでもまた、私は、昭和四十五年度ころの広島大学文学部大学院博士課程に、方言文末詞の講義と演習との機会を得たことを深謝する。なおこの当時も、私の手もとでは、方言文末詞の研究は、方言敬語法の研究<広義>に属するものとも考えられていた。）

本書（この上巻）および中下巻に見えるまとめのかたちを、最終的に立案し得たのは、昭和四十七年二月刊の広島大学文学部紀要特輯号2『方言文末詞（文末助詞）の研究』をしあげた当時である。本書の序編は、上著の総論の部によるところが多い。

（昭和51年6月12日）

※ ※ ※ ※ ※

本著作を成就して出版しうるについては、あらためて、多くのかたがたに感謝の意を表さなくてはならない。

まず、刊行に関する、春陽堂書店和田社長の寛容を深謝する。氏は、本「文末詞」研究の分割発表についても、ただちに好判断を示された。

先学・知友の、多くのかたがたの、年来のご激励に対しては、お礼の申しあげようもない。それこれのおたよりなど、つねに持して戒めとしてきた。

恩師諸先生のご鴻恩には，無限の謝意をささげる。

本巻校正にあってもまた，佐々木峻氏の真摯克明なお力ぞえをいただく。銘記して感謝するしだいである。

## 凡 例

1) 文末詞<文末助詞>研究は、上・下の二巻に制した。が、上巻初校刷が千ページにおよんだので、出版は、上・中・下の三巻仕立とされることになった。本書、上巻は、その前三分の一である。

2) ナ行音文末詞の「ナ」の項から、最後の感動詞系(文系)文末詞の末尾まで、蓄積の全カードを整理しておえて、私は、さてこの全カードをどう処理したものだろうかと考えこんだ。まっすぐに考えれば、すべてのカードを善用することがあるばかりである。それにしては、カード数が多すぎる。一書にまとめるためには、もとよりのこと、資料の大節減をはからなくてはならない。

思えば、研究とはふしぎなものである。年月をかけにかけて資料を集積する。さて、書く(記述する)段になっては、せっかく集めてきた資料を、すてにすてる。記述のしごとは、まずはカード省略のしごとになる。そのやや苦しい実践が、私のこの著述行であった。

本書掲載の実例について、その選択意図などをご明察いただけるならば大幸である。

3) 「ナ」「ナー」・「ノ」「ノー」などでの、文末詞長呼のことは、やっかいな問題である。私は本書で、長呼・非長呼を峻別せず、総合的に両方を一括してとりあつかう。いわば音韻論的処理でもある。「ナ」「ナー」は「ナ」とする。「ネーヨ」なども根本的には「ネヨ」というものであると見る。

所により事により、本文中、長呼形または短呼形をとりどりに記述しよう。そうすることによって、記述にはばを持たせ、記述を生きたものにした。——必要に応じて現場本位にものを取りあつかうということでもある。(短呼形をきわだてて論じるべきばあいにはそうする。長呼形についても同様である。)

およそ、文字どおり短呼の「ナ」などは、あり得ないことである。「ナ」

も「ネヤ」も「ノモン」も、その文末詞形は、いうまでもなく、開音節の母音におわる。それゆえ、文表現を文末詞——特定文末部——で言いとめたばあいには、かっきりとした母音短呼は成りたたなくて、短呼のつもの時も、つねに微妙な長呼がおこる。

- 4) 本文中の実例には、通常、アクセント符号がつけてある。傍線部が、より高く発音されるべきものである。傍線部分に「○○○○○○」のようなくぎれのあるばあいは、のちの傍線部分がより高めに発音されることをあらわす。
- 5) 実例を現代共通語で言いかえているものに“ ”があれば、その部分は、土地人の説明のことばか、それに準じうるものかである。  
この“ ”が、通常の説明本文の中に出ることもある。すべて、引用であることを明らかにしたものである。
- 6) 本書での表記法のいっさいは、私自身の定める正書法によっている。漢字の用法に前後の差異の見られるばあいなども、それぞれをお認めくださるならばさいわいである。
- 7) 書中、他文献を引用し恩借するばあいに、著者名・発行所名、巻号・年月などを、省略することが多い。この『昭和日本語方言の総合的研究』の第一巻・第二巻の作業をおえてきたので、本巻以降では、前二巻に依拠しつつ、本文中の文献出所記載の作業を簡略にする。委細については、下巻末の「引用(恩借)文献一覧」を参照せられんことを乞う。  
一覧は地方別(→県別)に整理してあり、各県内では、ものが、著編者アイウエオ順に排列されている。

## 上 卷 目 次

緒 言	i
凡 例	v
はしがき	xv
Ⅰ 文末詞というもの	xv
Ⅱ 「文末詞」着眼の重要性	xvii
Ⅲ 私の方言「文末詞」研究の意図	xix

## 序 編 昭和日本語方言文末詞

<文末助詞> 研究 総論	1
第一章 文表現の訴え	3
第一節 「訴え」の基本的性	3
第二節 「訴え」の内容に関する省察	5
第三節 訴え要素とその出現の位置	6
第四節 日本語対話文表現での文末要点	8
第五節 日本語文表現の構造・機能と文末特定要素 ——日本語「文表現」の文末決定性——	10
第二章 文末の訴え成分	20
第一節 日本語対話文表現の文末の訴え要素	20
第二節 文末の特定の「訴え成分」の諸相	20
一 文末の声調	20
二 文末の訴え音	22
三 訴え成分「文末詞」	25
第三節 文末詞の特異特定性——文表現と文末詞——	26

第四節 「文末詞」という呼称	28
第五節 文末詞(文末特定の訴え成分)の成立自在	38
第三章 文末詞の分類	41
第一節 分類されるべき文末詞	41
第二節 文末詞の分類	43
第三節 複合形文末詞の処理	46
第四章 文末詞(→特定文末部)の機能	48
第一節 機能総論	48
第二節 文表現特定化の機能	49
第三節 叙述構造収約の機能	50
第四節 文の待遇表現の流れの収約	55
第五章 「文末詞」化	63
第一節 「文末詞」化の一般的可能性	63
第二節 感声化	65
第三節 文中の「『文』の部分」収約要素の「文末詞」化	65
第四節 「文末詞」化の経路	67
第五節 文末詞の転成新生	72
第六章 文末詞の記述	73
第一節 文末詞記述の独創性	73
第二節 文末詞記述の次元	73
第三節 文末詞記述の内的言語学	74
第四節 記述体系の二方向	75
第五節 高次共時論	77
○ む す び	78

本編	昭和日本語方言文末詞	
	＜文末助詞＞の統合的記述	81
序章	記述方法	83
第一章	文末訴え音 <sup>オン</sup>	85
第一節	「文末訴え音」の提立	85
一	文末特定音細見	85
二	文末訴え音	87
第二節	文末訴え「ア」音	87
一	「文末訴えア音」への私の気づき	87
二	「文末訴えア音」出現の諸相	91
1.	助動詞でおわる文の末尾に「文末訴えア音」の 見られるばあい	91
1'.	指定断定の助動詞「ダ」ならびに完了の助動詞 「タ」におわる文の末尾に〔a〕の長呼音の 見られるばあい	94
2.	助詞でおわる文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい	95
3.	動詞でおわる文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい	96
4.	名詞でおわる文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい	97
5.	特殊慣用文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい	97
6.	通常の文末詞におわる文の末尾に（すなわち文末詞の 直下に）「文末訴えア音」の見られるばあい	98
7.	「文末訴えア音」の発展形	105
三	「文末訴えア音」の分布と活動	107
第三節	文末訴え「エ」「イ」「オ」「ン」音	109
付記	「キッ」	115
第二章	文末詞「ヲー（オー）」	116

一 「文末訴え音」か文末詞か	116
二 九州地方の「ヲー（オー）」	117
三 九州外に関連事象を見る	123
第三章 ナ行音文末詞	130
第一節 総説	130
第二節 「ナ」の属	132
一 はじめに	132
二 南島地方の「ナ」系文末詞	134
三 九州地方の「ナ」ほか	140
四 中国地方の「ナ」ほか	170
五 四国地方の「ナ」ほか	180
六 近畿地方の「ナ」ほか	187
七 中部地方の「ナ」ほか	203
八 関東地方の「ナ」ほか	221
九 東北地方の「ナ」ほか	227
十 北海道地方の「ナ」ほか	241
十一 むすび	243
第三節 「ノ」の属	246
一 はじめに	246
二 南島地方について	251
三 九州地方の「ノ」ほか	251
四 中国地方の「ノ」ほか	262
五 四国地方の「ノ」ほか	271
六 近畿地方の「ノ」ほか	276
七 中部地方の「ノ」ほか	286
八 関東地方の「ノ」ほか	304
九 東北地方の「ノ」ほか	311

十 北海道地方の「ノ」ほか	316
十一 おわりに	317
第四節 「ネ」の属	319
一 はじめに	319
二 南島地方の「ネ」ほか	325
三 九州地方の「ネ」ほか	326
四 中国地方の「ネ」ほか	334
五 四国地方の「ネ」ほか	341
六 近畿地方の「ネ」ほか	343
七 中部地方の「ネ」ほか	349
八 関東地方の「ネ」ほか	363
九 東北地方の「ネ」ほか	368
十 北海道地方の「ネ」ほか	375
十一 むすび	376
第五節 「ニ」の属	378
一 はじめに	378
二 筆者生活語の「ニ」に関する昭和二十一年の記述〔後掲〕	379
三 「ニ」の探査	384
四 南島および九州地方の「ニ」ほか	385
五 中国地方の「ニ」ほか	396
六 四国地方の「ニ」ほか	400
七 近畿地方の「ニ」ほか	405
八 中部地方の「ニ」ほか	419
九 東国地方の「ニ」ほか	426
十 おわりに	431
第六節 「ヌ」の属	435
第七節 結 説	440

第四章 ヤ行音文末詞	445
第一節 総説	445
第二節 「ヤ」の属	447
一 はじめに	447
二 南島地方の「ヤ」ほか	449
三 九州地方の「ヤ」ほか	459
四 中国地方の「ヤ」ほか	480
五 四国地方の「ヤ」ほか	495
六 近畿地方の「ヤ」ほか	509
七 中部地方の「ヤ」ほか	531
八 関東地方の「ヤ」ほか	555
九 東北地方の「ヤ」ほか	568
十 北海道地方の「ヤ」ほか	588
十一 むすび	590

以下，中巻につづく。

## 中 下 卷 大 綱

- 第四章 ヤ行音文末詞 つづき
- 第五章 サ行音ザ行音文末詞
- 第六章 感声的文末詞「ダ」
- 第七章 「カ・カイ」文末詞
- 第八章 転成の文末詞
- 第九章 助詞系の転成文末詞
- 第十章 助動詞系の転成文末詞
- 第十一章 動詞系の転成文末詞
- 第十二章 形容詞系の転成文末詞
- 第十三章 形容動詞系の転成文末詞
- 第十四章 名詞系の転成文末詞
- 第十五章 代名詞系の転成文末詞
- 第十六章 副詞系の転成文末詞
- 第十七章 感動詞系（文系）の転成文末詞

索 引 .....	593
I 方言事象索引 .....	593
II 事項索引 .....	607

# は し が き

## I 文末詞というもの

かつての学生生活のみぎり、私が、ここに言う文末詞（「キョーワ サビイ ネー」の「ネー」のようなもの）の研究に興味をもやして、一度、これを、柳田国男先生のもとに持ってあがり、私なりの愚見を開陳した時、先生は、“エジャキュレーションだね。”とおっしゃった。ほかではそのご聞くことのなかった術語であるが、まさに、先生のエジャキュレーションと見られたものが、私のとりたてようとする文末詞である。「叫び」の性質を持ったものがすなわち文末詞である。

私が文末詞と称するものは、世に終助詞または感動助詞と言われているものである。

文末に来る特定の訴え要素、「ネ」「ナ」「ナモン」といったようなものは、まさに感動の成分であろう。これを「感動なになに」とよんで概括することは、要を得ている。そのものが、文の終りにあることに注目すれば、これを「終なになに」とよぶことも妥当である。山田孝雄先生は、世に終助詞、感動助詞とよばれているものを（私が文末詞と概括するものを）、間投助詞と終助詞とに分析された。先生の助詞分類はもっとも理路整然たるものであって、私なども、第一には先生の教えにしたがって助詞研究に出発している。

ところで私は、「間投助詞」といったような「間投なになに」という術語は、文字どおり、文表現中に間投される成分・要素について用いるのが適当と考えるようになった。したがって今も、文末にはたらく特定分子について「間投なになに」の語を用いることはない。のみならず、山田先生の説かれる間投助詞と終助詞との、あいむすびあったものが、渾体として文末にはたらくもするので、私どもは、つねには先生の二分法にしたがうことができない。

世の一般の文法研究が、しだいに終助詞の一元名を用いるようになってきたのも、しぜんのなりゆきと解されようか。ものを、「要するに文の終りにあってはたらくもの」と見るのであろう。さてそれを性質に即応して名づけるとなれば、とくに感動助詞の名を、人は、えらびやすいしだいかな。

私は、そのように言われがちのものを文末詞とよぶ。

「終助詞」の名は、その助詞と見ることはのちの問題として、やや消極的なとらえかたの名目ではないか。「終りの助詞」というのでは、何の終りなのかが表明されていない。いわゆる終助詞にとってたいせつなのは、それが文表現の終末にあるという事実である。この点にかえりみて、私は、かつては、今いう文末詞を、文末助詞とよんだ。「文表現の末尾にあるもの」という事態を明白にしたつもりである。

もし私が、文末助詞または方言「文末助詞」の名を用いていれば、指摘しようとするものが何であるかは、人々にただちに領解されるであろう。

久しくその名にしたがったのであるが、やがて考察を進めて、「文末助詞」を「文末詞」とよびあらためるようになった。(いかにもエジャキュレーションにちがいない文末助詞は、もはや助詞の名でよばれてはならないことを痛感したわけである。)

識者は、いわゆる文末助詞が文末に‘孤立する’事実を認めて「孤立・特立・卓立」の名を用い、また——名辞はたてないまでも、その考えを説述されていよう。しかし、それらのことがどのように進歩的であるばあいにも、多くの人々が、「なにになに助詞」の名はすてようとせられない。このことは、私にとって解しがたい事実である。思うのに、いわゆる文末助詞が「ナ」や「ネ」のようにかな一文字で表記される分子であることが、人々を長く「てにをは」本位の助詞観にひきとどめているのではなかろうか。形態の助詞ふうであることが、人々を長く「終助詞」「感動助詞」などの助詞観にとどめているのかと考える。ここには率直な本質直観が緊要であると言うべきであろう。

## II 「文末詞」着眼の重要性

人は、日本語の文法論的特質を求めようとするさい、比較的早く、文表現の末部にはたらく特定成分（語としては文末詞としうるもの）をとらえるのではないか。

およその言語のばあいにも、言語活動の現実の活動体としてはセンテンスがとりたてられ、しかもその個々のセンテンスは、「訴えの表現」と見られる。センテンス形式は、人の訴えの形式であるとも言うことができる。そういうものであるからこそ、どの言語のばあいにも、個々のセンテンスは、文末になんらかの特色を示しがちである。（文法的にも、音声的にも）日本語は、文の表現構造が、述部を後置する、表現「文末決定」の構造であるために、いよいよもって文末に文の訴え構造の特色が顕示されがちである。そこに、私どもは、日本語の文表現構造の特質を認めることができる。

その特質の当体となるものが文末詞であるとすれば、この研究がきわめて重要であることは、多言を要しないことである。

日本語の自然状態と考える方言の世界にたちいる時は、だれしも、ことに容易に、個々の文表現の文末特定成分に蓬着しうるであろう。他言語の文表現の文末構造との対比を待つまでもなく、私どもは、日本語そのものの世界において、すなわち方言の世界において、文表現の特質をささえる文末詞をただちに把握することができる。はじめて方言調査の旅に出かけていった人たちも、最初に無条件に耳をそばだたしめられるのが、じつにこの文末特定成分（語としては文末詞と言いうるもの）である。方言の生命を感じたなどとの感懐をもらす時も、その人々は、おおかた文末詞に着目して方言を見ている。方言会話の世界にひたって、方言の、生活語としての事態を把握しようとする方言研究者たちは、最初にせまってくる大岩のごとき存在、文末詞を避けて通ることができない。

文末詞研究は、方言研究の基本的な方法とされる。

言語研究の方法一般として、あるいは音声現象にあるいは文法現象にあるいは語彙現象にと、分析的な観察がほどこされてきている。方言研究のばあいにもまた、この轍を踏むことが常識と考えられている。が、そういう見かたのどのような行きかたをするにもせよ、ただちに観察の対象となるのが、文表現末部の特定成分、文末詞にほかならない。いわば、分析的な観察をこえて第一次的に熟視せしめられるのが、文末特定成分、文末詞である。

文末詞研究の意味論的発展性もまた明らかである。文表現の末尾にはたらく特定成分は、つねに文の表現効果を最後の頂点的に左右する。文表現が対話文であって、つねになんらかの相手に投げかけられるものであるとすれば、その文表現の表現効果が、ついに待遇効果と云うものになることは明白であろう。とすれば、文末特定成分（文末詞）は、つねに文表現の待遇効果を左右するものとされる。これほどに深刻な意味作用が、文表現中の他のどの要素に見いだされようか。文末詞——文表現末尾特定成分への着眼と討究とは、表現意味論上でもきわめて重要であると考えられる。

私どもは、文末詞——文表現末尾特定成分の、形式と内実との総合的な把握によって、方言表現の生活を深く理解していくことができる。

以上に私は、文末詞という術語と、文末特定成分などという言いかたとを用いた。文表現について見、また文表現について言うかぎりでは、私どもは、文末に、「文末特定成分」（または「特定文末部」）を看取しうるばかりであって、品詞、「文末詞」を直接にとらえることはできない。——現実にとらえるのは、文表現の部分としての特定文末部分である。さてこのものを、表現の次元を割って内視する時、私どもは、——表現要素の底面に、語としての文末詞を認めることができる。この間の事情にもとづいて、私は上来の述べかたをした。

### III 私の方言「文末詞」研究の意図

私は、日本語の文表現について、文表現末尾特定成分——文末詞——の独自性を認める。方言研究上では、文末詞研究を基本的なものとして重要視する。

年来これの研究にしたがってきて、今、その結果を公表しようとするさい、私は、つぎのような研究意図があるとしたい。

私の言う高次共時方言学の考えかたで、昭和日本語方言状態の文末詞——文末詞活動（すなわち、文表現末尾特定成分の活動）を記述したい。

高次共時論のたちはは、すでに『方言学』（昭和37年）に公表している。——これは、早く「方言学おぼえがき」（『方言研究』第一輯 昭15年7月）に胚胎したものであった。（拙著『方言研究の回顧と展望』 昭和47年）

簡約して言えば、次のような記述態度をとろうとするものである。

- ① 個々の文末詞をとりあげる。（諸文末詞の全体が分類されるが、その分類にしたがってのことである。）
- ② 個の文末詞の生態を、昭和日本語の全方言状態にわたって追求する。いわゆる分布がさぐられるが、ここで、その文末詞の全方言状態上での棲息のさまが追跡される。——そこそこで、個の文末詞の榮枯盛衰が認められよう。生態の記述は、当然そういう史的状況の記述を含んでいく。ここに、内部化されていく構造論がある。
- ③ その構造論が、文末詞の昭和日本語方言上に活動する、具体的な意味作用の記述に徹底すべきものであることは、言うまでもない。
- ④ この構造論の高まりを求めて、問題の文末詞が、将来、どのように生きていくかも尋求する。
- ⑤ 一個の文末詞に関する上述のような記述が、他の文末詞に関する上述のような記述と関連せしめられる。——じつはそういう関連を予想し予定しつつ、個の文末詞の記述にしたがうべきことが要請されている。

- ⑥ 構造連関・意味連関をできるだけ広汎に求めていきたい。(そうすることが、高次元の研究を得るゆえんであろうと考えられる。)

序 編 昭和日本語方言文末詞  
〈文末助詞〉研究 総論

## 第一章 文表現の訴え

### 第一節 「訴え」の基本性

どの種の言語にあっても、その実際の言語活動が言語表現を形成することは、言うまでもない。言語表現、——広く言って表現のすべては、みな、表現者によって、他者に訴えられるものである。言語表現は、それが表現者によるものであるのにしたがって、すべて外他への訴えの作用を発揮する。

表現作用、今は、言語表現作用は、訴えの作用であると言うことができる。

言語生活では、人は、「訴え」の言語活動にしたがって、逐次、言語を表現する。その通常・自然のさまが、文表現の二つ以上の連続というさまになっていく。言語表現が、総体的に「訴え」であるのにしたがって、言語活動、表現活動での個々の文表現が、「訴え」の表現になる。

方言会話の世界を見るのに、方言人たちは、その談話で、まさに一つのセンテンスまたは二文表現以上のセンテンス連結体を発出して、言語表現の生活をしている。その全相が、つねに対者ないし他者へのはたらきかけ・訴えかけであることはもちろん、個々のセンテンスがみな、つねに相手に訴えかけるものになっている。ばあいによっては、人が相手に答えて反応の表現にしたがうが、それもまた反応の訴えになることは、言うまでもない。方言会話者は、発言するごとに、全体的にも部分的にも訴えとおしている。老幼男女、すべてこのことにかわりがない。

カール・ビューラーは、言語記号の、対象と受者と送者とに対する機能的関係を、叙述 (Darstellung), よびかけ (Apell), 表出 (Ausdruck) とした。(昭和30年版『国語学辞典』による。) ビューラーの分析法そのものは、今、深くは問わないことにする。ただただここに、アペルの指摘されている点を、私

は重視したい。言語の表現がつねになんらかの「訴え」であることは、ビューラーに認められているとしてよからう。(私は、アペルの機能を、「叙述」「表出」のはたらきを被るものとして、重要視しようとしている。)

言語表現にとってなによりもたいせつなのは、外他を予想する、よびかけのことばのようである。端的に言って、「よびかけことば」以上に重要な表現要素は、なさそうである。——言語上のコミュニケーションは、集約的にとらえてみれば、すべてよびかけの活動である。それはすなわち、「訴え」と言えるものである。

私の知友の一植物学者は、はじめての南米生活のスペイン語経験で、とにもかくにも(あるいは第一に)、よびかけことばがなければコミュニケーションはじまらないことを深く経験したそうである。そのはずだろう。「オイガー。」(もしもし。)などと言ってよびかけなければ、未知の社会でのこと、だれひとりもつかまえることはできない。さて「オーラー。」は、子どもや犬に対するよびかけことばだという。これを、見ず知らずの紳士に言いかけたりしたらたいへんである。そのさいは、「オイガー。」と言わなくてはならない。——これは、ていねいなよびかけになるものだという。知友は、チリーで、まず二つのよびかけことばをわきまえ知って、これらをふんだんにつかったのだそうである。氏は、なによりもそうせざるを得なかった。ことばにとってだいじなのは訴えであることが、氏には、異国で実感されたわけである。

私どもの身の辺の幼児の言語習得の状況を見ても、また、「よびかけことば」の第一に重要であるらしいことが、よく理解される。すなわち幼児たちは、一にも二にも——衝動的であるにもせよ、ものを訴えようとして、つねによびかけの方法を模索・開拓している。訴えのはたらきとよびかけことばの発明・運用との相互一体のあらわれを、私は、かつて身の辺の二歳孫女兒についてくわしく観ることができた。いつしかこの子が、おとなのまねのような言いかたをしてブツブツと言っている。何を言っているのか、よくわからない。じっさい、それは、ことばになっていないことばだったようである。ことばめいたことば

というようなものであった。ところで、この女兒自身は、そのような言いかたをしては、終りに「ネ。」というをつけた。思うのに、この子は、けっこうたのしく、自分なりのスピーチをやっていたらしい。(内容が聞きとれないのは、こちらのおとなどもだけのことである。) たのしそうにものを言っでは、ひとくぎりつけて「ネ。」と言った。この子はたしかに、「ネ。」で、きりをつけたのであろう。ここに、本能的とも言うべき訴えのはたらきが見えはしないか。もとより「ネ」は、おとなから聞きとった「ネ」であろう。ほかならぬ文末詞の「ネ」を習得した、この、ことばのとらえかたそのものが、すでにおもしろい。ほかはおろそかでも、「ネ」ことばだけは、的確にとらえた。その「ネ」を、ひとりごとふうのわけのわからない言いかたや、相手に語るおもしろいのわけのわからない言いかたの、きりのつけどころで(と、私どもに解せしめるようなところで)、言いあらわす。まさに、注目にあたいする訴えである。この子は、しぜんのうちに——訴えの本能にしたがって、「訴えことば」「よびかけことば」の「ネ」を獲得している。訴え、よびかけることは、まことに、人間言語の本然にかかわることなのであろう。

幼児が、あるいは、やや大きくなった子どもでも、母おやその他の近い人の顔をのぞきこむようにして、「ネ。」と言う。——たのむ時とか、何かの念をおす時とか。「ネ。」と「のぞきこみ」とは、一体のものである。あの「のぞきこみ」こそは、私どもに、表現の訴えをよくなっとくせしめるものではないか。「ネ」などの「訴えことば」は、幼児たちにとっての、近い人たちへの最良の「よびかけことば」かもしれない。

料理の味つけに「かくし味」というのがあるという。すぐれた料理家は、この「かくし味」で、最後の、手練の調理の味わいを人に訴えようとしてはいないか。このばあい、「かくし味」が、「訴えことば」「よびかけことば」とも考えられる。

## 第二節 「訴え」の内容に関する省察

「訴え」に関しては、心情的なものだけを「訴え」の内容として考えようと

するむきもあろう。そのことも理解にはかたくないことではあるけれども、私は、そういう意味でのみ「訴え」を考えようとはしていない。訴えるのは、話し手ないし表現者の、そのばあいの文表現内容の全体を（文表現にかぎらず、文章表現のばあいにも、その表現内容の全体を）聞き手ないし受容者に訴えるのである。知的要素と情的要素とのおのずから渾然一体となったものを全的に相手に訴えかける。

そのような訴えかけにあっては、特定訴え要素そのものによることであるけれども、総体に、それこれの訴え要素のばあいごとに、訴えかたが複雑である。——情的な訴えかたの、ある単純さにはとどまらないものがある。たとえば、「ダレダッテ モンダイニワ シナイ サ。」などと言うばあい、文末特定要素「サ」にかけられた「訴え」の内容は複雑である。すなわち「サ」は、「だれだって問題にはしないこと」を、思いきりよく、また投げすて気分にも近い気もちで訴えており、かつ、「だれだって問題にはしないこと」を、かなり知的に断定しようとする気分を表白し得ている。そのように、重層的な表現内容を持ちうるのが、訴え成分である。（「暑い ナー。」というような主情的な文表現での「ナー」といったようなものが、はなはだ心情性にとんだ「訴え」であることなどにとらわれて、諸他の訴え成分の、はばびろい自在なはたらき、重層性にとんだ役わりを誤認することがあってはならない。）

以上の意味においても、私どもは、「訴え」を「よびかけ」とも、容易に換言することができる。あるいはむしろ「よびかけ」と言ったほうが、「訴え」の性能の重層性や、時にとつての豊富さを、よりよく表現しうるのかもしれない。

### 第三節 訴え要素とその出現の位置

広く一般的に考察するならば、あるいは諸言語に拘泥することなく抽象的にものを考えるならば、文表現での「訴え」または「よびかけ」は、文表現のどここの部分におこってもよいはずである。——文表現の「訴え」成分、「よびか

け」成分は、文表現中のどの部分に出てもよいはずである。多くの言語において、じっさい、文頭でも文中でも文尾でも、「訴え」または「よびかけ」がなされていよう。表現者の表現意識、表現意図のおもむくところ、文表現中のどこへでも、「訴え」「よびかけ」の徴証は示しうるわけではないか。

そういう「訴え」は、文表現に一ヵ所・一回と限られるものでもない。ばあいによっては、文表現上の二ヵ所以上のところに、「訴え」「よびかけ」の要素が出現する。ともあれ、文表現成立のばあい、そこには必然的に「訴え」「よびかけ」が成立し、「訴え」の成分、「よびかけ」の成分があらわれる。

私どもが日本語について見るばあい、また、文表現の末尾にくる特定訴え成分と、文頭にくる特定訴え成分と、文中にくる特定訴え成分とを、容易に把握することができる。(しかも、日本語の文表現習慣について見るのに、これら三者の訴え成分は、存立するかぎり、たがいに深く質的に関連しあうものであることが明らかである。)例を見よう。

たとえば、「モン」ということばがある。これが、  
○モン アナタワ ドコカラ オイデマシタ。

もし、あなたはどこからいらっしゃいました？

というようにもつかわれ、また、

○アナタワ ドコカラ オイデマシタ モン。

あなたはどこからいらっしゃいましたね。

というようにもつかわれる。さらにまた、

○アナタワ, モン, ドコカラ オイデマシタ。

あなたは、もし、どこからいらっしゃいました？

というようにもつかわれる。「モン」は、文頭にたちるとともに、文末にもたち得、また文中にもたち得ている。こうありうるのが、「訴え」ことば「モン」の面目である。ここにまた、「訴え」「よびかけ」の本性が明らかである。

共通語のことばづかいで、人が、一文の表現をおわたったとたんに、「ハイ」と言ったりしている。この「ハイ」は、「ハイ ソーデス。」などとも言えるも

のである。文頭にたちうる要素を、人はごくしぜんに、あるいは意識的に、文末に転用している。——転用することによって、文表現に愛想の気もちをつけている。（「ハイ」は、愛想ことばとされている。）方言上にもこの種のことは多い。たとえば四国の方言で、「ヨイ ドヨイ イクソゾ。」と語りかけもし、また「ドヨイ イクソゾ ヨイ。」と語りかけもする。「ヨイ」は、文頭にも文末にも——また文中にも——、自由につかいうる「訴え」「よびかけ」のことばである。

起源成立の同一の形態素が、「訴え」「よびかけ」の性能をになって、文頭文中文尾の要点に出現する。そのことが、文表現における「訴え」「よびかけ」の自然と必然とをよく示し、こういう特定要素の成立すべき根拠をよく示す。

文表現中、二つ以上の訴え要素が二カ所以上に出ることも、当然、あってよい。「訴え」「よびかけ」の必然にしたがって、随時随所に適宜の要素の出現するのが、文表現のしぜんである。その種のばあい、二つ以上の訴え要素がたがいにきれいな機能連関を示すことは、すでに述べたとおりである。

#### 第四節 日本語対話文表現での文末要点

日本語の対話での、個々の文表現では、とくに文末部に特定訴え成分の出てくるのが、大きな特色となっている。文末は、わけても「訴え」「よびかけ」の力のつよくやどるところであり、ここは、まったく、代表的訴え箇所となっている。それゆえ私は、この文末点を、日本語「文表現」上の表現重点と考えている。

方言に生きる人々の生活語意識をたずねみるにつけても、人々が文末の表現重点に気づいているのを、しばしば知ることができる。一例であるが、千葉県房総半島南部の一地に滞在した時のことであつた。一軒の家でのこと、小学校五年生の男児が、一ことば一ことばの表現（文表現）ごとに、「サ」のむすびをつけるのであつた。まったくの頻用で、私は、ときに、その男児から「サ」

ということばばかりを聞いているかのような思いをしたくらいであった。かたわらの母ごが、聞くに聞きかねてといったようなあんばいであいさつしてくれて、“「サーサー」ばかり言って。”と笑った。かつは“このことばは、「サーサー」って言うんですよ。”と述べてくれた。はっきり、文末の表現重点の「サ」ことばに気づいていた。

地方の方言人によっては、独特の方言世界を端的に説明するのに、文末ことばをもってすることが、すくなくない。

学校教育においてはあはるけれども、旧来、教師が生徒児童に、“語尾は明瞭に！”、“ことばづかいの終りははっきりと！”などと言ってきた。言われてきた語尾は、たいてい、文末のことである。文末の表現重点の重要性が、こうして、早くから人々に認められている。

一般に、日本語に生きる人のだれしもが、文表現の下方へ下方へと注意を凝収していよう。かんたんな一特殊事実に見ても、このことがよくわかる。九州地方のことばづかい、「何々をば」の言いかたを、たとえば肥後方言で、「何々バ」と言っている。——「～バ」で、目的格を表示し得ている。聞くほうも、「バ」のところ、たしかに目的格を感じとっている。「を」格表示の、かんじんの「を」は落としていても、人は、話し手も聞き手もともに、「～バ」で「を」格を意識し得ている。いわゆる連語「をば」の下接者が、当の連語の機能を集約的に表示し得ているのである。ちなみに「私ばかりが」などというばあいの「ばかりが」にしても、この副助詞と格助詞との、いわゆる連語の、文表現上の機能は、格助詞「が」本位のものになっている。すべて下接者重点ということが言えよう。同様に、人々は、一文表現の全体についても、最終的な下接者に、しぜんに注意を凝収しているようである。

日本語文表現上での文末要点は、日本語文法の研究にたずさわる人々、ないしは日本語表現生活の現実態を方言界に見ようとする研究者たちによって、もっともしぜんに気づかれていることを、なお、指摘しておきたい。私の周辺の

多くの知人は告白している。→方言調査に行つて自由にものを見ようとしていても、たちまちひきつけられ、あるいは、けっきょく重視せしめられるのが、文末特定要素という部分・箇所である、と。最近、一研究者の語つたことは、つぎのとおりである。

文末詞研究は、中にはいればはいるほど、深くあつかおうとすればするほど、わからないことだらけです。それだけに、日本語の文法研究に占める、文末詞研究の重要性が痛感されます。

## 第五節 日本語文表現の構造・機能と文末特定要素 ——日本語「文表現」の文末決定性——

なぜ、日本語の文表現では、ほかならぬ文末が表現重点になるのか。（——なぜ、文末に特定の訴え要素が出現することになるのか。）これはまさに、日本語文表現の構造・方式、したがって、機能方式にかかわることだと解される。

日本語生活での表現者たちは、日々の表現生活で、しぜんのうちに文末の特定の訴え要素を欲求し創作している。表現のどんなばあいにも、多くのセンテンスで、文末特定要素への自然欲求が示される。——そのため、ときに無自覚的にも、特定の文末要素が創作されたりしている。

上げ調子のアクセントを用いるなどは、文末の訴え要素の自然創作として、とくに注目されるものであろう。一例、東北地方の宮城県下などでは、晩のあいさつに、

○オバンデ ガス[ü]ー。

お晩です。（今晚は。）

と言う。「スー」のところで、上がり調子を見せている。このさい、特別の訴えことばとしてはないけれども、文末の上げ調子が、顕著な訴え要素になっている。訴えの欲求は、しぜんにこういう文末声調をひきおこしている。

私どもは、一般に、文末の特定要素にすがりつつ、文表現の生活を営んでい

ると考えることができようか。こういう点では、文表現法を、つきつめて文末表現法とも見ることができるかもしれない。

かえりみると、文章作品を見ても、個々の段落の末尾には、その段落をしめくくる何かが認められる。文章作品の最後部そのものを見ても、そこに、そこまでの全体をしめくくる何かが認められる。特定の詩的表現（一センテンス構造の完結体）の和歌や俳句などを見ても、それらの文末には特定の訴え要素があり、あるいはその文末に無韻の韻とも言うべき内面的な訴えが沈められている。文章表現上の、さまざまなばあいでの、上のような事実との対応関係において、私どもは、日常口頭語の文表現のばあいについても、その文末の特定要素を見ていくことができる。

話しことばの世界に限って言えば、話し手、表現者は、表現内容をひきまとめる時（一文表現をおさめようとする時）、その表現内容の確認を相手に求めるかのように（求める気もちで）、文末で、表現の特別な「念おし」をおこしている。そこに、諸多の文末特定要素がうまれている。

文末での特定要素の製出が、日本語の特質であることを見よう。すでにふれたとおり、ここで、日本語の文表現の構造論的特質が問題にされる。日本語の文表現では、その表現の構造が、述部の下方展開となる。助動詞は動詞のあとにつづき、しかもその助動詞は、しばしば累加される。——このような助動詞は、山田孝雄先生の説かれるとおり、まさに複語尾と見られるべきものである。述部での動詞本位の叙述は、複語尾の重畳とともに、下方展開となり、表現の決定は、その下方展開のままに、後方へ後方へと持ちこされる。とどのつまり、表現の決定されるのは、文末点においてである。（文末がきたと思ったら、そこはすなわち、表現の決定される場所であった、というわけでもある。）この事実を、私は、日本語表現法の文末決定性と称している。

さて、その文末決定の瞬間において、たとえば、「オバンデ ガス〔ü〕ー。」  
 での「スー」のように、特定の文末声調が生起し、また、文末で、  
 ○ワカリマシタ ネー。

などのように、「ネー」といったような文末特定成分が生起する。（「ネー」にはまた、上の例だと、上げ調子の文末声調がともなっている。）

「ネ」といったような特定の膠着要素が、きわめて単純に文表現の最後に膠着し得ている。日本語の文表現の構造は、——文末決定性の表現構造は、最後の的にこのような特定成分の膠着を可能とする表現構造である。それゆえ、日本語の文表現では、文末重点の訴え法が大いに発達し得たのであろう。

日本語表現法の文末決定性をささえる文法構造が、文末での特定訴え要素の自由な生成と活動とを、おおいに可能ならしめた。

と言うことができよう。日本語のばあい、その表現法の必然によって、文末には、特定の訴え方式・訴え要素がさかんになってきている。

文末訴え要素の生成と活動とは、日本語の文表現法の機能的必然である。

このことを、現代英語の文構造のばあいと比較してみよう。

現代英語では、「今日はいいい天気ですね。」というのも、

○It is very fine to-day, isn't it?

と言う。動詞「is」は、文初ちかくにあり、わが文末詞の「ネ」にあたる言いかたは、「isn't it」とされて、文後方につけそえられている。そのさい、「isn't it」の前には「,」がうたれている。日本語のばあいは、「今日はいいい天気ですね。」の「ね」の前に「,」をうつことはできない。「,」をおいてのみ、「isn't it」と言うことが可能な英語のばあいには、じつは「isn't it」が第二センテンスとして付加されているようなものである。（しばしばこれが、付加疑問文などとも言われていよう。）そのようなのと、まったく単純に「ネ」を付着・膠着させるのとは、じつに大きな相違である。

日本語では、主部に対する述部は、主部からはなれてかなり後方にあり得、述部内では、助動詞が動詞に接着するが、文末の特定訴え成分としての文末要素は、その、助動詞接着の終了のそとにあって——主述の対応を包摂しつつ自由に文最後に自立する。助動詞の動詞接着には、活用形による一定の承接約束があり（助動詞が助動詞につづくばあいも、同様である。）、みずからは不変化

であるものも、前者への接続では、一定の接着のきまりをとりまもる。「動詞＋助動詞」次元では、ものの接続の前後関係が、つねに特定のである。これに対して、たとえば「ネ」などという文末特定要素が生起・存立するのは、まさに付着・膠着と称することができるものである。——前者とのつながりかたに、なんの約束もない。

「接着」と「膠着」とは、異なった事実であり、特定文末要素（文末詞）の最後の膠着には、直前に一つの大きな境目が認められる。このような膠着（その直前に「，」をうつことを要しない事態）と、いわゆる付加疑問文の「isn't it」などが、なんと大きく構造差を見せていることか。日本語の文表現では、まったく自在に、文末特定要素が、最後に膠着せしめられている。この可能の世界に、当然のこと、文末特定成分の繁栄が見られることになっている。

英語との関係で、なお、卑近な事例をあげてみよう。英語国民は、日本に在留して、日本語に耳をかたむけはじめると、やがて、文末の特異な「ネ」に注目する。それが、英語の文表現の習慣に照らしあわせて、種々、注意されるものだからであろう。さてかれらが、さらに日本国内を旅行してみると、東京での「ネー」は、京大阪で「ナー」とあり、広島に来ると「ノー」とある。かれらはますます、この文末の異様な分子に興味をいただく。英語の文表現の構造と日本語の文表現の構造とが、種々、対比せしめられもするというわけである。

英語のに似た語序を持つ中国語（シナ語）に生きる人たちも、日本語の「ネ」の類には耳をそばだてるようである。かつて、中国からの留学生諸氏に接して、私は、そのことを見ききした。一度、私どもが中国旅行をした時には、私どもの日本語での会話をじっと聞いていたむこうの初老の男子が、私どもの会話のおわったところで、「ネ。ネ。」と模倣して、私どもをおどろかせたこともあった。（この時、私は、日本語の「ネ」文末要素がいかにも特異・特定のものであることを痛感させられたしだいである。）

さきにもふれた幼児の「……ネ。」のばあいにしても、また一般に幼児が

なにげなく「ネ。ネ。」とおとなに向かって言ったりするのにしても、これをおとなのことばの模倣と言えればそれまでであるけれども、ほかならぬ文末要素「ネ」を模倣しているところが、ことやかましく言えば、日本語の構造論的特質にかかわる事態とされる。「ネ」が、日本語の構造論的特質にさおさす、あまりにも特徴的なものなので、幼児にすらも、さっそくにこれがとらえられるのであろう。

文末特定要素「ネ」の類は、日本語に特有のものであり、日本語の文法構造ゆえの特質的なものとされるが、現代英語にも、これにやや類したものが出現しなくもないらしいことを、ここにつけ加えておかななくてはならない。草島時介氏の『なんでも試そう』（オリオン社 昭和39年）には、その p. 27 に、アイルランド人の「マン」(mun) のことが書いてある。

青年が言うには、アイルランドでは、これ（藤原注 [is it not?]) が平気で通っているのだという。（藤原注 [You are going there, is it not?])

さらに彼らの会話の中で、「マン」という語が、話の終りにつくことを知った。特に、目を丸くして、何かを述べ、その後に軽く「マン」という。おかしいことを言うもんだと、これもきいて見た。

「そのマンという尻上りの言葉は何です」青年たちは、きもちが幾分感動した時に、話の後へ、軽くつけるのだと言っていた。例えば、I've only just arrived, mun!（僕は、たった今、来た所なんだよ）といった具合に使うんだそうだ。きっと純粹のロンドンナーなら、

Oh, I've only just arrived.

というところで、アイルランド人はこう言うのだろう。

このようだと、文末の「マン」(mun) は、日本語での文末特定要素に該当しようか。アイルランド人がつかう英語なので、特別のこともおこり得るかもしれない。それにしても、「mun」などという、一種の感声的なものを文末に付加するのは、わが文末での訴え法とよく似ている。“きもちが幾分感動した時に、話の後へ、軽くつけるのだと言っていた。”とすれば、「mun」は、い

よいよって文末詞的である。文構造は、上の例文に見られるように、明らかに日本語のとはちがうのに、文末特定要素の生成ということで、このように、日本語でのと似たようなことがあり得ているのは、一つのふしぎである。あるいは、草島氏が「,mun」と表記していられるごとくに、「mun」はやや独立的に発言されるのだろうか。そうだとすれば、これは「is it not?」相当の地位にたつものということになる。「,」のいらぬ発言状態の「mun」がおこなわれるとするならば、これは、日本語のがわから言っても、まことに注目すべきものとされる。

つぎに、ハワイ英語の例をあげよう。神鳥武彦氏の現地でとらえられた事例に、

You just arrived da tonari country, yah!

You go Haole movie tonight, yah!

などのことばづかい、文表現がある。(昭和42年10月、広島大学国語国文学会での、氏の講演発表、「ハワイの日本語生活」による。)このような「,yah」の言いかたは、どんな事情で生じたものか、私にはわからないが、ともかく、英文の言いかたとして、上記のようなものが成りたっていることは事実にはちがいないから、これをそのまま受けとると、ここにも、文末特定要素かのような、しかも感声的な「yah」が認められることになる。この「yah」は、さきのアイルランド人の英文での「mun」以上に感声的なものかもしれない。それにしても、ここにも「,」の前おきがあるので、やはり、「yah」が徹底的に日本語の「ネ」などとおなじものであるとは見られないであろう。

しかしながら、教科書英語のそとには、ぞんが、日本語の文末特定要素にいくらか通うものもあるらしいことが、以上によってうかがわれる。文構造上の相違はともかく、文を表現して、最後に訴えの気もちをつよく表示しようとする心理は、彼我共通なのであろう。

ドイツ語の会話の世界でも、日本語の「ネ」のようなものが、単発的にはあるけれども、発言されるのを、私はかつて興味ぶかく聞いた。やはり、セン

テンスの構造にはかかわりなく、訴えことばは、諸言語で、いろいろに創作されているのか。六年まえにマールブルクに宿った時のことである。下宿の主婦、六十歳代の人は、私どもに何かを話しかけては、「ネー。」と言うのであった。それはたしかに、私どもへの話しかけ・よびかけであった。もちろん、この老女は日本語をすこしも知らないのだ。だが、それでいて、日本語流とも聞かれる「ネ」を発言していたのである。ただし、「きょうはさむいネ。」式に、「ネ」をすぐ前につづけることは、たえてなかった。ものをひとときり言ては、一呼吸いれて、「ネー。」と言うのがつねだったのである。そうではあっても、「ネー。」と前文との連関の必然性は顕著だったので、あたかも、「ネー。」が前文をひき包むものとされているかのようにであった。その点、「ネー。」に文末要素的なおもむきが、いくらかくみとられるようにも思われた。

スペイン語でも、「ネ(ne)」を最後によくつかう。”と、さきにしるした私の知友の植物学者は言う。“「ネ」は念おしのことばである。単語をならべて、最後に「ネ」を言えば、センテンスとしてのひきしめが利く。”と、氏は言う。まるで日本語についての説明のようである。これからすると、日本語とは語族を異にするスペイン語などにおいても、なにがしかの訴えことばはあることが了解される。ただそれが、どの程度に文末詞的なのかが問題であり、かつ、たとえ「ネ(ne)」が文末におかれるものであったとしても、日本語センテンスのばあいとは語序を異にするセンテンス構造での文末成分であることが、別に注意すべき問題となる。

中国語のばあい、

○咦，你不认识我吗？

えっ、おじさんを知らないの。

(この例は、昭和54年の『NHKテレビ 中国語講座』テキスト4月からお借りしたものである。) などの「吗」は、明らかに文末の成分である。(——文末詞と言うことができよう。注)

注 このせつ参看し得た一書、藤堂明保氏の『中国語概論』には、吗などが「語気詞」とされている。

それにしても、中国語では、文末詞ふうのものが、さまで多彩にできているようでもない。この点、日本語のばあいとはおおいにちがう。やはり、日本語と中国語との語序のちがいが、ここに大きく作用しているのではないか。日本語での特定文末成分（——文末詞）の豊富多彩な生成は、日本語特有の文構造のもとでの事態と解される。

現代英語の文構造などと比較してみても、日本語文表現での文末特定要素が日本語に必然のものであることは、よく理解される。英語などのばあいに、ときに類似の事象が見られても、出現の形態には、重視すべき彼我の差異が認められる。ただ、たとえば、英語の文末要素の「, isn't it?」がよく主述統合の統一体であることをあらわにしている事実は、わが文末特定要素の「ネ」などの表現内容の豊富さとあい呼応するものであって、この点、かれの事実は、われの事実の解明に寄与するところが大である。——（「, isn't it?」が主述形態をとって文的であるにもかかわらず、小文字で表記されるものであるのに等しく、日本語の文末特定要素、文末詞も、独立的であってしかも文表現の内部での事態である。「ネ」なども、主述を統合したような表現内容を渾一的に表示しうるものと考えられる。特定文末要素<文末詞>の総合性ないし文的性格ということが認められる。）

朝鮮語は、日本語と、語序をほとんど等しくするか。ではあるが、文末詞ふうのものは、現代朝鮮語では、「カ」などがあるのにすぎないかのように、かつて私は本国人から教わった。関本至教授のご教示によると、なおいくらかのものが見られはする。が、多くはないらしい。朝鮮語にくらべて、日本語では、文末詞の繁栄が、特異なこととされるようである。ここには、考究すべきいくらかのことがあるだろう。一つには思われる。彼我の文構造上での語序がほとんど等しいとは言っても、やはりそこになんらかの相違があるのではなからうか、と。

一つには、また思われる。かれの文構造にはたらく諸品詞の役わりなり受けもちなりに、われの文構造上の諸品詞のばあいとはちがったものがあるのでは

ないか、と。

インドシナ語はどのような語序の言語なのであろうか。それはともかく、かつて新聞紙上に、大約つぎのような意味の旅行者談が出ていた。

上げ調子下げ調子のおこないかたは、日本語のと同じである。上げ調子だけで問いになる。

「カ」「ヤ」「ラ」の文末特定要素（藤原言う）がある。

「カ」は日本語の「カ」に同じである。

「ヤ」は日本語の「ネ」に当たる。

「ラ」は、「それならいいですよ。」の「ヨ」に当たる。

一つの見聞談として、これを受けとってみる。たしかにここにも、問題視しうるものがありそうである。

以上、諸言語のばあいを見てきた。これを要するに、日本語での文末特定要素は、日本語の文表現構造に由来する、自然的なものであることが認められる。日本語文表現の文末決定性にさおさす必然の所産が、わが文末特定要素である。

日本語に、表現法上、その文構造に即応する文末訴え法とも言うべきものが認められるとしてよい。日本語での文末特定要素の生成、日本語での文末訴え法の流行は、まさに、日本語にとっての特質的な事項であると言える。構造を異にする言語の中にも、文末訴え法に近い様相あるいは外形のものがあったりし、ドイツ語での「ネー。」など、わが「ネ」と似よりの音声を発して、訴えの言語心理の一般性を思わせたりするものもあるけれども、表現法上、まさに「文末訴え法」と称しうるものとなると、これはぬきんで、日本語に顕著なものであることが明らかである。

かつて、ドイツ語学者と、この点について話しあったことがあった。その人は、“日本語の文法上の特色として、この点を強調してほしい。”と言われた。国立国語研究所報告8の『談話語の実態』（昭和30年3月）によると、私どもの日常談話文では、じつにその73%に、文末特定要素と言うべきものがつかわれているという。この事実を、私どもは、ゆるがせにすることはできない。一

一幼児も、いち早く文末特定要素をまねて、法外にまでこれをつかっているありさまである。私の幼孫も、ひとりごとを言うのに、

○ヒト<sup>リ</sup> ハク ノ。ヒト<sup>リ</sup> ネ。

ひとりで履くの。ひとりね。

と言っていた。第二女は、ほとんど「ひとりで。」というのに近いものだったが、ことばはしぜんに「ヒト<sup>リ</sup> ネ。」になっていたのである。「ネ」を下げ調子でつけている。この下げ調子には、とくに注意したい。(こういう下げ調子での「ネ」の発言は、しかも、ひとりがたりでの下げ調子の「ネ」の発言は、おとなが通常しないところであろう。幼児は、おとなの使用範囲を越えても「ネ」をつかおうとしており、それがひとりがたりなるがゆえに、やむをえず下げ調子をとっている。)

朝鮮語などと比較して考究すべき問題を残すが、今、この段階で、私は、日本語本位に、あえてつぎの言いあらわしかたをしておきたい。

日本語での「文末訴え法」、文末特定要素の生成・流行は、日本語本然の欲求によるものである。日本語自体の表現欲求によることである。

## 第二章 文末の訴え成分

### 第一節 日本語対話文表現の文末の訴え要素

訴え要素は、まず、文表現上の直接的要素である。これは、文表現の一成分としてとりあげられる。日本語対話文表現での訴え法の成立ごとに、そこに文末の「訴え成分」が成立する。

山本正秀氏に、「文末辞法」の語がある。(東京大学『国語研究室』五号<昭和41年11月>の「近代口語文の文末辞法の展開試論」による。)「デアリマス」「デス」「デアル」「デゴザル」「デゴザリマス」「ダ」「マス」などを文末辞法としてとりあげていられる。今、私は、このような文末辞法と言われるものとは区別して、文末の特定の訴え成分をとりあげようとする。言いかえれば、文末辞法の先に、文末の特定の訴え成分を認めようとするのである。

### 第二節 文末の特定の「訴え成分」の諸相

#### 一 文末の声調

文末の特定の訴え成分として、一つに、文末の声調が指摘される。さきにあげた「オバンデ ガスー。」の「スー」に見られるようなものである。これは上げ調子、上がり調子である。

このほかの調子であってもよい。すべて、文末におきる独特の調子を、文末の声調と見る。

文末の声調が、どのようなものであっても、——上引の文末辞法の末尾におこったものであっても、それが、「文末辞法の先に」文末の特定の訴え成分として認められることは、言うまでもない。

文末の調子の上げ下げは、その場その場の表現に属することである。したがって、その出現形は、場に応じて個別的である、とすることができる。ではあるが、その音調の上げ下げには、おのずから限界があって、文末の声調には、しぜん、傾向ができがちである。方言の世界にあっては、個の方言ごとに、文末の声調に、なんらかの傾向を見せることがありがちである。つまり、方言では、文末の声調の方言的習慣を認めることができる。方言によっては、その習慣のあざやかでないこともあるけれども、また、方言によっては、文末の声調の上げ下げの習慣のきわたたしいことがある。顯著・非顯著は別として、私どもは、方言の文表現の討究のために、しかるべき段階において、文末の声調の出現傾向を注視する必要がある。

近畿弁では、

○モー アカン。

もうだめだ。

などと、「アカン」の言いかたをしよう。つまり人々には、高音の調子をまいったらに進めて文表現を終止させる習性がある。「アカン」の文末声調で文を終止させることもほとんどなく、「アカン」の文末声調で文表現を終止させることもない。すなわち、近畿方言——いわゆる大阪弁などを中心に考えて——の人たちは、「あかん」でおわる言いかたに関して、高平調収束の方言習慣を持っている。近畿方言の情調は、このところにやどること、そうとうなものであろう。(いわば、近畿弁のもち味が、ここに一つあるとされる。) そのような重要な事実を、方言研究者は、尊重しないではいられない。

またの例を出してみよう。東北弁には、

○…………… ネハ。

…………… ねえ。

などの言いかたがある。この「ネハ」は、いつ聞いても「ネ」が高いというしるものである。「…………… ネハ。」表現は、かならず下げ調子になる。——下げるのが方言習慣である。私どもは、これを無視することはできない。

方言の文表現の「文末の声調」に、パターンを見ることは、つねに可能であり、ことの難易はさることながら、方言研究にあっては、パターン観察が、つねに一個特定の課題とされる。

文末の声調は、文表現の全局をしめくくって、どのようによく、文表現の実質を相手に伝えるのに役だっているか。文末の声調の上げ下げなどは、単純な、声の変相にすぎないかのようではあるけれども、その、全局支配の役わりは大きい。一個の文表現がになう表現待遇価の明細も、この、文末の声調が、——簡潔ながら、よく相手に伝達する。文末の声調が、文表現の活動・機能を最後の的に完結させる力は、じゅうぶんに認められる。

さて、上例の東北弁の「……………ネハ。」のばあいには、形態上、明らかな文末の特定の成分「ネハ」の上に、文末の声調が見られる。「ネハ」は、すでに文末の特定の訴え成分と見られるものである。文末の声調は、このように、特定の訴え成分の上に最後的にはりめぐらされることも多い。現代英語などのばあいでは、すでに述べたように、日本語流の、文末の特定の訴え成分がないので、文末の声調は、その生起が比較的単純である。日本語のばあいには、いわゆる文末辞法でセンテンスがおわることもあれば、「ネハ」のような成分の出現でセンテンスがおわることもあるので、文末の声調の出かたが、根本的に、より複雑であると言える。現に日本語のばあい、文末の特定の訴え成分の出現ごとに、そこに、文末の声調の、より大きい波だちが見られる。したがって、種々の形式もまた、そこに見られるわけである。

## 二 文末の訴え音

文末の特定の訴え成分として、第二には、文末の特定の「訴え音」が指摘される。

たとえば、出雲地方だと、つぎのような言いかたがなされている。

○カミ<sup>↑</sup>[i]ー アゲマシ<sup>↑</sup>[i]タ カイネェ。

紙をあげましたかねえ。 (中年の女性が、中年の男性に問う。)

「ねえ」と訴える時に、出雲人は、「ネァ」と発音する。つまり、「ネ」の〔e〕または〔ɛ〕の母音のつぎに、小さな〔a〕音をつけて、〔ne<sub>a</sub>〕などと発音するのである。それは「ニャー」のように聞こえるので、土地の人も、自評して、“出雲のものは猫の鳴き声のまねをする。”などと、冗談を言ってもいる。本来は、「ネ」ことばをつかっているつもりなのだけれども、じっさいの発音は、付加裝飾音〔a〕をともなっていて、結果は、「ネァ」といったような発音になるというわけである。この発音法の習慣は、出雲地方にそうとうつよいものがある。この、習慣の中の〔a〕音を、私は、文末の訴え音または文末訴え音と言う。方言の中に習慣的なこの種の文末音が認められる時に、私は、これを、一個特定の文末訴え成分と見ている。

いま一つの例をあげてみよう。関東の東北部に行くと、人々が、つぎのような言いかたをしている。

○キョーワ イー テンキダベァ。

きょうはいい天気だろうな。

このばあいには、上の「カイネ」のような、文末の特定の成分が見られない。「〜ダベ」という述定表現の末尾に、小「ァ」音が出ている。本例のばあいは、「……………ダベ。」の言いかたでもよさそうなところに「ァ」音がきているので、文末訴え音の様相が、より理解しやすいものになっている。

文末がどのような形態であろうとも、そこに自然的に付加される、微妙の一音が、文末の訴え音または文末訴え音である。どのようなばあいにおこってくるものであるにせよ、要するに、文表現の末尾・末端に、微妙に生起せしめられる微妙音は、特定の文末訴え音として認識され処理されるべきものである。

これが微妙な音形であるという点では、「ネハ」などの、語形としても多分に独立的であるものにくらべれば、いよいよ半独立的とも見られなくはない。けれども、これはこれなりに、一定の訴え効果を発揮するものなので、私どもは、形の大小には拘泥しないで、ひとえにその意味論的な価値を重視すべきである。方言研究ないし方言上の文表現の研究の精細をたつとぶたちばからは、

ことにこの文末訴え音の存立と活動とを重視したい。

文末訴え音の観察と解釈とは、つぎのようにひろげてみることができようか。能登弁で、「早くおいでなさいよ。」と言う時に、

○ハヨ イクマーシー。

と言っている。——女性がなよやかにこう言っている。「～マーシー」は「～マッシュアイ」の転と思われるが、このさいの「マーシー」の言いかたでは、「シャイ」を「シー」にしたところが、つぼどころである。(上がり調子もそこにおこっているが、これは、いましばらく問題外とする。)人が相手への訴えを意識しなければ、「マッシュアイ」>「マーシー」の転訛はおこさなかったのではないか。相手への思いのゆえに、人は、しぜんに「シー」の言いかたをえらびとるにいたった。(しぜん、「マッシュアイ」の「マッ」も、「マー」にされた。)というのであれば、この「シー」の長呼部分の〔i〕音も、文末訴え音とされはしないか。こういう考えかたも可能かと思われる。「シー」は、上がり調子の文末の声調を持って、まことに「ネハ」などの特定成分に近い文末特定成分のようにもなっている。

「きょうは暑い ナー。」というようなばあいの「ナ」が、「ナイ」になったり「ナン」になったりもしている。「ノー」が「ノイ」になったり「ノン」になったりもしている。これらの「イ」音・「ン」音もまた、元来、文末訴え音の特性を持ったものではなかったか。今は、「ナイ」「ナン」,「ノイ」「ノン」それぞれが、ひとまとまりの形態の文末特定成分となっているけれども。(じつは、「ナ」に対する「ナー」,「ノ」に対する「ノー」の長呼部分もまた、元来、文末訴え音と解されるものであろう。「ナ」と訴えたいがため——その訴えを強調したいがため、人はしぜんに、「ナー」と言ったものとみえる。)

音による訴えの心理の表現は、種々のばあいに認めることができる。東京語などでの「イラッシュアイマシ。」の「マシ」の言いかたなども、「ませ」の〔e〕母音よりも「マシ」の〔i〕母音をえらんだものではなからうか。こうすることによって、ことばづかひの、相手へのあたりのやわらかさを出すことができ

る。つまり、訴えの、よさ・おだやかさをものにすることができる。こうした訴え心理の活動が、今、私の問題にしたいものである。訴え心理の活動するところ、文表現にあっても、さまざまのばあいには、微妙な文末訴え音が産みだされている。

### 三 訴え成分「文末詞」

文末の特定訴え成分として最終的に指摘されるものに、明白な文法形態としうる、特定の形成物がある。上来、ときに、文末詞という特定語を用いて指摘してきたものがこれである。

文末詞との呼称は、「語」単位の次元にあっての呼称にはかならない。文表現次元では、このものが、文末の特定訴え成分と見られる。

これと、さきの文末訴え音とはちがう。文末訴え音は、しばしば、独立の一音節にはなりかねるありさまのものである。これに対して、特定の形成物——文末詞とよばれるもの——は、すでに音節文字のカナをもって表記するのが適切なものである。

言主の意識に、文末での訴えの気もちがはっきりしてくると、ただの音形あるいは微細な音形にはとどまらない、はっきりとした形のもので、そこにうち出されるというわけである。たとえば、「すぐ行く ヨ。」の「ヨ」、「暑い ナモン。」の「ナモン」など、はっきりとした語形がとられていく。

この種の形成物には、その起源・材質はともかく、短形のもの、長形のもの（単純形のもの、複合形のもの）、とりどりのものができている。

文末の特定訴え成分によって、文の表現を相手になげかけ訴えかけする文末訴え法では、上述のような特定の形成物をもってする訴え法こそ、訴え法の本格的なものと言える。——こうしたものによって、文表現ごとに、複雑微妙な訴えかたが実現されるしだいである。

### 第三節 文末詞の特異特定性

#### ——文表現と文末詞——

日本語での、言語生活の中の人々は、かなり無自覚的な言語生活をいとなんでいても、上述の文末特定の形成物には、早くも思いを寄せうるのではないか。人はだれしも、他人の表現を聞くばあいには、自己がものを表現するばあいにせよ、ごくしぜんに、文末特定の形成物の一種異様なものに注目しているのではないか。人が、方言の研究者となって他方言に足をふみ入れたばあいは、なおさらである。

総じて言えよう。人は、この文表現上の末尾の特異特定なものを見のがすことができないし、したがってまた、これの独特のはたらきに目を見ひらかざるを得ない。

その、素朴な経験——一般的事例——を、一つ、とりあげてみよう。東京都下を旅すると、若ものたちが、「アノ ヨー。何々して ヨー。」と、しきりに「ヨー」の言いかたをしている。ことごとに「ヨー」をつけそえるかと思われるほどに、その人たちは「ヨー」を重ねかけている。(——よくあのようになつて一つの「ヨー」を連続的につかえたものである。) この人たちから、かほどにも愛用されている「ヨー」をとりのぞいたと考へてみるか。かれらの言語表現の生活は、'ぼったりたおれる'とでもいったようなありさまになるにちがいはなからう。まことにだいじそのものの「ヨ」である。この人たちの言語生活を可能ならしめている「ヨー」; この人たちの言語表現の生活のきめてとなっている「ヨー」が、そこにある。——「ヨー」が、この人たちの言語生活の奔放さ自在さをささえているとも言えるのではなからうか。(「ヨー」一本で、かれらは、せまい道を行っているようではあつても、じつは、いつも「ヨー」にのっかって、表現気分をまぎれなく発散させているのかもしれない。)ともあれ、東京都下の青年層の方言生活の研究ともなれば、私どもは、いやおうなしに、まず、「ヨー」の追究におもむかなくてはなるまい。拡大して言う、こう言える。

方言研究は、一般に、まず文末特定成分——文末詞——の研究におもむかざるを得ない。

いわゆる文末詞が、文表現上の特別の重要成分であることを、世の人々は、かんたんな述べかたで的確に表明している。地方人士は、たとえば、近くにある異なった方言を指摘するにあたって、“あそこでは「ノー」「ノー」と言う。”とか、“あそこのことばは「ノーノー」ことばだ。”とか言っている。当該方言の方言生活の全体をとらえて、端的に文末詞の面から批評しているのである。地方人士、方言人、その他の人々の素朴な言語観察・方言観察に、まずはいつてきがちなものが、文末詞である。文末詞は、まさに、方言特性を言ううえの、代表的な分子なのである。

つぎになお、一つの特定のばあいについて、文末詞の特別の重要性を見たい。ことばに不幸な人、聾啞の子どもたちの作文には、ふつうの人たちのようには「会話文」が書けていないという。みな、地の文なみに、「デス」「マス」どまりになっているという。これは、残念ながら、みずみずしい会話生活をしていないからであろう。会話のセンテンスを、いきいきとした文末詞でむすんで相手に訴えかけることなどは、経験しようもないことであった。不幸な人たちのこの現実の会話文表現（「デス」「マス」どまり）のことを聞くにつけても、私どもは、生きた会話のキー・ポイントである文末詞のことを思わないではいられない。

聾啞の人たちに、どのようにして会話の文末詞を習得させるか。これは、私どもの考究すべき別の重要課題である。

以上、文末詞が、独立性のつよい文末特定成分であること、および、それは、人間対話での訴えにつよくかかわったものであること（——これなくしては、いきいきとした会話が成りたないこと）が明らかである。文末詞は、文表現とともにあり（——文末特定の訴え成分を成し）、文表現の末尾にあつて、文表現の対他作用を全的に収約する。——収約してこれを他者になげかける（訴えかける）。

#### 第四節 「文末詞」という呼称

一つの整理を試みる。

これまで、私は、問題の事実について、「文末の特定の訴え成分」「文末特定の訴え要素」などなどの言いかたをし、また、「文末詞」との呼称を用いてきた。成分または要素という見かた考えかたをするのは、文表現の見地にたつてのことである。表現次元にあっては、私どもは、「語」を称することはできない。「語」は、表現前の次元のものである。表現前の次元で、「語」としての文末要素を見た時は、品詞処理がなされて、これに文末詞の名が与えられる。文表現次元で、文末特定の訴え成分をとらえた時は、直接には、これが、特定文末部とよばれる。「特定文末部」「文末詞」の考えをとりたいと、私は思う。

文末の特定の訴え成分を、「語」の次元で、品詞論上、「文末詞」とよぶべきことについて、以下、なにほどかの吟味を加えたいと思う。私は、文末詞の称呼が適切であると考えたものである。

旧来、私も、これをただちに「文末詞」とはよばないで、「文末助詞」とよんだ。そこには、「文末——」との見解は示し得たものの、なお、従来の「終助詞」「間投助詞」などの助詞観にひかれたものがあった。しだいに考えをあらためて、私は、「文末詞」観に到達した。

すでに述べたように——地方人の弁別からしても、また、英語のセンテンス表現のばあいとの比較からしても、文末の訴え成分、特定の形成物、「ネ」などが、独立性のつよいものであることは明らかである。遊離性・孤立性がつよいと言ってもよい。「ワカリマシタカ。」などの、「カ」が、いかに遊離独立的なものであることか。「ワカリマシタ。」と、人が言うのを聞く時は、先方が自身のことを述べているのかと思っていると、その人が、終りに「カ」と言う。とたんにことばの全体がこちら（聞き手）にかかってくる。‘そうだったのか。こちらへの問いだったのか。’と、思わせられるしだいである。そうした表現転換を可能ならしめる文末の「カ」、これはまったく、独自独立にはたらく、

つよい要素である。

「ワカリマシタカ。」の文表現は、これをまず、「ワカリマシタ」と「カ」とに分別しなくてはならない。「マイニチアツイコトデスネ。」であれば、これをまず、「マイニチアツイコトデス」と「ネ」とに分別しなくてはならない。文の分析、——文表現の次元での分析で、最初にとりわけられるのが、「カ」「ネ」のようなものである。この文末特定の形成物は、文末の助詞などとは見るべくもない。助詞ではなく実詞である。これは、品詞論上、文末詞とよばれてしかるべきである。

はじめ、私が、これを文末助詞とよんだことについては、旧著『日本語方言文法の研究』に述べたところにゆずって、ここでは再説をしない。もともと、山田孝雄先生の終助詞・間投助詞のお説に依拠し、そこを出発点として、文末助詞という総合名をたてたのであった。

今日は、終助詞・間投助詞を合わせて終助詞と言うことが、かなりおこなわれている。このばあい、私としては、「終りの何々」と見ることに難をおぼえる。だいいじなのは、「おわる」「終り」ということよりも、「文の末」ということだからである。——（「終」に「文末」の意味あいはいくらかあるけれども。）「文の末」に位置する特定の機能者を、私は、「文末詞」という名称でとらえることにしたい。

いったい、多くの助詞を見て、これらを、まず、文中助詞と文末助詞とに大別しないのは、重大な手ぬかりのように思う。文中のものと文末のものとは、そのはたらき・性格が、いちじるしくちがう。（文中のものにも、間投助詞と言われがちの間投詞があるが、これは別格であって、性格上、文末詞に近いものとされる。）このちがいを見ていき、文末のものの存立状態を吟味していけば、やがてこれは、独立詞としてとらえられることになる。

文末詞、私の旧名によれば文末助詞を、孤立助詞としてとらえられたのは安田喜代門氏である。（『国語法概説』 中興館 昭和3年）私はかつて、この名に共感を禁じ得なかった。が、考えてみると、どこに対して孤立するのが、この名では明らかでない。孤立のしかたが示されなくてはならないのだった。「文末孤立助詞」とでも言われればよかったというわけである。——それは長

すぎる名にはなるけれども。さて、文末に孤立する助詞は、その孤立のゆえに、すでに助詞ではあり得ない。(孤立の事実、様相を解釈すれば、もはや私どもは、助詞概念の中にとどまてはいられないのである。) となって、ここに、文末詞の名が代入される。

「文末詞」とすべき事由を、つぎに、かんたんな事例のうちからとらえてみる。東京語などに関しては、かねて、

○ハヤク オシナサイッ テバ。

○ハヤク シロッ タラ。

などの「テバ」や「タラ」が、“終助詞”あるいは“感動助詞”と見られている。「テバ」「タラ」は、もともと「と言え」「と言ったら」であろう。起源に即応してみるのに、「テバ」「タラ」は、表現内容の多い、複雑な言いかたであることがわかる。そういうものが、いまや転じて、文末の特定の機能者になっている。この特定物は、助詞とよぶとするなら、いったいどんな助詞か。

○ダッテ シラナイデス モノ。

の「モノ」,

○マー オミゴトデス コト。

の「コト」などにしても、これらの様相と独特のはたらきとを見るかぎり、私どもは、これらを、終助詞などとは言いかねる。

○アツイ ナモシ。 <伊予弁>

暑いですなあ。

などの「ナモシ」を見ても、これには助詞以上のものがすぐに看取されよう。

徳島県下南部で、かつて、学校の教師の、「「ナモシ」は敬語だ。」と言うのを聞いた。その人がこう言ったのは、語意識上、「ナモシ」を独立の一語としてとらえていたからであろう。「ナモシ」は、「敬意」内容を有する独立の一単体とされているのである。

文末にはたらく特定の形成物の諸相を見ていく時、これらのためには、よくその形態・性能・地位を表明するにたる総括名、——包容力の大きい名称がつけ

られなくてはならないことを知るのである。

注 動詞の命令形「オキー」に対応する「オキヨ」「オキロ」の言いかたの、「ヨ」「ロ」は、私としては、「文末詞」の論にのぼすことはできないものである。「オキヨ」「オキロ」は、その全体のまとまりを、一命令形と見る。転じては、禁止の言いかたの「オキルナ」などの「～ナ」形の言いかたも、私は、まとまった「～ナ」形の全体を禁止形という一活用形と見る。

時枝誠記博士は、接続詞を辞とせられる。そして、

接続詞と云はれるものは、形式上、それだけで独立して詞を伴はない。これは一見、辞としての原則に反してゐるやうに見えるのであるが、それは形式的にさうなのであつて、意味的に見るならば、接続詞も、必ずそれに先行する思想の表現を予想しなければ成立しないことは明かである。

(『日本文法 口語篇』岩波書店 昭和25年)

と言われる。形式的には、接続詞という辞が独立すると見ていられる。このように、独立する辞という考えかたをとるなら、文末詞もまた、文末辞あるいは文末助詞としてもよかろう。しかし、「独立する辞」という考えかたは、私には、穏当でないと思われる。——独立するものは「詞」のはずである。接続詞は、私見によれば、上に対する受動的な地位にたつとともに、下に対する能動の地位にたつ。(——文表現が、その冒頭の接続詞によって導かれる。)前後関係を表示する、大きいはたらきの接続詞は、辞的性格よりもむしろ文的性格を有すると考えられるのである。接続詞でなくて、「ショーチイタシマシタ。」というようなセンテンスではじまる、

○ショーチイタシマシタ。ヒトツ ヤッテ ミマシヨー。

のような言いかたのばあい、この「ショーチイタシマシタ。」も、明らかに、“先行する思想の表現”を受けているが、これを辞とするには、ものが、あまりにも明白な独立文であろう。この文にかえて、「ジャー」(では)などという接続詞をおき、

○ジャー、ヒトツ ヤッテ ミマシヨー。

と言ってみる。接続詞の詞性と文的性格とは、ここに明白だと考えるのである。一文内の構造を説明するのに、その文の外のものを基盤にとり、それに依拠して説明をたてるのは、正当でない。センテンスという形態を認めた以上は、センテンス構造の説明にあたっては、その内部分子の相関に注目することが必要である。接続詞が、“形式的に”独立していると見られるなら、そのことが、じつはだいじである。形式上の独立が明瞭なら、もはやそのものは、詞と——単語論上では——されてよい。独立する辞は、独立する詞とすべきものである。それゆえ、独立する文末助詞は、文末詞とされる。

文末詞は、文末に独立する独立詞である。文末にあって、これは、前者からの活用関係などは絶して、孤立的地位にたつ。このゆえに、文末特定の訴え成分、文末詞を、何活用形を受けるなどとの見地で分類することは、無意義だと私は考える。

では、未然形を受けるとされている文語の「バヤ」感動助詞などは、どう理解すべきなのか。「行かバヤ。」との言いかたがあったとする。私は、これを、「行かばヤ。」と解してみたい。「行かば」の、あるまとまった言いかたを、「ヤ」で他に投げかけていると見ることはできないか。「バヤ」が感動助詞なのではなくて、「ヤ」だけが感動助詞なのではないか。その「ヤ」は、「カナ」の「ナ」に比肩せしめられるものであろう。

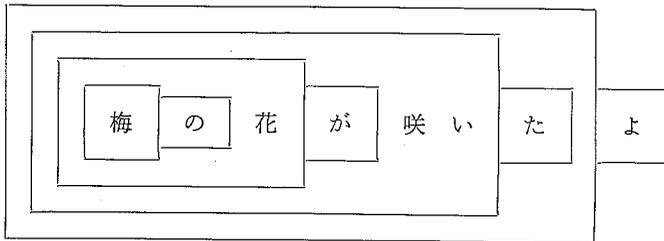
「君に二心わがあらめやも。」の「やも」も、通常、已然形承接の感動助詞とされていようか。私は、「やも」の直上に「め」の已然形がありはしても、「め」と「やも」とのあいだには、一つの切れめがあると考える。感動・よびかけの「やも」は、そこまでの言いかたのなんであるかにかかわりなく、「やも」とよびかけられているものだと思う。たまたま已然形と言える活用形が直上にありはしても、それはそれだけの偶然であって、「やも」のよびかけは、已然形の制約を受けてはいないだろうと解したいのである。——むしろ、そういう制約めいたものをはねのけて、より高揚的に——文表現のすじあいでは、頂点的に——対他的なよびかけ・訴えかけをするのが、「やも」などの文末詞ではないか。

ここで、いま一つ考えなくてはならない、問題の事項がある。たとえば、「知らぬワイ。」というような言表があったとする。これは、かなり多くの方言で、「ぬ」と「ワイ」との熟合をきたして、「知らナー。」というように表現されている。こうしたばあいは、上来言う、文末詞の遊離独立性は、どう解すればよいことになるの

か。一見ここには、文末詞とそこまでのことばづかいとのさかいめが認められないありさまである。私は、このような事態のばあいにも、文末特定要素の遊離独立性を依然として考定したいのである。「知らナー。」の表現では、「ナー」は、上への文法的なつづきかたなどにはかかわりなく、文末での特定の訴え効果を發揮している。文末詞形そのものは不明確となったけれども、文末詞効果にはかわりがないとされる。(一文の表現に音相上の諸種の連合関係がおこるのは、やむをえないことであろう。文末詞のばあいも、また、その例外ではあり得ない。文法上、文末に卓立するものではあるけれども、話しことばでは、音相上、文末詞もまた、他の要素と同様に、他と関連している。連関は、一般に、そこそこで音変化をおこしうるはずである。こうした音相上の連関・融合と、文法上の前後関係、その必然性とは、区別しなくてはならない。)「知らナー。」などのばあいは、要するに、文末詞の形態に音相上のもつれがあっても、文末詞の、いわば文法上の自律性には異常がないと考えられる。

文末詞が、もし前接者からの活用上の制限を受けるべきもの(あるいは、受けている)とされるようであったら、私は、そういうものを、文末詞には見とらないのがよいと考える。文法上の承接約束のつよいきずなものにたっているような要素は、むしろ、助動詞と見られるべきであろう。この整理によって、文末詞というもの、前接者には関係なく——活用系列とは無関係に、受けとりうることになる。文末詞は、あくまでも独立詞であって、特異な孤立的機能者である。

文末詞の独立性を示すものとして、時枝博士の入子型の図式は、有意義であると考えられる。博士にしたがえば、「梅の花が咲いたよ。」は、つぎのように表示されようか。



「よ」は、じつに、上の全体をしめくくる地位にたつことが、これであざやかである。(私は、従来、この最後の地位を、収約的頂点と称してきた。)時枝博士は、この「よ」を、辞の一種の助詞、“感動をあらわす助詞”としていられ

る。辞というあつかいにはなっているが、上図のごとくであるとすると、「よ」が独立的・孤立的であることは、明確である。（形式上の独立のだいじさも、ここに明らかである。）私は、時枝博士の図式法にあやかって、つぎのような図示をしてみたい。



「梅の花が咲いた」をどう図示するかは、上の区分図示を実施してののちのことである。

ときに人が、私の「文末詞」という考えかたに近いものを表明してられる。宮地裕氏の「文末助辞と質問の昇調」（国立国語研究所論集『ことばの研究』第1集）に、それを見る。また、亀井孝氏は、かつて私が「文末助詞」の名をもってことを説明していたら、その内容に賛成してくださるとともに、“あなたは便宜的に助詞と言ったけれど”と、むしろ私の考えかたをむちうってくださった。

後藤蔵四郎氏著の『出雲方言考』に、「ね」や「ねい」を感詞としていられるのに、旧来、気づかないでいたのは遺憾であった。私は、この先覚の術語「感詞」に、深い賛意を表してやまない。「ネ」など、かな一文字で表記しうるものは、とかく助詞的に見すごされがちかもしれないけれども、「ネ」に「ワ」もよそえて考えてみていただきたい。「ワ」はもと「わたし」、その「ワ」にはすぐ「ナタ」（ナーあなた）などがならぶ。並列されるもののかずかずを見あつめ、おのおのの中みを考究する時、「ネ」「ワ」「ナタ」などは、特定の表現効果をかもす文末特定の機能者として、等しく重要視され、みなみな、独立の感詞と見られてくる。

つぎには、さきにもふれるところのあった間投成分との比較から、文末のものが、文末詞とされるべきものであることを認めたい。旧来、間投助詞と言わ

れているものがある。その指摘はややまちまちであるが、ここには純粹に文中に間投されるもの、一文中の中間要素をそれと見ることにしたい。たとえば、安芸方言下の、

○コンテ<sup>ー</sup> カー イカン<sup>ノ</sup>ノカー。

おまえは、ええ、行かないのか？

の「カー」のようなものである。(もともと、「これ」か。)また、備前地方などの、

○キョ<sup>ー</sup>ワ ケー オエソ<sup>ト</sup>トミー。

きょうは、ええと、どうもうまくいかないなあ。

の「ケー」のようなものである。(これも「これ」からきている。)東京弁の、

○ダッテ オマイ ダメナンダ モノ。

の「オマイ」も間投成分になっている。代名詞が、種々に間投成分になっているのが注目される。それはともかく、一文中に、まさに間投されるものがあることは、明らかな事実である。これらを、旧来、間投助詞とよんできた。はたして助詞であろうか。現に、上例の「オマイ」などは、とり出してみれば、いまだなまなましい代名詞である。

「オマイ」にせよ、「ケー」「カー」(このような、形の変じた、助詞らしいもの)にせよ、これらは、現に、文中では、遊離独立(分立)している。前後にかかわりがない。まさに間投されて文中にうかぶ成分である。品詞論上、「何助詞」とは言いかねる。「間投詞」と言うべきものだと思う。これと等しく、文末のもの、「文末詞」と見られる。

語——品詞——の次元では、上の「オマイ」は、体言、代名詞として受けとられるが、「カー」や「ケー」は、文字どおりの間投詞として受けとられる。これらはもはや、間投詞としてしか受けとりようのないものになっている。——指示代名詞「これ」から離れきったものになっている。

文表現上では、種々の語あるいは語句が、間投成分にもなり得ている。文表現上の間投成分＝間投部(間投話部)と語としての間投詞とは、つね

に明確に区別しなくてはならない。

間投成分は、文中、遊離の地位にたちつつ、そのセンテンス表現に、独特の色あいを付与する。——そういう作用、文表現全体にかかわっていく作用を持つ。「間投」の地位にあり、前後に無縁の地位にたつがゆえに、そのように、全相へかかわっていくのであろう。)たとえば、前の安芸弁のばあいでも、「カー」が、その一文全体を、おどけた気分の、気がるな、上品でない表現にしている。こうした全体効果とも言えるものが、文末詞のばあいには、さらに明瞭である。間投成分について、その全的効果ゆえに、はっきりと、間投詞の独立性が認められるとしたら、文末成分のばあいは、よりかんたんに、文末詞の独立性が認められてよかろうと思う。——ものは、「～詞」そのものである。

文末詞と間投詞とは、類同のものであり、文中、相関の地位にたつ。両者は組みあってはたらき、文の表現の質を微妙に決定する。そうではあるが、なお、両者には差異もあり、だいたい、文末詞のほうが、文表現上、より包括的な役わりを演じている。文末詞の独立性は、より明瞭であると言える。

‘実現されることがらに対する話し手の立場の表現’であるものを、独立の要素と認めることは妥当であろう。

文末詞に関しては、接続詞のばあい以上に容易に、その文的性格が言えるのではないか。

○ヌ<sup>↑</sup>ク<sup>↑</sup>イ ノ<sup>↑</sup>マイ。 <肥前弁>

ぬくいね。

○ン<sup>↑</sup>ダ<sup>↑</sup> ナ<sup>↑</sup>ッス[ü]。 <東北弁>

そうですね。

のような例を見るにつけても、「ノマイ」や「ナッス」に、くさぐさの思いのこめられているのがよくわかる。このような思いの表現は、文的表現と言ってよい。「ノマイ」や「ナッス」は、縮約されたセンテンスのようなものではないか。文末詞に、文的性格の顕著なものがある。ここでまた、英語文での、

○It is very fine to-day, isn't it?

の「isn't it?」が、思いあわされる。「isn't it?」は、「ネ」と和訳されがちであるが、「isn't it?」に比照される「ネ」は、「isn't it?」なみに文的なものであろう。こうして理解しうる文的性格を認めようとする方向は、ものを助詞と考えようとする方向とはま反対のものである。

最後に、亀井孝氏の「強さのアクセント」のお説をお借りして、文末成分（品詞上、文末詞とよびたいもの）の独立性を見、このものには、文末助詞の名よりも文末詞の名のほうが適当であることを明らかにしたい。亀井氏は、『概説文語文法』（吉川弘文館 昭和30年）で、

一個の文には、そのなかに、さらに小さいいくつかの切れ目がある。一個の文を切れるだけ多く、強さのアクセントにもとづく統一によって切ってみると、文は、その前後に息の切れ目をもついく組かの断片に分かれる。

見れば、いと <sup>チイ</sup> 小 <sup>ヒ</sup> さき 家なり。（堤中納言）

みぎは、

み ね ば い と ち ひ さ き い え な り

.....  
.....

などのように、アクセントの統一をもつ四つの断片に分けられる。

と説いていられる。そうして、

力点（藤原注「強さのアクセントの力点」）は、一つの断片においては、ただ一個にかぎる。……。黙読においても、黙読のリズムとして、かようなアクセントは存在する。それによって、黙読においても、例文がみぎのような断片に分けられることは同じである。このような断片を文節という。

と言われる。方言での文表現、

○アツイ バー。

暑いね。

○ワ<sup>↑</sup>カッタ カー。

わかったか？

などについて見ると、「ノー」に、たしかに強さのアクセントの力点がある。「カー」にもある。したがって、「ノー」や「カー」は、強さのアクセントの統一を持った断片と認められる。その断片は、すなわち文節である。

このような断片、——アクセントの統一を持つ断片、文表現の「表現そのもの」の次元でくぎりとりうる断片は、私見によれば、スピーチのパートである。話部である。上例の「ノー」や「カー」は、本来、辞ではなくて詞であるとしなくてはならない。（——「詞と辞との別」の論は、話部論で決着のつけられるものでもあろう。）いま一つ、実例をあげる。北関東、栃木県下で、たとえば、

○デンポー タテテ オキマスカラ<sup>↑</sup>ネ。

電報をうっておきますからね。

と言う。これの文アクセントは、きれいに高平調に流れており、最後に、ごくきわだたしいアクセント隆起がおこっている。（この種のことは、栃木・茨城の二県に多く、これ式の言いかたが、いわば、当地方の文アクセントのパターン<特質傾向>になっている。このような「ネ」を見る時、私どもは、ここに、異常なまでの、明白な‘強さのアクセントにもとづく統一’体をとらえざるを得ない。「ネ」はまったく、遊離独立の成分と受けとらざるを得ないのである。このような成分を形成する品詞は、文末詞とよばれてしかるべきである。

## 第五節 文末詞(文末特定の訴え成分)の成立自在

言語表現の生活では、表現者は、その表現を相手に的確に訴えかけようとして、種々に語りかけの努力をする。日本語でのばあいには、その語りかけの努力が、とくに文末に収約されて、そこに、独特の語りかけことばが成形化される。——きわめて文表現的な語りかけことばが醸成されている。語りかけは自在無限なので、これに応じて種々の文末詞が、多彩に形成されている。話しことば

での、これまでの日本語の歴史は、文末詞を種々多彩に形成してきた歴史でもあったろうか。

そのような文末詞の、文表現への出現は、すでに明らかにしたとおり、文法上、膠着と言いうる様式のものである。膠着自在のところ、無限とも言いうる文末詞生成の可能性が見こまれる。のちに言う転成文末詞は、ここに自在に成立し得ているものである。

文末詞に「転成文末詞」の多くできていることから、私どもは、文末の訴え作用の自在性と、訴えるためにその機能者を産み出す自在さと、それらの文末詞を文構造の末尾に膠着させる自在さとを、知ることができる。

この段階で、私は、文末詞認定の「文」論への寄与を明らかにしておきたい。

文末詞は、文の末の詞である。文末詞の出現は、文の終止を意味する。この理は貴重である。私どもは、文末詞の出るのを見て、文表現の完結と完体とを知ることができる。

さきの東京語例、「アノ ㊦ー。何々して ㊦ー。」などのばあいにも、私どもは、「㊦」に着目して、容易に「アノ ㊦ー。」のセンテンスと「何々して ㊦ー。」のセンテンスとを識別することができる。「アノ ㊦ー、何々して ㊦ー。」として、前部の「アノ ㊦ー」を文の部分に見ることなどはできない。

「㊦ー」の強力な訴え作用は認めるが、ここでの文終止は認めないというのは矛盾である。表現上の意味内容にひかれて、人は、「アノ ㊦ー」に、読点のくぎりをほどこしがちであろうか。表現形式をはなれて意味内容に執着する時は、総じて、文把握が混迷の中におち入らざるを得ないであろう。「ハイ ワカリマシタ。」のばあいにも、じじつ、「ハイ、ワカリマシタ。」のばあいもあれば、「ハイ。ワカリマシタ。」のばあいもある。「ハイ<長い間>ワカリマシタ。」というようなばあいは、意味は「ハイ、ワカリマシタ。」的な流れを見せているものであるにしても、途中の長大な間は、看過しがたいものである。私どもは、この明白な表現形態にしたがって、「ハイ」を一個の文完体と受け

とることを余儀なくされよう。文表現の認定に、醇乎とした形式観は、重要である。

「アノ ㊦ー。」などのばあいは、「㊦」文末詞のはたらく表現形式と、「㊦」による強力な訴え——という意味作用——との、いわば、内容と形式との一致が、文表現にきわめて明らかである。私どもは、このようなばあいこそ、安んじて文表現の完結を認定すべきではないか。よびかけことば・訴えことばの特定者が出るたびに、文の表現は、そこでしめくくられていると了解することができる。

文法家が、「だから ね。」を一文と認めるのに、他方で「だから ね、きのう ね、……………」のくぎりかたをするのは、一般常識からしても、受けとりかねることである。「だから ね。きのう ね。……………」として、どこに矛盾があるのだろうか。

「待ってて ね。あとで行くから。」というような見かたをとって、他方、「待ってて ね、ください ね。」というような見かたをするのは、恣意的とは言えないだろうか。すくなくとも、こういうことでの不統一は、なくしたほうがよいと私は思う。

文法理論などと言われるものが、実際社会の文法生活を阻害するのよりも、それを助成するのがよいことは、言うまでもなからう。

### 第三章 文末詞の分類

#### 第一節 分類されるべき文末詞

日本語には、文末詞の繁栄が見られる。——日本語ゆえにのことであるとされるのであろう。日本語ゆえに、文末詞は、諸変相にとみ、地方的変異も、しごく複雑である。私どもの文末詞研究は、当然、これらの分類処置を、一つの基本的課題とする。

分類法考究のために、文末詞にはどのようなものがあり得ているかを概観しよう。

一つには、本来的な文末詞と思われるものがある。「ナ」や「ヤ」など。

二つには、既成の文末詞での音変化によって生じたものがある。「ナー」からの「ナイ」、「ゾ」からの「ゾン」など。また、「～ます」が「ますィ」となって、この「ィ」がやがて文末詞化してもいる。「カイ」が相互同化をおこして「ケー」になり、「ケー」「ケ」という文末詞が成立している。（おもしろいことに、近畿の地方では、一般には [ai] > [e:] [e:] の音変化がおこらないが、文末詞「ケー」「ケ」はよくつかわれている。）徳島県下などでは、「デヨ」から「ジョ」という文末詞ができています。

三つには、他品詞から転成<転生>してきた文末詞がある。これがじつに多い。たとえば、よびかけ用の特定詞<感動詞>「モン」が、文末詞に転成している。

○サイテラ モシ。 <瀬戸内海 伊予弁>

さようなら。

というようにつかわれている。「モン」に「ナ」などが冠せられているのは、周知のことであろう。（「ナモン」となったものは、また、さらに音変化をおこ

して、「ナンシ」「ナッ」などともなっている。)「モン」に省略がおこって、「モ」という文末詞、「シ」という文末詞もできている。——他品詞からの文末詞転成には、なお、その後の諸変化による新文末詞生成がともなう。さて、転成文末詞の特例を一つあげよう。(これには、のちの変化による新文末詞はおこっていない。)私の郷里(瀬戸内海大三島北部)の方言では、

○ア<sup>シ</sup>ヨ<sup>イ</sup> イ<sup>キ</sup>ャー エ<sup>ツ</sup>ト アル ヤラ。

あそこへ行けば(何々が)たくさんあるだろうじゃないの？

○ダ<sup>レ</sup>モ オリ<sup>ャ</sup>ー セ<sup>ン</sup> ヤラ。

だれもいはいわね？

などの言いかたをし、「ヤラ」という文末詞をつかう。「ヤラ」をつかって、人にやわらかく問いかける。女性的な言いかたである。おもに女性がこの言いかたをし、男の子もまた、ときにこの言いかたをする。子どもがこの言いかたをした時には、ことにあどけなく聞こえる。方言のこの「ヤラ」は、起源はともかく、今、たしかに、特定の文末詞になっている。「ヤラ」の用法にはかぎりがあるけれども、これが、文表現上、古語意識などはないままで、特殊の遊離成分として用いられていることはたしかなのである。

四つには、隠在の文末詞がある。たとえば「あとからクラー。」が、「あとからクル ワイ。」の約だとすれば、ここには、「ワイ」文末詞の隠在が認められることになる。

五つには、前にも述べた文末訴え音の類がある。ただしこれは、すでにその名にも明らかなように、文末詞からは一歩へだたったものである。特類文末詞などとして、この類のものをとりたてることができよう。

六つには、多くの、新文末詞がある。文末の特定の訴え箇所では、じつに、かぎりもないほどに、既成文末詞二つ以上の複合形が産出されている。——文表現の訴えが多彩であればあるほど、それに相応して、複合形文末詞の新作も、多岐多彩となってくるはずである。文末詞「ワイナー」は、「ワイ」と「ナ」との複合である。文末詞「ヨノー」は、「ヨ」と「ノー」との複合である。さ

きの「ナモシ」も、「ナ」と「モシ」との複合にはかならない。文末訴え音もまた、文末詞と複合する。「モシァ」など。（「ァ」が訴え音である。）他品詞から転成した文末詞と、本来的な文末詞との複合が多く、そこに多種多様な新複合形が生じている。複合の結果では、また、かなり長大な形のものできあがっている。大分県下の「タナチコ」など。（「タナ」は「アナタ・ナー」、「チコ」は「とこそ〜」であろうか。）佐藤虎男氏によれば、南紀木ノ本では、

○アル ワカイアッ。

ありますよねえ。

との言いかたがなされているという。ここには、「ワカイアッ」の長大な文末詞が認められる。——「ワ」と「カイ」と「ノシ」との複合という、三者複合のものは、かくべつめずらしいものとされよう。

複合形文末詞に関して、一言すべきことがある。たとえば、「ワイナー」のばあいにしても、これの、じっさいの文表現上での役わりを見るのに、その訴えのはたらきは、けっして単純ではない。「ワイ」と訴え、さらに「ナー」と訴える、といったようなきみあいが、「ワイナー」のはたらきには認められる。複合形文末詞が成立しても、その形態上の一体化は明らかとなっても、訴えの意味作用の単純化は、かならずしもそこにはおこらないと言える。（かといって、分裂的な訴えをしているともしがたいのである。「ワイナー」には、やはり、「ワイナー」というものの、特定の訴えかたができています。できていなかったら、「ワイナー」は文末詞ではない。）

以上に見るとおり、文末詞は群生している。これら総体に対して、分類の処置が加えられる。

## 第二節 文末詞の分類

これは、日本語という主体が、この国土上で、種々に文末詞の生態を見せているのを、体系化して受けとろうとするものにかならない。

言うところの、文末詞の生態の分別は、さほど容易なことではない。分別処理の体系化が、したがって、至難であることもまた明らかである。分類法そのことが、当面の一大課題になる。おおよそ、諸種の分類法が考えられるはずであることは、多言を要しない。

諸種の分類法も、けっきょくは、たて軸による分類法とよこ軸による分類法とに大別されることは、また、一般的な事実であろう。両軸の方向をどのように調和させるかが、問題の主点になる。

純粋によこ軸の分類法をとろうとすれば、これは、共時論的たちばと言える。このさい、意味作用に注目して、いわば内容から分類していく方法が一つ考えられる。そのさいは、訴えの度あいとか、訴えの方向（もっぱら対他的とか、やや自己主張的とか）とか、訴えの中味とかが、分類の規準になる。かんたんな分類例としては、

（ 問いの文末詞  
   答えの文末詞

というようなものをあげることもできよう。

私は、内容からの分類をすっきりとしたものにするには、むずかしいだろうと考えている。——表現に即して表現内容を見ていこうとすれば、表現ごとに分類項目をたてていかななくてはならないようでもある。内容本位のいきかたで、すっきりとした分類、分類各項の対応関係の合理的な分類を求めていこうとすれば、いきおい、大ぐくりの分類法にしたがっていかざるを得ないであろう。さて、大ぐくりであるのは、そのままでは有効でない。

私は、むしろ、形式上の分類のほうを重んじたい。これによって、共時論的たちばと通時論的たちばとの融合を、じみちに實際化することが可能だと考えるのである。両軸のたちばの融合を目ざして、私は、全文末詞を、つぎの二類とする。

（ 原生的文末詞  
   転成（転生）文末詞

「原生的」とは、今日、もはやすぐには転成を考慮することができない類のものを言う。「ナ」や「ヤ」「ヨ」の類である。(文末訴え音も原生的なものである。その微細微妙な訴え音が、やがて拡大され定着されて、一定的な音相のものとなれば、それはやがて、原生的文末詞とされる。)しかし、どこまでが原生的なのか、じつはその判断がむずかしい。そういう点からも、「原生」に関しては、今、「原生的」としておくことが必要である。

原生的文末詞をゆるやかに広汎に認める。そのものを下位区分すれば、

〔 感声的文末詞  
非感声的文末詞

となる。問いなどにつかわれる「カ」は、現段階では感声的とも言いかねるので、これを区別して、非感声的文末詞とする。

感声的文末詞は、

ナ行音文末詞

ヤ行音文末詞

サ・ザ行音文末詞

というように区別される。(現段階では、共時論的には、「どうどうして サ。」などの「サ」や、「すぐ行く ゼ。」などの「ゼ」の類を、感声的なものと認めてよかろう。「サ」の起源に関して「然」の説があったとしても、当今の「サ」使用の現実は、まずまず、感声的な「サ」を思わせるものであろう。)

転成の文末詞は、

〔 助詞系のもの  
助動詞系のもの  
動詞系のもの  
形容詞系のもの  
形容動詞系のもの  
名詞系のもの  
代名詞系のもの  
副詞系のもの  
感動詞系のもの (＝文系のもの)

に下位区分される。——現状では、この程度の認定ができるようである。

### 第三節 複合形文末詞の処理

文末詞の分類処理で、困難をきわめるのは、種々の複合形文末詞の処理である。「ナ」に「ヤ」の複合した「ナヤ」、このようなものは、感声的なものどうしの複合であるから、これを感声的文末詞とすることは容易である。それにしても、これを「ナ」の所に属せしめるか、「ヤ」の所に属せしめるか。つぎに、「ナ」に「アンタ」の契合した「ナンタ」は、どこへ分属させるか。「ナ」の所へおくのには、「…ンタ」のひびきが大きすぎる。これは、代名詞系転成文末詞の条に収めるか。

複合形文末詞の処理法・分属法として、一つ原則をたてるなら、当のものを、複合形の末部本位に見ていくという方法を、原則化することができよう。「アージャ ナヤ。」の「ナヤ」は、「ヤ」の所に分属せしめる。「カヨー」は、「ヨ」の条下におく。「ナヤ」など、「ナ」に強調があるけれども、訴えは要するに「ヤ」で束束されるのである。したがって、「ナヤ」のばあいも、その訴えの効果は、「ヤ」的であると見る。日本語の文法構造上の特性一般の指向するところにしたがい、複合形態については、下方要素のほうがけっきょくは重要であると考定するのである。九州弁、阿蘇南麓のことば、

○ア— ト—カ ツネ。

ああ、遠いのですか。

の「ツネ」にはアクセントの高音がない。「ツ」も「ネ」もともに低い。こんなばあいは、「ネ」に重点があると見ることが容易である。

複合形文末詞には、文表現上、さまざまなアクセントが認められよう。今は、文表現上でのそのアクセントがどのようなであろうとも、原則として、各複合形文末詞を、その末部形式本位に処理してみたい。

「カイナー」などだと、よびかけ、訴えかけの気分は、「カイ」から「ナー」へと

もりあがっていくことが明瞭であろう。あとほど重要であることが明らかである。

#### 後注

- 1 複合形文末詞に、複合の緊密度の大小がありうる。たとえば「ノ・モシ」の「ノモシ」は、「カ・ナー」の「カナ」よりも、複合の緊密度が大であろうか。（これは、伊予方言などで観察される事実である。）「ノモシ」は、もはや一体化して、「カ」や「ナー」にも匹敵しうるものになっている。四国弁・近畿弁での、「ツー カナ。」（そうですか。そうなの。）などの「カナ」は、「カ」と「ナ」とのむすびつきが緊密である。これにひきかえ、東京語などのばあいには、「カナ」が、さほどに結合緊密度の高いものとはなり得ていない。東京語での「カナ」は、「……カナ。」とつかわれることがふつうか。この種の「カナ」では、「カ」と「ナ」とは、ややよわくむすびついでいよう。
- 2 どういう文末詞とどういふ文末詞とが複合しやすいか。——方言ごとに諸傾向が認められて、興味が深い。方言による傾向差は注目すべきものである。
- 3 「複合上、上にしかこないもの、上にきがちなもの、下にしかこないもの、下にきがちなもの、上下のどちらにもくるもの」といったような見わけかたが、また、複合形文末詞の吟味に必要である。

## 第四章 文末詞(→特定文末部)の機能

語詞について、ただちに「機能」を言うことは、穏当でない。機能論はすでに表現論上にある。

正確には、「文末詞の機能」と言うことはできない。文末詞が、文表現上で、いわゆる特定文末部として私たちはたらくのを見て、その場で私どもは、文末詞と言われるものの機能を見ること、云々することができる。

以下には、「特定文末部の機能」との意をもって、ときに、「文末詞即特定文末部の」などの言いかたをすることがある。それは、多分に、本文の簡潔を重んじての便宜的な言表であることを、おことわりしたい。

「特定文末部」(←文末詞)の機能は、次下のように約説される。

### 第一節 機能総論

柳田国男先生は、かつて私に、

自分の思ったことを聞いてくれたかどうかをたしかめるのが、文末詞(藤原言う)のはたらきである。

とも、

自分のことばの印象をたしかめるために、相手の目を見る。その、相手の目を見ることばが文末詞(藤原言う)だ。

とも言われた。この時、先生は、主として単純な感声的文末詞を考えていられたようである。先生は、文末詞を、“ことばとエジャクレーションとの境のもの”ともされ、“ジェスチャーを持った”感声ともされた。(この点では、私の、別に考えている間投詞も、区別なしに、合わせ見えていられたようでもある。)

「ナ」「ネ」「ノ」などが、文末に位して、言語によるコミュニケーションに、決定的なあずかりかたをしていることは、先生の卓抜なご説明によって、きわめて明らかであろう。文末詞の機能に関する簡潔な総論が、ここにある。

以下に、各論を試みよう。

## 第二節 文表現特定化の機能

文末詞は、文の表現において、文末の特定の機能者——特定文末部——となり、表現をきょくたんに特定化する。

書かれた文章のセンテンスは、受けとり手（対象）に対して、きわめて非限定的なものである。通常、特定の対象をねらってはいず、むしろ、不特定の対象に発言しようとしている。その不特定の対象は、目前に（近くに）いてよしなくてよしであり、また、単数であっても複数であってもよい。書きことばのセンテンスは、いわば漠然とした対象を相手にしている。書きことばは、非対話性の言語であると言える。それゆえ、これには、直接に相手に訴えかけようとするこゝとは、出てこないのがつねである。

それに対して、口ことばのセンテンスは、いつも目前に、特定の相手を持つ。相手がたとえ二人以上であろうとも、それらの相手が、特定の対象とされているのである。対話の文法は、そういう規格のもとに成立している。対話のセンテンスは、まったく、対人的な、対話性に輝くセンテンスとして成立する。そういう、対話のセンテンスの文末に、文末詞の特定文末部が輝く。

「……………です ネ。」「……………ます ネ。」となると、彼我の距離は、俄然、小になる。文末詞のはたらきは、このように、早くも特定の対象を求めて、彼我の距離を一挙に小にするとも言える。そういう文末詞、特定文末部のはたらきかけは、まことに率直簡明なものである。

この、特定の対象を求めて、しかもそれをさっそく自己の世界にいだきとろうとする率直さに注目して、私は、文末詞（——特定文末部）のはたらきを、「表現をきょくたんに特定化する」ものと見る。

さきに、国立国語研究所の『談話語の実態』にふれるところがあった。談話語の73%に文末詞が出ることは、すなわち、談話語が早くも表現を特定化して

いくものであることを示している。

### 第三節 叙述構造収約の機能

文末詞の文表現上での機能，すなわち，特定文末部とされるものの機能（現場作用）は，その独自の性格を見たばあい，前節に述べたとおり，文表現特定化の機能と見られた。文表現を文の叙述構造と見る時，特定文末部としての文末詞は，叙述構造を総括収約する機能を発揮するものと見られる。

文末詞は，「主→述」構造の外にたつて，——特定文末部として，一文の収約頂点になる。

○キョーワ アツイ ㄱ。 <山陽地方のことば>

きょうは暑いね。

という時，「ㄱ」は，「キョーワ アツイ」の主述構造の外にたつて，前の全体をしめくくる。発言に，「キョーワ | アツイㄱ。」というようなポーズのとりかたのものがあつたとする。このようなばあいにも，「キョーワ」は「アツイ」と正対し，その，文法的に緊密な一つづきのもの（音声的にははなれていても，その音相の底を縫って，意味のつながり関係を見せるのが文法である。）を受けて，「ㄱ」がはたらく。「アツイ」と「ㄱ」との意味上の距離は大きく，「キョーワ」と「アツイ」との意味上の距離は近い，とも言える。「ㄱ」は，「キョーワアツイ」事実を言うことばづかい・意味作用の外にたつている。なお言ってみれば，「ㄱ」は，要素として，「キョーワ」に直接する性質のものでもなければ，「アツイ」に直接する性質のものでもない。

○アツイ ㄱ。

というセンテンスのばあいも，「ㄱ」は，隠在の主部に対応する述部としての「アツイ」つまり「<主>→アツイ」を受けている。

○キョーワ ㄱ。

きょうはねえ。——まあほんとに，暑いことですわ。（共感の表現）

というセンテンスのばあい、すなわち主部だけを「ナー」が受けているかのようなセンテンスのばあいも、「ナー」は、「キョーワ」にわけなく接合しているものではなくて、「キョーワ→述」のようなきみあいのものに接している。じっさい、「キョーワ ナー。」では、「ワ」のつぎに、微妙なポーズがあろう。（明確な時間的ポーズにならない時にも、心理的なポーズがある。）そういうポーズの認められる「キョーワ」の表現は、——主部相当形ではあっても、もはや、「主→述」的なもの、述部化傾向をおびたものとも受けとることができる。

要するに、文末詞の、現場に生きる特定文末部は、文表現形態上、叙述構造統一収約の機能を発揮する。

このことは、文表現の形態が、——短小であるばあいはもちろん、どんな長大なものであっても、つねにしかりである。かつて一学友は、長大のセンテンス例に関して、文末詞即特定文末部の、叙述構造体を統括収約する機能につき、一つの疑問を寄せた。

○カタイッポーワ モー アガッテ ミエン ユーケド、コノー ヒダリノ  
ナー ナー。

“片方の目がもうだめになって見えないということですが、この左の目がねえ。”（香川県広島 老女→学友）

とあるばあい、「ナー」は“叙述部のどこまで力をおよぼすことができるか。”というのである。氏は、おそらく、上例前半末の「ユーケド、」のところに大きなポーズがあることをもって、「ナー」の遡及力をうたがっているのであろう。たしかに「ケド」接続助詞のつぎのポーズは、「ナー」の直前のポーズよりもきわだって大きかろう。しかし、私は、思う。第一に、「ケド」のつぎのポーズと「ナー」の前のポーズとは、ポーズの性質がちがう、と。第二にと言おうか、「ナー」は、形式上、「ヒダリノ ナー」を受けているようでも、内容的には、「ヒダリノ ナー どうどう」という主述関係の意味作用を受けている。そのことを認めれば、前半の「ユーケド、」までの、文表現全体での

役わりが判別されて、「ナー」の、叙述構造全体にかかわっていくいきかたが認めやすくなる。[「ヒダリノ　　メーガ」]の下の意味論上の重要なポーズを正しく見いだせば、私どもは、「ナー」の大きな収約力・廻り力を認定していくことができるのではないか。日常対話のばあいには、単文のことがすくなくない。その末尾に独自の文末詞が輝きがちである。そのさいに明瞭な文末詞即特定文末部の叙述構造収約の機能を、長大なセンテンスについても、醇乎とした態度で見いだしていくことにつとめるのが、有意義であろう。

さてまた、

- ナー、オメズラシー　　ワ。  
 ○ナー、オメズラシー　　ネー。  
 ○ナー、オメズラシー　　コト。

などとあったばあい、文末詞即特定文末部の、叙述構造収約の機能に、じっさいの、力の大小があったりするものだろうか。そのようなことはないと考えられる。収約の機能の多元論的な解釈は、無用とされる。文末での、特定文末部の孤立する度あいに、じっさいの大小がないとは言えないかもしれない。(「転成文末詞」のばあいなどを考慮すれば、なおさらのことである。)「コト」は、「ネー」よりも、孤立性が小かもしれない。もし、孤立性がより大であれば、収約機能も、より大であるかに思考されなくもないが、それはおそらく、見た目に映ずる顕著さとも言うものであろう。すでに、文末詞として認定しうるものが文末にはたらく以上は、本質的には、機能の大小を、私どもはとらえ得ないはずである。

文末詞即特定文末部の叙述構造収約機能の理解のために、ここに、あえて、文中にはたらく諸助詞の表現機能との比較にしたがってみる。文中の助詞、たとえば格助詞や接続助詞は、それぞれに、文表現上、それぞれなりの局所的な地位にたつ。

○コレガ　……………。

とあったばあい、文中助詞である格助詞「ガ」は、ただに「コレ」に付属し、

文の一部内で辭としてはたらくばかりであり、それゆえ、これが、文表現の全体に大局的にかかわっていくことなどは、あり得ない。

○ソリヤ ソーダケド、…………。

の「ケド」のばあいにしても、「ケド」は、「ソリヤ ソーダ」を一句として統轄し得はしても、文表現の流れ（叙述構造）全体を最終的に統轄することはできない。

ところで、

○オレワ イヤダ ゾ。

となると、「ゾ」は、「オレワ イヤダ」の外にたっており、「ゾ」は“文につく。”と言いあらわすことができる。「ゾ」を「ヨ」にしてみてもよい。「ナー」にかえてみてもよい。文末詞と言うべきもの一つのたちはたらきで、文は、それぞれの姿の独自の表現になる。文末詞即文末特定話部の、叙述構造収約の機能が明白であろう。対話の通常文では、文の表現は、文末部にはたらく文末話部を、最後の契機として成立する。文末詞は、文表現の主導者になる。このような主導の機能、収約の機能を、平易に、「しめくくりのはたらき」と言ってもよからう。その、しめくくりのおこなわれる時、特定文末部が、そこまでの文表現のうねり・ゆれを、大きくゆり定める。——文末詞のところで、一ゆり大きくゆれ、そのゆれとともに、それまでの文の流れのゆれが静まる。「しめくくり」は、「ゆり定め」である。文末詞ごとに、そのゆり定めかたがちがう。複合形の文末詞、たとえば、「ワイヤー」「カイナー」「ゾナモン」などとなれば、そのゆり定めかたには、重層的・多層的な発展効果が認められる。

このような「ゆり定め」が、文表現を文表現として、文字どおり個別化していくものである。（これをこそ、真のパロール化と言うことができる。）ものが文末に位置をしめるということは、けっして平凡なことではない。文末という地位は、まったく重要な地位である。

ここで、叙述・陳述の語にふれておきたい。文表現上での文末詞即特定文末部もまた、叙述の一分子にほかならない。文表現は（じつは、文表現体は、と

言うべきであろう。)、それ全体が叙述体である。文表現の構造のうゑに認められるものは、みな、叙述の分子と考えられる。文末詞の文表現上での役わりを、‘伝達の効果’をささえるにあるとする見かたがあつたとしても、私は、その伝達の効果を産むことを、なお叙述と考えたい。したがつて、伝達の効果を産む分子を、叙述体の外におくことはしない。

陳述とは、文の叙述を、最終的に相手になげかけていくこと自体だとしてたい。伝達の効果ということからすれば、その効果の産みかた、産みぐあいが陳述だとしてたい。文表現の、じっさいの訴えぶり・効果づけが陳述である。対人的な「文のはたらき」の實質そのものを産むことが、陳述の實質だとされる。「知らないよ。」との言いかたがあるとするれば、「よ」までの言いかたは、まず一連の叙述構造である。(「よ」までが、一体の叙述構造体である。)これを、表現の現場で、——現実の表現欲求のままに、

○シラナイ ヨ。

と言ひ、また、

○シラナイ ヨ。

と言ひ、また、

○シラナイ ヨー。

と言う。おのおのごとに、表現の現場効果がちがう。対人的な「文のはたらき」の實質がちがう。その一々ちがうごとに、そこに表現の陳述があると見たい。すなわち、もっとも純粋な意味でのパロール化(表現活動の現場化)が、陳述である。文表現ごとに個別的な、それこそ一回そのものの表現の「現場作用」が陳述である。——文表現の「現場化の現場化」が陳述だとされる。

音声言語のばあいには、陳述が音声化されるけれども、文字言語のばあいには、陳述が、無表記のままで表明されよう。このばあい、陳述を表記するためには、有形の叙述表記に、なんらかの陳述符号を用いなくてはならない。(いわゆるゼロ記号を用いることなども、陳述表記の一方法とされようか。)方言での口ことばでは、文表現が、文末の声調によって最終的に個別化される。その個別

化の音声形ごとに、個々の陳述が認められる。

以上、私は、陳述の位置と様相との見だしにくさと、陳述が明晰に弁別せられるべきことを明らかにし得たであろうか。陳述は、叙述を見かえしたところに、文表現極致の作用として認められるものであるとも言ってよいと思う。

文末詞は、叙述構造収約の叙述をする。その叙述の完了する瞬間、一文の表現は、一転して対他の陳述体となる。

#### 第四節 文の待遇表現の流れの収約

以上のような、「叙述即叙述構造」収約の機能者が、内容的にも、心情をのみ訴えるのにとどまるものではないことは、明らかであろう。さきに、第一章の第二節で、「知的要素と情的要素とのおのずから渾然一体となったものを全的に相手に訴えかける。」と述べたことを想起したい。その、全的な渾融体の中心流をなすものは、じつに、待遇意識であろうと思われる。対話のセンテンスは、その内実注目すれば、けっきょく、待遇意識の展開単位と見ることができる。さきの「文表現特定化」（本章第二節）は、文が早くも待遇表現文になるということでもあった。

すべての対話センテンスは、待遇表現文と解される。（——というように、文表現の内実では、中心流の待遇意識が充溢している。）文中の個々の部分は、みな待遇表現に関与するものである。かくして、文末の部分、特定文末部——品詞上では文末詞とされるもの——が、文の待遇表現法展開上の最後の頂点にたつ。

以上の趣旨にそえば、文表現には、そのおのおのごとに、文表現全局での、もっとも集約的な文末待遇表現法があるとされる。

待遇表現は、待遇敬卑の表現にほかならない。文表現ごとに特定化されるその文表現は、待遇敬卑上の表現になる。文末の特定者は、おのずから文の待遇敬卑上の表現に深くかかわるものである。文末詞からなる特定文

末部は、文表現の末尾にあって、待遇敬卑の表現に決着をつける。

待遇敬卑の表現に決着をつける機能者は、本質的に言って（ものの内面から考えて）、待遇意識の展開を頂点的に収約するものと言える。

上来、しばしば、私は、文末詞の文表現上の機能を概括的に「訴え」とも「よびかけ」とも言いあらわした。その、訴え・よびかけの中核をなすものが、今は、待遇敬卑の効果だと考えてよい。約言すれば、文末詞の、特定文末部としての活動に、常住の待遇機能が認められるとも言える。（——「待遇機能」とされるべきものが、ただの感情や心情ではないことは、じつに明らかであろう。）

以下、いくつかの実例について、待遇機能の実相を見ていく。

○オ<sup>ー</sup>サンモ イ<sup>ッ</sup>ショニ イ<sup>ラ</sup>ッシャルンデショ<sup>ー</sup>ネ<sup>ー</sup>。

（若い相手に念をおす。）

「オ<sup>ー</sup>サンモ」と言っている。最後には、「ナ」「ノ」「ネ」などの、どんなものにおちつくか。「イ<sup>ラ</sup>ッシャル」とされたので、もはや「<sup>ー</sup>」とはしにくい。「ナ」と「ネ」との微妙なちがいが、話者に、反射的に考慮されたであろう。話者は、「<sup>ー</sup>」を採った。——「ネ」の特定文末部としての待遇機能の尊敬性がかえりみられている。上の文表現では、この文特定の待遇表現が、「<sup>ー</sup>」で、ほどよく最後の頂点的に収約されていると見られる。

つぎは、奥羽北部での、下の二文である。

○コ<sup>ツ</sup>ァ キ [kçi] へ [e] ジャ。

○コ<sup>ツ</sup>ァ キ [kçi] へ [e] デァ。

これらは、「こちらへ来なさい。」というものである。それでいて、両者では、むすびの「ジャ」となっているほうが、よりよい言いかたの文表現なのだという。「キへ」は「来なさい」にあたり、そこまでは二文同様である。しかし、最後の文末詞の出しかたによって、文表現は、二途にわかたれる。つまり、両者は、待遇表現文として、甲乙別途のものになっているのである。上文例の「ジャ」「デァ」おのおのは、それぞれの文末にあって、その文の待遇表現を、独

自特定の効果のものに収約・収束している。

そういえば、さきの「ネ」にしても、たとえば薩摩半島南部内その他では、これが最後にくると、その文表現は、低卑の待遇表現の文に収約される。まことに、文末詞の、特定文末部としての待遇機能は、方言ごとに、こまかく見さだめられるべきものである。

つぎに讃岐方言の例を見る。

○ドヨイ イッキョン ヤー。

○ドヨイ イッキョン ナー。

○ドヨイ イッキョン デー。

これらは、相手がどこへ行きつつあるかを問うものである。第一文は、同輩以下またはしたい相手へのものであり、第二文は、ややよい表現、第三文は、第二文に似たりよったりのものである。——もっとも、ときには、第三文のほうが第二文よりも、よりやわらかい、やさしいものにもなる。末尾の「ヤー」「ナー」「デー」にくるまでは、三者同様であるが、いよいよ最後の文末詞表現（の特定文末部）になると、おのおのは、さっと色づけられ、おのおの、独自特定の待遇表現文になる。——これほどに、文末詞の、特定文末部としての待遇機能、文待遇表現法を収約する機能は大である。——全的な作用が明白である。

讃岐地方には、総じて、尊敬の気持ちをあらわすための助動詞がすくない。かとおもうと、そこに、有効な文末詞が、ほどよく発達している。つまり、文末待遇表現法の要素が適当に発達している。こうした事実、全国の諸方言に多く認められるものである。助動詞による尊敬表現法（——比較的複雑な形態になるのがつねである。）の存立と、文末詞による文末待遇表現法（——文は比較的簡潔なものになりがちである。）の存立とは、相補・相関の関係にあるものと見られるであろう。

つぎには、薩摩半島の一例について、特定文末部の待遇機能を見る。

○ハヨ イッキャイ ヲー。

早くお行きなさいな。

文末に「ヲー」がつくと、表現全体が、ぐんと、よい言いかたになる。わずか「ヲー」だけのことであるけれども、これがじつに重要な因子なのである。私は、むかし、はじめてこの地方に来た時、「ヲー」を聞いて、じつは、そのふしぎな作用力を、じゅうぶんにはのみこむことができなかつた。が、のちのたび、薩南、開聞岳の近くで、私が開聞岳の鳥居を指さして、一老翁に、“あれはなんというお宮で？”とたずねたのに対して、老翁が、

○ヒラキキジンジャ　ヲー。

ひらきき神社ですよ。

と答えてくれたので、「ヲー」のすべてがわかったように思えた。文末特定要素「ヲー」の、文表現全局を左右する待遇機能は、この短直な事例によって、じゅうぶん<sup>に</sup>領得することができたのである。

私の年来の方言調査の旅は、かえりみれば、一面、文末特定要素（文末詞）の大きい機能を見とらえていく旅でもあった。方言の世界にひたればひたるほど、——その経験を重ねれば重ねるほど、方言「文表現」での文末特定要素（文末詞）の待遇表現収約力が、よくよく理解されてきたのである。

文末詞に複合形のもののあることは、くりかえして述べてきたとおりである。この種のもの<sup>の</sup>ばあいでは、複合分子の後接者のほうが、待遇機能上、とかく優位にたつ。複合要素のかれこれに、次元論的相違があるわけではないけれども、要するに、複合は複合にちがいない。一体化が認められるとはいへ、そこには、やや複雑な一体相があつて、そのゆえに、待遇機能発揮のうえでも、複合分子に即した活動様態が認められるわけである。

複合形文末詞の例を、中国山陽地方に見るならば、

○アッタ　ワイヤー。

あつたよ。

というような文がある。「ワイヤー」という特定文末部（←文末詞）が認められる。このような時、複合の後接分子「ヤー」のほうに、より最後の・頂点的な待遇機能の収約が認められるとされる。

九州東北部での、

○ソー カー。

そうかい。

などの「カー」についても、私どもは、「ヤー」がより収約的な待遇機能を発揮していると見ることができる。

一般に、複合形文末詞のはたらきでは、その後接分子が、文待遇表現についての、文字どおり決定的な収約力を示すと言える。このことは、私とともに文末詞の研究につとめている多くの人たちも、実証するところである。

文末詞の、特定文末部としての待遇機能に関しては、近来、諸家も多くこれを説くようになった。“終助詞による敬意の表し方”というような言いかたが多くなされるようになってきている。近畿地方の方言に関しては、西宮一民氏・村内英一氏・巖佐正三氏・井之口有一氏などのご発表がある。また、楳垣実氏も、『和歌山方言』1（昭和29年10月）の「紀州ことば(1)」の中で、

田舎での敬意の表し方は、極めて控え目で、それだけ親愛の情のこまやかなものであり、都会のように助動詞などという大層な言葉を持ち出さなくとも、十分に助詞だけで間に合ったと考えられる。

と述べていられる。ついでながら、古典研究者のがわにも、たとえば、穂田定樹氏「源氏物語の文末助詞の待遇性」(『親和国文』第1号 昭和44年3月)などのご発表がある。山崎久之氏のご労作については、多く言うまでもない。

九州では、早く、上村孝二氏が、

総じて敬讓法は旧土族部落ではわりによく保存されているが、平民部落では敬語法が少い、終助詞などで辛うじて尊卑の区別がある位のもので、と論じられた。(『鹿児島県下の表現語法覚書』『文科報告』第三号) 東北で、佐藤喜代治氏は、

終助詞は福島県下の方言の丁寧表現のうち、最も単純な、又基本的な文法形態を有し、実際の使用度数も多い。

と述べていられる。(「福島県方言の敬語法」『文化』第二十二卷第四号) 諸家が、ただに、終助詞、助詞と述べていられるのは、以上のとおりである。瀬戸口俊治氏は、かつて、薩摩東南部の方言について、

当方言人は、その気持を文末部に表現していると思われる。本来なら述部に示される筈の敬語が除かれて、その働きまで文末部にゆだねる形になっている。

と述べられた。(昭和35年1月)

言われている“終助詞”は、文表現の待遇価を収約して、ただちに対人関係を特定のとりむすぶ。この待遇機能は、だれにも領得されやすいものである。‘対人関係を構成する助詞・助動詞’というような考えのもとでは、文末詞は、だれにも、ただちにとりあげられるべきものであろう。

土地っ子、方言人自身が、文末詞の特定文末部としての独特の待遇機能に気づいていることも、すくなくない。たとえば、和歌山県下では、人が、文末詞の「ノシ」を、“特によいことば”としている。

私どもがいわゆる敬語法を問題にするさい、その見かたを展開させて、文末詞の表現をも必然の対象とすべきことは、今や論を要しない事実とされよう。

(私自身の研究過程も、思えば、いわゆる敬語法の研究に出発して、道をそのまま、文末詞研究にあゆみ進んでいる。) 文末詞——文表現にあっては特定文末部——は、待遇表現法研究上の、独特の重点としてとらえるべきものと考えられる。

この文末詞に関しては、そのはたらきを、文末詞に即して「文末詞法」と言うこともゆるされると思う。(すでに私は、この術語を用いてきた。) 文末詞法は、文待遇表現(敬卑表現)上の特定文末部の活動・機能について認められる「文末法」を言うものにほかならない。私どもは、この文末法(文末詞法)を正当にとらえて、方言待遇表現の世界を、もっとも純粋に記述したいものである。

私は、方言の純粹記述を念として、いよいよ文末詞法の記述を重視するようになった。

一般には、記述上、文末詞への注意が、いまだよわい。なぜであろうか。概観するのには、記述はなお一般に単語論的である。文論におよんだとしても、それは、ほとんど単語論の次元においてである。語句をとらえても、それは、単語の延長としてである。センテンス本位の記述、表現記述は、いまだ、さほどには発達していない。センテンスの躍動のままをとらえることがないのに応じて、文の末の重要素——文末詞——をとらえることも、よわいままになっている。

方言生活の現象を、文表現本位（センテンス本位）にとらえることの着実な実践が、よく、文末詞法（文末法）の認識と記述とを、盛大ならしめるであろう。

待遇表現の文末法に役だつ文末詞は、その機能価値に応じて、品等わけすることができる。

分類に関しては、その一般的な考察をすでにかかっている。（p.43）

もろもろの文末詞は、その「品位」（という総合的な観念）によって、分別することができる。この分別・分類は、文末詞の体系的記述のために重要である。——（この分類は、文末詞の機能論的研究の一結論として位置づけられるものでもある。）

品等を上・中・下、敬・常・卑の三階に見わけるとは、比較的容易であろう。年層や性別、あるいは教養度をも顧慮しつつ、品等わけのこまかな分類に到達することは、かならずしも容易でない。待遇品位に関する、総括的見地での、合理的な分類に到達することがのぞまれる。

ここで、文末詞分類に関する一所見を述べてみたい。

現代共通語の文末詞に着目しての分類論が、いくらか公表されている。しかし、上に述べたような見地での分類を思う私からすると、共通語文末詞に関する分類論は、かならずしも深刻なものとは言われない。なにぶんにも、共通語文末詞界は、方言文末詞界からすると、はなはだしく、事象が単純である。共通語界では規則的にかに見られることがらも、方言界では、歴大な不規則的事実（にわかには規則を求めかねるという意味で）であることがすくなくない。共

共通語界での例外的事実も、方言界では、そうでないこともある。私は、しばしば、方言界の文末詞事象をはなれて共通語界の文末詞事象をとりあげることの、日本語現代語研究としての意義の狭小を思わせられる。

なんといっても、現代日本語での事態そのものを根本的に明らかにすることが、現代語研究の基本ではないか。文末詞研究のばあいにしても、当然そのように考えられる。

文末詞（終助詞）相互の承接に関する論のばあいも、方言界での文末詞相互承接——複合文末詞——の多量多彩に比較すれば、共通語文末詞での相互承接は、まさに九牛の一毛である。できることならば、方言界での多様多彩に目を向けつつ、共通語界での様相を的確に分析し把握するようにしたいものである。

他方、方言研究のがわから言えば、共通語文末詞に関する所論にみちびかれて、方言文末詞処理、たとえば分類法を、なおよく推進しうることは、言うまでもない。

## 第五章 「文末詞」化

### 第一節 「文末詞」化の一般的可能性

日本語の「文」表現では、最後の要素が、みな必然的にそれ相当の文表現収約の機能をにやう。このため、文末にくる要素は、なににもせよ、一般に、「文末詞」相当のものになっていきがちである。ここに、「文末詞」化の一般的な可能性が認められる。

現代英語の構文のようだと、その文末部分の「文末詞」化などは、ありようがなかろう。日本語では、文構造上、その特異性のもとに、「文末詞」化が自由におこりうる。たとえば、

○オラ シラネーダ。

おれは知らないよ。

という言いかたがあったとするか。「ダ」はもともと、文末につく成分である。(「ソリャ ソーダ。」などのように。)そこで、上のように、「シラネー」にも下接する。——「知らない」ことを「ダ」とさし示す。「ダ」は、文表現の収約者としての機能を発揮する。そういう「ダ」のついた、「オラ シラネーダ。」式の言いかたが熟用されるうちに、人はいつしか末尾の「ダ」を、特定のものとして受けとるようにもなる。遊離の成分とも感じるようになる。発言する時にも、しぜんに、ここへ特別の調子をつけたりもする。かくして「ダ」は、文末特定の成分とされていく。ここで、「ダ」が「文末詞」化する。

またの例を見よう。

○ドコエ イクンダ。

どこへ行くんだい。

という文表現があったとする。最後部の要素「ダ」の文末詞相当性は、前述の

とおりである。この「ダ」のところ、中国地方内などでは、「ナラ」になっている。

○ド<sup>ー</sup>コイ イ<sup>ー</sup>クンナラ。

どこへ行くんだい。

「ナラ」は、文法論上では、「ダ」の仮定形とされているが、中国地方の、「ジャ」助動詞のおこなわれている所でも、仮定形「ナラ」がおこなわれている。そうして、「どこへ 行くんだい。」の表現のばあいには、「ド<sup>ー</sup>コイ イ<sup>ー</sup>クンジャ。」などとは言わないで、もっぱら、「ド<sup>ー</sup>コイ イ<sup>ー</sup>クンナラ。」と言っている。が、この「ナラ」が、「ダ」どめのばあい同様、文表現収約の機能を発揮しており、しかもこれが、文表現上、早くも文末特定要素ふうの、訴えの効果を発揮するものになろうとしている。こういう「ナラ」は、「文末詞」化の道をいそぐ「ナラ」である。

安芸方言などでは、上の「ナラ」のところ、<sup>レ</sup>「ナリヤー」ともある。（「ナレば」からのものか。）

○ド<sup>ー</sup>コイ イ<sup>ー</sup>クンナリヤー。

どこへ行くんだい。

などと言っている。この「ナリヤー」が「ナリヤ」文末詞を認めしめるにいたっている。「文末詞」化である。

おなじく安芸地方に、つぎの言いかたがある。

○ド<sup>ー</sup>コイ イ<sup>ー</sup>キンサリヤー。

どこへ行きなさる？

このばあい、「<sup>レ</sup>キンサリヤー」は、「イキ」に直属して、前後密接な関係のもとの助動詞である。——容易に切りはなすべくもないものである。そうではあるが、方言界では、人々は、「ド<sup>ー</sup>コイ イ<sup>ー</sup>クンナリヤー。」と「ド<sup>ー</sup>コイ イ<sup>ー</sup>キンサリヤー。」とを思いよせやすく、したがって、問いことばでのむすびの「ナリヤー」と「サリヤー」とを対比・集合しがちでもあるというところから、人々は、しぜん、「ド<sup>ー</sup>コイ イ<sup>ー</sup>キンサリヤー。」の「サリヤー」にも、つよく文末

特定の訴え効果を自覚しがちである。ここには、すなわち、日本語の「文」構造の最後部にたつ要素の、文末詞相当性が明らかであろう。上の「サリヤー」は、にわかには「文末詞」化を認めしめないものであるけれども、それが、「文末詞」化の契機をはらんだものであることも、また明らかであろう。

文末にくる要素の「文末詞」化の一般的な可能性が認められる。

## 第二節 感 声 化

「文末詞」化がおこると、当のものは、多少とも感声みをおびてくる。ものが多少とも感声化する。感声化の方向にたたなくては、ものが文末詞として安定することができないわけである。

文末詞は、實際上、文的性格を持つ、と、さきに述べた。文的性格を認めうる文末詞は、すなわち、感声みをおびた文末詞である。文的性格と「感声」条件とは、必然的に関連するものであろう。

さて、そのような文的性格を持つものゆえ、——つまり、文表現相当のものゆえ、文末詞の造出は、自由自在なのでもあろう。——「文末詞」化の可能性が、一般的なのであろう。

## 第三節 文中の「『文』の部分」収約要素の「文末詞」化

対話「文表現」の、途中でのくぎりめは、文末尾のくぎり（終止）に似たものである。——じっさい、そういう文途中のくぎりめが（話部末が）文末にもなっている。たとえば、「オマエワどうどう。」という文表現での「オマエワ」が、「オマエワ。」（おまえは！）のように独立の文にもなっている。すなわち、さきの文途中のくぎりめが、今は、文表現のくぎりめになっている。文途中のくぎりめ（話部末）は、総じて、「文末尾」化の契機をはらんでいる。このため、文途中のくぎりめにはたらく助詞は、一般に、文末収約特定要素化す

なわち「文末詞」化の契機をはらんでいるとも見られる。話部末にあるものは、しばしば「文末詞」化する。

例を北九州弁に見よう。このほうで、

○……………コソは ……………。

のような言いかたがあったと見られる。——「コソは」で一話部がまとめられている。このまとまりのところに、発音上の小休止がある。（物理的な時間の休止がないばあいにも、たしかに心理的の休止がある。——自分が発言する時、心では、たしかに小休止をおく。人の発言を聞く時も、また、ここで小休止を感得する。）この「……………コソは」が、これだけで言いさしの表現にも用いられた。「……………コソは。」が「……………クサ。」となまられる。「……………クサ。」の形が、一個の表現体とされ、つまり、これをもって話しことばの言いかけとされるうちに、新文末の「クサ」は、(元来は話部末であるけれども)、いよいよ文末者一般の収約機能の特定化をまっとうして、「文末詞」化した。——つまり、文途中のくぎりめの助詞が、「文末詞」化したのである。「クサ」は自由に「アソクサ。」(あのね。)などとかかわれるにいたっている。「クサ」は、もはや、一個の文末詞のはたらきを見せている。

つぎの例、

○バカ ガー。 パカタレ ガー。

は、肥前平戸口で聞いた、少年の発言である。少年が、より小さい男の子に向かって、「ばかが！」と叱っていた。ここの二文それぞれの「ガー」も、もはや文末詞相当のものになっていると見られる。——上例で、「ガー」はまさに、文末特定の訴え要素としての機能を發揮している。

文中の話部末には、文末化の契機があり、そういう話部末の特定要素は、通常の文末要素のばあい同様、みな「文末詞」化の可能性を見せている。文中の話部末の文末化が、とくに興味ぶかく観察されるのは、越前中心に聞かれるあの独特の抑揚においてである。越前弁では、たとえば、電話口で、

○ソレデー、アノオー、ウラアー、キノオー、ガッコーエー、イタラー、…

……。

それで、あの、わしは、きのう、学校へ行ったら、…………。

のように言う。(——類似の傾向が、つづいて、若狭・丹後半島突端部にも見られる。) 一話部ごとに休止が大きく、各話部末は長呼されている。——「ツレデー」のように。アクセント波の関係で、「ツレデー」での「デー」、「アノオー」での「オー」などの部分での長呼のひびきが、いかにもけざやかである。こうなると、長呼末での休止の効果も大きく、ここで文が成立するおもむきである。「アノオー。」が、完全なよびかけ文にもなっている。電話口で、土地っ子は、よくこのセンテンスを出している。) 話部末の文末化する様相が顕著であろう。このさい、「オー」などは、単語論的に言って、文末詞相当のものにさえなっているのである。上例は、各話部ごとに、話部末に、文終止のおもむきを見せており、話部末で、文末詞的なものを見せようとしている。

話部の切れめというものは、このようになっていくものだ解される。

文中話部末での、一般的な、文末化の可能性が認定されるのは、まぎれもなく文表現上でのことである。「文末化の契機」を云々しうるのは、まったく、文表現論の見地においてである。その見地で、話部末の収約要素の、特定文末部的機能が認められるわけである。じっさいに、方言人たちの表現生活で、そのような特定文末部化が累次おこなわれる時、該方言での、そのものの特定文末部の習性が生じる。となつて、その特定文末部と見られるものの背後に、私どもは、単語論上から言える新文末詞を認めうることになる。「文末詞」化が、ここで明確に言われる。

#### 第四節 「文末詞」化の経路

「文末詞」化には、いろいろの、自由経路とも言うる経路が認められる。私が日本語方言状態の観察から帰納し得ている現実の諸経路は、助詞系のもの以下、さきに p. 45 にかかげた九の経路である。

助詞系のものといえば、薩摩弁の、

○タ<sup>ー</sup>チャン ト。

お立ちなさいよ。

の「ト」のようなものである。この「ト」を、伊予の南部だと、

○ワ<sup>ー</sup>ジャ シ<sup>ー</sup>ラン ト。

わたしは知らないよ。

のようにつかう。

方言での用法差は、注目すべきものである。等しく助詞「ト」を「文末詞」化させるにしても、方言それぞれが、その内部事情にしたがって、特定の方向を見せていく。九州に広く見られる「ト」は、他人にものを聞いたり命じたりする時などに用いられている。——相手にはたらきかけて用いるようである。伊予の「ト」は、自分のことについて言う時に用いられているようである。

つぎに、助動詞系の文末詞といえば、さきにあげた「ダ」がある。(p. 63) これの山陰の例を見るなら、因幡方言下の例に、

○モ<sup>ー</sup>ドリ ョーリマス <sup>↑</sup>ダガ。

帰ってきてますのよ。

がある。「ゲナ」もまた、「文末詞」化している。岡野信子氏の聞き得た、北九州弁の中の例は、

○ミ<sup>ー</sup>ゴトラス <sup>↑</sup>ゲナ。

みごとだそうですよ。

というのである。(昭和46年7月のご教示による。)「ミ<sup>ー</sup>ゴトラス」の「ラス」は「ダス」かという。そのような「です」的なもので言い収められたうえて、さらに「ゲナ」と言われている。「ゲナ」は、文末詞のはたらき相当のはたらきを示すものになっていよう。

大橋勝男氏の調査によるのに、東京都下の新島では、

○ウン<sup>ー</sup>ダ ジャ。(“産んだ。”)

○ヒャク<sup>ー</sup>シヨ シ<sup>ー</sup>テモ <sup>↑</sup>ハタラキキレネー ジャ。

などと言っている。また、八丈島八丈町大賀郷では、

○コガ<sup>ン</sup> イキタロ ジャ。

“こんなに生きてますじゃ。”

○ウツタ ジャ。

“売りました。”

○ソーダ ジャ。

“そうだよ。(「ジャ」は「よ」の意)”

などと言っている。——(上の“共通語訳は、土地の中年女子が訳して下さったもの”と、大橋氏は言われる。)この種の「ジャ」は、助動詞系のもとしうるものなのかどうか。外形上、まったく同様に「ジャ」の形を見せ、しかもこれが文末詞然としているものなら、東北津軽から伊豆諸島までに、これを見いだすことができる。ちなみに、国学院大学の野村純一氏のご教示によれば、相模原市域内の二・三の老女たちが、関東人でありながら、返事に、

○ソージャー。

の言いかたをしているという。これはどういうことなのであろうか。

さて、動詞系の文末詞といえ、山陰弁の、

○イカ<sup>コ</sup>イ。 (「イカ」は「行かう」)

行こうよ。

の「コイ」(←「来い」)などがある。岡山県下の、

○キョ<sup>ワ</sup> オエン トミー。

きょうはどうもうまくいかないなあ。(ピンポンをしていて、うまく打てない時など)

などに見られる「トミー」は、「と見い」からきたものであろうが、今は完全に「文末詞」化している。——文末詞としての「トミー」という単語を認定しうるまでになっている。

(「トモイ」「トモインサイ」「トモイナハイ」などもある。広島山口の両県や島根県下に分布している。)

「トミー」にせよ「トモイナハイ」にせよ、形がこのように特定化してしまうと、このものの、文表現での機能発揮が、まったくはっきりと、原生文末詞のばあい同様のいきおいになる。

つぎに代名詞系の文末詞といえば、山口弁の、

○アッチ イテ カク ソ。

あっちへ行って描くのよ。 (おや→おさな子)

○コッチ オリテ クル ソ。

こっちへおりておいで。

というような「ソ」がある。「ソ」はもと「それ」であるらしく、この「ソ」が、「の」相当の準体助詞としてもよくつかわれている。「ジューク = ナッタ ソガ オリマス。」(十九歳になったのがおります。)など。こういう用法が一方にあって、他方に、「ソ」を文末につかう用法が慣熟しているのである。「それ」が「ソ」となるとは、形の上の変化も大きく、「ソ」は、完全に「文末詞」化している。

東京語などの、

○ヤメル ノ。 (制止)

などの「ノ」も、文末詞ととられるものであるが、これは、もともと助詞の「の」であろう。「ソ」は、この「ノ」に比照しうるものでもある。

つぎに、名詞系の文末詞といえば、「コト」や「モノ」がある。——名詞の「こと」や「もの」が「文末詞」化している。越前地方の、

○ソヤ トコト。

そうだってば。

などという「トコト」は、「コト」をふくむものだろうか、どうだろうか。東京弁の「まあ、おみごとです コト。」は、「コト」文末詞を認めしめる事例とされよう。

つぎに副詞系の文末詞といえば、「はや」(「早や、もう」などの意)の「ハー」、その他がある。東北地方の「ネハ」文末詞では、その「ハ」が「ネ」と

いっしょになっているのが認められる。「ネハ」は、これで、渾然とした一体の文末詞である。

つぎに、感動詞系(=文系)の文末詞といえば、「ホラ」, その転の「ハラ」などがある。

○アユ ミデ ミヤイ ハラー。

あれを見ておみなさいな。

は、九州、薩摩半島南部の「ハラ」例である。「ソラ」も「文末詞」化している。これの、文末についているのが、しばしば、「ソーロー」ことばに誤解されたりもしている。

「文末詞」化の経路は多様である。

この経路のとりかたに、地域的・方言的な相違がある。たとえば、中部地方には、「ダ」助動詞の「文末詞」化がかなりいちじるしくても、四国地方には、助動詞の「文末詞」化がほとんど見られない。四国地方では「ナモン」類の文末詞があって、感動詞系(文系)の「文末詞」化経路のとられたことが認められるが、中国地方にはこの種のことがない。

さて、同一経路が甲乙両方言でとられていても、できた文末詞の用法になると、これにまた地方的相違が見られることは、すでにふれたとおりである。(九州の「ト」, 伊予の「ト」 P.68)

要するに、「文末詞」化の成立には、地方的相違が認められる。さらに言えば——地域的相違が顕著である。原生的な文末詞の「ナ」「ノ」「ネ」のばあいにしても、その存立に地方的相違の大きいことは、すでに人のよく知るところであろう。総じて、文末詞なるものの存立と活動とには、地方的相違・地域的特殊性の、言うべきものが多い。これは、考えてみれば、当然のことにも思われる。文表現を他に訴えかけようとして、最後の収約的によびかけることばが、文末詞とされるものなのである。よびかけことばを用いるのは、まったく場面的なことであり、特定の事・所・位に即応したことであり、発言者その人の、そのばあいの心意・心情に即応したことである。人はみな、方言人として、

それぞれの地域社会に居住する。人々の方言生活は、平常、おのずから地域的である。それゆえ、人はだれしも、地域的でしかも個別的な訴えかけをする。文表現をなげかけていく生活での文末差は、発展する一方である。「文末詞」化の事実も、いよいよ地域的方言的なものとなりうる。

## 第五節 文末詞の転成新生

他のものの「文末詞」化は、日本語での、特筆すべき現象である。

日本語は、本来、文末詞的なものをかぎりもなく設けていこうとする性能を具有している。このため、「文末詞」化はかぎりもないほどであり、多くの文末詞が産みだされている。が、それは、大部分、単純新生ではなくて、転成としうる新生である。

転成の事実の中には、いくたの省略形態が認められる。形態の省略によって、機能の大きな変動がひきおこされ、そこで、新文末詞が安定する。

日本語は、文末詞の転成あるいは新生をもって、不断に、文末詞体系の流動・発展を見せつつあると言えよう。この流動・発展が、ひいては、日本語そのものの体系的発展にかかわっていく。

## 第六章 文末詞の記述

### 第一節 文末詞記述の独創性

上説するところの文末詞の実際記述にあたって、独創性が要求されることは、言うまでもなからう。文末詞全般が、上述のような特質的なもの——日本語におよそ独自のもの——だからである。

外国の言語理論を適用しつつ、わが文末詞記述を遂行していこうとすることは、しようとしても不可能なことであろう。外国の言語理論をここに投射しつつ、わが文末詞の意味と活動を精叙するのにつとめることは、はなはだ有意義である。

さいわい、私どもは、ここに、文末詞という特質分子を得て、言語に関する一般言語学的な理論開拓にしたがうことができる。

### 第二節 文末詞記述の次元

文末詞記述は、主として文表現論のたちばで実践されるべきものである。単語論的処理としては、文末詞の分類があるが、これももとより、文末詞の、文表現現場での機能にかえりみねばならないことである。文末詞の存立と活動とを問題にするしごとの全体は、一般に、文表現論的なものたらざるを得ない。

さきにもふれたが、旧来は、文表現論の不活発、現象を文表現(センテンス)本位にとらえることのよわさ・無さのために、文末詞への注意がよわかった。そこでは、文末詞の重要性は、徹底的には、わかりようがなかったのである。したがって、文末詞記述の本格的作業、文表現論的作業は、おこりようもなかった。文表現に着目し、その視座で、文末の特定要素——〈文末詞〉——をと

らえる時、私どもは、じっさい、文末詞の重要性と、文末詞研究の重要性とを体験することができ、したがって、文末詞記述の文表現論的作業の実現に努力するようになる。（——文末詞研究は、言語研究での、文表現論の重要性を認識させてくれるものであるとも言える。）

文表現論的な作業の重要性を、厳格に認識することは、言語研究での次元観の重要性の明確な識得を意味するものである。

### 第三節 文末詞記述の内的言語学

言語の学問を大きくわけて、‘外的言語学’と‘内的言語学’とにするか。文末詞の研究も、外的にこれをおこなっていくことの領域が広い。と同時に、内的にこれをおこなっていくべき必要が、当然、大きいとしなくてはならない。文の末の特定詞は、文表現の心の結集するところだからである。

この、文表現の中核、表現心意昂揚の局所を、えぐるがごとくにほりさげていく内面的研究は、今後、いくえにも開拓されなくてはならないものである。

開拓は、かんたんな事例から出発してもよい。卑近例であるが、中国地方の一家庭での幼児が、四国路から来た客の、文末詞「ナー」を連発する話しことばを聞いて、いかにもふしぎそうな顔をする。客の帰ったあと、幼児は、ほかならぬその「ナー」文末詞を、しきりにつかってみる。問いにも返事にも、好んで、と言いたいくらいに「ナー」をつけそえる。こういう事實は、まず、文末詞による私どもの生活の、広さ・奥ふかさを、よく私どもに認識させよう。——この広さについて、奥ふかさについて、私どもは、理と情とをきわめることに努力しなくてはならない。言語能力のまだよわい、おさない者が、人の会話に注意するとなると、重点的には、特定文末話部（→文末詞）をとらえる事實を、私どもは、人の発言の様態の特色の、きわめて鋭角的な受けとりかたとして正視すべきでもあろう。

言語の内部・内面をたずねていくとなれば、いよいよ、要素論的なきかた

などにとどまることはできない。つねに、要素々々の生きている「全体像というもの」への注目が必須とされる。こうして、内的言語学の記述は、最低最小単位として、文表現体を取りあげていくことになる。文表現の世界という次元の認識の重要性が、ここに明らかであろう。

#### 第四節 記述体系の二方向

内的言語学・外的言語学の理念による文末詞記述に、記述作業の二方向が識別される。

一つは、一つの方言——という体系的存在について、そこに存在するすべての文末詞を、総合的にとりあげていく方向である。いま一つは、一々の文末詞ごとに、これを、よこ広く、多方言にわたって見ていく記述方向である。——これは、最大限にしごとをひろげれば、日本語の全方言状態、日本語方言共時態を対象とするところに行く。

第一の方向のいきかたには、一方言の諸文末詞の相互関係を、したがって、諸文末詞の相関的な活動の全相を、活写しうる長所がある。一つの方言、伊予の今治市近在の一方言について、諸文末詞の体系的存在の記述にしたがうとするか。この方言では、文末詞「ナ」が、もっとも重要な地位をしめる。「ノ」は、さほどには用いられない。「ネ」もおこなわれない。ところで、当方言に、古くから「ネヤ」がある。これは、おもに男の人に用いられており、ややくだけた気分の表現に役だてられている。ナ行音文末詞の範囲に限って見ても、当方言に、「ナ」と「ネヤ」とのふしぎなむすびつきがある。「ナ」を論じるさい、「ネヤ」の用法に注目することが有意義である。両者の相関に着目する時、「ナ」の用法も（したがって「ネヤ」の用法も）、味わいふかく精叙することができる。

伊予の、内海の岩城島の一方言では、ナ行音文末詞としては、通常、「ノ」がつかわれており、「ナ」はつかわれていない。「ネ」もつかわれていない。

が、ここに、古くから「ネヤ」がおこなわれている。老女などにも、「ネヤ」がよくつかわれている。(若い女性たちのことばではなかったようである。)——あまり品のよいことばではないありさまである。ともあれ、ここにまた、「ノ」と「ネヤ」との、ふしぎなつれあい関係がある。多くの文末詞の中のことではあるけれども、ここには、「ノ」と「ネヤ」との体系的存在が明らかであり、体系的存在の、方言生活者たちに生きる様相が明らかである。当方言での両者の活動ぶりは、二者を精細に見あわせることによってはじめて、微細にえがきつくすことができる。

どこの方言にもせよ、東・西、いずれの方言にもせよ、その方言下では、諸種の文末詞が、当該方言の特殊の事情のもとで、共存し共栄している。一々の文末詞の生存と活動とは、その共存共栄の中で、注意ぶかく見とられなくてはならない。

第二の方向のいきかた、よこに事象を見ひろげていくいきかたには、事象間の相関状況を叙述しかねる難がある。しかし、当該事象の、広域にあっての盛衰興亡のさまは、この第二のいきかたによってはじめて、徹底的に把握することができる。展望の態度によってはじめて、文末詞の大きな活動法則をとらえることもできる。

第二の見かたのためには、どの程度にか、個々の方言存在(よこにつながりならぶ諸方言)についての、たての見かたができていなくてはならないことはもちろんである。諸多の方言のおのおのについて、文末詞群の生態論的把握がなされ、その上で、よこの統一的統合的な広い見かたがおこなわれるとなれば、これは、文末詞記述のほぼ理想的な作業としうるのではないか。——私は、このような記述方途をねらっている。(——この方向にあっても、しぜんに、ある程度までは、文末詞の事象が、複数にとりあげられてもいく。問題とする主事象に、他のものが、随伴させられもする。)

## 第五節 高次共時論

文末詞記述は、高次の共時論になっていく。

上に言う第一の方向をとる記述も、要するに、文末詞の生態、文末詞利用の生活の中に、人間存在の歴史を見ようとするものである。歴史的存在としての人間の、言語生活のいとなみ、歴史的な深みを見ようとするものである。（—それゆえ、深く深くと掘りさげる記述の実践を、私どもは、自己にきびしく要求する。）この努力は、高次の共時論への努力にほかならない。

第二の、よこに見ひろげる研究方向をとるばあいにも、これはまず、諸多の方言にわたって、ついには、日本語の全方言状態にわたって、一定の文末詞の相関的な存立事態を見ていく。——問題の事象を、よこに見ひろげていく。それはいちおう、共時論的な把握とも言うるものであるが、見ひろげられたものが、問題の文末詞の、広域にわたっての生きる状態と解される時、やがてここには、その事象の流動変移（史的推移）・盛衰が考察把握されるようになる。これは、当該事象の通時論的受けとりかたともされよう。この通時論的な受けとりかたは、さきの共時論的把握に連続する。——というよりも、彼我は一体である。事象の生態は、すでに歴史的な共時態である。事象の史的推移は、方言相のばあい、まさに、きれいに共時面に展開されている。通時態は、共時態にふくまれ、通時論は、共時論に攝せられる。

通時論を予想し内包する共時論は、すなわち、高次共時論と言われてしかるべきものである。かくして、私どもは、第二の外延的な方向をとることによって、記述の、高次共時論にしたがっていく。ここでは、問題の事象に関しての、自律的發展も云々されよう。發展の動向が論究されよう。こうした記述は、まさに、歴史的記述の名にあたいするはずである。

第二のばあいを、実践のたちばで再説してみよう。私のばあい、文末詞の事象について、広く全国にその分布を求める。諸方言での事象相互間には、しぜ

んに、系統・脈絡——系脈——がたどられる。そこで、分布は、系脈分布としてとらえられる。分布図製作は、一見、共時論的な作業のようではあるけれども、できた図は、おのずから、系脈分布を示して、すでに歴史的である。ここには、当該事象の歴史的共時態があり、いわば歴史像がある。（通時態がおのずからそこによこたわっている。通時態を含んだ共時態、歴史的共時態がそこにある。）図は、高次の共時態をものがたっている。——図からは、当然、その事象の史的推移（盛衰・隆替）が読みとられ、かつは、当該事象の、将来へのうごきも、予見することができる。

過去を問い、将来を予想することができるならば、そこには、文字どおりの歴史的把握が完成されたわけである。これは、高次共時論の実質にほかならない。

問題事象の、上述の意での総合的叙述をおこなうことができ、私どもの生活の中での文末詞が、将来、どのようにうごいていくか（どのようにあつかわれていくか）ということも考究しうるとすれば、ここには、高次共時論の有力な機動性があるとも言えよう。私どもは、高次共時論をむねとする追求態度によって、文末詞を、正しく、言語生活上の問題とすることができ、また、言語教育上の問題とすることができる。

## ○ む す び

文末詞研究は、私にとって、日本語の生態・動態を見ようとする研究作業の、一大重要項目である。

私は、もと、日本語に関する文法上の一事項として、文末詞をとらえた。が、これの研究の作業にしたがえばしたがうほど、研究は、旧の文法学のわくから出はずれるものになった。

このさい考えられたのは、文末詞研究を推進することによって、日本語の文法学を、あらたにユニークなものとしたい、ということである。

文末詞研究は、文表現論をよぶ。文表現は、文章表現（連文表現）と一体のものである。文表現論は、文章表現論を予定する。文末詞研究は、文章表現論の世界のものであるとも言える。

意味が意味としてそのはたらきを示しているのは、表現においてである。文表現論・文章表現論は、おのずから、意味論と一体である。文末詞研究は、意味論の世界に展開せしめられるべきものである。

文末詞研究の内包と外延とは、深く広く考定せられる。

方言研究での文末詞研究は、方言研究の独自の学的形成に関与することが大であろう。方言文末詞研究の実践によって、私どもは、方言学の実質を、真に重厚なものにすることができる。

加藤周一氏が、朝日新聞紙上に連載された『言葉と人間』の「あとがき、または『言葉と人間』の事」（昭和51年10月29日）で、

人は必ずしも理性の普遍的な秩序によらず、また心情の特殊な経験によって、永遠に接するのである。

と述べていられる。氏の文章の前後関係にかかわらず、今、上のおことばを

お借りするならば、私は、私なりに、「必ずしも理性の普遍的な秩序によらず、また心情の特殊な経験によって、永遠に接する」思いで文末詞問題に直面している。まことに、文末詞の世界は、追究永遠の世界である。

この世界の一端に身をおいて、私の研究意欲は、かぎりもなく高まる。

しかし、と言って、つぎにまた、私は、上記の「あとがき、または『言葉と人間』の事」から、加藤氏の最後のおことばをお借りしたい。

人は束縛を脱すれば脱するほど、自分自身の限界に束縛されるのである。まことに、身に痛切にひびくおことばである。

私は、「束縛を脱」して、——たとえば、旧来の文法学からの束縛を脱して、私なりに自由に（すなわちまた責任を感じて）文末詞研究にしたがってきた。そうして、この世界の広大と研究の永遠とを感じることは、上述のとおりである。が、今また、かえりみるのに、私は、束縛を脱して自由にうごいて、やがてまた、「自分自身の限界に束縛され」ているようである。

（研究のいとなみとは、こうしたものなのか、とも思われる。）

## 参考文献

- 佐治圭三「終助詞の機能」（『国語国文』第二十六巻第七号 昭和32年7月）  
 同 上「感動助詞と感動詞」（『講座日本文法』3 昭和42年 清水書院）  
 渡辺 実「終助詞の文法論的位置—叙述と陳述再説—」（『国語学』72 昭和43年3月）  
 同 上『国語構文論』（塙書房 昭和46年9月）  
 鈴木英夫「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」（『国語と国文学』第179号 昭和51年11月）

本 編 昭和日本語方言文末詞  
〈文末助詞〉の統合的記述



## 序 章 記述方法

序編によって説明につとめたところであるが、文末詞〈文末助詞〉は、日本語口話の文表現に、もっとも重要な役わりを演じる、わが日本語にとっての特質的なものである。その、文表現上での、特定の「訴えの役わり」は、広くて深いはたらきのものである。したがって、これの記述、叙述説明には、きわめて重厚であるべき手法が要求されている。広くて深いはたらきの中の、待遇表現法とされる機能に目を向けてみても、文末詞の叙述が、いかに精深で総合的なものでなくてはならないかが明らかである。

加えて、個々の文末詞の存立を見るのに、それは、つねに一が他とむすびあり、相関的脈絡的なものである。たとえば、「ナ」という文末詞も、「ネヤ」などと密接に関連している。それゆえ、文末詞記述は、ただに一個の文末詞に即応するだけのものであっては、ことたりないわけである。ここには、彼我を対照し比較する記述、あるいは、彼我を同時にとりあげる記述態度が要請されている。

文末詞の総合的記述は、いくえにも要求されているしだいである。

しかしながら、線条性の言語による記述作業には、先天的な限界がある。立体像を、そのままに写しとる記述をしはたすことは、不可能である。たて・よこに連関するものを、一挙に叙べあげていくことも不可能である。ものの広さ・深さを——かりに深さだけをとったにしても——、線条的に叙べほぐしていくのではなく、写真撮影ふうに、しかも、奥ぞこまでをも、一挙に写しだすことなどは、筆によっては不可能である。私どもは、四次元的な世界の実情とも言うもの活写を、やむなく、ことばの線条の一条の叙べかたによって、どのようにかしはたしていかなくてはならないのである。このところに、私どもの大きい苦悩がある。

今は、理想的な把握をひとえに胸にしめつつ、言いかえれば、それからはな

れることをたえずおそれつつ、線条的叙述の筆づかいにはねをおるほかはない。

やむをえずとも言いたい。私は、文末詞なるものの分類——私なりの分類——にしたがって、私の記述作業を進めていく。

事項の類別にしたがって章節をたてる。（——各事項が他と密接に関連することを考慮しつつ）

「一事が万事」とも言われている。一事項の記述が、統合的記述の名に恥じない、発展的総合的なものであることを念願したい。

# 第一章 文末訴え音<sup>オン</sup>

## 第一節 「文末訴え音」の提立

### 一 文末特定音細見

「文末訴え音」とは、文表現の文末にあらわれる、文末詞形以前の、わずかに音形とも言いうるものをさす。

文末詞の列につながるものとするのには、やや躊躇をおぼえるものではあるけれども、これが、文末詞形のものとはたけに近いはたらきを示すので、私は、文末詞研究の統合的見地から、あえてこれをとりあげる。とりあげて、文末詞記述の冒頭におく。

訴えことば——文末詞——は、感声的なもの、さけびごえ的なものが、始源的なものではないか。その始源では、一様ではない、現場での訴え音が発出されたはずである。今日にあっても、人はしげんに、場に応じて、語形以前の衝動音的なものを、なんらかの訴え音として、発出してもいるのではないか。——当人は気づいていなくて、でもある。

語形以前の不安定形が定形化せしめられて、感声的と言いうる文末詞形ができたであろう。

文末詞形にはかぎらない。どのような要素も、その形成の始源は、感声的なもの、さけびごえ的なものではなかったか。それはみな、他に対する「訴えの用のもの」であったに相違あるまい。対他の表現は、すべて訴えであると考えられる。「訴えの機能」が、言語を形成したであろう。

訴え心情の発露のもっとも先駆的なものが、訴え音であろうか。——かつてもそうであったろうし、現在もそうであり得よう。文末詞関係のばあいにも、

「文末訴え音」の指摘されることが、重要な意義を有する。

方言の研究は、音声言語の研究に属する。私どもは、音声言語としての方言について、その、人間生活にもっとも直接的な具である意味を求め、方言に生活する人々の、表現活動の機微・奥所にせまっていこうとする。このような見地での方言研究、という音声言語研究にあたっては、私どもは、まず、「言語形以前の音形」とも言う、文末詞相当の、文末用特定音形に直面せしめられる。文末特定の訴えことばとしての文末詞を追究するたびにたつ私どもは、第一着に、その始源的な特定形態のものをとりあげさせられる。

言語研究に、音韻論上、音素の指摘があり、これの討究が精密である。言語現象の統合的把握を念とする私もまた、巨視を重んじるがゆえに、反転して微視を重んじる。音素論もまた、けっして私の関心のそとのものではない。かえりみるのに、「文末訴え音」の把握は、私の、私なりの音素論作業でもあった。しかも、私の音素論は、以下の「文末訴え音」記述に明らかなおと、つねに表現の現場を重んじる音素論である。どのような「素」も、機能体でないものはないはずである。

「文末訴え音」は、くりかえし言うように、「詞」以前の「音」である。ただしそれは、習慣的に発言するものについて言われる。「文末訴え音」を、文末詞形のものにくらべて、やや非定着的なものとも、やや不安定なものとも言うことは、できもする。しかし、「文末訴え音」は、偶発的なものではない。それにしても、「文末訴え音」の独立性は、ややよわいとも言えようか。通常、文末詞形のもの、独立詞と見ることができる。それに対して、「文末訴え音」は、半独立と言われもしようか。こういう意味でも、「文末訴え音」は、「音形」と言われるのがふさわしかろう。品詞論的には、したがって、これを準文末詞と言ってもよいかと思う。

私は、従来の文法論ないし文法学での、品詞の論のわくを越えて、音声的な準文末詞を認める。このことは、方言研究にふさわしい処置であろう。(方言

研究上では、どのような文法研究のばあいにも、音声表現論的な見地・考慮が重視されなくてはならない。

## 二 文末訴え音

「文末訴え音」が、訴えの効果を発揮し、よびかけの性格を示すことは、通常の文末詞のばあいと同様である。感声的文末詞と言いうるものはたらきと、「文末訴え音」のはたらきとは、よく似たところがある。両者を比較する時、「文末訴え音」の、やがて、感声的文末詞になっていく可能性のあることが察知せられる。——感声的文末詞は、「文末訴え音」(または、訴えの感声)の定着せしめられたものとも言うことができよう。

「文末訴え音」としては、第一に、「ア」音をとりあげることができる。「オ」音も、とりあげられるようである。「エ」音「イ」音もとりあげられる。別に「ン」音が重視される。

「ア」音や「オ」音は、言うまでもなく、聞こえの大きい単母音である。文表現末尾で、こうした広母音が用いられるならば、これはいかにも、訴えの用にならうはずである。「ン」音は、広母音とは類を異にするが、これが特別の音効果を持っていることは明らかである。「ン」もまた、訴えの料として役だてられやすいものであろう。

## 第二節 文末訴え「ア」音

### 一 「文末訴えア音」への私の気づき

昭和十年代のいくどかの東北方言調査では、仙台弁などに関して、「ジャ」という文末詞があると、私は考えとっていた。

○アアッ ジャ。

あのね。

などと聞かれるものに見られる「ジャ」である。こうして受けとることのできた「ジャ」は、全国でもめずらしい、宮城県地方特有の文末詞と思われた。それにしても、

○モ<sup>ー</sup>ジャ。

もし。

などがあるものは、どう解されるのか。「ジャ」を除くと、あとは「モ」である。釈然としないまま、——それにしても、耳につく「ジャ」文末音のいちじるしさのため、総体的には、私は、「ジャ」とか「ノ<sup>ッ</sup>ジャ」（「いつ来た ノ<sup>ッ</sup>ジャ。」）とかを、一定の文末詞としてとりあつかってきた。ところで、昭和三十九年七月なかばの一週間、青森県西津軽郡旧木造町で、いわゆる津軽弁を日々、満喫していたさい、

○四月<sup>グッ</sup>になれば ノ<sup>ア</sup>ァー。

というような発音に、毎度、耳をうたれることになった。文表現の表現末で、声をしぜんのうちに大きく [a] に開く発言、これが、しだいに、土地の方言習慣としてとらえられたのである。その特別な発音の表現効果も、逐次、帰納することができた。

○ン<sup>ダ</sup> オンジ[i]ァー。

だもんねえ。

など、「ジャー」と聞こえがちのものも、ふんだんに出てくるではないか。「ジャ」？ この時、私は、宮城県地方の、例の「ジャ」「ノ<sup>ッ</sup>ジャ」を思いおこした。双方、おなじものではないか！ そういえば、宮城と津軽とは、——途中の地域のことはしばらくおいて——、「ます」を「ス」とするなど、かんじんなところで、同似の傾向を見せる。

津軽弁の実例について、文末「ア」音をとりわけようとしてみると、みんなきれいにとりわけることができる。「ン<sup>ダ</sup> オンジ[i]ァー。」のばあいも、これの「シ」が「もし」の「し」であることは、早くからわかっていた。それゆえ、このばあいも、「ァー」を、難なく切りはなすことができた。津軽では、

まったく、「もし」の「シ[i]」に、「ァ」をつけている。そうだ、仙台弁のも、「モシァ。」は「もしァ。」なのだ。こうわかってきた。——「モシァ。」が、「モシァ。」とも聞こえるように発音されているのだった。「アノッ シァ。」も、もともと、「あの シ(もし)ァ。」なのだ。こう知られて、仙台弁の不可解だった「シァ」が解けた。(これに関する一部の発表が、「“山形弁”と“宮城弁”」<『国語学』70 昭和42年9月>の中などにもある。)

仙台弁の「シァ」文末詞の実体がわかってみると、関連してすぐにわかることがあった。それは、出雲弁の「ニャ」文末詞のことである。この「ニャ」を、私ははじめ、ナ行音文末詞の「ニ」に関係のあるものかと推測していた。が、そうではなくて、これも「ネァ」であった。「文末訴えア音」が、「ネ」にそわったものである。その、むざうさに発音されて、土地弁色の濃いものが、「ニャ」とも聞こえる。「ネ」が [ne] でもあるので、「ネァ」はいっそうもって「ニャ」に近く聞こえもする。つい、土地人も、“出雲の人は猫が鳴くように言う。”と語るありさまである。(先日、私は、広島市内の食堂で経験したことである。中年ないし初老と見られる一女性が、相手の中年女性に向かって、しきりに「ニャ」と話しかけていた。その抑揚は、悉皆、出雲調そのものだったので、この人が出雲人であることはすぐに判断されたが、それにしても、「ニャ」の発音のけざやかさには、いまさらながら、これの、出雲発音としての特色ぶりを思わせられた。「文末訴えア音」に気づいている今日、私は、苦勞することもなくて、これに、さっそくに「ネァ [ne<sup>a</sup>]」を直覚した。)

津軽弁の調査によって、私は、「文末訴えア音」の存在(——あるいは分布)と効果とに、はっきりと目を見ひらくことができた。

じつは、昭和三十三年十月の、秋田県仙北郡田沢湖町生保内での一週間調査の時にも、「文末訴えア音」を聞きとめたのであった。調査記録のカードを見ると、たしかにその実例が書きとめてある。しかし、当時は、「文末訴えア音」という考えかたには、いまだ到達していなかったので、「文末の無意味裝飾音『ア』」をよく

聞く。」などとするしている。

ものをはっきりと見さだめたのは、じつに、津軽においてであった。

それにしても、津軽調査に先だつこと早くに、秋田県下で、「文末訴え音」とすべきものをとらえていたのは、調査者として、愉快に感じる。——虚心にものを見つめ、すなおにそのものをとらえる調査ができていたのを、みずからうれしく思う。

「ア」音は、訴えかけ音として、効果の歴然としたものである。「もし」の「し」のばあいと言うなら、文表現の末尾にこの「シ」をおくのに、「シ」形にはとどめないで、さらにくふうして、「シ」の母音を拡大する方法をとり、拡大母音とも言うべきものをもって、訴えをつよくしようとする。まことに合理的である。その合理的なことが、音声上の生理・必然に即して、もっともしぜんにおこなわれている。

津軽弁をまたなくても、このような拡大母音による訴えかけは、——それが無意識的におこなわれているにもせよ、そここの言語生活で、しぜんにおこなわれていることでもあった。

たとえば、旧軍隊時代には、人が、「気をつけ！」の号令をかけるのに、大声で、

○キオツケアー。

○キオツケヤー。

などと言ってもいた。人は、しぜんのうちに、動詞命令形「ツケ」の〔e〕母音を、〔a〕母音にまで拡大していた。これで、このさいはこれなりに、号令の訴えの効果をはっきりとさせることができたわけである。（——号令となれば、ともかく、相手がたにつよくはたらきかけるところがなくてはならない。）

つぎの例は、バスの女性車掌のばあいである。なれて年功も積んだ人が、しばしば、

○オライヤー。オライヤー。

などと言っている。——バスの後退を、車後で運転手に案内することばである。「オーライ。オーライ。」と言うつもりで、いつとはなく「オライヤー。」など

と言うようになっている。職務になれてくると、かの「オーライ。」も、軽快に「オライ。」などと言ってしまふ。はては、「アライ。」などとも言つて、さうしている。「オライ。」とか「アライ。」とかの、つめた言いかたをして、その「イ」を言いとめようとする時、「イ」発音の舌が下におりて、「ヤ」音がひびく。こうなつて、「オライヤ。」ができてしまふ。これは、「オライヤ」と発音されがちである。車掌職の人には、おのずから、運転者につよく「オーライ。」を訴えようとする心理がはたらくことであらう。（——よく聞こえるように言おうと思ふであらう。）[a]音におわる「〜ヤ。」との言いかたをして、その人は、発音上の一種の満足をおぼえるのではないか。——ほとんど無意識的ともなることであらうけれども。

「歌謡」歌手の中にも、似たような「ヤ」を出す人がいる。文表現上のいきおいで、発音がしぜんにそうなるのであらう。ともかく、歌のくぎれめで、その現象がおこっている。私どもは、聞き手として、いやおうなしに、その末尾の「ヤ」音にはっとさせられる。——‘訴えの効果’は、たしかにある。

さて、現代諸方言上の「文末訴えア音」は、以下の二項にわけて観察記述することができる。

## 二 「文末訴えア音」出現の諸相

方言上、「文末訴えア音」は、さまざまのばあいにあつてゐる。その状況は、整理して、以下の諸条項に見ることができる。

### 1. 助動詞でおわる文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい

文表現が助動詞をもってむすばれようとする時、その助動詞の直下に、「文末訴えア音」のあらわれることがある。

津軽弁では、

○ホンダ<sup>バー</sup>ペ<sup>ア</sup>。

そうだろう。

○ヤマサ イ[i]グ<sup>ベ</sup>ア。

山に行こうよ。

などと言う。「べ」助動詞の表現の下に、「文末訴えア音」のむずびがきている。「べ」助動詞による文表現の言いおさめが、「文末訴えア音」によって、最終的にむずばれることは、青森県地方にいちじるしいものではないか。県東部の「南部」地方でも、

○イットキ[i] ヤス[ü]ム<sup>ベ</sup>ア。

ちょっとやすみましょう。

○ム[ü]カン[i]カラ <sup>ア</sup>ッタ<sup>ベ</sup>ア。

むかしからあったらう？

○ノル<sup>ベ</sup>ア。

いっしょに乗ろうよ。

などと言っている。このように、「ア」音の比較的大きく発音されるものも聞かれ、かつ、きわだたく上げ調子に発音するものも聞かれるありきまでである。——このようだと、「文末ア音」の訴えかけ性は、もはや顕著であるとしうる。

なお、東北諸県下に、「べ」表現の下の「文末訴えア音」が聞かれる。

秋田県東での一例は、

○キ[kçi]ンヂ [dçi] ヨ<sup>ロ</sup>コ<sup>ン</sup>ダ<sup>ベ</sup>ア。

金治はよろこんだらう？

である。

山形県下の南寄りの地での調査のさいには、

○オ<sup>ッ</sup>ケ<sup>ー</sup>ベ<sup>ア</sup>。

大きいだらう？

などが聞かれた。

福島県会津西部での調査例には、

○ジャ タク [ü] ア ッ トコ ベ ァ。

社宅がある所だろう？

などがある。

岩手県下にも、同種の例が見られる。「べ」助動詞の表現のもとに、「文末訴えア音」のくることは、奥羽に広く見いだされる習慣のようである。奥羽に関連して、北海道でもこれが聞かれる。推察するのには、未来時に関して、「べ」と、推量の言いかたや勧誘の言いかたをすると、しぜんに、人はなんらかの訴えの気もちを流露させて、ほどよい「ア」音を発するということなのだろうか。ほかならぬ未来時助動詞「べ」のばあいには、「文末訴えア音」のあらわれやすいことは、もっとものことに思われる。関東北部などでも、茨城県下の、

○キョ ー ワ イー テン キ [i] ダ ベ ァ。

など、「べ」のもとでの「ァ」音が聞かれる。

茨城県北の一例、「ウ [ü] ミ [i] ア ッ ペ ァ。」(海があるだろう?)では、「べ」の変「べ」のもとでの「ァ」音が見られる。

東北地方でも、また、北海道地方内でも、「べ」助動詞のほかの助動詞の言いかたのばあいにも、どの程度にか、「文末訴えア音」があらわれている。たとえば、「……タク サン ア ッ タン ス ァ。」(野元菊雄氏「みちのくの巻(2)——太平洋筋——湧谷町・仙台市」『方言の旅』)など。

津軽弁での「ハ ッ テ マ ッ テ ヘ ァ。」(“はいってまってください。”)などのばあいは、助動詞「へ」(←セ←サイ<なさい>)が、直上の本動詞の消えたあとに自立しているが、それにしても、「へ」そのものは、助動詞にちがいない。このあとにも「ア」音がきている。

「南部」地方に、

○シ ラ ナ ー ズ ァ。

“知らんそうだ。”

○だ れ さ ん が ヨ メ ッ コ サ イ ク ズ ァ。

“だれさんが、嫁に行くそうだ。”

のような言いかたがある。これらに見られる「ズ」は「と言う」か。それにしても、ものは、およそ助動詞相当の形のようにもなっている。その「ズ」のもとに、「ア」音があらわれている。

室山敏昭氏によれば、丹後半島内で、断定の助動詞のあとに、「ア」音が聞かれるという。「ダーア」「デアア」などの言いかたがあるらしい。

1'. 指定断定の助動詞「ダ」ならびに完了の助動詞「タ」におわる文の末尾に〔a〕の長呼音の見られるばあい

「だ」「た」でおわる文のばあい、その「ダ」「タ」音が「ダー」「ター」となって、その長呼に、なにほどかの訴え性の認められるばあいがある。——(単純な自然長呼としては、見すてかねるものがある。)たとえば、東北地方では、

○ヤンダー。

いやだ!

などと言う。「ダー」は、強調の長呼音を見せるものであろう。それゆえ、この長呼は、訴えの長呼と解することができる。東北地方や北海道では、この種の「だ」長呼が、そうとうに見られはしないか。

○ミーレバ ヨカッター。

見ればよかった。(後悔)

これは、関東、群馬県下での一表現例である。「よかった」の「た」が、「ター」になっている。やはりここに、強調の長呼、したがって、訴えの長呼と言いうるものが認められよう。

九州の、佐賀県下や熊本県下、その他の諸県に、「た」の「ター」が、比較的よく聞こえるように思う。

○ション、オダ シラザッター。

いいえ、わたしは知らなかったわ。

は、瀬戸口俊治氏の、熊本県南、人吉市域で聴取された例である。九州にはか

ぎらないことであろう。強調・訴えの心意のうごめきにつれて、「た」や「だ」の言いおさめが、しぜんに、「ター」「ダー」になっていこう。それにしても、九州では、比較的よく、この種の事実が、比較的広い範囲の特色になっているかのように思われる。

「ア」音におわる助動詞は、訴えの心情のはたらくばあいにも、〔～a a〕とはならず、〔～a :〕となるのが、おおよそのいきおいであろうか。「べ」助動詞などの、「ア」音以外におわるものあとに、明らかな「文末訴えア音」形のくるばあいにくらべると、「ター」「ダー」のばあいは、「訴えア音」が顕明ではないけれども、実質的には、「ター」や「ダー」のばあいにも、「文末訴えア音」がきているとしうる。国安功氏が山口県周防平郡島について調査された結果の、

○アソコー ヒッコムマー ア。

あそこはひっこむまいね。そうでしょう？（小女→小女）

○エーチャン、イカレルジャー ア。

にいちゃんは行けるじゃないの。それごらん。（青女→小男）

などのばあいは、「ア」音におわる助動詞「マー」（まい）や、「ジャー」のあとに、明瞭な「文末訴えア音」が見えている。それは、高音のアクセントを持った独立の「ア」である。かえりみるのに、瀬戸内海中部島嶼出身の私自身も、「アルマー ア。」などの言いかたを、少年時代に、よくしていた。この種のこととは、また、内海島嶼に限られることでもあるまい。

助動詞のばあいではないけれども、「奈良県吉野郡下北山村上桑原」（『全国方言資料』第8巻）のことば、

f ソーリャーア

では、「それでは」の言いかたのあとに、「ア」のきているのが見られる。

## 2. 助詞でおわる文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい

津軽弁で、

○ユキ〔i〕 ツモッテァー。

雪が積もってさ。

と言う。助詞「て」のもとに「ア」音が出ている。文末訴え音である。「雪が積もって」という発言を、いかにもはっきりと相手に送ろうとして、「テ」と強調し、やがて、「テ」の〔e〕音を〔a〕に開いて、訴えの心をしぜんに顕示している。

同様のことが、越後北部にも見いだされるという。（大橋勝男氏の後掲論文による。p. 101）

### 3. 動詞でおわる文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい

青森県下に、

○おもしろければ遊ぶよ。→オモスレェ（ろけれ←ロイ）ッパセェアスツァ。

（「南部」の津嶋金次郎氏による。）

のような言いかたがある。この例には、文末の動詞「アスツ」のもとに、「ア」音があらわれている。『全国方言資料』第1巻の青森県の部にも、「モドテクルマ」（もどってくるよ）「イッテクルマ」（行ってくるよ）などが見えており、「ア」が「よ」と対訳されているのが注目をひく。岩手県下にもこの種の「ア」があり、福島県下にも、その『福島県中村町方言集』に、

おくれ 下さい、「おくれぁ」

などがある。

なお、秋田県下では、「何々して タンセ(シ)。(何々してください。)の「タンシ」が、「タンシァー」ともなっている。「どうぞしてください。」との言いかたは、「どうぞして クンツェア。」と、「ア」音の広がりを見せる。

「クンツェア」との言いかたは、岩手県などの諸県にも見いだされる。なお、岩手県東南部の気仙郡での例、

○アツツァ イッテラッセア。

あっちへ行っていなさい。

などというのも、私は、聞き得ている。——「いらっしゃい」の「しゃい」のところが、「セア」になっている。上の福島県下の「おくれあ」の例の以降、動詞命令形のばあい、しぜん「文末訴えア音」の出ていがちなのは、なるほどと首肯されることである。

#### 4. 名詞でおわる文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい

寺井義弘氏の『青森県南部方言考』（昭和37年）に、

「このくさればつこあ」

とある。「くされ婆」のもとに「ア」音がきている。はなはだしい悪態のよびかけであるところから、しぜん「文末訴えア音」がうまれることになったのかと思う。おなじく「南部」の、

○エ〔e〕ートホンニャグアー。

えらいごちそうさま！

と言う「ホンニャグ」は、名詞なのかどうなのか。とにかくそのもとに、「アー」がきている。相手への言いかけ——訴え——の効果を、この「アー」が示していよう。

#### 5. 特殊慣用文の末尾に「文末訴えア音」の見られるばあい

能登方面では、否定の意を簡潔に表明するのに、「ナンモ。」と言う。返事文である。これが、ときに、

○ナンモァー。

となる。文末に「ア」音がくる。（接続助詞のばあいも、「どうどうシタレドモ、」が「……タレドモァー、」などとなったりするらしい。）

おなじく能登方面で、「ええ。」の返事が、

○エァー。

ともなるという。(愛宕八郎康隆氏教示——珠洲市域調査——)

6. 通常の文末詞におわる文の末尾に(すなわち文末詞の直下に)「文末訴えア音」の見られるばあい

この種のもが、一類、とりわけ注目される。さて、文末詞のもとに、重ねて文末訴え音のあらわれるばあいは、「文末詞+文末詞」の、いわゆる複合形文末詞のあらわれるばあいに類似しているともできよう。

どのような文末詞に、どう、「文末訴えア音」が随伴複合しているか。次下のように分類して、これを観察することができる。

(1) 「ナ+文末訴えア音」

たとえば岡山弁で、

○エー ナーア。

いいねえ。(つよく同意を求める)

と言う。「ナー」の単純長呼ではなくて、終りが「ア」となっている。この習慣的な言いかたのばあい、私どもはここに、「ナー」の単純長呼ではすまさない発言意図を認めたい。すなわち、最後に「ア」を産んでいるところに、特別の訴えかけの意図を認めたいのである。

こうした発言傾向は、おおよそ、近畿地方内に見いだされやすいようである。但馬・奥丹後はことに注目される、としてよいか。

近畿からはなれて、東北地方でのことであるが、小松代融一氏『岩手方言の語彙』の「旧南部領の部」に、

アノナエァ あのね、 もしもし

とある。これにも、「ナー」に近い「ナエ」に随伴する「文末訴えア音」が見られよう。東北もやはり問題の地とされる。

## (2) 「ノ+文末訴えア音」

津軽弁での「ノァー」の例は、さきに掲げた。(P.88)「ノァー」のおこなわれることは、津軽でさかんである。

「ノッ」[no<sup>u</sup>]と言う習慣は、どこにもないのではないか。「ノ」[no]の〔o〕母音が、さらに広大にされて〔noa〕の音形をとるのは、「ノ」の訴えとしては、まことにしぜんである。訴えかけるのは、訴えかけの性能の大きいことをねらうのが当然であろう。(そのことが、しぜんの音声生理のもとでなされるわけである。)

## (3) 「ネ+文末訴えア音」

最初に、さきにもふれた出雲地方の「ネァ」を見る。松江市中心に、「ネァ」がさかんであろうか。——そうとも言えるかと思うが、郡部でも、「ネァ」がそうとうに聞かれる。全般に、「ネァ」の抑揚になり、「ネァー」というのは聞かれない。これは、注意すべき一傾向である。「ネァ」は〔nēa〕〔nēa〕と聞こえ、また、〔nēa:〕〔nēa:]ともなる。「ニャ」「ニャー」とも聞こえることは、さきにもふれたとおりである。(p.89) 実例をあげよう。

○デキ〔i〕ンガ ネァ(ニャ)ー。

できないがねえ。

これは島根半島北岸での一例である。

○カミ〔i〕ー アゲマシ〔i〕タ カイネァ。

紙をあげましたかね。

これは、松江市内での中年女性の発言例である。

○ソーデス ネァー。

これは、松江市内の旅館につとめる一女性の発言例である。この人は、共通語でものを言おうとしており、この時も、「そうですね。」と言ったつものようだった。しかし、文末には、「ァ」がついたのである。このようなことが、この人にたびたびあった。(この人は、出雲市平田の出身で、四十歳代の人だった。)別の宿で、そこにはたらく女性のむずうさな発言に接したが、その時は、

しばしば、

○アン  $\overline{\text{ネア}}$ 。

あのね。

と言うのが聞かれた。たずねてみると、「「あのね。」と言っているつもり。」とのことだった。加えて、この人は、「お客さんからは「 $\overline{\text{ニャ}}$ 」に聞こえるそうですね。」と語ってくれた。——この人の「 $\overline{\text{ネア}}$ 」は $[\overline{\text{ne}}\text{a}]$ のようだった。さてまた別の宿では、「「ネー」が「 $\overline{\text{ニャ}}$ 」に聞こえる。言うほうは「ネー」を言っている。」と語ってくれる人があった。出雲地方では、老若男女に、問題の「 $\overline{\text{ネア}}$ 」を聞くことができる。

出雲地方については北陸が、「 $\overline{\text{ネア}}$ 」を存する所として注目される。北陸を見る前に、但馬のつぎの一例をあげておく。

*m*………… ヨッチャンガ フレットタンネアー

よっちゃんが ふれていたね。

これは、『全国方言資料』第4巻の「兵庫県城崎郡城崎町飯谷」の中に出ているものである。「 $\overline{\text{ネアー}}$ 」とあるのが、ここで問題になる。

北陸では、まず若狭で「 $\overline{\text{ネア}}$ 」が聞かれる。遠敷郡上中町の人の発言例は、

○シラン  $\overline{\text{ネアー}}$ 。

知らないよ(ぞ)。

である。小浜湾頭の小集落でも、「 $\overline{\text{ニャ}}$ 」に近いものが聞かれる。

つぎのは、能登の宇出津で聞きとめたものである。

○アッテ  $\overline{\text{ネアー}}$ 。

会ってね。

○ $\overline{\text{ネアー}}$ 。タタカレテ タタカレテ  $\overline{\text{ネアー}}$ 。

ねえ。たたかれてたたかれてね。

○サブイノニ  $\overline{\text{ネアー}}$ 。

さむいのにね。

越中東部に行くと、

○セナカデモ ネァー。

せなかでもね。

○ワタシ ネァー。

わたしね。

○ブチョーサンモ オイデルシ ネァ。

部長さんもいらっしゃるしね。

のような発言が聞かれる。「ネァ」が「ニア」に近くも聞こえる。「ネ」の [e] が [ɛ] になりがちなためであろう。(越中に中舌母音や [ɛ] はかなりいちじるしくもある。) —越中では、女性のほうに、「ネァ」は、より出やすいのか。

つぎは越後北部で、

○ソーンダドモ ネァー。

そうだけれどもね。

などを聞くことができる。(大橋勝男氏による。)大橋氏には、「新潟県北蒲原郡豊栄町高森方言の文末訴え微妙音」(『方言の研究』第2号第2冊)の発表がある。(これは、私の「文末訴え者」の考えを踏襲した一記述である。「文末訴え音」を、かつて私は、「文末訴え微妙音」などとも言った。)

北陸道は、「文末訴えア音」の注目される地域である。山陰から北陸へ、つぎに東北へと、「文末訴えア音」がたどられる。

北陸でのばあい、「ネァー」などの抑揚もあるのは、山陰とのちがいでとして重要視される。北陸越後にはまた、「ネァー」の言いかたもあるという。(大橋氏の上記論文による。)

東北、秋田県下の東能代で聞きとめることのできた「文末訴えア音」例は、つぎのようなものである。

○ドゴダケ ネァー。

どこだろうかね。

○ア, ホンダ ネァー。

あ、そうだね。

○モス[ü]コシ[i] フレバ <sup>↑</sup>ネァー。

もうすこし降ればね。

「ネァ」が「ニア」にも聞こえる。上がり調子もある。

青森県下の津軽にも「ネァ」があり、宮城県下にもこれがある。

転じて、九州、「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」に、

mゴリャ モー マケラレンモンネァー

これは もう まけられないんだよ

とある(『全国方言資料』第6巻)のは、「文末訴えア音」を、「ネ」のもとに認めしめるものであろうかどうかだろうか。

関西内・九州内では、「ネャ」という複合形文末詞が、その発音しないで、「ネァ」に近く聞こえるばあいもあるかと思う。

(4) 「ゼ+文末訴えア音」

小松代融一氏によれば、岩手“県南部(内陸方面)”に、

○「けあるゼァ」(帰るヨ)

があるという。(『方言学講座』第2巻「岩手」)

愛宕八郎康隆氏は、能登半島東北端の珠洲市木ノ浦に、

○ハヨー セニャナランガデア <sup>↑</sup>ゼァー。

早くしなくてはならないよ。

との言いかたがあると言われる。

(5) 「カ+文末訴えア音」

方言上、「そう <sup>↑</sup>カー。」などと、「カ」の発音の強調されることは、すくなくなかろう。「そう <sup>↑</sup>カー。」などと、疑問の「カ」を長呼して、あと上げ調にすることも、すくなくあるまい。これらのばあいには、「カ」にさらに「文末訴えア音」が付随していると考えられないことはない。

(6) 「ケ(かい)+文末訴えア音」

関東東北、茨城県北部で聞きとめたものに、

○ヨッチャン イナガッタ ゲア。

よっちゃんはいなかったかい？

というのがある。この「ゲア」は、「ケ」のもとに「文末訴えア音」を見せているものと解される。

『全国方言資料』第3巻の「富山県氷見市飯久保」の条には、

f オイデナハルマスケアー

おいでになりますか。

とある。

近畿の播磨で、かつて私は、

○オマハン スシ タベテ ケアー。

あなたはすしをおあがりになります？

の言いかたを聞いた。

伊予東部の人が、

○ホー ケアー。

そうなの？ (かるく受けとることば)

と言う。「ケアー」とともに、「ケヤー」が聞かれる。

能登の珠州市方面の調査結果として、さきの愛宕氏が報じられるところによれば、「おお。」の返事に、

○オー ケアー。

の言いかたがある。この「ケアー」は、上来のとは別種のもので、「これ」に淵源する代名詞系文末詞「ケー」に、「文末訴えア音」の熟合したものである。

(7) 「コト+文末訴えア音」

『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条に、

f ヤー メソコエ ンボゴダゴドアー

やあ かわいい 赤ん坊だこと。

とある。「ゴドアー」は、「コト」という文末詞に「文末訴えア音」のそわっ

たものか。

(8) 「シ(セ)+文末訴えア音」

津軽弁では、

○ア<sup>フ</sup> シ[i]ァー。

あのね。

などと言う。「モン」の「シ」が、独立の文末詞になっており、そのもとに、「文末訴えア音」がきている。「もしもし。」と電話などでよびかける時も、「モン[i]モン[i]ァー。」と言っている。

同様のことが、宮城県下・秋田県下・山形県下にも見られる。ことに宮城県下では、「ソ<sup>フ</sup>ッ シャ。」(そうですね)など、「シャ」音の聞こえがいちじるしい。岩手県下南部でも、似たような「シャ」が聞かれるか。一般に、「シャ」が「シヤ」に近く聞こえてくるようでもある。

なお、青森県下では、西の津軽に「シァ」相当の「セァ」があり、東の「南部」地方には、「シァ」「セァ」相当の「サェ」が見いだされるようである。(能田多代子氏『青森県五戸語彙』)

北海道内にも、「シァ」相当の「セァ」があるらしい。

(9) 「ネシ+文末訴えア音」

津軽弁に、

○ソ<sup>ンダ</sup> オンネシ[i]ァー。

そうですねえ。

などの言いかたがある。「ソダベネシァ(そうですね)」などとも言っている。(『全国方言資料』第1巻の「青森県南津軽郡黒石町」による。)『青森県方言訛語』の、

○そしてねさァ(そしてねー あなた)

も、ここに引用しておいてみたい。

越後北部でも、「ネシ[i]ァ」「ネッシ[i]ァ」などを聞くことができる。(前記大橋氏論文による。)

(10) 「ノシ+文末訴えア音」(「ノ」は助詞系文末詞)

仙台弁で、

○ $\overline{\text{ドゴ}}$  イグ  $\overline{\text{アシ}}$ [i]ァー。

どこへいらっしゃる?

と言う。「 $\overline{\text{アシ}}$ [i]ァー」が「ノッシャ」と聞こえることが多い。——と、むかし、はじめて仙台弁に接した時には、痛感させられた。

## 7. 「文末訴えア音」の発展形

青森県の「南部」地方で聞きとめたものに、

○ $\overline{\text{オセーデ}}$  ケロ  $\overline{\text{アーイ}}$ 。

教えてくれるよ。

がある。この「アーイ」は、上来の「文末訴えア音」の発展形ではないか。すでに見てきたように、「ア」音は、しばしば、「ァ」音であるよりは、むしろ、大きい「ア」音にもなっている。そのところに、アクセントの高音部が、上がり調子できたりもしている。このような傾向のもとでは、「アーイ」というような音形も、醸出されやすかったろう。上記の「アーイ」は、どの程度に社会習慣化しているものであろうか。土地の有識者は、上の文例カードに、

中以上(女) 普<=普通程度のおこなわれかた> 中<=中等品位>

と注記せられた。

「アーイ」に「ワイ」も考えられるか。

「ア」に似た「アン」というものもある。『方言の研究』創刊号(新潟大学方言研究会 昭和44年3月)の、大橋勝男氏ほかの「新潟県中蒲原郡横越村川根谷内方言」の中に、

○ $\overline{\text{オンナスニ}}$  シテス $\overline{\text{マイ}}$   $\overline{\text{マス}}$  アン。(同じにしてしまうのです。) <中・女→青・女>

とある。この「アン」は、「ア」の発展形としうるものだろうかどうだろうか。

上例にかかわるものに、

- リカイ デキネ アンサ。(理解できないのさ。) <初老・男→青・女>  
 ○オワッテマス アンネ。(終ってるのですよ。) <中・女→青・女>  
 ○モッテ キマス アンガネ。(持ってくるのですよ。) <中・女→青・女>

なども見える。「アンサ」「アンネ」「アンガネ」といったような形態を見ていると、これらでの「アン」は、どこか、他からきたものかとも思われてくる。なお、こう言うこともできる。「アンガネ」のように、「アン」のつぎに他のものが複合しているようであれば、この「アン」は、たとえ文末訴え音的なものに血をひくものであったとしても、今はもはや、通常の文末詞に化しているとしなくてはならない、と。

「文末訴えア音」の発展形というよりも、関連形とでも言おうか、「アッ」というのが注意される。『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条に、

fハ ソーラ ソーラ マ スミマセン アッ  
 ああ そりゃ、そりゃ まあ すみません。

とある。個人的な習癖として、「アッ」などの発言されることもあるのは、人人の経験するところであろう。上記の例は、方言事実としうるものなのだろうかどうだろうか。たまたまのことであるが、『全国方言資料』第6巻の「長崎県北松浦郡中野村」の条にも、

mキョーワ マター ケーニャーノモン クダレット イワイテ オンエワ  
 きょうは また 家内中 来いと 言われて、お世話に  
 ナリマッスル アッ  
 なります。

とある。

## 三 「文末訴えア音」の分布と活動

上来の「文末訴えア音」の出現するいろいろのばあいを総合して、その出現地域を見るならば、第一に奥羽がある。関連しては北海道がある。奥羽について、つづきの北陸道が注目される。ついで山陰が問題になる。九州に若干の問題がある。「文末訴えア音」の分布は、おおよそ以上のとおりである。

全体は、およそ「東北～裏日本」系の分布と見られようか。他の事象の分布で、これとおなじ分布様式を示すものは多い。たとえば、[i] [ü] [e] 音の分布もそうである。

「東北～裏日本」系の方言地帯は、私見によれば、一大古系脈地帯と解されるものである。ほかならぬこの地域に「文末訴えア音」もかなりさかんなのは、私どもに何を考えさせようか。「文末訴えア音」そのものの新古は別として、これが古系脈に深く関与する態であるのは、私どもの討究興味をそそる。

「ヂャ」(ジャ)に相当する「デア」と見られるものは、東北・北陸、それに丹後半島のうちに見いだされる。「デア」は、ものの、より古い形ではあっても、より新しい形ではあるまい。その「デア」の分布に「文末訴えア音」の分布は、つれそうありさまでもある。

さて、九州南部の、薩摩北部に、

○ンンシャデントッテミヤンセ。ホンニヨカンデア。

新車でも購入してごらん。ほんとにいいから。

○アヤモドリヨラッドデア。

あれは帰りに寄りなさるだろうか。

○ガッガアッDOWN, モッテキダイモハンタッデア。

柿があるけれども、持ってこられないものですからね。

○キダイモハンデア。

こられませんかね。

○キダイモハンヂャシタデヤ。

こられませんでしたからね。

などの言いかたがある。(井上親雄氏による。) 見ると、ほとんど接続助詞の「デ」で文表現がむすばれており、そのあとに「ア」がきている。土地人に、この「ア」が、「ね」と、対訳されたりしている。今もし、この「ア」を「文末訴えア音」と見るならば、問題の「文末訴えア音」が、じつに九州南部にも存在するとしうる。こうなれば、「文末訴えア音」は、まさに国の東北と西南とに対応的にも見いだされることになり、これと、裏日本の広い範囲の分布とを合わせ考える時、要するに、「文末訴えア音」は、日本語諸方言上の特定重要地域に分布するものと見られることになる。この分布状態は、他の古態の事実での同様の分布状態と重ねあわせて考え受けとることができて、興味がふかい。

薩摩北部の上記の実例に見られる「デア」に関して、瀬戸口俊治氏は、「デヤ」>「デア」の変化かと思われる。もし、「デヤ」がもとであったのだとしたら、私の上の記述は不要になる。

薩摩半島南部川辺郡出身の東正昭氏は、郷里方言からの実例、

○カラダガヨカデヤニー。

体格が良いからね。

○ヒトンマエズイツケカッゴオスッデヤニー。

他人の分まで使い走りするからね。

などを教示せられた。これらの二例では、「デヤ」「デヤ」が見える。薩摩半島南部出身の瀬戸口氏が、「デヤ」起源説を出されるのは、こういう「デヤ」の類に、しぜん、よってもしられるのか。ところで、「デヤ」とあるのは、どう解すべきものであろう。——ことによると、「デア」に等しいものかもしれない。ともあれ、接続「ニー」があるのからしては、私どもは、この川辺郡の実例に関しては、文末訴え音を云々することができない。

すくなくとも、私どもは、こういうことが言えよう。「文末訴えア音」は、その発出法と音の性質とからして、にわかには、古態のものなどとは言いがたいようだとしても、これが、今後、新生のものであるかのようないきおいをもって、おおいに広まっていくようではあり得まい、と。すなわち、今日の状態からするのに、「文末訴えア音」をおこす習慣は、今後、より広く蔓延するだ

ろうとは見られない。

「文末訴えア音」が、「アーイ」などの形に発展する事態も、見ることができた。(P.105)このような方向も注視される。しかし、「文末訴えア音」の将来が、この方向にひろがっていきたくらうとも思われぬ。むしろ、近代の言語生活は、この種のものによる訴えかたを、他の有形文末詞利用による訴え方法に、脱化・転化させようとしてはいはしないか。

最広母音「ア」が訴えの料に用いられることには、いくえにも注意をはらう必要があると思う。音声に関する表現心理のしぜんとはいへ、まさに的確に、よくも「ア」音がとり用いられたものである。「ア」音は、しかるべき音声表現法の座にひき出されたものと言えぬ。

「ア」音に関連する他種の文末訴え音も見ることができぬ。が、それらと「ア」音とは、有力な一線で境される。このような「ア」音の活動を見る時、私どもは、文表現での、人間の、文末での訴えかたが、どういう性格のものであるのかが、よくわかるような気がする。

「文末訴えア音」に関しての、表現上での品格の高下などは、にわかには言えないように思われる。

### 第三節 文末訴え「エ」「イ」「オ」「ン」音

「文末訴え音」としては、とくに「ア」音が注目されるが、なおいくらかの、問題とすべきものがなくはない。〔a〕の音相ほどに顕著な音相をとるものではないが、やはりそこに訴えの心理はうごいているとしうるものがある。

「エ」音

たとえば、東京方言下・愛知方言下などの人が、「……………ネーエー」などと

言う。こういった「エー」は、文末訴え音とすることができるか。（「あの ナエ。」などの「エ」は、「ナ」を言うさいに派生する自然音とも見られるので、「ナー」に類する「ナイ」「ナン」などととも、「ナエ」を一体の文末詞形とする。）

中国方言内では、「どうどうして クダサイマセエ。」などの言いかたも聞かれる。こういう時の「エ」も、文末訴え音とされるか。この種の観察をすれば、なお、他地方の方言についても、「文末訴えエ音」を見ることができよう。

### 「イ」音

「そう カイ。」などのばあいは、「カイ」が一体の文末詞形であると見られる。「なんだイ？」のばあいは、「イ」が文末訴え音と見られる。

「イ」文末訴え音が認められはするが、一方には「イ」文末詞とされるものもあり、諸方言上、両者は微妙にかかわりあって存立している。それゆえ、今の「文末訴えイ音」の記述は、のちの「イ」文末詞記述のところ、合わせとりおこなうことにする。

### 「オ」音

「文末訴えオ音」が認められる。

「宮城県宮城郡根白石村」（『全国方言資料』第1巻）には、

*m*………… ミナ ソノ ホレタモンダネォ

みな その（通路が）掘れたもんだね。

というのが見える。「ネ」のもとに小さな「ォ」がある。「ネ」の〔e〕母音から「ォ」の〔o〕母音に開けているので、これは、「文末訴えオ音」を認めしめるものかと思う。

土井八枝氏の『仙台の方言』にも、

「わだっしゃ、なんつ、ぶまなんだか、毎日毎日うざにはいてよーやっと生きておりしてがすお」（私はなんて不仕合せでせう。毎日〜苦勞をしてやつと生きてゐるのですよ）

などと、「がすお」と言いおさめる例がいくらか見えている。「お」は文末訴え音と見ることができようか。（この「お」は、ことによると、のちに説く名詞系文末詞「モノ」「モン」に相当する「オン」の下略形としうるものかもしれない。それにしても、現に「オ」とだけあるのからすれば、これは「文末訴えオ音」だとし得ないこともなからう。）

信州北部内で私が聴取した一例に、

○何々した モンダオ。

何々したもんだよ。

というのがある。（電話のことばであった。）「オ」文末訴え音を認めしめるか。

伊豆諸島の「東京都三宅村坪田」（『全国方言資料』第7巻）には、

fナ＝ ヒルドラォ

なにを するんですか。

の言いかたがあるという。ここに小書きされている「ォ」は、文末訴え音としうるものなのか。

北陸地方の、越前を中心とする南北の地域に、

○アノーオー。

あのね。

○コレオオー。

これをね。

などの言いかたがさかんにおこなわれている。この種の「オー」は、文末訴え音と認めなくてはなるまい。

「ン」音

私が福島県西北部（会津北部）で聞いたものに、

○アッタ ガ<sup>↑</sup>ッソ。

“ありましたか？”（“ありましたでしょうか？”）

○イッテモ イー ガ<sup>↑</sup>ッソ。

“行ってもいいでしょうか？”

などがある。「ッソ」は、文末訴え音とされよう。「ッソ」の発音は、[urʷ]のようなものであった。このものについて私が質問したところ、先方は、“やはりひとつの敬語（ヤッパ ヒトツノ ケーゴ）です。”と答えた。「ッソ」が平板高調に発音されることもある。

大橋勝男氏の教示によれば、群馬県西部山地域内に、

○オンガ チ<sup>↑</sup>ゴー ム<sup>↑</sup>シン。

発音がちがいますね。（老女——私）

との言いかたがあるという。「ムシ」は「モン」である。「ムシ」文末詞に随伴する「ン」は、文末訴え音としてよかろう。——やわらかなおだやかな訴えの気分がここにあると見てよいのだろうか。

ひるがえって考えれば、宮城県地方中心に聞かれる、

○コッチャ ゴ<sup>↑</sup>ザイン。

こっちへおいでね。

などの「ン」も、文末訴え音としてもよさそうに思われる。「ゴザイン」が「ゴザイン」の程度に発音されることもあるが、これとても、「ゴザイ」と言いきるのにくらべれば、ことかわって、おだやかな言いかたであるという。「ン」の文末訴え効果というものが、ここにある。

このさい、また、つぎの岩手県東南隅の一事実をあげておきたい。

○コレ ヨ<sup>↑</sup>ンデ ケラッセア。

の言いかたに対して、

○コレ ヨ<sup>↑</sup>ンデ ケラッセン。

の言いかたがある。「セア」のほうが「セン」よりも「いくらかよい。」「セア」は多く他人に対して言う。”とのことである。「セン」は、「わりあいうちわのことば。肉親どうしなどで言う。”よしである。

諸地方に広く認められる、「ナー」に該当する「ナン」などは、「ナン」一休形の文末詞と見たのがよからう。

先掲の大橋氏教示例にならぶ教示例に、

○キン<sup>ナ</sup> イ<sup>タ</sup>ダン。

昨日行ったのです。

などというもある。「イ<sup>タ</sup>ダン」は、「イ<sup>タ</sup>ダー」に対応するものである。「ダン」は「ダー」に対応する。土地の人は、大きい人に「イ<sup>タ</sup>ダン」を言うなどと言っているそうである。ここにも、「文末訴え音」が認められるか。——土地人は、「そうだ。」を「ソーダン。」と言うことを説明して、「<sup>ナ</sup>ダン。」（「ソーダン。」です。）とも言っているという。

同地に、

○ツ<sup>コ</sup> コトモ <sup>ル</sup>アルン。

つかうこともあります。（老女）

との言いかたもされているという。これには、「<sup>ル</sup>アルン」が目される。この「<sup>ル</sup>ン」も、文末訴え音とされるか。当域には、「文末訴え音」がよくおこなわれているのか。

『全国方言資料』第2巻の「神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村」の条には、

fクル ホーガ イーン

来る ほうが いい。

というのが見える。「いい」のもとに「<sup>ル</sup>ン」がきている。

三河の豊橋方面では、（後記 尾張・三河・遠江に「～ダン」がある。）

○<sup>ハ</sup>ヤク <sup>ネ</sup>リン。

早くねなさい。

などの言いかたがなされている。「ねなさい」の「<sup>ネ</sup>リン」の「<sup>ル</sup>ン」には、し

たしみの情がにじみ出てはいないか。「ン」を文末訴え音としうるのであろう。

『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡畑野村後山」の条には、

*f* タイシタ タケー モンリャー ナカッタン

たいして 高い ものでは なかったですよ。

とある。「ナカッタ」の下の「ン」が注目される。佐渡では、なお他地でも同種の「ン」が見られるようである。

『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

*f* オー ウー ミンナ キタン

みんな 来ましたよ。

などとある。問題としうる「ン」が、能登の他地にも見いだされる。

鳥取県東伯耆内のことばでは、

〇 $\overline{\text{ワ}}$ ガ  $\overline{\text{コ}}$ ター  $\overline{\text{ワ}}$ ガ  $\overline{\text{ス}}$ ラー  $\overline{\text{エ}}$ ー ダン。

などというのがある。(室山敏昭氏の教示による。)

九州地方では、たとえば「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」(『全国方言資料』第9巻)に、

*f* ソェンデ コエーン フトッタンジャロート オモチョルン

それで、こんなに ふとったのだろうと 思っているんですよ。

とある。

「熊本県本渡市佐伊津」(『全国方言資料』第9巻)の条には、

*f* …… ユーカラ アビロン<sup>2)</sup>

湯から(先に) 浴びなさい。

2) 「ン」は敬語。

とある。

「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」(『全国方言資料』第9巻)の条には、

*f* マーイ ヒトツボ フタツボグレア マ スギノキナラ ヒークン

まあ 一坪 二坪ぐらいは まあ 杉の木ならば ひきます。

とある。

天草本渡の昔話の語りでも、「何々じゃ」と言いおさめることばが、「何々じ

ゃん」となったりしているらしい。(「ソギャン シタ モンジャン。」ともある。)

以上では、みな、動詞その他のものでの言いきりのあとに「ン」音が見えている。こうした「ン」に多少の訴え感があることは、否定できまい。

「どこへ行ったの？」の意味の「ドコエ イッタ ン。」などの「ン」は、問いの意をあらわす「ノ」文末詞に該当する「ン」文末詞である。

#### 付記 「キッ」

一つ、不可解な事例があるのを、ここに付記しておきたい。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」の条に、

f ホンナコト キッ

そうですよ。

とある。分かち書きにされている「キッ」は、文末詞的なものと見ざるを得ない。ではあるが、「キッ」は、多分に感声的である。まずは「文末訴え『キッ』音」ともしうるか。(「キッ」は、ことによっては、個人癖のもの、方言習慣のものではない発音としうるのかもしれない。——こうも解されるほどに、「キッ」は、ごく感声的なものと見られる。)

## 第二章 文末詞「ヲー（オー）」

### 一 文末訴え音か文末詞か

第一章で問題にした文末訴え音を前提としてみて、「暑い ナー。」「さむい ノー。」などと言うばあいの「ナ」「ノ」などを見る時、これらはたしかに、成  
形固定の文末詞として理解享受することができる。——よびかけの「さけび」  
が固定せしめられたものとも言えよう。

今からとりあげようとする「ヲー」「オー」（短形の「ヲ」「オ」も）は、成  
形固定の通常態の文末詞として受けとろうとすると、その「さけび」的な要素  
または訴え音らしいおもむきが問題視され、さりとしてこれを、「さけび」的な  
もの、訴え音的なものとして受けとろうとすると、そのつかわれざまの方言習  
慣のいちじるしさ、通常の文末詞同様の安定感を見せた使用ぶりが問題視され  
るものである。私は、九州南部地方にそうとうにさかんな「ヲー」「オー」の  
流行に徴して、ひとまず、ものを、文末詞あつかいしておく。本性・性質の何  
であるかは別として、現実の「ヲー（オー）」の生態のままに、これを文末詞と  
してあつかっていくことが、おそらく妥当なのであろう。

昭和十四年の冬、はじめて薩摩半島南端部の地をふんで、私が、聞くだに奇  
異の感をおぼえたのは、人の発言の文末にひびく「ヲー」（ヲ）「オー」（オ）で  
あった。

○ハヨ イッキャイ ヲー。

早くお行きなさいな。

○コラ アダイガッ ヲー。

これは私のですよ。

（「ヲー」は、[wo:] ないし [uwo:] のように聞こえた。）

ふしぎな「ヲー」「オー」音が聞こえてきた。それまでに聞いたことがないの

はもちろん、ものの本について見得たこともなかったことばを耳にして、私はこの時、異常な興奮をおぼえ、このふしぎなことばの追求に熱中した。土地の小学校の先生にたずねてみると、

○ドゲ イガイダ ガ。

どこへお行きになった？

は、ふつうの言いかたで、

○ドゲ イガイダ ガオ。

は、ていねいな言いかただという。「オ」がつくとそういうことになるのか。私のおどろきは大きかった。

文末詞研究の長い道程をかえりみるにつけても、この時、私がこういう異常なものに耳をうたれたのは、なによりもしあわせなことだった。薩摩南辺に佇立して、私は、「ヲー」「オー」にかくべつの思いを寄せるとともに、文末詞研究のひろがりと深まりとを思いめぐらした。文末詞（当時はこれを文末助詞とよんでいた）のユニークな世界が、幻妙の色に燃えつつ開けさかえているのが見はるかされた。文末詞研究は大業だぞと、かくべつの緊張をおぼえたのだった。

## 二 九州地方の「ヲー（オー）」

以下に、九州地方についての調査結果を披瀝したい。諸家のご研究にもまたふれたいと思う。

鹿児島県下に、広く、「ヲー（ヲ）」「オー（オ）」がおこなわれている。これは、文末訴え音に近いものとも考えられるけれども、もはやそれとは区別しうる「文末詞形」のものと見られる。（第一章第三節にとりあげた「文末訴えオ音」とは区別して、この地方の当事象を見る。）——「オ」とともに「ヲ」のあることを注意したい。むしろ、私の耳を当初にうったのは、「ヲ」であった。このため、いきおい私は、「涙ながらに読もうものを！」などの「を」を思いおこしたのもあった。そういえば、古代語にも、感動表現の「を」どめの言

いかたがある。

木之下正雄氏は、「間投助詞ヲについて」（鹿児島大学教育学部教育研究所『研究紀要』第10巻 人文社会科学篇）で、

サツマ方言では、格助詞ヲと間投ヲとは別語として意識されている。別語意識の根柢となっているものは、形態、用法、意味が違っていることである。と言われ、“古代語の間投助詞ヲ”に関しては、“用法”上、“命令、意志の文である。”とも“会話の例が主で、”ともされ、

間投ヲは、聞手に向って事柄について念を押す言い方であって、サツマ方言の間投ヲとほぼ同じであったと思われる。

と述べていられる。

鹿児島県地方の「ヲ」「オ」が、古代語にどういう縁由を持つものであるかは、私自身、なお推論しかねる。けれども、「ヲ」「オ」が、特定の文末詞として当域に早くからおこなわれていたらしいことは、じゅうぶん認めることができる。

瀬戸口俊治氏は、かつて私の質問に対して、「オー」は「もう」ではないかと答えられた。「オー」にそのような用法もうかがわれる。しかし、「ラー」は「オー」からおこり得たであろうか。私は、「オー」よりも「ラー」のほうがさきのものではないかと考えている。じっさいに「ラー(ヲ)」の安定したおこなわれかたは、注目にあたいするものがある。——(かといって、私は、この「ヲ」に、古代語の「を」をすぐにむすびつけることなどは、まだしかねている。)

「ヲ」の代表的な用例をあげてみよう。薩摩半島東南辺のものである。

○ユダ<sup>ン</sup>ニ<sup>ユ</sup> シェ<sup>ン</sup>ヂ<sup>ハ</sup> ヨ<sup>ハ</sup> イ<sup>ッ</sup>キ<sup>ヤ</sup>イ ラ<sup>ー</sup>。

あそばないで早くお行きなさいよう。（“やさしいことば”）

○ソ<sup>ン</sup>ナ コ<sup>ヅ</sup> スイ モ<sup>ン</sup>ヂ<sup>ャ</sup> ナ<sup>カ</sup> ラ<sup>ー</sup>。

そんなことをするもんじゃありませんよ。（“ヨカことば”）

この地から東にすぐ、例の開聞歎が見はるかされる。私は、ふもと近くの神社

について、“あれは、なんというおやしろですか？”とたずねた。すると、相手の老年男子は、

“ヒラキキジンツァ ヲー。” (p. 58)

牧聞(ひらきき)神社ですよ。

と答えててくれた。「ヲー」がつけば、たしかに表現はよいものになるようである。——そのことが、土地人の意識にも明らかである。上例の「…… イッキャイ ヲー。」のばあいも、土地の人は、“「ヲ」をつければやさしいことばになる。「ヲー」は「よう」よりも高い。”と説明してくれたりした。昭和十四年時、当地方で接した小学校教師は、「ヲー」について、“ひじょうな尊敬の意がある。”とも説明してくれた。

ところで、昭和四十三年には、一つの異常な経験をした。鹿児島県出身の一女子大学生は、「ヲー」についての私の話題に答えて、“これをていねいと言われて変な気がしました。”と言ったのであった。「ハヨ イッキャイ ヲー。」というので、叱責になることもあると強調した。わからないことはない。このばあい、叱責も、「早く行きなさい。」と言って叱責するようなものではないか。叱責にはなっても、表現にていねいさのあることは認められるのではないか。

今日まで私は、多くの人に「ヲー(ヲ)」「オー(オ)」の表現価値を聞いてきている。こうして得られた答えの最大公約数は、「ていねいな言いかた」というのである。“尊敬語ではない。よっぽどしたい人に言いすてることば。”と説明する人もあったが、その説明も、“親密に近いものをあらわす。”という意見に近よせて受けとることができるものではないかと解される。

「ヲー(ヲ)」「オー(オ)」は、文末に、もっとも自由につかわれている。名詞におわる言いかたをつつんで「ヲー」などと言うこともさかんであれば、命令形におわる言いかたをつつんで「ヲー」と言うこともさかんである。

「ヲー(ヲ)」「オー(オ)」は、県下で、男女老若の各階層に聞かれる。県下諸地の実例をかかげよう。薩摩半島枕崎の一例は、

○ア<sup>ス</sup>バンヂ <sup>ハ</sup>ヨ イ<sup>ッ</sup>キ<sup>ャ</sup>イ ヲー。

あそばないで早くお行きなさいよ。 (大人→小人)

である。「ヲー」の、はっきりとした [wo:] が聞かれる。薩摩北部例には、

○オ<sup>マイ</sup>モ イ<sup>ッ</sup> ガ。ヂ<sup>サン</sup>カ<sup>タ</sup>ズイ オ。

“オマイ (友人にちょっといいねに言う。) も行こうよ。老人の所までよ。”

(最後の「オ」は、尊敬であるという。)

○ハ<sup>ン</sup>チ <sup>コ</sup>テ ク<sup>レ</sup>ン ナオ。

“あんたは買ってくれないじゃない?” (幼男→初老父)

(この「オ」も、尊敬であるという。)

などというのがある。野村伝四氏の『大隅肝属郡方言集』には、

オ 感嘆の助辞。

雨が降つて来申したオ 雨が降つて来ましたわ。

そげなこつやオ そんな事ですかな。

大川が出ちよらオ 洪水が出てゐますぜ。

とある。大隅半島東岸、内之浦の二例は、

○コ<sup>ナ</sup>イ<sup>ダ</sup>, サ<sup>ー</sup>ラ<sup>ガ</sup> オ。ト<sup>レ</sup>タ<sup>ガ</sup> オ。

こないだ、さわらがね。とれたんだよ。

○ム<sup>ッ</sup>カ<sup>シ</sup>ソ<sup>ナ</sup> オー。

“難しそうなよ。” (小女)

である。

県下の甕島にも、種子島・屋久島にも、吐噶喇列島内にも、問題の事象が見られる。ただし、種子島については、瀬戸口俊治氏から、「見た オ。」は「ミ<sup>ト</sup>ー。」になっており、「ヨ<sup>カ</sup> オ。」は「ヨ<sup>コ</sup>ー。」になっているとの教示を受けた。氏は言われる。“「オ」は隠れて在ったが、とくに上品とは言えぬ。鹿児島でのような待遇品位は持たない。”ところで、硫黄島では、

○ア<sup>ター</sup> セ<sup>ン</sup> ガ<sup>オー</sup>。

が、「オラ セン ドー。」(おれはしないよ。)に対するていねいの言いかたであるという。

「オー」「ヲー」は、なにがな文的表現の、ごくみじかい特殊形のもの、はなはだしい転訛形かもしれない。

「オ」は、文末詞「ナ」その他に下接してあらわれることも、県下に多い。その屋久島方言例は、

○ヨカ テンキヂャ ナオ。

いい天気ですね。

(「ナオ」をよく言うという。)

○ソソタ シラン ナオ。

それは知りませんね。

などである。薩摩半島東南辺の一例は、

○ヤマガエ イダチュ ガオー。

“山川へ行ったそうよ。” (中女→老女)

である。(瀬戸口俊治氏による。氏はまた、“「オ」系の文末部は、純粋な気持で述べられる時、最も高い敬意表現となる。”と言われる。氏が、「山川在の男の人のことば」として教示せられたものに、「ナユ シオイ コー。」(何をしてるね?)というのものもある。「コー」は「カオ」からのものであるという。)  
「オ」の他文末詞との複合では、県下に、「ナオ」形のおこなわれることが、もっともいちじるしかろう。

○ソゲン シヤン ナオ。

そんなにしなさんなね。

(「ナオ」は女がつかうともいう。)

は、大隅内之浦の一例である。

つぎに、鹿児島県下に関連する宮崎県下を見よう。

西南部域に、鹿児島県下でのと同様の「オ(オー)」がおこなわれている。

都城では，“弟に向かって「イケン シタッ ヨー。」（どうしたのだい？）と言ひ，おやに向かっては，

○イケン シタッ オー。

どうしたんです？

と言う。”という。「オー」には“敬語が入るとる。”とのことである。おなじく日向西南部内の小林市方面でも、「オ」がよく言われている。

○モ イッキ キャンサ オ。

もうすぐ来ますよ。バスが。 （中女→青女）

は，その一例である。日向中部西奥の米良地方にも，いくらか「オー」が見いだされる。さらに北部の，例の椎葉村にも，「ヲー（ヲ）」がおこなわれているよしである。小田寛次郎氏の「椎葉紀行」（『方言研究』第一輯）には，

テーギメシモーシタナラー，御苦労様でした。

というのなどが見える。「ナラー」とある。「オルカラー，おいでになりますか。」などともある。小田氏の記述には，「オー」は見えていない。柳田国男先生の「あいさつの言葉(三)」（『民間伝承』第十卷第五号）にも，「ヲルカラ 日向椎葉」の例が見えていて，「オ」の例は見えない。

上記の地域とせなかわせにあたる熊本県奥地にも，「オ」が見いだされるか。私は，かつて，砥用町で，「ヤカマンカッタ オ。」というのを聞いた。その時，私は，「ずいぶんやかましかったことですよ。」の注解をほどこしている。熊本県下の他地域では，問題の事象を，私は，ほとんど聞き得ていない。南部球磨郡下の，薩隅地方に関連の深い地域内でも，私は，「オー」などをいまだとらえ得ていない。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には，

*m* イッチョーモ アワントオン

ちっとも 会わないが。

の言いかたが見える。この最後の「オン」は，上乗の「オー」などに関係のあるものなのかどうなのか。

「長崎県福江市上大津」(『全国方言資料』第9巻)の条にも、

f アー ゴザレオ デテ<sup>2)</sup>

ああ おいでなさい、出て。

2) 「アテ<sup>ー</sup> ゴザレオ」の倒置。

というのが見える。「おいでなさい」と言いかえられている「ゴザレオ」は、鹿児島県下のに近い文末詞「オ」をとらえしめるものか。——五島列島の南部は、九州南部域の方言事象に関連するものを、点々、見せることがすくなくない。私は、五島列島南辺などに鹿児島県下のに等しい「オー」があってもふしぎではないと考えるものである。九州西辺の方言状態は、九州南部域のそれによくつながっている。「いつも」の「イッモ」など、例の促音化も、五島南部に認められて、ここと九州南部域との関連底脈のつよさが感得される。

### 三 九州外に関連事象を見る

九州の、南部域ならびにそれに関連する地域での「ヲー（ヲ）」「オー（オ）」に似たものが、九州外の地域でも指摘されそうである。

かつて、京都市に属する北の中川郷の調査にしたがった時、私は、

○シヨ<sup>ー</sup> ナイ ウォ。

しかたがないわな。

○カンガエレ<sup>ー</sup> ヘン ウォ。

考えられないがな。

○カンガエレ<sup>ー</sup> ヘン ウォ。

考えられないがな。

○ソーヤ<sup>ー</sup> ウォ。

そうじゃがなあ。

○イッスンモ<sup>ー</sup> アカン ウォ。

“さっぱりあかんがな。”

といったような「ヲ」を聞きとめ得た。当時はこれを、かならずしもすぐには

九州南部のものにはむすびつけて考えなかったのであるが、あらためて今日、上の諸例を熟視するのに、あるいはこの中川郷のも、九州南部のものに近いものかとも思われるのである。もっとも、疑問がないではない。諸例が「ウォ」の上がり調子に発言されている。土地の人も、“「ウォ」も、なげやりの強意とっている。”と言った。用語法なり品位観なりが、かならずしも九州南部のと同然ではない。「オー（オ）」はなくて、「ヲ」（ときにわずかに延びる。）だけである。私は、興味を持って、この文末詞「ヲ」についての問い聞きをした。おもな答えには、“男の人がよくつかう。女もつかわぬこともないが。”などというのがあった。（男女いずれにしても、中年以上の人がかうようである。）

「ワ」とかいうものが「ヲ」になることもあり得ようか。ただし、中川郷の「ヲ」が「ワ」に近いかどうかは、まだ、私にはわからない。また、一般論であるが、「ヨ」が「ヲ」になることもあり得ないことではなからう。

ともあれ、近畿にも、なおつぎのように、問題の事象が見いだされる。大阪府下の三島郷の奥のことば、

○ワレガ ドナイ シテンノン カエ オー。

お前どうしているのかい、よう。 （老人間）

のような言いかたがある。（山本俊治氏「会話における述部表現——助動詞・文末助詞の表現性について——」『武庫川学院紀要』第一集）南要氏の『和泉郷荘村方言』には、

ワイヤオ 私ですよ

オニゴトシテンヤオ 鬼ごととして居るのだ

などの言いかたが見える。『和歌山県方言』には、

イカマイヲ 行くまい

などとある。これには「ヲ」が見える。鈴木敏雄氏の「志摩町越賀・和具の会話」(『三重県方言』13)にも、

はってー まあかったをー (はいはい。も刈ってしまいました。)

とあって、「をー」が見える。

探索の目を、さらに、中部地方にはせてみる。能登半島西岸の富来町では、かつて私は、

○ヤスイ コトデ タツ ガオ。

“このごろ、家は安いことで建つのに。”（“むかし、高い金で建てた、ということをおくむ。”）

というのを聞き得ている。「タツ ガオ」の「ガ」は、「建つのに」の「のに」にあたろう。「オ」は、最後につけそえられた文末詞と見られる。愛宕八郎康隆氏も、能登北岸輪島について同種の「オ」をとらえていられ、また、能登東北端部珠洲市の馬場宏氏は、その『能登木郎方言考』（自家版 昭和32年）で、

行ったよ＝行った<sup>ト</sup>オ

食べたよ＝食べた<sup>ト</sup>オ

と記述していられる。能登に「………… ガオー。」の言いかたは、だんだんに聞かれるのではないか。「オー」は、九州のに類するものなのかどうか。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

f………… オススリ ヤッタオン

うす(臼)すり だったですよ。

とあって、「オ」が見える。

興味ぶかいのは、信州の事象である。『信州上田附近方言集』には、

オ(助) 古代のヲの感嘆と同一である。「カッテキタオ」（買って来たよ）の意 「アアダメダオ」。

と見え、

ヲ 川中島、更科地方にて使用す。古代の「ヲ」の感嘆詞と同一なり。

ガッて来たヲ

あゝ駄目だヲ

とも見える。佐伯隆治氏は、「信州北部方言語法（上）」（『国語研究』第十巻第

七号)で、

(ヲ) 感嘆の意。終止形につく。

ヤダセッタヲ (いやだと云つたよ)

トテモ痛カッタヲ (とても痛かつたなあ)

と記述してられる。青木千代吉氏・福沢武一氏にも、「オー」のご研究がある。福沢氏の『信州方言風物誌 第一』には、

ドーのもとの形がダオ。そのオは深い感動をこめている。次の古代歌謡においても同様、なお、ちょっと念のため申し添える。古典においてはヲと表記される。オと別なものではない。(中略)

ダオ・ドーはソーダオ・ソードーとなるのを初めとして、無理ダオ・聞いたオ云々となる点、全地点共通。

などがある。『全国方言資料』第2巻の長野県西筑摩郡・更級郡の関係の記事にも、「オー(オ)」が見える。本県下での短い「ヲ」や「オー(オ)」には、鹿児島県下のに近いものが認められはしないか。しかし、用語感情のうえには、かならずしも九州南部のとはおなじとはしがたいものがあるかもしれない。(九州南部では、ともかく、「ヲ」や「オ」を比較的ていねいなことばとしているのが注目される。)

つぎは、関東地域である。

千葉県南部、上総と安房との境に近い上総の地で経験したことである。たとえば、東岸の御宿町では、

○アツダ オー。

何だえ(よお)?

などと言っている。御宿とは反対の、西がわの上総南部山地での一週間調査では、つぎのような「オー」を聞くことができた。

○キ<sup>ア</sup>ー、クルマ<sup>ア</sup>ノ ウエカラ オ<sup>ア</sup>ッコッタ<sup>ア</sup>ンダ オー。

きのう、車の上から落ちたんだよ。(中男)

○キョーワ ニクダー オー。

きょうのおかずは肉だよ。 (中男)

とかく、男性が「オー」「オ」を言っている。上の発言をした中年男子は、「オー」について「よ」だと説明してくれ、かつ、“心やすい人につかうことば。女はあまりつかわぬ。”と言った。ここでの調査期間中では、上の発言者以外の人からは、「オー」があまり聞かれなかった。しかし、土地の学校長からは、“「オ」は房州ことばだ。”との教示を受けることができた。学校長の口授された例は、つぎのとおりである。

○ソーダ オ。

“そうだよ。”

○オイネー オ。

おえないよ。

上総南辺のことばには、房州ことばとの交錯がある。双方たがいに、「オ」を有するか。

さて、このような「オ」は何だろう。「オ」をつかえばよい言いかたになる、ということはない。その点、九州南部のばあいのおもな傾向とはちがうが、さりとて、彼我の相違がすぐに認められるようでもない。過去の文献では、宮本馨太郎氏の「房州平館方言資料」(『方言』第六卷第七号)がある。これに、

イガネオー

行かないよ。

カーネーオ

書<sup>マ</sup>ないよ。

などの例が見える。なお、本記述には、

イグペーサ

イグペオー

行かうよ。行きませうよ。

ヤーバツシ<sup>ン</sup>エーオー

## ヤーバツシエーサー

歩きなさい。行きなさい。来なさい。いらつしやい。

などの挙例が見える。「オー」は「サー」に対応するものらしい。やはり、よいことばとは言えないものらしいが、依然として、感動音的なよびかけことばではある。

つぎに問題とされるのは、「東京都三宅村坪田」である。(『全国方言資料』第7巻)

*m*オー ジャー イケオ<sup>7)</sup>

そうか。それでは 行きなさいよ。 7) 「さようなら」の意。

*m*マッタク ツイカッタヤォー

まったく 強かったよ。

*f*オー オッコァネー ヨロコビダジヤァォ

たいそう お喜びですねえ。

*f*ヒトバンキニ サンゴーツ ヤロカヤァォ<sup>4)</sup>

一晩に 三合ずつ 飲むのですか。 4) 「ロ」の母音は狭い。

などの言いかたが見える。最初の例では、明らかな文末詞「オ」が見られよう。つぎの三例では、小書きの「ォ」が見られる。「ヤ」長音のはてに「ォ」があらわれたりしているから、やはりこれも、たいせつな訴え要素なのであろう。

飯豊毅一氏は、「八丈島方言の語法」(国立国語研究所論集1『ことばの研究』)で、

○ワア, アカソオ。

まあ赤いこと。

などの記事を示していられる。ここに「オ」がくまれるのかどうか。

関東地方を北に出はなれては、もはや今、問題とすべき「オ」などの事象を見ることができない。

もっとも、東北地方には、上述の「オ」「オー」にまぎれる、別個の「オ」

「オー」がある。かんたんにそれに言及すれば、たとえば仙台方言などで、

○オラ ヤンダ オ。

○トナリノ ンバチャンヌダ オン。

“となりのおばちゃんによ。” (田村寂秋氏教示)

などと言う。仙台方言での「オ」は、「オン」であるのが本体である。「オン」が「オン」にも「オ」にも発言されたりする。土井八枝氏の『仙台の方言』には、

「わたしのけたいがみさんお文珠さんでござりますお」(私の守り本尊は文珠様ですよ)

などがある。東北六県下に、「オ」よりもむしろ「オン」を見いだすことができる。東北地方に、「オン」は、かなりさかんであるとも言うことができよう。

この「オン」は、「もの」からきたものであろうか。のちにあらためて転成文末詞の名詞系文末詞をとりあつかうところで、これを問題にしたい。(昭和十五年、宮城県下に来て、はじめて「オン」に接した時、南九州のに対応する例の「オ」かと、胸をときめかしたが、やがて、その経験の場で、これは「もの」からの転訛形であることが理解された。)

「もの」系の「オ」「オン」などはとり除いて、ただ感動音的と見られる「オー」「オ」の存立を考えてみる。以上に述べたとおり、いわば偶然的に、そここの地に問題の事象が発見される。しかも、ものと用法とは、九州南部域のにかよわないとはしがたいのである。

九州のには拘泥しないで考えれば、つぎのようなことが言える。さきに文末訴え音としたものにも近い「オー」「オ」、感動音とも言えるもの(——しかもそれが、かなりよく形をなしているので、今は、文末詞類として見ることにするが)、こういうものは、いわばどこにでもしぜんに生起してよいものではなかったか。その自由な生起のはてには、九州南部域の、慣行いちじるしい「オー」「ヲー」などとはちがったおもむきが見られても、自然性の濃く認められる点では、かれこれが、同律のものと見られる。

## 第三章 ナ行音文末詞

### 第一節 総説

定形文末詞の最初にとりあげられるのは、きわめて感声的である単純形の文末詞である。

いったいに、文末詞は豊富であって、分派・類型にとみ、かつ、つぎつぎに新しいものが発生・成立してもいる。そういう状勢のなかにあつて、基本的な地位をしめるのが、ここに感声的文末詞と考えるものである。——たとえば、「暑い ナー。」「さむい ノー。」などと言われる「ナー」や「ノー」などがそれである。

この種の感声的文末詞は、にわかには、その起源を云々することができない。ものは、本来的に、感声の文末詞であつたらうかと思はれる。こういう類のものを、私は、「原生の感声的文末詞」とよんでいる。

遠い起源では、非感声的だったものが、時とともに變じて、今は、このように感声的なものになっている、などと解する余地は、ほとんど、ないのではないか。

もともと（原生的に）感声的なものであつたと想察して、その発生を考えれば、これは、不可知的な古さを持ったものだと想定される。「ナー」「ノー」「ネー」など、今日、普及もはなはだしいが、それがなお感声的であるのを見るにつけても、私どもは、この感声的なものの日本語史上での起源の古さを思わないではいられない。

さて、日本語「文表現法」の特質の顕現として、対話「文」表現の収約点にたつ文末詞は、その存立と活動とが、文字どおり旺盛である。その文末詞活動の本態を、もっとも簡明直截に示すものが、感声的な文末詞である。この類の

文末詞は、全文末詞中、原本的な地位にたつ。(感声的文末詞が、もっとも原始的な文末詞と認めうる相貌・性格を有することは、多言を要しないであろう。)

単純形の感声的文末詞は、全文末詞の中であって、基本的類型をなすとも言うことができる。

※ ※ ※ ※ ※

原生の単純形の感声的な文末詞としては、ナ行音文末詞・ヤ行音文末詞・サ行音ザ行音文末詞を認めることができる。(かつては、私は、感声的文末詞について、内部に準感声的なものを見分けたりもしたが、今日では、その区別をあまりとりたてなくなっている。)

これらのうち、弘通度のもっとも大きなのは、ナ行音文末詞である。ヤ行音文末詞がこれにつぐ。ナ行音文末詞に属するものは、だいたい、「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」であり、四者は、いわゆるナ行音のありうる大部分にわたっている。しかも、分布・存立のうえで、この四者は、たがいにつりあい、張りあっており、緊密な存在連関をなしている。そのさまは、まさに四者を、ナ行音文末詞として一括せしめるものである。この点を注視すれば、私どもは、とくにナ行音文末詞をとりたてて、感声的文末詞の基本的なものとするすることができる。ヤ行音文末詞としうるものは、「ヤ」「ヨ」などであって、それらの相関的存在の様相は、ナ行音文末詞四者のばあいほどにまとまったものではない。分布上でも、全国的な普遍性とか一般性とかの点で、おそらくは、ヤ行音文末詞は、ナ行音文末詞に劣る。

今、私は、ナ行音文末詞をとりあげるにあたって、日本語現実態の中でのその活動体系の広大であることを思い見、いかにこれを記述するかに悩む。

すでに述べたように、ナ行音文末詞の「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」四者(「ヌ」も、いちおう問題としなくてはならない。)は、一小方言内にあっても、しばしば、

相互に密接な存立相を示し、機能的連関がいちじるしいのをつねとする。「ナ」なら「ナ」の一つをとりあげて、一方言あるいは一地域の記述をおえることには、無理があるとも言える。

しかしながら、おのおのごとに用法分化の複雑な「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」の四者にわたって、各方言をつらね見つつ、ナ行音文末詞の統一的記述にしたがうことは、私どもにとって、すこぶる困難のわざである。叙述の明確をたつとぶとすれば、ここはやむなく、「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」おのおのごとの、いわば分析の記述にしたがうほかはない。——このさい、たとえば、「ナ」を記述しつつも、その、「ノ」や「ネ」との対比関係をつねに顧慮しつつ筆を進めるべきことは、言うまでもない。

以下に、私は、感声的文末詞の何行音のばあいにも、その行音に属する一つひとつを、記述の単位とする。

## 第二節 「ナ」の属

### 一 はじめに

いわゆるナ行音文末詞の「ナ」は、現代諸方言上での、総文末詞の中での雄とも見ることができようか。「ナ」は、みずから単独で口話の文表現の最末にたちはたらき、また、他の文末詞とのさまざまな複合形をおこして、文表現末尾にたちはたらく。自身、単独のはたらきといい、複合形をなしてのはたらきといい、「ナ」ほど多彩多角の大活動を見せているものは、他になかろう。「ナ」が、現代日本語の全方言生活（言語生活）上で、なかんずく日常的なものになっているありさまは、瞠目にあたいする。

感声的なものが、おのずから流通度を高め得ているのは、至当のことであろう。感声、感動に属するものは、本来、人間の心理に密着したものだからである。——人のいるところ、人の行くところ、人のうごくところに、

つねに人の心に即応した、感声のはたらきがある。

感声の文末詞「ナ」の表現機能は、単純一様ではない。「ナ」と言ってよびかけることもあれば、「ナ」と言って問いかけることもある。感声的な文末詞には、ことに、その表現機能、意味作用に、微妙な分化が認められる。それにしても、基本的な表現機能は、単直なよびかけというものであろう。文末詞は、本来、対話効果の徹底を期するはたらきのものであり、話しの内容を相手に伝えて念いりによびかけることを本性とするものである。

用法上、なお、言うべきことがある。一つの「ナ」であっても、方言によっては、そのおこなわれる年層・性別がちがったりする。また、「ナ」が、甲方言では上品の語としておこなわれるかとおもえば、乙方言ではさほどではない、というようなことがある。「ナ」の、「ノ」や「ネ」とつれあうつれあいかたにも、方言による変差がありもする。「ナ」が「ノ」とともにおこなわれる方言にあっても、その使用頻度に大小があったり、品位上に高下があったりすることは、また、およそ通例のことである。

以上のような、存立の複雑さが、表現機能の分化の複雑さからみあっている。こういう状態は、記述上、精細に分析されるべきものである。——そのことは、けっして容易ではない。

「ナ」は、そのはたらく現場にあって、——上述のような複雑相の中のはたらきで、その音相をさまざまに変化させる。第一には、「ナ」短呼形であらわれ、また、「ナー」長呼形であらわれる。第二には、「ナ」が、「ナイ」や「ナン」などの変転形であらわれる。

「ナ」の長短両呼形については、今、つぎのように考えておきたい。原本的に、短呼の「ナ」を受けとる。「ナー」は、随時の変相と見る。原本の「ナ」も、じつは、それが文末で発言されるものであるだけに、じっさいには、純粹短呼にはとどまり得ていない。文終止点で、「ナ」は、音声学的には、かなら

ず若干の母音長呼を示す。それはおくとしても、文末の上昇調の声調などのばあいは、単呼気分の「ナ」も、明らかに、末母音のなにほどかの伸びを見せている。「ナー」とある長呼形は、じつにわかりやすい、あらわな長呼形というのにはかならない。それにしても、「ナ」短呼でおわるばあいと、「ナー」長呼でおわるばあいとを弁別することはでき、かつ、現実には、両者の音相上の相違も明らかである。両者は、にわかには合併しがたいようにも思われる。この点を解決して、私は、つぎのように考える。(――音声現象に関する、例の音韻論的解釈を援用するのである。)「ナー」や「ナ」などなどでは、長呼のさまざまな音声現象が見られる。しかし、これらの現象形の底にあるものは、音素的な「ナ」文末詞である、とする。こう考えれば、私どもは、通常「ナ」「ナー」に関しても、一元的に「ナ」文末詞を認めておけばよからう。第二の、変転形としたものは、その形態が、音素的な「ナ」に属せしめるにしては、あまりにも特徴的である。このため、私は、「ナイ」や「ナン」などは、「ナ」に対する別形と見る。

しかし、「ナイ」形や「ナン」形の成立と活動とが、「ナ」文末詞の広汎な活動の内におこったものとされるのは、言うまでもないことである。したがって、文末詞の表現機能を包括的にとらえる見地では、私どもが、「ナ」に対する「ナイ」なども、注意ぶかく、包括的にとらえていかななくてはならないことは、自明である。

## 二 南島地方の「ナ」系文末詞

地方別に見ていくとして、最初に南島地方を見る。

南島地方に見いだされる「ナ」は、たとえば九州地方の「ナ」と、まったく同質のものであるのだろうか。この点、私には、断言しがたいものがある。しかし、形態上、南島のものが、「ナ」として観察されるものであることは、明らかである。今はしばらく、南島地方の「ナ」を、「ナ」系文末詞としてとりあげておく。

与那国島の比川では、

○[K'a:do minun̄ki naijafija hiru n̄a]

カードがなくなれば帰りますか。

のような言いかたがされているという。また、

○[anja k'at'ant'in nsaminu n̄ai]

私を書いてもいいではないか。

の言いかたもあるのだという。(高橋俊三氏の教示による。)ここに、「ナ」「ナイ」が見られる。——例は、問いの言いかたである。

宮良当壮氏は、「南島方言採集行脚(二)」(『方言』第一卷第四号)で、宮古島の例、

○クリュー、バヌン、フュー、ヂャーン、ナ  
コレ、オ、オレ、ニ、クレ、ナイ、カ

などをあげていられる。

沖縄本島国頭地方では、

○ワナヤーカイチクインナ。

“わしの家へ来てくれない？(対等の者への言いかた)”

○ワナヤーカイチトラスンナー。

“わしの家へ来てくれない？(下等の言いかた)”

○ワッターヤーカイチトラシミソーインナ。

“私の家へいらして下さいますか。(上等の言いかた)”

のように言う。——これらも、問いの表現の「ナ」の例である。

ところで、同地方では、

○アンエミセンナー。

“そうですか。(ふつうの言いかた)”

○アンエンナー。

(“うえの下品な言いかた”)

○アンエンナーハー。

(同上)

のような言いかたもしている。——受けごたえの「ナ」とでも言うものがここにある。(一般的な議論ではあるが、受けひき・応答の「ナ」も、問いの「ナ」に通じるものを持っているとも言えなくはなからう。「そうですか!」の「か」は、問うように言って、——その問いの気もちを転移して、白紙の態度の受けごたえの心もちをあらわしている。)

沖縄本島に関しては、私は、高橋俊三夫人から、‘文末助詞’例の多数を教示された。

○イッター ヤーン シラサンナー

ɪtta: ja:n̩ ʃirasanna:

あんたの家も 涼しいネ。

○オジーヤ ヤーニ ウティナー

oʒi:ja ja:ni wutina:

おじいさんは 家におったネ。

などは、「ナ」に関する例の一端である。(表記は、もとより、教示されたままのものである。)—「…………… 涼しいネ。」とされているものもあるのが注目される。

沖縄本島北端にほど近い与論島では、

○juge:tfikafa na:. (中女→同)

ゆがいてからね。

などと言われている。またここでは、

○zittʃa: ganai. (老男→中男)

どうかな。

のように、「ナイ」の言いかたもされている。これらは、町博光氏の「与論島朝戸方言の文末詞——資料報告——」(『方言研究年報 統一』1976)に見られるものである。

沖縄永良部島では、

○センセンガ ッモーチ ナ。

先生が“おいでになったか”。

○キャブティ ナ。

来ましたか。

○イキャブティ ナ。

行きましたか。

などと、問いの「ナ」の言いかたがなされており、また、

○ガンディロ ナー。

そうですか。

○ガン ナー。

そう。(応答)

○ガシ ナー。

同上

などというような言いかたもなされている。(島内の集落によって、表現事例の差異が認められる。)

○ワキャ ヤチ ウメン ニャー。

わたしの家にいらっしゃいます?

というような「ニャー」もある。

徳之島の「ナ」例は、

○ウガシ ナー。

そうね。(“自分より年したの人に言う。”)

などである。

大島本島内の「ナ」例は、

○ウガシ ナー。

そうなの。(応答)

○ヤース デュートッ アワン ナー。

うちのじいと会わなかった?

○ヤ<sup>ー</sup>ヌ チュ<sup>ー</sup>トッ アイヤ ショ<sup>ー</sup>ラン トナ<sup>ー</sup>。

うちのじいと会いはしなさいませんでしたか？

○ナンヤ スジ ミシ<sup>ョ</sup>リ<sup>ョ</sup>ラン ナ。

あなたはすしをおあがりになりませんか？

などである。第一例の言いかたに対する“敬した”言いかたには、「ウガ<sup>ン</sup>ダ<sup>リ</sup>ョ<sup>ン</sup> ニャ。」というのがある。「ナ」に対する「ニャ」が注目される。

喜界島では、

○ヌ<sup>ブ</sup>ラン ナ。

上がらない？（同島の小野津での言いかた）

○ヌ<sup>ブ</sup>ラン ナ。（同島早町集落での言いかた）

などと言って、問いの意を表現している。（——これらはともに、中等度の言いかたであるという。気やすい言いかた、おちついた感じの言いかたになっているか。喜界島中間の言いかたでは、

○ワンナ<sup>ー</sup> ヤ<sup>ー</sup>ヌ チ<sup>ー</sup>サ<sup>ン</sup>トッ オ<sup>ー</sup>エ セ<sup>ー</sup>ラン ティ<sup>ナ</sup>。

私のうちのじいさんと会いはしなさいませんでしたか？

などというのも聞かれる。——問いに「ティナ」と言っている。「ティナ」は、上等の言いかたになるものであるという。さて、喜界島の「そうですか。」の言いかたとしては、

○アッ シュ<sup>ー</sup> ナ。

“あ、そうな。”

○アッ シュ<sup>ー</sup>デン ナ。

あ、そうですか。

などが指摘され（小野津集落）、

○アッ シ<sup>ー</sup> ナ。

○アッ シ<sup>ー</sup>デン ナ。

などが指摘される（早町集落）。さてまた、喜界島の小野津で、

○フマカイ ク<sup>ラ</sup>ン ナ。

“こっちへ来んか。”

○アリオバ ミヤン ナ。

あれを“見らんか”。

などと、おこりぎみの表現をし、同島早町集落では、

○アリバ ミラン ナ。

などと言っている。

岩倉一郎氏は、その『喜界島方言集』で、「ナ」につき、

疑問の助詞。か。強く問ひかける語で、何、如何等の疑辭及び不定稱が上に来る場合は用ひられず、又動詞の過去形中「タ」「ダ」「チャ」「ヂャ」形語尾には<sup>△</sup>方を用ひナは附かない。ナは動詞形容詞の連用形に附く時は、ニャとなる。

と述べていられる。「ナ」を「疑問の助詞」とされるほどに、「ナ」は、よく、その方面に用いられているのであろうか。疑問以外のばあい用いられる「ナ」もあることは、上記諸例に明らかであろう。なお、私の調査し得た「ニャ」例は、喜界町中間の、

○ヤーカチ ウモーチ タボーユン ニャ。

家へいらしていただけますか。

などである。——「ニャ」がこのようにも出ている。(各集落で、「ニャ」がよくおこなわれているようである。)

それにしても、以上の南島諸方言に、問いの用法にたつ「ナ」がよく見られるのは、注目すべきことである。

いわゆる南島に属するものではないが、奄美大島本島につづく、北方のトカラ列島もまた（——ここは、九州本土南端地方によく関連する所でもあるが）、問いの用法の「ナ」を見せることがいちじるしい。

○アタイゲ キテ クイヤッド カイナー。

私の家へ来てくださるかな。

は、硫黄島の一例である。（もっともこの例は、「ナ」が単独にはたらく例ではない。）同島の、

○スシヲ オハンナ タモイヤッ ナ。

すしをあなたはおたべなさいませうか。

は、明瞭な問いの「ナ」の例とされよう。——これは、上品な言いかたになっているという。

### 三 九州地方の「ナ」ほか

九州城の文末詞使用の生活を一言でおおうならば、ここは「ナ」文末詞をしきりに用いている、とすることができる。全域に「ナ」がよくおこなわれており、ことに、「ノマンナ。」（飲まない？——と、酒をすすめる。）などと、「ナ」を問いの表現に用いることでは、九州地方が、とくにいちじるしい特色を示している。以下各県について、順次、「ナ」文末詞の生活を見ていこう。

#### 鹿児島県

鹿児島県下に、「ナ」はさかんである。本県下でとくに注意されるのは、「ナー」は「よい言いかた」、「ネー」は「わるい言いかた」とする区別意識である。（ちなみに、「ニー」は「同等以下」に言う、などとされている。）「ナー」は目上のものあるいは年長者に向かって言う、とも言われる。——「ネー」は目下のものまた年少者に向かって言う、と言われてもいる。今日、薩隅方言流の古態敬語法から漸次はなれてきつつある若年層の人たちにも、文末詞「ナ」による待遇表現法は、じつにさかんである。

「ナ」の実例をあげよう。

○アイガテカッタ ナー。

ありがとうございましたね。

これは、大隅南部での一例である。

○スッパイ ゲタチャンタデ ナ。

みんな下駄でしたからね。

これは、薩摩中部での一例である。

○チャライ ナ。

“そうですね。”

これは、県下の一慣用表現での「ナ」である。——土地の人は、これを、ていねいな調子のものであると言う。

県下に、「ナー」に似た「ニャー」もあるか。瀬戸口俊治氏は、氏の生地  
薩摩半島東南隅から、

○ドコカ ニャー。

どこかな？

との言いかたをとりたてていられ、この「ニャー」を「ナー」に対する卑態としていられる。卑態とされる「ニャー」の本源は何であろうか。種子島には、

○コンヤワ ヌキガ フリモーシタ モンニャ。

今夜は雪が降りましょうね。

などの言いかたがあるらしい。「モンニャ」とあるが、この「ニャ」は「ナ」相当のものか。対等・目下にも目上・年長者にも「ニャ」を言っているようである。

いま一つ注意すべき形態に、「ナー」に類縁の「ナイ」がある。

○コーラ ヌダンナ ナラン ナイ。

“これは、油断してはおれないワイ。”

などと言っている。(瀬戸口俊治氏郷土例)氏は、この「ナイ」を、「ワイ」の転と見ていられる。——であれば、これは別問題である。ところで、上村孝二氏は、その「鹿児島県下の表現語法覚書」(『鹿児島大学文理学部 研究紀要「文科報告」』第三号 昭和29年3月)で、「ナイ」をとりあげていられ、

次に珍しいのは甌島の漁民でナイと言う助詞を使うことである。オマイ  
モ コドガ シンデ コマッタイヨーナイ(あなたも子供さんに死な  
れて困ったでしょうね)。クーワ ヨ

カヒヨイ ナイ(今日はよい  
日和ですわ)。ヨカバンナイ(いい晩  
ですわ)。最後の二例は挨拶言葉として用いる。ネーよりも丁寧で年長者が多く使う。

としていられる。——この「ナイ」は、「ナー」相当のものではなからうか。氏の「上甕島瀬上方言の研究」(『鹿児島大学法文学部紀要』文学科論集 第1号)にも、

○ワガモ オメーニ ナゴー ネヤッテ コマツタイヨーナイ。

“あなたも奥さんに永く寝られて困ったでしょうねー”

○コンヤー ヨカバンナイ。 “今夜はいい晩ですわ。あいさつ詞”

などの例が見える。種子島・屋久島にも「ナイ」が見られる。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の、

*m*ンニャ ネンノ イユッカー ナンニャ ケガー センナイ

いや、念を 入れるから なにも けがを しないよ。

は、「ナイ」が「ワイ」を思わせるようでもある。屋久島には、「ナー」に相当する「ナオ」があるか。

「ナ」がおこなわれて「ナー」の音相を呈するのは、通常のことである。「ナー」音は、その、文末詞使用の現場では——ことに強調の度がつよいばあいなど、「ナイ」ともなり得、また「ナン」などともなりうる。「ナイ」は「ナー」の派生形と見ることができる。しかし、当県下には、「ナー」該当の「ナイ」が、さほど容易には認められず、「ナン」にいたっては、これを見いだすことができない。

ナ行音の文末詞の「ナ」「ノ」「ネ」を全国的に見わたすと、かつては大勢力であったらしい「ノー」が、しだいにその勢力をよわめて、その座をとりあえずは「ナー」にゆずってきたようであるが、本県下では、由来、「ノ」とは別個に「ナ」がさかんであるらしい。

※ ※ ※

「ナ」文末詞が、他の文末詞と合体して複合形をなす。本県下でのそのおこなわれようは、以下のとおりである。

一つに、「ナーナー」の形のもがおこなわれている。「アンナーナー。」(あのね)などと言っているという。(上村孝二氏「薩隅方言問答」『鹿児島師範学校教育研究所紀要』昭和24年4月)

「ヨ」と「ナ」との複合した「ヨナ」複合形がある。

「ゾ」の「ド」と「ナ」との複合した「ドナ」がある。

○ツゲン ユー ドナー。

そんなに言うわねえ。

は、大隅東岸の一例である。この種の「ドナ」は、いわゆる薩隅地方によくおこなわれている。(肥後南部、日向西南部にも、よくおこなわれているしだいである。)

「カナ」(カナー)、「カイナ」(カイナー)も、よくおこなわれている。

○コンヤ ユッガ フンソ カイナー。

今夜、雪が降りそうなかいなあ(降りそうだかねえ)。

は、大隅南部での一例である。

「カイナ」が「ケナ」にもなっている。

○コン ユオワ イクラ ケナ。

この魚はいくらですか。(老女→中女)

は、薩摩半島東南隅での一例である。(瀬戸口俊治氏教示)

「トナ」の言いかたも、県下によく見られる。——九州域には、「トナ」をもって問いの表現をむすびあげるなど、「トナ」のおこなわれることがいちじるしい。

○オハンナ ドケ イッキャ トナ。

あなたはどこへ行きなされる?

は、薩隅での、問いの「トナ」での一例である。「トナ」と「トヨ」とを対置してみることも、できなくはない。そのさい、「トヨ」の言いかたのほうが、より低い言いかたと見られる。

鹿児島県下に、「タイ」はおこなわれていないが、「トイ」はある。『全国方



らの「オナー」に「オマンナ」などのかげが認められるのかどうか。「アン  
オナー。」は“下品な、聞きぐるしい、新しい方言。”ともあった。

### 宮崎県

宮崎県下一般にもまた、「ナ」がよくおこなわれている。諸地方ともに、「ナ」のむずびを、よい表現法としている。県下中部西奥の西米良では、土地の人が、“自分より上のもんなら「ナー」。「ネー」は、自分の朋輩か孫などに言う。”と説明するのを私は聞いた。同地方での問いの「ナ」の例は、

○ナゴ<sup>ー</sup> コザ<sup>ッ</sup>ッタガ、ゲン<sup>キ</sup>ジャッタ ナ<sup>ー</sup>。

長く来なかったが、元気だったね？

○カズ<sup>ヨ</sup>シャ ド<sup>ケ</sup> イカ<sup>イ</sup>タ ナ<sup>ー</sup>。

一榮さんはどこへ行きなされたね？

などである。

本県下に、「ナー」相当の「ナイ」がある。岩本実氏は、「日向の高千穂方言」(『宮崎大学学芸学部紀要』第17号 1964. 2)で、

ワンと並んで特徴的なのはナイである。ナイは「ねえ」に当り、同等目下など親しい間柄の場合に用いられ、大体西臼杵郡内の用語である。ゼンノカカルナイ。イーヒヨリチャナイ。ドーモイカンナイ。

と述べていられる。ところで、橋口巳俊氏は、宮崎県児湯郡下について、

○ソ<sup>ン</sup>ゲ イ<sup>ヤ</sup>ッタ ナ<sup>イ</sup>。

“そういうふうに使われたかい？”

○ド<sup>キ</sup> イ<sup>ク</sup> ナ<sup>イ</sup>。

“いったいどこに行くの？”(“どこにも行くところはないの”と思っ  
て言う。)”

などの事実を見ていられる。県下で、なお、「ナイ」が出やすいことなどは、いかにもと思われる。

## ※ ※ ※

以下、本県下の「ナ」に関する複合形を見ていく。

「ヨナー」は、まれなほうか。「ゾナ」相当の「ドナ」は、県中部児湯郡などにも見られる。

○アリャ ヨカ ムン ドナー。

あれは利口ものですよねえ。 (中女→老女)

などと言っている。(橋口巳俊氏教示)

「カナ」がある。「カイナ」がある。「カイナ」に近い「カエナ」がある。「カエナ」に隣って「カヨナ」もある。

「トナ」がまた見いだされる。

○ドコズイ イッ チナ。

どこまでいらっしゃるんですか。

などの「チナ」は、「トナ」にいくらか対応するものか。上例を教示せられた小野増雄氏は、加えて、

「イッ トナ」(行くの?)がより多く行われる。

と言っている。「トナ」に対応する「ツナ」もあるか。橋口巳俊氏は、児湯郡下について、

○トナリニャ ヌタ ツナ。

となりには言ったんですか?

などの言いかたを指摘してられる。

橋口巳俊氏が児湯郡下について説かれる「テナ」もある。

○アリガ モッチタ テナ。

などと言われている。この例について橋口氏は、「あいつが持っていったってですか。(青男→中男)」との説明を試みてられる。なお、

いずれの場合も自分のきいたことをもとにして、目上の人と話しあうものである。

と説明される。

「ガナ」形もあり、これもよくおこなわれている。「ガイナ」の言いかたもある。「ガエナ」もあり「ガヨナ」もある。

九州広くによく聞かれる「モンナ」もあって、西米良では、

○コチョー チューテ イーヲッタ モンナー。

戸長って言ってたものねえ。

などと言っている。県中部以南では、「ムンナ」も聞かれる。

県下に、「ワナ」の言いかたもある。

○ムカシノ ムンナ シンドショッタ ワナー。

“昔の者は骨折っていたですよねえ。” (老女→青男)

は、県中部の児湯郡下の一例である。(橋口巳俊氏による。)「ワナー」とともに「ワイナ」もおこなわれている。「ワイナー」に隣る言いかた「ワエナ」も見いだされ、「ワヨナ」も見いだされる。

### 熊本県

熊本県下でもまた、全般に、「ナ」のおこなわれることがさかんである。その用途は広汎であるが、問いの表現に「ナ」をよくつかうことは、やはり、特色的である。

土地の人々は、一般に、“「ナ」がつくとよいことば。”としている。あるいは、“「ナー」は目下から目上につかうことば。相手を尊重した敬語。”などと言っている。

○ヨカ ナー。

○ヨカ ネー。

の二者をくらべて、天草の人は、前者が「いいですね。」であり、後者が「いいね。」であると言う。

「ネー」を、共通語意識のもとで(—「よそこば」との意識のもとで)用いるばあいもあることは、多く言うまでもない。こういうばあいは、「ネー」もまた、ていねいなことばになることは、むしろである。

「ナ」の用例を県南部からひくならば、

○アウヤ シナモサザッタ ナー。

(うちのじいさんに) 会いはなさいませんでした？

がある。天草の一例は、

○オジサンモ エイガ ミニ ケー ナ。

おじさんも映画を見においでな。(小学生男——藤原)

である。天草下島西南岸での経験であるが、土地の子どもたちは、「先生 ケー(来い) ナー。」などと言っている。——「ケー」が「来イ」であることは忘れられているのか。とにかくかれらは、そこに「ナー」をつけ、こうすればよいことばになるのだとばかり、「ケー ナー」の言いかたを愛用している。

○ソルバ クレン ナー。

それをくださらない(くれない)？

○ソルバ ヤラン ナー。

それをくださらない(くれない)？

は、天草下島北端部での例である。

熊本市南郊の人の談によると、

「ナー」は目上に対してつかう。このほうがていねい。「ネー」は目上に対してつかわない。このほうがぞんざい。「ノー」という形はつかわない。とのことである。

当県下に、「ナー」の異形と称すべき「ナイ」「ナン」が見いだされる。

さきに、鹿児島県下の甑島について「ナイ」を見た。(P.141) 甑島に対応する天草島に、「ナイ」文末詞がさかんである。以下に見るように、天草の「ナイ」が「ナー」の単純異形であるらしいのからすると、天草との相互牽引の地位にある甑島の「ナイ」も、いよいよ、「ナー」該当のものかと認められてくる。

それにしても、鹿児島県下一般では、「ナー」相当の「ナイ」を見いだすことは容易ではなくて、——かつ、「ナー」相当の「ナン」はどこにも見いださ

れなくて、熊本県下に「ナー」相当の「ナイ」「ナン」が見いだされるのは、注目にあたいる。土地がらということであろうか。方言風土の、あるいは方言地質の相違の現実を、私どもは、受けとらされるばかりである。

本来、「ナー」の「ナイ」化などは、「ナー」用法上での内面的要求にもとづく、しぜんの出来ではなからうか。「ナ」文末詞による訴えの心理のはたらくところ、しぜんに、その場での強調がおこなわれて、語形は、強調表現にふさわしい「ナイ」などの形をとるにいたったものかと思われる。ここには、「ナ」文末表現での異形分化の、見るからにおもしろい事実がある。

このことを証するために、他事実にあててみよう。「どこへ イキヤー。」(どこへ行くんだい?)が、「どこへ イキヤイ。」になる。「これこれなんだよ。」という意味の「何々ジャ ガー。」が、「何々ジャ ガイ。」となる。「何ジャ。」の問いが、「ナンジャ イ。」ともなりうる。「～ます」「～です」の言いかたが、「～ますィ。」「～ですィ。」ともなるのは、諸方言上、かなり広く認められる事実である。——「ます」「です」をややつよめに言って表現を明らかにしようとするさい、「す」の母音がいくらかのびて、しぜんに「イ」音がおこってくるのであろう。但謡安来節を人がうたって、「ヤスーキー」と音をのぼす時、ごくしぜんに「ヤスイキー」と言っているのを聞くことがある。長音がまさに「イ」音にかえられている。「ホーチャー」(庖丁)を、方言で「ホイチャ」と言ったりしているのも、ここに、合washかかげられる。

「ナー」は、自然発音の流暢さの中で、いつとはなく「ナイ」になったであろう。一方で「ナン」形がおこったのも、これまたしぜんの異形分化であったと考えられる。方言上に、わらじの「ワラージ」「ワライジ」「ワランジ」がある。

「ノー」に対する「ノイ」「ノン」、 「ネー」に対する「ネイ」「ネン」も、異形分化の事態と見られる。

ところで、中国本土地方一般では、「ナー」に対する「ナイ」や「ナン」がごくよわい。さきにも述べた内面的要求の考えからすれば、「ナイ」などの異形分化は、どこにおこってもよさそうに思えるが、実際はそうっていないのは、やはり、方言風土・方言地質の地方的相違がものを言っ

いることと解される。このさい、方言地質を、方言の音韻的基盤と称することも可能であろうか。「ナ」の音声強調そのものは、どこにでもおこり得ているはずなのに、口話の現実にあっては、口頭に「ナイ」や「ナン」をあらわすことがないというのは、いかにも、音韻的基盤のなにがしを思わせる事実である。

熊本県下の「ナイ」について記述する。天草の例は、

○セ<sup>ワ</sup>バッカ ナ<sup>ッテ</sup> ナイ。

せわにばかりなつてね。

○セ<sup>ワ</sup>ン ナッタ ナーイ。

せわになつたね。

などである。「ナイ」とともに「ナーイ」が、しきりにおこなわれている。天草下島西岸の人は、

○オーキニ ナン。

ありがとうね。

は目上につかい、

○オーキニ ナイ。

ありがとうね。

は、品がさがると言う。天草に対する肥後本土南部地域内に——（すなわち、双方には、かねて、底脈の濃い連関が認められるが）——「ナイ」「ナーイ」のおこなわれることのいちじるしいものがある。南辺の一勝地村内では、土地人の、

「ナ」「ナー」は、上および中の位、「ナーイ」は下の位。

とするのを聞くことができた。天草でのばあいと共通して、「ナーイ」は、くだけた言いかたをさそうものようである。この地での实例は、

○ダ<sup>ッダ</sup> オラザ<sup>ッツロ</sup> ナイ。

だれもいなかったらうね。

○キューワ ヒヤカ ナーイ。

きょうはつめたいね。

などである。

斎藤俊三氏は、『熊本県南部方言考』で、「ナイ」をくわしくとりあつかって  
いられる。氏は、「ナイ」を説明して、「ナにイがつく」とされ、「和やか」だ  
としていられる。「ナイ」「ナーイ」は、ただに、肥後南部域内でおこなわれて  
いるばかりではない。中部以北内にもまた、これらの通用が認められる。『全  
国方言資料』第6巻の「熊本県熊本市中唐人町」の条には、

f ホンナー コツ キノドクナナーイ  
ほんと にね、気の毒にねえ。

との実例が見える。原田芳起氏は、『熊本方言の研究』（日本談義社 昭和23年  
1月）で、「ナイ」をとりたてていられる。

熊本方言についていえば、「な」が伝統的な間投助詞であったようで、同  
輩や下向きの対話では「ない」、上向きには「なう」（「な申し」の転「な  
もし」）があった。

との記述も見える。私は、阿蘇南麓での一週間調査のさい、

○アチー ナイ。

暑いね。（“同僚ことば”）

○アー トッタケン ナイ。

ああそうそう、とったからね。（碁での同意のことば）

などの諸例をとらえている。『全国方言集』（静岡県警察部刑事課 昭和2年7月）にも、

アチナイ 暑いねー（菊地郡）

の例が見える。

ここに一つ、また、注目すべき別の形がある。「ニャー」というのである。  
県本土の南寄りと天草とにこれが聞かれる。天草本渡市内では、

○マタ クルケン ニャー。

また来るからね。

などと言っている。土地の人は、上の例を示す直前に、

○マ<sup>ー</sup>タ クルケン ナイ。

の言いかたを示した。「ニャー」は、「ナイ」に対置されたのである。このさい、別にまた、「ド<sup>ケ</sup> イタッ キャー。」(どこへ行ったのかい?)との言いかたも聞かれた。「カイ」が「キャー」と言われているように、「ナイ」も「ニャー」と言われるのではないか。すなわち、当方言には、「ナイ」の変化形の「ニャー」がおこなわれていると見られる。この地の人は、別にまた、「サン<sup>カ</sup> ナーイ。」(さむいね。)とともに「サンカ ニャー。」<アクセント失>の言いかたを示した。「ニャー」は「ナイ」から分生しつつも、しばしば、「ナーイ」相当のものとしてたちはたらくことになってもいるか。本土南部域の実例を見る。——瀬戸口俊治氏の、人吉市域内調査の結果から実例をお借りすれば、つぎのようなものがある。

○オー ニャンチューー カニャー。アッガ ナワ。

“ああ、なんというかな、あの人の名は。 (老男→家族)”

この例では、たまたまのことであろうが、「なんという」が「ニャンチューー」となっている。したがって、と言えよう。このさい、文末の「ニャー」の、「ナー」該当のものであることが明らかである。「ニャー」は、分布に片よりがあるか。(「無い」を言う「ニャー」の分布は、いうまでもなく別のことである。)

「ナイ」について「ナン」を見よう。これにも、「ナーン」形が生じている。天草島では、

○オ<sup>ト</sup>トワ ド<sup>ケ</sup> イカンタッ カナン。

父さんはどこへ行きなされたのかね?(ここには、「カ+ナン」が見える。じつは、「〜タッ カナン」も「〜タ トカナン」からのものである。)

○コンゴラ エライ ヒンガヒニ アツゴザス ナーン。

このごろは、ひどく日に日に暑うござんすねえ。

などと言われることがさかんである。土地の人は、

「ナン」のほうが律義・古風で、儀式ばった感じ。「ナイ」のほうが日常の友だちづきあいの感じ。——別に敬意はない。

と説明している。天草下島西岸では、「ナン」を“目上につかう。”と言っている。ていねいな問いことばに「カナン」の出ることが多く、また総体に、

○タノミヤス ナーン。

などと、「ナーン」の出ることが多い。「ナン」をよいことばとするだけに、いきおい、強制的に「ナーン」と発言することが多いわけなのであろうか。(「アガレ ナーン。」などとも言っている。したしみをあらわすことが濃い。)

天草島のほかでは、対応する肥後本土南域方面に、「ナン」は見いだされるか。

八代市域での一例は、

○ノム ナン。

“飲むかね。” (中男→小男)

である。(白石寿文氏「熊本県八代市二見町方言の文末詞について」『国語教育研究』第2号 昭和35年11月)白石氏は、「品位は低いが、ごく親しい間では疑問としてかなり使うようだ。」と説いていられる。

つぎに注目すべきは、「ナウ」形文末詞である。これは、「ナー」の自然音訛に成ったものとするには、いささか迷いを感じしめられるものである。原田芳起氏は、これを、「なもし」に関係のあるものとされるのか。(P.151)氏の『熊本方言の研究』のp.193には、

ナイ、ナ、ナウ、ナータ、ノイ、ノモイ、ネ

というような事例挙示が見られる。「ナウ」が独立の一文末詞形とされていることは、たしかである。能田太郎氏もまた、「肥後南ノ関方言会話誌(其の一、朝の挨拶)」(『方言と土俗』第二巻第九号 昭和7年1月)で、

「在方青年乙に対する年長者甲」

甲「早<sup>はや</sup>か<sup>か</sup>のい」(自己の身分稍く上級であれば「早かねー」)

乙「早かなー」(自己の身分稍く下級であれば「早かなう」)

との記事を見せてられる。私はかつて、旧制天草中学校の応接室で、土地の先生がたから、「ナウ」の教示を受けた。天草上島西端近くの島子村では、しきりに「ナウ」をつかっているというのである。その実例は、

○イッテ ナウ。

行ってねえ。

○キテ ナウ。

来てねえ。

などであった。当時の覚え書きには、

「ナー」に該当する「ナウ」「ナン」の両者は、聞いていて、ちがったという感じは受けない。

とある。(先生がたの口授を記録したもののようである。)なるほど「ナウ」は、「ナン」からのものか。「ン」が「ウ」になることは、けっして考えにくいことではない。肥後の北部には、「ナン」はないようであるが、能田氏が南関町について「ナウ」を指摘されるのからすると、「ナン」的なものは、肥後の南北にありうるらしいことが理解される。

瀬戸口俊治氏は、肥後南部の人吉のことばに「ナーモ」の文末詞があると言われる。この「ナーモ」の「モ」は、「もうすぐ」などという「もう」なのか、「もうし(申)」の「もう」なのか。上の「ナウ」が「な申し」と関係のあるものでもあったら、そういう「ナウ」のつぎには、この「ナーモ」をおいてみたくなる。

※ ※ ※

以下、複合形の諸相を見ていく。

はじめにとりたてられるのは、「ナナー」である。『全国方言資料』第6巻の「熊本県熊本市中唐人町」の条には、

f ナーナン アンタ イッキョン カイモンモ デキンデナナー

なに あなた ひとつも おかまいも できなくてねえ。

とある。この「ナナー」は、たしかに文末詞「ナ」の重複形であろう。私が天

草下島西岸でとらえた実例は、

○カ<sup>ア</sup>イ<sup>エ</sup>リ<sup>ー</sup> ヨ<sup>レ</sup> ナ<sup>ナ</sup>ナ<sup>ー</sup>。

帰りに寄れよね。

○オ<sup>ー</sup>エ<sup>ニ</sup> オ<sup>レ</sup> ナ<sup>ナ</sup>ナ<sup>ー</sup>。

(もう牧島に行かずに) 大江におれよね。(中女→土地に来任中の教員の子息小男)

などである。

天草内の「ソガ<sup>ン</sup>ス<sup>ン</sup>ナ<sup>ナ</sup>ナ<sup>ー</sup>。」(そん<sup>な</sup>にする<sup>な</sup>ね。)といったようなばあいは、「ソガ<sup>ン</sup> ス<sup>ン</sup>ナ (する<sup>な</sup>) ナ<sup>ー</sup>。」と解すべきもので、ここに「ナ<sup>ナ</sup>」文末詞を見ることなどはできない。

瀬戸口俊治氏の教示によるのに、肥後南部の人吉地方では、

○ア<sup>ー</sup>タ<sup>ノ</sup> ア<sup>ノ</sup> セ<sup>イ</sup>ワ ナ<sup>ン</sup>チャ<sup>ッ</sup>タ カ<sup>ニ</sup>ャ<sup>ー</sup>ナ。

あなたの姓は何だったですかね。(老男→瀬戸口氏)

と言っている。ここには、「ナ<sup>ー</sup>ナ」に対する「ニ<sup>ャ</sup>ー<sup>ナ</sup>」が見られる。

「サナ」という複合形がある。天草で、

○イ<sup>カ</sup>ン<sup>デ</sup>モ ヨ<sup>カ</sup>ッ サ<sup>ナ</sup>ナ<sup>ー</sup>。

行かなくてもいい。

○西<sup>田</sup>さん<sup>ノ</sup> オ<sup>ラ</sup>ン ト<sup>サ</sup>ナ<sup>ナ</sup>ナ<sup>ー</sup>。

“「オ<sup>ラ</sup>ン<sup>ト</sup>デ<sup>ス</sup>タイ。」ということ。”

などと言っている。上二例では、「サナ」が「ト」につながって、「トサナ」の形になっている。(「ヨ<sup>カ</sup>ッ サ<sup>ナ</sup>ナ<sup>ー</sup>」のばあいは、形態上、「サ<sup>ナ</sup>ナ<sup>ー</sup>」をとりたてるほかはなくなっているが。)天草では、「トサナ」に“敬語がはいっている。”と言う人があった。

「ドナ」形がある。「ゾナ」相当の「ドナ」が、鹿児島県下によくおこなわれることにつながって、肥後南部にもまたこれがよくおこなわれていることは、前述した。(p. 143) 熊本市域の「ドナ」例は、つぎのものなどである。

○コ<sup>ン</sup>ヤ ユ<sup>ッ</sup>カ フ<sup>ッ</sup>デ<sup>ス</sup> ド<sup>ナ</sup>ナ<sup>ー</sup>。

このぶんだと、今夜は、雪が降るですよ。

「カナ」があり、「カナイ」「カナン」がある。「カナ」とともに、「カーナ」もあり得ている。「カナ」とともに「トカナ」があり、「ツカナ」がある。

○ナンカ ウマカ モン ナカ ツカナ。

何かうまいものはないかね。

は、天草島での一例である。「カナ」は、県下によくおこなわれている。「カナイ」は、「カナイー」ともあり、これらは、天草島、阿蘇山麓その他で聞かれる。

○ド イッチョ、ハジミョ カナイ。

どれ、ひとつ、はじめようかなあ。(心やすい人に言う。)

は、阿蘇山南麓での一例である。

「カナイ」とともに「カニャー」もおこなわれている。おもに、肥後南部でか。

「カナン」は、天草で聞かれる。

「カイナ」があり、「キナーナ」がある。

「ガナ」がある。「ガナイ」もある。「ガナイ」は、肥後南部に見いだされがちか。

「トナ」がある。これを言って問いや応答・受けひきの表現とするのは、当県ばかりの特色ではない。(宮崎県下などにも、これらの表現法がさかんである。)「トナ」とともに、「ツナ」がある。肥後南部域には、「トナイ」があり、「トナン」もある。

「タイナ」「タイナー」がある。

「モンナ」「モンナー」がある。「モンナーイ」もある。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には、「モネナイ」が見える。

f ホリカラ ツギガ アイテ ホラ チョーチンニ ナッタ ツチャ モネナイ  
それから 次が 例の ほら ちょうちんになったんですよ、

などとある。私は、上の佐伊津で、

○……………デス モン<sup>ナ</sup>ン。

というのを聞いたことがある。

「バイ」と「ナ」との結合体である「バーナ」や「バナーン」が、天草で聞かれる。

○タノ<sup>ナ</sup>ミヤス パナ<sup>ナ</sup>ーン。

たのみますよ(わ)ねえ。

は、「バナーン」の一例である。

### 長崎県

県内総体に、「ナ」はよいことばだとされている。——「ノ」より「ナ」のほうがよい、などと言われている。ところで、林田明氏は、「長崎市方言文末助詞」(『方言研究年報』第一巻 昭和32年12月)で、

長崎市の「ナ」は必ずしも下品とは言えないにしても「ぞんざいな」言い方の一語につきる。従って用法は、必ず長上者から年少者へ、目上から目下にのみ用いられ、その逆の場合はありません。

などと述べていられる。

五島列島内での「ナ」の実例は、

○ワタヒラノ コトバガ <sup>ナ</sup>ゴトーコトバノ マルダシバ<sup>ナ</sup>ッテ ナ。

私らのことばが、五島ことばのまる出しですけどね。(老男——藤原)

などである。県北、生月島での一例は、

○イツモカム オシエワバ<sup>ナ</sup>ッカリ ナ<sup>ナ</sup>ッテ ナー。

いつもかもおせわにばかりになって(なりまして)ね。

である。

問い・受けごたえその他、さまざまのばあい「ナ」が用いられる。

「ナ」が転化して「ナイ」になっている。本県下は、「ナイ」のよくおこなわれている所である。島原半島に「ナイ」の（「ナン」も）いちじるしいのは、対蹠の地、熊本県天草島にそれらのいちじるしいのに、よく関連したものである。この両方の地域は、方言上では、同県下であってもよい。「ナイ」「ナーイ」形のおこなわれることが、まことにさかんである。長崎市域方面にも、「ナイ」が見いだされる。佐世保ことばにも「ナイ」がある。

○ヨー フラス コツ ナイ。 <アクセント失>

よく降りますことね。

は、その一例である。平戸島・生月島でも、「ナイ」「ナーイ」が言われている。

○ヨーイ。ドー ション ナーイ。

おい。どうしてる？（人の家に行つての、はいる時のあいさつ。）

（友人間）

は、生月での一例である。

「ナイ」に対応して「ナン」がある。ただしこれは、「ナイ」ほどにはおこなわれていない。主としては、島原半島域に「ナン」が見出され（家中ことばなどと言われている。）、ついでに、長崎市方面や県北方面などに、「ナン」「ナーン」が見いだされる。古賀十二郎氏編『長崎市史 風俗編』（長崎市役所大正14年11月）所収の『<sup>附録</sup>長崎方言集覧 古賀十二郎編』には、

ナン 質問の言葉。だめを押す言葉。目下の者に対して用ふ。ナと  
ンと結合させることばである。

ドコナン。何処か。シラントナン。知つてゐないのか。ソノ  
ホンナン。その本か。シットトナン。俺を知つてゐるか。

とある。

「ナ」に関連するものとしうる「ニャ」をここにとりたてる。まず島原半島域に「ニャ」がよくおこなわれており、「長崎県南高来郡有家町」（『全国方言資料』第6巻）では、

mアー キョーワー モー テンキモ ヨカケン ンマンコイチャー イテクル  
ああ きょうは もう 天気も いいから 馬市に 行ってく  
ケンニャー<sup>1)</sup>

るからね。

1) 目下・同輩に対して用いる間投助詞。

などと言っている。五島列島北部の小値賀では、「ニャー」をよく言うという。長崎市方面にも、「ニャ」があるか。佐世保市のことばに関しては、私は、上田栄一氏から、

面白かったですな=面白かった<sup>ない</sup>に<sup>や</sup>  
するなよ=すんなに<sup>や</sup>

などの教示を受けた。西彼杵半島内部でも、「ねえ」相当の「ニャー」がおこなわれているか。私の調査例に、

○カサオ マチゴトリヤ スマイ カニャー。

傘をまちがってはいまいかねえ。

というのがある。ところで、西彼杵半島には、「オマイ キョー オクレタニャ。」(おまえはきょうおくれたねえ。)などと、明らかに「ニャ」と聞こえる言いかたがおこなわれている。「ニャ」がつづまって「ニャー」と聞こえるものになっているかもしれない。そういうものばあいは、それを「ナ」系の「ニャー」とは区別しなくてはならない。種ヶ島克巳氏の『平戸方言語法草案』(稿本 年月未詳)には、「ない」「にゃい」の指摘があり、「にゃい」に関しては、氏は、「イカル、ニャイ」の例をあげていられる。

※ ※ ※

「ナナ」という重複形がある。既存の方言文献を見るのに、県下の南北にこれが見いだされる。沓岐の島には、「ナナ」「ナーナ」がいちじるしいか。『全国方言資料』第9巻の「長崎県沓岐郡郷ノ浦町里触」の条には、

fイマ ヌ オ ドーシ ジエンノ タマローナナ

いまの 者は どうして お金が たまりましようか。

などとある。山口麻太郎氏は、まえまえから、沓岐の「ナーナ」を指摘してい

られる。氏の『壱岐島方言集』（刀江書院 昭和5年7月）には、

ナシ、アナター コーチキチ オクレマッセヂャッタッデス ナーナ。

何故、あなたは 買って来て 下さらないのです

との例が見える。

「ヤナ」複合形があり、「ヨナ」複合形がある。

○アオサトリー イヨオイ ヨナ。

あおさをとりに行ってるんですよ。（説明） （小学生六男——藤原）

は、五島列島での「ヨナ」例である。『全国方言資料』第9巻の「長崎県南松浦郡新魚目町浦桑」の条には、

mアー ミンナニモ ヨロシュー イワンカナヨー

みなさんにも よろしく 言ってくださいね。

など、「ナヨ」の例がいくつも見える。

「サナ」複合形がある。五島列島では、

○ヘー サナー。

“へえそうです。”（返事）

などと言っている。“「サナ」は敬意をあらわす。”とも言われている。

「ザンナ」がある。五島列島内で、

○オボエトキャ ヨカ ザンナ。

おぼえておけばいいじゃないですか。（雨中でカードを書く藤原に対して言う。）

○ヒトツノ シゴト ザンナ。

あれも一つのしごとですよ。

などと言っている。

「ゾナ」複合形がある。

○ハヨ イカンニャ ウッチョカルツ ゾナー。

早く行かなきゃおいとかれるよ。

は、五島列島内での一例である。「トゾナー」との言いかたもある。

「ジョナ」複合形がある。五島列島例は、

○オゴラル<sup>↑</sup>ルッ ジョナ。

怒られますよ。

である。「ジョナ」は「ゾナ」に近いものか。すくなくとも用法上では両者があい近いようである。(発音上、「ゾ」が「ジョ」になりうるものかどうか。)

「カナ」複合形のおこなわれることはさかんである。「トカナ」もある。島原半島では、「カナイ」がさかんにおこなわれており、「カナイー」などもある。「トカナイ」もおこなわれている。同半島内ではまた、「カナン」も聞かれる。

「カナ」に、さらに「ヨ」「ナ」の複合したらしい「カナヨナ」との言いかたがある。『全国方言資料』第9巻の「長崎県南松浦郡新魚目町浦桑」に、

fダー (アー) キテクルカナヨナ  
だれが (m) 来てくれますかよ。

の実例が見えている。「カナヨナ」という新複合形は、文末詞複合のありさまを露呈して、いかにも特色ゆたかなものである。

「カイナ」の複合形も、なにほどこかおこなわれている。島原半島では、「カイナイ」とある。その「カイ」が「キャー」となまったりして、「キャナイ」などというのもできているか。

つぎに、「ガナ」複合形がある。

つぎに、「トナ」複合形がある。これのおこなわれることは、県下にさかんであり、たとえば、平戸島では、

○ドケー オイヅル トナ。

どこへいらっしゃいます？

などと言っている。『長崎方言集覧』には、「トナン」も見える。「トナ」とともに「ツナ」もある。

「テナ」複合形がある。対馬厳原町の、

○オマエサンイチバンウエタッチナ。(八十歳ぐらい老人男→二十一歳男)

“お前さんは一番上だったな。”

に見られる「チナ」は、「テナ」に類するものであろうか。(上例は、山本俊治氏の調査されたものである。)

「トイナ」がある。また、「タイナ」がある。(「トタイナ」もある。) 島原半島では、「タイナイ」が聞かれる。「タイナン」もある。同半島内に「タンナーイ」もある。五島列島内でも、私は、

○ソー タンナ。

そうです。

など、「タンナ」を聞いた。

「ダイナ」の複合形がある。『全国方言資料』第9巻の「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」では、

f ソントキャ ソレツチャ モロチョコダイナー<sup>2)</sup>

それでは それだけ もらっておきましょう。 <sup>2) [-~daina:]</sup>

などと言っている。島原半島内にも、「ダナー」があり「ダナイ」もある。

「モン(もの)ナ」「ムンナ」がおこなわれている。——「モンナイ」もある。『全国方言資料』第9巻の「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」の条の、

f …… ヨサリガ ヨー デクルトン フージャオンナー

夜が よく 出てくる ようだものねえ。

に見られる「オンナ」は、「モンナ」に類するものか。「モンナ」に近い「モナ」,「ムンナ」に近い「ムナ」もおこなわれている。

「ワナ」複合形がある。また、「バナ」複合形がある。——島原半島には「バナイ」がある。「トバナ」の言いかたもあり(「ツバナ」もあるか。),「トバナイ」も島原にある。「バナン」が「長崎県下県郡厳原町豆殻」(『全国方言資料』第9巻)に見いだされ、

f …… マ マングッテ ミヨーバナ

まあ さしくって みましょう。

とある。「バナナー」という複合形もある。「バイナ」の形も見いだされる。島原半島には、「バイナイ」もある。

### 佐賀県

「ナ」文末詞のおこなわれることはさかんである。

○ドギャン シヨリマス ナ。

どうしていらっしゃる?

などと、問いに「ナ」を用いることもいちじるしい。小野志真男氏は、

ナーは西部地区ではノーよりも、ぞんざいな語であるが、田代地区ではヨミナスツタナのように長上に対しても用いる。カン、カイよりも敬意の高い助詞である。唐津地区では、久里村の例でいえば、カー、ネ、ナー、カイの順に敬意が高まるというのであるから、同一語形でも地域によつて著しく用法が異なるわけである。

などと言われる。(「佐賀県方言区画概観」『佐賀大学教育学部研究論文集』第四集 昭和29年11月) いずれにしても、「ナ」は「タイ」などととも、県下で、生活表現をおおいにいろどるものである。

本県下ではまた、「ナー」に類する「ナイ」のおこなわれることがいちじるしい。佐賀弁で、

○スマンヤッタ ナイ。

すまなかったね。

などとある。

○オカサンナ キゴザラン ナイ。

お母さんは来なさらんかね?

は、県南部での一例である。「ナイ」は、おおよそ、同僚ことばとしうるものようである。上の県南部例のばあいにも、「ナイ」が「ヤー」とも言われた。

佐賀県下に「ニャー」がまたいちじるしい。「佐賀のニャーニャーことば」

との言いかたがおこなわれているという。「ニャー」は、「ナイ」からきたものか。佐賀市在住の一知友は、「ネー」をくいだいたものが「ニャー」か、と説明してくれた。「ネ」は、一般に、「ナ」の下位に存立するものようである。そういう「ネ」にことよせて「ニャー」が考えられているところには、「ニャー」ことばの品位をよくうかがわしめるものがあるろう。「ニャー」は、男女年齢を問わず、広く用いられているという。（“どちらかという、若い人のあいだでしかんである。”と言う人もある。）ところで、県南部の旧須古村では、老女が私に、

○タガワグンデシタ カニャ。

（あの炭坑事故は）田川郡でしたかね？

と発言した。所により人によっては、「ニャ」を広汎に用いてもいるか。唐津市で聞いた「ニャ」例は、

○キョーワ サムカ ニャー。

きょうはさむいねえ。

である。——これは、「下」の表現とのことであった。

※ ※ ※

複合形に、「ナヤナー」などというのものもある。「佐賀県東松浦郡有浦村」（『全国方言資料』第6巻）の条に、

f シマンナッタリャ スグ モッテキテクレンナヤナー

済んだら すぐ 持って来てくださいよ。

とある。

「ヨナ」複合形がある。

「カナ」複合形がある。——「カナイ」もあるか。「カイナ」もある。

「タイナ」もある。「デナ」もある。

「ガナ」複合形もある。

○ソレデ クサナ。

それでね。

などと、「クサナ」を言ってもいる。

「モンナ」複合形があり、「ワナ」複合形がある。

県南部の旧須古村で経験したことであるが、ここの生活語全般のうえにたちはたらく文末詞には、じつに多彩なものがあつた。さてそういう状況の中で、ナ行音文末詞は、基本的な勢力を示していたようである。

### 福岡県

本県下にも、「ナ」のおこなわれることがいちじるしい。筑後・筑前に、「ナ」はさかんである。

問いの「ナ」はもちろん、ただの言いかけの「ナ」、推量の「ナ」その他がおこなわれている。

敬卑に関しては、「ナ」をよいことば、目上へのことばとするのが一般的である。筑前糸島半島では、

○サムカ ナー。

さむいねえ。

と言っており、「ナー」を目上へのことばとして、「ネー」を、“友だちに言うことば”“目下に言う。”としている。

「ナー」の変態「ナン」は、ほとんど見いだされないようである。『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条に見られる、

m<sup>h</sup>ンー アラナン サケ イッショードスナ

ええ あれはね、酒 一升ですね。

は、「ナ」の変態「ナン」を見せるものなのかどうか。

「ナー」の変態「ナイ」は、筑後・筑前に広く見いだされるようである。一「ナン」は見だしにくくて、「ナイ」は広く見いだされる点に、私どもは、問題を感じしめられる。

○ニジュエーイチニチチャツツロ カナイ。

二十一日だったろうかねえ。 (青男→父)

は、筑後八女郡矢部川奥での一例である。「カナイ」の複合形になっている。) 筑前東部、嘉穂郡下の一例は、

○アツー ゴザナス ナーイ。

お暑うございますねえ。 (中女→老女)

である。(白石美代子氏教示) 白石氏は、

「ナイ」は老年層、特に女性に比較的よく用いられている。命令表現の場合を除いて品位は割に高い。

との記事を寄せてくださった。筑前東方にも「ナイ」のかなりさかんなのは、注目にあたいます。——つづいての、豊前域のうちにも、「ナイ」が見いだされなくはないようである。

「ナイ」の変相と思われる「ニャー」は、筑後内にも見いだされる。

※ ※ ※

以下に、福岡県下の「ナ」に関する複合形を見る。

最初に注目されるのが、「ヤナ」形である。博多ことばの領域を中心として、筑前のかかなり広い範囲に、「ヤナ」がよくおこなわれている。筑前西北、糸島半島の例は、

○コノ ハナシワ タイガイ ヒトノ キキタガル ヤナー。

この話しは、たいてい、人が聞いたがるよねえ。

○イクゲナ ヤナー。

行くそうだなあ。

などである。「福岡県福岡市博多」の条のは、

*m*マー キツネガー デゴザッター ユーヨーナ グワイデシタヤナ。

狐が 出なさったと いうような ぐあいでしたね。

などである。『博多ことば』という絵はがきには、

敵国降伏と書いた額の掛かつとりますケン、伏敵門と言うとります。そうしてこの門なア国宝建造物になつとりますやなア。

というのなどが見いだされる。福岡市内でなど、「ヤナ」を「ヤーナ」と言うこともあるらしい。

「イナ」複合形が、まれにとりたてられるか。糸島半島例は、

○アゲン ナリマシタ イナー。

あんなになりましたよねえ。

である。

「ヨナ」複合形に、さらに、「ノ」相当の「ソ」のそわったものがある。

○ウチガタガスル ソヨナ。 (私の家がするんですよ。)

は、岡野信子氏が、「北九州生活語の文末助詞」(『研究紀要』第六集)に記述された一例である。

「ゾナ」複合形もあるが、優勢ではない。「カナ」「カナー」は、ふつうにおこなわれている。「カイナ」「カイナー」は、ややすくない。

「トナ」もある。「タイナ」もある。

*m*ミアイデスタイナー

見合いですね。

は、「福岡県福岡市博多」(『全国方言資料』第6巻)での例である。

「ガナ」もある。

変わったものに、「クサナ」がある。「こそは」の「クサ」と「ナ」との複合であろう。ただし、分布はよわいものであるらしい。

「モンナ」がある。かなりよくおこなわれていて、ここに九州弁のおもむきが明らかでもある。

「ワナ」「ワイナ」がある。「バナ」がある。「バナ」などは、聞かれることがすくないか。

「ア<sup>ナ</sup>タナ」に相当する「ンタナー」があるか。『全国方言資料』第6巻の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」の条に、

*f* …… ヤッパー コーニ コドムホド アルチタ<sup>ナ</sup>ンター

やはり 小さい 子どもほど あると言いましたねえ、あなた。

とある。

## 大分県

本県下でもまた、「ナ」は、全般によくおこなわれている。問いの「ナ」もあれば、誘いの「ナ」もある。

「ナー」のむすびの文表現が、わるい言いかたになることはない。池田勘氏は、県下南部の方言について、

この地域では、「ナ・ナー」も「ノ・ノー」も、ともに、さかんにおこなわれており、その用法は、いろいろに分化している。品位は、前者がたかく、後者がひくい。

と言われる。阿部蓉子氏は、北部、宇佐郡の方言について、

「ネ」はともかくとして、(この土地では稀だから)、「ナ」、「ノ」は、性別よりも、年層よりも、その待遇品位によって使い分けられる。たとえば、青年女子にあっても、その弟に話しかけるときには「タナー」「アンタナー」を使う。

と言われる。

○ヨコオー ナ。

やすもうよ。

これは、中津市のことばである。国東半島では、かつての調査のさい、“目上にはナー。目下にはノー。”と聞かされた。(“女の人には、目上にも、目下にも「ナー。」とも聞かされた。“ノーはおもに男が言う。”ともあった。)

本県下に「ナイ」を見ることは、かたい。ただし、松田正義氏の『大分県方言の旅』第一巻の「大分郡西庄内村」の条には、

アー、ソーカナ。ダレガ タブルカナエ。

ああ、そうかね。誰が 飲むのかね。 (老女→老男)

というような例が見える。「カナエ」とある。県下に、「ナン」も聞かれない

ようである。

※ ※ ※

本県下の、「ナ」に関する複合形は、さほどに多種ではなさそうである。「イナ」をとりあげることができるか。国東半島内での一例は、

○キョーワ ヨー フッタ イナー。

きょうはよく降ったよねえ。

である。

「ゾナ」が、かなりよくおこなわれている。「ゾナ」相当の「ズナ」もあるらしい。「ゾナ」が「ドナ」ともなっている。「ロナ」ともあるか。『豊後方言集』第三輯（波多野宗喜氏近藤信氏市場直次郎氏 大分県立第一高等女学校国文会 昭和11年3月）には、

イーゾナ 分（よいぞな）

イーゾエ 分

イードナ 分

イーロナ 分

との記事が見えもしている。

「カナ」がおこなわれており、「カйна」も、よりすくなくではあるが、おこなわれている。

「ガナ」のおこなわれることがさかんである。

○デロー ゴトモ ユワン ガナー。 （中女→老女）

“出ようというようなことはさらさら言わないんですよ。”

は、阿南光彦氏の教示せられた、大分県南部での一例である。

「モンナ」がなくはないけれども、あまり聞かれない。大分県下が、九州にあっては、比較的、脱九州的地方であるところを、これも示していようか。

「ワナ」が、かなりおこなわれている。「バナ」は、すくなかろう。

「アンタナ」があり、「タナ」がある。「タナ」は、県内でそうとうによくおこなわれているようである。豊後西北辺の日田郡下でも、

○ヌキー タナー。

ぬくいねえ。

などと言われている。

○京都へ行って、ここのことばで 話しが デグルガ タナー。

…………… できるがねえ。

は、中津市のことばである。同じく中津のことばに、

○エー、ソー カンタナー。

ええ、そうですか。

との言いかたもある。

以上に明らかなおおり、「ナ」文末詞は、九州におこなわれることが、じつにさかんである。中にあって、九州東北域の状況が、やや異色を呈すると見られようか。これにつづいて、中国地方の「ナ」の世界が開けている。

#### 四 中国地方の「ナ」ほか

##### 山口県

本県下では、「ナ」と「ノ」とがつけあっておこなわれていて、しかも、「ナ」の勢力が、かなりつよいか。長門北部では、「ナ」をよく言い、「ノー」も言い、「ナー」はいいほうで、「ノー」はわるいほう。」と言う。北部での「ナ」例は、

○ハー ヒルヤシニ、ゴハン タペラカッサイ ナー。

もうひるだのに、ごはんをたべさせてくださいね。

○ヒル バン デキラー ナ。

ひるとばんとできるよね。 (青男間)

などである。

○アルカラ サキー ナ。

そりゃああるよ（当然あるよ）。

は、周防東部内の「ナ」例である。周防の祝島を調査した結果では、「ナ」のほとんどおこなわれないのが注目された。長門の人、阿波陽氏は、

「ナ」と短かく切って話す場合は一般にやさしい感じをかもし出す。

と説かれる。「ナー」の長呼で問いの言いかたのなされることは、県下に多い。

周防東部での言いかた、

○イゴキャー センナー。

は、「うごきはせぬワー。」の意のものであろう。文末詞「ナー」がとらえられるのではない。ところで、

○ナンポー サガーテモ チー ナー。

いくらさがしてもないよ。

になると、これの最後の「ナー」は、遊離成分の特定文末部と見られる。「センナー」の「ナー」が、外形的には、「セン」という打消形式相当のものについているので、類推的に、その「ナー」が形容詞「<sup>ない</sup>」の下にもつけられることになったか。

長門西部の、

○マー オアガリー ナ。

まあお上がりよ。

のような言いかたでの「ナ」は、「ナ」文末詞のはたらいしているものだと解される。（「マー オアガリナ。」というのであれば、この「ナ」は、「ナサイ」の「ナ」とされる。）

県下に、「ナ」をつよめて、「ナーイ」「ナイ」「ナーン」「ナン」などと言うばあいが、見られないことはない。岩国市域には、「ナ」に近い「ニャ」があるか。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形では、まず、「ゾナ」が注目される。

○ハヨ<sup>ー</sup> セント マニ アワ<sup>ン</sup> ズ<sup>ナ</sup>。

早くしないとまにあいませんよ。

などのように言われる。「ズナ」が「ドナ」になっていることが多い。

○サキ<sup>ー</sup> イキヨ<sup>ル</sup> ド<sup>ナ</sup>。

さきに行ってますよ。

「ドナ」のほうがはるかに優勢のようにも見られる。

「カナ」の複合形に関連しては、「………… ノカナ。」の意の「ホカナ」がある。

「ガナ」複合形があり、「トナ」複合形も聞かれる。

○チュ<sup>ー</sup>ブ<sup>ダ</sup> ト<sup>ナ</sup>。

中風だそうな。 (老女→息子中男)

などとする。

推量の表現をしめくくる「デ」文末詞に「ナ」をつける言いかたも見られる。

## 広島県

本県下では、「ナ」「ノ」ともおこなわれるうち、総じて、「ノ」が優勢である。「ナー」はなくて「ノー」ばかりという所も、なくはない。(—そういう所では、「ノ」がよい言いかたにもおおいにつかわれているわけである。「ナー」は、人に、しばしば“よそことば”とも思われていようか。)安芸西北辺での調査によることであるが、人々は、「ナー」「ノー」ともに土地ことばだと言い、“「ナー」はチートていねい。”と言っている。また、“「ノー」はうちのものに、「ナ」はちょっとは遠慮な人に言う。”とも言っている。

○アキ<sup>チャン</sup>。ヤ<sup>ル</sup>ケ<sup>ン</sup> ナ。ア<sup>ト</sup>カラ。

あきちゃん。やるからね。あとから。 (小女間)

は、広島湾島嶼での「ナ」の一例である。

○ド<sup>ッ</sup>タ<sup>ン</sup> ナ<sup>ー</sup>イ。

どうしたの？

という安芸倉橋島南辺での一例では、「ナーイ」が見られる。が、これは「ナー」の「ナーイ」ではなくて、「ナラ」>「ナイ」の「ナーイ」ではなからうか。「カカリヤー センジャー ナイ。」(かかりはしないじゃないの。)などの「ナイ」は、形容詞の「ナイ」であって、文末詞「ナ」の変形ではない。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形では、「ヨナ」「ゾナ」、「カナ」「カイナ」などがあるが、さして言うべきほどのこともない。「ゾナ」などは、おおよそ、広島県下におちつきのよいものではないとも解されようか。

### 岡山県

本県下となると、「ナー」の隆盛さが目だつ。広島県下の尾道は、「ノー」をさかんに見せるところであるが、その東の福山となると、反対に「ナー」をよく見せて、岡山県地方への近さを見せている。岡山県備中弁の「ナ」例は、

○ム<sup>ー</sup>コーガ ヒ<sup>レ</sup>ーカラ ナー。

むこうが広いからなあ。

などである。備中島嶼の先端部にある真鍋島では、

○ケ<sup>ッ</sup>コイ ナー。

けっこうねえ。

○ヨー フル モン<sup>ン</sup>ジャ ナー。オ<sup>ジ</sup>ーサン。

よく降ることですnee。おじいさん。

などと言っている。

岡山県下でも、「ナ」「ノ」を言う。しかし、人は、「ノー」を、“友だちなんかに”言うものとし、「ナー」を、“このほうがよいことば”としてもいるようである。「ナー」が本体というおもむきは、概して、本県下につよからう。美作のことばに、「どう した ンナラナ。」などというのがある。「どう した ンナラ。」(どうしたの?)の言いかたに、さらに「ナ」をつけそえたりす

るほどに、「ナ」がよく運用されている。美作の一友人は、「ナラナ」が、男女老幼を問わず広く用いられるとしている。

岡山県下にも、一年有半、住んでいた私は、当時、広島県下は「ノ」、岡山県下は「ナ」と感じたものである。「あのね。」にしても、広島県下では、多く「アノノー。」と言ひ、岡山県下では、ふつうに「アノナー。」と言う。

岡山県下の「ナ」は、東隣、兵庫県地方以東の近畿弁の「ナ」に関連するところが深いものであろうか。アクセントにしても、等しく山陽道に位する、広島県、岡山県であるが、岡山県下は、ある種の変相を示し、それは、当県下の、近畿に関連する地であることを思わせる。

さきの、備中真鍋島では、かつての一週間調査のさい、「ナ」の変形「ナン」を聞くこともできた。

○ワレガ ナン。

おまえがね。

などと言っている。真鍋島の属島の六島には、「ナー」相当の「ニャン」があるか。人づてに、

○ソージャガ ニャン。

という例を聞いた。(——カードに「ニャン」としてあるのだけれども、ものは、「ニャン」に近いものとしてよくはないか。)

※ ※ ※

県下の、「ナ」に関する複合形の文末詞では、「ゾナ」が特筆すべきものである。感想であるけれども、私は、これが岡山県的な言いかたであると思う。(——近畿弁の中によくすわっているものでもある。)

○ヨー ヒトル ゾナー。

よくしてる(作ってる)よねえ。(人々、作品を見てほめる。)

は、県北、美作西部内での一例である。

○ヨー ココイ クル ゾナ。

よくここへ来ますよ。(中女——藤原)

は、県東南隅での一例である。「ゾナ」とともに、「ゾイナ」というものもある。

「カナ」複合形も、通用のものである。「カイナ」も、いっぺんおこなわれている。

「ガナ」もあり、「デナ」もある。

山陽がわに対する山陰がわの状況は、どんなであろうか。

### 島根県

県下——石見・出雲・隠岐に、「ナ」がよくおこなわれている。(もともと、出雲では、「ネ」のほうが、よりよくおこなわれているけれども。)石見では、一般に、「ノー」も言うけれども、「ナー」がよいことばで、これが、あらたまり用でもある。

出雲の「ナ」のおこなわれざまは、つぎのようである。

○ソノヒ[i]トガ オク[ü]ッテ ゴザレマシ[i]テ ナー。

その人が送ってくださいましたね。(老男——藤原)

山間部では、「ナー」が、比較的よくおこなわれているか。——“同僚には「ノー」を言い、目下には「ナー」、目上には「ネー。」などという土地人自覚もある。「ソレデ ナー。」「ソレデ ナー。」の、“どっちもつかう。”などとも言っている。助動詞「ダ」におわるものを受けて、「ナ」でむすび、文末に「ダナ」の聞こえをひびかすことは、山陰にいちじるしい。たとえば、島根半島北岸例だと、

○ダ<sup>ナ</sup>ダ ナー。

ばかだなあ。

などとある。

神部宏泰氏は、隠岐に関して、“五箇方言では、「ノ」の品位が高く、「ナ」が低い。”と言われる。

ちなみに、石田春昭氏ご「担当」の『隠岐島方言の研究』（島根女子師

範学校 昭和11年9月)には、

するなよ スンナナ

いふなよ ユーナナ

との言いかたが見える。

なお、神部宏泰氏に、「隠岐方言のナ行音文末詞」(『佐賀大國文』第2号 昭和29年8月)とのご発表がある。

後藤藏四郎氏は、『出雲方言考』(郷土改善会 昭和2年10月)で、

広瀬附近にては一般になを用ゐる。飯石郡にては丁寧に言ふときにはなを用ゐる、劣等へ対してはねを用ゐることが松江とは反対である。

とも説いていられる。

「ナ」の変形「ナイ」が、いくらかあるか。広戸惇氏は、『山陰方言の語法』(県立教育研修所 昭和25年8月)で、

大社町では「下さいよ」をゴザッシャエナイ。「あのね、」をアノナイ等ナイを添える言い方がある。

としていられる。

出雲に、「ニャー」と聞こえる文末詞があって、これのおこなわれることがいちじるしい。たとえば、

○何々は ナエイダドモ ニャー。

何々はないけどねえ。

などと言っている。「ニャー」が聞こえることもあれば、「ニャ」が聞こえることもある。「ニャ」とともに、「ネャ」としうるものも聞こえる。これらに関して、かつて神部宏泰氏の語られたところがおもしろい。——“土地人は、ぜんぶ「ネー」と言っているつもりだ。”と。そこがだいじなのだと思う。「ニャ」と聞こえるばあいにも、その「ニ」は、じつは、[ne]なのであろう。「ネャ」と聞こえるものも、じつは、[nea]のはずである。要するに、出雲には、「ニャー」またはそれに近く聞こえる文末詞があっても、それらは、「ナ」系のものでなくて、「ネ」系のものだと解される。(出雲では、「ネ」がよく

つかわれると、人々が説明しがちであるのも、ここに合わせ見たい。

※ ※ ※

複合形には「ヤナ」がある。「カナ」「カイ(エ)ナ」がある。

「ガナ」がさかんにおこなわれている。たとえば、

○タンビ[ī]ダケン エー ガナー。トナリ[ī]シ[ī]ラズ[ü] ショー  
コイ。

(もちをつくのは) あんまりたびたびだから、いいよ (つかなくても  
いいよ)。「隣り知らず」をしようよ。

などと言う。「ダガナ」となるのも、はなはだ出雲的である。

「デナ」がある。(隠岐にもある。)  
「ダデナ」もある。

「トナ」の注意すべきものがある。たとえば、出雲西辺で、

○テンキ[kçī]ガ イ[ī]カッター イク[ü] トナ。

天気がよかったら行くそうだ (行くんだってよ)。

などと言う。

「ワナ」複合形があって、かなりおこなわれている。

### 鳥取県

島根県下に隣って、鳥取県下は、全般に、「ナ」をよく見せている。——その点では、鳥取県の状況が、島根県下のよりもやや単純であろうか。鳥取県出身の室山敏昭氏は、“「ナ」は、鳥取県全般にさかんであって、「ネ」は、鳥取県下では、さほどおこなわれぬ。”と言われる。中国地方で、岡山県下と鳥取県下とは、等しく「ナ」をよく見せている。「ナ」のおこなわれることのかくべついちじるしい近畿地方に接着するのが、これらの両県である。鳥取市での「ナ」例をひくならば、

○チャー モッテ クルケー ナー。

茶を持ってくるからね。(中女間)

などがある。「〜ケー ナー」の言いかたが、よくおこなわれているようである。——これは鳥取市内にかぎらない。下のは因幡中部での一例である。

○エーエー。イッテートクケー ナー。

ええええ。言っといとく（言っとく）からね。

※ ※ ※

鳥取県下の、「ナ」に関する複合形文末詞を見る。

因幡東部のことばに、

○アル コトダラー カナーイナ。

（彼岸と正月とがいっしょになることなんて）あることだろうかねえ。

との言いかたがあるらしい。（昭和33年10月15日のNHK放送で聴取。）疑問の「カ」は別とすれば、「ナーイナ」というのが注目される。はじめの「ナーイ」が「ナ」の変形だとすると、ここでは、それに、あらためて「ナ」を累加した形が見られることになる。『全国方言資料』第5巻の、「鳥取県倉吉市国分寺」の条にも、

f………… キャ ガヤガヤガヤガヤ イットッテナイナ

ただ がやがやがやがや 言っていてねえ

とある。「ナイナ」がとりたてられよう。鳥取市のことばにも、

○オヤジニ ヨー ニトル ナーイナ。

おやじによく似てるねえ。（生まれた子について言う。）

というのがある。

「ヨナ」複合形があり、また「イナ」がある。

○ドー シトル イナ。

どうしてる？

これは、鳥取市内で聞いたものである。「イ」があまりにもげざやかなので、「イナ」をとりたててみる。県下の方々に、「イナ」が認められる。

「ゾナ」があり、「ゾイナ」がある。

「カナ」があり、「カイナ」がある。「カイナ」もよくおこなわれており、因

幡では、なまった「キャーナ」なども聞かれる。「ソー キャーナ。」(そうかいな。)などと言っている。

「ガナ」のおこなわれることがさかんである。

○トラサン ユーノガ イットッタ ガナ。

虎さんという人が言ってたわよ。(老女間)

は、因幡奥辺の一例である。「ガナ」に対する「ガイナ」も見いだされる。

伯耆に、「ダイナ」「ダーナ」が聞かれる。室山敏昭氏教示の例は、

○オガマハル ダイナー。

おがまれるんだよ。(老男間)

○ダス ダーナ。

(ラムネの玉を)出すんだよ。(小男間)

などである。

「ワイナ」が、伯耆その他にかなりよく聞かれ、「ワナ」も聞かれる。

瀬戸内海域は、中四国にかかわるものであるが、今、この所で、内海域全般をとりまとめて観察してみる。概括的な言いかたをすれば、「東から、『ナ』が『ノ』をおしている。」と言える。安芸・周防の方面になると、「ナ」を拒否しているありさまである。山陽系の、広島県以西の諸島では、「ノ」を日常ことばとすることが多く、これに対して、四国系の島嶼は、「ナ」を日常ことばとしがちである。

内海中部の伊予大三島の北部(藤原生地)では、「ナ」をおこなうことがない。しかるに、一つ、

○イマ ユータ ナー。

いま言ったじゃないの。

との言いかたがある。起源はともかくも、ここに、特定のよびかけの「ナー」がある。「のは」からきた「ナー」かとも思われるが、じっさいの意味作用は、「～じゃないの。」との、決定的な言いかたなので、現実態の「ナー」として

は、もはや「のは」的なものなどとは、思ひようがないものになっている。実感から言えば、ここに、たしかに、複雑な意味作用を持ったよびかけの「ナ」があるとされる。

中国地方の「ナ」を観察して、むすびのことばを述べれば、以上のように「ナ」がおこなわれているとはいえ、問いの「ナ」があまりおこなわれていないのが注目される。——（広島・山口の両県では、その点がいちじるしかろう。）九州状況との大きな相違が、ここにある。

長門西部に、

○ $\overline{\text{マ}}$ ー  $\overline{\text{オアガリ}}$ ー ナ。

まあお上がりよ。

などと、動詞連用形を受けて、「ナ」でむすぶ言いかたがあることを、さきに指摘した。(p. 171) 四国内・近畿内に、「 $\overline{\text{オアガリ}}$ ー ナ」のような言いかたが顕著である。そのようなものが、中国西辺に見られるのはなぜか。ここには、長門地方が、けっして単純な中国性の地域ではないことがうかがわれて、興味が深い。

長門地域のこの種の事実は、アクセントその他での問題事実とともに、あわせ解釈されるべきものであろう。

## 五 四国地方の「ナ」ほか

まず、愛媛県地方では、「あの ナ。」「だれさんが ナ。」「どうどうしてナ。」といったぐあいの、「ナ」の頻用が注目される。中予方面の「ナ」例は、

○アノ  $\overline{\text{ナ}}$ ー。

などである。「ナ」にいたってこのように高音の徴標を見せるのが、一特色である。女性の話しことばに、ことにこれがいちじるしい。

○ア、 $\overline{\text{ホ}}$ ー ナ。

あら、そう。

は、東予の一例である。伊予西海の小孤島、青島の例を出すならば、

○ドガイ シタラ ナ。

どうしたの？

のようなのがある。

中予方面で言う「オタバナ。」などの「ナ」は、「ナサイ」を思わせるものであろう。ところで、東予の一例、

○モテ オイデ ナ。

持ってきたさいね。

というようなものになると、「ナ」が、文末詞として付加されているようである。松山弁などの、

○オイデテ ナ。

いらしてくださいな。

などになると、この種の「ナ」は、明らかな文末詞とされるようである。

当県下で、「ナー」は、よいことばづかいになっている。——「ノー」が、それよりはわるい言いかたとされがちである。

「ナ」の強調形とも解される「ナン」がある。南予で、

○ドコイ イトッタラ ナン。

どこへ行ってたのよ。

などと言っている。（南予内には、「ナン」をよくつかっているところがある。目上の人や年寄りに言うとも言っている。）中予北部で、

○タウエガ スミマスケン ナン。

田植えがすみますからね。

などと言っている。このほうでも、「ナン」の使用がさかんである。おもには、老人のことばであるか。

「ナイ」という強調形も見いだされるか。『全国方言資料』第5巻の「愛媛県北宇和郡津島町」の条には、

mヤバンナ コトナイ

野蛮な ことだったなあ。

とある。

東予の西寄りに、「ニェア」があるかもしれないが、定かでない。

以下に、愛媛県下の、「ナ」に関する複合形文末詞を見るならば、「ヨナ」があり、「ゾナ」がある。「ゾナ」のおこなわれることはいちじるしく、東予内では、

○ヒロカレン ゾナ。

さわいじゃいけませんよ。 (おとな→子どもら)

などと言っており、中予内では、

○キョートーサン, コレ ドー ゾナ。

教頭さん、これどうですか。(かなりていねいにものを言う中での、ややしたい言いかたである。)

などと言っている。「ゾナ」の類に、「ドナ」もなくはない。「ゾイナ」の言いかたがある。東予東寄りでは、

○ホー ゾイナー。

そうだろうよねえ。

などと言っている。同地方で、「ホーダッタ ゾイナー。」と言うのは、「そうだったよねえ。」と、先方に賛成を強要するものである。

「カナ」の言いかたも「ガナ」の言いかたも、県下にかなりさかんなものがある。

○コイヨニ ユーンジャ ガナ。

こんなに言うのよ。(と知らせる。)

は、松山弁での婦人発言である。「ガナ」を、県下の南寄りでは、あまり言わないか。

「ワイ(エ)ナ」の言いかたがあり、つぎのような、内在部分のある「ワイナ」がある。

f エーエー シットライナー ワタシラモ

ええええ、知っているですよ、 わたしたちも。

『全国方言資料』第5巻「愛媛県温泉郡川内村井内」の条にこれが見える。「シットライナー」は、「知ットル ワイナー。」のつづまったものであろう。

つぎに高知県下となると、一般状況としては、「ナ」がおこなわれているものの、それは、愛媛県下でのようにいちじるしくはないらしい。高知市西方の浦の内湾のほとりでの一週間調査では、私は、土地人が「ナ」はあまりつかぬのを見た。——「ノー」と「ノース」とをよくつかっていた。ともあれ、県下の「ナ」例は、

○キョア マタ、イチンチ フル ナー。

きょうはまた、一日じゅう降るねえ。

などである。(県下西南部の例) ところで、浜田数義氏は、「幡多方言における敬卑表現」(『高知県立中村高等学校研究論集』第一号 昭和31年1月)で、

「ナ」は中村附近でも用いられるが、それは自問自答の反語形式として、「行くかーナ (或はノ)。(行くだろうか、多分行かないであらう。)という意味の場合にのみ限定せられていて、敬卑には関係がない。

と言われる。

「ナ」の強調形と見られる「ナン」が県下にあり、私は、早く、県下西南隅の旧小筑紫村で、これを聞きとめた。

○オマエワ ドコイ イキャ ナン。

あんたどこへ行きますか？

など。土居重俊氏も、『土佐言葉』(高知市立市民図書館 昭和33年9月)で、宿毛市小筑紫の、

ホンマカナン (ほんとうかね)

をあげていられる。

県下西南部に、「ニャ」があるかどうか。「長州チョルチョル土佐ニヤニヤ」

の言いぐさは、古くからおこなわれてきたものであろう。その「ニャ」は、文末詞「ニ」に關係の深いものであっても、「ニャ」に近いものなのではなからう。浜田教義氏も、上掲の論文で、「ニャ」を指摘してられる。

以下に、県下の「ナ」に関する複合形文末詞を見る。ひとくちに言って、「ナ」に関する複合形のおこなわれることが、あまりいちじるしくない。——ということとは、「ナ」がいちじるしくはおこなわれていないということでもあるか。複合形の、ありうる形を列挙してみれば、「ヨナ」「ゾナ」「カナ」「ガナ」「ノナ」などがある。土居重俊氏の『土佐言葉』に見える「ノンナ」の例は、

ソソナ トコロデ ナニ ショソノソナ

(そんなところで何をしているのか)

である。

徳島県下は、「ナ」のさかんな所である。(当域が、近畿の対蹠地であることが思われる。)男女ともに「ナ」を言い、ていねいにも、またややぞんざいにもこれを言う。

○ナルトノ ウマレデスケン ナ。

鳴門の生まれですからね。

これは、老女の一発言例である。依頼に、あつらえに、疑問に、その他に、「ナ」が多用されている。金沢治氏の『阿波言葉の辞典』の中の一記述には、

アレ位ナンナ あれ位なにの〔恐れる事が〕あろうか

というのがある。

「ナ」の強調形「ナン」が、県南にいくらかおこなわれているらしい。

○エー テンキヤ ナン。

いい天気だね。

などと言っている。

「ナイ」が、そうとうによくおこなわれている。県北域にこれがいちじるしいか。

○アタシガ ナイ。

わたしがねえ。

○オイデトッタンカモ ワカラン ナイ。ナーイ。

いらしてたのかもわからないわね。ねえ。

などと言っている。中年女性などに、多く「ナイ」が聞かれがちか。(中年以上の男性も、「ナイ」を言っているらしい。)

金沢治氏は、『阿波言葉の辞典』で、「文末助詞」の「ナフ」を指摘している。

ナフ(音韻転訛)(徳島市, 女, 全)

ともある。「ナフ」は何ものであろうか。

県東岸の一地, 橘町には, 「ニャー」の言いかたがある。

○コレ ナン ズニャー。

これ, なんですか?

などと言っている。——目上に対しては, あまりつかわぬという。(目上には, 「ニン」や「ニー」をつかうという。)当地の「ニャー」は, 「ニャ」系のものであるだろうか。「ナイ」などに近い単純な「ニャー」ではなさそうである。限られた当地に, 「ニー」や「ニン」のよくおこなわれていることは, 私も, 調査して領得している。

県下の, 「ナ」に関する複合形文末詞を見る。まず「ゾナ」のおこなわれることがいちじるしい。

○コレ, ケンド, ハチガ ヤルトシタラ, ヨー ヤル モン ズナー。

これ, けど, 蜂がやるとしたら, よくやるものだよねえ。(蜂の蜜つくりをほめる。) (中男→藤原)

は, 県南部の西奥での一例である。県下に, 「ゾイナー」もある。

「カナ」がおこなわれており, それよりも, 「カイナ」が, なおいちじるしくおこなわれている。

○アワナンダ カイナー。

会わなかったかね。

といった調子である。「カナ」よりも「カイナ」が、より阿波に密着したものであるとするならば、「カイナ」と、やわらかく述べる情調が、阿波のものだとも言えようか。）

県下に、「ガナ」もよくおこなわれている。

○シリマセン ガナ。

知らないんですよ。

といったあんばいである。「ガイナ」もいくらかおこなわれている。「ガナ」と「ガイナ」とでは、「ガナ」のほうが優勢であるらしい。おもしろいことである。）

「トナ」の注目すべき用法がある。金沢治氏の『阿波言葉の辞典』を見るのに、

イテハ見ンケドナ ホラ 善ウ出来トリマストナー〔行ってはみませんがそれは、よく出来ているそうですよ〕自分の見解知識を相手に写そうとする

とある。

香川県下でも、「ナ」が、東西一般に、よくおこなわれている。どの地方でも、——「ナー」「ノー」の両方がおこなわれていても、「ナー」は、ふつう以上の品位”としていがちである。

○ドコイ イク <sup>↑</sup>ンナ。

どこへ行くの？

は、県東部の一例である。

○ホレカラ ナ。

それからね。

○ホーヤ ナー。

そうだねえ。

は、小豆島の二例である。「ナ」をよくおこなう丸亀方面に、

○ソー シナ ナ。

そうしなさいね。

などの言いかたがある。上の例の「シナ」は、「しなさい」にあたるものである。最後に「ナ」文末詞がつけそえられている。

県西辺の一島、伊吹島には、「ニャー」があるかどうか。「ニヤ」があるかもしれないが、これも、定かではない。

当県下の複合形を見る。「ゾナ」がある。「カナ」があり、「カイナ」がある。「ガナ」がある。「ノナ」「ソナ」がある。

「ワナ」が、比較的よくおこなわれているか。

○アソコノ ウラニ アル ワチー。

あそこのうらにあるわね。

は、県中部内の一例である。

四国全般の状況としては、高知県下に、「ナ」の比較的よわいのが注目される。(ここは、「ノ」のかなりつよい地域である。)いずれにしても、——四国内にかぎったことではないが、「ナ」一種だけがおこなわれるというようなことは、ありにくいことである。多くは、「ナ」が「ノ」などと関連して分布するありさまである。

ところで、近畿地方となると、全国諸地方の中でも、とりわけよく「ナ」がおこなわれている。

## 六 近畿地方の「ナ」ほか

方言としての近畿ことばの特色を一言であらわすとしたら、「ナ」ことばと言うことができよう。いわゆる近畿弁の人たちは、ことごとに、「ナ」のよびかけことばをつかっているとも見ることができる。

瀬戸内海中部の一島に育ち、山陽系の「ノ」ことばにだけなじんできた私は、

方言研究の道にしたがって、近畿弁を経験するにつれ、近畿地方が、まさに、「ナ」のくにであることを痛感するにいたった。気づいてみると、近畿とともに、四国もだいたいそうであった。「ナー」に、近畿性ととも言いうるものがあるのかとも思われる。

「ナ」は、近畿にとって、土着のことばである。それは、「ネ」が、関東の土着のことばであるのに等しく、また、「ノ」が中国の土着のことばであるのに等しい。一つの解釈であるけれども、私はかねがね、近畿弁のアクセント（一一したがって四国弁のアクセントも）の文アクセント状況は、よびかけことば（文末詞）の、「ノ」でも「ネ」でもなくて「ナ」とあることに、よく関連していると解している。

近畿地方一般に、「ナ」は、あるいは単純なよびかけに、あるいは問いの表現になどなど、はばびろく用いられていよう。使用者階層といえ、もちろん、全階層にこれがさかんである。幼少の人たちも、「アノ<sup>ナ</sup> ナ。何々で<sup>ナ</sup> ナ。」（あのね。何々でね。）などと、まったく自在に「ナ」の生活をいとnanでいる。女性がわに片よって「ナ」がよくおこなわれる、などということは、一般には、ほとんどなかるう。

「ナ」ことばの品位は、上等ないし中等とされているのがふつうか。なににしても、「ナ」はさかんにおこなわれているので、人々は、これに、品位意識を持たないありさまですらある。但馬の一人士は、“「ノー」は目下に言うことば。「ナー」はちっとましなことばかもしれん。”などと語った。

以下に、府県単位の見かたを進めていこう。

## 兵庫県

淡路島北部での経験例であるが、「ナ」文末詞が頻用されて、デス・マス式の言いかたにはおよんでいないありさまが注目された。いわゆる無敬語の話す生活の中で、「ナー」が、ひときわつよく光り、これが、多くのばあいの待遇

表現をまかなっているのである。淡路南部となると、「ナー」「ノー」の両方が認められる。淡路北部の一例をあげよう。

○コレ ナン ナ。コレ ナン デ。

これなに？ これなに？（父おやがその子の幼男に絵本を見せながら言う。）

「ナ」の文末詞が「デ」の文末詞と対応していて、ここに、「ナ」の、「やさしみ」表現の用法が明らかである。

兵庫県家島諸島内では、「アノ ナー。」は同僚・目下に言い、「アノ ナー。」は目上に言うのだという。（「アノ ネー。」はよその人に向かって言うのだという。）

たとえば神戸市方面では、

○オコッタリー ナ。

おこってやりなさいよ。（小女がその叔父に、自分の兄のことを言いつける。）

といったような、「…… ナ。」の言いかたがさかんである。但馬南部例は、「オクレー。」に対する「オクレー ナー。」（ちょうだいよ。）などである。四国弁の中にも、この種の言いかたがあることは、さきに明らかにした。（p. 181）  
 こういう言いかたのばあいにも、文末詞の「ナ」が認められるとしたい。「お読みナ。」（読みなさい。）などと言うばあいは、「ナ」が「ナサイ」の「ナ」であると解される。「お読み ナ。」などであれば、「ナ」が文末詞と解される。——かりに、「お読み ナ。」の「ナ」も、「ナサイ」から出たのだったとしても、現状の「お読み ナ。」での「ナ」は、文末詞相当のものになっている。おこなわれざまばかりか、人の、これについて持っている意識も、文末詞意識であるのがふつうのようである。「読んで ナ。」などとあるばあいには、「お読み ナ。」などとあるばあいよりも、いっそうよく、「ナ」の文末詞らしさが受けとられる。

※ ※ ※

本県下の、「ナ」に関する複合形文末詞には、注目すべきものが多い。「ナ」は、他とむすびあっておこなわれることがいちじるしい。

「ヤナ」を最初に問題にする。「ホントヤ ナー。」などと言うばあいは、「ヤ」の指定断定の助動詞であることが明確であるから、問題はない。

*m*………… ウレシカッタヤナー

………… うれしかったよね。

と、『全国方言資料』第4巻の「兵庫県城崎郡城崎町飯谷」の条に見えるようなものになると、「ウレシカッタ」との言いかたのあとへ、「ヤ」「ナー」の言いかたをしているので、「よね」とも言いかえられているとおおり、「ヤナ」を、まとめて文末詞と受けとりたくなる。

つぎは、「ヨナ」である。この複合形は、めずらしいものではない。ただし、これの用法には、ときに、特異なものが見いだされる。「エナ」もあるのを、ここに指摘しておこう。

「イナ」としうるものが、かなりさかんである。

○イツゴ<sup>ロ</sup>デ<sup>ス</sup> イナ。

いつごろですか。

は、但馬南部の一例である。播磨例なら、

○ナン<sup>ジャ</sup> イナー。

なんです？

などというのがある。「デス」「ダス」「ジャ」などのばあい、その発言が、しぜん「〜イ」の音相をおこしがちである。この点では、「イ」は、前者に従属する付帯音とも解されるけれども、たとえば、「いつイ。」(いつ?)などと——「イ」が明確であると、私どもは、この「イ」を、どうしても、文末詞然としたものと見ざるを得ない。なんらかの「イ」にも、「ナ」がむすびついていれば、ここではまた、「イナ」一体の文末詞が認められることになる。清瀬良一氏が「神戸方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻 昭和32年12月)の中にかかげられた一例、

○ホラ, アソコニ ヤオヤガ アッタロイナ。 (姉老女→妹中女)

……注意喚起……

の、「～ヤロ」のもとに見える「イナ」などは、いっそもって、「イナ」文末詞と受けとりやすいものであろう。

県下に、「ゾナ」のおこなわれることが、かなりさかんである。「ゾナ」が「ドナ」にもなっている。「ゾイナ」もある。それが、「ドイナ」ともなっている。

「カナ」は、じつに一般的なものである。それが、播磨内では、「カーナー」ともなっている。「カーナー」は、「カイナー」に近い。「カイナ」もよくおこなわれている。これは、兵庫県下のものであるよりも、むしろ、はなはだ近畿的なものであるとも言えることができる。鹿谷典史氏は、その『神戸方言集』（神戸郷土研究会 昭和14年10月）の中で、

カイナ 疑問 (活動見にゆくんかいな)

カイナ 不可能 (こんな筆で書けるかいな)

カイナ 意志 (うちらそんなこと言ふかいな)

と記述していただける。「カイナ」が「カエナ」ともある。「カイナ」がなまって、「キャーナ」ともなっている。これは、但馬がわでのことである。

○シラショー キャーナ。

知らせようかいな？

は、その一例である。

「カイナ」に類するものともしうるか。特定の「カレーナ」がある。今石元久氏は、宝塚市方面の二例、

○シル カレーナ。

知るものか。

○イカン カレーナ。

行くものか。

を教示された。「カレー」の「レー」は、人代名詞「ワレ」の「レ」であろう

か。紀州方面につよいこの種の人代名詞利用法がここにも見いだされるのは、注目にあたいする。

つぎに問題とすべきは、「ネンナ」である。清瀬氏教示の神戸方言例、

○ツイデニ ダイマルエモ ヨッテ クル ネンナー。

ついでに大丸へも寄ってくるんだね？

のばあいだと、「ネン」が「のや」（準体助詞「ノ」+指定断定助動詞「ヤ」）からのものであるとしても、今は、それが、つぎの「ナー」とむずびあうものになっていると見られる。「ネンナ」を一体の文末詞としてとりたてることが可能であろうか。清瀬氏も、“その中で「ネンナ」を用いると、念をおす言いかたになる。”と言われる。

「…… ネン。」とあるばあいにも、「のや」が「ネン」となるとは、その音相のいちじるしい変化によって、これが文末詞的なものと見られやすいことになる。

やはり、清瀬氏が神戸方言について報ぜられるものに、「トナ」がある。（前掲「神戸方言の文末助詞」）

○ナカエ ハイッテミヤ シマヘンゲド キレニ ナットリマス トナ。

（「トナ」は老人らしい言いかた……若いものはこのような言いかたはしない。）

の例をかかげていられる。

「ガナ」「ガイナ」が指摘される。「ガイナ」のほうが、よりつよく近畿色をあらわしがちであろうか。播磨北部の一例は、

○サツソク イル ガイナ。

さっそくいるさ。

である。

「ワナ」「ワイナ」がある。「ワナ」は、「ワーナー」などとも言われている。「ワイナ」は「ワエナ」ともある。但馬内では、「ワイナ」「ワイナー」が、「ウェーナ」「ウェナー」となっている。播磨での、今石氏教示例の、

○ワシデモ スラナー。

のばあいなどには、「スラナー」のところに、「スル ワイナー。」が認出される。

### 大阪府

当地方に、「ナー」一本の生活がいちじるしいことは、多く言うまでもない。「ナ」文末詞は、土地の生活の深部に生きている。

○ド<sup>ナ</sup>イ シ<sup>タ</sup>カテ ナー。

どんなにしたってねえ。

は、府下の南部内の一例である。府下一般に、「………… ナー」と長呼されることが多かるう。

ところで、「ソ<sup>ン</sup>ナン ヤ<sup>メ</sup>トキ<sup>ー</sup> ナ。」(そんなのやめておきなさいよ。小男→父)といったような「ナ」の用法もあり、これのおこなわれることが、またさかんである。

○ソ<sup>ン</sup>ナ コト ユ<sup>ワ</sup>ント オ<sup>キ</sup>ー ナ。

そんなことを言わないでおきなさいよ。(大女間)

○チョ<sup>ッ</sup>ット マ<sup>チ</sup>ー ナ。

ちょっとまちなさいよ。(大男間)

などは、代表的な例とされよう。「シ<sup>ン</sup>バイ シ<sup>ー</sup>ナ。」といったようなばあいの「シーナ」は、「ナ」を分別せしめないであろう。「シ<sup>ー</sup>」は、「しなさい」を意味する。その命令形を、禁止形にうちかえたのが、「シ<sup>ー</sup>ナ」であろう。動詞連用形尊敬表現法の禁止表現法形態と見られる。「キ<sup>ー</sup>マワ<sup>シ</sup>ナ。」にしても、「気をまわす」の意の「キ<sup>ー</sup>マワ<sup>ス</sup>」という動詞の連用形「キ<sup>ー</sup>マワ<sup>シ</sup>」に禁止法の「ナ」をつけて、この言いかたをおこしていると見られる。)大阪弁での「ナ」の品位が中以上ともなることは、多く言うまでもなかるう。

府下の南河内郡で経験したことであるが、「ナ」の変形「ナイ」が認められた。

○カイモク シラナンダ ナイ。

かいもく知らなかったね。

などと言っている。「ナイ」が「ナエー」とも言われている。——「ナエー」が、「ネー」に近くも発音されている。

※ ※ ※

諸種の複合形があって、注目される。はじめに、「ネンナ」をとりたててみる。「ネン」は、「……～ノヤ」にあたるものなので、本来、文末詞とはしがたいものであるが、「どうどうしテンネン。」（どうどうしたのよ。）などと言われている「ネン」には、遊離性が認められ、これに「ナ」のつづいたものが、「ネンナ」としてとりたてられなくはなくなっている。

「イナ」複合形文末詞は、当地方での特徴とされるものである。

○ナニヲ イナ。

何をね？

といったような「イナ」である。

○イッジョニ オチャ ノミマヒヨ イナ。

いっしょにお茶を飲みましょうよ。

といったぐあいに、「イナ」がきれいに出てくる。（「イナ」とともに、「エナ」も見られる。）

○ダイブ アリマス イチー。

だいぶんありますよねえ。

は、河内南部での一例である。

「カナ」がある。「カイナ」がある。後者のほうが、いわば大阪弁的であろうか。「ホンマ カイナ。」（ほんとかしら。）というのなどは、土地っ子に愛用されている一表現態かもしれない。

「ガナ」というのは、また、当地方での一特徴となっているものであろう。

○ソーヤ ガナー。

というのなどは、土地っ子の口ぐせの中にあるものかもしれない。自己の気も

ちをはっきりと相手にもちかけようとする時、「ガナ」が用いられていよう。例の「〜ネン」に「ガナ」がつづいた「ネンガナ」という一体性のものも見られる。

「ガイナ」は、あまりおこなわれていないであろう。「ガナ」が熟用されて「ガイナ」は用いられないところに、生きた大阪弁のおもしろい習性があると言えよう。「ワナ」があり、このばあいは、「ワイナ」もある。

### 和歌山県

県下全般に、「ナ」がおこなわれている。その用途は、さまざまである。県南では、「ナ」が目下に用いられもしている。私が、かつて串本町で調査した時は、

○サムイ ナー。

さむいね。

は、目下へのことばだとのことであった。“特別のばあい、ごくしたい人には、対等に「ナー」を言ふ。”ともあった。“「ナー」はいちばんいやなことば。”という説明もあった。村内英一氏は、「文末助詞のニュアンス」(『言語生活』第十七号 昭和28年2月)で、

東矣婁郡明神村では、「なー」は同等の者同志に、「のー」は目上の者に対して、「のーよ」は同等または目上の者に親愛の意をこめて主に女に用いられ、「なーよ」は目上の者に親愛の意をこめて男だけが用い、と説いていられる。南紀田辺市の東方の山地域内で私が聞き得た説明には、

○「ノー」ホガ エー コトバヤ ナー。

「ノー」のほうがいいことばだね。

というのがある。

『和歌山県方言』に、

クルナン 来てはいけません

こんなところへ クルナン。

などというのがある。このばあいの「ナン」は、禁止の表現に役だっているものであるから、今は問題外のものとされる。それにしても、「ナ」の「ナン」とあるのが注意される。文末詞「ナ」が「ナイ」とも「ナン」ともなりやすいことの一般性が、こんなところにも見られるとされようか。県下では、文末に、なんらかの「ナ」、その他がきた時に、たとえば、「ナン」というように、「ン」音を付生させることがすくなくない。一種の習慣であろうか。『全国方言資料』第4巻の「和歌山県日高郡竜神村大熊」の条にも、

f ハー ヨー オコシナン

はあ よく いらっしゃいました。

などとある。「オコシナン」は、「オコシナ」（いらっしゃいませ）の「ナ」のあとに、「ン」を付生せしめたものであろう。

文末詞「ナ」の変形としての「ナン」はないけれども、「ナイ」はある。「あのね。」も、「アノ ナイ。」と言っている。県下に広く「ナイ」が認められるようである。

※ ※ ※

当県下には、複合形については、言うべきものがさほどにはない。「ゾイナ」「カイナ」「ガナ」「ワナ」などがある。「和歌山県日高郡竜神村大熊」（『全国方言資料』第4巻）では、「カイナ」が、

m コノサーイ カンズメ ヒトツ ウツクレンカーインナー

このねえ、 かんづめを ひとつ 売ってくれないかねえ。

のように、「カーインナー」となっている。

『和歌山県方言』の「カマナナ」（かまひませんね）というのは、「かまわぬワイナ。」の「ぬワイナ」が「ナナ」となっているものであろう。

奈良県

当県下にも、また、「ナ」が一般的におこなわれている。通常は、「ナ」が普通度以上の品等のことばになっていよう。しかし、南部内には、「ナ」が下等のことばとしてもおこなわれているという。

「ナ」の変形「ナイ」があるか。『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都那村」の条には、

mア イツデモ スマンノヤケドナイ  
いつも すまないのだけれどねえ、

などとある。

※ ※ ※

複合形では、「ヨナ」、「ゾイナ」、「サナ」がある。——「サナ」の存在は、三重県のそれに通じるものである。

「カナ」「カイナ」があり、「ガナ」がある。「ガナ」のおこなわれることはいちじるしい。

「ワナ」もある。

### 三重県

「ナ」は、一般によくおこなわれている。“伊勢のナことば”との言いぐさもあるという。伊勢の南北で、「ナ」の勢力に差があるか。私どもには、その濃淡がよくわからない。伊賀でも、「ナ」がよくおこなわれている。

○センセ、ヨルデモ イソガシーンヤ ナ。

先生は、夜でもいそがしいんだね。

は、その一例である。志摩でも「ナ」がよくおこなわれている。東岸の国崎では、老若男女が、一般に「ノ」はつかわないで「ナ」だけつかっているのを、かつて私は経験した。志摩に、「ナー」に対する「ナイ」もあるか。また、「玉岡氏によれば先志摩では」

アンノー（あのね） 目上に

アンナー ( " ) 同輩以下に

となっているという。(棋垣実氏「志摩方言」『東条操先生古稀祝賀論文集』昭和30年5月)

三重県下全般に、「ナ」は、およそ、敬意やしたしみをあらわしていよう。また、同等以上のものに対してつかわれがちであろう。

三重県紀州に、「ナイ」が見いだされる。

○スル<sup>ナ</sup>ンヤロ ナイ。

するんだらう？

などとある。志摩についてはさきに述べた。南伊勢にも見いだされる。

県南、伊勢長島町では、人に同意を求める時など、文末で「ニャー」のよびかけをしている。尾鷲方面でも、

○アホラ<sup>ニ</sup>シー ニャー。(青男→同)

などの言いかたがおこなわれている。(佐藤虎男氏教示) 私もまえに尾鷲町で、

○フル<sup>ニ</sup>ジャロ ニャー。

降るだらうねえ。

○キョー<sup>ニ</sup>ワ サムイ シ<sup>ニ</sup>ャー。

きょうはさむいことねえ。

などを聞いた。「ニャー」に、「ニヤ」の縮約が考えられるか。この地では、まず「ニ」文末詞が注目されるが、「ナイ」の「ニャー」もあるか。尾鷲などでは、別に、「ニヤ」そのままの形も聞かれる。尾鷲・木ノ本では、

○サムイ ニヤ。

などとある。

木ノ本でも、「ニヤ」が「ニャ」に近く発音されてもいる。

佐藤虎男氏の談によるのに、尾鷲で「ニャ」と聞こえるので、聞きかえすと、

“「ニャ」ではなくて「ニヤ」だ。”と、人は答えたという。

なお一つ、私は、伊賀で、

○ツヤ シ<sup>ニ</sup>ャー。

そうだよね。

との言いかたを聞かされた。「ン」は「ニ」からのものであろうか。「ニャー」は、どういう「ニャー」であろう。

※ ※ ※

三重県下に、「ナ」に関する複合形の文末詞は多い。「ネーナ」があるらしい。「ヨナ」がある。「サナ」がよくおこなわれている。(奈良県下の記述であれた。)

○マー ソレト サナー。

まあ、それとよねえ。(老女)

は、長島町での一例である。

○ハナシノ タネオ サナー。

話しのたねをよねえ。(大男間)

は、伊勢市内での一例である。

○アンマリ エイヨーガ サナー。

あんまり栄養がよねえ。

は、伊賀での一例である。

○ソリャー エー コタ ナイ サナー。

それはいいことはないよねえ。(老男→藤原)

は、志摩での一例である。「サナー」のアクセントになることが多く、ときに、「サナー」とある。

「ゾナ」も、よくおこなわれている。「ドナ」ともなっている。——これが、かなりさかんである。「ドイナ」「ゾイナ」もある。

「カナ」のおこなわれることがさかんである。

○センセ カサ モッテ イク カナ。

先生、傘を持って行きますか？

といった調子である。「カイナ」もある。

つぎに、「ガナ」がよくおこなわれている。

○イーイ、ワッシャ シヤヘン ガナ。

いいえ、わたしはしやしませんよお。

は、尾鷲での一例である。

○ワーシ ロクジュウハッチャ ガナ。

わたしは六十八なんですよ。 (老女→藤原)

は、伊賀での一例である。

なお、

○ソ<sup>ナ</sup>ンヤ ンナー。

損だわね。(“損じゃないか?”)

のような表現法が、よくおこなわれている。つまり、文末に、「ヤンナ」が聞かれる。「ヤ」は助動詞にほかなるまい。「ナ」は文末詞である。「ン」は、中間の挿生音とも考えられるかどうか。佐藤虎男氏は、「転成文末詞『ニ(ニ一)』について」(『国文学攷』第五十七号 昭和46年11月)で、伊賀の「イテキタンヤ ンナ。」(行ってきたんだよ。)の「ンナ」を、「ニナ」と解していられる。伊賀でなくて、北伊勢にも、

ヤルンナ 上ゲルワ

などの言いかたがおこなわれている。(三重県立桑名高等女学校『方言訛語集』自家版 昭和8年2月) 県南の紀州の内にも、「キョウワ サムイ ンナー。」のような言いかたがある。

つぎのような、変わった言いかたがある。

○オトトイ<sup>テ</sup>チュノヤ シテナー。

兄弟のことを「オトトイ」と言うのでねえ。 (老女→藤原)

この例は伊賀で聞きとめたものである。「シテ」と「ナー」との結合が見られる。(「シテ」も、すでに文末詞になっていよう。人は、この種の「シテ」を連発してもいる。)

「ワナ」がある。「ワエナ」もある。「ワサナ」もある。「ワテナ」もあるとしうるか。

○タイ<sup>↑</sup>テイヤ ナイ ワテナー。

たいていではないよねえ。

は、伊賀で聞いたものである。

### 京都府

京都府下では、「ナ」がふつうによくおこなわれている。おおかたは、これがよい言いかた、ていねいな言いかたになる。北寄りの地域となると、「ナ」「ノ」を両立せしめているが、人々の意識は、「ナ」本位のものである。丹後半島の「ナ」例は、

○ソ<sup>ニ</sup>ン<sup>ニ</sup> ウス<sup>ニ</sup> シ<sup>ニ</sup>タ<sup>ニ</sup>ラ サム<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ロー ナ。

そんなに薄着をしたらさむかるう？

などである。

「どうどうして オくれー ナ。」の表現法は、府下に広くおこなわれているよう。「どうどうしてー ナ。」の言いかたも、広くおこなわれているらしい。

※ ※ ※

大阪府下などと同様、京都府下に、「イナ」がよくおこなわれている。「なんです イナ。」などといったあんばいである。

○マ<sup>ニ</sup>ダ トー<sup>ニ</sup>カ アリ<sup>ニ</sup>マス イ<sup>ニ</sup>ナー。

まだ十日ありますよねえ。

は、丹後半島での一例である。

「カナ」がおこなわれており、「カイナ」がおこなわれている。

「ガナ」もおこなわれている。

丹後半島方面で「ダナ」が聞かれる。

○ソ<sup>ニ</sup>ー<sup>ニ</sup>ダ ナー。シン<sup>ニ</sup>ダ<sup>ニ</sup> ダ<sup>ニ</sup>ナー。

そうだねえ。死んだわねえ。 (老女→藤原)

は、その一例である。

「ワナ」がおこなわれており、「ワイナ」もおこなわれている。

## 滋賀県

全域に、「ナ」がおこなわれている。「どうどうしてーナ。」「ヨンドクレナー。」(読んでください。)などとも言っている。

岩本一男氏の『滋賀県方言の語法に就いて』(プリント四枚 年月不詳)には、

坂田郡を除く湖北地方では「ヨー来タナイ」(よく来たね)のように終助詞「ネ」の意に「ナイ」を使う。

とある。——(坂田郡内にも、この種の「ナイ」があるか。)

※ ※ ※

岩本氏の上記報告によれば、湖南地方には、

ヨー来タネーナ

の言いかたがある。「ナーエ」「ナーヨ」もある。

県下に、「ヨナ」もある。「イナ」もある。

「ゾナ」があり、「ドナ」がある。

「ソ<sup>ー</sup>ヤ ガナ。」(そうなのよ。)など、「ガナ」がよくおこなわれている。

「ガナ」とともに、「ガサ」もある。——「ソ<sup>ー</sup>ヤ ガサ。」(“そうですがね。”)などと言っている。

「ガイナ」もある。

「カナ」がおこなわれており、また、「カイナ」がよくおこなわれている。

○ウチノ オジ<sup>ー</sup>サン ア<sup>ア</sup>ヘナンダ カイナー。

うちのおじいさんに会いにはしなかった？

は、湖東米原での一例である。

「ワナ」がおこなわれており、「ワイナ」がおこなわれている。次の例は、「ワヤナー」をとらえしめるものか。

mソヤ タート セン ナンワヤナー

うん、早く しなければ ならないね。

これは、『全国方言資料』第4巻の「滋賀県高島郡朽木村」の条に見えるものである。

## 七 中部地方の「ナ」ほか

### 福井県

若狭は、近畿に類縁の地域である。「ナ」が、ふつうによくおこなわれている。

○ソリャ ウレッシャ ナー。

それはうれしいことねえ。

は、小浜湾岸での一例である。松崎強造氏の『福井県大飯郡方言の研究』（福井県大飯郡教育会 昭和8年8月）には、

バラ・ス（四活） 物を人にくれてやること お菓子をばらしてんな<sup>（下さい）</sup>  
との記事が見える。——「ナ」の前に「ン」がある。

ところで私は、小浜湾岸では、つぎのような経験をした。一老女が、私との対話で、ずっと「ナ」文末詞をつかっていたのだが、だんだんになれてくると、しまいには、「ノ」を出しはじめた。若狭地方の方言地盤の一性質がここにあるのか。越前でも、敦賀から北上すると、やがて、「ノ」がよく聞かれるようになる。

それにしても、越前内で、「ナ」もよくおこなわれている。

○オマエワ ダワモンヤ ナー。

おまえはなまけものだねえ。 （父——娘）

（“女は「ナー」を言わぬ。”ともあった。）

は、福井市での「ナ」例である。福井弁に関して、“文末では、「ナー」も言う

が「ノー」もよく言う。”と言う人もある。“「ノー」のほうが敬意が深い。したがって女のほうが、頻度が高い。”と言う。愛宕八郎康隆氏によれば、越前東部の勝山地方などでは、「ノ」のおこなわれることがもっとも優勢で、とくに女性にこれがよく用いられ、品位は「ネ」よりも低いという。

越前地方ともなると、方言総体に近畿的なものとの似かよいをつよく示しながらも、またこのように、「ナ」に対する「ノ」の強勢を見せて、地域が、やはり、独自の北陸的なものであることを示している。

若狭に、「ナー」に通う「ニャー」が見られる。

○アノ ニャー。

あのねえ。

○コリャ アカン ニャー。

これはいけないねえ。

などと言われている。“「ニャー」はくだけた時のこと。”だという。敦賀のことばにも、「アツイ ニャ。」(暑いね。)などというのがある。(愛宕八郎康隆氏教示)越前の足羽郡内などでは、

○セント オケッ クニャー。

“しないでおきなさい(というのに)。”

のような言いかたがおこなわれている。(寺横武夫氏教示)——この「ニャ」は  
 どういう「ニャ」であろうか。

越前西岸の鮎川では、かつて、

○ベンキョ シチスッタ カニャ。

勉強をしなざったかね。

などというのを聞いた。ともあれ福井県内に、「ナ」相当の「ニャ」が、存在してはいるようである。

※ ※ ※

若狭内に、「ほんまや ナナ。」などの言いかたもあるか。「ネナ」もあるらしい。

若狭に、「 $\overline{\text{ニヘンホド}} \overline{\text{イナ}}。$ 」(二度ほどよね。)などと、「イナ」がおこなわれており、越前東部にも、「イナ」がおこなわれている。そこに「エナ」もある。「ゼナ」もある。

若狭・越前に「カナ」があり、また「カイナ」がよくおこなわれている。「ガナ」もある。

若狭に、「ワナ」「ワイナ」もある。

### 石川県

長岡博男氏は、「金沢市地方の方言『に』の一考察」(『方言』第三卷第一号 昭和8年1月)で、

上方の言葉で『今日は $\text{あ}$ 、 $\text{天気や}$ <sup>㊦</sup> $\text{な}$ 』……『 $\text{な}$ 』<sup>㊦</sup>を付ける語法は、(中略)金沢地方の方言に於ても此の意味に於ける $\text{な}$ <sup>㊦</sup>は可成り広く使用せられてゐるのではあるが上方言葉の様に一般的ではなく、むしろ稍下品な使用法とされてゐる。

と述べていられる。往年、私をはじめ金沢市をおとずれたさいにも、私は、「『ナー』はここでは最も悪い言葉とされてゐる。」としるしている。とはいいいながら、加賀の白峰では、

○ソリャ  $\overline{\text{ナン}} \overline{\text{シル}} \overline{\text{モン}} \overline{\text{ナ}}$ 。

それはなにするものね?

などと、さまでわるくなく、「ナ」がつかわれてもいる。

ところで、「 $\text{な}$ <sup>㊦</sup>」は能登方言に於ても金沢同様野卑な使用法であり」と、長岡氏は言われる。(前記論文)能登の頸部地での私の調査にも、「 $\text{キョーワ}$   $\overline{\text{サムイ}} \overline{\text{ナー}}$ 。」よりも、「 $\text{キョーワ}$   $\overline{\text{サムイ}} \overline{\text{ナー}}$ 。」のほうがよりにいい、という結果がある。能登半島西岸の富来町では、「 $\text{アツイ}$   $\overline{\text{ナー}}$ 。」は男の人のことば。女の人、ヤンチャナ人は言う。”とあった。——“同僚以上には「ナー」は失礼にあたる。身下に言う。”ともあった。とはいいいながら、能登内

でも、「ナ」が、したいものどうしの、ふつうのことばになってもいるようである。

○ネマッテ マシ ナ。

すわってらっしゃいね。(中女→幼子女)

というのは、富来での、おやの子に対することばの一例である。

「ナ」の変形「ナイ」がある。『白峰村史』下巻の「方言」の記事(岩井隆盛氏)には、

キンノ(昨日)のバンゲ(夜)ナイ(ね)

などの例が見られる。「ナイ」について著者は、「ね、ニャにおなじい」ともしてられる。すなわちここには、「ね」の「ニャ」もある。——「ニャ」は「ナイ」からのものか。かつて私が白峰調査で得た「ニャー」の実例は、

○ソツテ ニャー。

そしてねえ。(中男 電話)

○ギラ マタ イヤーデ ニャー。

わしはまたそれがいやでねえ。(老女間)

○アシェラント ニャー。ダイジニ サツジャレ。

あせらないでね。だいじにおしなさい。(病気みまい) (中女)

などである。さきの富来町では、「ナエイ」というのを聞いている。

○オッタ ナエイ。

おったなあ。

などと言っている。輪島でも、「アガリマッシ ナェー。」などと言っている。愛宕八郎康隆氏は、「能登島向田方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

○ソーヤ ニャー。

そうだねえ。(中女→老女)

との実例を示された。“思案しながらの返事に”とある。能登に、「ネヤ」や「ニャ」に関連する「ニャー」があるかもしれないが、現況上「ナー」相当と

見られる「ニャー」も存在するようである。

県下に「ナン」もある。岩井隆盛氏は、「白山の麓(白峰の牛首)」(日本放送協会編『方言と文化』 宝文館 昭和32年10月)の記事の中で、石川県石川郡吉野谷村の、

男B ほんとに 雨ばっかり 続いて ヤーン(嫌に) なったンなん。  
をかかげていられる。馬場宏氏は、その『能登木郎方言考』に、

これね(エ)=これナン

の例をあげていられ、「ナン」を“稍卑 同僚 身下に用う。”としていられる。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形を見る。

「ヤナ」がある。馬場氏『能登木郎方言考』には、「かわいいなあ=かわいいヤナ」とともに、「早く来いよね=早う来いヤナ」「食べるなよね=食べるなヤナ」などの言いかたがとりたてられている。『全国方言資料』第3巻の「石川県石川郡白峰村白峰」の条には、

f トンデ デッチャッタヤナー

走って 出ましたね。

というのが見える。

「イナ」がある。『能登木郎方言考』に、

そうだけれどもよ=そうヤレども イナ

そんなのに よ=そんなが= イナ

と見える。馬場氏は、「イナ」を、“稍侮語 「ね」の卑語”としていられる。(これは、どういう「イナ」なのであろうか。)

「カナ」がある。輪島では、私は、「ガイナ」を聞いたことがある。

能登に「ワナ」があり、「ワイナー」がある。

富山県

関西系の「ナ」の伝流を北陸に見るとしても、ここ富山県下では、「ナ」が、あまりさかんではないようにも思われる。——「ナ」の中等品位の言いかたの、しぜんにおこなわれているのを、かなり聞きうるようでもあるけれども。

○ナシ ナー。

なぜね? (中女→夫)

○キノドクナ ナ。

きのどくね。(初老女 電話)

などは、富山市西北郊での例である。富山県東部で、かつて聞いた説明は、“このほうでは、あまり、よい人に「ナー」はつけない。”というのであった。ここでは、“「ナー」「ノー」両者は敬意の程度おなじく、使用頻度もおなじ。”ともあった。

あのねか あのね……呼びかけ 「あのな」は下位

との言いかたが見える。(富山市教育委員会『富山県方言集成稿(一)』昭和34年2月)「アノ ネ。」の意の「あのねか」との言いかたはめずらしい。ここで、「あのな」の、下位とされているのが注目される。

大田栄太郎氏は、「富山」(『方言の旅』宝文館 昭和31年9月)で、

ナイ・ナイネ(幾等なんでもそんな事を為ん——)、(明日雨降れば行かん——)、共通語のよに似ている。助動詞の打消の終止形につく。

と述べていられる。どういう「ナイ」であろうか。黒部線の宇奈月では、

○トオイ トヨカラ ニャー。

遠い所からねえ。(藤原の来たことを言う。) (中女→藤原)

などの「ニャー(「ネァ」も)」を聞いたことがある。県東部域には、「ニャー」がかなりおこなわれているのか。なお私は、富山市西北郊で、

新湊で、女の子どもが、あとくちに、「ニャー」をつける。

「アノ ニャー。」(“あのね。”)「ソーシテ ニャー。」(“そうしてね。”)

など。

との説明を聞いてもいる。

河内洋佑氏は、「富山県井波地方の“なァーン”」（『言語生活』第八十六号昭和33年11月）で、

“なァーンエイツ、デッカイコトバツカリユートツケッドなァーン、ダチャカンヤッチャ”（あいつは大きな口をきくけど大したことのないやつだ）  
とするしてられる。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形文末詞については、今、私は、「カナ」や「ガナ」を指摘することができるばかりである。

○ア<sup>レ</sup>カ<sup>ナ</sup>ニ〔i〕ヨ<sup>ワ</sup>リマスガナ。

あれ、これはなにを、おそれいますわ。（贈品への謝辞）（老女）  
は、「ガナ」の一例である。

### 新潟県

県下に、「ナ」が流通している。——この点は、連関西的である。

佐渡は、「ナ」をよくおこなっている。

○コンヤ<sup>ユ</sup>キガ<sup>ラ</sup>ルラロ<sup>ナ</sup>。

今夜、雪が降るだろうなあ。

は、北佐渡の一例である。「ナー」は、気がるく、目下にもつかわれているらしい。

越後南部に、「ナ」がふつうに見られ、目下にもおこなわれている。中部でも、「ナ」が、中等度以下の品位のことばとされている。

○キョ<sup>ー</sup>ワ<sup>サ</sup>ムイ<sup>ナ</sup>。

きょうはさむいね。

は、その一例である。北部でも、「ナ」が男女によくおこなわれている。

○ソー<sup>ダ</sup>ナー。

そうだねえ。

は、下品だという。(これに対して「ソーダ ネー。」は、いくぶん上品だという。)

「ナ」の変形「ナイ」があるか。田中勇吉氏の『越佐方言集』(野島書店 明治25年12月)には、「間投詞ノなあ、ない、……………」とある。水沢謙一氏の『昔あったてんがな 宮内昔話集』(長岡史蹟保存会 昭和31年11月)の中の「こんげのきったない柿は、食わんない。」とある「ない」は打消である。

「ニャ」と聞こえるものが、県下にいくらかあるか。私は、県南域で「ニャ」音形のを聞いたが、「ネヤ」が「ニャー」に聞こえることもあったかと思う。佐渡北西の外海府では、かつて、

○シンバイジャ ニャー。ネーヤン。

心配なことねえ。ねえさん。

というのを聞いた。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形文末詞については、言うべきことが、あまりない。

一つに、「サナ」があるか。『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡羽茂村大崎」の条には、つぎのように見える。

*m* ホトンド アレラッタサナ

ほとんど あれだったよね。

岐阜県

本県下は、北陸について、関西に近い所がらである。「ナ」文末詞のおこなわれることも、また、美濃・飛驒にさかんである。「ナ」は、たんなる訴えかけをはじめとして、問いその他の諸用法にたてられている。

○アンタ ドコイ イクンジャ ナー。

あんたはどこへ行くの？

これは、飛驒高山市で聞いたものである。「ジャ」の下に「ナ」のむすびのき

ているのが注目される。この種のことが、美濃でも見られる。

美濃で、一般的に「ナ」がつかわれており、“コノ ヘンワ シリニ 「ナ  
二」オ ツカウ トコロヤ ナー。”(このへんはことばじりに「ナー」をつかう所だね。)などと言われている。はじめての他人にも、「ナー」をつねとするありさまである。

土田吉左衛門氏は、その『飛驒のことば』で、

飛驒は多く関西系統に属し「な」を用い、  
と述べていられる。

「ナ」の変形「ナイ」が、『岐阜県方言集成』に見え(恵那郡)、『東濃方言集』に見える。「ニャイ」がまた『岐阜県方言集成』に見え、

あん<sup>に</sup>ゃい [感] あのね。呼掛。 (武儀郡)

とある。つぎに、

あのなん [感] あのねえ。呼び掛けの詞。

そんならなん [接] それならね。

などと、「ナン」の、美濃にそうとうにおこなわれているらしいありさまが、『岐阜県方言集成』でうかがわれる。

※ ※ ※

「ナ」に関する諸種の複合形が認められる。

「ヤナ」という、注目すべきものがある。

○ヨー キトクレンサッタ ヤナー。マタ キトクレンサイ ヤナー。

よく来てくださったね。また来てくださいね。

は、飛驒高山市での一例である。

○チョット デルヨーニ ナラマイ テヤナー。

(今のむきでは) ちょっと出るようにはならないだろうよ。(鉾山の現在) (老男→藤原)

は、美濃北部での一例である。——「テ」のもとに「ヤナ」がつづいている。

「ヨナ」もおこなわれている。

「イナ」が、美濃にも飛驒にもある。

○ウ<sup>ラ</sup> ロク<sup>ジュエ</sup>ダイニ クルワ キタ イ<sup>チ</sup>。

わしの六十歳代の時に来るは来たなあ。(汽車開通のこと)

は、飛驒での一例である。「エナ」もおこなわれている。

「ゾナ」がさかんである。老女が、

○サ<sup>ム</sup>イデス ゾ<sup>ナ</sup>。

さむいですよ。(雪の降るころ) (老女→藤原)

などと言っている。「ゾナ」が、いきおい、「ゾナン」となってもいる。

「ゼ(ジェ)ナ」がある。「ゼ(ジェ)ーナ」とも言っている。

○ド<sup>ー</sup>カ タノム ジ<sup>エ</sup>ナ。

どうかたのむよね。

は、飛驒の「ジェナ」例である。

○セン<sup>セ</sup>ー、<sup>コ</sup>ーユ<sup>ー</sup> ウタモ アル ゼ<sup>ー</sup>ナ。

先生、こういう歌もありますよ。(老女→藤原)

は、美濃の「ゼーナ」例である。

「カナ」のおこなわれることが、県下にさかんである。“上の人には、「ソ<sup>ー</sup>カノー。」とは言わぬ。目上には、「ソ<sup>ー</sup>カナー。」と言う。”などと言っている。「カイナ」もおこなわれている。——それが、「キヤーナ」ともなっている。

「ガナ」のおこなわれることが、また、県下にかなりさかんである。「ガナ」の発音も聞かれる。

美濃で、——つぎのは、北部での一例であるが、

○シ<sup>ト</sup>ーリヤ シ<sup>ナ</sup>。

私はひとりぐらしなんです。

などと言っている。「シナ」が注目される。上例では、「シ」のところにアクセントの高音部があって、「シ」は、何ものかと思われてくる。おそらくは「ニ」か。『郡上方言』は、「シナ」について、“親しみをこめた詠嘆を表し、終

助詞のみならず、間投詞としても盛んに用いられる。”と説いており、

ホーヤ ンナ。

そうだね。御尤もですわね。

などの例もあげている。これなどのばあいには、「ン」が、前後音の関係で、単純に挿生したのかともうたがえるか。が、「ン」に「ニ」を考えることは、さしつかえがないようである。(近畿地方でも考えられた。p. 200)『標準語引分類方言辞典』の「小詞」の条には、

ンナ 有ルンナ、ありますよ。美濃。

とある。

「トイナ」もある。「モンナ」もある。「モンナ」が「モナー」などともあるか。

「ワナ」がある。「ウェーナー」もあるらしい。

#### 愛知県

県内の一般状況としては、単純な「ナ」が、さまでよくおこなわれていないのか。三重県下に接続しながらも、この点、本県下に、様相の異なるものが認められる。県下に、「ネ」は、よくおこなわれていようか。ところで、本県下に、「ナン」は、はなはださかんである。

「ナ」のおこなわれるばあいに、その直前に、小さな鼻音の聞かれることがある。知多半島内の事例で言うなら、

○エー。イッテ キタ ダンナ。

“ええ。行ってきたんですよ。”

というようにである。本例は、江端義夫氏の教示によるものである。氏が「イッテ キタ ダンナ。」を「行ってきたんですよ。」としていられるのからすると、「ン」音は、ある特定のものなのか。(前後関係の中で、しぜんにうまれてきそうな音でもあるけれども。) 鈴木規夫氏の『南知多方言集』(土俗趣味社

昭和8年9月)には、

これは私の下駄ですわ コレワ私ノ下駄デスナ

この本は要らなくなつたから返すよ コノ本ヲ要ランデキタデカヤスン  
ナ

などの言いかたが見える。近畿のにつづいて当地方にも、「ニナ」の「ンナ」が見られるであろう。(これは複合形である。)

佐藤虎男氏は、「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一卷)で、“三河で、「ナ」の品位が「ネ」におとる。”と言われ、また、“尾張では、したいあいだで用いることばで、中等品位、”と言われる。私が渥美半島の調査にしたがった時にも、「アノ ナー。」は「アノ ナー。」よりも下の位のもものとされていた。

「ナン」のさかんなようすを見よう。尾張の知多半島内では、たとえば、

○ハジマルト アカンデ ナン。

はじまるといけないからねえ。(老女→青男)

などと言っている。(佐藤虎男氏の前掲論文による。)佐藤氏は、“「ナー」よりも、あらたまったいいかたで上品だという。”としていられる。知多半島の他の例は、

○コンニチワー。ゴクローサンダ ナン。

こんにちは。ごくろうさまですね。<中女→中男>

○ヨー キカシテ クリヤシタ。マタ アオマイ ナン。

よく聞かせてくださいました。また、お会いしましょうね。<中女→同>

などである。(江端義夫氏の教示による。)

つぎに、三河の例をあげるなら、刈谷市方面では、

○チキショーテー コトー イワンキン ナン。

(怒っているときでない)畜生ということ云わないからね。

などと言っている。(清瀬良一氏教示)黒田鉦一氏は、「名古屋地方の方言『ナ

モ』の研究」(『方言』第一卷第四号 昭和6年12月)で、

岡崎市になると「ナン」を使ふ事が少く、「ネ」が多い。と述べていられる。三河も、東に行くにしたがって「ナン」がすくなくなるのか。三河でも、“「ナー」はわるいことばだ。そのわるいことばをやわらげるために「ナン」と言う。”などと言われている。

「ナン」の「ン」効果は大きい。さてこの「ナン」は、「ナー」からきたものであろうか。あるいは、「ナモ」の「ナム」となったものからできたものであろうか。三河出身の磯貝英夫氏は、三河の「ナン」について、“「ナム」からの「ナン」を考えるよりも「ナー」からの「ナン」を”と語られた。(「ナン」があらたまった言いかたであるのからすると、これの起源を「ナモ」に求めることもできようかと、思われもする。)『南知多方言集』には、

「ナン」 親愛の意が含まれてゐる。郡内にも西岸にも「ナモ」がちょい  
〜用ゐられ、豊浜辺では「ノモ」があるが、河和附近では「ナン」にな  
ってゐる。

という記述が見える。

尾張に、じつは「ナイ」もあるらしい。

なおここに、「ニャー」のことをしるしておきたい。佐藤虎男氏は、「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」で、

「ニャ」(ニャー)は、南勢古和浦、紀伊の長島・尾鷲・曾根浦などにあり、尾張の横須賀にもある。頻度がたかい。

と述べていられる。どういう起源の「ニャー」であろうか。

※ ※ ※

複合形については、さして、言うべきことがない。今、ここには、あり得ている形をひろうならば、「ゾナ」、「カナ」、「カイナ」、「ガナ」、「ワナ」などがある。

○キナサイチュー コッタ。ワナ。

「キナサイ」ってことですよ。(大男——藤原)

は、名古屋弁での、「ワナ」の一例である。

## 静岡県

「ナ」が、本県下の全般に見られはする。

「静岡県安倍郡井川村田代」(『全国方言資料』第7巻)に、

*m*アメ フッタッケンナ

雨が 降ったんだったね。

というのが見える。これにもまた「ンナ」が注目される。県下の南端、御前崎の調査のさいは、人が「ノー」について、“このほうがよいことばだ。コ<sup>〰</sup>トシ<sup>〰</sup>チャー(こことしては)。”と言っていた。目上や年長に「ノ」を用い、「ナー」は年下や友人に用いるとのことであった。小学生(女)どうしも、たがいに「ナー」を言っていた。

遠江の浜名郡の内では、“農家や漁家では「ネー」よりも「ナー」だ。”というのを聞いたことがある。そこでは、

○<sup>〰</sup>マー オ<sup>〰</sup>テントサマ ヒズル<sup>〰</sup>シー ナー。

まあ、おてんとさまはまぶしいねえ。(男性)

などと言っていた。この「ナー」は、「ヤー」に対置されもした。山口幸洋氏は、『静岡県本川根方言の文』(“静岡県の方言”の会 昭和40年9月)で、

この方言では男も女も区別なく、圧倒的に「ナー」又は「ナ」が使われている。

と述べていられる。

静岡県下に「ナイ」「ナーイー」がある。『全国方言資料』第3巻の「静岡県吉原市吉永」の条にも、

*f*サムシーケド  $\left( \begin{array}{c} \text{ハイ} \\ m \end{array} \right)$  ショーガ ネーナーイ  
寂しいけれど しょうが ありませんよ。

というのなどが見える。

※ ※ ※

複合形の場合は、多く言うほどのこともない。「ヤナ」「ヨナ」、「カナ」「カイナ」、「ガナ」などがある。

### 長野県

「ナ」は、じつに、本県下に一般的におこなわれている。その表現品位は、やはり、「ノ」のばあいの上位にあらう。(もっとも、「ナー」をつかっても「ノー」はつかわない所もある。)小学生どうしでの「ナ」表現例は、つぎのとおりである。

○シタイ コネーヨーニ ナ。

下へ来ないようにしてね。(小学生三男→小学生六女)

「何々だ ナ。」のばあいの、「……………ダ ンナ。」というのものもある。

青木千代吉氏の『信州方言読本 語法篇』(信濃教育出版部 昭和23年10月)には、

みてきたんな (見て来たよね)

たべられるんな (食べられるよね)

とんねんな (取れないよね)

などの言いかたが見える。「ンナ」は「ニナ」か。

『信州方言読本 語法篇』には、

なお佐久地方では一般に、「早く来んな」と「な」を添えて言うことがあり、下伊那の農村でも、「お頼みんな」などと言う用法に接しました。それから上田・小県地方では「見ておくんなや」と「や」を添えて言うことが盛んに行われています。これからの「な」や「や」は共に終助詞と考えるべきもので、「来んな」「おくんな」という希求の心を更にこまやかに表現するために添えられた助詞なのでありますが、

とある。青木氏の説明が重要であって、「んな」が「ナ」重複の訴えことば(いわゆる終助詞)などと思われてはならない。(「来んな」などの「な」は、「ナ

サイ」系の「ナ」に相違あるまい。)

本県下に、「ナ」の変化形「ナイ」が、そうとうよくおこなわれている。『信州佐久地方方言集』には、

ソウダナイ (句) さうだね。

などの記事が見える。佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」(『国語研究』第十卷第七号 昭和17年8月)にも、

ソウダナイ。(さうだなあ)

などの例が見える。また、「困りヤシヨナイ (お困りですね。ナイはネの意)」などの記述も見える。『信州上田附近方言集』には、

ナイ 打消にあらず。感歎を含めるもの。塩田附近最も多く使用す。俚歌にも出されたる程なり。「ソーダナイ」(ネ) 「アノナイ」

とある。私が北信内で聞き得た例には、

○ソーダ ナイ。

さうだね。

などがあり、聞き得た説明に、“コトバジリに「ナイ」をつける。”などというのものもある。本県下の方言書の多くが、「ナイ」をとりあげている。

「ナイ」に関連して、「ナエ」もあり得ているか。

「ニャー」がある。さきの『信州方言読本 語法篇』には、

木曾地方に独得な終助詞に「ニャー」という語があります。

とあり、

そーだんにゃー (そうですね。さうだよ)

なんにもならんにゃなー (何にもならないね)

などの例があげられている。「にゃなー」というのは、単純に「ニャー」を受けとらせるのであろうか。ところでまた、福沢武一氏の『信州方言風物誌第二』には、

ソージャニャー さうですね。

キデモキデモ、オナジコンダニャー

着ても着ないでも、同じことだよ。

こういった言葉づかいを入山のニャーコトバとよんでいる。

との記述が見られる。

つぎに、「ナン」がある。塚田康信氏が下伊那郡平谷村について教示せられた「ナン」の実例は、

○ソノ<sup>ハ</sup>ハナジワ フント<sup>カ</sup>ナー。フント<sup>ダ</sup>ト スレバ コマッタ ナン。

その話しはほんとうかな？ ほんとだとすればこまったなあ。

などである。飯田市方面では、「ナン」のおこなわれることがいちじるしく、かねて、「ナンホイ」もよく聞かれる。「ナン」は、南信のものであろうか。

※ ※ ※

本県下の、「ナ」に関する複合形を見る。

「ヨナ」があり、「イナ」「エナ」があり、「カナ」「カイナ」がある。

○オマイ<sup>サ</sup>マ スジョー オアガ<sup>リ</sup>ル カナ。

あなたはすしをたべなさいますか。

は、飯田市での「カナ」例である。

「ガナ」もある。

『信州方言読本 語法篇』に、「こーい<sup>う</sup>になー(こう言うよねえ)」などとある「ニナ」も、「ナ」に関する複合形文末詞としうる。(この種の「ニ」は、中部地方に特色的なものである。)「ンナ」はさきにとりあげた。

県下に、「モンナー」に近い「モナー」もある。

また、「ワナ」がある。『全国方言資料』第2巻の「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条に見える、

mオ<sup>リ</sup>ャ タマワ<sup>リ</sup>ニ イッテクラワナ

わたしは 田まわりに 行って来るんだよ。

の言いかたは、「クラ」の「ラ」が、「ワイ」を内存せしめているのかどうか。ともあれ、「クラ」とあるあとに「ワナ」がきているのが注目される。同地に、

mアー スジャ アカイヨナヤツ カツテクラナ  
 では 赤いようなのを 買ってくるよ。

のような言いかたもある。なお同地に、

f マー ヨカッタワナイ  
 まあ よかったですよねえ、  
 の言いかたもおこなわれている。

### 山梨県

本県下でも、だいたい「ナ」がおこなわれているのか。——「ネ」のほうが優勢なのであろうか。

○オレ<sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup>チー。

“わたしがね。”

は、県下西南部内での「ナ」の一例である。上例については、“女がよく言う。男も言う。”ともあった。『全国方言資料』第2巻の「山梨県北都留郡上野原町西原」の条に、

f ソーダンペーアナ  
 そうでしょうよ。

とある。これの、「ペー」の下の「ア」は、「ペー」の言いおさめを相手によびかけようとする、文末訴え音ではないか。この例では、「アナ」のまとまりが受けとられるようである。

※ ※ ※

複合形は、おおよそ下記のとおりである。

「ヤナ」がある。

○アン<sup>ナ</sup>タ イ<sup>ナ</sup>キ ヤナ。

あんた行きなさい。

は、甲府ことばの一例である。

「ヨナ」もある。また、「サナ」がある。

「カナ」があり、「ガナ」があり、「ニナ」がある。

○タ<sup>ア</sup>ム ニナー。

たのむよな。

などと言っている。

「ダナ」がある。『全国方言資料』第2巻の「山梨県北都留郡上野原町西原」の条に、

*m*ソレジャー カエルダナー

それでは 帰るんだねえ。

などである。

「モンナ」もあり、「ワナ」もある。

#### 八 関東地方の「ナ」ほか

関東地方となると、「ナ」について述べるべきことが簡素になる。

関東域の全般に、「ナ」が存し得てはいる。——おおよそは、くだけた、地方的な言いかたとしてである。しかし、なにぶんにも、関東地方は、「ネ」ことばの本領ともしうる所である。「ナ」の勢力は、第二次的なものであろう。

神奈川県地方では、通常、

「ナー」と「ネー」とでは、「ネー」をていねいにつかう。

との傾向が見られる。おやの子に「ナー」と言い、子はおやに「ネー」と言う。土地の人どうしがたがいに「ナー」を言いあっている時も、人々は、私には、しぜんに「ネー」を言うありさまである。

それにしても、「ナー」を ウント ツカウ。”などとも言われている。日野資純氏は、「方言文法論の 実践—相模方言を例として—」（『駒沢大学研究紀要』通巻第17号 1959年度）で、

○「ナー」（添意）＝「ソ<sup>○</sup>ン<sup>○</sup>デ<sup>○</sup>ナー……」（<sup>愛</sup> <sup>甲</sup> <sup>高</sup> <sup>峰</sup> <sup>⑧</sup>）「オ<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>ガ<sup>○</sup>ナー……」 「ハ<sup>○</sup>ヤクイ

「クダーナー」(同)等。ほど全県の。

と述べていられる。県西北部内の「ナ」例をあげよう。

○タイヘンダ ナー。ヒロシマカラ コチラノ ホーイ キサッサンダカラ。

たいへんだなあ。広島からこちらのほうへ来なさるんだから。(老女  
独話)

○オメワ ダマッテナ ナ。

おまえさんはだまっていなあ。(老女)

「ダマッテナ」の「ナ」は、「いな」の「ナ」で、「ナ」は、「ナサイ」にあたる。最後におかれている「ナ」が、文末詞の「ナ」である。単純に「ナ」文末詞を重複させることはない。

○オタニサン。コッチ キテ ハナジナー ナ。

小谷さん。こちらへ来て話さないな。

これも、県西北部内での一例である。

当県下の、「ナ」に関する複合形文末詞には、「ヤナ」があり「カナ」があり「ワナ」がある。この方面の形態は、さして発達していない。これは、関東全域についても言えることである。やはり、「ナ」のおこなわれかたが簡素単純なので、しぜん、複合形も、おこなわれることがすくないありさまなのか。

○イッタッテ ショーガ ナカンペー ヤナー。

行ったってしょうがないだろうよねえ。(やめたほうがよいということ)

○チンダッケ カナー。

“何をするんだったかなあ。”

これらは、当県下の「ヤナ」「カナ」例である。

東京都下の状況を見る。まず伊豆諸島である。全般に「ナー」がよくおこなわれている。

○オレゲー キテ クレン ナ。

おれのうちへ来てくれない？

は、大島での一例である。大島で、問いに「ナ」をよくつかっている。『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村坪田」の条には、

f トット オケライタナーッ

おとうさん 起きられましたか。

との言いかたが見られる。八丈島には、「ナイ」もあり、「ニャー」もある。「東京都八丈町宇津木」（『全国方言資料』第7巻）の条には、

f ショイデ ヨッケモナウ

それで いいですよ。

との言いかたも見られる。「ナウ」は何なのか。

旧東京市域にも、「ナ」が根づいていることは、落語などによっても知りうるとおりである。東京ことばの「ナ」には、おなじく東京ことばの「ネ」との対存がいちじるしかろう。東京語では、「どこへ行く ナ？」といったようなことばづかいをすることがなかるう。（「どこへ行く ネ？」のばあいも、また同様かと思う。）「ナ」について、円地文子氏の言われることを引用しよう。

「さうだな」「さう思うな」といふ男っばい言ひまはしを現代の若い女性の中には存外粗野でなく、齒切れよく使ひ消化してゐる人がある。（『ことよ』と『だわ』『言語生活』第六十号 昭和31年9月）

東京都下の「ナ」に関する複合形文末詞としては、「ヤナ」「ヨナ」「カナ」などが指摘される。なお問題とすべきものに、「シナ」と「テバナ」とがある。

m ナンカ オカズニ シルヨーナ モノア ネーカシナー

なにか おかずに するような ものは ないかねえ。

は、「東京都三宅村神着」（『全国方言資料』第7巻）のことばである。

f チンド ショッテ コッテバナ

少し 背負って 来てくださいよ。

は、「東京都三宅村坪田」（『全国方言資料』第7巻）のことばである。——「テ

バナ」をとってよいのであろうか。

千葉県地方にもまた、気やすくつかう「ナ」が見わたされる。“自分が自分の思いを言う時に、「ナー」をよく言う。”などとも、人は言っている。

○ズイブン ナン ナー。

ずいぶん降るなあ。

などと、対等者には、気がるく「ナー」を言ってもいる。“目上に「ネ」、同等、目下に「ナ。」”などと言う人もある。

「ナ」の「ナイ」もある。斎藤達夫氏の「東総地方方言集」(『方言誌』第三輯 昭和7年7月)には、

あのね アンナイー (一帯)

というのが見える。『全国方言資料』第2巻の「千葉県香取郡小見川町神里」では、

m………… テツナッテ モラエバナイ ケッコー オエベーカー

手伝って もらえばねえ、 じゅうぶん 終わるだろうから。

の言いかたをしている。

当県下の「ナ」に関する複合形は、「カナ」「ワナ」などである。

埼玉県下にもまた、「ナ」の俗用が、東西に見られる。県東辺では、中年女性から、“メンタニワ 「ナ」ト 言う ワネ。”と聞かされた。老女からは、“おさないころにも、「ナ」はわるいことばで、「ネ」はよいことば。「ネ」はおおむかしからある。”とも聞かされた。

○ホンネー ナー。

はずかしいなあ。

は、県西、秩父方面での、“同輩のあいだでのことば”である。

県下に、「ナ」の「ナイ」もある。

複合形は、「ヤナ」「ヨナ」「イナ」、「カナ」「ワナ」などである。

群馬県下では、

ソーダナー

が、「県下一般」におこなわれているという。(群馬国語文化研究所『国語』3 昭和22年冬季号) いわゆる同等以下につかわれることが多かるうか。

○オレンチ コイ ナー。

ぼくの家に来いよね。

これは、桐生市での、小男間のことばである。

○カンベン ナ。

ごめんね。

これは、前橋市東北郊での子どものことばである。(小男が言う。)

県下に、「ナ」の「ナン」がある。県西北部の吾妻郡六合村では、

○下ゴエ イダ カナン。

どこへ行くのですか。

(ていねいな、目上への聞きかた)

などと言っている。(大橋勝男氏教示) 桐生ことばで、「そー ナン。(そうなの。——ただの合点)」「そん ナン。(同前——驚いたばあい)」などと言っている。(斯林不二彦氏教示) この「ナン」は「ナノ」の「ナン」か。片貝政一氏も、「桐生市及びその周辺の方言」(『国語』1 昭和23年春季号)で、

ソナン——そうですか

としていられる。

群馬県下に関しては、なお、「ニャー」がとりあげられる。大橋勝男氏の「宮城県の方言の文末訴え微妙音」(『方言の研究』第2号第2冊 昭和45年3月)には、

「群馬県多野郡上野村大字乙父字乙父沢」の方言は、近隣地方の人々から「ニャーニャーことば」とか「猫ことば」と評されている。共通語の「ね」文末詞に対応するものが、文末で、

○アノ ニャー。(あのねえ。)

となる。

との記事が見られる。

本県下の複合形にふれるならば、「ヨナ」があり「イナ」があり、「サナ」があり、「カナ」があり、「ガナ」があり、「ワナ」がある。

○ソー サナー。ソーユー コター ネー ナー。

そうさなあ。そういうことはないなあ。(老男→大男)

は、「サナ」の一例である。

○……の所で トマライ ナー。

何々の所だとまるわねえ。(大男間)

このばあいは、「とまる ワイナー」が「トマライ ナー」になっている。

栃木県下にも、全般に「ナ」の俗用が見られる。「ネー」をよく言うけれども、一方で「ナー」がおこなわれている。

○キョーワ サマイ ナー。ナントモ サマイ ナー。

きょうはさむいなあ。なんともさむいなあ。

といった調子である。問いにも「ナ」が用いられている。

本県下に、「ナ」の「ナイ」の、かなりよく見られるのは、注目にあたいます。「ソーダ ナイ(そうだね。)」などとあり、「ナイ」の「ナーイ」も聞かれる。

複合形は、「カナ」「ガナ」などである。

茨城県北で一男性から聞いたことばは、

○ドーシテモ 「ネ」ト デッチャウ。シューカンニ ナッテッカラ ナ。

どうしても「ネ」と言ってしまう。習慣になってるからね。

である。「ネ」は目上に、「ナ」は友だちとか小さい人とかに。”といった説明も聞かれる。「ネー」のほうが、この地方では、ていねいとしている。”“女は

「ナー」をつかわぬ。男はつかう。”との説明も聞いた。県下に「ナイ」も、なくはないらしい。

複合形は、「ヨナ」「カナ」「ワナ」などである。

mミズノ キツネガ ハイッタンダネノガナ

さんずいへんの きつねが（腹の中に）はいていたのではないのかね。  
は、「茨城県新治郡葦穂村」（『全国方言資料』第2巻）の「カナ」例である。

### 九 東北地方の「ナ」ほか

東北地方には、関東地方でのばあいよりも、「ナ」の、いちだんとつよい存在が認められるか。

#### 福島県

福島県下には、「ナ」の使用のさかんなものがある。「ロクニンカ シチニン  
ダ ナ。」（六人か七人だな。）などと「〜ダ ナ」の言いかたをするのは、  
県下（当県下にはかぎらない。）につよい、一つの習慣である。

○アタンネー モンダー。タマンゲダ ナー。

（戦場で弾は）あたらないもんだ。おどろいたなあ。（経験者の言）  
は、福島市南方の「ナ」の例である。

当県下には、「ナン」や「ナイ」があっても、注目される。

「ナン」は、県下の中通り方面によくおこなわれていようか。——会津にもこれがあるらしい。「ナー」と言うよりは「ナン」と言ったほうがよいことばになる。「ナイ」と言ってもよいことばになるが、「ナイ」と「ナン」との軽重に関しては、人の言うところがまちまちである。“「ナン」よりは「ナイ」のほうがいい。”と言う人もあり、「ナン」のほうがいっそういいであるとする人もある。私の、かつて中通りの車中で聞いたことであるが、“「ナン」はおもに在でつかう。”とあった。（“四十歳代の人でも、一家のあるじになっ

たという意識ができればじめると、「ナン」をつかう。”などともあった。) なお、この人は、「ナン」について、“これから五・六十年で絶滅することばだと思ふ。”とも語ったりした。ともあれ、この時は、私は、人が「ナン」や「ナイ」をはっきりと特立させるのに、興味を深くしたのだった。この人から聞き得た実例は、

○キョーワ　ゼ[ɛ]ー　ヒダ　ナン。

きょうはいい日だね。

○アッ　ホーダ　ナン。

あっ、そうだね。

などである。

「ナイ」は、おもには、中通り以東におこなわれていよう。——会津内にもなくはない。会津西北では、私も、

○マダ　アヅ[ü]グ[ü]　ナン　ナイ[naʰ]。

また、きょうも、暑くなるね。(朝七時すぎのあいさつ)

(中女→藤原)

というような実例を聞いている。「ナイ」とはいいながら、上のようなものが聞かれた。

「ナイ」と「ナエ」とは、東北発音下にあつては、ことに区別しがたいものである。「ナエ」と、「エ」文末詞を用いたものが、「ナイ」に近く聞こえることもあるのではなからうか。本堂寛氏は、「地方特有語についての言語地理学的一考察」(『文化』第二十一卷第四号 昭和32年7月)で、

福島県の西半分は、「ナ」又は「ナシ」であるのに対して、東半分は「ナ」又は「ナエ」である。(略)

福島県東半分つまり北は伊達郡・信夫郡から南は東白川郡にいたるまで、「ナ」に「エ」又は「イ」をつける言い方をする事が知られるのである。この「エ」又は「イ」が、「ナ」と不可分の関係の語では決してなく、「ナエ」又は「ナイ」とのみ用いられるものではなく、「エ」単独で、例えば

「書く」「歩く」について「カクエ」「アルクエ」となって柔らげられた語調に用いられるのが普通である。

と述べていられる。今、私は、氏が“「ナ」に「エ」又は「イ」をつける言い方をする事が知られるのである。”と言われる点に依拠したい。「ナイ」があることは、ここでも、事実とされているのであろう。(当県下の方言書や研究者たちにも、「ナイ」形の存立の指摘がある。)今日の状況に即して、いわゆる共時論的な受けとりかたをする時、「ナ」に対する「ナイ」形文末詞を受けとることは、たしかに、してよいように思われる。

昭和24年のこと、宮城県白石町の宿では、その主人から、“福島では、「ソダニン。」を言う。”との話を聞いた。「ニン」または「ニン」も、ありうるのか。

「ナイ」は、県下に、よくおこなわれているように思われる。——この点は、全国の見地からしても注視される。

福島市での「ナイ」例をあげておこう。

○キョーワ ナイ。イツガン[i]ク[ü]ッテ ナイ。

きょうはね。いそがしくてね。

○アノ ナイ。

あのね。

これを聞いた時は、“目下や、したいものには「ナ」をつかう。”との説明があった。なお、この人は、“ていねいなことばをつかうと、かならず「イ」がつく。”と語ってくれた。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形に関しては、言うべきことが、さほど多くはない。

「ヨナ」がある。「サナ」もあるのか。

「ワヤナ」があるか。『全国方言資料』第1巻の「福島県河沼郡勝常村」の条に、

f オラ トデモ アノ シッパナ オヒキモノデ アッタワヤナナン  
『わたしは とても あの 立派な 引出物で あったよ』などと  
テ<sup>3)</sup> キシャッタッタダ  
言って 帰ってこられたよ。

3) 「きられた」の転。

と見える。

「カナ」があり（「ガナ」と発音されがちであり）、「カナィ」がある。

○ゼニ[i] アツ[ü]メニ[i]デモ イッタナベ ガナー。

おかね集めにでも“行ったんだろうか”。

は、「カナ」の「ガナ」例である。

なお、「モンナ」もある。（——「モンナ」複合形は、東北内にも見られ、分布がおよそ全国的である。）

「ワイナ」というものもある。

## 宮城県

当県下でも「ナ」が、日常、男女によく用いられている。「ンダ ナ。」（そうだな。）などがある。

県最南の角田では、かつて「アノ ナイン。」（あのね。）というのを聞いた。県南では、「ナイ」形がかなり聞かれるのかと思う。「角田ナイナイ」などとも言われている。

「ニャ」などと聞こえるものがある。県南方の白石市方面では、

○ホンニ[i] アツ[ü]イ ニャー。

ほんとに暑いね。

などと言っている。調査当時、“女の子もたちからむすめさんたちが言う。”と聞かされた。さてこの「ニャ」は、「ニャ」に近く聞こえはするものの、「ナイ」の「ニャー」などではなかろう。察するに、地ことばの「ネ」の訴えが強

調されて、「ネ」のもとに「ア」音がおかれて、「ネア」の言いかたがなされたのであろう。若い人たちが「ネ」ことばを強調してこのような音形にしたのは、もっともなことのように思われる。

仙台弁で聞かれる「イガッタ・ニャー。」(よかったねえ。)なども、「ニャー」の聞こえが認められはするけれども、本来は、やはり、「ネア[a]」と解しうるものなのであろう。それはともかく、「ニャー」のよびかけ音が聞こえること自体は、県下の南北に見られる。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形には、「カナ」があり(「ガナ」ともあり)、「カイナ」がある。土井八枝氏の『仙台の方言』に見える、

「わだっしゃぶきでござりますお、そった刺繡なだ、だーれ出来すけな」  
(私は不器用でございますもの、そんな刺繡などどうして出来ますものか)などの「けな」は、「カイナ」ではなかるうか。

山形県

本県にもまた、「ナ」がさかんである。「何々だ ナー。」のことばづかひも、よく慣用されている。

○コ下バ ワガラネー モンダ ナー。

ことばはわからないもんだなあ。

は、庄内、鶴岡市の人のことばである。この例でも明らかなおと、庄内地方でも、——「ノ」のさかんな所がらであるが、なお、「ナ」もおこなわれている。『山形県方言集』にも、

それだばわりのな。(それならわるいですね。) 庄内などである。庄内、藤島町の「ナ」例をさらにあげるならば、

○モシ[i]モシ[i]ー。モシ[i]ー。フ[ü]タバソ マダ デネー ナー。

もしもし。もしい。ふたばんはまだ出ない? (中男 電話)

などがある。ところで、この藤島町では、「ナ」に関して、“標準語の「ね」にあたる。”、“「ナ」はいなかくさい。”、“「ノ」と言えばよいほうだ。”などの発言があった。

県東北部の新庄では、私は、一中年女性が、新庄の「ナ」と庄内の「ノ」、と  
 というような対比をするのに接したことがある。

県下に、「ナエ」の発音になる「ナ」ことばもあるか。米沢市方面では、  
 ○サム[ü]イ[i] ゴトナエーイ[i]。

さむいことね。

といったような言いかたもされているらしい。

※. ※ ※

「ナ」に関する複合形文末詞としては、「ヤナ」「ヤンナー」、「ゾナ」、「カ  
 (ガ)ナ」、「モンナ」などを見いだすことができる。

f ダーレモ オシー ヒド ネーモンダ<sup>8)</sup>モンナー

だれも ほしがる 人が ないものだものねえ。

8) 「モン」は「ン」がすづまりな発音 [muũ] なので、ただ「ム」のように聞こえる。

は、『全国方言資料』第7巻の「山形県東田川郡朝日村大鳥」の条に見えるも  
 のである。「モンナ」が「モナ」ともなっている。

m………… アガッテキタモンダ

………… 上がってきたわけだよ。

f トッタモナー アントキ

撃ちとったものねえ あのととき。

は、『全国方言資料』第1巻の、「山形県南置賜郡三沢村」の条に見える「モ  
 ナ」例である。「モナ」が「ムナ」ともなっているらしい。(「モンナ」の「ム  
 ンナ」もあるらしい。)

「モンナ」に該当する「オンナ」もある。『全国方言資料』第1巻の「山形  
 県東田川郡黒川村」の条には、

mンダー オラダッテ ワケー トキダバ ヨッポド ゲンキ エー  
 そうそう おれだって 若い ときだったら よほど 元気が よか  
 モンダケドモ イマダバ ダメダオンナ  
 ったものだけれど、今では だめなものね。

というのが見える。

最後に一つ、特別なものをあげておきたい。『山形県方言集』に、

なあんおす nānosu 連続語 ありましたね 最上

今日天气がよくてよかつたなあんおす。(今日天气がよくてよかつた  
 ね。)

というのがある。「なあんおす」がとりたてられるのであろうか。

#### 秋田県

本県でもまた、全県下に「ナ」が認められる。

○ンダカモ シ[i]レナエー ナ。

そうかもしれないな。

は南部の一例であり、

○サッビース[ü] ナ。

さむいですな。

は、北部の一例である。県下の一般に、

○ナイ ナ。

なぜね? (“どうしてか?”)

など、「ナ」での問いかけ表現法がおこなわれている。『鹿角方言考』には、

な 疑ヒ問フ辞。他所ニテハカ、の、若クハヤヲ用キルトコロニ、コム  
 ニテハナヲ用キルト多シ。「そだな、そでなアエナ=サウカ、ソ  
 デナイカ」

とある。『秋田方言』にも、鹿角郡のことばとして、

えがねあな 行かないか。

「俺と一緒にえがねあな。」

というのがあげられている。

○「オモシ<sup>↑</sup>[i]レー」ということばなら、ワカルシ[i]ベーナー。

「オモシレー」ということばなら、わかるでしょうねえ。 (老男

→藤原)

は、県中央部東辺内の田沢湖町で聞いた、単純訴えあるいはたしかめの「ナ」の例である。

「ナイ」もあるか。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条に、

mナート ホントニ マダ イタワシ フトナイ  
 なんと ほんとに まだ 惜しい 人でしたね。

とあるのが見られる。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形文末詞では、「ヤナ」がある。「トヤナ」というのも指摘しうるか。今村義孝氏の『秋田むがしこ』に、

猿 痛あどて、戸の口さ<sup>ぐさ</sup> 逃げ<sup>ねげ</sup>て行た時、梁の上がら、白<sup>おしろ</sup> 落<sup>おち</sup>て来て、猿ど  
 こ つぶす事<sup>こと</sup>ね、きめたどヤナ。

とのことばづかいが出ている。

「エナ」というのもあるか。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条に、

mソヤテ アサドリモ ポタモデ アッタエナ  
 そして 朝鳥も 追ったもので あったよね。

などとある。

「カ(ガ)ナ」も、ふつうにおこなわれている。

○ノッポ<sup>↑</sup>レルベ ガナ。ノッポ<sup>↑</sup>レダベ ガナ。

登れようかな？ 登れるだろうか？

は、田沢湖畔での例である。さきの「富津内村」の、

mチョー サカナ イカッタカデァナー  
きょうは さかなは よいものがあつたかねえ。

というのには、「カデァナー」というのが見られる。

「トナ」というのも、かなりおこなわれているらしい。『秋田方言』には、  
生もえぐとな (学生も行くとき)

とある。『秋田むがしこ』には、

ある所にヒャ、おどど あばど居だどなあ。

などの言いかたが見える。

興味ぶかく思われるのは、「モノナ」の形のものである。まず、『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条に、

mウン マエ<sup>2)</sup> マエニチ クルモノナ  
うん、 毎日 来るものね。

2) 言いきし

というのがある。つぎに、「モノナ」の「モナ」となったのに相当する「オナ」が見いだされる。さきの「富津内村」の条に、

fン…… ( m<sup>1)</sup> ) アルテオナ  
あるそうですね。

1) 「あると言うものね」の転。

とある。『秋田方言』には、

おれあえがれねあべもの (私は行かれないだろう) (もの<sup>△△</sup>のつく時は「だらうさ」位の感情がくはゝる)

この「べもの」の種類に「べおの」「べおん」「べおな」「べせあ」「ごであ」などがある。

との記述が見える。これによって、私どもは、「オノ」が「モノ」からのものであるのを了解することができる。また、「オナ」が「ものナ」からのものであることを、よく了解することができる。

『秋田むがしこ』に見られる、

して、一人 <sup>(少し足りない)</sup>はんかくせえ <sup>え (いたとき)</sup>息子居だでょんナ。

その子も年えてきて <sup>(いってきて)</sup>嫁コ 貰ったでょんナ。

での「でょんナ」というのは、どういうくみたての文末詞なのであろうか。傍注には、「とき」というのが見える。「でょんナ」が「ジョンナ」と発音されたりもしているか。

最後に、特殊な事例にふれる。『秋田方言』に、

あのせあなー あのねー。

「あのせあなー明日遊びに来いと。」

とある。由利郡のことばであるという。「せあなー」は、どういうことばなのであろう。あるいは、「シャナー」というのであろうか。——であったとしたら、「モン」の「シ」と「ナ」との複合ということになる。(「シ」の直下「ァ」音は、私の言う文末訴え音だと思う。第一章参照。)『秋田むがしこ』には、

はあ、山さ行って、芝で <sup>(たたかれましたものなあ)</sup>たたがえだしおなあ。

とのことばづかいが見える。これでは、「シオナー」というのがとりたてられるのか。さてこの「シ」が、また、「モン」の「シ」としうるものなのかどうか。「オ」は、「モノ」の「オ」にちがいはない。

## 岩手県

岩手県でも、県下に一般的に、「ナ」が認められる。八重樫真氏の『岩手県釜石町方言誌』（日本民俗研究会 昭和7年3月）には、「ナ」についての、

ね（同位、下位に対して）

との説明が見える。

県下に、問いの「ナ」がよくおこなわれているらしい。小松代融一氏の『岩手方言の語彙』（岩手方言研究会 昭和34年11月）の「旧南部領」の記事の中には、

ナ か？、疑問の助詞  
 ノムナ（飲むか）  
 スルナ（為るか）

とある。おなじく「旧南部領」の記事の中に、

トトナァ（お父さんよ！）  
 ガガナァ（お母さん！）

などというのあがっている。

「ナ」の「ナイ」もある。柴田武氏編『方言の旅』（筑摩書房 昭和35年9月）の野元菊雄氏「みちのくの巻(2)——太平洋筋の巻——」にも、盛岡市の、  
 男「今デモナッし、（女 ハー）学校ノ中ノアノー 上履キガワリニワ  
 使ッテル ワラシナンカアルカモシンネーナイ。（女 ハーハ。）」  
 というのが見える。盛岡のことばであるという。私がかつて聞いた、県北、渡  
 民村のことばでは、

○キョ サム[ü]ー ナーィヤ。

きょうはさむいねえ。（“友だちどうし”）

というのがあった。これに見られる「ナー」のかたちは、「ナ」が「ヤ」に関係  
 するところからおこったものであろうか。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形文末詞には、「カ(ガ)ナ」「モノナ」などがある。

「モノナ」の「モナ」もある。

mアー イヤ マズ ジュンツァモ ヒデー メニ アッタッタモナー  
 ええ まあ おじいさんも ひどい めに あったものですね。

は、『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条に見えるもので  
 ある。

「ヅモナ」というのも見いだされる。藤原貞次郎氏の「稗貫郡昔話—陸中稗  
 貫郡湯口村—」（『昔話研究』創刊号 昭和10年5月）には、

昔あつたづな。ある<sup>とこ</sup>処に餅が好きで—斗餅も食ふといふ人があつたづもな。

などがある。「昔あつたづな。」というのでは、「づな」が、「というな」とも見られようか。としたら、「づもな」というのも、「というものな」ではないかと思われる。

「モナ」の「オナ」もある。さきの「佐倉河村」の条には、

f ホンケニ スタンダオナ  
本気に したんだね。

というのなどが見えている。

### 青森県

県下の東西に、全般的に「ナ」がおこなわれている。

○サイ[i]ナラテ ヘル[ü] ワケダ ナ。

「さようなら。」って言うわけだな。 (中女→藤原)

は、東部の八戸市のことばである。この人が、「ソソダ ナー。」(そうだなあ。)は土地ことばだ、と言っている。

津軽弁では、文末の上げ調子の「ナ」の、つよくおさえるように発音されるのが、よく、私どもの耳につく。

○ジャマシ[i]タ ナ。下サン。

じゃましたね。とうさん。(そこの老父に言う。) (中男→老男)

○エー モノバリ ハヤル ナ。

いいものばかりはやるね。(録音機のことを言う。) (老女)

などで、前者例の「ナ」は、ことにおさえてつよく言う調子のつよいものであった。「短呼的」と、私は、これらのばあい、感じている。津軽男性のばあいに、ことにその特色が見られようか。

さて、北山長雄氏の『津軽語彙』には、

「na」 指定の意味を幾等か丁寧<sup>?</sup>に云ふ時には「desu」に「na」を融合させる。

との説明が見える。私が津軽半島で聞いた、土地っ子の説明は、つぎのようなものであった。

○キョー サンビ[i]ー ナー。

きょうはさむいね。

これは、中等品位のものであるという。

○キョー サンビ[i]ー ノー。

きょうはさむいねえ。

これは、上品の表現であるという。——“下のものが年寄りに”言うものだとあった。“「ナー」は若いものどうしのつかうことば、「ノー」はそれよりも上品だ。”との説明もあった。下北半島北部、陸奥湾がわの旧田名部町では、「サンビ[i]ー ナー。」(さむいねえ。)は在郷に多く、「サム[ü]イ[i] ヤェイアー。」は親密なことば、とあった。

県下で、文末詞「ナ」を用いる疑問表現法がさかんである。此島正年氏は、『方言学講座』第二巻の「青森」の条で、

終助詞では、疑問の表現にカのほかにながあって、カのよそゆきに対し、親しい感じを含む。

オメエクナ (おまえ行くか)。

と述べていられる。かつて私が、青森県師範学校の高木佐氏から受けた教示には、

青森に於てのみ使用されると考へられるものだけに止める。

疑問を示すもの。

「雨降ってらナ。」(雨が降ってゐるか。)

「此の本ヨ読むナ。」(此の本を読むか。)

というのがある。県下の方言文献のそれこれに、疑問の「カ」にあたる「ナ」の指摘が見られる。おなじく問うのではあるが、「カ」を用いるのと「ナ」を用いるのとでは、待遇品位に多少の相違があるのではないか。

本県下に、「ナ」の「ナン」があるのか。『伝承文芸』第五号(国学院大学

民俗文学研究会（昭和42年3月）をおおう『下北地方昔話集』には、

娘、この枝っばどうだのなん

などとある。

※ ※ ※

「ナ」に関する複合形の文末詞を見よう。

最初に、一つの疑問例をあげる。青森県東南隅で私が聞きとめたものであるが、

○ワ<sup>ー</sup> ツ[i]ビ[i]テ<sup>↑</sup> ネ[e]ナ<sup>↑</sup>。

私がしまししょうね。

というのがある。これに「ネナ」という文末詞が認められるのかどうか。

つぎに、「ヤナ」がある。「イナ」がある。

○ソッダ<sup>↑</sup> イ[i]ナ<sup>↑</sup>。

“なるほどそうだ。”（大男）

○ホカ<sup>↑</sup>サ ナ<sup>↑</sup>[i] ツ[ü]カウ[ü] ワケダ<sup>↑</sup> イナ<sup>↑</sup>。

ほかに何につかうわけだかな？（格助詞「サ」の用法について、みずからいぶかる。）（中男→藤原）

などとある。「ヨナ」もあるか。

「サナ」というのもあり、「ゾナ」もある。

「カナ」もよくおこなわれ、「ガナ」もある。

「モンナ」があり、これが「オンナ」にもなっている。

○高谷さんの津軽弁は、エ[e]ー ツ[ü]ガル[ü]ペンダ<sup>↑</sup> モンナ<sup>↑</sup>。

高谷さんの津軽弁はいい津軽弁だものね。

は、「モンナ」例である。土地の識者は、私のこの調査カードに、“ペンダモンナよりもペンダオンナの方が多いうらだ。”と注記していてくださる。

「ワイナ」もある。「モテラナ」（持っている ワイナ）など、「ワイナ」のなかば潜在するものもある。

最後に指摘すべきものに、「シナ」がある。『青森県方言訛語』（青森県庁

明治41年9月)に、

行くべしな(行かうネ)

とある。この「シナ」の「シ」は、「モン」の「シ」ではないか。そういうよびかけことばに「ナ」が重ねられたものかと思う。

#### 十 北海道地方の「ナ」ほか

よくはわからないけれども、およそ全般的に「ナ」が認められるのではなからうか。ただしそれは、さかんに用いられているとまでは言いにくいものなのだろうか。土地っ子どうしの会話には出がちでもあるのかと想察する。

私どもが、道内のそちこちを旅行したばあいなどは、先方からわけなく「ナ」と話しかけられることが、きわめてまれである。もっともふつうには、「ネ」のよびかけがなされる。問いの「カイ」が、前後‘無敬語’の文脈の中できわだてられるなど、飾らないもの言いがなされるばあいにも、その人たちが、私どもに、「ナ」とよびかけることは、ないのがつねである。北海道地方の「ナ」は、土地っ子どうしの「ナ」であるとも言えることができようか。

石垣福雄氏は、国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』(明治書院昭和34年11月)の中での、氏の「北海道檜山郡江差町」の記事で、

ノ、ナ

共通語の「ネ」に当たり、文末に用いられる。相手に親密の感を与えるもの。「ノ」は主として老人に、「ナ」は主として青少年層に、「ネ」は主として女性に用いられている。

と述べていられる。

北海道教育大学旭川分校の鈴木淳一氏の教示は、次下のとおりである。一つに、北海道北見紋別郡では、「きょうはさむいね。」というのを、

○ズイブン キョウハ サムイネ。

と言っている。目上・対等にこれを言い、目下には「サムイネ」と言う。

二つに、北海道小樽では、「どうぞお願い申します。」を、

○タノムナ。 (男)

と言う。これは、目下への言いかたである。

三つに、北海道函館市では、

○キョーハ サムイ〔i〕 ナー。

が、対等や目下に言われている。

四つに、北海道稚内では、「キョーハ サミイ <sup>↖↗</sup>ナー。」が、目下に言われている。(青年男子のことばである。)

五つには、北海道十勝本別町では、「キョウハ、サムイナ。」が、目下に言われている。

さて、「ナ」に対する「ナイ」「ナン」が見いだされる。——これも、鈴木氏の教示によるものである。北海道十勝の本別町では、

○ハイナイ。

お早う

○ハイナン。

お早う

などの言いかたがなされているという。(教示のままの表記である。)  
「ハイナイ。」は、目上または対等への言いかた、「ハイナン。」は、目下への言いかた、とされている。「ジャマシタナイ。」(辞去の挨拶)は上品で、「ジャマシタナ。」は下品だという。

※ ※ ※

なお、鈴木氏の教示にしたがって、「ナ」に関する複合形文末詞をあげるなら、「ヤナ」があり、「ヨナ」がある。

「カナ」もある。(——これのおこなわれることは、かなり多いのではなからうか。)加えて、『全国方言資料』第1巻の北海道関係の記事によるならば、「ヨナ」「カナ(ガナ)」「モノナ」「ワナ」などの複合形が見いだされる。

*m* マナグ エンダベモノナー

目が いいのだからね。

は、「北海道松前郡福島町白符」の条に見える、「モノナ」の例である。

### 十一 むすび

「ナ」文末詞は（複合形のものとともに）、全国諸方言上に、強大な勢力を張っている。「ノ」もまた全国的なものと思われるけれども、それよりは、「ナ」のほうが、より強大な勢力を見せている。「ナ」は、多くの文末詞の中でも、なかんずくよく、日本語諸方言に根を張っているものではなからうか。——どこの方言をたずねてみても、私どもは、そこそこで、「ナ」が、いかにも根つきのよい文末詞であることを思わせられる。「ナ」は、じつに、国土上に、よくおこなわれてきたものである。

この絶大な弘通・繁栄をもたらした、原本の力は何か。言いかえれば、なぜ、「ナ」は、このような勢力者となり得たのであろうか。大きな問題である。（しかし、全国諸方言上に「ナ」の強勢を見とおすにつけても、私どもは、くりかえし、上の問いを発せざるを得ない。）一つの結果論であるが、「ナ [na]」のよびかけの音効果は、たしかに、「ナ」に上述のような大地位を獲得させてよいものだったのだから。柳田国男先生の言われる [n] 音効果がまずあって (p.442)、そこに、聞こえの大きい [a] 母音がきている。——ほかのどういふものを持ってきても、それは、「ナ」と対立しうるものではあるまいと思われる。

「ナ」のよびかけの効果は、ひとことで言いあらわすならば、したしみの表現の効果と云うるものではなからうか。「ナ」の表現機能は多岐である。その中には、問い・疑問の機能などもあって、方言によっては、これが別して、注目すべきものともなっている。（九州方言や東北方言で、問いの「ナ」の、ともに注目されるのは、興味ぶかいことである。）「ナ」のはたらきは、単純ではない。ではあるが、それらの諸用法を通じて、「ナ」の表現には、つねにしたしみの表現効果が受けとられるのではなからうか。

「ナ」は、つねに上品なことばになるかということ、そうでもない。さりとて、

「ナ」は、けっして、下品ときめおかれるものでもない。そういうところに、「ナ」の本性があるらしい。

関西地方だと、近來の青年はいざしらず、今日の中年人までかなりの年かきの人たちは、「ネ」に、たしかにあらたまったものを感じる。これを言う時はもちろんのこと、聞く時でもある。「ナー」と話しかけると、自身、うちとけた気分を感じる。くつろいだ気分を感じる。

九州地方や東北地方の「ナ」を見ていると（「ノ」でもあるが）、この「ナ」が、歴史上、古くから、方言社会に馴用されてきたものであるらしいことが推想される。史上、早くからおこなわれてきたからこそ、このように、全国諸方言にわたって、「ナ」の強固な定着状況が見られるのもあろう。ここで、当然、「ナ」の発生論が問題になる。柳田国男先生は、早く、『国語の将来』（創元社 昭和14年9月）p. 273で、

中古の口言葉のナン

を、「ナ」の源頭と見ていられる。なるほど、「ナン」は、[nan]>[nau]>[na:]>[na:]>[na] の転化をたどって、「ナ」になったかもしれない。（また、[no:] から [no:] [no] も生じ得たであろうか。）

柳田先生以降、「なむ」起源の考えによろうとする人が、なお、なくはない。

ここで、私は思う。「風なむつよかりける。」といったような「なむ」や、「いとばかり多くなむ。」といったような「なむ」と、「こまった ナー。」といったような「ナ」とは、同語格のものだろうか、と。「なむ」から今日の文末詞「ナ」をみちびき出すことは、不可能ではない。——考定するとすれば考定しうる。しかし、抽象的にそのような思弁的考察をほどこしてみても、中古の「なむ」と現代口頭語上での文末詞「ナ」との語格のはなはだしく相違することは、どう処置することもできない。

現代語の文末詞「ナ」の地位・はたらきといえは、はなはだしく遊離的孤立的であって、ものはまったく、文表現上、それよりも前の表現形態からは超絶

している。中古の「なむ」の、助辞としての、前のものへの密着度のつよい状況からは、思いもおよばないものが、ここにある。

それゆえ、私は思う。現代語の「ナ」文末詞のはたらきには、古語の「なむ」を思いよそえさせないほどの別個のものがある、と。

従来、私は、「ナ」などの文末詞に関して、原生的文末詞との呼名を用いてきた。「ナ」文末詞などのはたらきの現況は、これが本源的な感声であることを思わせるのにじゅうぶんなものである。したがって、私は、——たとえ「なむ」起源などの考えかたが可能であるとしても、今の「ナ」などには、そういう起源からは、はなれにはなれた、原生的な「ナ」のすがたがあると考えたいのである。

起源はともあれ、現代語の「ナ」は、現在によく生きているものである。諸方言をたずねてみても、「ナ」が凋落しつつあるような状況は、ほとんど見いだすことができない。のみか、「ノ」を本来的なものとする諸方言内などでは、いわゆる共通語の「ネ」になじむことがかたくて、過渡的に「ナ」にとりすがろうとする傾向も見え、そういう所では、「ナ」の火がもえつつあるとも見られる。

それこれを通覧するのに、「ナ」は、いまや、いわゆる共通語の資格を得ている「ネ」について、等しく共通語的なものになってきていると見られる。将来、標準語体系を設定するだんにもなれば、文末詞に関して、識者は、「ネ」を標準視するとともに、「ナ」をも、合わせて標準視するにいたるであろうか。

### 第三節 「ノ」の属

#### 一 はじめに

上節の「ナ」を述べるさい、あわせていくらか、「ノ」についても述べるところがあった。諸方言を見るのに、文末詞「ナ」と文末詞「ノ」とは、親縁あるいは対応の関係を示しがちであり、分布も、したがって、双方が関連しがちでもある。

「ナ」と「ノ」とは、ともに、ナ行音文末詞中、広母音をもってたつ文末詞である。双方の性質・存在に、なんらかの親縁・対応の関係があることも、自然と見られよう。

「ノ」は、「ナ」よりもまばらであるけれども、全国諸地域にわたって、広い分布を見せている。もっとも、九州・関東などという地域別に即してこれを見る時は、「ナ」のばあい比して、存立の地域差がより大であるかに思われる。たとえば、中国地方では「ノ」はよくおこなわれているが、近畿地方では「ノ」はふるわない、など。

一時代前ころまでは、「ノ」は、現在状況に見られるよりも、なお優勢ではなかったろうか。大正期以降の趨勢を見るにつけても、「ノー」は、近代に、しだいにその流通の勢威をよわめてきたのではないかと想察される。このことは、文末詞「ノ」の品位に関係するところが、かなり大きいのではないか。もともとは、「ノ」は、よいことばづかいにも、よくないことばづかいにも、比較的自由に使用されるものであったかもしれない。待遇表現上、つかいはばの広がったものが、しだいに、つかいはばのせまいものになってきたようである。これはすなわち、流通の勢威の漸減をきたしたたであろう。

「ノー」に対する品位観に変動がおこったとしたら、それは、「ナ」や「ネ」に人が感得する音感に比し、「ノ」に感得し得た音感が、さまで上品感の

ものではなかったのによりはしないか。

今日、老年者にあっては、「ノ」が、下品の言いかたから上品の言いかたまで、はばびろくつかわれることがありがちであろうか。これは、かつて、「ノ」が上品・下品の広範囲にわたって、自由につかわれたことによく関連している。中年者から若年者にかけての層では、今日、「ノ」が、中等品位以下のものとして利用されがちであろう。年層にかかわらず、だいたいは（ごく概括的に言って）、「ナ」と「ノ」とには、待遇品位上の用法別が認められがちである。おおよそは、「ナ」は「晴れ」用にもちいられ、「ノ」は「褻<sup>ふだん</sup>」用に用いられていようか。共通語の「ネ」の流布にともなっては、関西地方内でなど、よけいに、「ナ」「ノ」に対する区別意識が進んできたかもしれない。（こうなって、「ノ」は、いよいよ退歩していくのもであろう。）

「ノ」を目下用とつよく限っている所は、すくないらしい。——一般的には、こう言えるか。ところで、「ノ」のおこなわれる方言の中にあっても、若い世代の人たちが、「ノ」を観察者のたちばで批判的に受けとっていることなどは、すくなくないらしい。やはり、共通語分子「ネ」をとるたちばが、そうさせるのであろう。ここには、「ノ」の衰退の命運が明らかである。それにしても、現況を大まかにとらえるならば、「ノ」は依然として——分布の粗密はともかくも、全国的に存在するものと概見することができる。

感声系のナ行音文末詞「ノ」と、ときに区別しがたくなっているものに、「の」助詞系文末詞の「ノ」がある。（転成文末詞である。）たとえば、山陽地方で、子どもがおとなにその行きさきをあどけなく聞いて、

○ドコイ イク ン。

どこへ行くの？

と言う。この「ドコイ イク ン。」は、東京弁でならば、「ドコエ イクノ。」であろう。「ノ」や「ン」が、すなわち、非感声系の助詞系文末詞である。さて、上記のように聞かれたおとな、おばさんは、

○ハタケー イク ノヨ。

畑へ行くのよ。

などと答える。ここに出ている「ノヨ」文末詞の「ノ」もまた、助詞系の文末詞に相違ない。(東京弁などでは、“畑へ行く ノ。”と言っている。)

わかりやすい「の」助詞系文末詞の「ノ」もあるけれども(「ン」となっているばあいには、むしろわかりやすいけれども)、かつて私が、越前西海岸、鮎川で聞いた、

○オーイ ノ。

という返事ことばのばあいなど、「ノ」文末詞がどういふものなのかが、判然とはしない。感声系のものかとおもえば、また、非感声出自のものかと思われてきたりもする。

○オーイ ノ。サブイ トヨトイノ。

おうおう。さむいことね。(「さむいね。」のあいさつに対する応答)との言いかたも聞かれたが、最後の「ノ」は、どういふ「ノ」であろう。これがもし、「ノー」とでもあってくれたら、感声系の「ノ」文末詞を受けとるのに、迷いはないと思うのであるが。「サブイ トヨトイノ。」とあるのでは、「ノ」のよびかけ気分が、つよいとは言えない。ところで、同地に、

○ドー シタンジャ イノー。

どうしたんだ?

などという言いかたもある。このばあい、問いの表現であることは明らかであるが、文末の「ノ」は「ノー」とある。ここには、感声系の「ノ」文末詞が受けとられるようである。(けっきょく、鮎川の上来の「ノ」は、総じて、感声系のものとされるのであろうか。)ここでは、「ノ」はすべて、心やすいあいだでのことばに用いられるものようであった。

音形としては、等しく「ノ」であって、しかも中に、二系の別を認めるべきなのは、まことにやっかいな問題である。

格助詞「の」にもとづく助詞系文末詞の「ノ」は、のちに、転成文末詞を

広く認める段階で記述したい。

自己の思いを訴える文表現や応答の文表現などに出てくる「ノ」文末詞は、感声系の「ノ」文末詞であることが多かるうか。問いの表現などになって、とかく見わけのむずかしいことがおこってくる。かといって、“なぜ？”と聞きかえす時の、山陽地方のことば、

○ドツテ ノ。

どうしてね？

というのなどになると、問いの表現であっても、「ノ」の、感声系文末詞であることが明らかである。

感声系の「ノ」文末詞というものも、人はこれに、「ナ」のばあいと同様、助詞起源を考えたりしている。私は、この点に関しては、多く言うことができない。

当今の、感声的と見られる「ノ」文末詞に直接する、あるいは、用法上、相応の地位にあるものと見ることができる「なふ」を古文献に求めるならば、つぎのようなものがあげられる。——佐々木峻氏のご教示によれば、大藏流狂言虎明本には、

○もはや御むようじやがなふ。 (太郎→新座の者 鼻取相撲)

とある。

ついでながら、『室町時代小歌集』にも、

そとかくれてはしてきた、まづはなさいなふ、はないてものをいわさいなふ

というようなのが見られる。「なふ」に関して、さらに佐々木峻氏のご教示にしたがうならば、“語中尾のア行音をハ行音で写すことがある。”という。形容詞のイ語尾も、「ひ」と表記されているという。よびかけの「やい」も「やひ」とあるという。これらと合わせ考える時、「なふ」もまた、「なう」と受けとってよいものだろうと氏は説かれる。かくしてここに、「なう」が問題視され

るが、これは、今日の「ノー」に、なにほどかのちかきを持ったものであろうか。「喃々」とかいうよびかけ表現も、古来よくおこなわれていよう。「ナウ」を今日の「ノー」にむすびつければ、「ノー」の「ナウ」起源が言われることにもなろう。ともあれ、今日の、私の言う感声系文末詞「ノ」に関する起源論としては、私には、今のところ、「なふ」が問題視されるばかりである。

それにしても、思う。今日の全国的な、「ナ」や「ノ」の、きわめて自在な存立を。しかもこれらは、「ネ」や「ニ」の存立とも、あい関連している。ナ行音文末詞の指摘は、現状に即するかぎり、不公正ではない。今、私は、起源論に関する諸論にも目を向けつつ、なおかつ、現況の「ノ」の（「ナ」も「ネ」も）純粹感動音の様相に着目して、これを感声的文末詞とよぶ。

この感声的な「ノ」などが、原本的に、感声文末詞として凝固・定着せしめられることもあったはずということを、否定しざるのは、いまだ容易でないことだろう。

「ノ」に関する変形に、「ノン」があり「ノイ」がある。

「ノイ」について、これを、「ノ」に「イ」を累加したものと見ることは、私はしない。「ノ」と訴えかけるばあいの、強調の度の高まりにつれて、「ノ」>「ノン」の変形がおこり、また、「ノ」>「ノイ」の変形がおこっただろう。（「ノ」を「ノー」と長呼形に発言するのも、強調の一態にほかならない。「ノー」の発言は、発言のいきおいによっては、「ノイ」とも「ノン」ともなりやすからう。）

「ノ」に関する複合形の文末詞がいろいろにできあがっていることは、言うまでもない。今もし、全国的視野で、「ナ」に関する複合形文末詞の諸相と、「ノ」に関する複合形文末詞の諸相とを比較するならば、後者のばあいのほうが、変種はよりすくないと言えようか。それにしても、「ノ」の使用のいちじるしさに正比例して、複合形文末詞も、種々のものを見せるにいたっている。

## 二 南島地方について

私の調査範囲でのことであるが、南島地方に関しては、今、なんらとりあげべきものがない。「ノ」の音形を示すものであれば、それが何ものであるとも、ここにとりたててみたいのであるが、それがない。町博光氏は、「与輪島朝戸方言の文末詞」(『方言研究年報』統一 1976年)で、「ナ行音文末詞類」を記述してられるが、そこでは、[na:]をあげられるのみである。試みに、「ノ」はないのだろうかと氏にただしてみたところ、“「ノ」は奇異に感じる。”との応答があった。

## 三 九州地方の「ノ」ほか

九州地方の、およそ全般にわたって、「ノ」の分布または「ノ」の問題が見いだされる。(ごく概括的に言うならば、九州に、「ノ」は、一般的であるとも言うことができよう。)

### 鹿児島県

ただ、鹿児島県下は、九州域の中で、ひときわ問題の地域となっている。言いかえれば、「ノ」文末詞使用の、世に通有の状況が、ここには見られない。

瀬戸口俊治氏は、薩摩半島東南隅について、氏の郷里方言を中心として、文表現の特定文末部を観察され、ナ行音文末詞に関しては、「ナ」「ニ」「ネ」を記述されるばかりである。(九州方言学会『九州方言の基礎的研究』<風間書房 昭和44年5月>の「鹿児島県岡児ヶ水方言」において、など)私もまた、大隅東岸の内之浦湾岸で一週間調査にしたがったさい、「ノ」類の文末詞は、書きとめることができなかった。なぜか鹿児島県下では、のちの大分県下で見わたせるような「ノ」文末詞通用のありさまを見ることができない。——他の文末詞のさまざまな存立にもよることであろうか。また、思う。薩隅地方には、

日常一般の表現法に、他地方にぬきん出た、異色のものが多い。このような表現法群のもとにあっては、たとえば「ノ」文末詞も、流通をきたすようにはならなかったのか。

ところで、『全国方言資料』第6巻の「鹿児島県肝属郡高山町麓」の条には、

*m*ソイデ モー チット オボエチヨイガ ノー

それで ちょっと 覚えているけれど ねえ、

との実例が見える。この「ノー」は、共通語での言いかえと対比してみるのに、単純なよびかけの「ノー」文末詞であるように思われる。

東正昭氏の教示によれば、薩摩半島南部の知覧町では、下例のようである。

○ホイナー メス テックッ ノー。

“それなら御飯をたいてくれてみろよ。”（“炊事出来ると言う妹に対する、からかっているような兄の口吻。”）

○ミーコー。キッ ノー。

“みいこ（女の子の名）きてみろ。”（“二十二、三歳の兄が、その妹らしい十二、三歳の子を呼んでいる。非常にぞんざいな言葉遣である。”）

これらのばあい、氏は、「ノー」のところに、わざわざ「ノ」をつけていられる。「ノー」がここに見られるが、特定用法の「ノー」のようでもある。

上村孝二氏は、「鹿児島県下の表現語法覚書」で、疑問の「ノー」を、出水郡にはつかう所があるとされ、

ナンジ ジャンノー（幾時ですか）

との言いかたをあげていられる。ここには、問いの「ノー」があるか。

おなじく上村氏の「薩南諸島方言語法資料」には、

甌セ ワッダー ロクジマエー オギヤネバ ナヤンノー。

との記事が見える。——ここには、問いではない「ノー」が見える。同氏の「上甌島瀬上方言の研究」（荒木博之氏編『甌島の昔話』＜三弥井書店 昭和

45年11月>所収)にも、

山田サンジャンノー。(～だぞ)

アイター ナーギ ジャイヨーノ。(明日は凧だろうよ)

などの「ノ」例が見える。北条忠雄氏もまた、「甌島語法の考察」(『方言』第八卷第二号 昭和13年5月)で、

アッチへ、イッチライ $\overline{\text{ヨ}}$ ーノ。(瀬上)|向ふへ行きついたらうよ。

などの例をあげていられる。

屋久島にも「ノー」があるらしい。

なんらかの、せまい用法の「ノ」あるいは特定用法の「ノ」が、県下にどれほどかおこなわれているのであろうか。

薩摩の笠沙半島には、

○ヤマイ イッタ  $\overline{\text{ノ}}$ アー。

“山へ行ったねえ。”(“傍の人と言ひあひ。叱られた時など。”)。

のような言いかたがあるとのことである。田中富子氏は、<sup>ウエノカド</sup>“大浦村上の門部落だけのことばであり、今はほとんどなくなった。”と語った。(昭和28年)

ちなみに、田中氏は、「ヤメ $\overline{\text{ノ}}$  イタイ  $\overline{\text{ネ}}$ ー。」についても、「山へ行ったね。」であるとせられた。

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条に、

fキョア メッカイ ムサンニョ $\overline{\text{ン}}$

こんにちは。

というのが見える。「キョ $\overline{\text{ワ}}$  オメニ カカリモーサン ニョ $\overline{\text{ン}}$ 。」との言いかたであるのを思うのに、この「ニョ $\overline{\text{ン}}$ 」は、「ノー」にいくらか似た文末詞ではないかとも察せられてくる。

宮崎県

本県下では、「ノー」文末詞の一般的使用がいちじるしいようである。南北

にわたって、「ノ」が見わたされる。もっとも、日向西南部その他の、薩隅域に関連の深い地域では、「ノー」は言わぬ。「ナー」を言う。」といった傾向も見られる。

本県中央域の東部では、「ノ」をよいことばとする所がすくなくない。“目上の人に「ノ」を言う。”などと言っている。橋口巳俊氏は、このあたりの出身である。その調査事例をお借りするならば、

○マイニチヌキコッヂャンス ノー。

毎日暑いことですねえ。

○ゲンキナ ノー。チサン。

お元気ですねえ。おじいさん。

などがある。橋口氏も、つぎのように言われる。

このような「ノー」は目上の人に話しかける時に使われる。しみじみとした落着きのあるものいいで、深く感慨をこめる。中年以上の人に多い。

「ノ」は、一般に、単純なよびかけ・念おし、問いかけなどに用いられている。(問いの「ノ」が、助詞系の転成文末詞「ノ」であるばあいもあって、これと感声系文末詞「ノ」とのさかいが、かならずしも明白ではない。) 県北の「ノ」となると、大分県下状況にもかよって、感声系の「ノ」であることの明白なものが、よくおこなわれている。岩本実氏は、「日向の高千穂方言」で、  
ノーは老若ともに使い丁寧さを出し、  
と述べていられる。

※ ※ ※

本県下の「ノ」に関する複合形文末詞を見る。「ヤノ」があり「ヨノ」がある。橋口巳俊氏は、「ガヨノ」を指摘される。氏の教示例は、

○アングテナツユテンオッダシラン ガヨノー。

そんなことをいったって、私達は知らないですよ。(泣きごとをいう子供に当惑して、父親に応援を求める。)

などである。橋口氏は、なお、「ガエノ」「ガイノ」を指摘される。

氏にはまた、「ド(ゾ)ノ」の指摘もある。教示例は、

○コリヤ オリガ コタッ ドアー。

これは私が買ったんですよねえ。 (小・男→中・男) 上<全>  
などである。

「カノ」複合形が広くおこなわれており、「カキノ」もある。「カヨノ」もある。

「トヨノ」も指摘することができる。「トノ」もある。県東北岸の「トノ」例は、

○ドンダ ャタ トノ。

どんなにした？

(“目上, 年上に言う。”)

○ドコイ イタ トノ。

どこへ行きました？

(“目上, 年上に言う。「ノ」はやさしいほう。”)

などである。ちなみに、この人は、“たいがいのところには「ノ」をつける。ぜんぜん知らない人にはつかわぬ。”とも語った。

「トノ」が「ツノ」ともあるか。橋口氏教示例には、

○ニューインシヤッタ ツア。

入院されたんですか。

(“やや性急な調子で訊ねかける。”)

というのがある。

「モンノ」「ムンノ」という複合形もある。「ワノ」「ワイノ」という複合形もある。「ワヨノ」もある。橋口氏教示例は、

○オマイゲモオトッサンガワリカリウゴッチャ ワヨアー。

あなたの家もお父さんが悪いので大変ですよねえ。

などである。

以上、橋口氏教示の諸例は、氏が、昭和32年に、その郷里児湯郡富田村か

ら得られたものである。

## 熊本県

県南に、

○ $\overline{\text{アールバ}}$   $\overline{\text{ミテン}}$   $\overline{\text{ノ}}$ 。

あれを見てみるよ。

などの「 $\overline{\text{ミテン}}$   $\overline{\text{ノ}}$ 」式の言いかたが、かなりよくおこなわれているらしい。この「 $\overline{\text{ノ}}$ 」は、どういう「 $\overline{\text{ノ}}$ 」か。問いの「 $\overline{\text{ノ}}$ 」も、ならびおこなわれている。

斎藤俊三氏の『熊本県南部方言考』にも、

$\overline{\text{ミテンノ}}$  (見て見ないか)

$\overline{\text{キテンノ}}$  (来て見ないか)

との記事が見える。——「 $\overline{\text{ノ}}$  ( $\overline{\text{ノイ}}$ )」は、“友達間に”おこなわれるものであるという。

県西南の天草にも、「 $\overline{\text{キテン}}$   $\overline{\text{ノー}}$ 。」のような言いかたがおこなわれている。なお、天草下島西南岸での私の調査では、

○ $\overline{\text{イェラィ}}$   $\overline{\text{アツカ}}$   $\overline{\text{ノーィ}}$ 。

ひどく暑いね。

のような言いかたを聞くことができる。上記例の発言者老女は、「 $\overline{\text{ノー}}$ 」ともよく言った。当地で私が聞き得た土地人の説明に、“「 $\overline{\text{アツカ}}$   $\overline{\text{ノー}}$ 。」「 $\overline{\text{サムカ}}$   $\overline{\text{ノー}}$ 。」と  $\overline{\text{ユーデス}}$   $\overline{\text{バイ}}$ 。”というのものもある。(もっとも、“「 $\overline{\text{ノー}}$ 」をここではあまり言わぬ。隣村では言っている。”と言う人もあった。)

熊本市に近い地域の一出身者は、“「 $\overline{\text{ノー}}$ 」という語は使わない。”と報じてくれている。この友人は、“「 $\overline{\text{ナー}}$ 」と「 $\overline{\text{ネー}}$ 」とでは、「 $\overline{\text{ナー}}$ 」の方がていねい。目上に対して使う。「 $\overline{\text{ネー}}$ 」の方がぞんざい。目上に対しては使わない。”とも説いている。阿蘇山麓での一週間調査のさいは、「 $\overline{\text{ノ}}$ 」文末詞を聞くことができなかった。とはいいいながら、『朝日新聞』の昭和34年11月15日の記事、

「盆地の娘たち」によると、「阿蘇谷の盆地」の人が、

「山が晴れてよかったのう」

と言っている。それにしても思う。熊本県下の南域以外の地域では、「ノ」はよわいのではないか。

つぎに、「ノ」の変化形「ノイ」を問題にする。県南方域には「ノイ」がある。諸家も、この「ノイ」を指摘してられる。さきの斎藤俊三氏は、前掲書で、

ノイ（ノにイがつく） 和やか、家庭でも

右は広く農村に在る。

とするしてられる。私が、天草下島西南岸の土地人からもらった年賀状には、

○ヨカ正月ドン、ジャノイ。

○去年ナ、シヨヤー、ナツテノイ、コトシモ、タノム、パーイ。

去年はせわになってねえ。ことしもたのみますよ。

とある。

県北の西部にも、「ノイ」がある。能田太郎氏は、「肥後南ノ関方言会話誌（そノ一、朝の挨拶）」（『方言と土俗』第二巻第九号 昭和7年1月）で、

甲「早かのい」（自己の身分稍と上級であれば「早かねー」）

乙「早かなー」（自己の身分稍と下級であれば「早かなう」）

と記述してられる。——「ノイ」は、「ノーイ」とも言われているらしい。

※ ※ ※

「ノ」に関する複合形の文末詞では、「カノ」が、「ノ」地域によくおこなわれている。

○ニヒキ、ヨバ クレン カノー。

二匹、子をくれないかね。（蟹の子のことを幼男に言う。）

は、天草での一例である。

長崎県

本県下では、「ノ」がよくおこなわれている。五島列島南部では、

○キョ<sup>ア</sup> ヌツカ<sup>ア</sup> ノ<sup>ア</sup>。

などと言っており、「ネー」は同輩に言うことば、「ノー」は「ネー」の上位にくることば、としている。もっとも、「サムカ<sup>ア</sup> ノ<sup>ア</sup>。」(さむいね。)は、“下または同僚に言う。”とする人もある。中には、“「ナー」も「ノー」も敬称である。ジゲでは「ナー」と言い、カクレでは「ノー」。”、と言う人もある。“「ナー」は地下のことばで「ノー」はヒラキのことば。”と言う人もある。

愛宕八郎康隆氏によれば、長崎市市内でも、古くは「ノ」があって、これが「ナ」よりもよいことばだったという。

西彼杵半島北部の調査では、

「ノー」は同等以下につかう。「ナー」はすこし上品になる。

との説明を聞いた。しぜん、男に「ノー」が多いか。もっとも、老女も、

○ヤッ<sup>バ</sup>、ショ<sup>ア</sup>チュ<sup>ア</sup> ヨケ<sup>ア</sup> ノム<sup>ア</sup> モナ<sup>ア</sup> チゴ<sup>ア</sup>タ<sup>ア</sup> ビョ<sup>ア</sup>キ<sup>ア</sup> スル<sup>ア</sup> ノ<sup>ア</sup>。

やっぱり、焼酎をたくさん飲むものはちがった病気をするねえ。

などと言っている。したしみ深く、あるいはとりつくるわないでものを言う時には、男女に「ノー」がよく出るのではないか。

本県下に、「ノイ」が注目される。島原半島内に、「ナイ」と「ノイ」とが共存しており、ここに、「ノーイ」もまたよくおこなわれている。

※ ※ ※

「ノ」に関する複合形文末詞には、「ヨノ」があり、「ザイノ」がある。

○コ<sup>コ</sup>ン<sup>ア</sup> ニ<sup>ア</sup>キ<sup>ア</sup>、ソ<sup>ア</sup>ッ<sup>ア</sup>ド<sup>ア</sup>ン<sup>ア</sup> ヨ<sup>ア</sup>カ<sup>ア</sup> ザ<sup>ア</sup>イ<sup>ア</sup>ノ<sup>ア</sup>。

ここの所は、それでも、いいですね。 (初老男→人々)

は、西彼杵半島での「ザイノ」例である。

「カノ」もよくおこなわれており、また、「トノ」もある。「トヨノ」もある。『全国方言資料』第9巻の「長崎県福江市上大津」の条には、

fムカヒノ ジューギオ スー<sup>4)</sup> フスットト イカントヨノ  
昔の 流儀を 捨ててしまうと いけないのですよね。

とある。 4) 言いよどみ。

「モンノ」もある。

○フチワタシジャ モンノ。

船わたしたもののねえ。

は、五島南部で私が聞きとったものである。『全国方言資料』第9巻の「長崎県下県郡厳原町豆駈」の条には、

fソソナ トケー ナケァ ネートジャムノ  
そんな ところで なければ ないんですからね。

のような「ムノ」が見える。

#### 佐賀県

本県下にも、「ノ」がかなりよくおこなわれている。「ノ」と「オマイ」とのむすびあわされた「ノマイ」のおこなわれることもいちじるしい。

○ヤブレギモン キテ ノー。ヤブレゲタ ハイテ イコー ノー。

やぶれぎものを着てね。やぶれげたをはいて行こうね。

は、県北域での、女性同僚間の「ノー」ことばである。県南部域内の例は、

○ココンタリャ ヨカ ノー。

このあたりはいいねえ。(男性の判定表現)

○ソソンタイ オンナジャ ノー。

そこのあたりはおなじだねえ。(ことばの異同について言う。)

(青男間)

などである。——これらの「ノー」について、土地の識者は、私のカードに、  
親しい間にいふ。中の位。目上に言えば下品になるので、当地ではいわぬ。  
と注してられる。(なお、“全男”と“老女”とが「ノー」を言う、と見て

いられる。) 当地方言を調査しつつ感じたことであるが、文末詞「ノ」は、「ノー」と、下降調に発言されることが通例で、「ノマイ」は、「ノ<sup>↑</sup>マイ」と発言されがちであった。

※ ※ ※

「ノ」に関する複合形文末詞には、「カノ」「タイノ」「モンノ」などがある。

○ド<sup>ー</sup>セ オンナ<sup>ツ</sup> コッ タイノ。

どうせおんなじことタイノ (ことだよね)。

は、県南の「タイノ」例である。

## 福岡県

筑後には、「ノ」がよくおこなわれているか。問いの「ノ」もあり、このような「ノ」では、助詞「の」出自の「ノ」文末詞かと思われるものもある。

○オド<sup>ン</sup>モ カク<sup>レ</sup>オニ<sup>ー</sup> カ<sup>テ</sup>ン ノ<sup>ー</sup>。

わたしもかくれんぼによせてくれない？

この「ノー」は、どういう「ノ」であろうか。

筑後内に、「ノモン」系の「ノモ」もあり、——柳川方面には、ことにこれがさかんであり、こういう点からも、当地方に「ノ」文末詞のよくおこなわれてきたことがうかがわれる。

筑前、博多湾西、糸島半島内を調査したさいには、土地人たちが、「<sup>ー</sup>ネー」が土地コトバデス <sup>↑</sup>バイ。」と言っていた。なお、「久留米方面は「<sup>ー</sup>ノ。」ともあった。

北九州市の在かた方面には、「ノー」が男性にかなりよくおこなわれているのか。

筑後内で、「ノイ」「ノーイ」が聞かれる。「の」助詞系の「ノ」文末詞に関しても、「ノイ」形が認められるようである。

本県下に、「ノン」もあるのか。『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡

善導寺町」の条には、

f ナー イテコンノン

はい、行っていらっしゃい。

とある。——「ノ」の言いかたが「ノン」になるのは、もっともしぜんのことでもあろう。機械的な音訛とも言えるか。

※ ※ ※

「ノ」に関する複合形文末詞には、「ヨノ」「ザンノ」「カノ」「タイノ」「バノ」「モンノ」などがある。

m アタシドン ホンニ シヨッタバノ

わたしたちはほんとうに したものですよ。

は、「福岡県三井郡善導寺町」での、「バノ」の一例である。

## 大分県

本県下では、全般に、「ノ」がさかんである。——山陽路との相通が、この点に、よくうかがわれもする。

○ナー。ワリャー ナー。

ねえ。おまえはねえ。

これは、国東半島内での「ノ」例である。土地では、上の言いかたを、“男では乱暴なことば。女ではしたしみぶかいことば。”と説明している。県下で老若男女に「ノ」がおこなわれていよう。“「ノー」は下の者にか同僚に言う。”などと説明する人もある。

当県下に、「ノイ」も「ノン」もなさそうである。(機械的な音訛として「ノン」を見せることなど、あり得なくもないか。)

※ ※ ※

「ノ」に関する複合形文末詞には、「ヤノ」「イノ」「ゾ(ド)ノ」「カノ」「ンカノ」「ワイノ」などがある。

○ヒガ ナゲー ドアー。

日が長いよねえ。

は、大畑勸氏の「大分県南部の方言文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)に見える「ドノ」例である。

以上、九州地方の「ノ」文末詞の実情を見て、今、その存立の、単純ではないことが思われる。やはり、九州方言の地層の深さ・複雑さが、ここにも反映しているか。

中国地方となると、「ノ」存立の実態は、ますますこしく単純である。

#### 四 中国地方の「ノ」ほか

国内を地域別に見たばあい、中国地域は、「ノ」文末詞のさかんな地域だとされる。ことに山陽がわは、「ノ」文末詞の定着度が大きであると見られる。その現状に徴するのに、おそらく、「ノ」が、古来、当地方によくおこなわれてきたであろうと察することができる。

とはいいいながら、山口県地方と広島県地方と岡山県地方とでは、等しく山陽道下にはあるが、状況に、異なるものがある。

山口県下に「ノ」がよくおこなわれているが、西部の長門内には、「ナ」の、ともにおこなわれる度あいのつよい特性が見られる。この点、私どもは、当方と九州域との、特定の関連を考えさせられる。

周防、岩国市域内の言いぐさに、“今津ノノー、川下カーカー。”というのがある。今津で「ノ」文末詞のよくつかわれているのが、人々によく気づかれているらしい。周防・長門で、「ノ」は、古来のものであったろう。七十歳以上の老嫗など、“若い時には、「ノ」をつかっていた。”と語ったよしである。(現に「ノ」をつかっている当人が。)(荒巻大拙氏による。)

『瀬戸内海言語図巻』で山口県下の「ノ」文末詞の状況を見るのに、少年層

図では、老年層図の「ノ」の分布域に、「ネ」化がいちじるしい。それにしても、県下、ことに周防では、「ノ」がよくおこなわれており、——島嶼部にも「ノ」がよく見られ、「ノ」は、「ノ<sup>ン</sup>タ」と共存してもいる。（“「ノ」は近い人に言い、「ノ<sup>ン</sup>タ」は他人に言う。”などとある。）

問いにも「ノ」がつかわれ、たとえば、

○イカ<sup>ン</sup>ノ<sup>ノ</sup>。

行かないの？

のような言いかたもされている。「イカ<sup>ン</sup>ノ<sup>ノ</sup>」の「ノ」は、助詞「の」に発した転成文末詞である。そのあとへ感声系文末詞の「ノ」がきている。

周防に、「ノ」に類する「ノイ」「ノ<sup>ン</sup>」がある。たとえば、祝島で、

○いなかの 人は ダメナ コトバ ツカウ アイノ<sup>ー</sup>。

いなかの人はだめなことばをつかうのよね。（老女→藤原ら）

と言われている。これに見られる「ノイ」は、「ノ」文末詞の単純な音訛に成る「ノイ」ではあるまい。「ノイ」が「のよ」とも言い換えられるようである。山田正紀氏の「瀬戸内海島嶼方言資料」（『方言』第二卷第六号 昭和7年6月）にも「ノイノ（9 上関島—山口—）」の記事が見え、これのとなりに、「ノヨノ（33 下蒲刈島—広島—）」の記事が見える。周防本土東部での、

○ソリョ<sup>ー</sup> ユーチ キカス ノイネ。

それを言って聞かせるのよね。

○ハー シバヤ<sup>ー</sup> スンダ ノイ。

もう芝居はすんだのよ。

などを見ても、「ノイ」が「のよ」と解されるものようである。——「ノイネ」とともに、「ノイノ」もおこなわれている。以上に見た「ノイ」の「ノ」は、「の」助詞に発した、いわば助詞系文末詞としなくてはなるまい。

「ノ<sup>ン</sup>」の例は、

○ア<sup>ン</sup>タ オヨガ<sup>ン</sup>ノ<sup>ン</sup>。

あなた泳がないの？

○行カ<sup>ン</sup> ア<sup>ン</sup>。

行かないの？

などである。問いのばあいには「ノ」とつよく言えば、音がしぜんに「ノン」となるのであろう。ただし、このばあいにもまた、「ノ」は、助詞系の文末詞と見られる。

※ ※ ※

山口県下の、「ノ」に関する複合形文末詞として最初にとりあげられるのは、「イノ」である。これの用いられることが、じつにさかんのようである。

○タマゲ<sup>タ</sup> イ<sup>ノ</sup>。

おどろいたよ。

○オトコブリガ マルキ<sup>リ</sup> カワツトリマシ<sup>タ</sup> イ<sup>ノ</sup>。

男ぶりがまるっきりかわってましたよ。

○コドモ<sup>ラ</sup> キゲンガ ワルイ<sup>ノ</sup>ニ ヨワリマシ<sup>タ</sup> イ<sup>ノ</sup>。

子どもは雨で（遠足に行けなくて）きげんがわるいのでこまりますよ。（中女間）

などと、実情や思いを述べるのに、よく「イノ」の言いかたをしている。「行きましょう。」とさそう時などにも、「イノ」が出る。「イノ」が「イーノー」ともなっている。（どちらかと言えば周防がわに、「イノ」がよりさかんであろうか。）

他の複合形文末詞に「ヨノ」「イヨノ」があり、「ゾ（ド）ノ」があり、「カノ」「ノ（ン）カノ」「カイノ」があり、「ガノ」があり「デノ」があり「トイノ」がある。

○ソ<sup>ー</sup>ジャロー ガ<sup>ノ</sup>。

そうだろう？

は、周防の「ガノ」の一例である。

○コマイ モンジャー アルデー<sup>ア</sup>。

なかなか小さいものだな。（老男間）

は、周防平郡島での「デノ」の一例である。(国安功氏教示)

広島県下は、山陽路にあって、わけてもよく「ノ」文末詞の盛行を示す。従来の日常表現生活では、一般に、「ノ」だけが固有の勢力を発揮しており、その点では、「ナ」が、異質的とも言えるものになっている。山陽路にあって、おそらくは、広島県地方が、「ノ」の本場をなしていよう。

そのおこなわれかたは、待遇表現上、上下の広汎にわたっている。すなわち、たとえば、

○オハヨ ゴザイマス ア。

お早うございますねえ。

などと、最上の待遇表現法のばあいにも、「ノ」が用いられている。「ノ」は、自由に広汎に用いられる地ことばであると言える。なんのかざりけもなく、朴直に、「アア ア。」(あのね。)といったあんばいに「ノ」のよく用いられることなど、多く言うまでもない。

私など、長年、当地方に居住して、老年者の敬虔な表現の「ノ」にうたれることがしばしばある。と同時にまた、若い男性などの、野卑ともとれる「ノ」の表現のこっけいみにうたれることもしばしばである。

今日、若い女性たちは、「ノー」とよびかけることを、だんだんにしなくなってきていようか。共通語の「ネ」に対比しては、「ノ」からの音感は、やや奇異なもの、ひなびたものともわきまえられがちか。しかし、だれしも、「ノ」からいっきに「ネ」にうつることは容易でない。ここに、共通語生活的な気分ですり用いられがちなのが「ナ」である。若い男性たちには、「ネ」や「ナ」との対応関係を理解し、意識しつつも、「ノ」を、あえてつかってみようとするところがあり、そのさいは、なかば意図的に、下品感の「ノ」表現がかもされることになる。

「ノ」に類する「ノイ」「ノン」もある。「ノイ」は、「のよ」的なものか。「ノン」は、例によって、「ノ」強調発言の結果であろう。

○ $\overline{\text{ナシテ}}$  イカン ノン。

どうして行かないの？

は、「ノン」の一例である。さて、当県下での「ノイ」「ノン」のばあいも、「ノ」は、助詞系の転成文末詞と見られる。——それらをここに記述してみるのには、「ノイ」「ノン」の音形が、感声系の文末詞「ノ」の単純変形の「ノイ」「ノン」と、たまたま等しいからである。

※ ※ ※

広島県下の「ノ」に関する複合形文末詞には、「ヤノ」があり、「イノ」があり「ヨノ」（「ヨーノー」のばあいも）があり「ノ（ン）ヨノ」がある。「ノヨノ」が「ネーノ」ともなっているか。江田島での一例、

○広島に  $\overline{\text{カエーニ}}$   $\overline{\text{イッチャー}}$   $\overline{\text{トッテ}}$   $\overline{\text{モドッテ}}$   $\overline{\text{モッテ}}$   $\overline{\text{デル}}$   $\overline{\text{ネーノ}}$ 。

広島に買いに行つては、とつてもどつて、持つて出るのよね。のばあいでの「ネーノ」には、「ノヨノ」を読みとることができよう。「ネーノ」の分布は、瀬戸内海域にせまくはないらしい。備後の北域内などにも、「ネーノ」が見られる。

○ $\overline{\text{オコラレタ}}$   $\overline{\text{ネーナー}}$ 。

おこられたのよねえ。

などとある。

複合形になお、「カノ」があり、「カイノ」があり「ガノ」がある。「テノ」（「テーノー」のばあいも）があり、「デノ」（「デーノー」のばあいも）がある。

○ $\overline{\text{ドーモ}}$   $\overline{\text{ワカラン}}$   $\overline{\text{テナー}}$ 。

どうもわからないよねえ。

○ $\overline{\text{アリーャー}}$   $\overline{\text{スマー}}$   $\overline{\text{テーナー}}$ 。

ありはしないだらうよねえ。

は、「テノ」の例である。

中国山陽路の一斑としての岡山県下は、広島県下とはまた異なり、文末詞「ナ」をおこなうことがさかんであって、「ノ」を見せることは、総体的には、かなりよわい。——等しく山陽路ではあっても、当県下は、近畿に直続していることであり、やはり近畿域の影響をしぜんに受けいれてきて、近畿に類して、「ナ」をよくおこなうことになっているのか。山陽の「ノ」地域も、ここでは様相がかわっているとすなくてはならない。

もとは岡山県下も、もっとよく「ノ」を見せたのではなからうか。（「ノ」の地盤性質を有するところに「ナ」が広まって、「ノ」は退存したのか。）

『瀬戸内海言語図巻』を見ても、内海域にあって、東方から「ナ」が「ノ」をおしてきている様相が明らかである。——安芸・周防は、いまだ「ナ」を拒否していると言えようか。

岡山県下の内海島嶼のうちには、「ノ」のかなりさかんなものが見られもする。ここに「ノ」の退存の状況の、かなり濃いものがあるともしうるか。（島嶼の事情は、こんなものかと思う。）備中真鍋島の「ノ」例をあげるなら、

○ネーチャン。アノ アー。

ねえちゃん。あのねえ。 （小学生男→中学生女）

○フル モンヤ アー。

（雨が）よく降ることだねえ。 （初老女間）

などがある。後例では、指定の助動詞が「ヤ」とあって、いわば近畿弁的にもなっているが、それでいて文末詞は、近畿での大勢に反して「ノー」である。成人の女性たちも、ここでは通常「ノー」の生活をしている。（男性はもとよりのことである。）

つぎに、県北、作州で「ノー」が聞かれる。当方出身の今石元久氏も、文末の「ノー」「ゾノー」を“作州地方の男ことば”とされる。知友に、“備中から美作勝山あたりまでは「ノー」で、その東の作州になると、もはや「ナー」である。”とする人々もある。作州西部での調査経験で、私は、“「ノー」は若い

人にはすくなくて年輩者には多い。”との土地人判断に出あっている。このほうでの一例は、下のものである。

○ゴメンナサイ ノ。

ごめんなさいませ。(来訪者が土間で「さようなら。」を言ったのに対する返事のあいさつ。)——このさいは、短呼が注目される。

ちなみに、広島県下での「ノ」の短呼の実例は、「コレガ<sup>ノ</sup>。アッー  
ナリャー<sup>ノ</sup>。ヤクニ<sup>ノ</sup>。タツケン<sup>ノ</sup>。」(これがね。暑くなればね。やく  
にたつからね。)である。(仲部宏泰氏の教示による。)

県下島嶼の真鍋島では、私は、「ノン」をも聞きとめている。

○ソージャ ガイノン。 コンタシラー。

そうなんだよ。あんたたちよ。

といったあんばいである。なお、真鍋島の属島である六島<sup>むしぼ</sup>でも、

○エイチャン。 ナンヤラジャ ノン。

えいちゃん。なんやらだねえ。

などと言っているという。六島でまた、

○イケンジャロ ンガイ、ンノン。

行くんだらうねえ。

のような言いかたもされているという。文末詞「ガイ」または「ンガイ」に、さらに「ノン」がつづいたと見うるものかどうか。

※ ※ ※

当県下の「ノ」に関する複合形文末詞には、「ヤノ」「ゾノ」「ゾイノ」などがある。

○ソレガ ウンア ツキジャロー ゾイア。

それが運のつきだらうよねえ。

は、「ゾイノ」の一例である。

つぎに、山陰島根県下を見る。石見は、安芸との関連よく、「ノ」を示す。

出雲に関しては、まず、後藤蔵四郎氏の『出雲方言考』の記事を引用させていただきたい。

松江には同輩以上に対してねを用ゐ、劣等へ対してはな又はのを用ゐる、とある。出雲の南北に、「ノー」の常用を見ることができる。南部山地域の例では、幼女もつかう、

○アノ ノー。

あのね。

がある。当方での経験であるが、老男の人が、その長男には「ノー」と言って話し、私には「ネァ」と言って話した。

県北、島根半島北岸の一例は、おとなの言った、

○アア ノー。コゲ シ[i]テ ゴッサイ。

あのねえ。こんなにしてちょうだい。

である。隠岐については、神部宏泰氏の教示がある。島後、西郷のことばでは、「サムイデス ノー。」(さむいですね。)などと、「ノ」が女性中心に用いられて、これは、「ナ」よりもすこし品がよいという。島後の西北部では、土地人が、「ノ」は偉い人に通用することばだ。」とも説明したよしである。

「ノン」の形があるのかどうか。『全国方言資料』第5巻の「島根県那賀郡雲城村」の条に、

m………… キラレモ イカレモ センノン

来ることも 行くことも できないのだ。

などというのが見られる。(ただし、このばあいは、「ノン」がとりたてられるとしても、これは、「の」助詞系の「ノン」かと見られる。)

※ ※ ※

当県下の「ノ」に関する複合形文末詞には、「ヤノ」「ヨノ」があり、「カノ」(「カーノ」)「カイノ」があり、「ガノ」がある。また、「ワノ」「ワイ(エ)ノ」「ワナノ」などがある。

○アゲデス[ü] カイノー。

そんなですかねえ。

は、「カキノ」の一例である。

鳥取県下では、「ノ」の存在がよわい。どちらかといえば、東半域に「ノ」が見られやすかるうか。「ノ」文末詞は、当県下で、現地人の指摘するように、老人ことばと言いうるものになっているかもしれない。ただし、室山敏昭氏は、伯耆の三朝方言に関して、かつて、“「ノー」は老人専用といちがいに言えないようだ。”と言われた。生田弥範氏の『因伯方言考』（就将尋常小学校 昭和12年2月）には、

言葉の終りに、「ノー」とか「サ」とか附くのは浜言葉に限つてゐる。とある。（“米子市の言葉を米子弁といふやうに弓浜部の言葉を浜言葉と言つてゐる。浜言葉は出雲弁と異つて疎野であり鈍重ではあるが親しみのあるゆつたりとした語調をもつてゐる。”）ところで私は、伯耆西南山地域調査のさい、このほうで、対等・親密の場で用いられる「ノー」を聞くことができた。（当地域で最高の言いかたは、「ナ」であった。）生田弥範氏の『山陰方言雑考』（自家版 昭和31年5月）にも、

伯耆西部の「ノー」型、例えば同僚間に行われる「行かえノー」「話さえノー」「来ッさえノ」等は地方的特色を有つ表現であつて、南方四国の「ナオ」「ナモ」と関係があると見られる。

との記事が見える。

石黒武頭氏の『鳥取県方言辞典 後編』には、

のん〔助詞〕 問い

の形が見える。

※ ※ ※

当県下での、「ノ」に関する複合形の文末詞には、「ゾイノ」「カキノ」「ガノ」「ワイノ」などがある。

○ソコ＝〔i〕 アー ガノ。

そこにあるじゃないか。

は、「ガノ」の一例である。

中国も、旧来は全域的に、よく「ノ」がおこなわれたのであろうか。

「ノ」表現の生活での、中国地方人の情緒には、敦朴みの、はなはだ掬すべきものがある。古老たちは、いまだに「ノ」表現によって敬虔な心情表白をしてもいる。

この人たちにとって、「ナ」や「ネ」の流行は、半意識的にもせよ、違和感をおぼえるものでもあろうか。しかし、共通語化の波のよりつよまる今日、「ノ」退勢の自然状況は、いかんともすることができない。

#### 五 四国地方の「ノ」ほか

近畿・四国には、「ナ」文末詞のおこなわれることが隆盛であって、近畿四国弁といえば、「ナ」ことばが思いだされてもよいほどであるけれども、他方でまた、「ノ」文末詞のおこなわれることもすくなくない。このへんにやはり、原生的な、感動音起源的なナ行音文末詞の分生存立の自然さがあるのか。

愛媛県下の「ノ」は、おおよそ、したい人々のあいだによくおこなわれる「ノ」である。本土部にも島嶼部にも「ノ」がおこなわれている。県南の大洲市などに関しては、“大洲の「ノー」ことば”との言いぐさがあるらしい。この地方一帯に、地ことばとしての「ノ」の、老若男女におこなわれることがさかんである。

○アン ノー。

あのね。 (小学生二男→先生)

これは、大洲小学校内で得た例である。県南内に、「ノ」を上品語とわきまえているむきもある。(「ノ」が、つまりは、上品中品下品——目上・目下——のいろいろのばあいには、自由に用いられてもいるというしだいなのであろう。)

県中央域（中予）では、同輩間であるいは親密な相手に「ノ」が発せられており、島嶼部も多く同様で、この点、山陽路の「ノ」とのつづきが明らかである。（さきに、『瀬戸内海言語図巻』について述べたところ、p. 267 参照）

ところで、県東辺域には、「ナ」がおこなわれて「ノ」はおこなわれていない。そのほうの人たちは、新居浜市のほうの「ノ」を、わるいことば、荒いことばと見ている。

内海島嶼部、大三島のうちには、「ノ」の、

○イン<sup>ゲ</sup>ノ。

（「いいえ。」と、つよく自分の思いを言う。）<女性または子どものことば。やや上品みがある。>

○イン<sup>ニャ</sup>ノ。

（「いやだよってば。」といったような気分のものである。）<男性のことば。やや下品。>

といったような用法がある。

当県下に「ノン」形もある。愛媛県東部の新居郡垣生村では、

○ワ<sup>キ</sup>ャ<sup>ン</sup>。

（「ワキ」は一人称代名詞。ワキはねえ。）

などと言っている。“ハブ<sup>ン</sup>ワ<sup>キ</sup>ャ<sup>ン</sup>。”（垣生の「ワ<sup>キ</sup>ャ<sup>ン</sup>」。）との言いぐさもできているそうである。「ワ<sup>キ</sup>ャ<sup>ン</sup>」は“年寄りのことば。漁師などがつかう。”とも言われ、“百姓の者でも年輩の者がつかう。女に比較的多い。”とも言われている。愛媛県南部域内にも、「ノン」が分布しているようである。

つぎに、異形の「ノア」がある。

○ア<sup>ノ</sup>ノア。

あのねえ。

などと言われている。内海大三島の南部でのことである。ただし、“今はあまり言わぬ。”と人は言う。隣島の伯方島には、「ノワ」があるか。伯方島の『愛

媛県上浦町誌』(昭和49年10月)にも、「ねえ」の「ノワ」が見える。

※ ※ ※

愛媛県下の、「ノ」に関する複合形の文末詞には、「ヤノ」「ヨノ」「エーノ」があり、「ゾノ」「ヅ(ド)イノ」があり、「ゼノ」がある。「カノ」「カイノ」があり、「ガノ」がある。

○オトサン ドコイ イッタ ンドエーノ。

おとうさんはどこへ行ったんかね。

は、瀬戸内海の魚島での、ややこみいった複合形文末詞の例である。

高知県下にはすでに、「ナ」の比較的よわいありさまが見られた。そのありさまに反比例して、本県下では「ノ」が、かなりつよい。——この点でも、本県下は、四国内でそうとうに特立的である。四国弁といったような概称がゆるされるなかであって、高知県下の特性が見られる。(四国山脈に境された、土佐の地理的環境は、しばしば自然制約の理を發揮するのであろう。)

「ノ」は一般に、したいものや目下のものにつかうなど、気らくに用いられているものようである。——上の位の表現にも、「ノー」の用いられることもあるが。「ノー」をつねの態のものとし、「ノーン」をややよいものとしているか。

本県下に、「ノ」の変形の「ノイ」「ノン」が見られる。「ノイ」は諸方にあるらしいが、わけても、幡多郡下にこれがよく見いだされるようである。土地の人沖本樵平氏も、しきりに「ノイ」を指摘していられる。土居重俊氏・浜田数義氏にまた、「ノイ」「ノン」に関するご発表がある。私が土佐ではじめて「ノン」に接したのは、幡多郡西南域においてである。「さむいね。」という意味で、

○ヒヤイ アン。

と言っていた。昭和十年代の経験である。「ノン」「ノイ」などと、「ノ」の表現形が変わってくると、それだけ、訴えことばもより手あついものになってく

るようである。——あるいは、ていねいなものともなる。

※ ※ ※

「ノ」に関する複合形文末詞には、「ヤノ」「ヨノ」があり、「ゾノ」「ゾカノイ」があり、「カノ」があり「ガノ」があり、「ワノ」がある。

○ゾー カノン。

そうですか（そうなの）。

は、幡多郡下の「カノン」例である。

徳島県下には、「ナ」がよくおこなわれている反面、「ノ」もまたかなりよくおこなわれている。金沢治氏ほかのかたがたは、「ノ」が北域の非平坦部によくおこなわれることを指摘される。

○ゾー ジャ ア。

そうだねえ。

は、金沢氏が祖谷のことばとしてあげられるものである。私の祖谷経験によれば、「ノー」は、上の位の言いかたにもつかわれる。

ところで、県下の南部域内にも「ノ」が見いだされる。南部山地の一例は、

○サムイ ア。

さむいねえ。

である。このへんでは、女性どうしも、さまざまな身分関係の間がらで多く「ノ」を言っている。文末詞「ノー」と代名詞「オマイ」と文末詞「ワイ」とが、よくつれあうものようでもある。

離島の伊島にも、「ノー」がおこなわれているらしい。（金沢治氏「伊島言語調査レポート」『阿波方言』第三巻第一号）

人々も言われるように、古くは、「ノー」が県下の広くによくおこなわれていたであろうか。今日、「ノー」はおよそ、したい間がらで、気やすく用いられる程度のものになっている。

※ ※ ※

本県下の、「ノ」に関する複合形の文末詞には、「ヨノ」「ゾノ」「ゾイノ」「ガノ」「モンノ」などがある。

ここにあわせて注意すべきものに、「ノーロ」がある。金沢治氏の『阿波言葉の辞典』には、

ノーロ〔感動〕 やや古い

今日ハアツイノーロ

の記事が見える。「ノー」が「ロ」に受けられている。この「ロ」は何であろうか。あるいは、「ワレ」の「レ」に関係のあるものか。

香川県下でもまた、「ナ」がよくおこなわれる中に、「ノ」の、よわくはないものが見られる。ことに、高松市域以東では、「ノー」がよくおこなわれていようか。

○ソイデ<sup>ニ</sup> アー。

それでねえ。

は、東部内での一例である。このほうでは、「ノー」よりも「ナー」のほうが品がよいとされている。ただし、女性も「ノー」を言っている。

西の丸亀市方面だと、「ノ」は男性間の極く親しい間柄、又は目下の者に用いるのが普通である。”という。(堀芳夫氏教示)私が、丸亀市に属する内海の広島で聞いた「ノ」の一例は、

○ゼンツージノ<sup>ニ</sup> ゴジューノ<sup>ニ</sup> トーデス<sup>ニ</sup> アー。

善通寺の五重の塔ですnee。(中男→藤原)

である。県下、内海島嶼部に、「ノー」のおこなわれることがすくなくない。

○アノ<sup>ニ</sup> アー。

あのね。

○オヘンドサンノ<sup>ニ</sup> ノ。

おへんどのね。

は、小豆島の二例である。桂又三郎氏の『小豆島方言』には、

アノソノ あのね。

と見える。

県本土の中部以西では、“高松のように「ノー」とは言わぬ。”などの所感が聞かれる。

県下に、「ノ」の変形の「ノイ」がある。山田正紀氏の「瀬戸内海島嶼方言資料」には、

ノイ (64 栗島—香川—)

とある。

※ ※ ※

「ノ」に関する複合形の文末詞には、「ゾノ」「ゾイノ」「カノ」「カイノ」「ガイノ」「ワイノ」などがある。

○ドッカニ アル カイノ。

どこかにあるかいなあ。(相談)

は、本土中部での「カイノ」の例である。

## 六 近畿地方の「ノ」ほか

さきに「ナ」文末詞の条で、私は、

「ナ」は、近畿にとって、土着のことばである。

と述べた。近畿ことばが、かんたんには「ナ」ことばとも言いあらわしうるものであることも述べた。されば、近畿地方のことばは、「ナ」一色というほどの状況になっているかというのに、そうではなくて、今、問題とする「ノ」もまた、じつは、そうとうにおこなわれているのが注意される。

これら二態の状況は、位相上の別として、わきまえとらえることができよう。日常生活一般での文末詞使用では、「ナ」がもっともふつうに用いられ、その下位相で、「ノ」文末詞がかなりおこなわれているということであろう。ともあれ、「ナ」ことばの近畿地方に、「ノ」ことばもけって微弱ではない。ことに近畿南辺内には、「ナ」よりもむしろ「ノ」のほうがよくおこなわれている

るのが注目される。南紀地方に、「ノ」とともに、「ノシ」または「ノンシ」がよくおこなわれている。

前者が普通度の言いかたをみちびくもので、後者類が上品な言いかたをみちびくものである。「ノシ」「ノンシ」の盛行はまた、「ノ」のつよい存在を実証するものでもあろう。

「ドシ<sup>ナ</sup>タンナ ノー。」(どうしたの?)は、目下のものに、——おやが子などに言うものであり、「ドシ<sup>ナ</sup>タンナ ノシ。」は目上に言うことばである、と言われている。

四国地方でも考えられたことであるが、「ナ」の近畿地方にあっても、かつては、「ノ」勢力の、全般につよいものがあったかもしれない。ひろげて全国的視野で考えてもみるのに、「ノ」は諸方において、およそ潜在的でもある。——潜在性を思わせるようなありさまで、その固有勢力の残影を見せるようでもある。所によっては、その「ノ」が、依然として顕著なおこなわれざまを見せているということなのであろう。

兵庫県下では、まず淡路島に、「ノ」のおこなわれることがかなりさかんである。

○ツ<sup>ラ</sup>テ<sup>ア</sup>ー。

つらくってねえ。

は、東南部での一例である。かつてこのほうの調査にあたった時は、由良中学校のいわゆる小使さん(老男)が、先生に「ノー」を頻発していた。

○ダイブ<sup>ラ</sup>トイ<sup>ア</sup>ー。

だいぶんふといねえ。(中女 独話的)

は、淡路北部での一例である。——女性も、ふつうに「ノ」をつかっている。

播磨では、西半地域に、比較的よく「ノ」が聞かれようか。

○ソ<sup>ッ</sup>チー<sup>イ</sup>ケ<sup>ノ</sup>ー。

そっちへ行けよ。

は、西辺での一例である。中播地域内で、“「ノー」はいやしいことば”などとも言われている。西播奥では、“「ノー」は村びとばかりの時つかう。同等のものにつかう。また、年寄りに向かって言うもの。”との説明を聞いたことがある。

但馬にも、「ノー」がおこなわれている。ただし南部西奥では、

○クンナヘー ノー。

くださいねえ。（“心やすいものなどに言う。他人には言わぬ。”）

などと言っている。

但馬西北域の一知人は、その地に、

○ソシタラ ノ。ヨー シタダガ ノ。

“そしたらよ。こうしたんですよ。”

などと短呼の「ノ」のよくおこなわれていることを知らせてくれた。——“「ノ」は敬語。”とのことである。なおこの知友は、

文末は「ナー」がふつう。目下や同等には「ソシタラ ナーヨ。」。「ナ」の下には「ヨ」がつく。文末に「ノー」がくる時には、その下に「ヤ」がつく。「ソレガ ナーヤ。」などと言う。目上には「ノーヤ」。

と教えてくれた。この教示者は、かつて学生として、広島に来住した。その経験に徴して言ったことばは、つぎのとおりのものである。

広島「ノー」とはぜんぜんちがって、こちらの「ノー」は、敬語表現に限られている。

東播地方にも、「ノー」がおこなわれている。

さて、神戸市方面となると、単純な訴えかけの「ノー」は、用いられていないようである。清瀬良一氏は、「神戸方面の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）で、

神戸地方では、たとえば、大阪地方でいう、

○アイツ ハヤイ ナー。

のごとき、単純よびかけの「ノ」はもちいない。

と述べていられる。

※ ※ ※

本県下に、「ノ」に関する複合形文末詞の見るべきものは、あまりない。「カノ」「キャノ」などが見いだされる。

複合形の種別もあまり見られず、複合形の流行もあまり見られない状況は、何を意味しようか。「ノ」そのものは、上に述べた程度におこなわれている。

大阪府下では、「ノ」の勢力がよわかるう。北部の池田市方面に関しては、山本俊治氏の「大阪方言における文末助詞(池田市のことばを中心として)」(『方言研究年報』第一巻)があり、

○コンナ モン ツンデ イケ ユイヨンネンサカイ アー。

“こんなものをつんでいけというんだからなあ。”

などの例が見える。

府下、南河内郡内の調査経験では、「ノ」が、全然聞かれなかった。

府南、和泉地方となると、「ノ」の使用の、ややいちじるしいが見える。

※ ※ ※

「ノ」に関する複合形の文末詞には、「ヤノ」「カノ」「ワノ」などがあるか。

和歌山県下は、「ノ」の比較的さかんな所である。南北の全般にわたって、「ノ」が見いだされる。

○ソコニ アノ アー。

そこに、あのねえ。

は、県中部での一例である。当地方に、「ノー」を頻用する所が多い。

県南辺、串本町の例は、

○サムイ アー。

さむいねえ。

などである。——「ノンシ」と言えば、よいことばになる。新宮ことばでも、

「ノシ」「ノ」を言っており、「ノー」のほうを多く言い、ちょっとていねいに言う時は「ノシ」と言う。」とのことである。

県下で、「ノ」は、どちらかという、男性がつかいがちなものであろうか。

和歌山県下で、とくに注目すべきものに、「ノ」の「ノイ」形がある。この「ノイ」に関しては、土地の方言書に、「ノシ」起源を考えるものもあるが、私はやはり強調の「ノー」が「ノイ」になったものであろうと思う。ともあれ、「ノー」なみの「ノイ」が、県下の南北におこなわれている。楠本実二氏は、「奥熊野地方の言語」（地方史研究所『熊野』）で、

紀州地方でも「のし」が盛んに使われるが、之に劣らず「のい」が盛んである。但し「のい」は男性に多く使われるし、女性は「のい」よりも「のし」を使うのは普通のようなものである。

と述べていられる。県下のもろもろの方言書がしきりに「ノイ」をとりたてている。『和歌山県方言』に、

ノイン　ねえ　市，海郡

というのが見える。私は、かつて、田辺市奥の方言を調査して、

○ソーデス　ア－イ。

そうですね。

などの実例を得た。一老男は私に、しきりに「ノイ」をつかったが、ことあらためて私がこの人に「ノイ」をただすと、この人は、「ア－イ」ワ　イワンデス。「ア－」デス。”（「ノイ」は言いません。「ノー」です。）と答えた。

※　※　※

本県下の「ノ」に関する複合形文末詞には、「カノ」「カノイ」、「カイノ」「ケノ」、「ワノ」「ワイノ」などがある。

○スマンケド　ウチ　キテ　クレル　カノ。

すまないけど、うちへ来てくれるかね。

は、新宮市での「カノ」の一例である。

奈良県下にも、わりによく「ノ」が見られる。ほぼ全域に「ノ」がありうる、とされよう。(江端義夫氏は、先年、洞川〈ドロガワ〉方言の「ニョー」を教示された。)

北部では、「ナー」がよいことばで、「ノー」はその下位のものと思われるようである。これに対して、南部方面になると、「ノー」がわるくはないことばになっているのが注目される。諸家の研究にも、ご指摘がある。たとえば西宮一民氏も、「奈良県方言の待遇表現について」(『国語学』36)で、「南部方言」につき、「ナー」は卑、「ノー」は敬、としていられる。(氏の他のご発表にも、このことが見える。)

私が南部域の東北寄りの地で調査した結果をとり出してみよう。そこでは、「ノー」につき、“目上にしかつかわぬ。若いものにはつかわぬ。敬語。”と言う人があった。「ツヤ ノー。」(そうだねえ。)は、“土地のことば。昔から伝わってることば。”ということであった。“だいたい、ことばのしりへは「ノ」をつかいます。”と言っており、なるほど、土地人どうしの会話では、男子どうしにも、「ノ」の頻用されるのが聞かれた。“老男女とも、ていねいな気もちで「ノー」を言う。”と言う人もあった。

十津川でも、「ノー」をよくつかっている。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条には、

fヒサシブリジャモノーノ

久しぶりですものね。

などとある。「ノ」は、どの程度の表現品位をかかすものであろうか。

※ ※ ※

本県下では、「ノ」に関する複合形文末詞の多くを指摘することができない。「カノ」などが見いだされる。

三重県下には、「ノ」に関して言うべきことが多い。

「ノ」は、まず、県下に一般的であると言うことができよう。伊勢山田あたりの実例は、

○トッテモ ヤリキレン ノー。

ほんとにやりきれないねえ。

などである。伊勢南部域の例は、

○アソ ノー。

あのね。

○サムイ ノー。

さむいね。

などである。これらの「ノー」については、“目上には言わぬ。”、“友人には「ノー」をつかう。”などと言われている。

県下での「ノ」のだいたいの用法は、「同僚間で用いられ、また、目上から目下に用いられる。」という程度のものであろうか。「ナ」は、目上にもつかうことばである。したがって、「ノ」は、「ナ」の次下に位するものとされる。「ノ」を男性ことばと限ることはできない。

県南の志摩半島から、紀州南牟婁郡北牟婁郡、つまり三重県紀州では、「ノ」が安定勢力をなしているのかもしれない。南牟婁郡での一例は、

○ネテ ヤスモ カ ユテ ノー。

(雨が降るから) ねてやすもうかといってねえ。(老女→人々)

である。南牟婁郡下の一地点では、“子どものころに、「ノー」をつかうと、町のまねをしたと言われたものですよ。”との説明を聞いたことがある。これによって私どもは、当地域での「ノ」の存立の歴史を想像することができるようでもある。本来「ノ」は、けっしてわるいことばではなかったのであろう。

志摩地方でも、人々は、じつにふつうに、「ノ」を愛用している。

○ノボッテ コイ ノー。

(このがけを) あがってこいよ。

これは、小学生低学年男子間に聞かれたものである。

伊賀にも、「ノー」がよくおこなわれている。

○スズシ ノー。

涼しいねえ。

これについて、“ほんとのむかしのことば。”と説明する人があった。当方で、たとえば青年男子も、先生に向かって、よく「ノー」をつかっている。

○カタ<sup>ア</sup>イ<sup>ア</sup>バ<sup>ア</sup>ッカ<sup>ア</sup>リ<sup>ア</sup>デ<sup>ア</sup>モ イ<sup>ア</sup>カ<sup>ア</sup>ン<sup>ア</sup>サ<sup>ア</sup>カイ<sup>ア</sup> フ<sup>ア</sup>ー。

人間は堅いばかりでもいけませんからねえ。

は、その一例である。

三重県志摩方面に、「ノ」の変形と考えられる「ノイ」がある。——「ノー」と、つよく言いあらわしたひょうしに、その長音部が「イ」音化したのであろう。「あの ね。」も、「アン アイ。」といったあんばいである。佐藤虎男氏は、三重県紀州の尾鷲南方の海岸を調査されて、「ノイ」「ノエ」を見いだしていただける。私は、南牟婁郡下で、「ノン」を聞いている。

○ヨ<sup>ア</sup>ー<sup>ア</sup>ケ<sup>ア</sup> アル ノ<sup>ア</sup>ン。

たくさんあるね。

(なお、私のこのカードには、“「ノー」をよく言う。”とするしている。この「ノー」のところへ、土地人のカード検閲の識者が、“外来語らしいので、すこし敬語をふくめた意味に使われる場合もあるため。”とするしていただく。)

○ア<sup>ア</sup>フ<sup>ア</sup> フ<sup>ア</sup>ン。

などと言っている。知友、中田光雄氏は、「ア<sup>ア</sup>フ<sup>ア</sup> ナ<sup>ア</sup>ー。」「ア<sup>ア</sup>フ<sup>ア</sup> フ<sup>ア</sup>ー。」「ア<sup>ア</sup>フ<sup>ア</sup> フ<sup>ア</sup>ン。」について、“三者、品格上の差等、ちっともなし。”と言われた。

※ ※ ※

当県下の、「ノ」に関する複合形の文末詞に、「ネノ」「サノ」「カノ」「カイノ」「ワイノ」「ワノ」などがある。私が「ネノ」例を聞いたのは、南牟婁郡の人からである。(「…………… ネノー。」とあった。)  
「サノ」の実例は、

○ア<sup>ア</sup>レ<sup>ア</sup>モ、ム<sup>ア</sup>カ<sup>ア</sup>シ<sup>ア</sup>カラ<sup>ア</sup> ア<sup>ア</sup>ッ<sup>ア</sup>タ<sup>ア</sup> ン<sup>ア</sup>サ<sup>ア</sup>フ<sup>ア</sup>ー。

あれも(あの集落も)、むかしからあったのよねえ。(老女→藤原)

などである。私は上の例も、南牟婁郡下で聞いた。『全国方言資料』第4巻の「三重県北牟婁郡海山町河内」の条には、

mナナ モー イッケン<sup>1)</sup> イッケン マエ アイサツニ デヨッ  
それは もう 1軒 1軒 おまえ あいさつに 出歩い  
タンサノー  
たものだよねえ。

1) いくぶん口蓋化している。[ke]。

などの「サノ」例が見える。「サノ」は、紀州地方にありがちのものか。

京都府、丹波の北桑田郡方面では、

○ツライ ㄱ。

つらいねえ。

などと、土地ことばの「ノー」がおこなわれている。「アア ㄱ。」などは、「北桑ことば」とも言われており、女性も、これを言っている。北桑田郡の北部には、「ナ」を下品（対等以下用）とし、「ノ」を上品（対等以上用）とする所もあるらしい。所によっては、このように、「ノ」を「ナ」の上位のものとしている。全国諸方に点々ともせよこのような事実が見いだされるならば、これは重要視すべきものである。

京都府下の丹後半島の諸地を歩いてみても、“「ノ」は見さげたことばではない。”とする所がある。とにもかくにも、丹後半島に「ノー」もよくおこなわれている。

○アン ㄱ。

あのね。

○アツイ ㄱ。

暑いねえ。

といったぐあいである。女性も男性に「ノー」を言っている。

舞鶴市に属する、市域東北部の半島海辺では、

○マ<sup>ニ</sup> ショ<sup>ー</sup> イ<sup>ノ</sup>。

“もうおひるにしましょうよ。”

などの言いかたがされており、「ノ」については、人がよくつかう（「ナー」はつかわぬ。）と言っている。また、「ナー」よりはしたしい気もちで「ノ」をつかう。「ノ」と気軽に言う。などとも言われている。

丹波西北辺をかつて歩いた時は、「ノ」が、同等以下に用いられるもののように見えた。

京ことばでは、通常、「アノ ノー。」などの「ノ」はおこなわれていないだろう。旧市内から北郊に出むいて中川郷にはいった時は、

○コ<sup>マ</sup>ッタ<sup>ヤ</sup>ロ<sup>ノ</sup>。

こまっただろうねえ。

などの言いかたを聞くことができた。

※ ※ ※

京都府下の、「ノ」に関する複合形文末詞には、「カイン」などがある。丹後では、「チャーノ」などとある。その一例文は、

○ア<sup>ブ</sup>チャン トコイ イ<sup>キ</sup>ャン<sup>ノ</sup>。

のぶちゃんどこへ行かないかね。（老女→幼孫女）

である。

滋賀県下では、まず、湖西方面に、「ノ」がよく見られる。湖西中部での実例は、

○ア<sup>ツ</sup>イ<sup>ノ</sup>。

暑いねえ。

○イ<sup>ソ</sup>ガ<sup>シ</sup>ー コ<sup>ト</sup>ヤ<sup>ノ</sup>。

いそがしいことだねえ。

などである。

湖西内に、「ノ」の「ノン」も見いだされる。『全国方言資料』第4巻の「滋

「賀県高島郡朽木村」の条には、

*m*マー ワジャー ソー オモテー ヤッターンヤケンドモー  $\left( \begin{matrix} \text{オー} \\ f \end{matrix} \right)$   
 まあ おれは そう 思って やったんだけれども、  
 アノ ジブンデモ マダマダー ナンヤッターノン  
 あの ころでも まだまだ なんだったねえ、

などがある。湖東でも「ノー」がおこなわれており、彦根ことばにも、

○ムチャクチャヤデ ノー。

むちゃくちやだからねえ。

などがある。「ノー」は、上品なことばともされているのか。——老年者においてである。湖北方面にも、「暑い ノー。」などの言いかたがあるらしい。

※ ※ ※

滋賀県下の、「ノ」に関する複合形文末詞は、「カノ」「カイノ」「ワイノ」「ワノ」などである。

「ナ」文末詞の隆盛な近畿のうちにも、存外とも言うてみようか、「ノ」がかなりよく見いだされる。ことに、近畿南部南東部の周辺域や、近畿北部の周辺域に、「ノ」の使用のかなり根づよいものが見られるのは、まったく注目にあたいする。

私は、近畿地方での「ノ」の存立を見るにつけても、日本語の歴史の中での「ノ」文末詞の成立と生息とを、種々に考察することができるように思うものである。こういうさい、「ノ」の用法品位が所々で異なる事実は、別して、重視すべきものである。

#### 十 中部地方の「ノ」ほか

中部地方に、「ノ」文末詞のおこなわれることは、大約さかんである。——といっても、東部域方面になると、事態はいささか変わってくる。

## 福井県

本県下の若狭にも越前にも、「ノ」がさかんである。

若狭は近畿系の地域であり、それだけに、「ナ」文末詞がよくおこなわれてもいるが、他方、「ノ」も、地ことばとして、よく生きている。若狭中部での一例は、

○インキョノ ヨコチャンナ ノー。モー アスパン ユーテ ノー。

隠居のヨコちゃんはねえ。もう遊ばないと言ってねえ。(老女が幼女のヨコちゃんのことを説明する。)

である。女性も、「ノ」を言っている。男女の年輩者たちの「ノー」のよびかけが、おとなしい下降調になることも多い。こういう時は、私などの観察者には、それが、「ノ」の敬語法かな、とも感じられるのである。

越前の広域に、「ノ」のおこなわれることがいちじるしい。

愛宕八郎康隆氏は、かつてその調査経験を、“大桐杉津間のトンネルを越えると、文末詞も、「ナー」から「ノー」になっていく。”と語られた。杉津は、敦賀旧市域の東北方、敦賀湾岸の高地にある。

越前域では、西の平地部と東の山地部とに、あい劣らず、「ノ」がよくおこなわれている。福井市あたりの例は、

○ハヨー イーネー ノー。

早く言いなさいよ。(大女)

○ソヤクライ ノ。

そうだとも。(強動的) (中男)

などである。「ノー」を友だちや目下に言うとともに、目上や年長者にも言っている。東部山地域の勝山あたりのこととしては、ナ行音文末詞に「ノ」→「ナ」→「ネ」の順序の優劣関係が認められるという。(愛宕八郎康隆氏教示)ただし、「ノ」の品位は、「ネ」よりも低いようである。愛宕氏は、「ノ」がと

くに女性によく用いられると言われる。

北陸地方も、ことに福井県下などであると、その方言状態が、近畿方言状態に類接することが多い。と、一般的には考えられるものの、「ノ」文末詞の、当地方での盛行などを見ていると、やはり、木ノ芽峠を越えての北陸は、近畿一般の状態からは、しぜん、なにほどか距ったものであることが思われる。

ここにこのように「ノ」がさかんであることと、近畿の、たとえば丹波にしても、北丹波のうちで、人が、「ナ」よりも「ノ」のほうをよいことばとしているのなどは、合わせ観察してみても、おもしろい事実のように考えられる。

越前の平地部内に、「ノー」の変じた「ノン」があるのかもしれない。

※ ※ ※

本県下の複合形に、まず、若狭中部の「ナノ」がある。永江秀雄氏の教示によるのに、旧瓜生村には、

そうやナノ。

一緒やナノ。

などの言いかたがあるという。(まれに用いられるものよしである。)

「イノ」というのがあり、「エノ」というのがある。これらは若狭に見いだされがちか。

「ヨノ」というのがある。

「ゾノ」があり「ゼノ」がある。

愛宕八郎康隆氏が、「勝山方言の文末助詞について」の題下に発表せられたプリントには、「ノ」に関する複合形「ザノー」「ゾノー」「カノ」「カノー」「カイノ」「カイノー」「ケーノー」「ワノ」「ワノー」「ガノ」「トノー」「デノ」「デノー」があげられている。

「カノー」「カイノ」「ケーノー」などは、県下に広くおこなわれている。「ケーノー」の言いかたもある。

若狭に、「カエノ」もある。

「トイノ」がある。(若狭に、「トエノ」がある。)

「ワノ」がよくおこなわれている。

○アソ<sup>ン</sup>デバ<sup>ツ</sup>ッカ イヤ<sup>ワ</sup>ノ。

遊んでばかりいやですよ。(母→娘)

(佐藤俊郎氏教示)

は、福井方面での一例である。「ワノー」「ワーノ」の言いかたもある。

『全国方言資料』第3巻の「福井県遠敷郡名田庄村納田終」の条に見られる「ワーノ」の例は、

f オバー シマーシテ (f ハイ) ムラウワーノ  
おばあさん、しまわ<sup>ッ</sup>せて もらいますよ。

1) 「帰らせて」の意。

などである。

「ワイノー」があり、「ウェノー」がある。

## 石川県

本県下の加賀にも能登にも、「ノ」がよく認められる。ただし、どちらかといえ、ば、「ノ」は、年輩者のがわに多いのかもしれない。

一般には、「ノ」を、したしい相手とか目下のものとかにつかっているようか。加賀東南部では、“ふつう以下には「ノー」。”、“ていねいに言うと「ナー」。”などと説明する人がある。なるほど、私がしきりにカード書きをするのを見て、一老婆が、

○ス<sup>キ</sup>ヤ ナー。

そんなにして書くのがほんとにすきなんだねえ。

と言ったのなどは、まさに、うちとけた気分での「ノ」を見せたものであろう。ではあるが、一方で、この地の中年女性が、

○マ<sup>タ</sup> ゴザ<sup>ラ</sup>ッシャ<sup>レ</sup> ナー。

またいらっしゃいねえ。

などと言っている。こういう、音高きわだたせた「ノー」は、「ゴザラッシュャレ」の言いかたにあい応じているのからも知られるとおり、かなりよいことばとも見られるようである。

能登半島西岸の富来町での一週間調査のさい、私が聞きとったものに、

○アツイ ノー。(気のはらぬ人や目下に)

○アツイ ネー。(若い人のことば)

○アツイ ナー。(男の人のことば。女の人もヤンチャナ人は言う。)

というような、土地人の説明がある。このカードに、検閲の識者のしるされた注は、下記のとおりでである。

ノー 同僚にも使用する

ネー 目上の人に(男女共通)

ナー 男の方が多いが女も使ふ

富来町での「ノ」例をあげるなら、

○人間<sup>チ</sup>ュー モノワ、いつまで生きていても、シン<sup>タイ</sup>チュー コトノ  
ナイ<sup>モン</sup> ノ。

…………死にたいということのないものね。(老女間)

などがある。

「ノー」に相当するかに思われる「ニョー」があるか。『全国方言資料』第3巻の「石川県石川郡白峰村白峰」の条に、

mオノコヤッテ ヨカッタニョー ホントニ

男の子で よかったねえ、ほんとうに。

と見える。

「ノ」の変じた「ノン」がある。長岡博男氏の「金沢市地方の方言『に』の一考察」(『方言』第三巻第一号)に、

「な」は能登方言に於ても金沢同様野卑な使用法であり「な」或は「<sup>⊙</sup>の」及び「<sup>⊙</sup>のん」<sup>⊙</sup>として使用せられている。

とある。岩井隆盛氏も、「対人関係の辞的形式——石川方言を例として——」

(石川国語方言学会 二月会報)で、

「面白い」「面白いです」

オモシロイナ オモシロイネ

オモシロイノ オモシロイノン

の記述をしていられる。能登にも「ノン」があるか。

「ノ」に関連する「ノイ」も認められる。『白峰村史』下巻の「方言」の条(岩井隆盛氏)に、

乙 はい、ナカナカ(とても)、ノー(なく)てノイ(ね)、心配シチャリ(して、い)ましたら、ちょうど、よいのを、ショワして下さって、モラウことになりましたデ(ので)ゴザッチャ(ございます)。

との記述が見られる。私が、さきに述べた能登半島富来の調査にしたがった時に聞きとめた、“西浦のことば”には、

○ショーナ アイノー。

“よわったねえ。”(“あら、たいへんねえ。”)

というのがある。ここに出ている「ノイ」も、やはり、「ノー」の「ノイ」であろうか。とすると、おなじ「ノ」文末詞が、二つ、かさね用いられたことになる。——「ノイ」という言いかたができる、この独自性がはっきりとしてくるので、人はしげんに、そこへ、ただの「ノー」をも累加し得たのか。“西浦のことば”に、「アイネー」というのもあるという。——“だめおし”だそうである。“強意”との説明もあった。「ノイネー」に比肩せられる「ノイノー」は、おそらく、「ノー」の「ノイ」と、ただの「ノー」との複合せしめられたものであろう。

ここで私は、一つの解明に達した。——と言いたいことがある。白峰で聞いた別辞に「ノイノー。」というのがある、かねて私は、これの語源に心をひそめてきた。今にして思えば、二すじ三すじと、あらぬ方向にふみまよっていたようである。別辞の「ノイノー。」は、上の西浦のことばに明らかな「ノイノ」ではないか。よびかけことばの特定成分(文末詞)「ノ

「イノー」は、これを単独に用いて、いっこうにさしつかえがない。(ものによっては、単独に用いる習性のものが、文末詞化させられてもいる)

※ ※ ※

上の「ノイノー」「ノイナー」は、すでに「ノ」に関する複合形の文末詞とされるものである。本県下には、異色ある複合形が、種々に認められる。つぎの「ガノ」も、おもしろいものではないか。

○オバン。ソガシテ イク ガノ。

おばさん。そんなにして行くの？ (老女問)

これの「ガノ」の「ガ」も、他地方でいえば、「の」である。(準体助詞「ガ」である。)[「の」の意味をとれば、上文の文末詞は、「のノ」となる。それが「ガノ」とあるので、両分子のおれあいもよいことなのであろう。

本県下の複合形の諸相としては、まず、「イノ」(「イ」と「ノ」との複合ということであって、「ノ」は長呼になることもある)「カノ」(「ケアーノー」「ケーノ」「ケノ)「カイン」「ワノ」「ワイノ」(ウェノ)などがあげられる。

つぎに、「シノ」があげられるか。『全国方言資料』第3巻の「石川県輪島市名舟町」の条に、

fリエノ トートワ オメンサマ ワガ キョーデーノ チー  
利兵衛の おやじさんは、あなた、 自分の 妹の 乳房を  
ニギッタ チュガヤシノ  
にぎった というではありませんか。

とある。この「シノ」の「シ」は、なに起源のものか。——やはり、接続助詞の「し」が考えられるのではなからうか。

「ケノ」という複合形文末詞を認めてよいか。『石川県方言彙集』に、

あのけのー 発語ニシテ意味ヲ強ムル場合ニ用フ 珠

とある。能登半島東北部、旧珠洲郡のことばであるとされている。この「ケノ」は、どう考えたらよいものであろう。下の「ノ」は、上来、問題にしてきた「ノ」文末詞とされよう。上の「ケ」は、「これ」という代名詞を思わせる。

おそらく、「これ！」と指示する気もちが、「ケ」文末詞を成立させたのであろう。能登半島東北部で、「ソナ コト セントカッシ ケ。」(そんなことしないでおきなさいな。)などとも言っている。こういう「ケ」は、「これ」起源の新生文末詞であることが考えやすかろう。こうした「ケ」と「ノ」との複合形ができているということか。

「ワケノ」という複合形もある。『全国方言資料』第8巻の「石川県輪島市海士町」の条に、

f…………… ワカランナンダ ワケノ  
わからなかった のですよ。

fアエユコトモ アッタワケ<sup>4)</sup>ノー 4)「ワケ」は「ハケ」の転。  
ああいふことも ありましたねえ。

などとある。「ワケノ」の「ワ」は、例の東京弁にもいちじるしい「ワ」であろう。「ケ」が、「これ」系の文末詞とされるか。それらと「ノ」との新複合形である。——いかにも自在な複合である。

自在といえば、「ノワエノー」というものもある。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条に、

mアエ ノワエノー<sup>1)</sup> ソシテ オドッタワイヨ  
そして 踊ったよ、

1) 同意を示す間投詞。

と見えている。「ノワエノー」は、「ノ」と「ワエ」と「ノー」との複合ではないか。(「ワエ」は「ワイ」に相当しよう。)この「ノワエノー」では、頭・尾に「ノ」がある。同物の重複使用がなされているのか。そういえば、つぎの、

fアッコ エラーニャノケン オーッピァ サザエーガ トラレンゲー  
あそこへ はいらなければねえ、あわびや さざえが とれないので  
ゲーノ

すよ、

の例も、「ノンケン」が、「ノン」と「ノ」との、頭尾重複使用になっている。

この例は、『全国方言資料』第8巻の「石川県輪島市海士町」の条に見えるものである。おなじく「海士町」の条に、

フムカシドンケーノ<sup>1)</sup> (アー) ウニョーノ ゴーゾー チューガ  
昔はねえ、 (m) 鵜入の ゴーゾー<sup>2)</sup> というのが

アッテ

あって、

2) 地名。

というのも見える。「ノンケーノ」が「ドンケーノ」になっている。

1) 「ドンケーノ」は「ノンケーノ」の転。古くは「ノーキヤノ」と言ったという。

とのことである。「ドンケーノ」とは、ずいぶん変わった文末詞形ができたものではある。

## 富山県

富山県下にも、ほぼ全般的に、「ノ」が認められる。富山市近郊の例は、

○スマン アー。

すまないね。

○ツンチ コト ナー ユワン アー。

そんなことはなんにも言わないねえ。 (小学生六男→四男)

などである。

「ノ」は、男性どうしの間に、「ネ」は、女性どうしの間に、ということもあるか。富山市近郊では、「ノ」を“女の子は言わぬ。”としたりしている。

愛宕八郎康隆氏の調査では、県西南隅あたりに、「ノイ」が見いだされている。

○ハヤイ アイ。(参考、○ハヤイ アー。)

○イヤ ホンマニ ノイ。

などは、氏から教示されたものである。

## ※ ※ ※

県下の「ノ」に関する複合形の文末詞には、「カノ」「カイン」「ゲノ（かいの）」「ガノ」「ガイン」「ワノ」などがある。

○ドコイ イッタロー カイン。

どこへ行っただろうかなあ。（自問）

は、「カイン」の一例である。

## 新潟県

新潟県下では、「ノ」のおこなわれることがつよい。越後と佐渡とを通じて、である。

越後で、糸魚川方面から北越の端部まで、「ノ」がよくおこなわれている。もっとも、北越端部では、「サムイ ノー。」について、“女はつかわぬ。男の中年以上の人がつかう。”などと説明する人がある。——「サムイ チー。」は、男女に多くおこなわれ、「サムイ ノー。」はすくない、とも言われている。

佐渡に、「ノー」がさかんであるか。佐渡から広島に遊学した学生が、かつて、“佐渡は「ノーノー」なので、広島に来てなつかしく思った。”と語った。同輩にも目上にも「ノ」をつかうらしい。

越後中部域は、わけても、「ノー」を本来の土地ことばとしているらしい所か。女性間の通用語でもあるらしい。長岡市内でのこと、人は、私にも、“長岡の ことばは、まあ こんな ものです ノー。”と語った。「ていねい」の気もちで、私に、人がよく「ノー」を発言してくれた。長岡市の町はずれで、途上、中年の女性が、知友押見虎三二氏に、「ノ」文末詞を連発して、しみりと話していたのが、私の印象に鮮明である。押見氏は言われた。

○センセ、サムイ ノー。

先生、さむいですね。（中男→押見氏）

との「ノー」には、「ネー」ではあらわせぬ敬意がふくまれている、と。小林

存氏は、『越後方言七十五年』で、つぎのように述べていられる。

三条市，長岡市，下越でネといふ場合をノといふ，「柿買はんかノ」といふのは立派な敬語である。

私も，つぎの一例をつけくわえておきたい。

○戦災 うけて，バタット 行たんじゃ，ドーニモ ナデン ヨノ。

……………，どうにもならないよねえ。

人は，“「ノ」をよくつける。かしこまって言う。ていねいなことば。”と説明する。長岡でのことである。

中越のそとでも，“ノ”の言いかたを，ていねいに人にもものを言う時のものとしていたりすることが，すくなくないようである。こういう古来的なもの  
の残留とともに，“ノ”の用法には，同輩や目下へのことばなどとする用法もあるのだらう。野口幸雄氏は，新潟県白根市大字西酒屋の方言について，

対称代名詞，「オメェサン」に対しては「ネ」であり，「オメェ」には「ノ」，「ナ」に対しては「ナ」を用いる。

とされる。（『日本方言研究会第14回研究発表会発表原稿集』〈昭和47年5月〉に寄せられた「西酒屋方言の待遇表現体系」による。）渋谷玲子氏の「三光方言の待遇表現」（『国文学会誌』五号 昭和36年3月）には，

一方家柄が中位の家では親子兄弟間でオメが普通であり，一般に“あそこはノだ”というふうに見られている。

との記事が見いだされる。

高島康吉氏は，「サロ弁について」（『言語生活』第四十四号 昭和30年5月）の中で，

面喰ったのは女の子が「アノノ先生オレやってみたけろだちかんらった」と答えた時である。

と述べていられる。

※ ※ ※

本県下の「ノ」に関する複合形文末詞には，「ヨノ」「サノ」「ゼノ」「カノ」

「ガノ」「テノ」「モンノ」「ワノ」などがある。

○マ<sup>ダ</sup> 下<sup>レ</sup>ル ワ<sup>ア</sup>ー。

は、佐渡での「ワノ」例である。——これは、昭和31年8月16日の放送で聞かれたものであり、男性二人間のものであった。

新潟県下に、「と言やあ」起源の「チャ」が、よくおこなわれている。これと「ノ」とのむすびあった言いかたもあり、たとえば、「新潟県佐渡郡羽茂村大崎」(『全国方言資料』第8巻)では、

fイーヨノ コトニ ナル モンダッチャノー

結構な ことに なる ものですね。

などと言っている。(「チャ」の前に促音のあるのが注意される。)

北陸地方に、「ノ」ことばの生活の地脈がよく認められる。中部地方の南がわはどうであろう。

### 岐阜県

本県下にも、概略、「ノ」がよく見られる。土田吉左衛門氏は、

のー(助) 関東方面の「ね」、関西方面の「な」に相当する感動の助詞。

- ①やわからに相手の同意を求める気持をあらわす。(ええ天気じゃ——。), ②念を押す時につかう。(ええ——。) ③親しみをあらわす。(おんさもいかんかい——。) ④間投語としてつかう。(それで——。おりが——。こいつたら——。) ⑤命令・希望をあらわす。(おんさもゆきやい——。)

との記述をしていられる。(『飛驒のことば』)

美濃にも、西部中部東部にわたって、かなりよく「ノ」が見られる。中部の北寄りでの例は、

○ホ<sup>ン</sup> トシヨリ<sup>ノ</sup> ヒトヤ シ<sup>ア</sup>ー。

ごく年寄りの人だねえ。

などである。——上例は、年寄りではない人が、土地の「ノ」ことばについて説明したものである。

「ンアー」は「ニアー」にあたるものか。

「ノー」は、ふつう品位のことばとしておこなわれていよう。

昭和三十六年に多治見市を歩いた時は、町を行く娘さんたちも、「アノ アー。」(あのねえ。)などと、しきりに「ノー」を言っていた。若い男子も、「ノー」を言っていた。

『東濃方言集』には、

語尾 = 用フ  
のー  
おれがのー あののー

とあり、また、

のい 語尾 = 附す あののい

とある。『岐阜県方言集成』にも、土岐郡の「のい」が見え、同郡の、

のいん〔感〕 ねえ。

も見える。「ノン」形も、いくらかは見いだされるのか。

※ ※ ※

本県下での「ノ」に関する複合形の文末詞には、「ヨノ」「カノ」「カイノ」「ワイノ」「ワノ」などがある。

○ヨー キトクレタ ヨアー。

よく来ておくれたわねえ。

は、高山市で聞いた、「ヨノ」の一例である。

## 愛知県

本県下でもまた、尾張・三河の両方に、「ノ」のおこなわれているのが見られる。

尾張の東西に「ノー」が見られて、『南知多方言集』では、

「ノー」 男女とも用ひ、あまり上品な言ひ方ではない。

などと説かれている。

三河全域に、「ノ」がさかんであるか。渥美半島での例は、

○ドーダイ アー。オンチア シューモ オルガ。

どうだね。女の人たちもおるが。(出席者に意見を求める。)

などである。三河出身の磯貝英夫氏は、「オッカサン」を上層のことばとし、「オッカー」を下層のことばとせられる。そうして、文末詞の「ノー」をわるいことばとせられる。といっても、これは氏が、方言人として、その郷土感情を代弁せられたまでである。氏に、“すこし上の階層は「ノーノー」ことばをつかわぬ。”とのお話しもあった。

三河一円に、「ノン」がさかんである。渥美半島例は、

○ヤットデ キタ アン。

“しばらくだったね。”“久しぶりに来たね。”

○アノ アン。

あのねえ。

などである。人は、“上に対しては「ノン」か「ノー」を言う。”と言ったりしている。(「アノ アン。」がよいことばで、「アノ アー。」がそのつぎによいことばで、「アノ アー。」がふつうのことばであるという。)豊橋方面でも、「アノ アン。」(あのね。)ソイデ アン。」(それでね。)などと言っている。高瀬徳雄氏は、「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」との題で寄せられたご手稿の中で、

「ノン」がついていることによって、何となく親しみのこもったやわらかい感じがする。

と述べていられる。三河の人々は、多く、「ノン」を「やわらかいことば」としているようである。——しぜん、目上の人には「ノン」をつかいがちなのであろう。

○エライ モン アン。

えらいものだねえ。(漁師がからだをつかうことについて言う。)

○ホヤ ナンダ ノーイ。

それはあれですね。(発話的)

は、三河西辺の刈谷付近のことばとして、清瀬良一氏の教示せられたものである。ここに、「ノン」と「ノーイ」との併存しているのが注意される。

刈谷にもある「ノン」は、さらに西の尾張にも、いくらかは見いだされるのか。『NHK国語講座 方言の旅』に「愛知」を担当された芥子川律治氏は、旧藩士のことばとして、

「おかげで丈夫でナン。しじゅう一日も弱りこなしで、ひなたぼっこしとるで赤っかい顔しとるわノン。」

をあげていられる。

「ノン」が「ノンシ」とともにおこなわれもしている三河では、「ノンシ」起源の「ノン」も、おこっているかもしれない。が、「ノー」からの「ノン」が通常なのではないか。渥美半島一地での一週間調査では、私は、「アツイアン。」(暑いねえ。)などという「ノン」が、いかにも「ノー」からのもののように実感された。三河方面は、いったいに、「カ」文末詞も「カン」と発音し、「ゾ」文末詞も「ゾン」と発音するというような所からである。「ノー」は「ノン」になりやすい状況なのではなかろうか。高瀬徳雄氏も、上引のご手稿で、「ノン」を“一応単純感声的なものとみる。”としていられる。

岡崎市域には、「ノイ」があるのか。(さきの清瀬氏の例も思いあわされる。)黒田鉦一氏の「愛知県の方言に就て」という二枚のプリント(年月不詳)には、岡崎の「あのノイ」があげられている。三河奥にもある。

※ ※ ※

本県下の「ノ」に関する複合形文末詞を見る。

三河東北奥の田口方面では、「ソー サノー。」(そうさね。)などの言いかたが聞かれる。

ほかの複合形には、「カノ」「カノン」「ワノン」などがある。

三河の、

○ナカナカ ムツカシー ダノ。

それはなかなかむずかしいねえ。

などの言いかたも、複合形「ダノ」のはたらきを認めしめるのだろうか。高瀬氏はさきのご手稿で、つぎの用例を見せていられる。

○ハンニチフラニャーイーダンノ。

半日降らなきゃいいんだがねえ。

氏は、「ノン」だけを文末詞と見ていられるのだろうか。「～ダンノン」は「～ダニノン」かと考えられる。

### 静岡県

本県下にも、広く「ノ」が見られる。

遠江地方に、まず「ノ」がよく見られる。浜名湖東部の一例は、「ソーダノ。」(そうだね。)である。この方面に、「ヨビカケル コトバ」の「ナー」「ネー」「ノー」があり、かつ、「ノーウェー」のあるのが注意される。

○オメー ノーウェー。

あんた、ねえ。

○ノーウェー。オメー。

ねえ。あんた。

などと言っている。

かつての御前崎方面での調査では、男女老若ともに、「ノー」をつかうのが見られた。おとなの女どうしも、「ノー」をふつうにつかっている。

○ソコイ ノー。

そこへね。

は、老女の、私に対する、説明のことばである。

○ソーダ ノ。

そうですね。

これは、中年男性の、私に対する発言である。（“「ソーダ ノ。」と言っても意味はおなじ。”ともあった。）

駿河方面も、「ノー」をふつうに見せるようである。『静岡県方言辞典』も、早く「ノー」を記載している。望月誼三氏が、「静岡」（『方言の旅』）の条に記述していただけるのは、

（静岡市の在方の農家の人たちの話し）

男「マツタク コトジャー ウリン ヤスイッケノー。」——全くことしはうりが 安かったねー。

というのがあつた。かつて私は、藤枝の青年男女が「アー」を言うのを聞き、その青女が「ノーィ」を言うのを聞いた。——その言語生活一般が、東京語的でありつつも、文末詞はこのようであつたのが、いたく私の心をひいた。

伊豆半島にも「ノー」がある。

○ソーダ ー。

そうだねえ。

などと言っている。

本県下に「ノン」もある。『静岡県方言辞典』には、

あののん 今日のはのん 寒いで 家に ゐる。

などとある。今泉忠義氏は、「東三河と西浜名」（『方言』第七卷第八号 昭和12年10月）で、

三河の「ノンコトバ」で有名なのだが、西浜名では遠州だけれどもやはり使つてゐる。全く、遠州でも浜名の西は三河と殆ど変りはないらしい。

と述べていられる。

新居町でも、老人が「ソーダ ノン。」（そうですねえ。）などと言っているという。

本県下での「ノ」に関する複合形には、なお、「カノ」「ワイノ」などがある。

### 長野県

本県下には、南北に「ノ」が見わたされる。

南の下伊那地方に「ノ」がよくおこなわれており、青木千代吉氏の『信州方言読本 語法篇』（信濃教育出版部 昭和23年10月）には、

下伊那地方では、

あののー，行ってみたらのー（平谷）

それじゃのー，今やるでのー（伊賀良）

というように、「のー」をよく用います。これは、「な」にくらべて幾分の丁寧さがあるようでありまして、他の地域の「な」と「ね」の関係が、この地では、「な」と「の」との対立になっているかと思われま

とある。

かつて私は、松本市内で、“松本外の農家では、むかしはよく「ノー」を言った。”という説明を聞いた。なおその老男の人は、“「ノー」はいいことばではない。”と言っていた。県下の北西辺での調査例は、

○アンダッテ ログジャ ネー ノー。

飲んだって毒じゃないねえ。（小学生四男→老女）

などである。このほうでは、「ノー」をしたしい人につかっているふうである。女性もつかっている。

県北部地方の広くに、「ノ」がよくおこなわれているらしい。

「ノイ」もある。佐伯隆治氏は、「信州北部方言語法（上）」（『国語研究』第十卷第七号 昭和17年8月）で、

暗イノイ。

面白カッタノイ。

などの例をあげてられる。青木千代吉氏は、前掲の書で、

木曾の神坂村へ参りますと、  
 たためひーてのい（畳敷いてね）  
 （他例略）

のように、「のい」が用いられます。  
 としるしていただける。氏は、「親愛感のこもった言い方でありまして」と述べていただける。

※ ※ ※

本県下での、「ノ」に関する複合形の文末詞には、「ワノ」などが見いだされる。

「カエノイ」もある。

中部地方域も、ここまでたどってきて、「ノ」に関する複合形の種別のすくなくなってきたのが思われる。

## 山梨県

本県下に関しては、今、私は、記述すべきものを持たない。

中部地方では、大まかに見て、北陸四県に、「ノ」の生息のよりいぢるしいものがある。関西地方とも関連することが比較的多い北陸地方に、「ノ」のよりつよいものが見わたされるのは、興味ぶかいことである。

東部の山梨県下に、「ノ」があまりおこなわれていないらしいのは、東の関東地方での「ノ」の不活発の状況につながるものと理解してよからうか。

中部地方に「ノ」はさかんであると、はじめに概言したが、内部の事情は単純ではないことが認められる。

## 八 関東地方の「ノ」ほか

関東地方は、全国でも「ノ」の勢力のよわい所である。関東域は、おそらく、

「ネ」を基質的なものとする所なのであろう。

大橋勝男氏の『関東地方方言事象分布図』第二巻「表現法篇」（桜楓社昭和51年2月）を見て、Map. 14「ソーダ ネー。」（「ねえ」相当の文末詞）その他の図に、「ノ」分布のすくないことが明らかである。——群馬県下（つづいて、関連する埼玉県北辺にも）に、やや、分布の目だたしいものがあり、他には、千葉県下にいくらかの分布が見いだされる程度である。

以下に、私自身の整理の結果を記述したい。

神奈川県下では、私自身の、かかげるべき「ノ」例がない。県西部の一地では、「ノ」は言わないとの、一定的な答えを得ている。（ただし、助詞「の」系と思われる、問いや説明の「ノ」のおこなわれることは別である。）

ところで、『神奈川県方言辞典』には、

ㄱ（助）ねえ。文末尾・文節末尾につける。「そーだ——」

⑩足上曾我・金田・寄・三保・福沢・山北 | 足下片浦。

との記述が見え、分布地点の若干があげられている。

東京都下の伊豆諸島は、いささか事情を異にしているようである。かつて大島の人から聞き得たところによると、岡田村・元村などでは、

○ハヤイ ㄱ。

お早う。

などと言われている。ただし、教示者は、「ノー」について、“ときどき、年寄りが言う。男女ともに。若い人は「ノー」を言わぬ。”と説明してくれた。（「ハヤイ ㄱ。」よりも「ハヤイ ナー。」がふつうの言いかたのようである。）

八丈島方言では、「ノ」がよくおこなわれているようである。古くは、望月誼三氏が、これを調査してられるようである。私は、八丈島出身の女性から、“男女長幼、「ノー」をつかう。”との説明を聞いたことがある。飯豊毅一氏は、

「八丈島方言の語法」(国立国語研究所論集1『ことばの研究』昭和34年2月)で、

ウノノオ オジャレ ノオ (あのね、いらっしゃいね)。

などの例をあげていられ、「ノオは相手に同感を求める意味が強い。」と述べていられる。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町中之郷」の条には、

f チーット ウレドア ヒトワノ

すこし そのような 人はね。

などがある。

高津勉氏の『くろしおの子(青ガ島の生活と記録)』(新日本教育協会 昭和30年8月)にも、

雨はほんとに<sup>(いじわるだ)</sup>しゃっつらだのう。

などがある。

八丈島方言に、「ノー」の変形「ノア」もあるのか。早く『八丈島教育会報』第二号の「口語法取調」に、

ヤレ〜残念ダノァー

(ヤレ〜残念ダ)

の記事が見える。望月誼三氏も、「ノア」をとらえていられる。国学院大学方言研究会の『方言誌』第一集(八丈島方言)〈丸尾芳男氏 昭和5年7・8・9月八丈島中之郷村に於て調査〉にも、

ノァ (念を押すに用ゐる)

とある。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町中之郷」の条にも、

m ドアニ シゴトガ ノァ

それに 仕事が ね、

などがある。なお、「八丈町中之郷」の条には、「ノン」も見える。

m メンナ プッテ ミコアダンノン

みんな ついて 歩いたからねえ。

などがある。

八丈島方言では、「カノ」の言いかたもよくなされているようである。

○ $\overline{\text{ア}}$ デン  $\overline{\text{シ}}$ タラバ  $\overline{\text{ヨ}}$ カ $\overline{\text{ロ}}$  カ $\overline{\text{ノ}}$ ー。

どんなにしたらばいいだろうかねえ。

など。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町大賀郷」の条には、

*m*ウレガ タノシミダカノー

あれが 楽しみなのかねえ、

などとある。

「ノー」に関する複合形には、なお、八丈島に、「ガノ」「モノノ」などもおこなわれている。

*m*ヨク オジャローモノノー

よう ございましたのにねえ。

は、「八丈町大賀郷」の「モノノ」の例である。

ところで、東京都も、本土部のほうとなると、単純感声ふうの「ノ」を見ることがない。問いや説明の言いかたでの、「の」助詞系の「ノ」文末詞を見せることはさかんであるけれども。

九州地方や関西地方のうちでは、単純感声ふうの「ノ」と、「の」助詞系文末詞の「ノ」とを見わけるのがむずかしいような事例に接することがすくなくない。が、関東一般では、両系の「ノ」文末詞の見わけ・受けとりわけに、そのような困難はほとんどないありさまである。

千葉県下は、大橋氏の分布図も語るとおり、なにほどかの「ノ」（感声ふうの文末詞）を見せる所である。房総半島南辺の旧九重村に関しては、大岩正伸氏の、

ノーは同感を期待する場合に使われる。

との記述が見える。（国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』所収「千葉県館山市竹原（旧九重村）」）

『全国方言資料』第2巻の「千葉県安房郡富崎村布良」の条には、

f モツテキタラ メガネサ クツツーチマツテノー

持って来たら めがねに くっついてしまつてねえ、

などというのが見える。

私が、安房郡を北にはずれたばかりという、君津郡南辺での一地を調査したさいには、土地っ子の、「ノー」は言わないという説明があり、

○ソ<sup>ー</sup>ダ ノー。

そうだねえ。

は、館山市「なご」のことばだとの説明があった。別人からは、“房州北条で、ことばのしりに「ノー」をつける。「ソ<sup>ー</sup>ダ ノー。」「ヨ<sup>ー</sup>ダ ノー。」と言う。”などとの教示が得られた。千葉県下も、安房は、「ノ」に関する、問題の地域のようなのである。

房州の東北にあたる、上総南部の、太平洋がわの一区域も、また、「ノ」の地域として注目されるようである。大橋氏の図にも、このことが明らかである。私がこの地域で得た例の一つは、

○ズイブン ハヤイ ノー。

ずいぶん早いねえ。

である。（「ノー」はほんの一部の人がつけるばかり。年寄りがつける。”という。）

千葉県銚子でも、私は、

○ソ<sup>ッ</sup>テ ノー。

“それでね。”

などを聞き得ている。ただし、人は、“むかし、川口のはずれの漁師町でよく言った。今はあまりつかわぬ。ほんとうの昔のことば。”と説明してくれた。

『全国方言辞典』の「補遺篇」にも、千葉県下の「ノー」の記事が見える。県東北域内にも、なにほどかの「ノ」が見られるのであろう。

埼玉県下では、群馬県境近くに、

○ホン<sup>ー</sup>ネー<sup>ー</sup>。

はずかしいねえ。

などの言いかたが見いだされる。

群馬県下は、関東中、なかんずくよく、「ノ」を見せる所か。早く、『全国方言集』も、群馬県に関して、

ノ<sup>ー</sup> 語尾に付す(ネ<sup>ー</sup>)と同じ、

の記事を見せている。

群馬国語文化研究所の『季刊 国語』(昭和22年冬季号)には、

○ソーダ<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup> (北甘楽, 多野, 碓氷, 群馬, 勢多の各部, 長上に用う)との記載がある。

山田修氏編『きご先生とすりばち学校』には、

ご苦労さんだったのう

などのことばづかいが出ている。

私が前橋市東北郊で調査し得た事例は、

○何々が <sup>オー</sup>カンベ<sup>ー</sup>。オ<sup>イ</sup>ー<sup>ン</sup>ダンベ<sup>ー</sup>。

何々が多いんだらうねえ。多いんだらうねえ。

○カ<sup>ネ</sup>モチダカン<sup>ー</sup>。

金持ちだからねえ。

などである。

○アリ<sup>ガ</sup>ト<sup>ー</sup> <sup>ノ</sup>。

ありがとうね。

は、女性の言である。——この人は、“「ノ」を「ネ」のかわりに言う。”と説明してくれた。

井口実氏の「上州言葉の『ノオ』と『ナア』」(『言語生活』第二十六号 昭和28年11月)には、

群馬県碓氷郡岩野谷村では(中略)すべて両親または年長者に対しては「ノオ」あるいは強く短く発音される「ノ」を使用する。これが兄弟・目下・友達となると、(中略)などと「ナア」あるいは強く短く発音される「ナ」を用い、身分関係をはっきり見せている。

とある。都丸九十九氏編の『村のことば』にも、

ノウ　ねえ。おもに目上に使う。女の人ほだいたい「ノウ」を使う。

とある。

私が、前橋市東北郊で得た、「ノ」に関する複合形文末詞には、「イノ」「カノ」などがある。

○アーダ　イ<sup>ノ</sup>アー。

あれだよねえ。

は、「イノ」の一例である。

栃木県下は、「ノ」のおこなわれない所か。ところで私は、一度、矢板町で、

○サイキン　<sup>ネ</sup>アー。

最近ないねえ。

との言いかたを聞いたことがある。

茨城県一般にもまた、「ノ」がない。

関東地方に、問いや説明の、「の」助詞系の「ノ」文末詞のさかんであることには、すでに言及した。——これがこのようにさかんであるのは、他地方にくらべて、目だたいいことでもあろう。このような状況のもとで、一方の感声系の「ノ」文末詞のごくすくないことが、また異常にきわだつたのである。

「何々だから ヨー。」などの「ヨ

下のものにつかうとする「フー」の用語気分に似たものではないか、と。

### 九 東北地方の「ノ」ほか

つづいて、東北地方である。この地方もまた、関東地方につづき、「ノ」を見せることが、すくなく、よわい。

福島県下については、今、二つの事例をあげることができるばかりである。

『会津方言集（増訂版）』に、

ノー（助） 感歎的なもので「ね」と同じ。「エッショニノー」（一しよにね）

とある。

つぎに、『週刊朝日』の昭和11年5月17日号に、福島県相馬郡松ヶ江村のことば、

その辺の抜け目はねえだ、ちやんと控へてあるだて、後は運ぶばつかしだ、頼むでのを！

というのが見えている。「のを」とあるが、これは、「ノ」文末詞ととってよいものであるか。もっともこれは、ただちに、当地のなまの方言事象としてよいものかどうか、うたがいが持たれもする。

総体的には、福島県下は、「ノ」の地域ではなさそうである。関東東北部域とのつづきのよさが、ここに認められる。

宮城県下もまた、「ノ」のおこなわれることのまれな地域のようなのである。

ところで私は、かつて、県南の旧白石町で、

○イショ タタンデ ク[ü]ナイン ヌ[ü]。

着ものをたたんでくださいな（おくれな）。

などというのを聞いた。「ヌ」を文末詞とすることには、難がなかろう。とはいいながら、「ヌ」がどういふものであるのか、私にはよくわからない。（“女の子たちやむすめさん”にありがちのことばか。）

東北地方の中で、ひとりきわだって「ノ」をよく示すのは、山形県下である。庄内地方で、私どもは、「ノ」文末詞のさかんなおこなわれようを見ることができる。男女老若に「ノ」があるとしてよかろう。私は、一中学生男子に道案内されて、「アー」を聞きつづけたし、また、宿に着いても、お手つだいの人からしきりに「アー」と言いかけられた。——藤島町でのことである。

酒田市での「ノ」例をあげるなら、

○ユーシュエダ アー。

優秀だねえ。

というのがある。——これは中年女性のほめことばである。

○アッチャイ イテレ ノ。

あちらへ行ってるね。

これは、男先生が子どもに言うことばである。

酒田市に属する、日本海上の飛島でも、「ノ」文末詞がおこなわれている。

庄内、大山町の「ノ」例は、

○キョーワ サッビ[i]ー ノ。

きょうはさむいねえ。

○サム[ü]ガンス[ü] ノ。

さむうござんすねえ。

などである。

下例は、庄内南端部のものである。

○ヨグ ゴザッタ チャノ。

よくいらしたわねえ。

○モッケデ ガンス[ü] ノ。

気のどくでござんすねえ。

庄内に、「ガンス」と「ノ」とのつれあった表現が聞かれるにつけても、私などは、いきおい、中国山陽地方とこの庄内地方との、方言地盤の、なんら

かの類似を思わせられる。類似と言っては言いすぎかもしれないけれども、東西両方の地域が、ともに「ガンス」と「ノー」との好個のつれあいを見せているのは、妙である。

ともあれ、つぎのことは、大きな疑問とされる。山形県下の地が、どうしてこうも、「ノ」のつよにおこなわれかたを見せないではいられなかったのか。

『山形県方言集』にも、つぎの記述が見える。

の no 感動詞 ね 庄内

さて、私が山形市西南方の一山地で調査した時は、

○ンダ ノー。

そうだね。（——と、返事。外来の私などにも。）

などの「ノー」ことばを聞くことができた。

○ンネ ノー。

そうでない。

などの言いかたもある。限られた用法の「ノ」かもしれないが、「ノ」の聞かれたことは事実である。庄内弁の特色と見られてきた「ノ」も、じつは、より広域に存立し得ているのでもあるか。

山形県下におこなわれる「ノ」文末詞は、あと上がり調に発言されるのにとどまるものではない。

秋田県下の西南辺には、山形庄内のつづきで、すこしは「ノー」がおこなわれているか。しかし、本荘市域ともなると、「サンビ[i] ノー。」（さむいね。）とは言わないで、「ナー」と言っている。

秋田県下は、総体に、「ノ」を言わない所ようである。

岩手県下もまた、「ノ」の聞きにくい所である。私は、方々で、“「ノー」は言わぬ。”“全然、言わぬ。”と聞かされてきた。

岩手県中部域東方で聞いたもの、

○イガナエー ㄱ。

行かないの？（誘う。）

（“二十歳代～三十歳代”）

というなどでは、一見、感声的な「ノー」文末詞が受けとれそうである。が、よく見ると、この種のものも、「の」助詞に発する助詞系文末詞である。——それにしては、アクセントの高音部のできかたの変わっているのが注目される。

青森県下となって、まず、津軽地方には、問題の「ノ」が認められるようである。奥羽の山形県下に波うつ「ノ」文末詞が、今また、青森県下でも波をうたせているということか。

瀧野沢栄一氏の「津軽方言の語法」（『方言』第五卷第二号）には、

エーテンキダ<sub>ノ</sub>。 いい天気だ<sub>ね</sub>。

などがある。『全国方言資料』第1巻の「青森県南津軽郡黒石町」の条には、

fアブネーノー

危いねえ。

とある。諸種の方言文献に、津軽域の「ノ」文末詞を見ることができる。

私が青森市内で聞いた一例は、

○「味ましい」ということばの意味は、サマザマダ ㄱ。

さまざまだねえ。

である。

津軽平野の木造町での一週間調査で得た「ノ」文末詞の例は、

○何々ミタイナ モンデ ㄱ。

何々みたいなもんでねえ。 （中男間）

○何々は ツ[ü]カワネー ㄱ。

何々はつかわな<sub>ノ</sub>いねえ。 （老女→中女）

○ソ<sub>ノ</sub>ンダ ㄱ。

そうですね。

などである。ついでに、複合形の例をあげるならば、

○ココ ヒコーキ[i] イグ[ü] ダオンア。

ここを飛行機が(敵機が)行くものねえ。(中男→藤原)

○オナチダ オンア。

“おなじですよね。”(老女→中女)

などがある。この地の人々が語るのには、“「ノー」は下品ではない。ふつうのことば。ふだんにつかうことば。”とのことであった。私のカードを検閲してくださった識者は、“「ノー」は女性に多く、「ネ」に当るので上品なことばになる。”としるしていただく。

かつて津軽半島に出むいた時も、私は、その中部で、

○キョー サンビ[i] ノー。

きょうはさむいね。

というのを聞くことができた。これについて、“下のものが年寄りに言うことば”“上のことば”との説明があった。(“「ナー」は若いものどうしのつかうことば”ともあった。)「ノー」は「ナー」よりも上品だという。

津軽に対する「南部」の地域では、「ノ」文末詞があるとしても、それは、はるかに劣勢のものであるか。

『下北地方昔話集』(『伝承文芸』第五号)には、

まなこあ見えねえわけだの。

とある。下北半島の旧田名部町では、かつて、

○サム[ü]イ[i] ヤエーィア。

というのを聞いたことがある。通常、「ナー」がおこなわれているようであったが、このように「ノー」の聞こえるものもあった。(今、私は、この事例を正確に分析することができない。親密な間での言いかたであるという。)

いわゆる「南部」の東南辺での一週間調査では、「ノ」のつかわれなさまが見られた。ところで、能田多代子氏の『青森県五戸語彙』には、

オンノ 「……だもの」「……だからよ」に当る。「オン」に比して一

種の感情の曲折を含む。彼人<sup>ナ</sup>、偉い人だオンノ（彼人は偉い人だもの）。

との記事が見える。ここに、「オンノ」とあって、「ノ」が浮きでているのは、一つ注目される。

青森県下も、東部のいわゆる「南部」域では、「ノ」があまりおこなわれなくて、西部本位の津軽域に「ノ」がよくおこなわれているようなのは、山形県下で、その西北域、すなわち庄内地方に、「ノ」がさかんにおこなわれているのに似かよっている、としうるか。

東北地方をかえりみるのに、「ノ」のおこなわれることは、なんら隆盛ではない。したがってと言うべきであろう。「ノ」文末詞に関する複合形も、とりたてるべきものがほとんど見られないありさまである。複合形の諸相がほとんど見られないほどに、「ノ」が劣勢なのだということができよう。

中の、山形県下と青森県下とが、特別に注目されることは、以上のとおりである。なぜこれらの地域は、このような状況になっているのであろうか。底脈をふまえた相互の関連というようなことは、今、すぐには言えそうもない。察するのには、「ノ」文末詞の生成も、これらの地域において、自然発生的であったか。もとより、そういう発生にも、必然的な根拠があったのにちがいない。表現法上の他の諸要件との相関関係が、ナ行音文末詞中、とくに「ノ」文末詞を成立せしめたというようなこともあったろうか。

## 十 北海道地方の「ノ」ほか

北海道にも、「ノ」は、あまりおこなわれていないのか。

石垣福雄氏は、国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』に寄せられた「桧山郡江差町」の中で、

ノ、ナ

共通語の「ネ」に当たり、文末に用いられる。相手に親密の感を与える

もの。「ノ」は主として老人に、「ナ」は主として青少年層に、「ネ」は主として女性に用いられている。

アノノー、アノナー、アノネー

ところが、若い女にも次のような言い方がある。

チャッチャド シセノ「ざっざとしなさいな」

と記述していられる。

小野米一氏編、北海道教育大学旭川分校国語学ゼミナール『ことのは』15号（昭和52年3月）の全一冊をしめる「礼文島言語調査報告」には、

実例を直接耳にすることはできなかったが、M氏（72男）の教示によれば、

○ソンド <sup>ナ</sup>ー。そうだねえ。

○ソンド <sup>ノ</sup>ー。そうだねえ。

などと、ノを使う由である。老年層において稀に使われるものか。

との記事が見える。

『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条には、

fソンドガネー ヤー ゼンブ ハヤイノー モスコシ イデテモ エガ  
 そうかい、 やあ ずいぶん 早いねえ、 もう少し いても いい  
 ビセッノー  
 んでしょう。

と見える。

私どもが、道内を旅行してまわるばあいなど、そこそこで、ときに、「ノ」文末詞が聞かれるであろうか。そうはなっていないのが北海道ではないかと思う。

## 十一 おわりに

ナ行音文末詞の「ノ」の生態をたずねて、以上、全国状況を通観してきた。「ノ」が、いわば全国的なものであることは、認めることができよう。ただ

し、その生息には、地域差が大きい。総じては、国の西半域内に、「ノ」の生きることをつよいものがあるろうか。したがって、と言いたい。「ノ」に関する複合形の文末詞の成形も、総じて国の西半内に、いっそう複雑なものが見うけられる。

「ノ」の全国状況をかえりみるのに、今後、「ノ」を用いる生活が全国的により栄えていくだろうなどとは思われない。成立のゆえ古さが想像されはするものの、「ノ」はもはや、今日の世代によく適応しうるものではあり得なくなってきた。

地域によっては、ことに年輩者たちの間では、「ノ」が、今もなお必須とされていよう。所によっては、「ノ」が、今もなお老若男女の方言生活の中によく生きているありさまでもある。しかし、そのような地域・所が、しだいにせばめられてきているのも、いわゆる共通語の流布のだんだんにいちじるしくなってきた現実のもとでの明白な事実である。

「ノ」は、将来に向かって標準語を考えようとするたちばでは、もはやとりあげることができないものであろう。

もっとも、「ノ」の有する独特の表現性は、今も明白なものがある。「ノ」はしばしば、庶民感情を表現するのによく役だつものとなっていよう。このような独自性を有する「ノ」を、私どもの将来にかかわる、広くてゆたかな言語生活を考えるさいに、あらためてとりあげてみることも、一つの有意義なことになりがちなまい。

## 第四節 「ネ」の属

### 一 はじめに

#### 重要素「ネ」

ナ行音文末詞の「ナ」や「ノ」が、文末特定の訴え要素としていかにも重要なものであることは、その音形に明らかであろう。これらに対して、「ネ」は、中開き母音の「e」によってたつものである。しかるに、「ネ」がまた、文末特定の訴え要素として、独自の有力なものになっているのが注目される。

その重要素であることを、端的な事例によって観察してみよう。現代諸方言の中には、共通語の「ネ」を、いまだに、いといはばかる気もちの所がある。このような地域にあっては、共通語的な文表現にもせよ、その文表現に「ネ」を用いたとすると、発音者は、その「ネ」によって、自己の文表現全体が、とたんに異色のはなはだしいものになるのおぼえる。「ネ」の作用の重大性が、ここに明らかである。

#### 「ネ」のとりあつかいのむずかしさ

「ネ」は、今日、そうとうに、共通語としての地位を獲得していよう。女性の言語生活にあっては、そのていねいなもの言いに「ネ」を用いるべきだとの意識が、そうとうに瀰漫しているであろうか。(それでいて、「ネ」の発言には、地方的な習癖があり、あるいはこれをつよめに発音し、あるいはこれを過度にきわだてて高く発音するなど、いわば、「ネ」の生活のあらたな方言化も見られる。これはべつに注意すべきことである。)

「ネ」を本来の土語とする方言も、東西に、すくなくない。そのことがわかってしまえば、これは安心して、方言文末詞「ネ」の記述対象とすることができるが、私どもが未知の方言にはいつていつたばあいに聞こえてくる「ネ」は、本来の土地ことばの「ネ」なのか、習得の共通語要素的な「ネ」なのか、にわかには判断しかねる。

私は、今日まで現地調査にしたがって、この「ネ」文末詞についても、ひたすら、土地ことばの「ネ」を見いだすことにつとめてきた。いわば、流布の共通語の表皮をめぐって、次に、方言の「ネ」の生活を見いだそうとしてきたのである。

しかし、なにぶんにも他地方人のすることである。方言表現の明確な「ネ」の事例をとらえたつもりでも、それが、発言者の、かなり共通語に影響された「ネ」表現であったりしたかもしれないのである。不安はつきない。

このことを告白しつつ、以下に私は、方言「ネ」文末詞記述の正鵠を得ることにつとめていきたい。

## 分布

今日、私のまとめ得た「ネ」資料を整理してみるのに、この文末詞は、だいたいには、国の東半地方（中部地方以東）に優勢である。——中部地方・関東地方がその主域か。国も西半地の近畿・四国・中国の、いわゆる関西地方は、「ネ」の勢力がよわい。しかしまた、西国、九州地方には、「ネ」の注目すべきおこなわれかたもあって、「ネ」は単純に東国のものではないことが思われる。

それにしても、関西の「ナ」に対する東の「ネ」という見かたのゆるされるところによりかかれれば、私どもは、「ネ」ことばを、東国流のものとも見ることができる。

東北流の発音の口のせまさ、開きのせまさをとりたてて考えてみるのに、東

国地方一般が、広口ではない「ネ」を持ちまゑとしているのは、なるほどと首肯しうることでもある。「ネ」発生の経路はともかくとして、できた「ネ」そのものが、東国地方によくおこなわれており、つづいてこれが、中部地方にもさかんであるのは、いかにもと諒解しうる存在ぶりではある。

とはいいいながら、国の西半内にも、地ことばとしてその地に発生した「ネ」があるとすれば、それはまた、土地がらにそのような成立をゆるすものがあったとしなくてはならない。これはかならずしも、発音傾向の類似などということにこだわって考えるべきことではあるまい。

中部地方以東にいちじるしい指定断定助動詞「ダ」が、どのようにか限られた形式ではあっても、他方、山陰地方その他にもおこなわれている。「ダ」助動詞は、かならずしも東国系のものとは断ぜられない。それでいて、「ダ」がかくべつに国の東半によくおこなわれていることも、明らかな事実である。

こういうのに似たような事情のもとで、「ネ」文末詞も、東国系とも言う存立者になっているか。

「ネ」は「ナ」「ノ」とたがいなじわりあいながら分布している。国の東半といえども、かんたんに「ネ」本位の状況にあるなどとは言うことができない。

「ナ」「ノ」との相関の認められる「ネ」のこうした分布を見るのに、等しくナ行音文末詞ではあるけれども、これは比較的新しいものではないかと察知される。全国上の分布の様相からは、「ネ」が、「ナ」「ノ」に対する後輩者であることが想察される。関西地方の人たちが、「ネ」ことばを、一つのよそよそしい言いかたとみんじがちであるのも、ゆゑあることであろう。

## 成立

「ネ」が後輩者であるとはいっても、私は、かならずしも、「ネ」の出自を

「ナ」などに求めようとするものではない。

ただし、この点に関しては、早く金田一京助博士のお説が見え、その『国語の変遷』（日本放送出版協会 昭和16年2月）に、

関東では、『な』は荒つぽく、やはり、いを添へてやさしく『これがない』・『さうしてない』といったものらしく、福島県下などには今も『ない』があつて、『なあ』といふより、丁寧になる。宮城・山形へ行くと、それが、ネエになつてゐるから、多分江戸ッ児の、『これがね』・『さうしてね』の『ね』も、『ない』の早口にいつた形であらう。

とある。これに似た考えは、他の一・二の研究者にも見られる。

関東地方に関してそのようなものがあつたかもしれないことを、私どもは、にわかにはうたがひ去ることができないであらう。しかし、ここに問題となるのは、関東以外の諸地域にも「ネ」の存在することである。たとえば九州南方にも、「ネ」がよくおこなわれているが、そのような「ネ」もまた、「ナイ」を前提としたものであろうか。こういうことになると、また、つねには、「ナイ」前提説を認めることができなくなる。

九州の島原半島などには、「ナ」文末詞の変形と見られる「ナイ」がさかんである。これは、金田一博士のお説にそつて言えば、「ナ」に「イ」をそえたものであろう。ただし、この「イ」の添加は、かならずしもやさしさをあらわすほどでもなかつたろう。むしろ、「ナー」の強調がしぜん「ナイ」形を具現せしめたもののように思われる。それはさておき、島原半島などでは、「ナイ」形が「ネ」形に転じたりはしていない。

かりに、「ナ」から「ネ」を考えるとしても、全国の諸地方の「ネ」について、一々、「ナ」起源を認めうるかどうか、問題である。

東国に成立した「ネ」、——しかも「ナイ」から転じた、「関東」の「ネ」が、しだいに周囲に瀰漫し、他地域・他地方に波及して、今日、「ネ」は、全国の東西に見られるようになった、と考えたりすることができようか。できないだろうと、私は思う。関東流・関東色と、単純に見きわめられる「ネ」が、国の東西にあるわけではないからである。——「ネ」の用法を各地について検討し

てみるのに、関東の「ネ」とは無縁とも言いうるものが、地方におこなわれているのを知る。日本語方言風土上の「ネ」の存立・流行には、けっして単純事情ではないものが認められるようである。「ネ」には、伝播とともに、地域での自生も考えなくてはならないところがあるか。

分布存立論上、「ネ」に関しては、複雑な事情が認められるので、この点からも、「ネ」のとりあつかいのむずかしさが言える。

私自身、内面で深く考えさせられていることを表白したい。「ナ」文末詞や「ノ」文末詞が、そうとうに原初的なものであり、原生文末詞とも言いうるものであるのに近く、「ネ」もまた、原初的に、「ネ」形文末詞として成立するところがあったものではないか。すくなくとも、このような直接的な成立の面もあったことを、私は推量したい。

ナ行音文末詞として概括しうるものは、早く、柳田国男先生がN音効果と見られたとおり、N音をもって、人の注意をひく力を有するものようである。このような特定音〔n〕の支配下にあつては、そこに、日本語の基本母音をかかえた強力なよびかけ文末詞が生じやすかつたわけであろう。母音分化のたてまえにしたがって、〔ne〕「ネ」もまた、もっともしぜんに成立したのではないか。ただそれは、「ナ」や「ノ」の広母音系のものの成立にさそわれての、しいて言えば、第二次的な成立であったかもしれない。

### 共時論的処理

発生論あるいは成立論は、しばらくおこらう。

現実には、私どもの前に存在するのは、「ナ」や「ノ」に対応する「ネ」そのものである。要するに、これらは、ナ行音文末詞として総括される態のものである。この現実にあつては対象を共時論的に処理することが、まずは、私どもの記述出発上の急務である。広く全国諸方言に見わたされる「ネ」の生態を——その「もの」を、私どもは、まず、忠実に把握していくことにしたい。どのような歴史的な考察も、すべて、事象・現象の厳密な生態論的把握を前提とすべきである。

## 用法

「ネ」の用法は、単純一様のものではない。“相手が同意見であることをたしかめる気もちをあらわす。”こともあれば、「ネ」と言って命令することもあり、「ネ」と言って問いかけることもある。

○ハイ イキナ<sup>エ</sup>ネ。

早く行きなさいな。

は、越後、糸魚川奥の小瀧村での、命令表現での「ネ」の一例である。越中南境辺では、

○お所は ドコデス イネー。

お所はどこですね？

などと言って、問い表現の「ネ」を見せている。能田多代子氏の『五戸の方言』を見ると、青森県五戸町では、

遊びに来たネ。「遊びに来たよ。」

来るベアネ。「来るだろうよ。」

ほんたうだタネ。「本当だったよ。」

などと、「ネ」が「ヨ」に等しくつかわれていることが知られる。——この「ネ」は目下に対してのもので、「親愛を含む」という。

「ネ」の用法は、多様化されている。「ネ」が、いわば原初的な、——私どもにとって、一つの根源的な、ナ行音文末詞の一態であるだけに、これはおそらく、人々によって用いられる場席が多く、したがって、しだいに用法の転化も出てきたのであろう。

のちにかかげるいま一つのナ行音文末詞の「ニ」のばあいだと、これは、現在、勢力のごくよわいものであり、それとともに言おうか、用法も、多岐ではない。多岐の用法をひきおこした「ナ」や「ノ」、それに「ネ」などの、文末詞としての優位と安定勢力とが思われる。一般論であるが、ものは、それが頻

用されるとともに、用法上のひろがりも、よく見せることになろう。

「ネ」（「ナ」や「ノ」も）の用法に「問い」などの表現の用法ができていても、これらが、後生の用法であることは、認めやすかろう。本来、文末詞は、自己のたちばを相手に訴えるためのものであったはずである。「ネ」をもって相手にものを問うとしても、それは、「私は問うているのですよ。」と、問う自己を、相手に投げかけようとするものであるとも解される。——あるいは、問うにしても、いずれは、文末詞をもって話し手のたちばをつよく表明するのである。

### 「ネ」に関する複合形文末詞

「ゾネ」「カネ」「モンネ」「ワイネ」などと、「ネ」に関する複合形文末詞が、多くおこなわれている。（地方にもよることであるけれども。）

複合形の盛行もまた、本体の「ネ」の用途の盛大をものがたるものである。

## 二 南島地方の「ネ」

一般状勢としては、南島方面には「ネ」はおこなわれていない、と見ることができようか。

ところで、沖縄本島には、

○アノ ネーへー。

あのね。

などと、「ネーへー」の言いかたがあるという。これは、どういうものであろうか。

問題としている「ネ」に、「へー」をつける習慣などは、およそ、他地方には見いだしかねる。

沖縄の一女学校の報告物には、「あれはなくてもいいさーへー。」などの「サーへー」の言いかたとともに、「ネーへー」の言いかたが見える。

### 三 九州地方の「ネ」ほか

鹿児島県下には、「ネ」がよくおこなわれている。薩摩半島人で、“念をおす時は、ほとんど「ネ」を言う。”と言う人がある。

ところで、本県下の「ネ」は、けっして、共通語ふうの「ネ」とおなじものではない。薩摩半島東南隅出身の瀬戸口俊治氏は言われた。“学校で「ネ」をならってきて、違和感をおぼえた。”と。氏の郷里では、「ネ」は、“同等以下に”つかうものであり、とくに、おやが子につかうものであるという。(問いの「ネ」もあるが、その「ネ」をつかうとおやはしかる、とのことである。)一方、「ナー」がよいことばとされている。瀬戸口氏教示の「ネ」例をあげよう。

○ヨガ フニ アスボレ ネー。

いい子をして遊んでいなさいね。(中女→幼男)

○イッキ ケ ネー。

すぐ来いよ。(青男→同)

私が、薩摩半島東南部の南辺で聞きとめた例には、

○マ ノチ ヨネー。

「まあ、のちよねえ。」(別辞)

などがある。これは、「下」の言いかたとされた。|マ インマ ヨネー。」(まあ、今よねえ。)とあっても、これまた、「下」の言いかたである。

「ヨネ」という複合形がとらえられる。

当方の方言研究文献にも、「ネ」を目下へのものとする記事が見られる。

薩摩半島西南部域でも、たとえば、南辺の沈崎で、

○コンセ ネー。

おいで。

などというのが聞かれ、“「ネ」は召使に対することば”などとされている。東正昭氏が、私のために、当西南部域について問い聞きをしてくださった結果の中には、土地の女性の、

川辺の「ネ」は標準語の「ネ」とはだいぶんちがっています。川辺で「ネ」をつかうと「標準語で話しているばあいですら」、いばっている、見識ぶっているとて、変な顔をされ排斥されます。目上の人にはもちろん、目下の人にもでも弟や妹を除いたら、「ネ」をつかわないように気をつけて、「ナ」をつかうようにしています。「ナ」が女のことばになっているのかもしれませんが、男のかたでも、「ネ」はほとんどつかわれません。役所でも、家のかたからいろいろご用を言いつかる時でも、「ネ」はほとんど聞きません。

という感想がある。

薩摩半島域に、「ネ」を特別視する傾向がつよいようである。鹿児島市方面でも、人は、「ナー」をよいことばとし、「ネー」をわるいことば、あるいは目下へのことばとしている。

大隅地方にあってはまた、同様の事態が認められる。東岸の内之浦では、“「ネー」は目下に言う。”などと言っている。“おれになぜ「ネー」を言うかと、軽蔑を感じる。”と、私に言ってくれた人もある。「ナー」と「ネー」との位相差が明瞭である。——とはいいいながら、この地を調査したさい、子どもたちは、私に、ふつうに「ネ」をつかっていた。(カード検閲の識者は、この種の事実を示すカードに、“これは鹿児島女子の「カライモ」普通語”と注してられる。)

大隅南部では、

○オヤ コンニャ ドキヂャ イカンデ ネー。

わしは今夜どこへも行かないからねえ。

のような言いかたが、中等品位のものとされている。「ネ」は、下方向にではあっても、そうとうのゆとりをもっておこなわれているのか。

種子島甌島などの島嶼部にも、「ネ」が見られる。

「ネ」の変形、「ネイ」がある。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県揖宿郡山川町岡児ヶ水」の条には、

f エー オラ セドイ クサムシージャ

ああ、わたしは 瀬戸<sup>3)</sup>に 草むしりです。

3) 小字名。

m<sup>4)</sup> バ ゲンキデ ヤッオライネーイ

元気で やっているね。

4) 意味未詳。

などというのが見える。

※ ※ ※

「ネ」に関する複合形の文末詞には、「ヨネ」、「トヨネ」、「ドネ」、「カネ」、「カイネ」、「ガネ」、「モノ(ン)ネ」などがある。

m…………… コドミ オイガ ユートヨネ

こどもに おれが 言うんだよ、

は、「トヨネ」の一例である。(『全国方言資料』第6巻「鹿児島県枕崎市鹿籠」)

○ワリ コヂェ スンナ ドネー。

“わるいことをするなよ。”

は、「ドネ」の一例である。——「ドネ」の「ド」は、「ぞ」であろう。

宮崎県下全般に「ネ」がおこなわれ、これはおおむね、中等品位のものになっている。西南域の、鹿児島県下に関係の深い地域でも、下等品位ではない「ネ」がおこなわれている。——鹿児島県下の「ネ」の実際ほどには、「ネ」が特殊ではないのか。ただし、日向中部西奥の、西米良村などでは、「ネ」についての、“だれでもかれでもには「ネ」は言えぬ。下の人間に言うことば。子どもになど。”というなどの感想も聞かれる。

○トモチャー<sup>↑</sup>ン。ハイ コン ネ。

ともちゃん。早く来なさい。

これは、同地での老人が孫女に言ったことばである。この地で、“「ネー」は昔のことば。家内のものに言うことば。”との感想も聞かれた。

岩本実氏は、『日向の高千穂方言』で、

ネーは若い人が多く使い、  
と言われる。

延岡家中弁の「ネ」使用は、

○ダレモ インカッタロ ガネー。

などである。これは、「ガネ」の形を見せている。なおこれは、目下に言うものだという。(「インカッタ」の「イン」のところは、延岡家中弁のみならず東国弁にあることを示していようか。)

※ ※ ※

本県下の複合形文末詞には、「カヨネ」があり、「ゾ(ド)ネ」があり、「カネ」「カイン」があり、「ガネ」「ガイン」「ガヨネ」があり、「ト(ツ)ネ」があり、「モ(ム)ンネ」があり、「ワネ」「ワイネ」「ワヨネ」がある。

○ドキ オイタ カヨネー。

どこへおいたかねえ。(中男→小男)

は、「カヨネ」の例である。

熊本県下にも、広く「ネ」がおこなわれている。その品位は、中程度のものである。——熊本市のばあいも、そう言える。

○ナジ ガッコン アツピン イカン ト。ナジ ネー。

なぜ学校に遊びに行かないの？なぜね？(中学生女→小学生女)

は、阿蘇山南麓での一例であり、

○オラス ゴタン ネー。

いらっしゃるようですねえ。

は、天草での一例である。

県下も南部となると、「ネ」の性質が鹿児島県下のものに近くなってくるのか。白石寿文氏は、八代市方面の方言に関して、

二見町方言にあっては「ネ」は「ナ」よりも品位が低いようである。

と言われる。当県下についても、「ネ」の用法の明細を追究すべきものがある

か。

「ネ」の「ネイ」がある。天草下島西岸での「ネイ」は、  
○ツガ<sup>ン</sup>モ ヨ<sup>ン</sup>ニュ キ<sup>タ</sup>ツ<sup>チ</sup>ュー アツ<sup>カ</sup>ッ<sup>ド</sup> ネイ。

そんなにたくさん着たら暑かろうねえ。

などである。これは、目下への言いかたであるという。

斎藤俊三氏は、『熊本県南部方言考』で、

ナイNai が、ネNe になる

と述べていられる。そこにあげられた実例は、「セ<sup>ン</sup>ネ」（しないか）などである。

※ ※ ※

本県下の、「ネ」に関する複合形文末詞には、「イネ」「カネ」「ガネ」「トネ」「タイネ」「モンネ」「モネ」などがある。

○ド<sup>シ</sup>コ<sup>デ</sup>モ ア<sup>レ</sup>バ タイ<sup>ネ</sup>。

いくらでもあればだねえ。

これは、人吉市域での「タイネ」例である。（瀬戸口俊治氏教示）「モンネ」形が、複合形中、代表的なものであろうか。しぜん、「モンネ」の転訛形も生じているのであろう。——「モネ」ともなれば、これはまた、独自の安定形式になったものと見られる。原田芳起氏は、『熊本方言の研究』で、

ア<sup>タ</sup>シ<sup>ン</sup>ラン<sup>モ</sup>ネ（私は知らないのに）

「ものを」または「ものに」の転で…

などの記述を見せていられる。

長崎県下にもまた、「ネ」が広くおこなわれている。長崎市では、「ネ」文末詞が“男女老若の別なく用いられ、全体的に上品である。”という。（林田明氏「長崎市方言文末助詞」『方言研究年報』第一巻）ところで、愛宕八郎康隆氏によれば、平山蘆江氏の『唐人船』には、多くの文末詞が用いられる中で、「ネ」はまれであるという。林田氏から得た長崎市での「ネ」例は、

○アン<sup>ネ</sup>ー。アソ<sup>コン</sup> カ<sup>ド</sup>バ マ<sup>ギ</sup>ッテ チ<sup>ツ</sup>トバ<sup>ツ</sup>カイ イ<sup>ケ</sup>バ シ<sup>ユ</sup>  
ー<sup>ジン</sup> ア<sup>ッ</sup>ケン、ソ<sup>コン</sup> ニ<sup>キ</sup>デ キ<sup>ー</sup>テ ミ<sup>ン</sup> <sup>↑</sup>ネー。

“あのね。あそこのかどをまがってすこしばかり行けばこまかい道がありますから、その付近で聞いてみませんか。”

などである。「ミン ネ」(見ない?)「コン ネー」(来ない?)式の言いかたが、県下に、あるいは広く九州に、よくおこなわれていよう。

島嶼部の「ネ」の例をあげる。

○オー<sup>バン</sup>ゲ<sup>ニ</sup>ャ サ<sup>カ</sup>ナン ト<sup>レ</sup>タ <sup>ネ</sup>ー。

ずいぶんたくさん魚がとれたねえ。

は、五島の例である。

そりゃ何ね、面白かね、

などは、平戸島の例である。(種ヶ島克巳氏『平戸方言語法草案』)

ビ<sup>ッ</sup>クリスルゴツヨウ走<sup>ル</sup>ネー。

などは、山口麻太郎氏『続老岐島方言集』に見える例である。——氏は、本書で、

同輩又は目下にのみ使ふ。敬語とする場合はナ、ナーを使ふ。

と説いていられる。

対島の北部では、「ネ」が“目下か同輩”に対してつかわれているという。

(山本俊治氏教示)

※ ※ ※

本県下での複合形の文末詞には、「ヨネ」「カネ」「トカネ」「ガネ」「トネ」「タイネ」(「ターネ」「タネ」)「モンネ」「バイネ」「トバイネ」(トバネ)などがある。

*m*ヂゾーサンノ オラントカ ナカタネ。

地藏さまの いないところは ないね。

は、「タネ」の一例である。(『全国方言資料』第9巻「長崎県福江市上大津」)

佐賀県下にも、広くに「ネ」が見られるようである。

○キントキ ナカ ネ。

金時はない？（十五歳くらいの少年。氷店に来て。）

は、佐賀市での一例である。（浮橋康彦氏による。）私が、県南方で得た実例は、

○ヨシダサンバシ ネー。

“吉田さんでもあったんじゃないか？”

である。唐津市での一例は、

○サムカ ネー。

さむいねえ。

である。

※ ※ ※

本県下の「ネ」に関する複合形のものには、「カネ」「タイネ」などがあり、また、「クサネ」がある。おもには、年輩の人が、

○ソギャン トコイ（トケー） オクケン クサネー。

そんな所におくからよ。

などと言っている。

福岡県下でも、筑後・筑前その他の全般にわたり、「ネ」が見られる。県下に都会地も多いだけに、共通語的な「ネ」もよく混在しているようか。

「ナン ネ。」（なに？）「アツカ ネー。」（暑いね。）といったような調子の言いかたが、県下によくおこなわれている。

○コッチ コン ネ。

こっちへ来ないね？

は、南部の大牟田での「ネ」例である。若松市域での一例は、

○アッチャー コマメニ ハタライテケ ネ。

あちらの御主人はまめまめしく働かれるからね。

である。（岡野信子氏教示）

## ※ ※ ※

本県下での「ネ」に関する複合形の文末詞には、「ヤネ」「カネ」「カイネ」「タイネ」「タネ」「トイネ」「クサネ」などがある。

mアー カエッテキタヤネ

ああ、帰ってきたよ。

は、「ヤネ」の一例である。(「福岡県福岡市博多」『全国方言資料』第6巻)

「ヤネ」の形は注目される。——(全国的にも、注目すべきものではないか。)

岡野信子氏は、

○モ<sup>ー</sup> スンダ<sup>ー</sup> ヤネ<sup>ー</sup>。

もうすんだよねえ。

などの例を示され、かつ、“博多や、筑豊で、「ネ」は男のことば。女はつかわぬ。”と語られた。

○アンタ<sup>ー</sup> クサネ<sup>ー</sup>。ヨシハラサンノ コエ<sup>ー</sup> ヨ<sup>ー</sup> ニト<sup>ー</sup>。

あんたはねえ。吉原さんの声によく似てる! (青女 友と電話)

は、筑前糸島半島での「クサネ」例である。——「クサネ」も、かなり広くに(しかも若い人にも)おこなわれているか。

大分県下には、「ネ」がさほどつよくはおこなわれていないらしい。(——よわいながらも方々にある、というのかもしれないが。) 国東半島内部の調査のさいには、「ネ」が聞かれなかった。

『豊後方言集』第二輯には、

テンキガ ユ<sup>ー</sup>ヂ<sup>ー</sup> イ<sup>ー</sup>ゴタネ<sup>ー</sup>

天気が よくて 申分なしです

などの記事が見えている。大分郡下のことらしい。

豊後の日田地方には、「ネ」のおこなわれることが比較的多いか。——女のことばのようである。

## ※ ※ ※

「ネ」に関する複合形の文末詞としてとりあげうるものを、今、私は持たない。複合形の非存立傾向と、「ネ」そのものの弱勢ということとが、関連しているか。

大分県下での「ネ」の状勢が、中国地方での「ネ」の状勢によくつながっている。

#### 四 中国地方の「ネ」ほか

中国地方が、「ノ」または「ナ」を本体とする地であることは、既説のとおりである。

山口県下も、「ノ」「ナ」本流の地域である。

それにしても、今日は、一方で、県下に「ネ」の通用するさまが見られる。防府市のことばの例としたら、

○ド<sup>レ</sup>ベ<sup>タ</sup>ニ ツクナ<sup>ン</sup>ジャ<sup>ッ</sup>テ ダ<sup>メ</sup> ネ<sup>ー</sup>。

“地面に、しゃがみこんでは、いけません。”

などがある。——この例に明らかなとおり、共通語ふうのもの言いのなかで、「ネ」がおこなわれがちである。もっとも、「何々デス イネー。」（何々ですよねえ。）とか、

○チ<sup>ト</sup> ア<sup>ン</sup>キ<sup>ナ</sup>ジャ<sup>ー</sup> イ<sup>ネ</sup>。

“（うちの二番めの子は）ちとのんきなんですよ。”

とかの「イネ」などというのになると、土地色がにじみ出てきている。「ネヤ」という複合形の中に収まっている「ネ」の、土地ふうの安定感もまた明らかである。「ネ」と「アナタ」とのむすびつけられた「ネンタ」は、もはやはなはだしく山口弁流のものとなっている。——周防東部に「ネヤ」が見られがちであらうか。

ところで、周防祝島の調査のさいは、土地の人の、“祝島の純粹のことばで

は「ネー」というのではない。”“「ネー」はよそことば。”などと説明するのが聞かれた。——私は、人々がときどき「ネー」を言うのを聞いた。（「ナ」はまず言われなくて、「ノ」がさかんである。）荒巻大拙氏は、周防東部に関して、

青年に近づくほど、「ノー」が「ネー」に代りつつあるようである。ただし、小・女でも、かなり多くのものが「ノー」を使う。また、僻地の集落では、「ノー」をもっぱらにする。「ノー」は「ゴワンス」につぎ「ネー」は「アリマス」につくところからみても、「ネ」系のものは、使われてから「ノー」よりも日が浅いのではないかと思わせる。（もちろん「ノー」も「アリマス」につく。）

と言われる。

山口県下の「ノ」「ナ」状況の中に「ネ」も存在するのを、どのような経緯によるものと解したらよからうか。「ネ」の言いかたが後生のものであることは、推断にかたくないように思う。

ちなみに、『瀬戸内海言語図巻』によれば、ナ行音文末詞に関しては、「ネ」が単独に存在する土地はない。——「ナ」「ノ」に「ネ」がつれあっている。どちらかといえば、「ノ」に「ネ」がよりそっている。

広島県下にも、「ネ」の通用が認められる。

広島弁での女性のことば、

○ア ホー<sup>↑</sup>ネ。

あ、そうね。

のごときは、昭和初年代にあっても、はなはだしく広島的なものであった。（今日もやはり、これがおこなわれている。）一般に広島県下での女性の「ネ」は、おさえつけぎみの、まずは短呼の「ネ」であることが多く、東京語本位の共通語に聞かれる「ネ」でのような軽快さがない。こう見られる「ネ」ことばは、早く広島弁の地ことばであり得てきたのだと解される。

○カクンガ メンドクサイ テー<sup>↑</sup>ネー。

書くのがめんどくさいよねえ。

などの、男女におこなわれる言いかたのばあいの「テーネー」なども、広島弁をよく色どっているものである。複合形の「ヨネ」「ヨネー」などもまた、よく慣れたものである。

「ノー」のつよい広島県地方の「ことばのはたけ」に、一方「ネ」もかなりよく定着せしめられていると見られようか。しかしながら、広島県地方のことばの影響下にある内海大三島に生まれた私、しかも四十余年広島市に定住する私が観察するのに、「ネ」が「ノ」ほどに当地方に本来的なものであるとは、けって思われぬ。広島県地方の老年層の人たちは、今日といえども、文末詞は「ノー」だけの生活といったような人々が多い。では、「ネ」は、入来者なのであろうか。入来者としたら、これは、どこから入来したのであろう。

岡山県地方となると、この地域は、はなはだしく「ナ」本位の地域であり、およそ「ネ」には縁のうすい地方のように解される。広島県下と本県下との相違がいちじるしい。そのことは、岡山県下が、「ナ」のさかんな近畿に隣接していることによるところが大きかろう。

岡山県下といえども、「ネ」を存しないのではない。備中島嶼での一例は、  
○オトナデス ネー。

おとなですな。 (老女→藤原)

である。「ネ」が県下におこなわれてもいるけれども、それは、近代共通語の影響を受けたのによることが多いものと思われる。その「ネ」は、おそらく、東方近畿地方から伝わりはったものであろう。(いかに東京語の影響がつよいといっても、近畿をとびこえてということは、考えにくい。)

岡山県下に流入した近代共通語の「ネ」のいきおいが、順次、さらに西の広島県下におよんだことは、考えやすかろう。

今、岡山県下にはさほどには根づいた「ネ」が認められず、広島県下にはよく根づいた「ネ」が認められるとすると、その「ネ」の現成は、どういう事情

のものであったろう。こういうことは考えられるかもしれない。近代共通語の西漸が、岡山県下では、刻印をうすくしたまま西におよび、広島県では刻印を濃くした、そういう早期の事情の「ネ」が、広島県だと見られるとされるか。九州地方に「ネ」の見わたされたことは、上述のとおりである。同地方についても、その「ネ」の存立を、伝受としてか自生としてか、あるいはその双方・相関としてか、——どのようにか、解釈しなくてはならない。

山陰地方には、ことに<sup>1</sup>出雲地方を見るのに、かくべつつよく「ネ」が根づいているようである。(根づいているということばを避けて、まず、「今日、出雲には『ネ』がつよい。」と言ったほうがよいかもかもしれない。)生田弥範氏は、『山陰方言概論』で、

伯耆、隠岐では「な」、又は「なー」、出雲では「ね」、又は「ねー」が使われる。出雲に於ける「ね」は会話の際に屢々出て来るので特徴の一とされて居る。

と言われる。雲州平田弁の一例は、

○ヨンペワ オサーマデ オシェワサンダッタ ネー。

ゆうべはおそくまでおせわさんだったねえ。(老男——中男)

である。「ネー」は、[ne:]に近い。

当地方の先学たちに、ナ行音の「ニ」文末詞を認めるむきがあるか。ことによると、この「ニ」は、「ネ」に近いものかもしれないと考えられる。「ネ」の発音がいちじるしく [ne] であるばあい、人はこれを、「ニ」ともしがちではなかったか。「ネ」が「ネァ」と発音されたばあいは、「ニャ」と表記してもみたくなるような発音なので、こういう表記から、人は、「ニ」文末詞を認定したりもしたかもしれない。

上にふれたとおり、出雲地方では、文末詞「ネ」が ([ne] の発音であるばあいも)、「ネァ」と発音されがちである。(土地人自身も、“猫が鳴くような声を出す。”と言っている。)これは、「ネ」の母音のひびきをさらに拡大して、

相手への聞こえのよさを求めようとするものであって、ここには、訴えことばとしての文末詞を活用する人間の、表現生活上のしかるべき意図が認められる。出雲南方山地での実例は、

○オカーサンノ ツ[ü]ツ[ü]ガ ス[ü]ク[ü]ナー ゴザイマシテ ネァ。  
お母さんの乳がすくのうございましてねえ。

○ワタス[ü]トコは ショーガッコーノ シェンシェーノ トマッテ オイ  
デマシテ ネァ。

わたしのところは小学校の先生が（「〜ノ」は尊敬表現法）泊まっ  
ていらっしゃいましてねえ。

などである。——これらの例では、「ネ」の〔e〕母音の下に、比較的大きい〔a〕母音が出ている。おなじく南方山地の、

○コノゴラ メーマセンドモ ネァー。

このごろは見えませんがねえ。

では、〔a〕が比較的よわい。出雲の北岸に行っても、「ネァ」がよく聞かれ、これがしばしば、「ニァ」とも聞こえるほどである。

人は、出雲弁を調査して、「ネー」とともに、「ネヤ」「ニヤ」をとりたてたりもしている。が、この「ネヤ」「ニヤ」とされているものなどは、多く、「ネァ」を原態とするものようである。『全国方言資料』第5巻の「島根県大原郡大東町春殖畑嶋」の条にも、

f…………… コマエマスガニヤ

困りますのですがね。

とあるけれども、この「ニヤ」は、もともと、「ネァ」的なものではなかろうか。

ともあれ、出雲地方に「ネ」がさかんであって、このいきおいは、石見東部におよぶ。石見中部奥に関しても、村岡浅男氏は、“おじいさんも子どもも、じつにきれいな「ネー」をつかう。地ことばの「ネー」だ。”と言われる。

「隠岐島五箇方言の文末助詞」に関しては、神部宏泰氏は、

「ネ」は、土地本来のことばではない。よそことばといわれるものである。「ナ」「ノ」よりも品位はたかい。『方言研究年報』第一巻)と言われる。『全国方言資料』第8巻の「島根県周吉郡中村伊後」の条に見える「ネ」例は、

*m* ……クィヨッタ ワケダケネ  
 食べていた わけだからね。

である。

※ ※ ※

出雲地方の「ネ」に関する複合形文末詞として私がとりたてうるものに、「ズ[ü]ネ」と聞こえたものがある。

○イヤ ヽカッタ ズ[ü]ネ。

いやよかった“ですよ”。

「ズネ」は「ぞネ」であろうか。『全国方言資料』第5巻の「島根県那賀郡雲城村」の条に見られる、

*f*アガーデモ ヤレマセンヤネ

そうはいつでも (学校に) やれませぬね。

の「ヤネ」は、「ヨネ」に近い「ヤネ」なのかどうか。他の、本県下に見られる複合形を指摘するならば、「エ[i]ネ」「カネ」「カイネ」「ガネ」「ワネ」などがある。

鳥取県下にも、今日、「ネ」が見わたされるようであるが(「カネ」「カイネ」「ガネ」などもあるが)、出雲地方でほどに「ネ」がさかんであるとは思われない。

山陰でも、隠岐は、「ナ」本位の地らしい。「ネ」は、鳥取島根の両県下に、どういう地位を得ているものであろう。とくに、出雲地方には、なぜ「ネ」がさかんなのであろうか。これが本来の土地ことばとしうるものならば、問題は

ないけれども、隠岐のようすは、早くもその点に関する一考を私どもによびかけている。山陰に「ネ」ことばが流入したのだとすると、出雲地方では、じつによく土地化したものである。流入とすれば、やはり東方からであろう。

中国地方は、一般的には、「ノ」なり「ナ」なりを、通用の地ことばとしている。——「ノ」や「ナ」が本来的なものだとの感がつよい。そこに存在する、山陽地方などの「ネ」は、土地人からすると、“よそことば”と見られがちでもあり、違和感の対象とも見られがちである。

広島県地方のことばの傘下にある大三島ことばのもとに生まれた筆者も、少時から「ネ」に対する違和感を持った。また、土地っ子たちが「ネ」をよそことばとして特別視し、これに対する態度が排他的なのを見てきた。

違和感の対象である「ネ」は、ひとくちに言って、新来のものとされよう。その「ネ」が、他面ではまた、出雲地方でも広島県でも、定着度のつよさを見せているのだから、ことはやっかいである。定着度のつよさは、ものの早い入来を思わせよう。

早い入来としたら、どのくらい早かったのか。国定教科書成立後と考えると、それは今日から言えば、そうとうに早いころのことである。そのころの入来としても、「ネ」は、定着の余裕を持ち得たであろう。

そうすると、今もなお違和感を示したりする所は、「ネ」ことばの流入にもかかわらず、それを言語感情上では排除しつつけてきたということか。

国定教科書などをもって入来を考えるならば、これの入来経路ということは、ほとんど問題でなくなる。行政上の通路によって、教科書は、しぜんにもたらされたことだからである。

中国地方に関して、「ネ」の自生を考えることは、困難なのではなからうか。

ラジオ・テレビ以後の、近來の共通語の流布は、言うまでもない。「ネ」ことばもまた、つよいきおいで、中国地方にも波及してきている。

## 五 四国地方の「ネ」ほか

四国は、総体には「ネ」がよわいか。

愛媛県下に、「ネ」がおこなわれてもいる。内海中部島嶼域の「ネ」のことは、さきに山口県下の条でふれた。その中の一島、大三島に生を受けた私は、島が、愛媛県下に属するとはいえ、広島県がわかからの言語影響のもとにあることによってか、外来の「ネ」にいちじるしい違和感をおぼえたのであった。今日もなお、私どもの村では、「ネ」が“よそことば”の代表でさえある。旅から帰った村びとが、都会ふうに「ネ」ことばをつかったりすると、村人たちは、齟齬したのである。（それが、今日ではさほどでもなくなっているのは、まさに共通語浸潤によるものであろう。）

愛媛県下も、南予域の南部となると、

○アレガ<sup>↑</sup>ネー。

あれがね。

などという「ネー」は、“上から下へのおしつけことばになる。”とも言われている。

“「アノネー。」はもと目上の者が目下の者へ言うことば。下が上へ言う時は「ナー」。「ナー」は敬語。”といったような説明も聞かれる。

南予方面では、「ナモン」系の「ナーシ」が、最上品位の文末詞である。南予の南部の人は、「ナーシ」→「ナー」→「ネー」の順に、文末詞の敬卑を認めたっている。

「ネ」は、県下のだいたいに、たしかに新来のものであり、やがてこれが、土地に根をおろすようになったと見られるが、そうなってできたものに、「ゾネ」「ゾイネ」や「カイネ」などの複合形がある。

○カンコーチニ<sup>↑</sup>ナッタ<sup>↑</sup>ワケデショー<sup>↑</sup>ゾイネー。

観光地になったわけでしょうねえ。（中女→藤原）

は、松山弁の中に居ついている「ゾイネ」(→「ネ」)である。

「ネヤ」の形が、別してまたよく、「ネ」の根づきを見せていようか。愛媛県下の内海島嶼部の多く(大三島を除く)と本土の今治市中心の地域と松山市中心の地域とに、「ネヤ」がさかんである。ほかならぬ「ヤ」にむすびつかれた「ネ」は、「ネヤ」の渾体になって、おおいに土地ことばふうのものになってきているのか。——ともかく、「ネヤ」というのは、上述の地域に慣熟した複合形文末詞である。

高知県下にも、「ネ」通用の状況が見られる。土居重俊氏は『土佐言葉』で、  
若い人の間では、次第にネーが使用されだした。

との言いかたをしていられる。

やはり、本県下でも、「ゾネ(「ドネ」も)」の言いかたは、東西に見られる。ついでに、複合形のをあげるなら、「ヨネ」「カネ」「ガネ」などもある。

「ネヤ」のおこなわれることは、また、県下にかなりさかんであろうか。「土佐のネヤ」との言いぐさもあるという。——“「ネ」の上が「アーン」で、「ノーン」は目上に、「ネヤ」は同僚。”とも言われている。「ネヤ」というような形に生きて、「ネ」は、地方的な定着を見せるのであろう。どことも、こうであるように思われる。

徳島県下では、金沢治氏の『阿波言葉の辞典』を見るのに、

ネー・ネイ 文末助詞

ワイガ来テミタラネー〔俺が来てみたらね〕(下郡, 南方, 海部)  
文末につくかるい感投助詞である。上郡(山分)で「ノー」吉野川流域では「ナア」南海海部では「ネー」となる。但し東京弁の「ネー」と一寸聞くとすぐそのニュアンスがわかる。

とある。ここに「ネイ」の記述されているのは、注目にあたいする。金沢治氏の「伊島言語調査レポート」(『阿波方言』第三巻第一号)には、

「ね」特に海部で多く使われ、次第に北上してゆく傾向にある語であり、(中略)伊島では“ね”又は“ねえ”は日用語として使われている。

との記事が見える。

県下の南部・東南部という所に、「ネ」が比較的よくおこなわれているのであろうか。——南部も山地部となると、「ネ」は見せないようである。

近来は、県下の他地域にも、共通語的な「ネ」がしだいにおこなわれるようになっていよう。

香川県下は、一般に、「ネ」について言うべきことが、ほとんどないありさまである。

## 六 近畿地方の「ネ」ほか

兵庫県下の淡路島は、「ネ」を地ことばとはしていない。

播磨での『赤穂言葉の研究』には、

えらいすまん<sup>ね</sup>ネャア。

などの例が見える。「ねャア」といった表記のものも見られる。ここに見うるものは、「ネ」本位のものであろうか、「ニャ」的なものであろうか、あるいは「ネャ」的なものであろうか。播磨域に「ネ」が見られるが、多くは共通語系のものであろうか。清瀬良一氏は、「神戸方言の研究」(『方言研究年報』第一巻)で、“若い世代の女性に、「ネ」の用いられることが比較のおおい。”と言われる。

県北、但馬は、「ネ」を土地ことばとしてつかってはいまい。

但馬を除く地方では、「〜ノヤ(「ノ」は助詞、「ヤ」は指定断定の助動詞)」が、「ネー」「ネ」「ネン」の形でよくおこなわれている。播磨中部での一例は、

○イチネン<sup>ニ</sup>ジュー ガニガ トレマン<sup>ネ</sup>ー。

一年中、蟹がとれますのよ。(老女→藤原)

である。「トレマスノヤ」が「トレマン<sup>ネ</sup>ー」になっている。

○ケー カウネー。

「これ買うのや。」(これをくれますかとの買い物ごとばである。)

「ケー クレツ カー。」(これをくれますか。)とも言っている。

は、淡路島由良町での一例である。この種の「ネ」「ネン」が、他地方の人の耳には、文末詞「ネ」にまぎれ聞こえたりもしよう。しかし、実質はちがうものであることが、「ネ」「ネン」起源に徴して明らかである。ところで、さきの清瀬氏の論文に見える例、

○グジカラノガ マタ エーネヤ ネン。

(<ラジオ番組>九時からのがまたいいんだよ。) (小男→中女)

のようなになると、「ネン」が、あらためて文末詞視されることになる。「ネヤ」のもとにつけられた「ネン」は、明らかに文末詞効果のものであろう。(この「ネン」は、「ネ」文末詞出自のものではあるまい。清瀬氏の論文にある、

○ソーダン ネン。

そうですのよ。

などのばあいにしても、——清瀬氏もわかち書きにしておられるとおおり、「ネン」が、もはや、文末詞的役わりをしようとしているのであろう。)

「ノヤ」の「ネン」が、播磨から岡山県内にも浸潤しているのか。神部宏泰氏は、昭和三十年九月、岡山県東部の英田郡大原町の方言を調査されて、「兵庫県の影響が、かなり強いところす。(中略)また、「ツヤマエ オシカケテ イタンデス ネン。」というような「ネン」がきかれます。」と教示せられた。

※ ※ ※

兵庫県下の「ネ」に関する複合形文末詞に、「カイン」などがなくはない。ただし、清瀬良一氏は、上記論文で、

「カイン」を上品に言おうとして、「カイン」という、わかい女性もいる。「カイ」を「ネ」でささえることは、ちぐはぐな感がある。おちつい

た複合形とは言えない。  
と言われる。

大阪府下でも、「ネ」は、よわいであろう。

「ノヤ」の「ネ」「ネン」がおこなわれることはさかんである。

○ソーデスネ。

そうですのよ。 (中男→藤原)

これは、大阪市内での一例である。(紳士の上品な言いかたであった。)  
「ネ」とあるので、一見、東京ふうの「ネ」のようであるが、上の文アクセントに注意せられたい。下降調のイントネーションのもとでの「ネ」である。大阪南河内郡内の一例、

○オートバデ <sup>ノ</sup>ナ。オートバデ キマヒネ。

オートバイでね。オートバイで来ますのよ。

という「キマヒネ」では、「ネ」の「のや」がいかにも明らかである。

ところで、大阪府内のばあいにも、「ネン」は、文末詞ふうの用法のものにもなっている。

○キョーワ ゴジカンヤ ネン。

という「ネン」などを見られたい。(山本俊治氏「大阪方言における文末助詞」『方言研究年報』第一巻)

「のや」の「ネー」「ネ」とあるもののばあいは、土地の人たちも(方言研究家たちも)、これを文末詞ふうにあつかってはいないようである。「ネン」とあるもののばあいに、これの文末詞ふうのものと見られることがあり、また、現に、そう見たほうがよいというような用法がひきおこされている。——上の「〜ヤ ネン。」など、と。「〜ダスのや。」「〜マスのや。」のばあいは、「〜ダンネン。」「〜マンネン。」の発音になる。こうなると、音相上、「ネン」が遊離成分になりやすさろう。いきおい、人も、「ネン」を特定の文末ことばと見るようになるのであろう。——“「ネン」を語尾につける。”と説明した

りしている。

※ ※ ※

大阪府下の「ネ」に関する複合形の文末詞に、「カイン」「ワイン」「ワネ」などがある。若い女性にありがちのものであろうか。

和歌山県下では、今、私は、「ネ」について記述すべきものをほとんど持たない。——共通語的な「ネ」の浸潤している状態は、認めるにたかたくない。

田辺市奥で調査した時は、“「ネ」はちょっと上品な人でないと言わん。大阪に行ってきたような人が言う。”という、老男の談話を聞くことができた。そこでは、また、

○ケサ サムイ ナー。

けさはさむいですねえ。

の「ナー」のところを「ネー」とも言っており、“これは、世が開けてきてのことば。ていねい。”ともあった。“最近「ネー」を言うようになった。”とも言われていた。

県下に、「ノヤ」の「ネ」は、よくおこなわれている。

三重県、紀州の和歌山県寄りには、「ナー」よりも、ふつう「ネ」を言うありさまの所がある。このほうに、「ネー」と「ネヤ」とが共存したりもしている。三重県の紀州分は、いったいに、「ネ」を存しがちでもあるのだろうか。

志摩の南岸方面も、「ネ」をかなり見せるのか。——といっても、これは地ことばなのか、新共通語ふうのものなのか。

私は、志摩半島東岸の国崎町では、「ネ」についての土地人の説明，“このむかしからのことばで、したい間でつかう。”というのを聞いている。伊勢南部方面にも、古いころ、すでに「ネ」があったかのようでもある。しかし、現在の三重県一般の勢としたら、「ネ」は、あまり根づいてはいないものようである。佐藤虎男氏は、昭和二十七年のこと、伊勢湾西北岸調査の結果を

教示せられ、土地人、商店主の言、“先生から教へられたからだらう。中学生はなるほど言ふが、いづれは忘れてしまふんだらうと思ふ。そして、三重県でネを使ふのは磯山と富田だけですなあ。”というのを示された。

三重県下にも、「のや」の「ネー」「ネ」「ネン」がある。私が伊賀で聞いたものには、

○ソーダスネァ。

そうですよ。 (老女→藤原)

などというのがある。「ネァ」や「ニァ」と表記したいものが聞かれた。

※ ※ ※

三重県下の「ネ」に関する複合形文末詞には、「ゾネ」「カネ」「カイネ」「ワネ」などが見いだされる。——「ネ」文末詞が比較的好く見いだされる当県内のことと見うるようである。

奈良県の南部、吉野郡の東域で調査した時は、「ネ」文末詞について、“昔からのこのことば”との説明があった。“「ネー」ワ ヨー イーマツタデスワ。(「ねえ」は若いころからよく言いましたですわ。)”との感想も聞かれた。そういう「ネ」は、純粹の「ネ」だったのか。もしかして、「ニ」が「ネ」になったということもありはしなかったか。——熊野路に「ニ」が存在するからである。ともあれ、この地域の「ネ」例をあげてみる。

○エライサ<sup>ニ</sup>ャ ネー。

えらい人だねえ。

この地の「ネ」について、“心やすいものに。同輩から下に言うことば。”と説明してくれた人もあった。

吉野郡下の、十津川すじに対する東の北山すじでは、

○ネヤ。アノ ネヤ。

ねえ。あのねえ。

などと言っているという。

新共通語の到来によることかどうかは不明であるが、本県下の一般に、「ネ」が見いだされる。『大和方言集』にも、「ネー」があげられていて、「そりやネー」などの実例が見える。

『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都祁村」の条には、

f モー グニ カエッテシモテ アカンニェー

もう 愚に 帰ってしまって だめですよ。

とある。「ネ」が「ニェー」と発音されているのか。

「のや」の「ネ」「ネン」は、県下の全般によくおこなわれているようである。『大和方言集』の「何してんネン」などになると、「ネン」が、文末詞ふうのものになっているとも見られるか。

京都府下に関して、今、「ネ」を論じようとしても、私の手もとには、さしたる材料がない。京都市域などに「ネ」がおこなわれていることは、現在、もはや、言うまでもないことであろう。共通語勢力の流行が、よく考えられもする。複合形の「ワネ」なども聞かれる。

丹後での経験はこうである。老女が自己の病気を語って、

○キョーネンカラ ヤメテ ネー。

去年から病んでねえ。

と言っていた。これの「ネー」は、その時、よそことばのように思われた。(病んでいることを「ヤメテ」と、方言による表現をしながら、つぎには「ネー」である。)

京都弁ほかにも、

○ハー、シッテン ネン。

ええ、知ってるのよ。 (老女→中女)

のように、「のや」の「ネン」がおこなわれている。やはり、「ネン」が文末詞化しようとしているか。

滋賀県下に関しても、言うべきことがすくない。

「ネ」がおこなわれないうちもなかるうが、一般には、その勢力がよわいのか。

※ ※ ※

それにしても、「ネ」に関する複合形の「カイネ」や「ガネ」などが見られもする。

京都府下や滋賀県下をはじめとして、近畿一般に、「ネ」は、まずよわいと言えようか。これに反して中部地方には、「ネ」のつよいきおいが見られる。

### 七 中部地方の「ネ」ほか

中部地方には、地ことばとしての「ネ」が広く見わたされる、と考えてよいのであろう。北陸方面は、やや別種の地であるとしても、こちらにも、「ネ」がさかんである。「ネ」になれた言いかた、「ネ」のこなれた言いかたが、よく聞かれる。

以下に、中部地方の諸県を見ていこう。

福井県下も若狭となると、例のごとく近畿ふうである。「ネヤ」の複合形などがおこなわれてもいるが、小浜湾頭の調査では、老男のことは、「ネー」はここでは言わんノー。」というのが聞かれた。しかし一方では、共通語的な「ネ」が通用されている面もあろうから、ことは単純でないといわれる。小浜湾頭の村での調査のさいにも、人は私に対しては、すぐに「ネー」を言うことができた。

『全国方言資料』第3巻の「福井県遠敷郡名田庄村納田終」の条には、

f シラシテ クダンセネァ

知らせて くださいよ。

などが見える。「ネ」の訴えが、「ネァ」形をよびおこしている。

若狭には、「のや」の「ネン」も見られる。ところで、

○ソーヤ ネン。

そうですよ。

などは、「ネン」が文末詞ふうであると見ることができようか。

越前に属する敦賀市では、「アツイ ニャ。」(暑いね。)などの「ニャ」がよくおこなわれているか。「ネ」は、よわいものなのであろう。

越前の、いわゆる嶺北の一般には、どのようにか「ネ」が存在していよう。ところで、越前西部一地での調査では、「ネ」のつかわれかたがよわいのを経験した。

『全国方言資料』第3巻の「福井県丹生郡織田町笈松」の条には、

f………… ムカジャ タケ タケ ナゲー タケ タテテニエー

昔は 長い 竹を 立ててねえ、

どの記事が見える。「ニエー」は、「ネー」的なものか。

※ ※ ※

福井県下の「ノ」に関する複合形の文末詞には、「イネ」「エネ」「カネ」「ケネ」「ガネ」「ガイネ」「ワイネ」「ワネ」などがある。

石川県下には、「ネ」がふつうによくおこなわれているか。「ネ」がよく運用されている証拠に、とでも言おうか、本県下に、「ネ」に関する複合形がよく定着している。

『普通語 金沢方言集』『松任地方の方言』には、「おいね」というのが見えており、「さうさう」との応諾の意のものであることが注せられている。このような、特定の習慣文の中に安着せしめられている「ネ」は、早くから土地ふうであり得た「ネ」であらう。「オイ ネ。」は、能登にもおこなわれている。これは、わるいことばではないらしい。——むしろ、よいことばでもあるか。私が金沢市で聞き得たしぜんのことばの「ネ」は、

○マチン ナットル ネー。

町になってますねえ。(中女→初老男)

などである。愛宕八郎康隆氏は、「能登島向田方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

「ネ」ことばがよく行われており、これが、「ナ」「ノ」ことばと、品位上一定の対応関係を示している。

と述べていられる。また、

〔ネー〕〔ネ〕 ひろく行われて、品位も高く、土地人は「敬いことば」「きれいなことば」と意識している。

とも述べていられる。私は、能登半島で、輪島の人、“やさしく言うとか、敬意を表する時とかに「ネ」をよくつかう。”というのを聞いたことがある。

能登半島西岸での調査時には、「ニ」に近い発音の「ネ」をよく聞いた。

○チューハンカラ 後には ケッコニ カゼ アッテ ネー。

昼飯からのちにはけっこう風があつてねえ。

「ネー」と「ニ」との間のもののような「ネー」がよく聞かれる。——とはいいながら、ものは「ネ」である。

恩師、斯波六郎先生は、半島西北辺の皆月のご出身である。かつて先生に、私が、“隣家の人によびかける時に、「となり ニー。」の言いかたをするでしょうか。”とおうかがいすると、先生は、

○トナリ ネー。

と言うと教示された。先生の発せられた「ネー」は、「ニー」の実質のものであったかもしれないと、今、思われもする。

「ネ」の、「ンネ」となることもあるのか。岩井隆盛氏は、国立国語研究所編の『日本方言の記述的研究』に寄せられた「石川県金沢市彦三一番丁」で、

「あのね」に対するアノッネは小松や能美に、

とするしていられる。

能登半島では、「ネ」のよびかけが「ネァ」音にされたりもしている。

加賀能登に、「ネ」の「ネン」もある。長岡博男氏は、「金沢市地方の方言

『に』の一考察」(『方言』第三巻第一号)で、「アノ<sup>◎◎</sup>ネン。トナリノ<sup>◎◎</sup>ネン、ボンナ<sup>◎◎</sup>ネン オラヲタタイタゾ<sup>◎◎</sup>ネン」(あのね、隣家のね、子供がね、僕を撲りましたよ)の例について、

右は子供が母に訴へる時の用法で、やはり子供が親に対する尊敬の気分が「ねん」の中に入れて居る。

と説明してられる。

※ ※ ※

本県下に定着している、「ネ」に関する複合形の文末詞には、「ネヤ」「ニヤ」、「ヤイネ」「エネ」「イネ」、「ゾネ」「ゾイネ」、「カネ」「カイネ」「ケーネ」、「ガ(ガ)ネ」「ガ(ガ)イネ」「ゲ(ゲ)ネ」、「トネ」「トイネ」、「トコトネー」、「ワイ(エ)ネ」「ウェーネ」「ワネ」、「マネ」などがある。これらの多くが、加賀能登におこなわれている。「ゾネ」など、加能におこなわれることが広い。

○何々は ドーデショー エネー。

何々はどうでしょうかね。

は、加賀の金沢での、野菜売り(女性)のことはである。

○ウラ、コナイダ ハゴテ ハゴテ、ドーモ ナラナンダ ゾネ。

わしは、こないだ、はがゆくてはがゆくて、どうにもならなかったよ。

(老女間)

は、能登西岸富来町での「ゾネ」例である。

「ケーネ」の熟用されていることは、能登にいちじるしいものがある。「ケーネー」ともなっている。

○イ<sup>二</sup>チジ ケ。三ジ ケーネー。

一時かい？二時かい？

このように、「かい」というたずねの言いかたをして、さらにそれに「ネ」を複合させるのであるから、これに、方言色が顕著である。「ケーネー」は、「ゲ(ゲ)ーネー」にも対応している。

○ドコイ イク デーネー。

どこへ行くのかね？

これは、輪島市での一例である。

「トコトネァー」の一例は、下記のとおりである。

f ホンナヤトコトネァー

そうですとも。

これは、『全国方言資料』第3巻の「石川県輪島市名舟町」の条に見られるものである。「トコト」という文末詞は、石川県下にいちじるしいものである。最後に、「ワイネ」にあたる「ウェーネー」などの例をあげる。

○コリャ オレノガヤ ウェーネー。

これはわしのだわ。

○ドッコイモ イキンソ<sup>ン</sup>エ<sup>ン</sup> ウェネ。

どこへも行きませんわ。

これまた輪島市のものである。複合形のものさまざまなおこなわれかたの中に、「ネ」文末詞定着のさまが明らかである。

——石川県下には、「ネ」文末詞流行の、興味ぶかいさまが見わたされる。

富山県下にも、「ネ」が、老少にわたり、ふつうにおこなわれている。婦人は、ことに「ネ」をつかいがちであるか。

○ソレ ナンチュー ジー ネー。

それはなんという字ですか。

これは、富山市近郊の「ネ」である。

本県下に、「ネァ」の言いかたが注意される。『全国方言資料』第3巻の「富山県氷見市飯久保」の条には、

f アツツイコッチャネァー

暑いことですねえ。

とあり、同巻の「富山県下新川郡入善町小摺戸」の条には、

f アノ オラ コナイダカラ ホスカッタ ドンプルネァ  
 わたし この前から ほしかった どんぶりね、  
 とある。

本県下に、「ネイ」の形もあるか。古く、富山県教育会編『富山県方言』に、「高岡の挨拶」

「そっじゃけねうたがえに、んなきーつけんなんまへんたいねィ。」（中流の女同志）

というのが見える。

「ネ」の異形としうる「ネン」も見られる。

○アトカラ イク ワイネン。

あとから行くわよ。

（「ワイネン」の形が出ている。）

○コレー ネ[e]ーン。

もし、ごめんなさい。

は、富山市西北郊での例である。高岡市域でも、「ネン」を聞くことができる。（この「ネン」を見ても、上の「ネイ」の存立が、「ネー」関係のものであることがわかる。）

富山県下に、「ニェー」とされているものがある。『全国方言資料』第3巻の「富山県下新川郡入善町小摺戸」の条に、

f ホンニェー

ほんとにねえ。

というのが見え、また、同巻の「富山県氷見市飯久保」の条に、

f ア アツイニー ゴクロサマヤニェー

暑いのに ご苦労さますねえ。

というのが見える。「カニェー」「カイニェ」「ワニェー」などというのも見える。「ニェ」は、およそ「ネ」的なものであろうか。

※ ※ ※

本県下でも、「ネ」に関する複合形の文末詞が多彩である。「エネ」「イネ」、  
「ゾイネ」「ゼネ」、「カネ」「カイ(エ)ネ」「ケネ」、「ガ(ガ)ネ」「ガ(ガ)イネ」、  
「トネ」「トイ(エ)ネ」、「チャネ」、「モンネ」「トコトイネ」、「ワイネ」(「ワイネ  
ン」も)「ワネ」などがある。「ワイネ」や「ガ(ガ)イネ」のおこなわれるこ  
とは、いちじるしいものがある。

○ナニ シトシ ガイネー。

何してるんだよ。(問い) (老女→孫)

は、「ガイネ」の一例である。

○ドシテモ ケンカシトルヨーニ ミエルッ チャネア。

(このへんの人はおお声で話すので) どうしてもけんかしているよう  
に見えるってことよねえ。(中女)

は、県東部での「チャネ」の一例である。——「ネ」の訴えが、「ネア」の音  
形になっている。

富山県下もまた、「ネ」表現のゆたかな所である。

新潟県下にも、ほぼ全般的に「ネ」の表現が認められるようである。——  
「ネ」ことばが、土地によく生きているのであろう。

細野哲雄氏は、「ふるさとのおなまり」(藤原注 旧新潟県北蒲原郡乙村大字荒井浜) (『言  
語生活』第七十六号 昭和41年5月)で、

目上に対しては「ねす」という助詞を使い、同輩には「ね」、目下の人  
には「のう」を使う。

と述べられる。氏は、この用法別を、なおくわしく説いていられる。

「ネ」は、他地でも、しばしば同輩ことばと言いうるものになってもいるか。

直江津で私が聞いたことば、

○ドコイ イク ノー。

○ドコイ イク ネー。

どこへ行くね?

について、土地の人のくだした説明は、“「ノー」のほうがいいことば。「ネ」はやはりしたしみのあることば。”というのである。“「ナー」は言わぬ。”ともあった。

県中央部で聞いた実例は、

○キョーワ サムイ ネー。

きょうはさむいねえ。

である。これに関しては、土地の老女の、“友だちどうしなら「ナー」であり、「ナー」のほうがぞんざいである。”との説明があった。

新潟県北部、岩船郡下での聞きとりでは、

○ドゲ イガシャル ネ。

どこへ行きなさいますか。

○ドゲー イグ<sup>↑</sup>ネ。

どこへ行くね？

などの例が得られている。これらの「ネ」に関して、土地の識者は、“いくぶん上品。”とも語ってくれた。

渋谷玲子氏は、「三光方言の待遇表現」(『国文学会誌』五号)で、北越、新発田市域の三光方言について記述され、人代名詞「オメ様」に呼応する文末詞「ネ」「ネン」などをあげていられる。

中越以北では、「ネー」の発音が [ne:] になりがちでもある。——それが、ときに、「ニー」に近くも聞こえる。

佐渡に、「ネイ」があるのか。さだかでない。

本県下に、「メー」という問題形がある。大橋勝男氏が、昭和四十三年六月に教示せられたところによるのに、新潟市内野町のうちなどには、

a ソレデ コヨーワ<sup>↑</sup> ネー。ホントーワ<sup>↑</sup> ワトコンチワ<sup>↑</sup> タテラン<sup>↑</sup>  
(メーか?)

ネカッターダ。

ホンデ<sup>↑</sup> ワトコノ<sup>↑</sup> チホーワー。アノー ホレ (〜さんの)

メー。

b あゝ、あそこに土蔵ありますね。

a ドゾーノ　　メー。

b はい。はい。　　（aは67歳女，bは青男である。）

というような言いかたがある。「ネ」もふつうにおこなわれていることが、氏の多くの教示例に明らかであり、「ネーネ」というのも見えるありさまであるが、さてこの「メー」は、何であろう。「ネ」が「メ」に転じた明らかな事実は、まだとらえ得ていない。しかし、今、上の事例に接しては、「ネ」→「メ」の転訛ということも、想像されてくる。じっさいは、どうなのであろう。

※ ※ ※

本県下での「ネ」に関する複合形の文末詞には、「エネ」「イネ」「ゼネ」「カネ」「ガネ」「トネ」「テネ」「テバネ」「モンネ」「ワネ」などがある。

○ドーカ　タノム　エネー。

どうかたのむわねえ。

は、中越の「エネ」例である。ただし、上の「エ」は、ことによると、「ワイ」の「ウェー」からの「エ」かもしれない。（と、調査時に思われた。）

○わたしたちの　ことばは　スバラジ　ワネ。

……………すばらしいわね。（逆説的表現）　（中女間）

これは、新潟市内で聞いた、明らかな「ワネ」の一例である。

f ヒダモンネ

火ですものね。

『全国方言資料』第2巻の「新潟県糸魚川市砂場」の条には、これが見える。

○ソーヤンダ　テバネー。

“さようございます。”

○ソーヤンダ　テバネー。

“そうなんだよ。”

は、新潟市で聞いた「テバネ」例である。（ちなみに、「ソーヤンダ ……………。」の言いかたは、「ソー」がぬけて、「ヤンダ　テバネ。」のようにもなりがちで

ある。)

北陸について述べるが多かったのに比し、岐阜県下に関しては、今、私に、述べるべき多くのものがない。

美濃中部の北に調査した時は、土地ことばに「ネ」のないさまが見られた。

しかし、美濃の東西に、どのようにか「ネ」もおこなわれているらしい。『岐阜県方言集成』には、揖斐郡のこととして「ねえ。」があげられており、「上輩に」とある。『全国方言資料』第3巻の「岐阜県揖斐郡久瀬村西津汲」の条の「ネ」例は、

f ヨカッタネー  $\left( \begin{array}{c} \text{エー} \\ m \\ \text{ええ。} \end{array} \right)$  ホントニ  
よかったねえ、ほんとうに。

などである。

東の郡上郡の方言を記述した『郡上方言』にも、

モー イツカ ネ もう 行つたろうよ (老人)

などが見える。

県下に、「カネ」「ワネ」などの複合形もある。

愛知県下では、「ネ」ことばが、尾張でよりは三河に、よりよくおこなわれているか。

○ゼニモ イラント オモウ ネー。

かねもいらなと思うねえ。

は、尾張知多半島頭部での一例である。(佐藤虎男氏教示例)

なお、佐藤虎男氏は、「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、「ネ」(ネー)について、

三河・尾張には、かなりよくおこなわれている。品位は、三河のは中あるいは上、尾張のは中等ということになる。

と言われる。

三重県下では総体に下品なことばとされており、三河とそれ以西とのあいだには、品位の差があるようである。

とも言われる。

高瀬徳雄氏は「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」(『方言研究年報』第一巻)で、「ネ」(ネー)を、

男女ともに用いる。男、および中年以上の女が用いるばあいには、やや上品なもの言いになるのがふつうであり、子供、および青年層以下の女子においては、もっともふつうの言い方である。

とせられる。

私が渥美半島南岸でとらえた実例は、

○マ<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup> クルデ<sup>↑</sup> ネ。

また来るからね。

○マ<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup> オイデ<sup>↑</sup> ンネ。

またいらっしゃいね。

などである。「デ」と「ネ」とのあいだに「ン」のあるのが注目される。渥美町立伊良湖岬中学校の「方言表」に、

かにね ごめんなさいね 勘忍してね

というのもあった。「勘忍 ね。」が「かにね」となっているのからしても、ここに、「ネ」ことばのよく土地ふうであることが認められる。

本県下に、「ネ」の変形の「ネン」がかなりさかんである。人々は、この「ネン」の三河におこなわれていることを指摘している。しかし、尾張にもあるらしい。余語敏男氏は、小牧市域の事実についての、

「ハヤー ネン。」「エーヒジャ ネン。」は目上の男に対する挨拶だから、  
「早いね」「好い日だね」よりは丁寧で、「お早うございます」「好い日  
でございます」に相当するのではないか。

というような教示を寄せられた。なお、「ネン」は「ナモ」より敬意が低い。」と言われる。

知多半島に接する、三河、刈谷の出身、磯貝英夫氏は、自己の生活語に即して、「ネー」はよそいき。”“それをやわらげて「ネン」。”と言われる。——おもしろい事情である。（「ネ」はよそいきになりやすく、「ネン」はやわらかで、よそいきのものではないともいうことか。）

※ ※ ※

愛知県下には、「ヨネ」「ゾネ」「カネ」「ガネ」などの複合形文末詞が見いだされる。

静岡県下、——中部地方東海がわも静岡県下となると、「ネ」文末詞の、よく地方語生活に生きているさまが見られる。「ネ」は、ふつうの定着方言形である。

内田保太郎氏の「浜名郡 鷺津町付近」〈挨拶方言〉（『土乃以路』第十二巻 第四号 昭和10年12月）には、浜名郡鷺津町付近についての、

特に改る場合には標準語を使ふ事が多いやうです。平常は「ねえ言葉」あーだね、かうだねを使ひそれにちよい〜ござんすが交ります。

との記述が見える。諸方言書が、「ネ」の通行を指摘している。（もっとも、山口幸洋氏の『静岡県本川根方言の文』には、

ネの類は、ハンブンダネ（39）他（38）にみられるが、あまり使われない。とある。北部山地方面は、こうでもあるのだろうか。）

県下一般での「ネ」の用法としたら、「何々ダ ネ。」の言いかたのおこなわれることが、一つ目だたしかろう。

○ア、ソーダ ネー。

ああ、そうだねえ。 （青女→中女）

などが、慣用例である。

「ダ ネ」が「ダ ンネ」ともある。——「ン」は「ニ」にあたるものか。質問ではなく説明などの時に、こういう言いかたになるか。

○ヨメッコたちが デル ダンネー。

これは、識者注によるのに、“お嫁さん達が出るですね（出るですよね）。”ということである。

○ケブカイ ダンネー。

毛ぶかいんだよね。

これは、「両親さんが毛ぶかいから、この赤ちゃんも毛ぶかいんだよね。」というところである。（「ダンネ」は、県下に広く見られるか。）

伊豆半島でも、「ネ」がよくおこなわれている。私の南辺調査の時は、気やすく「ナー」を言い、あらたまれば「ネー」を言うというようなようすも受けとられた。また、自己本位の語りの時は「ナー」を言い、対話性の濃い時は、当然のように「ネ」を言うというありさまも受けとられた。

※ ※ ※

本県下の、「ネ」に関する複合形の文末詞には、「イネ」「エネ」、「カネ」「カ  
イネ」、「ガネ」、「ンネ」、「ワイネ」「ワネ」などがある。

○下コイ イク ダネ。

どこへ行くかね。

といったような、「ダネ」の言いかたのものばあいは、「ダネ」文末詞をとることができなくはないようである。

○サガライ イク ダンネ。

相良へ行くんだよ。

にしても、「ダンネ」がとりたてられる。

長野県下に関しては、『信州方言読本 語法篇』に記事があり、「ネ」は、

「な」にくらべると丁寧さを加えた親愛感をもって余情を添える語であります。

とされている。

県西北辺でも、

○ソーダ ンネー。

“そうですね。”

(“ちょっと鄭重。ふつうには「ソーダ ナー。」と言う。”)

○タイヘンニ イル ダンネ。

たいへんたくさんいるよ。 (中男→藤原)

などと言っているのが聞かれる。——「ダンネ」が見られる。(この地で、「行ってからね。」というのでも、「イチカラ ンネー。」と言っている。「そ  
うでしょうねえ。」というのでも、「ソーズラ ンネー。」と言っている。)

大町市から東にはいったあたりの「ネ」例は、

○ゲンキデス ン ネー。

元気ですね。 (中女→藤原)

などである。

「……ダンネ。」「……デスン ネ。」など、「ン」の聞こえは、当県下  
にもいちじるしい。

※ ※ ※

長野県下の「ネ」に関する複合形文末詞には、「イネ」「カネ」「カイネ」「ン  
ネ」「ダンネ」「ワネ」などがある。

山梨県下には、「ネ」文末詞が、おおよそ東京語でのようにおこなわれてい  
ようか。「ネ」がよくつかわれており、「サ」もまた、よくつかわれている。  
県西南部での例は、

○イヤナ コン サ。ホントワ ネ。

(ことばをわるく言うなんてことは、まったく)いやなとき。ほん  
とはね。

○イナイチュー コン サネー。

いないということさねえ。

などである。

甲府人の談話に聞かれる「ネ」例は、

○オンセンソノモノワ ヌルイデスケド ネー。

温泉そのものはぬるいですけどね。(六十歳男→藤原)  
 などである。——この文アクセントでの「ネー」という発言調子に、土地ことばらしさがよく出ていようか。

#### 八 関東地方の「ネ」ほか

関東地方は、ひとくちに言って、「ネ」のくにである。全国でも当地方がもっともよく、土地ことば「ネ」の安定勢力を見せていよう。大橋勝男氏の『関東地方域方言事象分布図』第二巻の Map. 12 は、「ネ(ネー)」の大通行を示して明らかである。(図上では、群馬県下に「ネ」がややよわいありさまである。西部なり北部なりの山地域は、やや問題の地域なのであろうか。)

「ネ」と「ヨ」と「サ」とが、関東によく生きていよう。

「ネ」は、多用されるとともに、品位上でも、諸品位にわたって用いられている。

「ネ」とともに「ナ」のおこなわれることも、既述のとおりである。それに「ノ」もあって、ことがらはかならずしも単純ではないけれども、ナ行音文末詞の中に「ネ」のひときわつよく光ることは、関東が奥羽以上であろう。

「ネ」と「ナ」との用法に関しては、対外的用法、対内的用法といったような観点も、必要であるかに思われる。

神奈川県下西部での「ネ」例は、

○ソーダンベ ネー。

そうだろうよねえ。(受けひくことば) (中女→老男)  
 などである。この地で聞き得た、人の感想には、「「ネ」と「サ」と、半々ぐらいかしら。」というのがある。

※ ※ ※

本県下での「ネ」に関する複合形文末詞には、「カネ」「ノネ」などがある。

東京都に関しては、まず、『東京方言集』の例がひかれる。

ばかに<sup>△</sup>シテヤガンネー

そのくらみなこと、アタリマエダーね。

などとある。

今日の東京語の「ネ」を聞くにつけても、「これ、何々<sup>ノ</sup>ネ。」など、名詞構文を受けて「ネ」をつかうのが、一つ、注目される。

『全国方言資料』第7巻の「東京都利島村」の条には、

f………… ミチエ ネイッタ コトラ シッタネ

道に 寝た ことを 知っていますか。

とある。「知っていますか」のところか、「シッタネ」である。問いの「ネ」がよくおこなわれているようである。

※ ※ ※

東京語の、「ネ」に関する複合形文末詞では、まず、「ヤネ」が指摘される。『東京方言集』には、

その考へてゐることがオカシーヤね。

などとある。こういう「ヤネ」は、だいたい関東によくいつているものではなかろうか。「ヨネ」に似た「ヤネ」である。

さてその「ヨネ」であるが、今日は、相手の言を承引するのに、「そうですねヨネー。」と言われることが多い。(これがおおよそ、共通語法的なものにさえなっていよう。本来的な東京語では、この種の「ヨネー」は、どの程度おこなわれているのであろうか。「ヤネ」が根づいていて「ヨネ」はまれたというようなことがあったら、これはおもしろい。)

べつに、「カネ」「ガネ」「ワネ」などがある。

千葉県下に「ネ」が一般的であることは、多く言うまでもない。「ダネ」「デスネ」もいちじるしい。県東南辺での「ネ」例は、

○コエガ チガウミテ<sup>ー</sup> ネー。

声がちがうみたいねえ。(録音機を聞いての感想)

などである。

伊藤左千夫<千葉県>の『野菊の墓』には、「ねい」が見える。

『全国方言資料』第2巻の「千葉県安房郡富崎村布良」の条には、

*m*ホッラッテ オイネンネン

それだって だめだよ。

とある。最後の「ネン」は、どういう「ネン」であろうか。

※ ※ ※

本県下での「ネ」に関する複合形の文末詞には、「ヨネ」「サネ」などがある。

○サヨ<sup>ー</sup> サネ<sup>ー</sup>。

さようですねえ。(老男→藤原)

は、「サネ」の一例である。

「どうどうしナ ネ。」という言いかたは、「しなさい」の「しナ」を、「ネ」で受けたものである。したがって、この種のものから、「ナネ」文末詞をぬくことなどはできない。

埼玉県下にも、県下一般に「ネ」がおこなわれている。県東北部での一例は、

○ノッテ コタ ツカイマセン ネー。

「ノ」っていうことはつかいませんねえ。(老女→藤原)

である。同地の中学二年生男子のことばは、

○マッスグ コッチ<sup>↑</sup>ー イッチャウンダ ネー。

まっすぐこっちへ行ってしまうんだねえ。

などである。

県下に「ダネ」「デスネ」が、よくおこなわれている。

県西の秩父地方にも、「ネ」がよくおこなわれている。ただし、“年寄りには「ムシ」をつかう。”などとも言う人がある。秩父の、

○アバ<sup>↑</sup>ネ。

さようなら。

は、「アバ<sup>↑</sup>ナ。」とともに、“子どもなんかさがさかんに言うことば”である。

※ ※ ※

本県下の「ネ」に関する複合形の文末詞に、「ヤネ」「カネ」「ワネ」その他がある。

「ダネ」は「ダーネー」とも言われている。

群馬県下の桐生で聞かれる、女学生の「ネ」ことばは、

○マイニチ<sup>↑</sup>ニモツガ オークテ、ヤー<sup>↑</sup>ネー。

毎日、荷物が多くて嫌ね。

などである。(斯林不二彦氏教示) 体言の言いかたを受ける「ネ」のおこなわれることも、ふつうのことである。

やはり本県下でも、「ダ<sup>↑</sup>ネ」がよくおこなわれており、「ダン<sup>↑</sup>ネ」ともある。

○ミヤザキワ イー トコダン<sup>↑</sup>ネー。センセー。

宮崎はいい所だねえ。先生。(老女→藤原)

などと言われている。「ン」の見られるものには、なお、「タカイン<sup>↑</sup>ネ。」(マア高価だわね) <斯林氏教示>というようなものもある。

※ ※ ※

本県下の「ネ」に関する複合形の文末詞には、「ヨネ」「ヤネ」「ヤイ(エ)ネ」「イ(エ)ネ」「サネ」「カネ(ガネ)」「モノネ」「モンネ」「ワイネ」「(来ラーネ)」「(〜まきーネ)」なども。「ワネ」などがある。

○イゴ<sup>↑</sup>ガネ。

行きましょう。(勧誘)

○ヤロ<sup>↑</sup>ガネ。

やりましょう。(勧誘)

など、「カネ」が「ガネ」とも言われているのは、いかにも北関東でのことらしく思われる。

栃木県下も、「ネ」のさかんな所である。「ダネ」がよくおこなわれている。

○ナ<sup>オ</sup>シチャッタカン <sup>ネ</sup>ー。

(家を) なおしたからねえ。

は、県南の一例である。——「ネー」が「ニー」に近くも聞こえる。

○オ<sup>コ</sup>メ <sup>下</sup>グノガ <sup>ザ</sup>ル <sup>ネ</sup>。

お米をとぐのがざるね。(説明) (老女→藤原)

は、県北の一例である。

※ ※ ※

本県下の「ネ」に関する複合形文末詞には、「ゾネ」「ガネ」「モンネ」「ワネ」などがある。

茨城県下の状況は、栃木県下の状況によくつらなっている。

○ンチジ <sup>ネ</sup>ー。

七時ね。

は、県西南辺での一例である。

○ゴ<sup>ビ</sup>ガ <sup>ア</sup>ガリマス <sup>ネ</sup>ー。

語尾が上がりますね。(“「ネー」というのがぐーと上がっちゃう。”)

は、水戸弁での一例である。

県下に、「ネイ」なり「ネン」なりの形もあるのかどうか。定かでない。

※ ※ ※

本県下の「ネ」に関する複合形の文末詞には、「ヨネ」「ゲネ」「モネ」などがある。

f コレガ イジバンダド シトグダ                      ネーノゲネー

これが いちばんだと きまっているんじゃ ありませんかね。

は、『全国方言資料』第2巻の「茨城県新治郡葦穂村」の条に見える「ゲネ」の一例である。——「カイネー」が「ゲネー」になっている。

## 九 東北地方の「ネ」ほか

東北地方にも、およそ全般に「ネ」が見わたされる。ただし、そのいきおいは、関東地方のそれにおよぶものではなからう。「ネ」は、存在しはするものの、その地位は、比較的よわいものかもしれない。

福島県下は、概略、その全般に「ネ」がありうるのか。それにしても、存立状況の強弱が見られるようである。東北本線すじの、いわゆる中通りは、なかんずく、「ネ」の定着ぶりの見られる所か。

私が県西北辺の調査にしたがった時は、一地で、「ネ」はその土地ことばではないようすが見られた。男性たちなど、私などには「ネ」をつかっていたのであるけれども。

かつて、高松・宇野の鉄道連絡船で、福島県下の人たち（老年層）の会話を聞いた時は、「ネ」相当の「ネイ」が聞かれたように思う。が、それは、「ナイ」とも聞こえるようなものであった。当県下に、「ネ」の「ネイ」があるのかどうか。

県西南辺の檜枝岐では、「ネミ」がおこなわれているという。早く、菅野宏氏のご報告がある。「ミ」は何か。それは、今、追求しないとしても、ここに「ネ」のあることは認められよう。

宮城県下には、「ネ」が、一般的に、よくおこなわれているようである。松島湾岸での、私のかつての一週間調査のばあいにも、そこに、「ネー」が地ことばになっているのを見ることができた。（「ノー」は、通常おこなわれていな

い。)

仙台市内の事例だと、

○ンダカラ <sup>↑</sup>ネ。

そうだからね。

などとあって、「ネ」が一般通用のものらしく、「ナ」文末詞が用いられるのは、“親子の間などで。”とのことである。

石巻市域での調査事例によると、

○アツ[ü]イ <sup>↑</sup>ネー。

暑いねえ。

は、“やさしいことばとしてつかう。”という。人は、“目上の人に対しては「ネ」をつかう。「ネ」はていねいなことばのうち。”と言っている。「ヨーグキ[i]タ <sup>↑</sup>ネー。」はよい言いかたとされており、「ヨーグキタ <sup>↑</sup>ナヤ。」(よく来たねえ。)となったものについては、“男はことばが荒くなるから「ナヤ」と言う。”との説明がなされている。

当県下にはかぎらないことであるが、「ネ」の発音が〔ne〕ともなれば、これは、いわゆる共通語の「ネ」とはちがった「ネ」に聞こえる。しかしまた、文末詞「ネ」なるがゆえに、本県下でも、「ネ」がかなりきれいな「ネ〔e〕」に発音されてもいる。

○ンペラン<sup>↑</sup>ネー <sup>↑</sup>ネー。

おぼえられないねえ。

これは、松島湾岸で聞いたものであるが、最後の「ネー」が、きれいな「ネ」に聞こえた。

県下で、「ネ」が、上がり下がりの、大きい弯曲の調子に発音されることもある。地方的な一文アクセント傾向とも言うべきか。

辞去のあいさつの、

○タッダ <sup>↑</sup>イマ <sup>↑</sup>ネ。

「ただいまね。」(ではさようなら。)

などのばあいは、上がり調子の「ネ」の声調が、また、土地ふうに安定相を見せている。

本県下の、「ネ」のよびかけの習慣の中に、

○ンダ ネァ。

そうですねえ。

など、「ネ」に、小さな「ァ」音をとみなわしめるものがある。——私の言う文末訴え「ァ」音である。「ネ [e]」の聞こえが [a] に向けてしせんに拡大されている。人々の発言での訴えの、当然の心理によるものであろう。仙台市内での一例は、

○ワカ<sup>バ</sup>イ シェン<sup>バ</sup>シェワ ダ<sup>バ</sup>メダトモウン<sup>バ</sup>ダケド ネァ。

若い先生はだめだと思っただけどねえ。(方言録音のばあいのこと。)である。

かつて私は、東南の旧角田町で、

○マ<sup>バ</sup>ダ オサム<sup>バ</sup>[ü]ク[ü] ナリ<sup>バ</sup>[i]シ[i]タ ネン。

またおさむくなりましたね。

というのを聞いたことがある。当県下に「ネン」もあるのか。——ことによると、おなじく角田町で聞かれた「アノ ナイン。」(あのね。)などの「ナイン」ないし「ナエン」が「ネン」に転じたりもしているか。

「ネ」の訴えに「ス」のつけそえられるばあいもある。『仙台市史』6にも、「ネェス [nesu]」が見えている。

「ネ」にまた「レ」のつけそえられることがある。松島湾岸例は、

○ンダガラ ネレ。

それだからねえ。

である。人にただしたところ、「ネレ」には、“念をおした気もち”“訴える心”があるとの答えがあった。「レ」は「ワレ」系の「レ」であろうか。こういうものをつけたりするほどに、「ネ」が活用されているというわけであろう。

※ ※ ※

当県下の「ネ」に関する複合形の文末詞には、「カネ」「チャネ」「モンネ」などがある。「モンネ」は「オンネ」ともなっており、「オネ」ともなっている。

○(あの子の帰るのは) ュ[ü]-ガタダ オ<sup>↑</sup>ネ。

あの子の帰るのは夕方だもんね。(中学生のむすこの帰り時刻のこと)

(中女→藤原)

は「オンネ」の一例であり、

m…… ソノマエーガ アノ イタオ ミナ スイタモンダオネ

それ以前は あの 板を みな 敷いたものだったね。

は、「オネ」の一例である。(『全国方言資料』第1巻「宮城県宮城郡根白石村」)  
「オンネ」のばあい、「オン」が早口の発音に聞こえて、かつは、小音めいて聞こえることもある。

○ンダバ オ<sup>↑</sup>ンネー。

そうでしょうね。

など、「オン」が低音のばあいはなおさらそうである。

なお、複合形に「ワネ」などもおこなわれている。

山形県下では、庄内地方を除く地域に、「ネ」がまず是一般的であろうか。

「ネ」のよびかけが「ネァ」となってもいる。

庄内地方は、「ノー」のさかんな所である。それゆえ、土地の人々も、しばしば、“「ネー」はこのへんでは言わぬ。”と言っている。しかし、酒田市などでは、「ネー」も聞かれる。どういう来歴のものか。三矢重松氏の『庄内語及語釈』には、

酒田辺は港の為かネイといふこと少しある。それから郷中などはネヤともいふのはノヤの転で、東京のネとは根本が違ふ様は思はれる。

とある。

秋田県下では、『秋田方言』に、

な、なあ、ね、ねえ、念を推して言つたり強く指定したりするに用ひる。との説明が見える。まずは、県下の広くに「ネ」が存在しているか。

秋田市その他では、「ネァ」を聞いたことがある。この種の発音も、広くおこなわれているようである。

○アノ ネァー。

あのねえ。

は、県東南部での一例である。

北部の東能代では、“「ノー」はつけぬ。山形へんがつける。”というのを聞いたことがある。ここで、

○ホッデス[ü]べ ネー。

そうでしょうねえ。

などと言っている。「ネァー」の言いかたもなされている。

※ ※ ※

「カネ」ほかの、いくらかの複合形が認められる。

「ネサ」もあり、「ネス」もある。

岩手県下にも、「ネ」が広く認められる。「〜だネ。」も、熟したものである。

県南の水沢ことばには、「ナ」とともに「ネ」が見える。花巻市でのかつての調査では、人々が、“「ネー」も「ノー」も全然言わぬ。”と言っていた。その人たちが、“水沢では「ネー」を言う。”と言っていた。ところで、その人たちに、

○ジェン ジェン ベツ[ü] ダケド ネー。

全然別だけどねえ。

ということばづかひも聞かれた。

県中部の東寄り山地での私の調査では、やはり、

○ワリ[i]ガダ ネー。

わりあいねえ。 (中男間)

など、「ネ」が聞かれたが、上例の発言者からも、“ほんとのここのことばには「ネ」はない。”との言も聞かれた。

県下に、「ネァ」の言いかたもおこなわれている。ときにこれが、人に「ネァ」とも表記されている。(宮城県下に関しても見られることである。)

県下に、「ネ」の「ネン」もあるか。小松代融一氏のご著作のそれこれに、「ネン」が見える。『方言学講座』第二巻に寄せられた、同氏の「岩手」の記事の中には、旧伊達領の、

「あのネン、そうすればネン」

というのが見える。

※ ※ ※

本県下の「ネ」に関する複合形の文末詞としては、「ゾネ」「サネ」「カネ」(「ガネ」と発音されがちである。)  
「ガネ」「トネ」「モンネ」などが指摘される。

青森県下にも、津軽・「南部」に、「ネ」の分布が見られる。津軽西岸地方の「ネー」は、津軽の「ネシ[i]」をつねとする人々からも注目されている。

ところで、津軽の、「ネシ」のさかんである所に、「ネー」もおこなわれている。

○キョア アメ フ[ü]ル[ü]ベ ネー。

きょうは雨が降るだろうねえ。

などと言っている。津軽出身の一知人は、私に、

“集落ごとに語尾につける「ネ」とか「ハ」とかがちがう。”

と語った。

津軽の「ネ」の用法に、注目すべきものがある。一つに、『津軽方言絵ハガキ』第二輯には、

「ソラー、ヂャスギノ、スマコネ、エダネ」

そうれ お座敷の 隅に 在るよ (母→子守)

というのがある。「エダネ」は「あるよ」である。北山長雄氏の「津軽方言語積(副詞の部)」(『方言』第五卷第七号 昭和10年7月)には、

ワ コエ キタデア エンデモセエ ワミンツケドモタネ

(僕はを切つたよ、道理で僕短いと思つたよ)

というのが見えている。つぎに、『青森県方言集』には、「津軽地方」のことばの、

ジシコ入つて行けば其処の家さ行きさね

(小路を入つて行けば其処の家へ行きますよ)

というのが見える。

津軽を除く、本県下の東部域、いわゆる「南部」の地域にも、変わった「ネ」の用法があり、能田多代子氏の『五戸の方言』にも、

「ほんたうだタネ」と云へば、本当だつたよの意。

との記事が見える。

なお、能田氏の同書には、「ネを添ふるを以て目下に云ふ。」との記事が見える。同氏の『青森県五戸語彙』にも、

ネ だよに当り、目下に対して用いる。「丹那樣居りましたかエ」「居たネ。」

の記述がある。いわゆる「南部」地方の南辺で、私が調査した時のことである。「ネ」について、人は、“ここはほとんどつかわないわけ。”と言った。このことをしるしたカードを検閲せられた土地の識者は、“「ネー」は当地は使用しない。”と注してられる。ところで私は、

○ダーモ シ[i]ナガラ ワー シ[i]ビアー ネ[e]。

だれもしないからわたしがしましょう。

などの言いかたを聞きとめることができた。この文末の「ネ[e]」は、何であろう。「ハヤダ イダベア ネ[e]。」(“自分一人の場合に。”)などともあつ

たが、「ネ」はおおかた、低音におわるものだったようである。

※ ※ ※

当県下の「ネ」に関する複合形の文末詞には、「ヤネ」「サネ」「ヅ(ズ)ァネ」などがある。「〜デサ ネ。」などともある。

私は、「南部」地方の南辺での調査時に、

○ワ<sup>ー</sup>ガ<sup>ン</sup>ナ<sup>ー</sup> ヤネ[ɛ]。

わかりませんよ。

というのも聞き得ている。

○行く ズ<sup>ァ</sup>ネ<sup>ー</sup>。

“行くそうだよ。”

(「行くズ<sup>ァ</sup>ネ<sup>ー</sup>。」は「行くそうだ。」であるという。)

というのも聞き得ている。

#### 十 北海道地方の「ネ」ほか

北海道地方には、今日、「ネ」が一般적으로おこなわれているだろう。——かなり本来的であるものと、共通語因子として入来したものととの区別がつきにくいけれども。土地ふうにあるいは土地ことばふうに「ネ」のおこなわれるさまがかなりいちじるしくて、「〜ダ ネ。」などの習熟形式が一般的である。

道南地域に、まず「ネ」の慣用がよく見られる。『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条の例をあげるなら、

f<sup>ァ</sup>ア<sup>ー</sup> オメダチ マ<sup>ー</sup> ハツマゴ ウマレダッテネ<sup>ー</sup>

ああ、あなたのうちでは 初孫が 生まれたってね。

などというのがある。鈴木淳一氏教示例をあげるなら、函館市では、対等の言いかたに、

○タノ<sup>ン</sup>ダ ヨ<sup>ー</sup>。タノム ネ<sup>ー</sup>。

たのんだよ。たのむね。

○ナシ<sup>タ</sup> ネ。

どうしたね。

などというのがあり、対等者や目下のものに「ネ」を言うことが多く、それでいてまた、目上への言いかたにも、

○キョーワ サムィデス ネー。

きょうはさむいですね。

などというのがある。鈴木氏は、なお、小樽や十勝・稚内その他の例を教示せられた。それらのどことも、「ネ」のおこなわれかたは、道南のに類している。「ネ」は、北海道でもっとも通用度の高い、日常の文末詞なのであろう。

土地とばあいによっては、「ネ」が「ナ」の下に位せしめられていることもあるか。

※ ※ ※

北海道での「ネ」文末詞に関する複合形としては、「ヤネ」「ヨネ」「カネ」などが指摘される。複合形の安定しているものを見るにつけても、「ネ」の、北海道によく生きているさまが察せられる。『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条に見える、

f ソレデモ イーガネー

それでも いいかい。

では、「カネ」が「ガネ」になっている。

石垣福雄氏が『方言の旅』に寄稿せられた「北海道」のうちには、

ヅキ エンテヤッテルンダモネー

時期を逸してやっているんだものね（“函館の漁夫の言葉”）

の記述が見られる。これには、「モノネ」の言いかたが出ている。

十一 むすび

「ネ」は、まず、全国的分布のものとしてよからう。

この「ネ」に、敬卑上の用法差のあるのが注目される。すなわち、所によっては、これが、わるいことばとされたりもしている。この事実を、「ネ」の成

立や存在のしかたにかかわることの大きいものであろう。

ふつうは、敬卑上、かなりよい言いかたとして、あるいは、ととのった言いかたのものとして、「ネ」はおこなわれている。このことは、共通語分子としての「ネ」の浸潤または流伝結果と関係の深いことかもしれない。今日の状況では、どの地方のばあいでも、土地本来の「ネ」と入来の共通語分子的な「ネ」との見わけなどが、まったく容易ではない。土地ことば本来の「ネ」とされそうなものも、関西地方などで、やはり伝来結果のものであることが、すくなくはないのではないか。近来は、ことに、「ネ」の波及力がつままっている。他方、本来的なものといえども——それは、口ことばのことであるゆえ、消滅その他の異動もはげしい。かたがた、今日の「ネ」分布の様相は、解析の困難なものになっている。

それらは、要するに、現段階で、「ネ」の優勢化という、一元的事実に見たてることができる。今日は、まさに、「ネ」共通語の時代になろうとしている。「ネ」は、まさに、どのような見地ででもとりたててよい、標準語法分子であらう。

「ネ」の変形と見られる「ネイ」や「ネン」、それに、「ネ」に関する複合形文末詞とされる諸形（「ヨネ」など）に注目するかぎりには、今日も、「ネ」文末詞の、地方的・方言の様態が明らかである。この方面の事態がにわかにならうしてしまうことなどは、おそらくないであろうという点では、「ネ」文末詞の共通語分子としての遍満のいちじるしさとは別に、方言感情的発想の「ネ」の生活が、儼然としておこなわれていくであろう、と言えることになる。

こうした二重相は、私どもの言語生活の実情として、まことに興味ぶかいものである。方言生活と共通語生活との、もっともしぜんな二元性がここにある。

## 第五節 「ニ」の属

### 一 はじめに

ナ行音文末詞の一つとすべきものに、「ニ」というのがある。「ナ」や「ノ」、それに「エ」も、それらの母音は、まずは広大のほうのものである。訴えことばともあれば、ことに、原生的な感声ふうのものであると、それは、訴えの効率の高い広母音を持つのが自然ではないか。しかるに、と言いたい。ここに、狭母音を持つ「ニ」文末詞がある。（「ヌ」のことは、次節にとりあげる。）「ニ」文末詞の存立は、文末詞論上、注目すべきものである。なぜ、このような狭母音関係のものも、よく、訴えことばたり得ているのか。

この疑問には、私など、容易に答えることができない。しかし、これだけのことは言えよう。人間の好みはまちまちである。言語生活上、人は、無作為のうち、自然生活の中で、とりどりのものを、変相ゆたかにとりあげている。文末詞のナ行音類のばあいにも、人は、しぜん、変相の好みに走ったのではないか。——いな、走るともなく、しぜん、ナ行音文末詞の分化のことにしたがったのではないか。（言語生活上での無作為の興味とでもいうものが、ここにあるのだろう。）

私は、本来、「ニ」文末詞にはぐくまれた一人の人間である。私にとっては、「ニ」文末詞の問題が、身のうえの問題とも言いうるものであった。狭母音文末詞の成立が、たとえ奇異なものであろうとも、また、困難なものであろうとも、私は、これによって少年時代の言語表現を、しかるべきばあいに、充足させてきたのである。私にとって、「ニ」文末詞が必緊のものであったことは、言うまでもない。

このような境遇にあったからだろう。私は、文末詞「ニ」の討究に、かくべつの興味をおぼえてきた。おのずからこれの発表にいそしみ、累次、諸論考を

おおやけにしている。昭和三十一年発表の『日本語方言の方言地理学的研究』<英文>では、その p.125 に、「ニ」に関する分布図をかかげている。

昭和四十年発表の『日本語の方言文法』<英文>では、その p.89 に、「ニ」に関するややくわしい分布図をかかげている。——今日、私が整理し得ている段階の分布図も、これと大同小異である。

「ニ」の類一属は、なぜか、国土の海岸部位に見いだされがちである。そのような状況の究明にまでことを追いつめた私は、昭和四十年の作業収約のちもなお、「ニ」分布の討究に、心をそそぐところがあった。今、本節に「ニ」を記述するにあたっては、そういう私の研究道程を吟味整頓して、できるだけ完全なかたちの記述をしはたしたいとの思いが切である。

「ニ」に関しては、他方に、まぎらわしい、助詞「に」淵源の文末詞（助詞系の「ニ」文末詞）がある。これは、中部地方など、山地帯にも見いだされる。この種の「ニ」を区別しながら、ナ行音系と考えられる「ニ」文末詞を記述していくことになるが、ときに双方の弁別の困難に蓬着する。助詞系文末詞の「ニ」が、用法の波に乗って、あたかも感声文末詞ふうにも用いられたりしているからである。しかし、さらに考えるならば、これあるがゆえに、ナ行音文末詞「ニ」の記述は、いちだんと重要な作業になるとも言える。

## 二 筆者生活語の「ニ」に関する昭和二十一年の記述〔後掲〕

少年期の私の言語生活に「ニ」文末詞があったことを知ったのは、かなり早いころであったかもしれない。しかし、これが学的討究の対象とされるようになったのは、私の方言研究の生活もやや進んで、しごとがいわゆる全国調査になってからのことである。昭和十五年、はじめて北陸に出て、金沢市のことば、

○サ<sup>ア</sup>ヱ<sup>イ</sup> ニー。

さむいねえ。

などというのを聞き、その「ニー」ことばにおどろいて、そうだったのかとばかり自語を反求するようになり、ここに、郷里語（筆者生活語）の「ニ」をあ

らためて学的対象とする研究心がおこった。金沢市での聴録経験を補記する。上例文は、“普通度の言いかたで、「ネ」を「ニ」と言う。”とのことであった。他例は、

○コンニャ ヒトサメ フルロ ニー。

今夜ひと雨ふるだろうねえ。

○ソナイニ キモノ キテ ヌクナイ カイニー。

そんなに着物をたくさん着て、ぬくくないかね。

などである。これらの「ニー」は「ネー [ne:]」に近くも聞こえたが、現実音そのものは、「ニー」と表記してよいものであった。(当地方も、北陸の一区域として、とかくに裏日本的な発音要素を示す。東北地方の発音や出雲地方の発音にあい通じる何かが示されるようである。——[i] 母音も、やや中舌母音化してひびいたりする。)

ところで、金沢地方では、「存じます」も「存じミス」と言う。このような[i] 母音化の傾向のいちじるしいことからすると、文末詞「ネ」があって、それが「ニ」と発音されるようになったということもありはしないか。このような想像もしたくなる。

そうではあるが、土地の人々も、現実形として、「ニ」の形を認定している。たとえば長岡博男氏も、『方言』第三卷第一号への寄稿で、「金沢地方の方言『に』の一考察」との題名をたててられる。成立過程はどのようであろうとも、現実形の「ニ」文末詞があることは、たしかである。この「ニ」は、現実には、ナ行音として処理することが可能であろう。

さて、私のつかってきた「ニ」は、「ネ」にはなんら関係のないものである。しかしながら、時をすごして今日におよんでみると、郷里方言では、「ニ」文末詞がほとんど聞かれないほどのありさまである。さしもの「ニ」も、廃滅に近い。昭和二十一年以降での、大きい変化である。

このことをかえりみて、私は、旧の記録の温存を意図するにいたった。一つの歴史的記録として、昭和二十一年の記述を採録しておきたいと思う。〔下掲〕

## ※ ※ ※

□瀬戸内海大三島北端の集落「肥海」の「ニ」文末詞

<以下に、旧記述をかかげる。歴史的かなづかいは、現代かなづかいになおし、語句の未熟は、訂正につとめる。>

わるいことば、大三島の「ニ」は、つぎのようなものである。

○ホン<sup>ニ</sup>デモ、イ<sup>ニ</sup>テミ<sup>ニ</sup>タラナ<sup>ニ</sup>カッタニ<sup>ニ</sup>。

だって、行って見たらなかったねえ。(第三者の前で同僚に言う。  
子ども間)

○カ<sup>ニ</sup>ラスノニ<sup>ニ</sup>クワソ<sup>ニ</sup>モテ<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>。

からすの肉はちっともうまくないねえ。(青男間)

○ウ<sup>ニ</sup>ラモ、ダ<sup>ニ</sup>レガキ<sup>ニ</sup>トッタ<sup>ニ</sup>ンヤラシ<sup>ニ</sup>ラ<sup>ニ</sup>ンシニ<sup>ニ</sup>。

わしも、だれが来ていたのやら知らないしねえ。(老人)

注(昭和53年) 「ニ」の「ニ」を低音に発音することは、ほとんどなかったように思う。さきの金沢例を見られたい。

注(昭和53年) 「………… ヨ(ヨー)ニ。」 「………… ワイニ。」などの言いかたも、よくなされていたように思う。ここには、訴えかたの特定性もほの見えよう。

青少年・中年の女性あまり言わないほかは、各階層において言われている。以前はさかんにつかわれていたが、だんだんにつかわれなくなってきている。筆者などは、小学校で、先生に「ニ」をたしなめられたおぼえを有する。こうした事情もあってか、人々の自覚も高まってきたらしく、しだいに「ニ」がつかわれなくなってきたのであろう。ちかごろは、子どものあそびのなかにも、「ニ」がさほど聞かれなくなっている。用語の退化する事実を、眼前に見うるように思う。

だいたい、同意を求めるようなもの言いに用いるようになってきている。(さきには、「ワイニ」「ヨニ」の言いかたをあげて、訴えかたの特定性を見た。)相手にさからうようなばあい「ニ」がつかわれるようなこ

とはない。過去の事実を報じるような、およそきまりのついたことを言う時に、「ニ」とよびかけて同意をさそう。「ソージャ ニー。」(そうだよねえ。)  
「イマ ユータ ニー。」(いま言ったよねえ。)という調子である。相手の前で自分のつれのものに言うことが多いのは、「ニ」ことばの性格をよく示すものであろう。今は、なかんずく、この用法が多い。前掲の「ホンデモ、イテ ミタラ ナカッタ ニー。」は、すぐにここに思いあわされるものである。相手の前で自分のつれに言う時は、「ニー」と言っ  
て、よくよく、つれと顔を見あわすきみでもある。よその人の面前では、同僚どうしが「ニ」を語ることもすくない。

二人の対談で「ニー」を言ったとすると、そう言いながら、なんらかの第三者を予想したきみのもの言いになる。つまり、相手にもっばらうちつけて言うことがうすいのである。わざと焦点をぼやけさせるきみである。

以上のような用法になったのは、「ニ」の用法の退化ではなかるうか。退化していく途中の現象として、このような特定の用法が見られるにいたったのではなかるうか。

あるいはまた、「ニ」がもともと特別の文末詞なので、その本然の性格からして、このような用法特徴をそなえるにいたった、というようなことかもしれない。

使用の趨勢は、上述のようである。こういう「ニ」が、品位の低いことばとして用いられてきたのであり、今日もそうである。素朴な、なまの感情がこの「ニ」によって出されるが、その素朴さは、つつしみの気もちのない素朴さである。「ニ」をよく言う子どもも、おとなに対しては「ノ」を言う。これはおとな対したのにふさわしい、気もちのあらたまりをもって、子どもも、よいことばづかいをしようとして「ノ」を言っているのである。そのような、よいことばにされる「ノ」に対して、「ニ」は、手まえどうしの生地きじを、すこしもいつわらない態度をあらわすことばである。したしみの情もかくべつつよくはあらわれず、むしろ、むぞうさに「ニ」が言われる。

この「ニ」をつかってそだってきた筆者らは、「ネ」なるものをきょくたんなよそことばと解し、非難する気もちでこれを見、旅で「ネ」を身につけて帰郷したものの「ネ」を言うのに対しては、不愉快な感じを持った。一方、旅にいたものたちは、盆や正月に帰郷すると、その、旅じこみの生活を誇示するのにあわせて、よそことば「ネ」をつかってみせたようである。このあたりに、「ノ」や「ニ」に対立して、「ネ」ことばの入れしようとしたさまが明らかであろう。当方言では、「ニ」や「ノ」が「ネ」とは共存しなかったことを、私は、ここに強調しておかなくてはならない。双方は、無縁無関係であるばかりか、あいれないものである。地ことば「ニ」の発生を考えると、これは、「ネ」にはかかわりなく考察すべき問題になる。

「ネ」を知ることなくして「ニ」を伝承し、これをつかいならしてきたとすれば、この「ニ」の成立も、むげに新規のものとすることはできないであろう。どのような事情と過程とで、「ニ」は、かなり早くも、当方言に存在し得たことであろうか。

分布上、私どもの郷里の「ニ」が、両傍の集落をはじめとして、大三島五ガ村の、どの集落にも聞かれず、ましてや、近隣諸島あるいは本土にもこれが聞かれないのは、どういう事情によるものであろうか。「ニ」は、大三島北端の私の郷里方言に、まったく孤存するありさまである。(これは、「ニ」の成立と大三島北端存立の事由とを、いよいよ考究しにくいものにする。)——山陽路的なものかとも思われるけれども、山陽地方には、およそ「ニ」が見いだされない。

※ ※ ※

以上で、私の旧の記述がおわっている。上の分布考は、当時、私の知見の狭小であることを、そのまま露呈している。のちに、四国東岸や近畿南岸に「ニ」を見いだすことになる。

それにしても、大三島を出てからの、松山市での四カ年と広島市での四カ年との長いあいだ、私は、多くの同僚ならびに諸方の人々に接しつつも、——ま

た、さまざまな生活経験をしつつも、「ニ」ことばを聞くことはなかった。「ニ」のよびかけ表現法は、ひどく変わった、めずらしい言いかたであることが、自得された。

### 三 「ニ」の探査

全国の諸方言にわたって、「ニ」文末詞の探査をつづけてきたことは、私にとって、一つの貴重な経験である。

「ニ」文末詞こそ、異色文末詞中の異色文末詞ではないか。ただに、ナ行音文末詞中において異色文末詞であるのみならず、全文末詞中において、これはたしかに異色の文末詞である。

音相の特異なこの文末詞の、生成も奇異であれば分布もまた奇異である。一個の方言学徒としてこの「ニ」に目を開いた以上、それはだれであろうと、探査深究の手をゆるめることはできなかつたであろう。探査行を経て、今、思う。これに、方法論上の、二つの大きな利得があった。一つには、「ニ」文末詞探査によって、表現法（文末詞による文表現訴えの表現法）の深層をえぐり求めることに心を向けざるを得なかつたという利得があった。特異な文末詞「ニ」の存立に注目しては、おのずから話者の深層心理を追究することになり、かくして私は、「ニ」研究を通じて、方言研究の表現論的深化を学ぶことになった。

二つには、この特異な「ニ」文末詞の分布のまれであるのを、特別な熱情で追いかけることになって、いきおい、全国踏査の欲望をもやさしめられたのが、大きな利得とされる。およそ、方言研究のいずれのばあいであっても、方言事象に着目すれば、かならず、その分布が問題とされよう。その時、できれば探査の地域を拡大して、日本語方言状態の全域に調査の手をのべたのがよいことは、言うまでもないことであろう。踏査・調査は、つねに全円的であるのが理想的である。しかし、こととしだいによっては、そういう実践が意のごとくにはいかない。しかるに、この特異な「ニ」文末詞は、稀分布あるいは偏頻分布

の異常をもって、私を、日本語方言の全国領野へとかりたてたのである。私は、「ニ」討究によって、全国的視野の研究の必然性と合理性とを、しぜんに納得せしめられたとも言うことができる。ちなみに言えば、私の「ナモン」類その他の文末詞の討究にしても、同趣のものである。また、中舌母音の存在をたずねて全国諸地方の踏査につとめたことも、すぐにここに思いあわすことのできるものである。というようであって、けっきょく、私の、全国的視野での方言研究活動は、いわば、「ニ」文末詞討究の類型をふむものであるとも言える。

「ニ」踏査の作業は、断続的に長くおこなわれてきた。（——大小の発表もまた、これに並行したものがある。）以下には、従来の全作業の取約をはかって、今日段階での統一記述につとめてみる。

#### 四 南島および九州地方の「ニ」ほか

南島地方に関しては、私には、言うべきことがほとんどない。ただ、沖永良部島のことば、

○マチュントゥニ。

まっているからね。

というのをここにあげてみるができるが、この「ニ」は何であろう。「………からね。」とあるのからするのに、「ニ」は、接続助詞ふうの「ニ」ではなからうかと思われる。（同意のことばに、「マツチュライ。」もあるという。）

『奄美大島語案内』には、

雪<sup>ゆき</sup>の降<sup>ふ</sup>ることもありますか ユキヌフリユンクトモアリヨンニヤ

とある。この種の「ニャ」は、いわゆる南島方言のものであろう。さて、この「ニャ」は、「ニ」という音をふくんではいるが、どういう成態のものであろう。

九州地方に、問題とすべき「ニ」が分布している。

はじめて私に「ニ」の存在を知らしめたのは、南薩出身の東正昭氏である。終戦後と言われるころ、氏は、広島文理科大学の学生であったが、どういう機会かで、「ニ」を私に教示してくれた。

インフォーマント、東氏の最初のレポートから、いくらかをここに引用してみたい。——川辺町永田の“四十五・六歳の農夫の言”として、東氏のかかげられる文言は、つぎのとおりである。

今迄は、川辺（藤原注 薩摩半島南部の川辺町）と言うと、川辺の「ニ言葉」か、と言って、下品な言葉、無教養さを表わす言葉遣を指摘して、川辺の人々を軽蔑し、冷かす為の道具とされて来ていた。その中でも、永田から高田へ掛けての地区が一番ひどく使うと言われていた。然し、今では、学校に行く子供達は、先生方の御注意で、子供間でも互に注意し合っているから、殆ど使わなくなって来ているし、大人も終戦後、外地から帰った人々と標準語で話す機会が多くなって来たので、恥かしくて余り使わないようになって来た。

今迄、「ニ」を使っていた間は、言葉が非常に、ぞんざいであり、荒っぽかったのが、丁寧な言葉、やさしい美しい言葉を使おうと言う意識的な努力からか、生活語の中で、「ニ」はだん～なくなって、「ナ」に変わりつゝある。今では、「ニ」は、老人か、子供か、に限られていると見て良いのではなからうか。

以上は、東氏が、当人の説明を、東氏のことばでまとめたものようである。

つぎには、東氏が、川辺町松崎の三十歳ぐらいの婦人から聴取せられたものをかかげる。

「ニ」を使うなと言われますが、今更、そんなに、改って、綺麗に見せる事も要るまい、と思って、別に、大して気にもせず、に、「ニ」を使っています。婦人会に行っても、オバサン方も皆、「ニ」を使っておられますし、使うまいと思うと、口を動かすのが気になりますからね。子供等は、

学校で注意されるらしくて、家でも余り使わないようですが、老人等、全部使うので、よく子供に叱られます。

つぎにはまた、東氏が、揖宿郡額娃町石垣の、四十歳の男子から聴取されたものをかかげる。

「ネ」がこの附近の「ニ」ですよ。この附近では、誰もが「ニ」を使うが、学校に行っている子供だけは、余り使わない。

なお、額娃町大川の六十歳ぐらいの男子（もと小学校教師）は、

ニワヒンガワリトヨー（「ニ」は品が悪いのさ。）

コドンノサ、チコワンナイニ（子供達は使わないね。）

と言われたと、東氏は報じていられる。

東氏は、たび重ねての私の依頼に応じて、いくどか、南薩の「ニ」について教示せられた。

氏自身の踏査結果による氏の分布見解は、つぎのとおりである。

薩摩半島の南部、知覧町はほとんど全部に「ニ」が認められ、その南の額娃町は西側半分が「ニ」を言い、知覧と額娃との西にあたる川辺町では、南半分が「ニ」の領域である。

おおよそ薩摩半島南部域に、「ニ」が認められることになる。ところで、かつての他氏の教示によるのに、“「ニー」は川辺町加世田で言う。”とのことであつた。また、他氏の教示によるのに、“笠砂と久志とはことばがちがう。笠砂は文末の「ニー」を言わぬ。「ネー」を言う。久志は「ニー」文末をつかう。”とのことであつた。これらの言説を集合すれば、薩摩半島南域に、かなり広く「ニ」がおこなわれていることかと察せられる。のちに述べるとおり、薩摩半島東南端部にもまた、「ニ」のおこなわれていることが明らかである。

東氏教示の実例を列挙してみよう。まず、

○チャライ<sup>ノ</sup>ネ。

そうだね。（おしつけぎみ）

○チャヅイ<sup>ノ</sup>ニー。

○ヂャライ ヨー。

○ヂャライ ナー。〈女〉

この四つが、ほとんどおなじ程度につかわれているという。

つぎに、知覧町のわかりやすい「ニ」例は、

○ヌッカ ニー。

暑いなあ。

である。顛娃町内では、

○ニュッカガ コエ ニー。

暑いのがつらいねえ。

などと言っている。川辺町内の「ニ」例は、

○オバサンタッモ ニーニーツ ドニー。

おばさんたちも「ニーニー」って言うねえ。

○コンゴラ、ガッコン コドンナ ツコワン ドニー。

最近、学校の子どもはつかわないねえ。

である。——これらには「ドニー」が見られる。

「ニー」の用語品位については、東氏は、つぎのように言われる。

この「ニー」は、………、下卑た感じを与えられるのは当然である。然し、下卑た感じのままに、放り出したのではなく、却て、その中に、親密な感じが味わられる、のではなからうか。

顛娃町の人々の「ニ」に関する見解には、

○ニワ ヒンガ ワリ トヨニー。

「ニ」は品が悪いのさ。

というのもある。（東氏教示のまま）

東氏教示の、以上のような「ニ」例を味わってみて、私に、思うことがある。南薩の「ニ」ことばは、かならずしも、内海大三島の「ニ」ことばに全同ではなからう、と。用法差や音調差があるようにも思われる。とはいいいながら、南薩の「ニ」ことばが、ナ行音文末詞の列に加えてもよい「ニ」であることは、

たしかなのであろう。——用法の異同などは、地方がちがえば当然あってもよいことである。

ここで、上述の地域内に見られる、「ニ」関係の複合形をあげておきたい。「ド(ゾ)ニ」「トヨニ」のことはすでに述べた。「ドニ」がよくおこなわれている。東氏教示例のほかにも、

○キヌヨッカン ワイカ ドニ。

(天氣が)きのうよりも、わるいねえ。

○イッカケタ トロイノ アシコヂャッチュ ドニ。

行きかけた所をあそこだそうだね。

などというのがある。

「カ(ガ)ニ」があり「カイニ」がある。「ドカ(ガ)ニ」「ドカイニ」もある。「モンニ」もある。「ワニ」もある。

○ヨカ センセーヂャイバツ キッカ ワニ。

“よい先生だが、きびしいねえ。”

は、「ワニ」の一例である。

東氏教示のものに、「モ(ム)ンニユ」というのがある。頼娃町の言いかたに、

○カドウラー イッキ ソコヂャツ モンニユ。

門浦は、すぐそこなのに(そこなんですよ)。

のようなのがあるという。知覧町内の言いかたに、

○センセー ゲーヤ、イッキヂャイ ムンニユ。イケバ。

先生の宅は、すぐそこなのに(そこなんですよ)。行ったらいいでしよう。

のようなのがあるという。「モ(ム)ンニユ」が、「なのに」「だのに」ともされている。この「ニユ」が、上来の「ニ」と同一のものでないことは、明らかであろう。しかし、音形上の似よりは認められる。「ニユ」は、どういうものであるか。頼娃町内の、

○ナツヂャイ モンニユー。

“夏なんだもの。”

などでは、「モンニユ」に「ものね」といったようなきみが、感じられないでもない。東氏は、額娃町内の、

○ワガエ オイヤエバ スズッカ モンニユー。

については、「家に居られたら、涼しかろうにねえ。」との対訳をあてていられる。

種子島西之表町の旧士族のことばにも、

○ケサ オメッカラン ニヨ。

お早うございます。

のような言いかたがあるという。井上一男氏は、「種子島方言研究」(『方言』第三卷第七号)でも、

ソレヲヒク牛増田ニヤヲランニヨ

との言いかたをしるしていられる。(民謡、増田節の文句)

さて、薩摩半島東南端については、該地出身の瀬戸口俊治氏の諸教示がある。氏はまず言われる。

「ニ」は同等以下につかわれる。とくに、親が子に言う。学校で「ネ」を習ってくると、違和感をおぼえる。「ナー」はよいことば。「ニ」は同等の友だちにつかい、心をゆるしあった人につかう。

女子高校生などは、「ニ」をよく下品だと指摘されて、

○ソソナイ ニーワ モ ツコワン ガニー。

それなら「ニー」はもうつかわないことにしようニー。

などと言っているという。瀬戸口氏の言には、なおつぎのものもある。

よそから来た人にはつかわぬ。村の目上の人にもつかわぬ。目下の、同等以下で、親密なものにつかう。

瀬戸口氏が、“友人間の会話において、かたわらの第三者に同意を求める時は「ニー」があらわれる。”と言われるのを聞くにおよんでは、私も、この「ニー」ことばが、内海大三島のそれによく似たものであることを思わせられた。

薩摩半島東南端部での実例をあげる。

○ドッチ ミロ ヨモ ネ ニー。

どっち見ようようもないねえ。(見るものばかりで、どちらを見てい  
いかわからない時に言う。)

○ガッチュイ、アン コガ ケスッチョイ コ ニー。

なんとまあ、あの子がおどけていることねえ。

以上、瀬戸口氏による。

薩摩半島にかぎらず、なお鹿児島県下に、どのようにか、なにほどかの「ニ」  
ことばが見いだされるのか。福里栄三氏は、「大隅方言概観」(『方言』第四卷  
第五号)の「志布志」の条で、

モッキアナランニー

持つて来られないねー、

との記述をしていられる。大隅半島に関しては、なお私は、白沢龍郎氏の教示  
を得ている。東岸、内之浦方面でのことばに、

○マッチョッ ニョー。

“まってみる。”

というようなものがあるという。(子どもたちのことばかもしれない。) こういう  
「ニョー」は、「ニー」というのに、なんらかの関連があるものかどうか。白  
沢氏は、“「ニョー」という強い呼びかけが、荒々しい感情を出すに効果的であ  
る。”としていられる。

かつて、山陽本線の下り列車内で、「かごしま」に帰る母(三十歳代)子(お  
さない兄弟)づれの人たちから聞いたことばがある。それは、

○カッチャンノ バカ ニ。

かっちゃんのばかね。

○カッチャンノ メメ ニ。ニー。カッチャン。

かっちゃんのメメね。ねえ。かっちゃん。

というのであった。しかとはわかりかねることばづかいであるが、「ニ」の認

められることは、たしかであろう。さて、この「かごしま」というのは、どの地のことであったろうか。

北薩出身の井上親雄氏は、「ニー」はつかわぬと言われる。ところで、北薩西岸の阿久根市に関しては、『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条に、

*m*クッガ            タランニン

くわ(鋤)が 足りなくてねえ。

などというのが見えている。「ニン」は、「ニー」に近いものか。——「ニー」というのがあったとしたら、それは、「ニン」になりやすいものでもあろう。ところで、上の注解には、「足りなくてねえ」とある。この解にしたがえば、「タランニン」の「ニン」は、「～んに」での「ニ」かとも思われてくる。

ともあれ、鹿児島県下に関しては、問題の「ニ」ことばを、なおなお探索していかねばならないことかと思われる。

昭和十四年、鹿児島市で、いわゆる士族の古老男性から聞いた「ことばよせ」に、「サツマドンカラ チョーシュチョルチョル トサニヤニヤ」(藤原注 薩摩「ドンカラ」長州「チョルチョル」土佐「ニヤニヤ」)というのがある。——<薩・長・土のことばをよせ集めて、一つの言いぐさをこしらえているのは、明治維新ころの三地のつながりを思わせて、興味が深い。政治に関与した人たちの相貌が目にかぶようでもある。——いまやこれが、一種の古典的なことばよせになった。>このようなことばよせのつくられたのからすると、当時、いわゆる薩摩では(このことばよせに関与した人たちのあいだでは)、「ニ」ことばはおこなわれていなかったのもあるか。城下町「かごしま」には、由来、「ニ」ことばはなかったのか。とすると、薩摩半島南部域に「ニ」ことばのさかんでありきたったのが、とくに注目される。この地域は、だいたい、海岸域である。

さて、「ニ」ことばの九州分布は、つぎに、おなじく海岸域の、島原半島に

たどられる。『嶋原半嶋方言の研究』には、

(そー) にー「鉄砲町」

とある。同書にはなお「ニシ」の記事も見えており、『島原半島方言集』にも、「ニシ」の記事も見える。両書とも、「ニーシ」の形をとりたててもいる。

今日、島原半島には、「ニ」ことばが、どのような状態であろうか。

長崎県西彼杵半島に、また、「ニー」ことばが見いだされる。西彼杵半島の外がわは、通常、「そとめ」(外め)と言われている。この「そとめ」に関して、“そとめの「ニー」ことば”との言いぐさがある。外めの南寄りの三重のことばでは、

○ソガ<sup>ン</sup>ジャッタ ニー。

そうだったねえ。

○ドケ<sup>ー</sup> イク トニー。

どこへ行くのか。

○サムカ<sup>ー</sup> ニー。

さむいねえ。

などの言いかたがなされているという。

じつは、外めに対する「うちめ」にも、「ニ」関係のものがある。内めの北部では、「ニヤ」が聞かれる。

○マコテ<sup>ー</sup> ニヤ。

まことねえ。

○ソギ<sup>ン</sup>ジャッタ ニヤ。

そうだったねえ。

○ナント<sup>ー</sup> ユーテ タンニユ カニヤ。

なんと言ってたずねようかねえ。

などと言っている。“「ニヤ」は年寄りのことば。むかしは若いものもつかっていたんだが。”という。ここでの私の調査経験では、「ニヤ」が「ネヤ」と聞こ

えたようなこともあった。(一初老男から)

「ニヤ」は、外めにもあるのか。さきの三重に、

○ソージャッタ ニヤイ。

そうだったねえ。

との言いかたがあると、私は、内め在勤の小学校校長氏から教示された。氏は、「イ」がかかるくはいると言われた。

「ニヤ」形があるとされるかぎりには、これの「ニ」を、ナ行音の「ニ」文末詞と見ることができよう。

佐世保市方面にも、「ニヤ」があるのか。かつて、上田栄一氏は、「行きたいね。」の意のものとして、

行きたかにや

というのを教示された。

平戸島に、「ニヤイ」があるか。——あるいは、かつてあったか。『平戸方言語法草案』には、「終止形ニ接続ス」という「ザニ」というのも見える。もっとも、この「ニ」は、別系のものかもしれない。

平戸島の北方の大島にも、「ニャー」があるか。

筑前糸島半島(博多湾西)の内部に、昭和三十年、一週間調査を試みた時は、この地に、かつて、「ニー」ことばのよくおこなわれたありさまを知ることができた。一識者の教示は、つぎのとおりである。

「ドー ションナル トニー。」(どうしてらっしゃるね?)などと、私の祖母なんかがよく「ニー」を言った。(おもに女のほう。)明治時代まではよくついていた。「サムカ ニー。」(さむいね。)など、「ニー」は、気やすいことばで、あんまり上品なほうではない。目上には言わぬ。目下の若いものにこごとを言う時など、よく「ニー」を言った。それから、年

寄りどうしても、気やすいなかで、「ニー」を言った。明治のおわりごろになって、「ニー」をおとな連中がくさすようになった。私の父も、祖母の「ニー」を聞くと、いやな顔をシヨリマシタ。だんだん交通がひらけて、よその人に対して、体裁がわるいという気もちがはたらいたのではないか。私自身が聞きとり得た事実は、つぎのようなものである。

○ニーワ ワルカトジャ ナカツロー。

「ニー」はわるいことばではなかっただろう。

○ニは サッチ ツケヨッタ。

「ニ」はしきりにつけてた。

○ニーは シマエタ。

「ニー」はなくなった。

“現に私が言っとった。(ワタシガ イットッタジャ モン。)”という人にも会うことができた。この人は、“私たちが十二・三歳のころまで、両親に向かって「ニー」と言っていました。しぜんにつかわなくなりました。”と語った。ことによると、まだどこかに「ニー」が生きているのではないかとも思われたしだいである。「ドゲン アン ニー。」(どんなにあるね?) (病気みまい)などの用例を聞かされたのにつけても、そのようなことが思われた。

糸島半島の桜井で聞いた言いぐさに、

オーバルキヤーキヤー コタニーニ

大原キヤーキヤー 小田(じつは小田浦)ニニー

サクライネーネー ノギタチューチュー

桜井ネーネー 野北チューチュー

注 野北の「チュー」は「ナンチュー」(なんという)の「チュー」である。というのがあつた。北崎村の小田浦には、「ニー」が多かつたという。ところで、この言いぐさには、「サクライネーネー」とあり、桜井については、とくに「ネー」が指摘されている。小田浦の「ニー」は、かくべついちじるしいものであつたというわけか。

さしもの「ニ」が、ほろんでしまっている状況であるのは、同趣の環境を故郷とする私には、感慨ぶかいことに思われる。ナ行音文末詞の中でも、「ニ」は、本来、こうした運命をたどるはずのものだったのか。「ことばよせ」ふうの言いぐさの中に「ニ」のうたいこまれていて、いまやその言いぐさもほろびようとしているのが、いかにもよく「ニ」の運命をあらわしている。

対馬のうちには、「あのニ。」などの言いかたがあるという。(神部宏泰氏教示)

九州地方の他域では、「ニ」を見いだすことができていない。「のに」系の「ニ」は、所々に見られ、そのものが、また、用法上、感声文末詞に近いようすを呈していることはあっても、純粹のナ行音「ニ」文末詞そのものは、見いだしがたいありさまである。

ちなみに、糸井寛一氏が「大分県方言ところどころ」(『言語生活』第六十六号 昭和32年3月)で示された、保戸島(津久見市)での“老女のよびかけ”，

「オエチサンニョー！(おエチさんよう。)」

というのは、「ニョー」を見せていて、私どもの興味をひく。この「ニョー」は、「ニ ヨー」のつづまったものか。もしそうだったら、「ヨー」は、文末詞の「ヨ」で、「ニ」は、相手をさし示す格助詞「に」であろう。

## 五 中国地方の「ニ」ほか

九州に比し、中国には、言うべきことがすくない。

山口県下に関しては、一・二、記録しておくべきことがある。一つに、阿波陽氏は、昭和二十年代に、つぎの記録を寄せられた。

強めの助詞として「ニ」の使はれている例。

(例) ○セニヤ。 (せ<sup>ニ</sup>や)

これは中学時代に友人(山口県美祢郡某村の人)が云つた言葉を思ひ出して記したものである。

「ニ」と引張つて使用すれば可成り音声効果が上るようである。(中略)

右の美祿郡某村は山陰と山陽との丁度中間に当る山中の寒村である。

「せーや」と言いかえられている「せ<sup>ニ</sup>ーや。」の「ニ」は、どういう「ニ」であろうか。——「<sup>ニ</sup>ーや」というのがとれるのであったら、この「ニ」は、ナ行音感声の「ニ」文末詞としうるか。

つぎに、昭和三十三年に、荒巻大拙氏が、つぎの記事を寄せられた。

なお、山口市付近で、「イカン <sup>ニ</sup>ー。」〔行かんよう。〕のような「<sup>ニ</sup>ー」が用いられる。

「イカン <sup>ニ</sup>ー。」と、「<sup>ニ</sup>ー」が下げ調子のうちにおわっているのからするのに、これはどうも、感声ナ行音「ニ」ではなさそうに思われる。

『山口県方言調査』には、「わからない」の意の「ワカラン<sup>ニ</sup>ーや、」というものがあげられている。

佐藤虎男氏の、周防東部、旧広瀬町について調査せられた結果には、

○イッソ<sup>ニ</sup>ー ナートモ イワレン <sup>ニ</sup>ー。ア<sup>ニ</sup>ー。

全然ないとも言われん<sup>ニ</sup>ー。ねえ。

というのがある。第一文は、まさに、「<sup>ニ</sup>ー」によってしめくくられているが、直下の第二文が、「ア<sup>ニ</sup>ー。」というセンテンスである。ナ行音「ノ」文末詞のおこなわれている所である。第一文末の「<sup>ニ</sup>ー」は、助詞系のものであろうか。

県下の諸地に、「……………<sup>ニ</sup>ー。」の言いかたが聞かれもするが、たいていは、助詞系の「ニ」文末詞のようである。そのものが、極度に自由につかわれた時は、一見、感声的なナ行音「ニ」文末詞のようにも見える、というありさまのようである。

広島県地方では、島嶼部の、安芸の豊島に、

○アツイ <sup>ニ</sup>ー。

暑いねえ。

○ヒヤ<sup>ニ</sup>ー <sup>ニ</sup>ー。

ひやいね。

などの言いかたが聞かれるよしである。「アツイ フー。」(暑いねえ。)と言われたら、「アツイ ニー。」と返すのだそうである。また、「ヒヤー ニー。」は、「ヒヤー フー。」より、ちょっと上品になっているという。

「フー」と言われて「ニー」と返すとあるところには、不審がある。純然たる「ニー」ことば(ナ行音文末詞)がふつうにおこなわれているのであったら、「アツイ ニー。」と言われて「アツイ ニー。」と返すとあってもよいことだと思われる。「ヒヤー ニー。」とあるのも、この文末の声調からするのに、助詞系の「ニ」ではないかと、うたがわれもする。この「ニ」にあわせて、答えの「アツイ ニー。」を見るのに、やはりこれも、助詞系の「ニ」ではないかとうたがわれてくる。

県下の諸地に、やはり、助詞系の「ニ」が見いだされる。

安芸のうちに、ふざけて言うことばの、

○ヤレン ニヤ。

さっぱりだめだねえ。

というのがある。どういう「ニヤ」か。長らく当域の言語状態にしたしんできて、私自身は、まだ、自己の出生地で経験してきたような、本格的なナ行音「ニ」文末詞をとらえていない。

山陰出雲地方に問題事項がある。後藤蔵四郎氏はその著書『出雲方言考』で、ね或ねい(感詞)先方の首肯を求める場合に用ゐる。松江にては同輩以上に對してねを用ゐる、劣等へ對してはな又はのをを用ゐる。下等階級にてはね又はねいと云はずしてに又はにいをを用ゐる、此ねいとにいとを用ゐる方が加賀の金沢と出雲の松江とは反対である、即ち金沢の上等階級のものににを用ゐる、下等階級のものねいを用ゐる。広瀬附近にては一般になを用ゐる。飯石郡にては丁寧に言ふときにはなを用ゐる、劣等へ對してはねを用ゐることが松江とは反対である。つまりな、ね、の、は同じ意味の感詞であつて地方により、また階級によりて用ゐられるものが異なる。

と述べていられる。これによれば、「ね又はねい」と区別される「に又はに  
い」の存在が明らかである。氏の金沢弁引用の解説にしたがうにつけても、出  
雲に「にい」は実在したことがうかがわれる。(今、私が、「うかがわれる」と  
言うのは、昭和十四年ごろ以降の私どもの聞きや実地経験では、もはや、  
「=」を聞くことができなかつたからである。)

出雲地方に、ナ行音「=」文末詞があるのは、北陸地方でのその存在とあわ  
せ見て、まことに興味が深い。後藤氏の比較説明は、卓見とも称すべきもので  
あろう。出雲地方の「に又はにい」について、下等階級がこれを用いるとして  
いるのも、注目にあたいする。瀬戸内海大三島での「=」の用いられかたも、  
いわば、上流程度のものではない。

松江の「=」も、おそらくは、下品な感じの、素朴なものだったのであろう。

松江にだけおこなわれたというのであろうか。もっと広い範囲におこなわれ  
ていてもよかつたのではないか。

今日の状況からするのに、ことによっては、上の「=」文末詞も、出雲地方  
にさかんな「ネ」文末詞の〔ne〕音の転であったかもしれない、と、思われな  
いでもない。

鳥取県下、伯耆東部の羽合町浅津のことばには、

○ウツチャー ナンボデモ ナン ニ。

僕はいくらでもできるよ。 (青男→小男)

○コア イヌワ ホンニ ヨー カム ニー。

この犬はほんとはよくかむねえ。

などの言いかたがあるという。(室山敏昭氏教示による。)——中年の女性が、  
多くこのような言いかたをしているとのことである。「ニー」が見えるが、こ  
れはおそらく、助詞系の「=」文末詞であろう。

ところで、神部宏泰氏は、昭和三十年に、因幡西北隅の青谷で、

○ツオイ ニー。昔の 者は。

強いねえ。昔の者は。 (老女→中女)

との言いかたを聞き得ていられる。神部氏は、“当方言で得た例は、この一例だけである。”とせられた。そういうものであったのか。ナ行音「ニ」文末詞が存在するのだったら、稀用にもせよ、いますこしくは、なんらかの例が出てもよかったのではないかと思われる。それにしても、上例は、かんたんな言いかたでもあるだけに、単純感声の「ニ」文末詞を思わせやすい。

岡山県下については、言うべきものがさらにない。——兵庫県本土・大阪府下・京都府下と、空白地帯がつづく。

## 六 四国地方の「ニ」ほか

伊予大三島は、愛媛県下に属する。あらためて、大三島北部の肥海方言について「ニ」を見る。

○ホンジャケン ニー。

それだからねえ。

○ケズランニャ イカン ワイニー。

けずらなくちゃいけないよねえ。

などなどの言いかたがなされている。複合形の「ワイニー」「ヨ(ヨー)ニー」もあれば、「ゾニー」もあり「カニー」もある。いずれにしても、その表現品位は、高位のものにはならない。

この「ニ」文末詞が、今はほとんどほろびようとしている。五十歳代以上の男性が、「ニ」ことばの余命を保持していようか。その人々は、ごく気がるな言いかたの時、あるいは、なんのわけへだてもない間がらで、「ニー」を言っているであろうか。

ここの「ニ」の起源について、「ネ」からの道を考えることは可能であるか。一般論としては、可能が推定されやすいようであるけれども、私は、土地っ子として考えて、にわかには、その可能が思われない。郷土方言は、どの面から

見ても、「ネ」にまったく無縁の方言だからである。ところで、近隣の岩城島には、「ネ」文末詞はないけれども、「ネヤ」複合形文末詞はおこなわれている。伊予本土の今治市方面にも、「ネヤ」はさかんである。とすると、大三島などにも、かつては、「ネ」があったかと、しうるかもしれない。一方、逆の考えかたも成りたとうか。すなわち、岩城島でも「ニ」がおこなわれていて、それが「ネ」に転じることがあったかもしれない、というように。

愛媛県下の本土には、どこにも、感声系の「ニ」文末詞がおこなわれていないようである。

ところで、「ニヤ」は、若干おこなわれているのか。昭和三十四年には、私は、中予西辺の青島の人々から、

○アノ ニヤ。

あのね。

などの言いかたを聞き得ている。“わるいことば”，“あまりいいことばではない。”とのことである。“子どもがおもに「ニヤ」をつかう。”“おとなも言う。”ともあった。他方、この島で、「ネヤ」も言っている。私への教示者は、“「ニヤ」を早く言ったばあい「ネヤ」になる。”と語ってくれもした。最後にあげるべき、相手がたの説明は、“あの島へ行っていちばん気づくのは「アノニヤ。」だ。”というのである。私が面談したのは、松山市内である。“いちばん気づくのは”とまで言われるのであるから、「ニヤ」はたしかに、独自の「ニヤ」として存在するのであろう。

鴨頭脩氏は、愛媛本土北端部の方言事例、

○ナカナカ ゴエン モーカリヌクイ ニヤ。

なかなか五円がもうかりにくいね。

○ソイニ オモウ ガニヤ。

そのように思うがねえ。

というのを教示せられた。ここにも、「ニヤ」がある。しかも、ここはまた、

「ネヤ」もさかんな所である。「ネヤ」と「ニヤ」とは、どういう関係のものであろうか。

土佐に関しては、さきに引用した、

チ ョ ー シ ュ チ ョ ル チ ョ ル ト サ ニ ヤ ニ ヤ

がある。(p. 392) そのむかし、すでに「土佐ニヤニヤ」と言われたところからすると、早くから、他地方人にも耳につくほどの「ニヤ」が、土佐人から発せられたのかと思われる。今日は、どの程度におこなわれているものであろう。浜田数義氏は、「幡多方言における敬卑表現」(『高知県立中村高等学校研究論集』第一号 昭和31年1月)で、

ネ・ネー・ネヤ・ニヤ(卑)

ネ・ネー・ノ・ノー・ノーシ・ノンシ・ノン・ノイ・ナ・ナー(敬)

親愛の意味を添える助詞である。

「今日は暑いネヤ。」(卑)

「今日は暑いノー。」(敬)

というのが郡下全般に行われている普通の言い方であるが、やゝあらたまつた場合とか、女性的にやさしくいう場合には、「ネヤ」に代って「ネー」、「ノー」に代って「ノーシ(ノンシ)」が用いられる。なお、現在の若い女性には「ネヤ」「ノー」をほとんど使わずもっぱら「ネ」「ネー」を用いている。

との記述を示していただける。「ニヤ」が「ネヤ」とともにあげられている。しかも、卑とある。

土居重俊氏の『土佐言葉』には、

暑イ	{	ニヤ〔全県〕
		ニャー〔安芸郡〕
		ニー〔鵜来島〕

とある。鵜来島の「ニー」というのが、とくに注目される。氏は、なお、同書

で、

ニーは、かって中村市下田でよく使われていたものらしいが、現在は同市の老人間で希に使用する者がいる程度である。“中村ヤーヤー 下田ニーニー 六里へだてて宿毛はイチキチモンチキチ”とよく言われたものである。

と述べていられる。

私が、高知市の西の、浦の内湾岸に一週間滞在の調査を試みた時には、ナ行音「ニ」文末詞らしいものは聞かれなかった。「きょうは行かないか？」と問われての答え、

○イカ<sup>ン</sup> ニー。

“行かないよ。

というのなどがあったが、こういう「ニ」は、「のに」系の「ニ」のように思われた。「ニー」は、“おもに、子どもと女のことば。”とのことであった。

徳島県下となって、東岸の橘町に「ニ」ことばが認められる。すでに、土地の言いぐさにも、

タチバナ「ニー」(または「ニン」)ノ ハマ「ガッタイ」。(橘町の「ニー」、それから浜の「ガッタイ」。)

というのがおこなわれている。浜も、橘の町かたのことである。

私は、本県下についても、かねがね諸方に「ニー」を探索してきた。そのおりおりに言われたことは、橘町で「ニー」と言う、というのであった。ひととし、自身で橘町におもむいてみると、はたしてここに、「ニー」ことばがよくおこなわれていた。

○ホイテ ニー。

そしてねえ。

○ホイテ ニン。

そしてねえ。

などと、「ニー」「ニン」がおこなわれている。「ニン」のしぜんによく出ることでは、全国でも、ここがもっとも注目すべき所ではなかろうか。土地人は、“気分のはしゃいでいる時、セイテイル（急いでいる）時に、「ニン」を多くつかう。”と説明したりしている。通常の話しことばでは、「ニン」の「ン」がかかるくつけそえられ、あるいは、かすかにつけそえられるありさまである。はじめのうちは、私も、「ニン」の聞きとりがむずかしかった。土地人は、“気分のおちついている時は「ニー」が多く出る。”とも説明してくれた。

私見であるが、どちらかというところ、「ニン」が多く言われているのではなかろうか。

○ニン。キョー ニン。アノー、ンパイ ミニ イテ ニン。

ねえ。きょうねえ。あのう、芝居を見に行つてねえ。

など、「ニン」が、表現冒頭にも用いられている。こういう生活が、老若男女に見られるようである。多くは、同士ことばとして、「ニン」が、気やすく用いられているようか。子どもも、家庭では、しょっちゅう「ニン」を用いている。小学校での、いわゆる方言指導の掲示にも、「ニン」の一項目があげられているのを見ることができた。

土地の一識者は言われた。“徳島県の漁村は、ほとんどヒッカケテ旅行したが、「ニー」「ニン」の分布は橋町だけで、ほかにどこにも残っていない。”と。“「ニン」「ニー」は、だいたい漁家に多い。町人がつかうのは、それに同化されたもの。”と言う人もあるが、橋町の町すじを歩いて、いく軒かを歴訪した私の経験では、町家でも、「ニー」「ニン」は、そうとうなものであるとの印象を得た。“よそから来た子も、二・三年いると、たいがいつかう。”というから、「ニー」ことばの地力は、そうとうにつよいものなのだろう。

橋町といわず徳島県下は、「ネ」文末詞を常用するところではない。すなわちここは、近畿四国弁での文末詞の大勢にもれず、「ナ」文末詞の生活を主調とするところである。その地域の一隅に、「ニ」ことばがおこなわれている。これは、かえりみるのに、私自身の郷里方言が「ノ」文末詞を主調とする生活

であって、しかも、「ニ」ことばを所有するのに似ている。言うところは、両方とも、「ニ」文末詞は、「ネ」文末詞には無関係の存在らしいということである。「ネ」からの転訛などは考えられない「ニ」、橘町の「ニ」ことばも、本来的なナ行音「ニ」文末詞ではないか。

金沢浩生氏の調査によるのに、橘町の古老に、まれに、

○アノ ニャー。

あのねえ。

の言いかたが聞かれるという。氏自身も、くわしいことはわからないとしていられる。

香川県下では、島嶼部の西端に位する伊吹島に、問題事例があるか。昭和三十九年にこの地を調査せられた室山敏昭氏は、

文末詞では、「ニヤ」「ネヤ」「ニャー」「ジョ」「キヤー」などが多用され、と報じていられる。「ニヤ」の委細は、不明である。

### 七 近畿地方の「ニ」ほか

淡路島にいくらかの問題がある。洲本市の服部敬之氏は、

南淡町福良で疑問表現で、「イコ カニ。」(行こうかね。)(中女間)

と「カニ」の形で聞いた外、洲本でも後述する意志に迷いを生じた時の表現に用いる程度である。

と教示せられた。

福良町が問題の地である。たまたま洲本から北上するバスで知りあった人に福良のことばをたずねたところ、その男性は、“疑問・質問に「ニ」がよく出る。”と答えた。

○コノ ミズワ ノメル カニ。

この水は飲めるかね？

○イク カニ。

行くかね。

などと言うよしである。私が、「さむいね。」を「サムイ ニ。」と言いますかとたずねたところ、「言わぬ。」と答えた。淡路島に存在する「ニ」は、どういう「ニ」なのであろう。ナ行音の単純感声的な「ニ」ではなさそうである。——ところで、淡路島北端出身者からは、かつて、その「コレヤ ニヤ。」（“これですね。” 問い）というのを教示されたことがある。

ナ行音「ニ」文末詞の歴然とおこなわれているのは、近畿も、紀伊半島南辺である。

和歌山県南部の東牟婁郡の南岸にある古座町・大地町が、いわば「ニ」ことばの本場である。（先年のテレビドラマ『風見鶏』は、このほうの「ニ」ことばを、しきりにとり用いていた。）

串本市と新宮市との中ほど、新宮寄りにある大地町では、「ニ」が、老若男女によくおこなわれている。

○ドコイデモ ニーオ ツケル ニー。

どこへでも「ニー」をつけるねえ。

などと、「ニー」は人々に、知らぬまによくおこなわれている。“町かたの人のほうが、このことばをつかうことが多い。リョーシは「アノ ナー。」と言っている。”との説明があった。「ニ」ことばが漁家に限られたりするものではないことが、これですら明らかであろう。さきの橘町でと同様に、「ニ」は、大地町の広くに——漁家にも、おこなわれているのではないか。小学校教師の説明には、

ここはだいたい漁業中心の町。漁民でも百姓専業の人でも、大地のはえぬきの人はおなじようなことばをつかう。リョーシも農民もみな「ニー」をつかう。

というのがあった。

大地の「ニー」について注意すべきは、これが敬意表現にも用いられること

である。識者も、“対等かまたはそれ以上の人に「ニー」を言う。わりかた目上の人につかうことば。”と説明している。また、つぎのような説明もある。

女の人は「ニー」を同等以上のものにつかう。

男は同等に対しては「ナー」もつかう。

女は「ナー」を、同等にも言わぬ。「ニー」か「ノー」かだ。

「アノ　ネー。」などの「ネー」などは、“元来のここのことばではない。”という。ナ行音の本来的な「ニ」の生息が明らかであろう。

「私がつねた一軒のうちでは、細君が夫君に、よく「ニー。」「ニー。」とよびかけていた。おもてで、男児らのことばに、

○アタッタ　ニー。

あたったねえ。

というのがあった。これを聞きとめて、私が話題にしたのに対して、細君は、その子息をかえりみて、

○「アタッカ　ニー。」　ツタン　カニー。

「アタッカ　ニー。」って言ったのかねえ。

と語った。

大地調査でもう一つ注意されたのは、土地の人が、ここの「ニー」と古座の「ニー」とをくらべたことである。人は、“古座の「ニー」は　ヤサシー　ワイ。”と言った。また、

古座のは語尾が上がって「アノ　ニー。」となる。大地は「アノ　ニー。」  
と言う。

との説明があった。いずれにもせよ、こういう比較話しがふつうにおこなわれているのを聞くにつけても、私どもは、まぎれのない単純感声系の「ニー」が双方におこなわれているのを知りうる。

私の大地調査は、昭和三十七年夏のことであった。この地をあとにしようとしてバスに乗ると、車内は、そこもここも「ニー」ことばの氾濫であった。若いおやどうしの会話も、まさに「ニー」のやりとりであった。さかんな「ニ

ー」におどろいて、私は、日本一か、などとカードにしるしている。まったく「ね」的語感のものであったように思う。二人の青年男子も、このバスが駅につくまで、よく「ニー」を言って話しあっていたことをつけそえたい。

大地町も古座町もであるが、「ニ」に関する複合形文末詞の「ヨニ」「カニ」「カイニ」「ワニ」「モンニ」などが、またよくおこなわれている。

古座の「ニー」を見る。(私の調査は、おなじく三十七年夏である。宿の二階に、下からの「ニ」ことばが、しきりに聞こえてきた。)

○ムリ シテ クルンジャ モンニー。

むりをして来るんだものねえ。

○イッショヤ ニー。

いっしょだねえ。

○ニー。ニー。

ねえ。ねえ。

などとあった。

○コレ ニー。カツオ ニー。アツイ ゴハンニ イレテ ニー。オイシニ  
ニー。

これをねえ。かつおをねえ。あついごはんに入れてねえ。(たべると)  
おいしいねえ。

などというのも聞こえてきた。——若い女の人たちの会話であった。電話では、「ノー」と女性が言ってもいた。「ニー」が「ノー」と同居している。

古座では、「ニー」を目上にも言い、“だんなさまにも”言うが、同等にも目下にも言う、とのことである。古座駅で駅員氏からも、「アン ニー。」(あのね。)  
「ホイテ ニーヨ。」(そうしてねえ。)などの教示を得ることができた。その人は、“なんでも、ケツのほうへよく「ニー」をつけている。”と語った。おもしろいことに、古座のこの人も、

ここの「ニー」のほうがやさしい。女性的だ。大地のは「アン ニー。」

とよく上がり、男性的だ。きつい感じ。

と語った。なお駅員氏は、“漁家とかぎらず古座一般に「ニー」を言う。しかし、だんだんうすれてきつつある。小学校の教育なんかが影響している。”と説明してくれた。

串本むかいの大島にも、「アン ニー。」(あのね。)などと、「ニー」がおこなわれているようである。榎垣実氏も、『方言と文化』に寄せられた「近畿地方 大島」の中で、

ニー、モー ヤル ミザ ナイ ニー。(ねええ。もうやる水がないねえ。)  
ソーカイ、マタ コガイニ フラナンダラ ニー。(そうかね、またこんなに降らなかったらねえ。)

などの例文をかかげていられる。

『和歌山県方言』は、「アノニ」(あのね。)の言いかたが、県南の西牟婁・東牟婁の両郡におこなわれるとしている。和歌山県南部域の前記二郡の南岸地方は、おそらく「ニ」に関する問題地域なのであろう。

村内英一氏は、国立国語研究所編の『日本方言の記述的研究』に寄せられた「和歌山県東牟婁郡高池町(新 古座川町)」の中で「にー」をとりたてられ、“男は目上に、女は同等の者に用う。”としていられる。氏のかかげられる事例は、

ハヨ カイタガ、イガンデ シモータニー。(早く 書いたが、いがんでしまったね。)

などである。新古座川町は、古座の北に位して、海岸域ではない。海岸から多少は奥まった所にも、こうして「ニ」ことばが見いだされるありさまなのか。(それにしても、南部二郡の山地部ともなれば、もはや、「ニ」ことばが見られないのではないか。)

和歌山県南岸につづいて、おなじく紀州に属する三重県西南部海岸地方にも、やはり、「ニ」関係のものが見いだされる。

三重県西南部の旧紀州分にはいると、まず、南牟婁郡木ノ本町で、「ニー」

の言いきりはおこなわれていないが、「ニヤ」「ニセ」がおこなわれている。

「ニヤ」の例は、

○アン ニヤ。

あのね。

○アラ ニヤ。

あれはねえ。

○ソージャ ニヤ。

そうだねえ。

○サムイ ニヤ。

さむいねえ。

(若い人も言う。)

などである。「ノシ」という文末詞があるが、これは、よい言いかたになる。むすこがおやに「アン」とよびかけると、おやが「ニヤ」と返事する。「おまえ」の意の対称代名詞に、「アゼ」がある。「おまえはねえ。」というような時は、「アジャ ニヤ。」と言う。「ニヤ」の発音が、「ニャ」に近く聞こえることもある。

「ニセ」の実例は、

○コレ ポストエ イレテ クルンジャ ニセ。

これをポストへ入れてくるんですね。(たしかめる。)

○ソージャ ニセ。

そうだねえ。(「こうしておくのかい?」との問いに対して、こう返事する。)

などである。

大西雅雄氏も、早く『『ねー』の種々相』(『音声学協会会報』第14号 昭和4年5月)で、“古座、串本地方”の「ニー」を報じていられる。氏は同時に、“木ノ本、二木島地方”の「ニシ」「ニセ」をも報じていられ、“この「に」は「に」と「ね」の中間音位ゐるに聞える。”とも説明していられる。

「ニセ」の言いかたには、相手の「人」を思う心がにじみ出ていようか。「ニセ」は、「ニシェ」と発音されることもある。「セ」「シェ」と言われているものは、いったい、どういう起源のものであろう。当地方に「ノシ」などの言いかたがあるのからするに、「ニセ」は、もと、「ニシ」であったかとも思われる。（「シ」は、「モシ」の「シ」であろう。）「ニシ」が「ニセ」に転じたのでもあるか。

今日、「ニセ」ことばのおこなわれている所は、限られているようである。漁師町でだけ言う、と、かつて説明してくれた人もあった。ともあれ、“「ニセ」は、「何々です ノー。」の「ノー」におなじ。”のようである。

南牟婁郡に隣る北牟婁郡にあっても、旧尾鷲町方面ではまた「ニヤ」がおこなわれている。

○オイ<sup>ラ</sup> コナイ ハタラ<sup>ッ</sup>キョルノニ、イン<sup>ラ</sup> チャ<sup>ッ</sup>トモ ハタラカン  
ノ ニヤ。

わしらはこんなにはたらいてるのに、おまえらはちっともはたらかないんだねえ。

は、その一例である。上の例の教示者は、「ニヤ」にならべて「ネヤ」をも教示してくれた。——「ニ」は、「ネ」に近いものなのか。それとも、別個のものなのか。このほうでも、「ニヤ」が「ニャ」に近く聞こえることがある。しかし、「ニャ」ではなくて「ニヤ」だという。（佐藤虎男氏の教示にもよる。）

おなじく北牟婁郡下での、尾鷲から東北に行つての長島町でも、「ニヤ」がおこなわれている。石倉武七氏は、「紀伊長島を中心とする地域の敬語表現について」（『三重県方言』第1号）で、

間投の場合「行<sup>ッ</sup>タラニヤ……」（目下・同僚）、「行<sup>ッ</sup>タラノ……」  
（同族の目上）、「行<sup>ッ</sup>タラナ……」（同族以外の目上）

共通語の「ネ」を使つたら、気どっているということになる。

と述べていられる。

三重県下で、やはり問題の地域とされる所に、例の志摩半島がある。私は、

かねて、この地域にも、「ニ」探査の目を向けてきた。ところで、結果は、現在までのところ、つぎのようである。志摩半島北岸の一地には、

○アリマス ニー。

のような言いかたがある。これは、「ありますのよ。」に相当するものようである。——どうも、単純感声的な「ニ」文末詞のようには思われない。なお、この例に、

○ナンデ コシラウ ニー。

何でこしらえるのか。

○ワライマス ニー。

笑いますのよ。

のような言いかたがあるが、いずれも、「に」助詞系の文末詞かと思われる。いずれも、「ニー」が、下降調文アクセントの末端にあるのが注目される。志摩半島東岸北部で聞かれたものは、

○スーテ イカント オコー ニ。

吸うていかないでおこうかしらん。

のようなものである。やはり、「ニ」が、下降調のもとにある。もっと単純に、つよく「ニー」のよびかけがなされるようであったら、単純感声的な「ニ」文末詞が認めやすかろう。鈴木敏雄氏が「志摩町越賀・和具の会話」(『三重県方言』第13号)の中に示してられる、

……………八円位じやろに。(……………八円位です。)

の「に」にしても、私には、助詞系のもののように思われる。『全国方言資料』第4巻の「三重県志摩郡浜島町南張」の条に見える、

mハー オーキニ マー イコニ イテマー ウチノ ヒトラ マッ

ああ、ありがとう。まあ 帰ろうよ。帰って、うちの 人たちが 待っ

トルト ワリニ マ イクト シマシヨニ

ていると 悪いから 帰ると しましよよ。

にしても、「マー イコニ」(まあ 帰ろうよ。)の「ニ」,「…………… イクト

シマシヨニ。」(…………… 帰ると しましよよ。)の「ニ」, これらはともに、助詞系の「ニ」文末詞のように思われる。おそらくそこには、下降調の抑揚が出るのであろう。諸文献資料に見られる「ニ」の指摘が、今のところ、私には、総じて助詞系のもののように判断される。ところで、鈴木敏雄氏は、「志摩越賀の会話」(『三重県方言』第5号)で、つぎの会話を示していただける。

甲「よーしたにやー。」 乙「おー。」

「よーしたにやー」は「よく親切にしてくれたなー」というような意味で、人を訪ね雑談した帰り、御馳走になつた帰りにいう言葉で「有りがとうございました」という意味である。

ここには、「ニヤ」が見られる。この「ニヤ」の「ニ」は、単純感声的な「ニ」文末詞を思わせはしないか。

三重県紀州分の、上掲の「ニヤ」分布につらなつて、志摩にも「ニヤ」が見いだされるのは、興味ぶかいことである。「ニ」の、単純な言いかたはおこなわれていなくても、「ニヤ」の複合形はおこなわれているのは、瀬戸内海域などにも見られた、「ネ」はおこなわれていなくても「ネヤ」はおこなわれているというのと、おなじようなことであらう。単純感声的な「ニ」文末詞が、こういう複合形の中で伝承されてきたか。近畿南辺の、広い地帯が目される。

さて、伊勢南部にも、あるいは「ニヤ」が存在するのか。北岡四良氏の『三重県方言資料集 南勢篇 上』には、

あのにや あのね(地方)

とある。——三重県度会郡教育会の『地方方言集』にも、

あのにや 感 アノネ

の記事が見られる。「ニヤ」の分布が、こうして南勢にもたどられるとすると、もともと単純感声的「ニ」文末詞も、広くおこなわれたのかと理解されることになる。

伊勢南部にも、「行キマセウ」の意の「いこに」などがおこなわれている。(地方方言集)私が伊勢市の山田弁の中で得た事例は、「ヨー シットル ニ。」

(よく知ってるのよ。) などである。——こういう「ニ」は、「のに」に近からうか。

助詞系の「ニ」文末詞も、こうして南勢にも見いだされるありさまである。伊賀の地をたずねても、「行きましょう。」の意の「行こニ。」「行こうニサー。」などの言いかたが聞かれる。伊賀南部での私の調査例には、

○チョットダケ フコニ。

ちょっとだけ拭こうよ。(こう言って相手のよごれた顔を拭く。)

(老女→孫幼女)

○ハヨ ネヨニ。

早くねようよ。

などがある。

つぎに、北勢地方を見ても、やはり、「に」助詞系の「ニ」文末詞が見られる。“津市近辺のいなかでは、女の子が「ツヤニ。」「ツヤニ。」とよく言う。女の人どうしが話す時に、「ニ」が多い。”という。(この人は、なお、“度会郡のほうでもずっと「ニ」を言う。”と語った。)この人は、「ツヤニ。」と「ツヤナイカ。」(そうじゃないか?)とがおなじだと語った。こういう比較をするのを聞くにつけても、私には、「ニ」がすぐには、単純感声的なものであるようには思われない。他の伊勢人の教示によれば、津市の「ニ」は、

○先生 イコニ。

先生、行きましょうよ。

○スルンヤニ。

するのよ。

などである。他の北勢女性の教示によるのに、津市出身者が、

○ソヤニ。

と言っているそうである。これは、“「そうですよ。」の応答である。”とのことであった。上記、北勢の女性は、また、伊勢南部の若い女性の言、

○ソ<sup>ー</sup>ヤ ニー。

というのを教示せられた。

松阪市方面でも、「行きましょう。」の意の「イコ ニ。」などがよくおこなわれているらしい。

佐藤虎男氏は、かねて、三重県下の「ニ」文末詞に注意してこられた。氏が鈴鹿市域について見られた、

○アスコイ イッテ ミヨ ニ。

あそこへ行ってみようよ。(勧誘表現)

などは、助詞系の「ニ」を認めしめるものではなかろうか。ところで、氏が、「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で見せていられる、“桑名市に属する漁場赤須賀”の、

○ソラ ワカラシ。コッチワ ニー。ニー。

そりゃわかりゃしないよ。こちら(自分)はねえ。ねえ。(時事を論じている。) (中男→同)

は、単純感声的「ニ」文末詞をとらえしめるものか。氏は、別に、“桑名市海岸(付近漁士町)”の、

○ソージャ ニー。

そうですね。(念を押す気持。)

の一例も、私に教示していただける。

三重県下に、「ニ」助詞系と見られる文末詞が、よくおこなわれているようである。それとともに、単純感声的な「ニ」を思わせる「ニヤ」もあって、なお、単純感声的な「ニ」文末詞も、どのようにかはおこなわれているらしい。それが、北勢方面に、いく地点かにわたって見いだされるのかもしれない。

三重県下の、単純感声的と見られる「ニ」文末詞については、「ネ」との類縁関係を考えてよいのかどうか。「ネ」の全然おこなわれていない地域での「ニ」とは、今、しがたいところに、本地方の「ニ」の出自についての難問題が認められる。

きわめて大胆な想像をつけそえてみる。助詞系の「ニ」文末詞が、やがて、法外にまで自由に運用されて、これが、あたかも単純感声的な「ニ」文末詞の相貌を呈するようになったりはしなかったろうか。

上述の和歌山県下・三重県下の状況と見あわせつつ、奈良県下の状況を観察する。

たとえば、県南の東部で、

○ドー ショー ニー。

どうしようかしら。(ひとり考え)

などと言っている「ニ」は、助詞系の「ニ」であろう。これとは別に、同地域で聞き得たものに、「ニヤ」がある。これが、

○オマイラ ハラ ヘツツロ ニヤ。

おまえらは腹がへっただろうねえ。

(これへの返事は、「ハラ ヘッタ ヨ。」であった。)

○ソロバンガッコイ イク ユーテ ニャー。

そろばん学校へ行くと言ってねえ。

(「ニヤ」が「ニャー」とも聞こえる。比較的早く言われたばあいは、こう聞こえがちなのであろう。)

などと、しきりにおこなわれている。観察時、私には、「ニヤ」とともに、「ネヤ」というのも聞こえるように思えた。音声学的には、「ニヤ」「ネヤ」が両存するのではないかと考えた。ところで、土地の有識者に、私が、“「ネヤ」がここにあるんですね。”と質問したところ、“「ニヤ」でしょう？”との反問がかえってきた。音韻論的には「ニヤ」とされるものが存在しているのであろうか。老若の男性にこれが頻出しているもののようである。

「ニヤ」の「ニ」は、上来、問題にしてきた単純感声的なナ行音の「ニ」であろうか。(その、「ニ」単独のものではなくて、「ニヤ」複合のものがあるということは、ものの遺存のさまとして、うなずけることである。)

複合形態の中に問題因子の潜在することは、ありがちのことである。

単純感声系の「ニ」が当地方にも存在するのだとしたら、ここは海岸地帯ではないので、ここに、ナ行音「ニ」文末詞に関する別趣の注目が必要となる。

さて、「ニヤ」は、——こういう複合形になったものゆえであろうか、県中部域にも存在している。西宮一民氏の「奈良県方言の待遇表現について」(『国語学』36)には、“中間部”のものとして、

{	ナー 敬
	ニヤ 親
{	ナー 敬
	ネヤ 親

があげられている。なお、氏は、国立国語研究所編の『日本方言の記述的研究』に寄せられた「奈良県磯城郡織田村(新 大三輪町)」の中でも、

終助詞「ノーラ」(十津川)「ネヤ」(大塔村, 坪内, 下北山, 上北山)

「ニヤ」「ニヨ」(洞川)は、形態・用法とも注目される。

としるしていられる。洞川の「ニヨ」については、上の『国語学』論文にも、

洞川地方	{	ノー 敬
		ニヨ 親

の記事が見られる。(本書 p. 281 参照)

「ニヤ」とはっきり聞こえてくるものに関しては、別の注意がいる。上の「ニヨー」についても、これは、ただちには、ナ行音「ニ」文末詞の問題の内に包摂することをつつしまなくてはならないであろう。ただ、「ニヨ」にも、「ニ」音が聞こえることはたしかである。こういう点では、「ニヨ」の類も、いちおうここに合わせかかげてみることはゆるされよう。

奈良県下の「ニヤ」は、なお広く探索すべきものか。こういう複合態となれば、諸方にあり得もすることかと思察せられる。

『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都祁村」の条に、

f ナマイコト マタ ナンニャンニン ソノ キカイ デケテ  
うまいこと また なんですよ 機械が できて……。

とある。「ナンニャンニン」とある。この「ニン」は、外形こそ「ニー」の「ニン」とも受けとられるものであるが、じつは、「ノヤ」系の「ネン」であろう。「ネン」が「ニン」と聞こえたものと思われる。——「なんですよ」と解説されている。

滋賀県下に関しては、佐藤虎男氏の「滋賀県東辺，東浅井郡吉槻部落とその周辺」(『国文学攷』第十七号 昭和32年4月)の、

○ホラ オマイ，ニー。

そりゃあんた，ねえ。 (初老男)〔吉槻〕

○キューシューカラ ニヤ。云々。 (初老男)〔吉槻〕

を引用することができる。佐藤氏は、「ニー」に関して，“「ネ」に近い。”と言われる。ここの「ニー」は、まぎれのないナ行音文末詞の「ニー」であろうか。

だとすると、本県下の他域ではどうなのかが、私どもの関心事になる。

井之口有一氏は、『滋賀県言語の調査と対策』(自家版 昭和27年7月)で、

野洲郡守山では、「あのニョー」(あのね<sup>ニョ</sup>)の意)のように、ニョー (njo <no:) を「ね」「な」の意に用いる。

との記述を見せていられる。氏は、「ニョー」を「ノー」にかかわるものと見ていられるか。

「ニョー」の音形だけを今は問題にするならば，“草津市とその周辺”にも、それが認められる。塚原鉄雄氏の教示によるのに、そこでは、「暑いニョー」  
「静かやニョー」<sup>(それで)</sup>「ほんでニョー」などの言いかたがなされているとのことである。「ニョー」は，“ザックバランな仲間うち”で“クダケタ空気”の中でつかわれるものらしい。氏は，“「ニョー」は純然たる男性語で”と言われる。

「ニョー」の本源は、定かでない。ともあれ、今は、「ニ」音の聞こえを重視して、こういう形も、ナ行音「ニ」文末詞問題の中にとりいれてみるしだいである。

以上、近畿地方の問題事例の分布を総観するのに、奇しくも、近畿南部地方と近江地方とでの対応分布とでも言ってよいものが注視される。近畿での「ニ」の存在のしかたとして、これは、重要視されるのではなかろうか。両地域は、近畿地方の外周域である。しぜん、私どもはここで、近畿中央域は、もともとどうであったのだろうと想像することができる。(近畿南方と東北方とに分布一致が見られるとして、これを周圈的一致とよんでみてはどうであろう。——私としては、周布的一致とも言いたいところであるが。)

#### 八 中部地方の「ニ」ほか

中部地方も、北陸地方に、問題とすべき「ニ」が分布している。北陸と近江とは、関連しがちである。上述の近畿南部地方と近江地方との周圈的一致は、さらに見ひろげて、近畿南部地方と近江・北陸の地方との周圈的一致とも見うるであろうか。(こうなると、なおさらのこと、周布的一致との用語にしたがいたくなる。)

近畿地方の「ニ」が、「ネ」に關係の深いものと仮定する。北陸地方の「ニ」は、じっさい、「ネ」に關係の深いもののように思われる。こういう考えかたにたつ時は、「ニ」分布での近畿南部地方と近江・北陸の地方とは、いよいよきれいな対応關係を示すものと見うることになる。

北陸も、福井県下には、問題視しうるものがまずは見いだされない。ただ、越前中部の足羽郡には、つぎのような言いかたがある。

○ベト ナブッター アカン クンニャー。

土をいじってはだめだつてば。

○ベト ナブッタラ アカ<sup>ン</sup> クンニャニ。

○セント オケ<sup>ッ</sup> クンニャー。

しないでおきなさい(というのに)。(p. 204)

これらは、土地出身の寺横武夫氏の教示によるものである。「クンニャー」の発音は特異なものであり、[kɲ:a:] または [k:n:a:] と表記しうるものようである。

この「クンニャー」は、「クンニャニ」ともあるのから察するのには、「のや<指定断定の助動詞>」に関連のあるものではなからうかと思われもするが、定かではない。「クンニャニ」の「ニ」は、「のに」を思わせるものであろう。このようではあるが、「クンニャー」が、いまや分立の態にあることは、明らかである。ものは、文末詞化していると受けとることができるようである。文末詞ふうのものだと解すれば、これに「ニ」音のあるのが、今のばあい、いちおう指摘すべきことがらになる。

石川県下は、「ニ」問題の大領域である。当地方の「ニ」に関しては、すでに p. 380 でふれるところがあった。

金沢弁の「ニ」例は、

○サ<sup>ヅ</sup>イ ニー。

さむいねえ。

○コ<sup>ン</sup>ニャ ヒトサメ フルロ ニー。

今夜ひと雨ふるだろねえ。

などである。町なかの人が、「ホヤ ニー。」(そうだね。)などと、「ニー」を連発している。方言絵はがきなどにも、「ニー」の、はっきりとした指摘がある。ところで私は、近来、この「ニー」について、「ネ」起源ではなからうかと考えるにいたっている。現に、「ホヤ ニー。」などのばあい、「ニー」が「ネ」と「ニ」との間の音のようにも聞こえる。昭和三十九年の調査では、私は、“金沢の「ニ」文末詞こそは「ニ」と「ネ」との間のもの？”“何かの変”

と見ている。かねて有名な、当地方のもの言いに、「ありがとう 存じミス。」などというのがある。「ましょう」も、「ミッソ」とある。「マ [ma]」を [mi] と発音しがちの所がらであれば、「ネ [ne]」を「ニ [ni]」とすることも、しぜんになされたのではなからうか。当地方方言の音韻論的基質は、「ニ」を発生させやすい事情にあったと思われる。

さきには、北陸の当地方が、出雲地方や東北地方と共通する、裏日本性の発音基盤を有することを考えた。(p. 580) [i]母音も、したがって中舌母音的にひびき、「ニ」も、いきおい「ネ」にまぎれるようにも考えた。しかし、土地の人が「ニ」文末詞を認めているのによるかぎり、ものが「ネ」とまぎれやすい点があろうとも、存在するものは、要するに、「ニ」であるとされよう。その「ニ」が、もとは「ネ」から出たものではないかと、今は、起源考察を加えてみるだけである。

加賀東南部の白峰で得たものには、

○メ<sup>↑</sup>ダ<sup>↑</sup>ル<sup>↑</sup>イ ニー。

目だるいね。(見えて、感心できぬということ。)

などの言いかたがある。「ニ」文末詞が存在するとしうるようである。しかし、これももともと、「ネ」的なのではないか。

この東南部に、「ニョー」の言いかたがある。

○ア<sup>↑</sup>ブ<sup>↑</sup>ナイ トコ<sup>↑</sup>ヤ<sup>↑</sup>ッタ ニョー。

あぶないとこだったねえ。

○ド<sup>↑</sup>ッ<sup>↑</sup>チ<sup>↑</sup>ガ エー モン<sup>↑</sup>ヤ<sup>↑</sup>ラ ニョー。

どちらがいいものやらねえ。

などと言っている。「ニョー」の、文末詞としての独立のはたらきは明瞭である。「ニョー」は、「ノー」にも似ている。それにしても、これに「ニ」音が認められるので、今はひとまず、「ニョー」形をここに合わせかかげておく。

「ニョー」と言う人が、「ニャー」と言ってもいる。調査地、白峰では、「ほとんどの人が「ニャー」を言う。」「特殊の人々が「ニョー」を言う。」

との教示を受けた。

本県下の「ニャー」については、さきに、「ナ」文末詞記述のさいに述べるところがあった。(p. 206)

能登半島の頸部で調査し得たところによれば、「ニー」の言いかたが、目上の人への上品な言いかたである。

○キョーワ サムイ ニー。

きょうはさむいすねえ。

○ソーヤ ニー。

そうですね。

などが、いずれも上等の言いかたとされている。事例応答をしてくれた初老の男子の説明には、“「ニ」は「ネ」とおなじでいてねい。「ネ」は「ノ」よりていねい。”というのがあった。ここには、土地人の意識でも、「ニ」の、「ネ」と区別されているのが注目される。それにしても、「ニ」は「ネ」とおなじとするところには、私どもに、「ニ」の「ネ」起源を考えしめるものがなくはない。「ニ」の言いかたが上品のものとされているのも、「ネ」起源ゆえではなかるうかとも思われる。

能登半島西岸の富来町では、私の現地調査のさい、小学校男教師十数名のかたがたが、“「ニー」は富来郷で聞かぬ。”と、異口同音に答えられた。ほかの土地っ子もまた、“「ネー」は言うケド、「ニー」は言ワン ネー。”と答えてくれた。そうではあるが、

○ゴクロサマ ニー。

ごくろうさまねえ。 (老男→藤原)

○エー、ソー ケーィニー。

ええ、そうかいなあ。 (老女→藤原)

などと、私に明らかに「ニー」と聞こえるものがとらえられた。現実音に「ニー」があることは、まずたしかなようである。——しかしながら、これらのカードを検閲してくださった土地の識者は、それこれのカードに、“「ニ」ではな

くて「ネ」です。”と、くりかえし注記してられる。そういえば、老女の発言に、

○ア<sup>ニ</sup>ン <sup>ネ</sup>ー。アレヤ トイ<sup>ニ</sup>ー。

あのねえ。あれだってねえ。

と聞かれたものもあった。この富来町方面でも、要するに、「ネ」からの「ニ」——と聞こえもするもの——が、よくあらわれているということか。

富来町から、半島西岸を北にのぼって、門前町方面に進んでも、「ねえ」の「ニー」がよくおこなわれているようである。門前町出身の一老男は、私に、

○オーキカッタ<sup>ツ</sup>ーデス <sup>ニ</sup>ー。

大きかったそうですねえ。

などと、「ニー」をしきりに示しながらも、私が、「暑い ニー。」「さむい ニー。」と言いますかと聞くと、“ここは「ネー」だ。”と答えた。

能登半島東部南岸の宇出津でも、昭和二十四年の調査時、私は、“「ネー」をていねいに言うと「ニー」。”などという説明を聞くことができた。聞こえの「ニー」の実例は、

○オヤ<sup>ニ</sup>ー、ゴツツォサマデ <sup>ニ</sup>ー。ゴザイミシタ <sup>ニ</sup>ー。

おやおや、ありがとうございましたねえ。(物をもらったのお礼)

などである。“「アノ <sup>ニ</sup>ー。」とか「<sup>ニ</sup>ー」とかが宇出津のことばで。”との説明も聞き得た。

能登島には、「ニヤ」があるという。(愛宕八郎康隆氏教示)なお、能登半島内の他地にも、「ニヤ」の聞こえのものが見いだされるか。

※ ※ ※

本県下の「ニ」(起源はともかく)に関する複合形の文末詞に、「ガニ」「トイニ」「ワイニ」などが見いだされる。

能登の、

○カンバンノ <sup>ニ</sup>カカッテ アル <sup>ガ</sup>ニ。

(あそこに)看板のかかっている家があるでしょう? (青女——)

藤原)

などを見るのに、「ニ」は、助詞系のものかと察せられる。

「トイニ」や「ワイニ」にしても、そこに、単純な感声系の「ニ」文末詞を認めることは、容易でないようである。念のために、「ワイニ」の一例をあげておこう。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町 向田」の条には、

*m*ユキノ フル ナカニワー ター ウチニ イッタワイニ

雪の 降る 中を 田を 耕しに 行きましたよ。

などの例が見いだされる。

富山県下では、私は、ナ行音(感声系)の単純な「ニ」を、まだ見いだし得ていない。「ニ」に近いものを富山市近郊で聞きもしたけれども、そのさい、私は、それらを「ネ」[e]と解した。

能登半島では、“越中の人に、「ソシテ ニー。」(そしてね。)  
「ソシテ ニー。」などと言う人がある。”と聞いたことがあるが、これはまだ、信頼すべき資料とはしがたい。

愛宕八郎康隆氏は、越中富山湾岸の一地で、

○ソソナ モン ナニガ モットク コトイニョネ。

そんなもの(昔の織機)は、どうして(今まで)もっているものでしょうか。〈反語〉の言いかたを聞いていられる。(「北陸道方言のイ音尾について」『国文学攷』第二十二号 昭和34年11月)ここに「ニョ」がある。

※ ※ ※

県下に、「ニ」に関する複合形の「カニ」「カイニ」「ワニ」などが見いだされるもするが、これらについて、ただちに感声系の「ニ」文末詞を認めることは、容易でないように思われる。

岐阜県下には、助詞系の「ニ」文末詞が見られるばかりである。しかし、「ワ

「ニ」など、複合形文末詞の一体のものが、単純なよびかけ・訴えかけにはなっていない。

愛知県下にも、江端義夫氏の調査などをも参看するのに、ナ行音の感声的な「ニ」文末詞は、おこなわれていないようである。「ニー」と、はっきりとした上げ調子で訴える言いかたがされているけれども、それは、「のに」の本源をどのようにかにおわす訴えにほかならない。

※ ※ ※

複合形の「サニ」などのばあいも、「ニ」は、助詞系のものにほかならないであろう。ものは、「サニ」と発音されがちである。

静岡県下にも、感声系の「ニ」文末詞は見られないようである。長野県下でも、同様である。静岡・長野ともに、「のに」系の「ニ」がよくおこなわれている。

○オ<sup>ニ</sup>ンシニワ ヨ<sup>ニ</sup>ワイ ニー。

わしは恩師にはよわいんだ。

は、長野県南での一例である。

現地で「ニ」文末詞の聞かれたさい、私が、ただちに、「暑いねえ。」「さむいねえ。」の意の「アツイ ニー。」「サムイ ニー。」を言いますかと聞くと、人々は、それは言わないというのがつねである。

森鷗外の作品「蛇」（『現代日本文学全集』3 森鷗外集）には、

恐ろしく早言で、詞は聞き取れない。土地の訛りの、にいと云ふ互爾波が、珠数の数取りの珠のやうに、単調にしやべつてゐる詞の間々に、はつきりと聞える。東京でねえと云ふところである。ここは信州の山の中の或る駅である。

との文章が見える。“東京でねえと云ふところ”を「にい」と言っているといふのである。はたして、感声的な「ニ」が、そこにあったのだろうか。「のに」

系の「ニ」の、自在なつかわれかたが、そこにあったのではなからうか。

山梨県下にも、在るのは、助詞系の「ニ」文末詞だけのようである。

中部地方も、北陸を除いての大部分の地域が、本題、ナ行音「ニ」文末詞には無関係の所のようにである。

### 九 東国地方の「ニ」ほか

関東地方もまた、本題の「ニ」文末詞の、さほどには認めがたい地域である。しかし、問題地域の一・ニが注目される。

神奈川県下には、助詞系の「ニ」文末詞が見られるだけのようである。

東京都下となって、伊豆諸島内に、問題の「ニー」がある。新島で、

○キョーワ ヒャッコイ ニー。

きょうはひやいねえ。 (“成年男子”)

○キョーワ サビー ニー。

きょうはさむいねえ。 (“中年以上の男子”)

○イツデム ヤッケーニ ナウ ニー。

いつもやっかいになるねえ。

などと言っている。「カニー」「ガニー」などとも言っている。)人は、これらでの「ニー」を、「ネ」にあたる。」と言っている。「ニー」をつけるのは、ふつうもしくはそれ以上でいねい。」などとの説明もなされている。

新島に「ニー」の存立することはたしかである。しかし、このものは、「ネー」の転訛形ではなからうか。(「ネ」にあたる。」との説明は、重要であると思われる。)この島では、「先生がいらっしゃった。」ということも、

○シンセーサマガ オジャッタ。

と言っている。つまり、[e]母音の[i]母音化が、この島の方言の一習性

になっている。この島での「ニ」こそは、「ネ」からの単純な「ニ」成立を示すものではなからうか。

それにしても、明白な「ニ」の発音があることは、たしかである。これをそのまま受けとって、いわば共時態を説明する時は、私どもは、この島に、ナ行音「ニ」文末詞があるとも言うことができよう。

千葉県下などに、助詞系の「ニ」文末詞は認められるが、ナ行音感声系の「ニ」文末詞は、見いだされないようである。ところで、反町勝美氏の「群馬県の語法 勢多（東部）山田（北部）の語法」（『季刊 国語』昭和22年冬季号 3）には、

「代名詞」「ぬし」の転訛と言われる「にし」が此の地方に行われている。

との記事が見られる。「にし」が、代名詞「ぬし」の転訛ならば、今の問題にはならない。

もしも、「ネシ」「ナシ」などに類する「ニシ」がここにあったとしたら、その「ニ」は、今、問題としなくてはならないものである。

茨城県下が、とくに注視すべき地域である。旧年のこと、私は、奥羽地方から南下して、茨城県北の多賀郡下をたずねた。そのさい、高岡村・南中郷村のあたりで、つぎのような「ニ」を聞くことができた。

○ソー ニー。

そうねえ。

（これを、感心した時に言うとのことであった。）

○ソーデヤンシタッペ ニー。

そうだったでしょうねえ。

○ソーデヤンスッペ カニー。

そうでしょうかね。

「ニ」が、高くも低くも、いろいろの品位に、ふつうのことばとして用いられるようであった。なれた「ニ」であった。

常陸は、奥羽地方のことばの流れを承ける地域とも見られる所である。いわば、東北的な所がらであるとされよう。その点で、この「ニ」も、「ネ」的な「ニ」と見られないこともない。「ネ」は、[ne]で、それは「ニ」[ni]に近くも聞こえるはずである。しかし、ここの「ニ」は、初心の私には、郷里の「ニ」文末詞におなじもののように思われた。私は、他地域での残存のばあい等に等しく、このほうでも、「ニ」と聞こえたものが、まずは海岸域近くに見いだされたことを、興味ぶかく思った。

『茨城方言集覧』には、「にー」についての、

言葉ノ末ニツク「な」又ハ「ね」ト同意 多 (藤原注 多賀郡)

との記事が見える。ところで、同書に、

そーたにー 左様デセウトイフ意 多

との記事も見える。これの「ニ」は、むしろ、助詞系の「ニ」を思わせはしないか。別に、『茨城県方言の考察』には、

ナ・ナー・ヤ・ワ・ワヤー・ネー・ニー・シ・ネシ

の記述が見える。

多賀郡が問題の地域であることは、たしかであろう。が、純粹のナ行音文末詞「ニ」がおこなわれているだけなのかどうか、定かではない。

後年、茨城県最北の北茨城市域内に磯原町をたずねた時は、老年層の発言、

○ワー ニー。

“そうですか。”

(「ニ」の発音は [ni] であった。)

○キョーワ アヅイ コドニー。

きょうは暑いことね。

(「ニ」は [ni] である。)

などというのも、聞き得ている。この近辺にも、「ワ<sup>↑</sup>ニー」などと言う所があ

るらしい。

東北一般には、単純感声系の「ニ」は、存在しないありさまである。ただ、「ネシ」文末詞は、かなり広く見いだされ、この発音が、「ニシ」に近く聞かれることはある。単純な「ネ」の言いかたの「ニ」化したものは、ほとんど聞かれない。

福島県安積中学校の『方言調査資料』に見られる、

ニイ 笑ワンニイ

というのは、どういう「ニイ」であろうか。

山形県下では、三矢重松氏の『庄内語及語釈』に、注目すべき記事が見られる。

のう にい又はにゆうなどともいふ。標準語ネイ・ナアである。

この説明の下には、「のう」の用例しかあがっていないが、打消の助動詞の例文の中に、つぎの一例が出ている。

雨ふらねエ  $\left\{ \begin{array}{l} \text{のう} \\ \text{にい} \end{array} \right.$  (雨フラ  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ン} \\ \text{ナイ} \end{array} \right.$ )  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ネイ} \\ \text{ナア} \end{array} \right.$

「雨ふらねエにい」は、純粹のナ行音「ニ」文末詞を受けとらせるものであろうか。もっとも、“にい又はにゆう”と説明されているのからすると、「にい」を、ただちには、感声系のもんとして受けとりかねるようにも思われる。あるいは、感声的に「ニー」と「ニュー」とを分化派生させもしたか。

常陸に問題の「ニー」があり、こなた庄内に問題の「ニー」がある。(もっとも、三矢氏の記述は、年次が古い。)直接の連絡などはなかったであろうに、どうして、このようにあい距った所で共通のものができているのであろうか。東国地方の底面をたどれば、脈絡はつくと言え言えるものの、なぜ、この両地域にのみ孤立的にももの残存がとらえられるのかとなると、解釈は容易でな

い。

岩手県北の軽米弁などでは、「ニシ」文末詞がおこなわれている。

○ズッ<sup>下</sup> ャ<sup>下</sup>ノ ヒ<sup>下</sup>サバ ニシ。

ずっと下の人にはねえ。 (初老女→藤原)

などとある。「ニシ」はまず [niʃi] である。

青森県東部の、いわゆる「南部」地方に、「ニシ」([niʃi]) がよくおこなわれている。下北半島の旧田名部町での一例は、

○キョ<sup>ァ</sup> サム[ü]イ ニシ[niʃi]。

きょうはさむいですね。

である。「カニシ」などもおこなわれている。) 土地の人は、「ニシ」を上位の言いかたとし、これに「ノー」「ナー」がつづくともしている。野辺地町での一例は、

○オメサマ ス[ü]シ[ī] アガリ[ī]ル[ü] ガニシ[niʃi]。

あなたさん、すしをおあがりになりますか。

である。——「ガニシ」とある。

これらの「ニシ」に、「ネシ」本源を考えることができるのかどうか。此島正年氏は、「ことば風土記 青森」(『言語生活』第十四号 昭和27年11月)に、

汽車は下北半島の入口野辺地町に着き、すでに旧南部領である。津軽の鄭重の終助詞ネスがもうニスにかわり、有名なマイネ(だめだ・いけない)はワガネになる。(中略)

例えば津軽のネスに当る終助詞は、野辺地以北はニスであるが、南下して三戸郡では、八戸市を中心とするナス地区のほかに、津軽式のネスの行われる所もあり、

としるしていられる。「ニス」と「ネス」との、あい近い関係にあることは、明らかであろう。おのおのの発音が、また、区別困難なようなものでもある。

私は、調査時、たびたび「ネシ」かと考えたりしている。（「ニ」に近い「ネ」の聞かれることは多い。）

諸文献には、「ニシ」「にし」「ニス」[nisi]などの、文末詞指摘が見られる。一般に、独立の「ニシ」を認めようとする傾向があるのだろうか。青森県下の津軽と「南部」とで、「ネス」と「ニス」とが対立していると思われるようであるならば、その点でも、「ニス」は、現在、独立の形態をなしているものとされようか。

「ニシ」が、たとえ「ネシ」の転訛に成ったものだとしても、現在、人々（研究者をもふくめて）に、「ニシ」または「ニス」の音韻観念が把持されているとすれば、もはやそこに、「ニシ(ス)」形態が成立しているとも見てよからう。

そのように解したばあいには、「ニシ(ス)」に関連して、私どもは、ナ行音系の「ニ」文末詞を認めることができる。

『青森県方言集』には、

ソンドニス sonda-nīsī 感 野辺地 さうですね

という文例が見える。

北海道地域に関しては、現在までのところ、私は、「ニ」文末詞の確たる資料を得ていない。

## 十 おわりに

I. 異色の文末詞、感声系の「ニ」と考えられるものを探索して、ひとまず上乗のとおりの叙説をなすことができた。かえりみて、「ニ」の、いかにも特殊特定の文末詞であることが痛感される。

II. 「ニ」文末詞の、上述のような存立を受けとって、これをひとまず共時的に理解するならば、次下のようなことが言えようか。

「ニ」は、まさに、文法上の一個の特質素として存立する。そのさまは、

「ナ」に「ナン」があり、「ノ」に「ノン」があり、「ネ」に「ネン」があるのに等しく、「ニ」に「ニン」があるところにも、よく認めることができる。「ニン」形発生の、他の類似のばあいに対応する自然さが、「ニ」特定素の自律性を明白にしている。

「ニ」は、「ネ」ができたのに似た発生事情によってしぜんにできたものではないか。「ニ」がせま口の発音である点は、「ネ」がそうであるのに似ている。「ネ」ができたのとあい近い発音条件によって「ニ」が産みだされたと想像することができる。

「ネ」は言わないけれども「ニ」を言うというような「ニ」の存立状況などからしても、「ニ」と「ネ」との対立的な存在傾向は、認めることができるように思う。たとえば、「ネ」に関係を持ちつつ「ニ」が生成したとしても——そういうばあいがあったとしても、存立通行の「ニ」は、「ネ」と対存するものになっている。

いわば、ナ行音にあってのよこの分化系列が明らかであり、「ニ」文末詞は、その系列の中で、しぜんの正位置を得ていると見られる。

Ⅲ. しぜんにその地位を獲得してよかったはずの「ニ」文末詞は、その音感に比例する実用品位を呈するにいった。総体には、「ニ」が、中等品位以下の表現をささえるものとされている。

それにしても、つかう人の年齢的階層別によって、用語気分も待遇品位もちがうことがあるのは、方言でのつねのこととされる。「ニ」というようなきわめて特異な文末詞のばあい、私どもは、その現用に追隨して、深層にわけいり、その実質・表現価を尋究することに、かくべつの興味をおぼえる。こういう中で、私どもは、パロール追求の方言学を実感するとも言える。

Ⅳ. 「ニ」の発生に関して、柳田国男先生の示された通時論的解釈がある。先生は、『定本柳田国男集』第十九巻の「国語の将来」の p. 146 で、つぎのよ

うに述べていられる。

現在ほど明らかになつたことは、此中ではネが最も新しいことである。稀には今一步進んでニ—と言って居る例さへあるが、是などは又ネからの分化のやうである。ノは短い方が新しく、長い方はナウとも聴えるから元はナの長音で、即ち中古の口言葉のナンに最も近いものである。

先生は、「ニ」について、“ネからの分化のやうである。”と説いていられる。

私も、上来の記述の中で、しばしば、「『ネ』からの『ニ』」を考えてみた。近畿地方や北陸でのばあい、——ことに山地域での「ニ」のばあいなど、「ネ」からの「ニ」発生を考えたほうがよいのかとも思われる。しかしながら、つねには、「ニ」の背後に「ネ」を考えがたいことも事実である。

じっさい、上述の「ニ」の諸分布を見るのに、それらは、かならずしも同源のものとは思われないふしぶしがある。徳島県東岸での「ニ—」「ニ—ン」、紀州南部の「ニ—」などを見てみると、これらは同質のもので、しかもすぐには、「ネ」を考えさせないもののように思われる。私の郷里大三島での「ニ—」もまた、「ネ」には無縁のもののように思われる。では、鹿児島県下の「ニ」は、私どもの「ニ」と同質のものかという、私は、異質とまでは言えないけれども同質とも断じかねる感想を持つ。等しく「ニ」形なのであるけれども、東西にわたって、その存在につき、実質を深く吟味しなければならないものがあるように思われる。(——上来の叙説では、その努力にしたがったつもりではある。)庄内地方での「ニ」などは、さきの紀州のなどにくらべれば、すでに消えかかった古い「ニ」ではないか。分布の土地での「ニ」の新しさ・古さのこともあって、「ニ」の実質の論定がなおさらむずかしくなっている。

瀬戸内海大三島でのばあいも、近隣の島には、「ネヤ」がある。大三島は、「ネヤ」に無縁であるけれども、他島嶼の「ネヤ」の「ネ」をいつかは保有して、大三島は、それを、早くも「ニ」にかえてしまったか、と考えることもできなくはないか。(p.401)

金沢地方でのばあい、もし、「ニ」が「ネ」から分立したのであったにしても、現在の「ニ」は、共通語の「ネ」とは別個に存立するものである。通時的にはともか

く、共時的には、「ニ」は独自のものである。

V. さて、「ニ」文末詞の分布相は、今、あらためて、一葉の分布図にまとめあげてみたいところである。

大観して、まず、事象の近畿以西に比較的多いのが注目される。(このさい、北陸地方の事情は、近畿以西のそれに密接するものと見る。)このことは、何をものがたるか。ナ行音文末詞にはかぎらないことである。一般に、文末詞では、国の西半地方に、その繁榮のいっそうさかんなものが見られる。こういう事態の中で、「ニ」文末詞の分布・存立も理解されるべきであろう。

つぎに、分布相では、国土辺周分布の特色が見られる。奈良県下・滋賀県下などの分布もあるけれども(——それらは、ことによると、「ネ」に近い「ニ」かもしれないが)、多くの「ニ」分布が、海辺地域や島嶼部に見られる。内部山地の方面よりも、周辺・海岸の方面に、「ニ」がこうも分布しているのは、どうしてなのであろう。これは、ナ行音「ニ」文末詞に私がとりついて以来の疑問である。

たまたまのことでもあるかもしれないが、中部地方の内陸部には、助詞系の「ニ」文末詞がさかんである。「のに」の意の「ニ」文末詞の、山海をえらばないおこなわれかたに対して、本来の——と、今は言いたい——「ニ」文末詞は、山地帯をあまり好まないかのようなのである。——国土辺周の「ニ」が、いわば、ナ行音の感声的文末詞の「ほんもの」なのではないか。

とはいいながら、助詞系の「ニ」文末詞にも、すでに上述したところに明らかなおこなわれかた、その用法の自由化とでも言うべきものがある。おこなわれかたの実際に、感声系の「ニ」文末詞相応のものが見られる。私は、しきりにナ行音文末詞と言い、感声系の文末詞と言って、助詞系のものとの区別を明らかにすることにつとめているけれども、おこなわれかたの実情に、両者の接合するものがあることは、見おとしてはならない点である。

## VI. ナ行音「ニ」文末詞存立の、過去と未来とを考えてみる。

今日、見られる「ニ」の全国的な分布相は、退化の図と見るべきものなのかどうか。——もともと、こういう程度の存立でしかなかったのかどうか。

私は、退化の図ではあろうと考える。とはいいいながら、さほど大きな退化事態をになったものではないだろうとも考える。

四国での東岸域といい、近畿での南岸方面といい、あるいは九州の南部といい、今日、「ニ」の存立する所は、概して辺域である。瀬戸内海大三島でのばあいも、「ニ」存立の集落（すなわち私の郷里）は、大三島全島内での北辺陞である。辺域分布は、とかく、私どもに、残存分布を考察させやすい。諸辺域を統一的に受けとるならば、「ニ」の今日の分布相は、やはり、一大残存相（疎散ではあるけれども）かとも思われる。

現在、「ニ」がだんだんにおこなわれなくなっていることは、存立地での共通現象であろう。金沢の人からも、“「ニー」がだんだんなくなる。”という説明を聞いた。私の郷里方言でも、「ニー」の衰退がいちじるしい。おそらく今後は、より早あしに、「ニ」文末詞は、すがたを細めていくことであろう。ついには、「ニ」は衰亡しよう。

むろん、「ニ」文末詞は、人が将来に向かって標準語を考えるばあい、問題とされることはないであろう。

## 第六節 「ヌ」の属

ナ行音に「ヌ」がある。狭母音〔u〕を持った「ヌ」文末詞は、存立しているのであろうか。これへの興味もまた、人々に大きいはずである。

私は、はじめには、ナ行音文末詞という着想からして——また、「ニ」のおこなわれかたの微少であるのからして、「ヌ」は、いよいよおこなわれがたいものであろうと想察した。（古来の「ヌ」よびかけことばなどというのも、見られなかったようである。）

しかし、前節の「十 おわりに」の中で述べたナ行音での「よこの分化系列」という考えかたからするならば、「ヌ」がおこなわれても、ふしぎはないわけである。その存立可能性は認められる。

永田吉太郎氏は、『方言資料抄 助詞篇』（自家版 昭和8年11月）の p. 445 で、

「ぬーんし」

千葉県安房郡山間部地方（老人稀）

（館山育男氏）

「ぬす」

青森県下北郡脇野沢村 ○コドシ ノ フヨァ キョネン ヨカ  
ヨホド ノゴエ ヌス

（福田建之助氏）

との記述を示していただける。これらの「ぬ」には、ナ行音の「ヌ」文末詞を認めてよいのかどうか。「ぬーんし」は、ことによると、「ノーンシ」の転訛形かもしれないと思われる。青森県下の脇野沢村は、下北半島西部、青森湾岸の地である。ここの「ぬす」は、さきに「ニ」の条で見た「ニシ」（p. 430）に近いものではなかろうか。あるいは、こうでもあろうかとも思う。「ニシ」の発音は [niʃi] なので、その「ニ」が、しぜんに [nü] と聞こえたりするのはなかろうか、と。私は、今のところ、「ヌス」をそのまま現地の現物として受けとることができかねる。したがって、今は、この「ヌス」に、ナ行音文末詞の「ヌ」を見わけることなどは、できない気もちである。

宮良当壯氏は、「青森県の方言（1）」（『日本の言葉』第1巻第1号 昭和22年6月）で、

ホンダニシィ（さうですな）、（中略）ニシィ（ねえ）の代りに「ヌシィ」、  
「ノー」の用いられることもある。「アノヌシィ」（あのねえ）、「アノノー」  
というようなものである。

と述べていられる。(青森のことばについてのようである。)氏は、こうして「ヌシィ」を認めていられるのであるが、「ニシ」が、その発音ゆえに、「ヌシィ」と聞こえるようなことはなかつたろうか。——そういう「ニシ」も、「ネシ」的なものかもと考えるしだいである。

要するに、私は、青森県下にあっても、「ヌシ」的なものは認めがたいように思う。したがって、ナ行音文末詞「ヌ」関係のものは、どのような形においても、本県下には存在しないだろうと、私は考える。

では、国内に、「ヌ」文末詞は絶無かというのに、そうではないことがだんだんにわかってきて、私は、一種のとまどいを感じている。

まず、『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条に、

mイヤーヤー コレア ホニ ナニア テンデノ イノツダカラナ  
 いやいや これはほんとうに なあに 一人一人の 命だからね。  
 オヌ トショリャー ノコッテ マズー コマッタモンデスナー  
 年寄りが 残って 困ったものですね。

というのが見いだされる。「イノツダカラナオヌ」とある「ヌ」が問題になる。これは、どういう「ヌ」であろうか。

つぎに、旧年、大橋勝男氏が教示せられたところによるのに、宮城県白石市齊川字町尻南出身の学生氏は、つぎの諸文例を大橋氏に報告したよしである。

あいづち

○ソーダ ヌー。(そうですねえ。)

呼びかけ

○ジェンポー ヌー。アンダー。(順坊人名よう。あなた。)

その他

○ダメダ ヌー。(だめだなあ。)

○イー テンキダ ヌー。(良い天気だねえ。)

“使用者——45才ぐらいから上の年代の女子。待遇品位、そんなに悪くない。

むしろよい。」とのことである。これらの「ヌ」例は、単純なナ行音「ヌ」文末詞のように思われるが、じっさいはどうであろうか。すくなくとも、この種の実例に接すると、私どもも、ナ行音の「ヌ」文末詞は、あり得ないものではないことがさとられてくる。——(/u/音を持ったナ行音「ヌ」は、訴えことばとしては存立していないのではないかと長く考えてきたことは、私の迷蒙にすぎなかったのかと、今は思わせられもする。この「ヌ」を、じつは私自身も、旧白石町で聞いたのであった。) (p. 311) 若い女性にこれが出るとあった。

押見虎三二氏の「佐渡方言の文末助詞について一両津市大字片野尾における一」(『方言研究年報』第一巻)を見ると、

○コレー アノヌー アシタノバンヌー ダエカヨバレテキテクランシ<ごめんください。あのねー、明日の晩誰かおよばれに来てください>

の文例があげられている。「アノヌー」が「あのねー」と言いかえられているのからするのにな、ここにも、ナ行音文末詞「ヌ」があるのかと思われてくる。「ヌ」は「ノ」の音訛であったりすることはなく、本来的に「ヌ」なのか。あるいは、そうではないのか。

『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

fソレオ ヌイ ヤマモンニ ムリャガッテル イネオ コイタ  
それを ねえ、山のように 盛り上がっている 稲を こきましたよ、  
ワイタ  
あなた、

という文例が見える。「それをねえ、」に相当するものが、「ソレオ ヌイ」とある。「ヌイ」は、ナ行音文末詞「ヌ」の変形ととってよいのであろうか。それとも、他の何かからの変化形なのであろうか。ともかく、ものは現に「ねえ」に比照されている。

和歌山県日高郡内のことばにも、「ヌイ」のよびかけがあるかと思われるが、定かではない。

つぎに、——中国四国には、問題の事実が見いだされなくて、九州に問題と

すべき事実が見いだされる。

かつて、宮崎県出身の学生氏が、高千穂のことばとして教示してくれたものに、

○シンチャン、シランヌ。(上昇調子)

しんちゃん知らない? (中女→小男)

との言いかたがある。教示者は、“同行でのナ>ヌへの転化かとも思われる。”と注してくれている。こういう、他からの転化結果の「ヌ」なら、九州の他地にもありうるのではないか。それにしても、今は、[nu]音そのものが文末のよびかけことばになっている点が注意される。「ヌ」は、「ノ」からの転訛に成ったものかもしれないけれども——そのばあいには「ヌ」が助詞系の文末詞と見られるけれども——、「ヌ」音がひびくこと自体は、明白な事実と見られる。

つぎに、神部宏泰氏の教示によるのに、熊本県南部の人吉近傍には、

○サムカ ヌー。

さむいねえ。

○ダンダン ヌー。

ありがとうね。

などの言いかたがおこなわれているとのことである。これらの例に見られる「ヌー」は、単純なナ行音「ヌ」文末詞を思わせやすいものではなからうか。

さてまた、大隅東岸、内之浦のことばについて白沢龍郎氏の教示せられた、

○トメテン ハナサンムン ヌ。

止めても離さないからさ。

などというのも、この問題とすることができよう。「……離さないからさ。」と言いかえられている「…… ハナサンムン ヌ。」の「ヌ」は、どういう「ヌ」なのであろうか。本来のナ行音文末詞ではないらしいことが、「サ」と言いかえられているのからも、よく察せられる。(「ものを」の「を」なども、思いよそえられる。)それにしても、「ヌ」[nu]そのものが、文末での訴えの役わりをになっていることは、見るからに明らかである。

日本語方言状態の中の、諸地のどこに、「ヌ」[nu]と聞こえるものが出てこないともかぎらない。「ヌ」の出自がどのようなものであるにもせよ、「ヌ」音そのものが、文末詞の役わりをになってもいる、上掲の諸事実は、私どもに、「ヌ」類文末詞のより深い探索を考えさせてやまない。

「ヌ」文末詞が、今後どのように発見されることがあろうとも、それが、多地域にわたって多く発見されることはないだろうと想像することは、ゆるされるのではなからうか。

ナ行音の「ヌ」は、その声価から言って、文末詞としては、一地歩をしめることが、本来、むずかしかったのではなからうかと考えられる。文末詞は、訴えことばとしての効力のとぼしいものであってはなるまい。相手によびかけるのに、聞こえが弱小であっては、ものは、存立しにくいのが道理である。今日の「ヌ」の存立・分布が、上来の程度であるのからしては、私どもは、「ヌ」音の特質ゆえに、「ヌ」文末詞は、さほどには存立し得なかったのだらうと判断せざるを得ない。等しく狭母音のものではあっても、「ニ」には、一種の澄みきった音感が認められる。比較して言えば、ナ行音「ニ」文末詞には、一長所があったと思量される。「ニ」「ヌ」といったものに、どのような、成立の必然性があったとしても、なかならず重要な存立の根拠は、対話にあってのよびかけ効果ということではなからうか。

「ヌ」の将来に関しては、もはや多く言う必要がなからう。「ニ」すらも、衰亡一途と見られるものである。「ヌ」は、もはや、偶然の現象といった程度にしか、あらわれてこないのではないか。

## 第七節 結 節

相手を考え、相手の了解と同感とを期待して、念をおすきみによびかけるの

が文末詞である。特定の語詞が文末に遊離的に存立することは、すでにその特定のおびかけ性能を予定している。文末詞の、文末での遊離独立の存在の意義は大きい。

文末詞は、文表現上の超越者の風格を持っている。そのことは、

○わかった ネー。(言いきかすことば)

に対する言いかた、

○ネー。わかったろう？

などの言いかたがされているのからも知ることができる。「ネー」が独立のセンテンスとして前置されることもあって、かつ、その「ネー」が、一文の文末に特立される。双方の事態を見あわす時、文末詞としての「ネー」の、一文の表現での超越・特立が、よく理解される。

「わかったろう？ ネー？」というような言いかたもなされる。これもまた、「わかった ネー。」での「ネー」の超越者風格を、よく了解させるものである。

そのような超越者的性能を持った文末詞が、なぜにナ行音のもとに繁栄したのであろうか。

文末詞存立の諸相を通観するのに、ナ行音の諸文末詞は、わけても優勢であり、その存立のしかたが強大である。すべての文末詞の中で、——また、感声系の文末詞の中でも、ナ行音文末詞としうるものは、中核的根幹的な文末詞群のように思われる。じっさい、ナ行音文末詞は、全文末詞の代表者のようでもある。

事実上、根幹的・代表的でもある文末詞群が、ナ行音文末詞としうるものであることは、けっして偶然ではないのであろう。かならずやナ行音に、さらに言えば、[n]音のもとに、母音が分化する必然性があったものであろう。

この点に関して、つとに、独自の着想を示されたのは、柳田国男先生である。先生は、「鴨と哉」(『言語研究』第1号昭和14年1月 『国語の将来』創元社)

の中で、つぎのように説いていられる。

或は最初からN子音に其様な大きな力があつて、時どつて愈々統一の成績を挙げたとも見られぬことも無い。自分は爰にたゞ一二の思ひつきを引用するに止まるが、是は当世の言霊学者に取つては、可なり愉快な課題であらう。(『国語の将来』 p. 285)

ナ行音の勢力の優越といふことには、少なくとも歴史の可なり確かな根拠がある。さうしてその幾つかの用途を一貫して、常に此音を耳にする者の注意を引締めようとする目的をもつて居たことは、ごく簡単に之を証明し得るやうに思ふ。一つの例は、遠く行く者を喚びかけるナウナウ、(p.285)

是等の諸例から総合して見ても、ナが聴く人の心を捉へる大切な語であることは、先づ確かと言つてよからう。(p. 291)

いわゆる〔n〕子音の大きな力が、これを聞く人の心をとらえ、注意をひきしめる効果を持っていたとすると、自然生起の感声的な文末詞としては、まずナ行音のものが生起せざるを得なかつたことであろうと察せられる。(現在、ナ行音文末詞のおのおのを見るにつけても、これほど感声的で、相手になげかける性質のはっきりしているものは、他にないように思われる。)

タ行音やカ行音の、いわば硬子音にはじまるものが出現することはなく、〔n〕子音にはじまるものが、その独特の音効果をもって登場している。

新村出博士もまた、『国語学叢録』の中で、

拒否の意のナニヌネ、感嘆の意や呼掛の意やその他強調を示す意やのナ行音、即ち感動詞となり又感動詞の一部分になつてゐる所のナは、元来同根の原始的感動音であつて、応答のナイにしてもネイにしても根本は同じだ。と説いていられる。

諸外国語のばあいにも、「No.」や「Nein.」, 「Non.」, 「ne……pas」などが認められる。等しく〔n〕にはじまるものである。

原始的感動音と説かれるところは、まったく共感にたえないところである。訴えの文末詞も、まずは、原始的感動音の世界に発生しやすかつたのではなから

うか。

「ナ」「ノ」「ネ」など、言うところのナ行音文末詞は、もともと、単純な、よびかけ効果の語詞であったはずである。ところが、これらの文末詞に、しだいに用法上の分化がおこった。人間の表現生活が進歩すればするほど、単純なよびかけことばも、種々に運用されてくるはずである。用法分化は、言語発達上のしぜんのいきおいであろう。

そのような用法分化に関連して、ナ行音文末詞のおのおのも、社会的に、また歴史的に、その運命の隆替を見せてきているように思われる。

現今では、共通語ないし標準語の通念のもとに、「ネ」が、しだいにその地位を拡充してきている。「ナ」は、その用途の退縮と品位の低下とをきたしつつあり、「ノ」は、ときに下品視せられるほどにもなっている。

もともと、広母音の聞こえをもって優位にたち、じっさい、全国に弘通した「ナ」「ノ」が、一定の意識的な言語社会にあって、「ネ」にその主役の席をゆずりつつあると見られる新情勢を、私どもは、注目すべきものに思う。

「ネ[e]」には、ある程度の、声のしまりがあるというのか。「ナ[a]」「ノ[o]」ほどの広母音のあらわなものではなくて、母音の、かなりおさえられているところが、広く是認されているのであろうか。「ネ」に、圧縮緊張の語感があるとも見ることができのかもしれない。そういうところに、文末詞としての安定度の、独特のよさというものがあるのだろうか。「ナ」や「ノ」が文末にきたばあいには、文勢上、そこで、そうとうに大きなうねりがおこるとも考えられる。「ネ」が文末にたつ時には、これが、文勢上の文末でのうねりを、早くも適宜にしずめることであろうかとも想察される。

「ネ」には、中庸のしずかさがあるとも考えることができよう。

以上のような分析的な考察をゆるす「ネ」が、おのずから、その勢威を拡大しつつあると考えられる。

## 後 注

上来、複合形の用法を述べることは、くわしくはなかった。全篇記述の計画上、複合形のとりあつかいは、簡略にせざるを得ない。(後来のばあいも同様である。)

複合方式の、「ナヨ」など、ナ行音文末詞が前部にあるものは、だいたいい、とりあげていない。ものは、後部の文末詞本位にとりあげられる。(後来も同様である。)

## 第四章 ヤ行音文末詞

### 第一節 総説

ナ行音文末詞について、活動力の広大なヤ行音文末詞をとりあげる。

ヤ行音文末詞とナ行音文末詞とは、まさにあいならぶ性質のものである。いづれも、感声的な文末詞と見られる。

ヤ行音文末詞の主たるものは、「ヤ」「ヨ」である。これは、ナ行音文末詞の「ナ」「ノ」に相応する。「ナ」「ヤ」はともに〔a〕母音を持ってたっており、「ノ」と「ヨ」とは、ともに〔o〕母音を持ってたっている。文末詞の、訴えの効果という点では、広母音のものがより有力であることは、言うまでもあるまい。感声的な文末詞が、みなしげんに、広母音をとっている。（そのようでもあるので、なおのこと、これらが感声的なものと認めやすいのもあろう。）

「ナ」「ノ」などに関してナ行音文末詞が認められるのと同様に、「ヤ」「ヨ」などに関しても、ヤ行音文末詞と称してよいものが認められる。

ヤ行音文末詞の「ヤ」「ヨ」は、その起源・成立が古い。古く、古代の言語の中に認められる、詠嘆の「や」「よ」は、今日の「ヤ」「ヨ」の先蹤とされるものであろう。——すくなくとも、彼我双方の「ヤ」「ヨ」は、関係の深いものであろうと思われる。

「ヤ」「ヨ」は、そのように古典的でありつつも、また現に、今日、明らかに認められる、感声的な文末詞である。

要するに「ヤ」「ヨ」などは、古今を通じて感声的なものとされよう。それゆえ、現代にあっても、人は、古典語には関係なく、自在に、あるいはとっさ

に、表情語「ヤ」「ヨ」などを発出するのであろう。

文証の豊富という点では、ヤ行音文末詞のほうがナ行音文末詞にまさろう。ヤ行音文末詞はナ行音文末詞と同様に感声的なものでありつつも、その存立は、ことによると、より一般的であり得たかもしれない。しかしながら、現在状況では、ごく単純なよびかけ・訴えかたをするのに好適という意味でか、ナ行音文末詞のほうが、より一般的なものになっている。ヤ行音文末詞の「ヤ」「ヨ」は、ナ行音文末詞に対して、みずからやや特定の使命をになおうとしているかのようである。

京都弁の「ソードス エー。」(そうですのよ。)などの「エ」が文末詞であることは、明らかであろう。山口県下その他では、「そうです イ。」(そうですよ。)などと、「イ」が文末詞化されている。(「ですイ」というように、「イ」が、前音節の音尾にとどまることも多いけれども。)文末詞「エ」や「イ」は、ア行音文末詞と概称することができなくはない。しかもこれらが、やはり感声的なものであることは明らかであろう。(ただし、これらに古典的な用例はなさそうである。おそらく、「エ」や「イ」は、もっとも単純に、いわば感声的に創出されたものであろう。)

「エ」や「イ」はア行音文末詞としてとりたててもよいのであるが、一方にヤ行音文末詞とすべきものがあり、そのヤ行では、「ヤ」・「イ」・「ユ」・「エ」・「ヨ」の五音が見られるので、今は、便宜、「イ」や「エ」を、ヤ行音文末詞の系列にとりこんでみたいと思う。——これでいちおうの整頓ができる。(感声的な文末詞の部類立てを複雑にするよりは単純化したほうがよかろうかと思う。)

「ヤ」「ヨ」「エ」「イ」の四者は、ナ行音文末詞の「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」に相応する。母音で言えば、ともに〔a〕〔o〕〔e〕〔i〕の音のものである。ヤ行音文末詞に「ユ」(または「ウ」)がないのは、ナ行音文末詞に「ヌ」がほとんどないのに相応している。

以上のように見られるヤ行音文末詞の世界を、次節以下で、たずねてみたい。「ヤ」も「ヨ」も分布が広く、かつ、おのおのの用法も多角的である。(用法のはばが広いとも言ってみよう。)

総体には、「ヨ」が「ヤ」よりも良品位に位していようか。「エ」も、いやしからぬものである。「イ」は、「エ」よりもいっそう問題にとむものである。——かといって「イ」も、下品なものではない。

## 第二節 「ヤ」の属

### 一 はじめに

「ヤ」は、一つの典型的な単純感声文末詞と言える。古今の人たちが、思いを「ヤ」に託して、詠嘆の情を披瀝してきたことは、多言を要しまい。

今日の「ヤ」はどういう本性のものであろうか。私の臆断であるけれども、「どうどうして クレ ヤ。」のような言いかたの熟用を見るにつけても、私は、命令表現をささえる「ヤ」が、現段階では本性的なものではないかと思う。——この「ヤ」にしても、もとより、命令表現をささえる詠嘆が「ヤ」に見られるとすることができる。

今日の段階での「ヤ」の使用品位の概況は、非上品のものとも見ることができよう。このことと、上に考えた「ヤ」の本性とは、関連している。

昭和今日の、日本語諸方言上での「ヤ」の用法は、そうとうに複雑である。命令表現(禁止表現をふくむ)に用いられるかとおもえば勧誘に用いられ、あるいはまた問尋に用いられる。命令ならざるあつらえに用いられもすることはもちろん、願ひ・たのみにも「ヤ」がよく用いられている。説明(ないし主張)や報告の「ヤ」もまたよくおこなわれている。「ヤ」文末詞の用法には、はなは

だはばびろいものがあると言わなくてはならない。その用法のおのおのごとに、上下にかかわる品位が見られるわけである。

諸用法の成立は、かならずや、用法の分化拡張によるものであろう。より基本的な用法というものが、つねに問題になる。

「ヤ」の異形に「ヤイ」「ヤン」がある。

ここには、考慮すべき、興味ぶかい問題がある。すでに明らかにしたように、「ナ」には「ナイ」「ナン」の異形があり、「ノ」にも「ノイ」「ノン」の異形があり、「ネ」にも「ネイ」「ネン」の異形がある。「ニ」についても「ニー」「ニン」の形が見られる。「サ」にも「サイ」「サン」の異形が認められる。今、「ヤ」に「ヤイ」「ヤン」が認められても、まずは、ふしぎではないことに思われる。それにしても、なぜに、このように、諸者の異形が「イ」音尾「ン」音尾にあらわれなくてはならなかったのか。問題の興味はここにある。

ほとんど規則的に「イ」音尾の派生しているのからするのに、これらは、おそらく、「ナ」なり「ヤ」なりの発音の強調のあいだにしぜんに発生したものであろうと解される。「ヤ」について言うなら、これが「ヤー」と強調される時、そこにしぜんに「ヤイ」の派生がおこったであろう。同様にしてまた「ヤン」の派生がおこったであろう。長音と鼻音とは、日本語音韻の世界にあって、つねに相関的である。

「ヤ」に関する複合形の文末詞も、はなはだいちじるしい簇生を見せている。ナ行音とむすびあった「ナヤ」「ノイヤ」「ネンヤ」「ニヤ」などがあり、ヤ行音とむすびあったものがあり、ザ行音とむすびあったものがある。「カヤ」「カイヤ」以下諸種の結合態ができていいる。「モンヤ」は、ものの「モン」と「ヤ」との結合である。一方、「ヤナ」「ヤノ」など、自己の下に他のものを招いた複合形も、かず多くできていいる。要するに「ヤ」に関する複合形は、成立の繁栄をきわめているとも言えるほどである。そのおのおのごとに用法の微妙があり、

品位の高下がある。

さかんな存立を示す「ヤ」が、全国諸方言上で、個々の分立形ごとに、そのものなりの分布を示しており、「ヤ」関係の諸文末詞の分布状況が、全国諸方言上にはなはだ複雑である。「ヤ」関係の文末詞の分布の張りめぐらす網は、全国諸方言上に、いくえもの重なりを見せている。

## 二 南島地方の「ヤ」ほか

最初に注目されるのが、南島地方の「ヤ」である。奄美諸島から八重山諸島にかけて、「ヤ」文末詞がよくおこなわれており、それが南島独自の様相を見せている。

いったい、南島方面では、「ヤ」が、諸文末詞中でも、とくに大きいはたらきを見せているのではないか。「ヤ」と「ヨ」とが、二つの、はたらきの大きい文末詞として注意される。(これについて、「ナ」のはたらきが注目されるのではないか。)

八重山の「ヤ」は、宮良当壮氏の「南島方言採集行脚(一)」(『方言』第一卷第二号)によるのに、

シュー ヤ ヤー ナンガ オールン カヤー (お父さんはお家にいらつ  
しやいますか。)

などとある。(ここには「カヤ」の複合形が見られる。)

与那国島の比川方言を調査せられた高橋俊三氏は、「ヤ」について、以下のよう<sup>1)</sup>に教示せられた。

○ヌ ヤ。ウヤー。

何か。これは。 (老女→中女)

このように、問いの「ヤ」がある。

○ $\overline{\text{ク}}$ ストゥヤ バガラヌンス  $\overline{\text{ヤ}}$ 。

この人はわからないんだよ。 (少女→少女)

これは間いではない。

○ンダ カン サイヤ。

あんたがぶったでしょう。 (中母→幼子)

こういう意味になる「サイヤ」も見られる。——なお、高橋氏は「ディヤ」「スヤ」を認めていられる。

○ $\overline{\text{ブール}}$  マードゥンドゥ  $\overline{\text{スタルン}}$  ディヤ。

全部いっしょにきましたよ。 (中女→初老女)

○ンダ  $\overline{\text{ヌンディ}}$  ダヌ ウヤビンキ ヌル スヤ。

あんたはなんで家の上ののるのか。 (少女→少男)

これらがその例である。

私には、与那国島の方言に関する知識がない。「スヤ」に関する事など、難解である。氏が別に示された「スヤ」例は、

○ $\overline{\text{マンキン}}$   $\overline{\text{エンピツ}}$  カタミドゥ  $\overline{\text{シ}}$  ブン スヤ。

どこへにもえんびつもってばかりいるんだねえ。

(少女→高橋氏)

などである。このようなのについて、氏は、“念を押ししたり、意外な気持を言ったりする表現”と言われる。

宮古島に関しては、今、私は、記述すべき資料を持たない。

沖縄本島には「ヤ」文末詞がよくおこなわれている。「カヤ」「ガヤ」の複合形もまたよくおこなわれているようである。

「ヤ」文末詞の表現は、総体に品位のわるくはないものなのであろう。「ヤ」と言いとめて、「ですね」の気もちがあらわされがちでもある。このような「ヤ」品位のことは、南島地方の全般にわたって、ほほ言いうるのではないか。

沖縄本島については、まず、北部の国頭郡下の実例を見る。これは、土地の安里延氏の教示によるものである。

一つに、

○チューヤ ヒーサイビン ヤ。

きょうはさむいね。

のように言う。これでは、「ね」と言いかえてもよいところに「ヤ」が用いられている。単純な言いかけの「ヤ」と見てよからう。

○ナー ニチャ イヂラン ヤー。

もう熱は出ないだろうよ。

これは、推量表現に役だつ「ヤ」である。

○アチサラ ヤー。

暑かろう。

のばあいもまた、推量表現である。「ヤ」の、推量ことばとしてのありさまが、ここに明瞭であらう。

ところで、

○ユクラングトイ ヘーク イケ ヒヤ。

休まないで早く行けよ。(下品な言いかた)

は、命令の言いかたである。「ヒヤ」をまとめ受けとってよいのかどうか定かではない。もっとも、「行ケ ヒヤ」の言いかたは「行ケー」よりもわるい言いかたとされている。)ともかく、命令表現のむすびに「ヤ」のあることが認められる。

松田正義氏が「沖縄で考えたこと」(『国語通信』第3巻第9号)の中であげられた一例に、

「クジングッ アイビーガヤー (小銭がありますかね)」

がある。これには問尋表現での「ガヤ」複合形文末詞が認められよう。(安里氏の国頭例にも、おなじ「ガヤ」がある。)

沖縄本島の南部の那覇市の「ヤ」例としては、大橋勝男氏の調査例、

○ユーピー イッペー ヒーサイ ビータサ ヤー。

昨夜はたいへん寒かったですねえ。

をあげておきたい。

宮良当壮氏が「琉球民族とその言語」(『日本の言葉』第1巻第4号)で示された「ヤ」の例は、

ヤーサラヤー (ひもじいだろうねえ。)

などである。

高橋俊三氏夫人の恵子氏は、沖縄本島南部のことばとして、「ヤ」文末詞の実例を多く教示され、かつ、「ヨーヤー」「ドーヤー」「ガヤー」の利用状況を教示された。「ヤー」の長呼形がよくおこなわれているようである。

沖縄本島の西北辺に隣る伊江島の方言を調査せられた生塩陸子氏が、「沖縄伊江島方言の文末表現」(『方言研究叢書』第5巻 三弥井書店 昭和50年8月)の中にかかげられている「ヤ」文末詞の実例は、

サチコ リー アワリ シュン ヤー。  
 <幸子 お前 苦勞 する よ>

などである。

沖縄本島の手まえにあって、本島北部の方言状態によく似た状態を示す与論島に、また、「ヤ」文末詞がよくおこなわれている。

○タンディ ヤー。

は、「ごめんね。」である。

○ピーサラ ヤー。

は、“さむそうにしている子どもを見て言う。”ことばであるという。ところで、ここにまた推量表現の「ヤ」が多く見られる。

○タルン ウラダンタラ ヤー。

だれもいなかったらう?

○ブリャー ウレーガ シチャシダラ ヤー。

これはあなたがなされたんでしょう?

○ガシガディ ウップーサー キィポー アチサヤビューラ ヤー。

そんなにまでたくさん着たらお暑うございましょう？

など。ところでここには、つぎのような、念おしの「ヨ」に該当するさまの「ヤ」も注意される。

○ユウッターシャ キキョー ヤ。

よく聞きなさいよ。

○キカンドラポー ナラドゥー ヤ。

聞かなければなりませんよ。

「ヨ」とよびかけるのに等しい「ヤ」の用法は、南島のほかの諸方言にも多い。ただし南島外でのその使用品位となると、その高下は、いちがいには言えない。

この与論島には「ヤン」の形も見られる。これは、南島方面でも、この島に独特のものか。

○ナグリギャー ヤン。

というのがある。「ナグリ ギャー」が「かわいそうに」とか「気のどくに」とかであって、「ヤン」がつくと同意を求めることになる。

○ガシリポー ヤン。

は、「そうしてくれたらいいのにね。」との意のものであるという。

○ヒューヤ ピーソー ヤン。

は、「きょうはさむいね。」であり、

○ヒューヤ ピーサイドゥ ヤン。

などともいう。（「ドゥ」を入れると、“すこしていねいになる。”という。）

「ヤン」も「ヤ」の類であることが明らかであろう。「ヤ」のよびかけが修飾をこうむって「ヤン」になったものであろう。強調などにつれては、とかく、そういう修飾法がおこりやすからう。

さて、「ヤン」となったものには、あらためて、やわらかみなり婉曲さなりの感得されることもあるのか。

「ヤン」に対する「ヒン」がある。

○ワーチャガ ウブンチャー イッチョンヌイ ヒン。

わたしたちのおじいさんといきあわなかったかね。

これの「ヒン」は「ネ」にあたるという。ところでこれは、目下に対することばのよしである。「ヒン」がつくと、目下に対することばになり、「ヤン」がつくと、目上に対することばになるという。「ヤン」は、そういう地位にある特定の文末詞として注意される。

町博光氏は、「与論島朝戸方言の文末詞——資料報告——」（『方言研究年報』統一 1976）の中で、“ヤ行音文末詞類”を記述してられ、「チャー」「ドーヤー」「ポーヤー」「ムヌヤー」をもとりたてていられる。

つぎに、与論島のもう一つ手まえに位する沖永良部島を見る。ここの、「ヤ」の単純よびかけには、

○ウガミャブラー。ユカ テンキ ヤー。

お早う。いい天気だね。 （若いものどうし）

○ビューヤ ヒギュルサ アヤブン ヤ。

きょうはさむうございますね。

というようなのがある。いかにも単純なよびかけであるさまが、これらに明らかであろう。こういう用法が、南島外にはすくなからう。（「ヤ」の原初的用法、などということも、ここに考えられる。）——南島の「ヤ」は刮目すべきものである。

沖永良部島の「ヤ」には活用の広いものが見られ、人に関しては、目上にも対等者にも目下にも用いることはもちろん、表現そのことに関して、単純なよびかけのほかに、推量や問いの表現にも「ヤ」が用いられている。問いには「カヤ」が見られがちである。「今晚は雨が降るだろうか。」のばあいにも、

○ナーシルー 雨ヌ フヤブン カヤ。

などと言っている。

○ガン カヤー。

そうかしら？

というのでは「ヤー」のむずびによって疑問のきみがつよく出ている。

沖永良部島から、さらに手まえにもどって、徳之島を見る。

○キューヤ ヒギロツカー ムンヤー。

きょうはおさむうございますね。

など、「ネ」と単純によびかけるのに等しい「ヤー」が見られる。男女ともにこれをつかい、「ヤー」の言いかたが、上等のものにもふつうのものにもなる。

○ドーカ ウダネィ シューサ ヤ。

どうかお願いします。

これは、たのみいる表現になっている。「ヤ」の言いかたが、よくきいている。

○マー イチモーレ ヤー。

まあお上がりなさいよ。

は、すすめ・さそいの表現である。推量のばあいの「ヤ」もある。

○クレィヤ ウリガ セーレタラ ヤー。

これはあんたがなざったんでしょう？

は、その一例である。問いのばあいの「カヤ」もよくおこなわれている。——目上にも対等者にも目下にも、これがよくおこなわれている。

「ヤ」のこのようにいちじるしいおこなわれかたを見るにつけても、私どもは、こういうことばが、いかにも土地の本来的なものであろうと察したくなる。共通語ふうの「ネ」は見いだされない。この方面の文末詞を見るにつけても、「ネ」などというのは後来のできのものであることがよくわかる。

さてまた、上の諸例を見るにつけても、「ヤ」の単純感声的な文末詞であることがよくわかる。あるいはさそいにあるいは推量になど、「ヤ」が用いられてはいても、それらは単純に「ヤー」とよびかけて、さそいその他の心情を、その場なりに全的に吐露するものであろう。問いのばあいにも「カヤ」と言っており、直接には「カ」が問いの意味をになって、「ヤ」はその問いの状況を

全的に相手に伝えるのに役だつありさまである。限定性のおぼろなもの、表現場面にあわせて自由に用いられ、そこでなりの表現効果のものになる。

○ウガシ<sup>↑</sup>ダニ ヤー。

というのは、「そうですか?」とたずねることばになるが、

○ウガシ<sup>↑</sup>ダニ ヤー。

と言われるばあいは、「そうですか。」と受けごたえる意味になる。感声的文末詞の「ヤ」の役わり・はたらきぶりがここに明瞭であろう。要するに、この種の文末詞は、対話の効果をつよめるのが、その本来的な機能であろう。

つぎは、奄美大島本島の「ヤ」である。

○キ<sup>↑</sup>ュヤ ヒグルサリョーリ ヤ。

きょうはさむうございますね。

これは、「ヤ」の用法のもっとも単純なばあいであって、「ヤ」が、「ネ」のよびかけに等しくなっている。

○オッ<sup>↑</sup>カン ハヨ ゴハン カモ ヤー。

お母さん、早くごはんをたべましょうよ。

となれば、これはさそいの「ヤ」である。

○ヨ<sup>↑</sup>ーネヤ アムイヌ フリョーロ ヤー。

今晚は雨が降るでしょうよ。

というのは、推量表現の「ヤ」になっている。

奄美大島でも、問いのばあいの「カヤ」がよく見られる。

○チャ<sup>↑</sup>ンヤ ダーチ ウモリョータ カヤ。

お父さんはどこへいらしたかね。

は、その一例である。問いの「カイヤ」もある。「カヤ」と「カイ」とについては、こういう説明を聞いたことがある。

「カイ」は、はっきり答えを要求する問いである。「カヤ」は独言に近く言いあらわして、さまで答えは要求しない。「教えてくださったらけっこう

です。」というところである。

というのである。

大島本島の属島、喜界島の「ヤ」をつぎに見よう。「きょうはさむいね。」という単純なよびかけで、

○スーヤ ピーサ ヤー。

と言う。「ヤ」の感声的なありさまが明らかである。同島内の他集落では、

○キューヤ フィーサ ヤー。

などとも言っている。

「お早う。」のあいさつ、

○ユカ ティンチ ヤー。

というのもまた、「ヤ」の単純な用いかたを示すものであろう。

辞去のあいさつに対する応答、

○ウモーリ ヤー。

○ウモーリ ヤー。

“お行きなさいね。”

については、「ヤー」が「ネ」にあたると、土地人の教示者は、私に説明してくれた。集落によっては、おなじ送辞を、

○ウモーリ ヤー。

○イキ ヤー。

などとも言っている。

○ウモーリ ヤ。

○イキ ヤー。

などとも言っている。

「きょうなら。」にあたる言いかたも、「ヤー」をつかうのでは、

○ウリ ヤー。

○ウリ ヤー。

○イカ  $\overline{\text{ヤー}}$ 。

○イ $\overline{\text{チェーラ}}$  ヤー。

というように言っている。これらの実例を教示してくれた人たちの一人が、座席のとなりの人に、「ヤー」について、“これを目上にもつかってる ワヤー。”と言った。共通語ふうになれば「ワネー」と言ってもよかったところのようである。「ネー」と出てよいところにしぜんに「ヤー」が出たようである。人々は、“「ヤー」をはなはだ多くつかう。「ヤー」ばかりだ。みんな「ヤー」がついている。”とも語ってくれた。こうして受けとられる「ヤ」は、単純よびかけの表現素であって、「ネ」とも「ヨ」とも思いかえやすいもののようにである。「左様なら。同輩間の別れるときの挨拶。行けよの義。」の、

イキョー、イキヤー、イキヤー（阿）

というもある。（『喜界島方言集』）なお、同書には、

ヤ（阿） 疑問の助詞。か。ヨに同じ。

チャーイ  $\overline{\text{ヤ}}$ （阿） 何処へ、か。——何処へ行くのだ。

とも、

ヤー 感動詞。よ。

シュラサ ヤー 美しい、事よ。

ヂェー ヤー 面白い事、よ。

とも見える。

○ドーカ  $\overline{\text{タンメーラ}}$  ヤー。

どうかおたのみ申しあげます。

という「ヤー」では、「ヨ」のよびかけに類するものが見られやすからう。

○チバティ  $\overline{\text{ベンキョー}}$  シリ ヤー。

気ばって勉強をおしよ。

になると、「ヤー」がまったく、「ヨ」のよびかけである。人も、「シリ ヤー」について、「シリ ヨー」とおなじであると言った。

○オッカ  $\overline{\text{カン}}$   $\overline{\text{フェーグムン}}$  カモー ヤー。

お母さん、早くごはんをたべようよ。

○オカー<sup>ー</sup>サン フェー<sup>ー</sup>グムン ミ<sup>ー</sup>シヨロー ヤー。

お母さん、早くごはんをいただきますようよ。

は、さそいのばあいの「ヤー」である。ついで推量のばあいがあげられる。

○タルム ウモ<sup>ー</sup>ランタンメー ヤー。

だれもおいでにならなかったでしょうね。

などである。自分の思いを述べる時にも、ことが推測に属するなら、

○ヨ<sup>ー</sup>ネーヤ 雨ガ フユ<sup>ー</sup>ロー ヤー。

今晚は雨が降るだろう。

のように言う。問いになれば「カヤ」が出る。「フユッ カヤー」などと言っている。

『喜界島方言集』には、

イカダナ ヤー 行きたいものであるわい。

との言いかたも見える。これは、願望表現での「ヤ」というものか。

南島方言での「ヤ」文末詞は、探求するだに興味津々たるものである。かねて、古代中央語に関係の深いものを蔵するこの南島方言に、ほかならぬヤ行音感声の、広母音の「ヤ」がしきりにおこなわれているのは、いかにもゆえ深そうなことに思われる。

### 三 九州地方の「ヤ」ほか

九州地方に「ヤ」のおこなわれることはさかんであって、各県下に、「ヤ」の用法の諸相が見られる。

#### 鹿児島県

本県下に「ヤ」のおこなわれることは多面的である。しかも、諸用法が、だ

いたい全体的におこなわれている。

まず、単純なよびかけの「ヤ」がある。井上親雄氏教示の北薩例は、

○オマヤ イマ ヤ。

君は、今（帰）りか。（老男→老男）

である。氏は、つぎのように言われる。

相手に呼びかける時に用いる。呼びかけが、或る時には疑問となり、或る時には勧誘の意を表わす。老幼男女が同等以下の者に対して言うていねいな語である。

「ていねいな語」との指摘が注意される。

命令の「ヤ」がある。井上一男氏の「種子島方言研究」（『方言』第三卷第七号）には、

ダイモ、シヅカーセーヤ

どなたもお静になさい

の例が見える。

さそいの「ヤ」の用いられることがさかんである。大隅東岸の二例は、

○ゴハンヌ イッ<sup>ツ</sup>シヨ<sup>キ</sup> タモンツ ヤ。

ごはんをいっしょにたべましょうよ。

○ソチ デオ ヤー。

外へ出ましょうよ。

である。白沢龍郎氏は、上の後者例について、“女性的優しい語感”のものと言われている。“これがデオヤとなったら男の子の強い主張の気持を持つ。”とも言われる。薩摩半島南部の一例は、

○ヤキューシケ イコ ヤ。

野球しに行こうよ。（少男→同）

である。（瀬戸口俊治氏教示）なお、瀬戸口氏は、“「ド」「ドー」を積極的勧誘とすれば、「ヤ」は消極的勧誘である。”とも、“勧誘の場合の「ヤ」「ヤー」は、「ド」「ドー」よりも上品である。「ヤ」「ヤー」が、丁寧の助動詞とともに

現われる場合が多いのに対し、「ド」「ドー」にはその言い方がないことはそれを端的に示すものである。”とも説かれる。“消極的勧誘”とあるのが注意される。また、“「ド」「ドー」よりも上品”とされるのが注目をひく。さきの井上氏の説と言い、これと言い、当地方の「ヤ」の語感には、注意すべきものあることが知られる。

問いの「ヤ」のおこなわれることが、また、県下にさかんである。硫黄島の例は、

○アタイゲン オヂサンニ エヤッタ ヤー。

私のうちのおじいさんにお会いになりました？（目上に）

○オヂサンヌ ミランナッタ ヤ。

おじいさんを見なかったか。（目下に）

○ヤドン オヂサンニ エタ ヤ。

うちのおじいさんに会った？（対等者に）

などである。

○ガ<sup>↑</sup>ッケ イタ ヤ。

学校へ行ったかい？

○イカ<sup>↑</sup>ンバッテン ヨカ ヤ。

“行かんでもいいですか。”

は、大隅東岸の例である。前者例は、“「カ」という調子よりは丁寧な問。”であるという。後者例は、“念をおす問い方”で、“上品 目上又は子が親に言う。”ものであると言う。（白沢龍郎氏教示）ところで、瀬戸口氏は、南薩の、

○ナア<sup>↑</sup>ッケ イタ ヤー。

何しに行ったんだい？（青男→青女）

について、

親密さにおいては「カ」より強いが、概して卑俗的である。男性に聞かれるもので、とくに親友間、家族間に行われる。

と言われる。

問うがごとくであって、しぜんに相手のことを受け入れる、いわば受けひきの「ヤ」もある。たとえば、

○マタ ヤ。 ゲッセン ナンチュ コッ カー。

またやったんか。ほんとにどうしたことだ、全く。(中男→幼女) というなど。(瀬戸口俊治氏教示) 「鹿児島ことば(方言絵はがきより)」(『方言』第二巻第五号 昭和7年5月)にも、

ソゲン、タケトヤ、イッチ、ヤスイトヲ ミセッミッタモン

そんなに高いのか

一番安いのを見せて下さい

などとある。——受けひきの「ヤ」に、上品上等のばあいもあるらしい。

問いは、やがてさそいにもなる。問いやさそいの「ヤ」が、親愛の情をあらわして、しぜんにやや品位の低い表現をささえたりすることもあるか。

はじめに指摘した「よびかけ」の「ヤ」は、しばしば「ね」とも言いかえられるものであろう。単純感嘆の「ヤ」も「ね」と言いかえられる。井上親雄氏の教示せられた、

○ユー コエチャイ ヤー。

よく肥えておられる！ (老男→青男)

も、最後に「ね」をつけて受けとることのできるものであろう。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県揖宿郡山川町岡児ヶ水」の条には、

m マッケン ゴッ アッタデヤー

待ちきれない よう だったよ。

f ジャットト モー アイジャッデヤ

そうでしたね、 もう そうでしたね。

の会話が見える。「アイジャッデヤ」のところには、「そうでしたね」との言いかたが見える。

「ヤ」が「よ」と言いかえられるばあいも多い。上例の「アッタデヤー」のばあいも、「だったよ」とある。種子島の、「よ」相当の「ヤ」をあげるなら、

○キョーワ シケトラー ヤー。

きょうはしけてるよ。

○センセイガ ワシタ ヤー。

先生がいらしたよ。

などがある。薩摩半島の一例は、

○ワガ シタトォ ケバ ヤ。

“自分の好きなのを買えよ。”（“買ったら良いさの気持”）

である。（東正昭氏教示）

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条に見える、

mタワ ウエツケテ トヤ ナランデヤ

田は 植えつけて 取ることが できないんだもの。

では、「ナランデヤ」のところが、「できないんだもの」となっている。

北条忠雄氏の「甌島語法の考察」（『方言』第八巻第二号）には、

コトシヤ、イクツモリヤ | 今年はいくつもりである。

というような「ヤ」が見える。上村孝二氏の「薩南諸島方言語法資料」（『鹿児島大学 文科報告』第7号 昭和33年8月）にも、

ソノハーナ イクラカイ。ハイ ニジッシエンヤ。

などに見える。

説明の「ヤ」としうるばあいもすくなくない。

当県下で、「ヤ」の変形「ヤイ」「ヤン」も見いだされる。宮良当壮氏は、「日本語に於けるクワ(kwa)行音群に就いて」（『言語研究』第十・十一号）の中で、

kwafekurejai (食はして呉れよ)〔枕崎〕

というのをあげていられる。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条には、

f ジャラーヤン

そうですよ。

や、

f………… タイチェ オボエチエイカラヤーン  
 多く 覚えていますからねえ。

などが見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞としては、まず、「ナーヤ」が注目される。ただし、これは、種子島にいちじるしいものか。井上一男氏のさきの「種子島方言研究」にも、

ドンガ故郷ハナーヤ、種子島チユウトコロヂヤラヤ。

とあり、また小村秋豊氏の「種子島のことば」(『言語生活』第十八号 昭和28年3月)にも、

幼児や老婆の話を聞いていると「あのなあや…なあや…なあや…」と接続詞が入り、

とある。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条には、

fオラ キョーワナーヤン  
 わたしは きょうはねえ、

というのが見える。

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条には、

m………… テーチャル メーシモ ナゴオッ チューテ ノーヤ  
 「…………、たいてある 飯も 流れる」と 言って ねえ、

とあるが、「ノーヤ」は、注に、“個人的なくせか。”ともある。

複合形の「トヤ」があり、これが問いになる。複合形「ガヤ」もある。「ドカイヤ」もある。

「モンヤ」もあり、「モヤ」もある。

○ゲンナカ モンヤ。

“はずかしいもんか!”

は、「モンヤ」の一例である。(「ゲンナカ モン。」は、「はずかしいもの。」)

で、「ゲーンナカ モンナ。」は、「はずかしいものなあ。」であるという。）

○ソー<sup>↑</sup>ジャ モヤ。

(“何でも、話したあとで、このように言う。”) )

は、「モヤ」の一例である。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条には、

f ジャッタ モネーヤ

そうでした ものね。

というのが見える。

なお、「ワヤ」複合形もある。『全国方言資料』第6巻の「鹿児島県鹿児島市」の条に見える一例は、

mモ アツサワ マイニッノ モンジャッデワヤー

もう 暑さは 毎日の ものだからねえ、おまえ。

である。

当県下の「ヤ」の用法に、品位の低くないものも多いのは、注目にあたいます。さきには、南島方面に、「ア<sup>↑</sup>ヤ<sup>↑</sup>ブ<sup>↑</sup>ン ヤ」(ございますね)、「イチ<sup>↑</sup>モー<sup>↑</sup>レーヤー」(お上がりなさいよ)などと、「ヤ」の、上品な表現の文にもはたらくさまが見られた。それとこれとが、思いあわされる。

## 宮崎県

県下一般に「ヤ」がよくおこなわれるが、その種別は鹿児島県下でのほどに多くはない。間いやさそいなどに「ヤ」のおこなわれることがいちじるしい。

疑問には、「そげんこつがあるもんや。」などの言いかたもある。(比江島重孝氏「六斗一升 ポケット民話—宮崎地方—」『朝日新聞』昭和35年5月3日)『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条には、

mカタクリダケジ イーヤ

かたくり粉だけで いいか。

とある。

願望表現の「ヤ」もあるが、勧誘の「ヤ」が、なおよくおこなわれている。「もどろや（戻らうよ）」は『日向国小林地方を中心とせる方言雑纂』に見えるものである。

宮崎県下の「ヤ」の用法には、上品に用いられて目だつというものがない。ただし、県西部奥などでは、対称代名詞「オマエ」「オミ」「ヤド」「オヂ」があって、品位は「オマエ」から「オヂ」に高下の順序になっており、中の「オミ」に「ヤ」文末詞が対応している。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞では、「ガヤ」「トヤ」「ツヤ」「テヤ」などが注意される。

「ガヤ」に関して橋口巳俊氏の教示せられるところは、以下のとおりである。まず、

「ガヤ」「ガヤー」は婉曲的なものいいになることが多い。特に大人の女人にみられる。

と言われる。その、

○ヌキ ガヤー。 パサン。

暑いですねえ。ばあさん。 （老女→老女）

は、単純なよびかけの「ガヤ」である。

○ソコ ノキヤーイ。クレ ガヤ。

そこをのいてください。暗いですよ。 （中女→老女）

は、“業をにやしてはげしい口調になる。目上の人に対して、いらだつ気持をかろうじておさえているのである。”という。

○モッテ イタ ガヤー。

持って行ったじゃないですか。 （中女→中男）

は、“まだ持っていけないんだろう、といわれて反撥する。”ものであるという。

○オトッサンナ オリヤラントチャロ ガヤ。

おとうさんはいらっしゃらないんでしょう？ (老女—老男)  
は、問いの表現になるものである。

「トヤ」も一般に問いに用いられている。「ツヤ」は「トヤ」の変形か。

「テヤ」も、問いの表現などに役だつものである。橋口氏教示の「モ クタテヤ。」(もう食ったって。)は、“あまり早く食ってしまったのに驚いてききかえす。”ものであるとされている。

#### 熊本県

県下に「ヤ」がよくおこなわれており、かつ、ていねいな「ヤ」はない。熊本市南郊では、「ハンブン ワケテ クレ ヤー。」の「クレ」のぞんざいさとつりあうものは「ヤー」であるという。「ナー」はていねいな言いかたで、「クレ」とはつりあわないという。(渋谷多文氏教示)

瀬戸口俊治氏教示の、県南、人吉市域での「ヤ」例に、

○オッガ ツラバ ッカ イ ミ チ ョ イ ヤ ッ デ ヤ。

わたしの顔ばかりみていらっしゃるんだもの。

というのがある。この「ヤ」とても、—薩摩方面での「ヤ」の一用法に通うものではあるが、上品の言いかたとは認めがたい。

県下一般に、問いの「ヤ」、さそいの「ヤ」、よびかけの「ヤ」、命令の「ヤ」、受けひき応答の「ヤ」などがおこなわれている。

○ミ テ ク レ ン ヤ。

見てくれないか。

は、県南での問いの「ヤ」である。八代地方の問いの「ヤ」については、人が、“下品なことば”などと言っている。

○タ メ ア キ ク ン ナ ド コ ヤ。

ためあき君のはどこだい？(教室で児童が成績品を各自の机にくばりつつ言う。) (少男間)

は、阿蘇山南麓での問いの「ヤ」の例である。

○オマエ サコオッテ ガッコーサン アスビギヤ イタイ ヤ。

おまえは一昨々日、学校へあそびに行ったか。

は、天草での問いの「ヤ」の例である。県下に、問いの「ヤ」がよくおこなわれている。

命令の「ヤ」の例は、県南の、

○マ<sup>↑</sup>ー アーレ(リ)バ ミテン ヤ。

まあ、あれを見なよ。

などである。

受けひき応答の一例としては、熊本市域などで聞かれる、

○ソギャン ヤ。

そうなのか。

があげられる。——「ソギャン カ。」と「カ」を言うよりは「ヤ」と言ったほうがやわらかみが出るという。なるほど、感声的な「ヤ」がただの受けひきにつかわれれば、その音感・語感はやわらかいものになる。

「ヤ」の変形の「ヤイ」があるか。『熊本県方言音韻語法』には、“感動の助詞”の「ヤ」「ヤイ」が列挙されており、

「ヤ」は「よ」に似て稍軽い。「ヤイ」には一層感動が加はる。

とある。——「シューゴタン ナラ セヤイ(為たければ、為なさいよ)」の言いかたがあげられている。斎藤俊三氏の『熊本県南部方言考』にも「ヤ(ヤイ)」が見え、“友達間に”とあり、「コレバシテクレイ(これをして呉れないか)」の言いかたが見える。「ヤ」がつよく発言されるうちに、しぜんに「ヤイ」ともなったのであろう。

他方、「ヤン」も見られる。『全国方言集』の中の、「熊本県方言」の記事には、天草郡のことば、

ナンスルヤン 何をするのか

がとりあげられている。

## ※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞としては、「イヤ」「カイヤ」「ガヤ」「トヤ」「ツヤ」「テヤ」「チャ」などが注意される。

○ツッ トヤ。

出るのか？

は、熊本市で聞き得た「トヤ」例である。

○ウマレタ ツヤ。

生まれたのか？

は、阿蘇山南麓で聞いた「ツヤ」例である。

「テヤ」に類する「チャ」の実例は、八代市域の、

○ツワシレ シモータ チャ。

忘れてしまったてね？

などである。(白石寿文氏教示)『全国方言資料』第6巻の「熊本県上益城郡浜町」の条には、

*m*トイシバ コン アツカテヤ

砥石を この 暑いのに。

と見える。

## 長崎県

本県下にも「ヤ」文末詞がよくおこなわれている。林田明氏は「長崎市方言文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

主として、「ヨ」が女性間に用いられ、「ヤ」は男性間に用いられる。

但し「ヤ」の低短音は必ずしもそうではない。これは一つの「やさしさ」

「親しさ」をかもし出す。「ヨ」を男子が用いれば「物柔らかさ」を示し、

従ってはるかに「ヨ」が「ヤ」よりも上品であることになる。

と言われる。五島列島内では、女性が、やさしいもの言いをしよとする時に

「ヤ」を言いもするようである。しかし、一般には「ヤ」は目上用のものではなからう。

県下の「ヤ」の諸用法を見るのに、一つに、さそいの「ヤ」がよくおこなわれている。長崎市での一例は、

○オイントト ワイントト モヤイニ シュー ヤ。

“おれのとおまえのといっしょにしょうや。”

である。五島での一例は、

○カカー メヒバ ハヨ クオ ヤー。

おかあ、めしを早う食おうよ。

である。『続巻岐島方言集』に見える例に、

ツマラン事アスル<sup>メ</sup>ヤ

がある。県北、生月島での一例は、

○オカカ ハイ メシバ クオ ヤー。

おかあ、早うめしを食おうよ。

である。

問いの「ヤ」もよくおこなわれている。

○ダイ ヤ。ツイ ヤ。

だれ？ その人？

は、五島での一例である。『全国方言資料』第9巻の「長崎県福江市上大津」の条には、

*m*ナンバ ウッガヤー

何を 売りにか。

の例が見える。『全国方言資料』第9巻の「長崎県上県郡上対馬町鱒浦」の条に見える例には、

fモー メンヨー クオージャ 不ーヤ チオッ

もう めしを 食べようでは ないか といって、

などがある。

命令の「ヤ」もよくおこなわれている。対馬例をひくならば、「しっかり勉強しろ。」の意の、

○ヨー ベンキョー セン ヤ。

などがある。「あれを見ろ。」も、

○アレヲ ミラン ヤ。 (女)

と言っている。(山本俊治氏教示)「セン ヤ」「ミラン ヤ」の言いかたで「しろ」「見ろ」の言いかたになるという。——元来は問いの形式ではなかったか。命令の「ヤ」の単純な用法は、もとより県下に広く見られる。「ここへ来い。」というのも「コケ コイ ヤ。」と言われている。

念をおすような「ヤ」がある。五島での、

○オッガ ユータロ ヤー。

わしが言っただろう？

など。また、よびかけふうの「ヤ」もおこなわれている。

本県下に、「ヤ」の変形「ヤイ」もあるか。対馬仁田村では、

○ハヨー ケイ ヤイ。

“早くこいやい。”

などと言っている。(山本俊治氏教示)

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、諸種のもが見いだされる。まず、「ネヤ」(「ネーヤ」も)「ノーヤ」がある。対馬の言いぐさには、

ネヤネヤイヤー ジョーカン ヒトン ワラワルルケー ネヤネヤイメー  
バイネヤ。

というのがあるという。『続壱岐島方言集』には、

「ノーヤ」は昔は有つたと聞くが今は知らない。「ネーヨ」「ネーヤ」は農家の古老に稀に聞いたようであるが、これも今は聞くことが出来ない。

との記事が見える。ところで、『対馬南部方言集』には、

ノウヤ

ねえ。下位の者に対していふ。

例「あんノウヤ」「さうしてノウヤ」

との記事が見える。山本俊治氏も、かつて対馬の厳原町で、

○コンバンワ ドコニモ イキャ センケ ノーヤ。

“今晚はどこへも行かない(私は)。”

などの例を聞きとめていられる。『方言』第二巻第三号(昭和7年3月)に寄せられた、大浦政臣氏の「対島北端方言集(二)」にも、

ナァモン、ナァムシ 同意を求める時の詞

ノウヤも同じ

との記事が見えている。

つぎに、複合形の「カヤ」があり、「カイヤ」「キャーヤ」がある。また「ガヤ」もある。

つぎに、「トヤ」がよくおこなわれている。問いに用いられている。

「テヤ」がある。これも多くは問いに用いられるものである。「ナン テヤ。」(何かね?)などとある。林田明氏の「長崎市方言文末助詞」に見える例、

○モーイッタテヤー。

(もう行ったのか。残念だなあ) 中男一中男

は、ただの問いではない。

つぎに、「モンヤ」「バヤ」「ワヤ」がある。対馬では、「バヤ」は「アケトラ  
デケン バヤ。」(開けるな。)などと用いられており、目下へのことばになる  
ものであるという。(山本俊治氏による。)『全国方言資料』第9巻の「長崎県  
南松浦郡新魚目町浦桑」の条には、

*m*チットパカ <sup>3)</sup>カ タツツケバ カルッ キタワヤ

少しばかり たきつけ〔焚き付け〕を 背負って 来たよ。

などとある。

3) 言いまし。

佐賀県

本県下の「ヤ」では、問いの「ヤ」などがよくおこなわれていようか。それは、上品なことばづかいにはならないのが通例のようである。県南部での、

○オンナジ モンデ ヤ。

おなじものでね？

も、上品な表現と言いうるものではない。このカードを検閲せられた土地の識者は、

ヤンターで上品となる

と注してくださる。「ヤンタ」には「アンタ」がはいっていよう。

受けひきの「ヤ」もある。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」の条には、

f ホンニーヤ

そうですか。

とある。佐賀市での例であるが、

○ホンニ ヤー。

は、“客の言っていることにおどろいたふうのあいづち。”であるという。

本県下に、「ヤ」の変形「ヤイ」があるのかどうか。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞に「ノーヤ」「テヤ」などがある。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」の条には、

m キュワ コリヤ ヨカ テンキチャロ ゴタノーヤ

きょうは これは いい お天気 のようだね。

などというのが見える。早く『佐賀県方言辞典』にも、

のーうやーあ〔感〕ネーエ。

アレハ、のーうやーあ汽車ト云フモノダヨ。

とするされている。県下に「ノイヤ」もあるか。県南の旧須古村では、「ノイヤ」について、“ノマイにおなじ”と聞かされた。

「テヤ」の、県南での一例は、

○カギヤマ オー カテヤ。

鍵山はおるかって、電話をかけるの？

である。

## 福岡県

本県下にも「ヤ」がよくおこなわれている。さそいの「ヤ」があり、命令の「ヤ」があり、問いやたのみの「ヤ」があり、受けひきの「ヤ」がある。（「そ  
うですか。」の意の「ホンナ コテ ヤ。」など）

『放送講演集』の「福岡県の方言」の部には、

全で夢のごとあるや。

の言いかたが見える。この「ヤ」は、「よ」とも言いかえて、感嘆のばあいと見てよかるうか。「わたしゃ 恥カシカ ヤー。」などというばあいも似たものであろう。

本県下に、「よ」と言いかえてよい、つぎのような特定のものがある。

○ヒチジュージゴジャロー ヤー。

七十四・五歳だろろうよ。 （老男→老女）

○オモシロカロー ヤー。

おもしろかろうよお。 （中男間）

○ワタシワ ナニモ シリマッセン ヤー。

わたしは何も知りませんよ。 （老女→藤原）

説明・表明の「ヤ」とも言うべきか。私は、筑前糸島半島で、この種の「ヤ」の、男女によくおこなわれるのを聞いた。道のりを聞いた時の返事には、

○ニジツチョーヨリワ ノビトリマッショー ヤー。

二十丁よりはのびて、もっと道のりがありましたよ。

（中男→藤原）

というのがあった。この種の「ヤ」を、一老男は、“ちょっと言いすてたことば”と説明してくれた。ともあれ、外来の私などにも、ふつうにこの種の「ヤ」をつかう。その品位はわるくなかろう。「ヤ」にこういう用法のあることを注目したい。県下の、筑前西半域には、ことにこの種の「ヤ」がよく見えるか。『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条には、

f …… オーカタ ミエマッショーヤ  
多分 お見えになりましょう。

とある。筑前東部の嘉穂郡穂波町のことばに、

○ソソコラー モー オランヨー ナロー ヤ。  
“その頃はもう(広島に)いないようになるだろうねえ。”  
(青男→小男)

というのがある。(白石美代子氏教示) この「ヤ」も、おそらくは同種の「ヤ」ではなかろうか。『全国方言資料』第6巻の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」の条には、

mソゲナ ウレンカッタコタ アリャ ネーヤ  
そんな うれしかったことは あんなことは ない。

というのが見える。この「ヤ」も説明の「よ」とされるか。

『博多ことば』(方言絵はがき)には、

甲の女「下の方から男の登つて来ござるけん、あたしや、耻かしかやあ、」  
というのが見える。

県下一般に、「ヤ」の多くのばあいの言いかたは、おしつけるようなところのある、いわばつよい言いかたになる。「ヤ」と「エ」との、言いかたのうえで  
の対応が明らかである。おしつけるきみあいがつよければ、それは下品にもなりかねないはずであるが、一方に、前述のような、わるくはない言いかたの説明・表明の「ヤ」もあるのが注意される。

「ヤ」も、もともとは、上位表現にも下位表現にもおこなわれてよいものだったであろう。——世の一般では、下位表現のおこなわれかたがさかんになっ

ているけれども。

「ヤ」の「ヤン」「ヤーン」があるか。水上田鶴子氏が、筑後川口ちかくの大野島を調査して得られたものに、

○フタツド<sup>メー</sup> ツク ヤン。 フタツド<sup>メー</sup>。

二つともとどくよ。ふたつとも。(バスのつり革に両手がつくと  
てよるこんでいる。) (小男→小男)

○ナイト<sup>シャ</sup>ン ヤーン。

ナイトさんよーい。(ナイトは少年の名まえ) (小男→小男)

との言いかたがある。「ヤ」の言いかたがつよめられれば「ヤン」ともなるのであろう。水上氏は、上の第一例について、「「ヤン」には「人が何と言ったって」という気もちがある。「自分は」という気もちがつよいのである。」と言われる。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞を見る。

筑後には「ナイヤ」の言いかたがあるか。『久留米地方方言』には、「ナイヤ」について、

のうやと同意にして目下の物に用ひる語  
としてある。

「ネーヤ」がある。『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡善導寺町」の条には、

m コマカエドンガツァ    コーチキニャ    イカンチャッカネーヤー  
こどもの物は            買ってこなくては    いけないのかねえ。

というのが見える。

筑後地方に「ノヤ」「ノーヤ」の言いかたがさかんである。「暑い ノヤ。」  
「暑カ ノーヤ。」などと言う。「ノヤ」「ノーヤ」が、とくに筑後地方に自由におこなわれているのは、分布上、注目にあたいする。(前提として「ノ」のよくおこなわれていることが認められよう。)

「トヤ」複合形がある。「テヤ」がある。「チヤ」がある。

「クサヤ」がある。『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡善導寺町」の条には、

f オッキ ニモンバ カタメタ  $\left( \begin{array}{c} \text{ンー} \\ m \end{array} \right)$  ママクサヤ  
 大きな 荷物を かついだ ままね。

藤原注 「カタメタ」は「カタゲタ」のことか。(岡野信子氏の教示による。)

などである。

## 大分県

本県下にも「ヤ」がまたさかんにおこなわれている。大畑堪氏は、「大分県南部の方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

品位は、「エ」が高く、「ヨ」がこれにつき、「ヤ」は低い。「ヤ」と「エ」とは、用法は、共通するところが多く、品位の点では、差がある。

と言われる。

県下の「ヤ」には、さそいの「ヤ」があり、命令やたのみの「ヤ」があり、受けひきの「ヤ」があり(「そうね。」の意の「ホント ヤ。」など)、問いの「ヤ」がある。問いの「ヤ」には、つぎのような言いかたが見られる。

○ドー シタ ヤー。

どうした?

大分市をはじめとして、県下にこういう言いかたがふつうにおこなわれている。

○ミズ アベ イクンチャロ ヤー。

およぎに行くんだらうねえ。(小男→同)

というのは、上の大畑氏の論文中に見えるものである。——問いではあるが、これは単純ではなく、推量の問いになっている。おなじく大畑氏の論文の中にあるものに、

○フ<sup>リ</sup>ー バケツガ ア<sup>ロ</sup>ー ヤ。

ふるいバケツがあるだろうがね。 (中女→子)

というのもある。

問いの「ヤ」に近いものに「ニャ」もあるのか。糸井寛一氏の「大分県方言  
ところどころ」(『言語生活』第六十六号)には、

中学生のやりとり、

「ア<sup>ノ</sup>ー、本貸セ<sup>ー</sup>ノ<sup>ー</sup>。」

「アア、何ノ本ニ<sup>ャ</sup>?」。

本ニ<sup>ャ</sup>は本ヤ(本か)である。

というのが見える。「ヤ」の発音がしぜんに変じて「ニャ」となったか。——  
本県下だけのことではないようである。

願望の「ヤ」(「たい」という助動詞の「タ」形を受けるもの)もあるか。

「よ」と言いかえられる一種の「ヤ」が見える。さきの大畑氏の論文には、

○ホッ<sup>ヂ</sup>ャー ゴメンナサンシー ヤ。

(それではごめんなさいよ。)では失礼いたします。<わかれのあいさ  
つ> (老女→青男)

の例が出ている。『全国方言資料』第6巻の「大分県南海部郡上野村」の条に  
は、

mア<sup>ー</sup> フ(ン)ナリ イ<sup>チ</sup>ェ クルヤ

ああ、それでは 行って 来るよ。

とある。小野米一氏教示の、南海部郡下の例は、

○アイ<sup>テ</sup>ガ ウ<sup>マイ</sup>ケリャー チョ<sup>ー</sup>シガ ト<sup>ッ</sup>カー ヤ<sup>ー</sup>。

(ダンスは)相手がうまければ調子がつくよ。 (青男→小野氏)

である。いずれも自分の思いを言う「よ」相当の「ヤ」である。

感嘆の「ヤ」と言ってよいものがある。小野氏教示の南海部郡下のものに、

○ナ<sup>ー</sup>ント ウ<sup>ド</sup>マカス ヤ。

なんと精を出すこと! (中女→小野氏)

というのがある。

「ヤ」の変形「ヤン」があるのか。『全国方言資料』第9巻の「大分県臼杵市諏訪津留」の条には、

*m*オッチャー イテ コイヤン パー  
なるほど。行って 来なさい、 ばあさん。

というのが見える。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず「ネーヤ」がある。「あのね。」も「アン ネーヤ。」と言っている。つぎに「ノーヤ」がある。

○オイドー ソゲン コツ シチョラ センニー アーヤ。

ほくら、そんなことしていやしないのにねえ。 (中学生男→中学生男たち)

は、豊後内部内の一例である。

「ヨヤ」というのもあるか。

「カヤ」がよくおこなわれている。

○モーガラ ヘーガラ キタ カヤー。

もうはや来たかい。

は、国東半島内の一例である。

○ウチア ヂーサンニ アヤ セザッタ カヤ。

うちのじいさんに会いにはしなかったかね。

は、豊後内部内の一例である。「トカヤ」の言いかたもあり、「ンカヤ」の言いかたもある。

「ンヤ」の問いの言いかたがあり、「トヤ」の問いなどの言いかたがある。

「ワイヤ」の言いかたもおこなわれている。

以上、九州を見おわって思われるのは、「ヤ」文末詞の隆盛である。

九州南部——鹿児島県——では、ことに「ヤ」がさかんにおこなわれていて、

しかも、その用法に、諸態・諸種のもの認められるのが特筆される。南島方言上の「ヤ」文末詞に通じるようなものもここに見いだされるのが、とくに私どもの関心をひく。(南島方言の異色がつよいに負けて、私どもは、しばしば、南島方言を別格視しがちであるが、かえりみて思われるのは、南島方言だけを切りはなして見ることにはおぼれないようにしなくてはならないということである。)

九州方言内で、「ヤ」の言いかたが上位上品の表現にもなっているのは、とくに注目される。

福岡県下などで、説明・表明の「ヤ」の見いだされるのが、また注意すべきものである。中国地方では、この種のものが、とくに山陰の因幡に見いだされて、興味が深い。

#### 四 中国地方の「ヤ」ほか

中国地方もまた、「ヤ」のおこなわれることのさかんな領域である。

##### 山口県

本県下では、さそいの「ヤ」や、命令の「ヤ」のおこなわれることが、まずいちじるしい。

○インヨーマンヨーニ、ナロー ヤー。

大の仲よしになろうよ。

は、長門北部でのさそいの「ヤ」の一例である。(阿波陽氏教示)

問いの「ヤ」もよくおこなわれている。

○カターチ イアトモチ ヤー。

それがかついで帰ろうと思ってかい? (初老男間)

は、周防祝島での一例である。

「よ」と言いかえてよいような言いかたになるばあいも多い。長門西岸の一例は、

○コイ<sup>↑</sup>ビヤ<sup>↑</sup>ー ワミガ シケ<sup>↑</sup>ジャケ<sup>↑</sup>ー イッ<sup>↑</sup>パイ ノモ<sup>↑</sup>ー デヤ<sup>↑</sup>ー。

今晩は海が荒れてるから、いっぱい飲もうよ。

である。「よ」とは言いかえてみるが、上例のばあい、共通語流の単純な「よ」とはいくらがちがう。「ヤ<sup>↑</sup>ー」とあるので、じつは、自分がさっさとその行動をとる気もちがよくあらわされている。相手をさそいながらも、おのれが先んじて積極的に行動をおこすという「よ」の言いかけである。

○キレ<sup>↑</sup>ーナ ヤ。

きれいなよ。

これは、周防祝島での一例であるが、編物のきれいなのを見て、自分の思いを述べたものである。長門北部、青海島の、

○オ<sup>↑</sup>マイ アシ<sup>↑</sup>ダ ヤッ<sup>↑</sup>チャ<sup>↑</sup>ル ヤー。

おまえ、あしたなぐってやるぞ。

は、「よ」の「ヤ」のごとくであって、もはや「ぞ」と言いかえうるものである。

感嘆の「ヤ」がある。

○マ<sup>↑</sup>コト ヤー。

ほんとにねえ。

などの言いかたが広くおこなわれている。祝島での一例は、

○ウ<sup>↑</sup>ーラ、キ<sup>↑</sup>レ<sup>↑</sup>ーナ ハ<sup>↑</sup>ナ ヤ。

まあ、きれいな花ねえ。

である。青年女性たちは、上文の「ヤ」について、“調子ことば。何の意味もないがつける。「ヤ」は「ね」にあたる。”と説明してくれた。

「ヤ」の言いかけには、総体に、自分本位のところがあるろうか。——「ヤ」に特殊な迫力がある。

つけそえて思うことである。近畿弁では、「そうだそうだ。」のところを

「ソーヤ ソーヤ。」と言う。このように、指定断定の助動詞を「ヤ」と言っているところには、文末詞「ヤ」の訴え効果にも似た、あるよびかけ効果ができていようか。「ヤ」という音形の音効果と「サ」という音形の音効果とのちがいの大ききも、明らかであろう。

本県下に、「ヤイ」という文末詞も認められる。山陽線がわ、小郡付近の言いかたには、

○ナマコ コーテ クレヤイ。

なまこを買っておくれよ。

のような言いかたがある。この「ヤイ」は、「ヤ」の変形「ヤイ」なのか、尊敬法助動詞「ヤル」の命令形「ヤイ」なのか。長門北部の青海島で聞いたものには、

○イコ ヤイナー。

行こうよ。(さそう。)

とのことばづかいがある。これの「ヤイ」は、「ヤ」文末詞の変形の「ヤイ」なのか。岡野信子氏の教示によれば、萩市に属する見島には、

○オチャガ ワクサニ コイヤイ。

お茶がわくから遊びにおいで。(老女→老女)

というのがある。

県下に、「ヤ」の変形「ヤン」もおこなわれているかもしれない。ところで、『山口県方言調査』に見える、

カキヤン

ミズーモツテキヤン

などの「ヤン」は、「ヤル」尊敬法助動詞の命令形の変形と見うるものか。

※ ※ ※

本県下には「ヤ」に関する多種の複合形がある。

「ノーヤ」がよくおこなわれており、「ノイヤ」も見られ、「ノヤ」がまた周防におこなわれている。

○イッパイ オー チュル ノヤ。

(せなかに) たくさんせおってるねえ。

○マー イヤ ケナー ノヤ。

“まあかわいそうなことヤ。”

は、周防祝島での二例である。中国地方内での「ノヤ」の存在は、注目にあた  
いする。

周防東部に「ネヤ」も見える。「アア ネヤ。」(あのねえ。) などと言っ  
ている。

「イヤ」もとりたてられる。

○キュー コリ イコ イヤ。

木をこりに行こうよ。

○タマ ゲタ イヤ。

おどろいたよ。

などと言っている。

「ゾヤ」「ゾイヤ」もある。

「カヤ」もよくおこなわれている。

○イチ ン カヤ。

帰らないかね。

などと言っている。「カイヤ」もおこなわれている。

「ガヤ」もある。

○ソネ イニ ジョー ニ キテ, アツ イロー ガヤ。

そんなにたくさん着て、暑いだろうねえ？

は、長門西北辺での一例である。「ガヤ」は東西によくおこなわれている。

「トヤ」もあり、「トイヤ」もある。「テヤ」もある。「デヤ」もある。

○サー, ソリヤ シラン デヤ。

さあ、それは知らないよ。

は、長門北部での一例である。

本県下での独特の複合形に「ホイヤ」がある。おもに、西部におこなわれて  
いようか。

○コリヤ バカ、オレノ ホイヤー。

これはおまえ、おれのだよ。

は、長門西岸での一例である。山口県下も、ことに長門地方によくおこなわれ  
ていることばに、「山口なまりの、あのソ、このソ」というのがある。「この  
ソ」は「それ」からのものであろう。「ソ」が「ホ」にもなっている。「ソ(ホ)」  
は、文中の指示詞にもなっているが、また、文末の訴えことばにもなっている。  
上文の「ホイヤー」の「ホイ」は、「ソ(ホ)」に類するものであろう。上の「ホ  
イヤー」は、どの程度に文末詞的なものになっているのか。榎垣実氏の「山陽  
道の巻」(柴田武氏編『方言の旅』)に見える“下関の会話”，

オリヤア チイサイ コロニ ノオ、 チッコオデ ヨオ フグ ツリヨ  
ッタ ホイヤ。(わたしは小さいころにね、築港でよくふぐを釣っていた  
んだよ。)

の「ホイヤ」では、これの、文末詞としてのおちつきが明らかである。

いま一つの特異な文末詞に「バヤ」がある。岡野信子氏の教示によるのに、  
下関市に属する、旧下関市の北方の吉見では、

○カゼガ フキヨルゴトアル バヤ。

風がふいてるようだよ。

などの言いかたが聞かれるという。この「バヤ」は「バイヤ」のつづまったも  
のか。

## 広島県

広島県でもまた、「ヤ」がさかんにおこなわれている。さそいの「ヤ」、命令  
やたのみの「ヤ」のおこなわれることは、ごくふつうである。

○コラエ ヤー。

こらえよ。

など、さとするような気もちの「ヤ」もよくおこなわれている。

問いの「ヤ」としては、

○どうどうして クレン ヤ。

と言ったような問いかたになる「ヤ」がこと変わっていようか。「オバーサン、ナンボジャッタ カイノー。」(おばあさん、いくつだったかねえ?)との問いに答えて、

○トシガ ヤー。

というのは、「年がね?」との意の反問である。

説明の、

○ナンボデモ アリマサー ヤ。

いくらでもありますよ。

などの言いかたもよくおこなわれている。報知・報告の「ヤ」と言いうるばあいも多い。

「よ」と単純に言いおさめるのに近い「ヤ」が、またよくおこなわれていて、これが一特色をなしている。「どうしようもないよ(さ)。」といった意味あいの表現、

○ヤレン ヤー。

○ヤレナー ヤー。

との言いかたは、ことによくおこなわれている。——主として安芸にである。

これらは、まったく「よ」の言いかたである。説明して、

○エーガイニ アガランジャー ヤー。

いいぐあいに上がらないんだよ。

というばあいなどの「ヤー」も、まさに「よ」である。『全国方言資料』第5巻の「広島県佐伯郡水内村」の条に見える、

*m*ナンデ ガンサーヤ

なん ですよ、

との言いかたは、安芸地方の広くでよく聞かれるものである。安芸地方も西に寄れば寄るほど、この種の「ヤ」がよく聞かれる。「こんどの電車は廿日市行きだよ。」というのでも、中学生たちが、

○ハツカイチジャー ヤー。

と言っている。やや異なった例に、旧広島市の北郊での、

○ソカー キタナインジャニ ヤー。

そこはきたないんだのに！

などの言いかたがある。(子どものことばだと教示してくれた人もある。)

「ヤ」のことばづかいは、おおむね良品ではないものになりがちである。けれども、ぞんざい・下品とはしがたい言いかたにもなって、「ヤ」の品位差は複雑である。抑揚の調子しだいでは、やさしさ・情愛の出ることもすくなくない。上げ調子の「ヤ」が、おのずからその時の愛情にふさわしい品をそなえることもある。本来、感声的なものである「ヤ」のことである。ばあいばあいによって、人は、これを、諸種の表現場面、品位別に活用しうるのであろう。

用法別ということもまたしかりである。元来、単純感声とも見うるものなので、人々がこれを利用するうちに、しだいにさまざまな用法別が結果されてきているというしだいであろう。用いられることがいちじるしければ、用法上の拡張・分割もいちじるしいはずである。

応答の「ヤ」もまた、他地方から見て、特別視されるものであろう。「そうかい。」と受けひく時に、

○ホー ヤ。

と言う。「ソー ヤ。」とも言う。これらは、だいたい男性におこなわれるものである。(女性は「ホー ネ。」と言いがちである。)おどろいて受けこたえる時、ないし、ことの意外におどろいて答える時などに、上の言いかたが出がちである。こういう「ヤ」の表現は、概して低品である。上げ調子の「ヤ」はやさしいものになるとはきまっていない。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ノーヤ」がよくおこなわれている。

○ン、キンニョ ノーヤ。

うん、きのうねえ。(同意を求めて話しかける。) (小男間)

などと言われる。全県下に「ノーヤ」がよくおこなわれている。(ただし、「コンナー キョー イカン ノヤ。」というようなばあいは、「ノヤ」の「ノ」が助詞「の」出自のものである。「おまえはきょうは行かないのか？」の意のものである。)

「イヤ」との言いかたも、安芸内でいくらか見られる。

「カイヤ」「テヤ」「デヤ」「ガヤ」などがおこなわれており、また「ワイヤ」がよくおこなわれている。『全国方言資料』第5巻の「広島県佐伯郡水内村」の条には、

*m*マー ヤカマシー ヒト ダッタデヤー

まあ やかましい 人 だったよ、

という「デヤ」例が見える。

○何々が アラ ヤー。

何々があるよ。

との言いかたは、県下によく聞かれるものであるが、この「アラ ヤー」は、「アル ワイヤー」のつづまったものである。

## 岡山県

さそいの「ヤ」、命令の「ヤ」、願望あるいはたのみの「ヤ」などが、ふつうにおこなわれている。

○モー インデ ネョー ヤー。

もう帰ってねようよ。

は、島嶼部でのさそいの「ヤ」の一例である。

「よ」にあたる「ヤ」もよくおこなわれている。内海島嶼部での、

○スカン ヤー。

(「すかんよ。」) いやだこと! (女性 独話)

は、その一例である。県北の作州で聞いたものには、

○カワットロー ヤー。

変わってるだろうよ。

のような言いかたがある。この「ヤ」の用法は、北の鳥取県下にさかんな「ヤ」の用法に同じるものである。おなじく作州での、西部の、

○ゴンシター ヤー。

いらしたよ。

のばあいも、「ヤー」が「よ」に相当している。——当方の思いを相手に告げる「ヤ」である。

『岡山県小田郡方言集』には、

ヤラーヤ〔句〕 為るなア 「あの男は面白いことをヤラーヤ」  
してあるなア

との記事が見える。この例文の「ヤ」も、「よ」と言いかえられないことはなからう。

問いの「ヤ」に、つぎのような言いかたのものがある。

○ドガイナラ ヤー。

どんなもんだろうなあ。

○イケマイ ヤー。センセー。

いけんでしょう? 先生。

この二例は、作州西部で聞いたものである。『全国方言資料』第5巻の「岡山県真庭郡勝山町神代」の条には、

*m*ナニュー ショータンナラヤー

なにを していたのかねえ、

というのがある。備中島嶼部での一例は、

○ソレガ ヤー。

それがね？

である。どのような言いかたにも自由に「ヤ」をつけて、それで一拳に問いの表現をつくるありさまが見られる。

感嘆の「ヤ」

○イ下シ ヤ。

気のどくや！

○キチャナ ヤー。

きたないわ！

と言ったような言いかたも見られる。

「ヤ」の「ヤイ」となったものも北部地方に見られるか。「くれ ヤ。」に対する「くれ ヤイ。」などがおこなわれている。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず「ナーヤ」がいくらかおこなわれており、「ノーヤ」がかなりよくおこなわれている。

「ゾイヤ」もある。

○オーキニ アッタ ズイヤ。

は、とったひらめが大きかったことを、青年男子が説明したことばである。(作州西部での聞き書きである。「オーキニ アッタ」は、いくらか、共通語にひかれた言いかたか。このカード検閲の識者は、このカードに、「オーケナッタ ズイヤ」と注してられる。)

「カイヤ」があり、「ガヤ」がある。「ガヤ」がよくおこなわれている。「シラソ ガヤー。」(知らないよ。)などと言われている。「ガイヤ」もおこなわれている。「ガイヤ」「ガヤ」は、気らくな、またはぞんざいな言いかたになる。

「トヤ」というものもあり、「トイヤ」もある。「テヤ」もおこなわれている。

○スナ テヤ。

するなっば。

などと、これはぞんざいな言いかたにつかわれている。

「ワイヤ」も聞かれる。——おもに北部でか。

## 島根県

山陰となって、島根県下の「ヤ」に、また、言うべきことが多い。石見・出雲・隠岐を通じて、「ヤ」がよくおこなわれている。「ヤ」の品位は、大略、中等品位のものであろうか。

本県下では、さそいの「ヤ」のおこなわれることがいちじるしい。さそって念をおす気もちのものもある。

たのみの「ヤ」としてよいものもよくおこなわれている。

○マッテ<sup>ー</sup> ヤ<sup>ー</sup>。

まってよお。

は、石見での例である。

○ソレ オラニ[i]モ ゴイテ<sup>ー</sup> ヤ<sup>ー</sup>。

それをわしにもおくれよ。

は、出雲南部での一例である。

○シ[i]ッカリ[i] ベンキョ<sup>ー</sup> サッシャイ<sup>ー</sup> ヤ<sup>ー</sup>。

しっかり勉強しなさいよ。

は、出雲での命令の「ヤ」である。石見での、

○オッチラト タベテ オクレ<sup>ー</sup> ヤ。

ゆっくりとたべておくれよ。

ともなれば、「命令」とはいいながら、たのみである。

問いの「ヤ」もまたよくおこなわれている。『全国方言資料』第5巻の「島根県大原郡大東町春殖畑嶋」の条に見える、

f チッタ ツカエマシタヤラ          ドゲニヤ<sup>ー</sup>ヤ

少しは 使えましたでしょうか。 どうですか。

の「ヤ」も、問いの「ヤ」とされようか。神部宏泰氏教示の石見西部例、

○ヤッチャン ガッコーエ イッターロー ヤ。

「ヤ」やっちゃん学校へ行つたろうかね。(小男→同)

では、「ヤ」が「かね」と言いかえられている。

○ナンガー ヤ。

何がね?

は、島根半島北岸での一例である。——男のことばとのことであった。

つぎに、よびかけの「ヤ」がおこなわれている。

感嘆の「ヤ」がある。

「ね」と言いかえられている「ヤ」がある。——『全国方言資料』第5巻の「島根県那賀郡雲城村」の条に、

f ナガシュー オータルケーヤー

長時間 背負って歩くのでね

とある。

「よ」と言いかえられる「ヤ」がある。高橋龍雄氏の「文章としての方言の妙味」(『方言』第二巻第八号 昭和7年8月)には、

まくれざっしゃるなや

との言いかたが見える。

「ヤ」の「ヤイ」となったものがある。

○ゴシェ ヤイ。

おくれよ。

などと言っている。島根半島での調査の時は、“「ヤイ」をよくつける。”との話しが聞かれた。出雲弁では、「ヤイ」がしぜんに「ヤエ」ともなっている。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず、石見に「ノーヤ」がある。出雲に「ネヤ」がある。

○ココノ デ[ī]ー ネヤ。

ここの土地へねえ。

などと言っている。「ネヤ」が「ニャー」に近く聞こえることもある。

「ゾヤ」がある。隠岐にこれがよくおこなわれており、ならんで「ズヤ」もまた隠岐によくおこなわれている。神部宏泰氏教示の「ズヤ」例は、

○ソリヤ ホントノ ハナシデ ゴザンス ズヤ。

それはほんとうの話でござんすよ。

○オドル ズヤー。イショー シテ ー。

踊るよね。衣裳を着てねえ。 (老男→神部氏)

などである。神部氏は「隠岐島五箇方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、「ズヤ」が、“主として中年以上の男女にもちいられる。そのうち、とくに、女性にもちいられることがおおいようである。品位は中等程度である。”と述べていられる。「ズヤ」は「ゾヤ」からのものであるうか。「ジャ」というものもある。神部氏の前論文にかかげられているものには、

○ヤッタテヤ ソンダ ジャ。

やるなんてことはそんだよね。 (小・女)

がある。『全国方言資料』第8巻の「島根県周吉郡中村伊後」の条には、

fイヤ ウチニ オリマスズォヤ

いや、 家に おりますよ。

というのが見える。

「カヤ」複合形も本県下によくおこなわれている。「ガヤ」もある。

○コドモ ガヤ。

子どもがね?

は、問いのことばである。

「トヤ」もおこなわれている。

○××チャー。デテ コイ トヤー。

××ちゃん。出て来いってよお。(かくれんぼ) (幼男間)

は、出雲での一例である。石見にも「トヤ」がよくおこなわれているらしい。

「テヤ」も石見・隠岐に見える。

## 鳥取県

本県下には、「ヤ」に対する「ヨ」もまたよくおこなわれているので、「ヤ」の姿勢としては、鳥根県下のにやや異なるものがあるとも考えられるか。

岡山県北部には——南部にもであるが——、ナ行音文末詞がさかんである。鳥取県下には、ナ行音文末詞とともにヤ行音文末詞がさかんである。ここに、陰陽の相違が見られる。

本県下の「ヤ」には、さそいの「ヤ」、命令の「ヤ」、問いの「ヤ」がよくおこなわれている。

○ホン<sup>三</sup> ヤー。

ほんとか。(そうか。)

は、受けひきの「ヤ」と言えようか。

「よ」と言いかえてよい「ヤ」がまた、因幡地方では、かくだんによくおこなわれている。

○アルデ<sup>シ</sup>ョー ヤー。

あるでしょうよ。

は、鳥取市内の旅館で聞かれたものである。——“あるんですか？”とたずねたのに対する返事である。おなじ日のこと、因幡の南隅でも、「アルデ<sup>シ</sup>ョー ヤー。」というのが聞かれた。「でしょう」の言いかたを受けて、「ヤー」のくるのが注目される。室山敏昭氏の教示によるのに、本県下の東伯郡、すなわち伯耆東部でも、

○ミヤワ ツイ ソコデ<sup>シ</sup>ョー ヤー。

神社はついそこでしょうよ。

のような言いかたがおこなわれているという。「～でしょう ヤー。」の言いかたは、だいたい、因幡本位に、いくらかは伯耆にもわたって、おこなわれて

いるものか。未来形を受けての「ヤー」の、とくにこの地域におこなわれているのは、注視すべきものである。因幡には、

○オ<sup>ー</sup>ウ<sup>メ</sup>ダラー ヤー。

大梅だろうよ。(私が、“この梅は大きいですね。”とたずねたのに対する返事である。)

などの言いかたもおこなわれている。やはり、「だろう」の未来形を受けての「ヤ」である。「〜ましょう ヤー。」の言いかたも、むろんおこなわれている。こうした「ヤ」が、老年者に限られることはなく、若い人にもおこなわれており、「ヤ」は品位のわるくないものになっている。

県下の東西に、「ヤ」からの「ヤイ」も聞かれる。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ノーヤ」「ノイヤ」がある。「イヤ」がある。『鳥取県方言辞典 後編』にも、

面白かったいや

などの例が見える。生田弥範氏の『西伯方言集』にも、

シヨイヤ ……しようよの意。勉強シヨイヤ。

とある。「イヤ」がいろいろな表現のばあいであらわれている。

○イカ イヤ。

は、「行こうよ。」のさそいである。

「ゾヤ」がある。「ゾイヤ」がある。

「カヤ」がよくおこなわれている。「カイヤ」もよくおこなわれている。

「ガヤ」もよくおこなわれている。

「トヤ」「トイヤ」がおこなわれており、「テヤ」もおこなわれている。生田弥範氏の『山陰方言概論』には、

ててや—— { あそばんててや (あそばないですかでわし方がない)  
いかんててや (行きませんか いきましょうよ)

の記事が見える。

「ダイヤ」というものもある。稲田浩二氏福田晃氏編『大山北麓の昔話』には、  
ウチニャ マンダ ヨメ モラウヤーナ コトニ ナットラン ダイヤ  
という例が見える。

「ワイヤ」「ワヤ」の言いかたも見える。

## 五 四国地方の「ヤ」ほか

この地方にもまた、「ヤ」のおこなわれることがさかんである。

### 愛媛県

愛媛県下に、「ヤ」のおこなわれることは顕著なものがある。

命令・すすめの「ヤ」が、よくおこなわれている。

○ソー スナ ヤ。

そんなにするなよ。

は、南予での禁止命令の一例である。——下品の言いかたになっている。南予で、ていねいに命令する一例は、

○マー アガンナハレ ヤ。

まあおあがりなさいよ。

である。命令というよりも勧奨である。県下には、「オアガリ ヤー」「オアガリ ヤ。」（お上がりよ。）など、動詞連用形の言いかたを受けての「ヤ」の使用がよく見られる。一方に、「オアガリー ナ。」などの言いかたもよくおこなわれている。「ナ」どめの言いかたに対して「ヤ」どめの言いかたは、ややくだけたものである。兩種の言いかたとも、テンポのややゆるやかなのが特徴である。宇和島市方面では、「投ゲレ ヤ。」などの言いかたもおこなわれている。

勧誘の「ヤ」もよくおこなわれている。

○マリチャ<sup>ン</sup>、バン デテ キー ヤ。

まりちゃん、晩に出ておいでよ。

は、松山市近郊での一例である。南予の南端部では、

○アソポー ヤー。

あそぼうよ。

などの言いかたがあって、これは「アソポー ヨー。」よりもていねいな言いかただという。「ヤー」とはっきりよびかけて、その対他的な効果が、「ヨー」のばあいよりも品位にとんでいるとするのは、まさに推測をゆるさない、地方の言語感情である。

依頼の「ヤ」が、またよくおこなわれている。

○コレ オシエテ ヤー。

これを教えてよ。

○ヨンデ ヤ。

読んでよ。(読んでちょうだい。)

は、南予での二例である。松山地方でも、この「～テ ヤ。」の依頼表現がよくおこなわれている。若い年層の人たちに、わけてもこれが目だたしかろうか。女性よりも男性のしきりにこれを用いるのが注意される。「～テ ヤ。」の言いかたは、方言心理のうえでは、かなり品をととのえた言いかたともわきまえられたりしていようか。一方には、「～テー ナ。」の言いかたもある。「ナ」どめのこれは、依頼・たのみというよりは、むしろ願望を表現するものと言ってよかろうか。「ナ」どめの言いかたのほうが、より女性的かもしれない。——男性もこの言いかたをするけれども。(「～テ ナ。」の表現法のほうが、より情緒的であろう。線の細さも感じられる。)[「ナ」どめのばあいには、「テ」は「テー」になるのがつねである。「ヤ」どめのほうは、「テ」の、のびないことが多い。そのばあい、ときにいくらかのぞんざいさもある。——男性にこの「～テ ヤ。」が用いられがちであるのも当然であろう。

問いの「ヤ」がよくおこなわれている。内海島嶼部の言いかたでは、

○ドー シテ ヤー。

どうして?

などがとりたてられる。明白な問いである。

○ $\overline{\text{ド}}-\overline{\text{シテ}}$  ヤ。

どうしてか。

これも、内海島嶼部での言いかたである。問いの「ヤ」は、上げ調子で、「ヤ<sup>↑</sup>ー」「ヤ<sup>↑</sup>」と発言されることもあれば、下げ調子で、「ヤ」<sup>↓</sup>と発言されることもある。

○ $\text{ホ}$  $\overline{\text{ント}}$ = ヤー。

ほんとにね?

○ $\text{コ}$  $\overline{\text{ッチノ}}$  ヤ。

こっちのかい?

(このような言いかたは、おもに、年上のものから年下のものになされる。ものやわらかさがここに出はするが、さりとてこれも、上品な言いかたにはならない。)

などの問いの表現を見るにつけても、「ヤ」の文末詞としてのはたらきが、明確に看取される。自然発生的な、感動的な「ヤ」のおもかげが、なお、こういうところに生きていよう。

受けひきの「ヤ」がある。内海島嶼の大三島で、

○ $\text{ホ}$ = ヤー。

ほんとねえ!

と言う。習慣化した受けひきの応答表現である。

○ $\text{ホン}$  $\overline{\text{ト}}$  ヤー。

そうかい。

というのも、一種の受けひき表現である。

南予内に、「よ」とでも言いかえてみたい「ヤ」がある。南予南端部では、

○ $\text{イク}$   $\overline{\text{トコ}}$  $\overline{\text{ガ}}$   $\overline{\text{アリ}}$  $\overline{\text{ャ}}$   $\overline{\text{セナ}}$  ヤ。

行く所がありはしないよ(しないさ)。

などと言っている。同地域でまた、

○オゴラレト ヤー。

おこられたよ。

のようにも言っている。(土地の人は、「ヤー」は人に言う時の語調だ。」と言っている。) 南予内の北部の二例は、

○ドー イタシマンテ ヤ。

どういたしまして。(「いつもおせわになります。」への返事)

○コレワ オイシ ヤー。

これはおいしいよ。

である。中予の島嶼部には、

○アノ ヤー。

あのよお。

のような言いかたがあるという。北部の島嶼部では、「インデ<sup>↑</sup>クラ ヤー。」(帰ってくるよ。)のような言いかたがおこなわれている。「ヤ」のよびかけは、感声的なひびきのつよいものである。「ヨ」にくらべると、訴えかたのおおはばなものが、ここに感得される。上のような「ヤ」に、よびかけことばの単純さ・純粹さが明らかである。

県下に、感嘆の「ヤ」と言うべきものもある。

○オットロシ ヤ。

やれおそろしや。

というのは、県下に広く聞かれるものである。「オトロシ」または「オットロシ」の文語形がつかわれている。特定のものである。内海島嶼では、

○ヤレ サブ ヤ。

やれさむや。

などの言いかたも、老年層によく聞かれる。老人が小さい子に向かって、「ヤレ オトロシ ヤ。」などとも言っている。これは、わざとおおげさに、おそろしがって見せるものである。いずれにしても、「ヤ」のむすびが、一種の古め

いた言いかたをかもしている。こういうばあい、表現は下品ではない。内海大三島などの言いかたには、「ヤレ ヤ。」(やれやれまあ!)というのものもある。くたびれた時などのひとりがたりである。

南予地方では、「オットロシ ヤ。」が、「まあ!」の感嘆表現であるばあいもすくなくない。

つぎに、願望の「ヤ」といってよいものがある。

○見タ ヤ。見タ ヤ。

といったような言いかたがおこなわれている。反復表現のばあいが多かろう。「見タ ヤア。」などの、特定の言いかたもおこなわれている。

県下の、いろいろの「ヤ」の用法の中に、古相のもの、あれこれと見いだされるのがおもしろい。古相のものは、だいたい下品ではない。古相ではなくても、用法の特定化しているばあいには、表現がさほど下品にはならないようである。

「ヤ」が「ヤイ」になってもいる。

※ ※ ※

当県下に、「ヤ」に関する複合形の文末詞が、種々おこなわれている。

最初にとりあげたいのは「ネヤ」である。これは、県下の広域によくおこなわれている。(ただし、伊予南端あるいは南方の、かなり広い部分には、「ネヤ」が聞かれず、内海島嶼の大三島などにも「ネヤ」が聞かれない。)今治市・松山市方面の「ネヤ」は、

○ソージャ ネヤ。

そうだねえ。

○アツイ ネヤ。

暑いねえ。

といったような調子である。大三島出身の私は、生徒時代の松山生活で、なかなかこの調子になじむことができなかった。「ノーヤ」は、お手のものなのであったが、「ネヤ」となると、さっぱりなじめなかった。

県下、南寄りの喜多郡地方にも、「ネヤ」がよくおこなわれており、

○アレワ ネヤ。

あれはねえ。

○スベテ ドーブツワ ネヤ。

すべて動物はねえ。

などと言われている。

「ネヤ」は、したいものどうしの間でなど、ごく気らくにつかわれるものである。男性どうしでの「ネヤ」は、ぞんざいにも聞こえる。こだわりのないもの言いをささえるのが、「ネヤ」であろう。「ネーヤ」という形のとられることはない。

「ネヤ」に関して一つ、注意すべきことがある。内海島嶼の岩城島などでは、「ネ」のおこなわれることは、ほとんどなくて、「ネヤ」がおこなわれている。今治市方面、あるいは広く東予地方にしても、同様である。「ナ」、あるいは「ノ」が常用されていて、かつ「ネヤ」がおこなわれている。

今治市近郊のばあいを言えば、「ノー」と「ネヤ」とがならびおこなわれてもおり、「ノー」のほうが、すこしよいことばで、「ネヤ」は、ややぞんざいなことばになっている。

松山市中心の中予弁にしても、「ネ」の言いかたはすくなくて、まずは、「ナ」が頻用されており、かつ、一方で、「ネヤ」がさかんである。以上のような「ネヤ」存立は、一種、特異なものともいうことができよう。「ネ」は、こういう複合形のもとで、温存されているのか。あるいは、こういう複合形のもとで、利用されているのか。——「ヤ」にしめくられれば、「よそことば」的な「ネ」も、ともかく、郷土弁のものとされるということなのか。「ネ」のよくおこなわれる東京語などには、「ネヤ」がない。

「ネヤ」について、「ノーヤ」の複合形が指摘される。「ノヤ」と言われることは、ほとんどなさそうである。なぜ、「ネヤ」には「ネーヤ」がなく、「ノーヤ」には「ノヤ」がないのだろうか。ともあれ、「ノーヤ」は、まったくおち

ついた、土地弁のすがたである。県下に、「ノーヤ」のおこなわれることは多くなく、主としては、これが、東予内におこなわれている。北部島嶼域は、「ノーヤ」の主域である。

○ソージャ ノーヤ。

そうだねえ。

は、伯方島の例である。

○オモシロカッタ ノーヤ。

おもしろかったねえ。

は、大三島での一例である。

つぎに、「ゾヤ」がおこなわれている。松山弁では、

○アレ ナン ゾヤ。

あれはなんだろう？（自問） （中女）

などと言われている。東予での例は、

○ココ ドコ ゾヤ。

ここはどこかな？（自問）

などである。「ゾヤ」は、自問のばあいにも、よく用いられるのか。北部島嶼の、

○オトサン ドコイ イッタ ンドヤ。

お父さんはどこへ行ったか。（子どもに問う。）

は、問いのばあいの「ゾヤ」である。松山弁での問いのばあいの一例は、

○ドコイ イキョン ゾヤ。

どこへ行っての？（中女→小男）

である。柳田征司氏は、これを、“子供に対する愛情をこめた表現である。”としていられる。

つぎに、当県下には、「カヤ」のおこなわれることがさかんである。

○モー ヒカン カヤ。

もう退職しないか。（すすめ）

は、中予での一例である。南予に、

○イケル カヤ。

○イケル カヤ。

やあ、いけないよ。(どうにもしようがないという気もち)

との慣用の言いかたがある。女性もこの言いかたをする。『全国方言資料』第5巻の「愛媛県北宇和郡津島町」の条には、

f ヨー タベルカヤー

とても 食べらるもんですか。

とある。「カヤ」のアクセントの言いかた、ないしは「カ」も「ヤ」も低く発音しおわる言いかたは、おもに中予南予におこなわれている。こういう「カヤ」は、問いやすすめや、つよい打消あるいは反駁などに用いられている。問いが、自問になることもある。北部島嶼では、問いの「カヤ」が、「カヤ」となりがちである。「ホンマ カヤ。」(ほんとうかい?) など。

「カヤ」の言いかたが、私どもの通俗のことばづかいの中で、しきりに用いられているのは、興味ぶかいことである。考えかたによっては、「カヤ」は、文語調ふうのものとも見られよう。それが、このように、方言内の俗用のものとなっている。

「カヤ」に類する「ケヤ」がある。松山弁その他では、

○ホー ケヤ。

そうかい。(肯定)

などと言っている。「ケヤ」は「カイヤ」からのものであるうか。じっさいには、「カヤ」に近くなっている。

○シラン ケヤ。

知らんのかい?

は、東予での問いの「ケヤ」である。中予で、つよい否定の「ケヤ」もおこなわれている。

「カイヤ」の言いかたもおこなわれている。

「ガヤ」の言いかたもある。説明の気もちをあらわすのに用いられ、また、指摘して問いかけるのにも用いられる。

○こう 物が 高うチャ ヤレン ガヤ。

こう物が高くてはやっていけないよ。

は、東予での一事例である。

つぎに、「テヤ」の言いかたがとりあげられる。北部島嶼で、

○ドヒテ アル テヤ。

なんであるものか！

などと言う。「テヤ」が、つよい反駁に用いられている。

「トイヤ」というものもある。

「ワイヤ」というものもある。東予方面では、「ネヤ」と「ゾ」と「ワイヤ」とが、おりあいよく共存し、あいともに、くだけた表現気分をかもすのに役だっている。中予では、

○マタ ナン下カ ナライ ヤ。

またなんとかなるよ(さ)。

○だれも 怒りゃ セナイ ヤ。

だれも怒りはしないよ。

など、自分の考えを述べる言いかたとして、「ナライ ヤ」「セナイ ヤ」などの言いかたがよくおこなわれている。「ナライ ヤ」は、「なる ワイヤ」からのものである。「セナイ ヤ」は、「せぬ ワイヤ」からのものである。

「ワヤ」も、ときに聞かれるか。私ที่ได้ている一例は、南予北城の喜多郡に属する青島の、つぎのものである。

○ソガイナ コト スルケンヤ ワヤ。

そんなことをするからだよ。

高知県

一般に、「ヤ」がよくおこなわれている。

命令表現に、「ヤ」がよく見られる。——「ヨ」と「ヤ」とが、ならびあらわれてもいる。命令表現に「ヤ」を用いたばあい、ことばづかいをやわらげることがすくなくない。したがって、命令表現が、「たのみ」や「すすめ」にもなる。

○マー アガリ ヤ。

まあ、お上がりよ。

○コッチャエ マワッテ ヤスミ ヤ。

こちらへまわっておやすみよ。

などの言いかたが、県下によくおこなわれている。このように、動詞連用形をそのままつかった「命令」の言いかたのばあいは、「ヤ」にむすばれたものが、当然、やわらかな命令表現になる。「オ行き ヤ。」などのように、「オ」をつけることはないのがふつうのようである。これ式の表現法のばあいは、「ヨ」のつかわれることはすくない。）

○ソー スナ ヤ。

そんなにするなよ。

は、県下西南辺での、禁止命令の一例である。このようなのは、むろん、低い品位の表現になる。「見レ ヤ。」といったようなばあいも、品位は低くなる。

おなじく西南辺での、

○アガッタ ヤ。

上がりなさいよ。

などというのがある。「上がれ」が「アガッタ！」の表現法になっており、その特異なものに、「ヤ」のむすびがきている。この種のものは、すすめ・あつらえの心情をあらわす特定の命令表現になっていると見られる。——「上がった！」の命令の言いかたと「ヤ」の用いかたとが、よく吻合している。くだけた気分でありながらも、おしつよくは言うまいとする、微妙な気もちがよくあらわされている。

要するに、広い範囲の命令表現では、「ヤ」文末詞が、よくおこなわれており、動詞命令形（禁止形も）を受ける「ヤ」、動詞連用形を受ける「ヤ」が、とりどりによくおこなわれている。さきの「アガッ<sup>タ</sup> ヤ。」のような言いかたは、だいたい、県西南部の幡多郡方面に見られがちのものか。『全国方言資料』第5巻の「高知県幡多郡大方町」の条には、

mゼヒ キテ クレタヤー  
 ぜひ 来て くださいよ。  
 mマー ソーモ ユーマイヤー  
 まあ そうも いてくれるなよ。

などの例が見える。

問いの「ヤ」がある。

「よ」とか、「さ」とか言いかえてみてもよいような「ヤ」がある。土居重俊氏の『土佐言葉』には、“高岡郡樽原村の二十台と三十台の男子の会話”の、「ナニサマ肥料が高イケニ、ドーモナラナーヤ。」

何分にも から どうにも手の出しようがないさ  
 という例が見える。私が、県下中央部の南岸で聞いた一例は、

○フネオ トメトカニヤー ヤー。  
を  
 船をとめとかなくっちゃよ。 (初老男→青男)

である。つよく言いかける気もちの「ヤ」である。

反抗をあらわす「ヤ」がある。

「受けひき」の気もちを表現する「ヤ」がある。

○ホニ ヤ。

ほんとにね。

などと言っている。男女ともこの言いかたをしており、一般に古い人が言いがちである。

※ ※ ※

本県下での「ヤ」に関する複合形の文末詞としては、「ネヤ」が第一にとり

あげられる。「ネヤ」が「ニャ」に近く聞こえることもあるか。)女性の説明には、“男性はよく「ネヤ」を言うけれど、女は言わぬ。娘さんなんか全然言わぬ”。などというのものもあるが、総じて、「ネヤ」は県下に隆盛である。うちとけた間からで、男性たちがこれを頻用していることは、明らかな事実である。土佐ことばの特色を言いまとめたものにも、

○ゲニ メッソー クダラン ネヤ。

ゲニ (ほんとに) メッソー (ひどく) クダラン (つまらない) ネヤ (ねえ)。

などというのがある。「ネヤ」は相手に言いかける気もちがつよく、かつ、相手の同意を求める気もちもつよい。「ネヤ」を目上につかうことはなく、したがって、これを「上品」な気分でつかうことはない。

「ネヤ」が「ゾネヤ」「ゼネヤ」というようにも言われている。

○モー ネツワ デンロ ゼネヤ。

もう熱は出ないだろうよねえ。

は、「ゼネヤ」の見える一例である。(土佐西南部のものである。)

つぎに、「ヨヤ」という、めずらしい複合形が認められる。五年生男子(高知市付近)の作文に、

ぼくが

「何年生」ときくと

「二年よや」

となまいきな言葉でいったので、はらが立った。

というのがある。土井八枝氏の『土佐の方言』には、

今起きようとしてゐるところさ。

今起きよーとしちよるところぢゃがね。(女)

……………ところよや。(男)

との記事が見える。「ヨヤ」は男性語か。

つぎに、「ゼヤ」がある。「ゼヤ」は「ゼヨ」とともに、土佐弁の特色を示す

ものであろう。土居重俊氏の『土佐言葉』には、“旧山奈村(中村市)”の、

フトイバカゼヤイン (大変な馬鹿だよ、ねえ)

などというのが見える。

「カヤ」がまたさかんにおこなわれている。「カヨ」もあるけれども、

「ガヤ」もある。

### 徳島県

命令の「ヤ」がよくおこなわれている。この地方では、

○ヒュー タケ ヤー。

火をたけよ。

など、単純命令の言いかたに「ヤ」のつくのがふつうである。

問いの「ヤ」もよくおこなわれている。

○カキノ ホイ ヤー。

垣のほうへね？(すてるのをたのまれて問いかえす。) (小男→

中女母)

は、南部山地での一例である。

さそいの「ヤ」があり、よびかけの「ヤ」があり、反発の「ヤ」がある。

感懐を言う「ヤ」がある。

○オットッシャ。

やれおそろしや！(「ヤ」が上につながっている。)

は、南部での一例であり、

○キサンジー ヤ。

気もちがいいな！(にくい相手が失敗した時など。すっとしたということ。)

は、北部での一例である。

県南部には、「ヤ」の「ヤン」も見いだされるか。沿岸地方には、

○カーチャン。ゼニ トレイ ヤン。

かあちゃん，ぜにをおくれよ。

などの言いかたがある。(ただし，土地の人には，「イヤン」をひとくぎりとする説明もある。「いやなのですか。」が添えられている。)

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には，「ネヤ」「ノーヤ」「カヤ」「カイヤ」「ガヤ」などがある。

「行かないか。」とさそう時は，

○イカン カネヤ。

などと言う。「ノーヤ」が比較的よくおこなわれているか。

#### 香川県

本県下にも，命令の「ヤ」，疑問の「ヤ」，よびかけの「ヤ」，感懐を言う「ヤ」などがおこなわれている。

○モチャゲイ ヤ。キタラ。

(竿を) 持ちあげろよ。(鮒が) 来たら。(小男間)

(命令形が「モチャゲイ」となっている。)

は，命令の「ヤ」の一例である。

○マー ウレッシュャー。

まあうれしい!

は，感懐を言う「ヤ」の一例である。

以上の状況は，本土部と島嶼部とを通じて見られるものである。

※ ※ ※

本県下の，「ヤ」に関する複合形の文末詞には，「ネヤ」「カヤ」「カイヤ」「ケヤ」「ガヤ」「ガイヤ」「ワイヤ」などがある。

「ケヤ」は，「そうかい。」の意で，「そう ケヤ。」「ほう ケヤ。」などと言

われている。この種の「ケヤ」が、つづいて伊予東部にも見られる。『小豆島方言』には、

アツチャ ソウケヤ ありやそうですか  
との記事が見える。

「ガイヤ」の言いかたは、おしつけて言うきみのもの、あるいは、つよく自分の気もちを表白しようとするものである。

## 六 近畿地方の「ヤ」ほか

### 兵庫県

県下に、「ヤ」がよくおこなわれている。原朗氏の「神戸と比較した播州高砂市方言の語法抄」(『兵庫方言』3)には、「ヤ」に関する、

終助詞のヤは男子なら神戸でも普通である。所が高砂市周辺では女子でも使う。但し男子はヤを低く言うが女子は高く言い。イントネーションに区別がある。

の記事が見える。

県下に、問いの「ヤ」がよくおこなわれている。播磨西部での一例は、

○ドガエ ヒタ ヤー。

どうしたんだ？

である。土地では、人が、この言いかたを、「ドガイ ヒタンジャ イヤー。」よりは、よい言いかただとしている。「…………… ～ジャ イヤー(ヤ。)」は播磨に、「…………… ～ダ イヤ。」は但馬に、よくおこなわれている。

○ドコイキ ヤー。

どこへ行くの？

などが、県東部でも、よくおこなわれているようである。——山本俊治氏は、「阪神間の方言」(『兵庫方言』2)で、この例をあげ、“ぞんざいな言いかたで

ある。”としていられる。氏は、“尼崎の浜ことばで、文末の「ヤ」が特長的にとらえられる。「浜のヤづくし」<sup>マ</sup>言われるほどである。”とも述べていられる。

問いの「ヤ」がつよまれば“なじりのいいかた”になる。清瀬良一氏は「神戸方言の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）で、

○ナンデ アサ ステズ ヤ。 （青女→青女姉）

の言いかたをあげ、“これはなじりのいいかたである。品はよくない。”と述べていられる。

命令の「ヤ」のおこなわれることが、またさかんである。（命令が、すすめやたのみの気分をふくむこともある。）

○コイ ヤー。

“おいで。”

は、淡路島での一例である。

○ムカシバナシュエー セー ヤー。

昔話をしろよ。

は、但馬での一例である。

○（スクーターに）ノシテ クレ ヤー。

は、神戸方言での一例である。（清瀬良一氏上記論文による。）なお、清瀬氏は、上記論文中で、

大阪地方では、「はよ行き ヨ。」ともいうが、「はよ行き ヤ。」ともいう。神戸地方では、このようには「ヤ」をもちいないようである。ただし、「はよ行きー ヤ。」とはいう。

との記述を示していられる。阪・神ともに、「オ行き」とは言っていない。和田実氏は、「兵庫県高砂市伊保町（旧 印南郡伊保村）」についての記述（『日本方言の記述的研究』所収）で、「ヤ」に関し、

命令文に：ハヨ来<sup>マ</sup>イヤ；ハヨ来<sup>キ</sup>ーヤ。

との記述をしていられる。

あらわな命令表現のばあいを除いてのところで、「よ」文末詞に相当する

「ヤ」もまたよくおこなわれている。淡路の「チャット ゴメン ヤ。」(ちよつとごめんよ。)などである。おなじく淡路例に、

○タノンマンョ ヤ。

たのみますよ。

○スキハラダレ ヤ。

すき腹だろうよ。(老女→大男)

などがある。おなじく淡路の、

○ソコニ ランダレ ヤー。

そこにあるだろう？

となると、これは、「そろばんを貸してください。」と言った人に対してなされた応答であった。——この「ヤー」は、「……あるだろうよ。」というのではなく、もっとつよいものであった。但馬でも「よ」相当の「ヤ」がよくつかわれている。北岸域での「……デショー ヤー。」(……デショー ヨ。)は、因幡地方の言いかたによくつながるものである。

「どうどうして ヤ。」など、たのむ気もちで、「よ」相当の「ヤ」が、よくおこなわれていよう。あらわな命令表現のばあいの「ヤ」もまた、「よ」と言いかえてよいものであることは、言うまでもない。

さそいの「ヤ」と言うべきものもある。この種のばあいには、「イコイヤ。」(行こうよ。)など、「イヤ」の形がとられがちであろう。

「ヤ」の「ヤイ」となったものも見いだされる。淡路では、

○チットマ カセー ヤイ。

すこしのあいだ貸せよ。

などと言っている。「ヤ」の「ヤイ」が明らかであろう。神戸方面にも「ヤイ」が見られる。

「ヤ」の「ヤン」があるのかどうか。「～ヤン カ。」の言いかたは、よくおこなわれており、これは「～ヤン。」ともなるようである。この「ヤン」を、「ヤ」文末詞の「ヤン」と混同してはならない。

## ※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形文末詞を見よう。

はじめに、但馬地方での「ナヤ」が指摘される。おもに老年層の人たちが、  
○アレモ ナカナカ、セケン フンドリマスデ ナヤ<sup>↑</sup>。

あの男もなかなか、世間をふんでますからねえ。(老男→初老男)  
などと言っている。淡路北部で、私は、老女の、

○ソソナ モン ナヤ。

そんなものをねえまあ。(家の人が私に飲みものを出してくれたの  
対して、そんなものをと謙遜する。) (老女→藤原)

というのを聞いてもいる。山内潤三氏は「赤穂方言の表現法」(兵庫県方言学  
会『播州赤穂方言の研究 語法編』昭和31年11月)で、

「ナイエ」「ナイヤ」——(ではないか)の意から軽く(だね)の意とし  
て使っている。前例の場合だと

「エー天気ナイヤ」(いゝ天気だね)

「エー天気ナイエ」(右に同じ) (ナイヤの方が普通に使う)

との記事を示していただける。ここの「ナイヤ」は、“ではないか”→“だね”の  
意のものとされているのにも明らかなおと、上の「ナヤ」に類する「ナイヤ」  
をとらえしめるものではない。

淡路などに「ニヤ」があるのかどうか。かつて私は、北淡出身の人から、

○コレヤ ニヤ。

“これですね。”(問い)

の言いかたを教示されたことがある。(p. 406)

「イヤ」という形態を見せるばあいも、県下に多い。「ナカント ハヨ イ  
ケ イヤ。」(泣かないで早くいけよ。)などの「イヤ」である。おそらくは、  
「行ケ」の言いかたがつよめられて、「イケイ」と発音されたであろう。しかし、  
「イ」音は、分立してきれいにひびく。それゆえ、今は、「イ」文末詞も認める  
ことができ、したがって、「イヤ」複合形文末詞も認めることができる。「イ

ヤ」形は、命令表現に、また疑問表現に、また報告表現に、また勧誘表現にあらわれている。

○ナニオ シトルダ イヤ。

何をしてるかね？

は、但馬北部での疑問表現のばあいであり、

○キョーワ オーソージオ ショー イヤ。

きょうは大そうじをしようよ。

は、但馬南部での勧誘表現のばあいである。「イヤ」のばあい、「ヤ」がよく、ものごとを相手に持ちかけようとする気分をあらわす。

「ゾイヤ」がある。これが「ドイヤ」ともなっている。問いの表現に用いられることが多く、「ドイヤ」ともなれば下品である。

つぎに、問いなどの表現での「カヤ」がある。

○ボチボチ ヤラン カヤー。

ぼつぼつおやりな。(労働中の人へのあいさつ)

これは、淡路島南部で聞いた、労働に関するあいさつことばである。

「カイヤ」が、全県下によくおこなわれている。問いのばあいがあり、受けひきのばあいがあり、反駁のばあい、その他がある。「カイヤー」が、「ケヤー」にもなっている。(これが、「キヤー」に近くもなっている。)[「カイヤイ」]というものもある。「ガイヤ」が、県下の東西に見られる。

「ノ(ン)ヤ」がある。

「トヤ」がある。「トイヤ」もある。「テヤ」も淡路などで聞かれる。

○イツニ ヤリャゲテ フネャ メンダ テヤ。

磯にやりあげて船はこわしてしまったということだ。(老男)

は、その一例である。

「ワイヤ」も見いだされる。『全国方言資料』第4巻の「兵庫県神崎郡神崎町粟賀」の条には、

mマー ムダニ ワシヤッテ ジェン ツカワヤヘンワイエヤ

まあ むだに わたしだって お金を 使いはしないよ。

とある。これには、「ワイエヤ」が見いだされる。

## 大阪府

府内全般に「ヤ」がよくおこなわれている。

ところで、佐藤虎男氏は「大阪府方言の研究(3)——泉南部岬町多奈川方言の文末詞(二)——」(『大阪教育大学 学大国文』第18号 昭和51年2月)で、

当方言では、「ヤ」文末詞の行なわれることは、きわめて少ない。

と述べていられる。

問いの「ヤ」が、およそ全般に、よくおこなわれている。

○ダレノ カバン ヤ。

だれのかばんなの? (女生徒間)

などの気がるな「ヤ」が、広く聞かれる。「ソレ ナン ヤ。」(それ何だ? それ何なの?)もまた、府下全般に通有のものであろう。大阪弁中心に、指定断定助動詞の「ヤ」のさかんなことは言うまでもない。他地域の「ダ」または「ジャ」が、当地方では、あざやかな「ヤ」である。「ジャ」からの「ヤ」成立には、ことによると、他方に、文末詞「ヤ」がしきりにおこなわれていることからのさしひびきもあったりはしなかったろうか。また、こういうことも考えられる。指定断定の助動詞「ヤ」が使用されるばあいにも、「ツーヤ。ツーヤ。」(そうだ。そうだ。)など、助動詞「ヤ」の言いかけに、なお、感声的文末詞「ヤ」のよびかけに共通する効果が、なにほどかは出ているかもしれない、と。

命令表現のばあいの「ヤ」がまた、よくおこなわれている。(すすめ・たのみにもなっている。)

○ソオーツット アケナハレ ヤ。

そおっとあけなさいよ。

は、敬態でのその一例である。府下の南部で経験したことであるが、

○ヒ<sup>ノ</sup>タ<sup>ノ</sup> ホーノ ミチ イキナハレ ヤ。

下のほうの道を行きなさいよ。 (老男→藤原)

などと、「ナハレ ヤ」がよくおこなわれており、これとともに、

○コ<sup>ド</sup>モ ミ<sup>ナ</sup>ハイ ナ。

子どもを見なさいよ。

など、「ナハイ ナ」の言いかたが、よくおこなわれている。「ナハレ」とあれば、「ヤ」のむすびになり、「ナハイ」となれば「ナ」のむすびになる点が注意された。「むすびことば」の出現のおもしろさが、ここに見られよう。(敬語法研究も、まさに、文末詞までを、つづけて観察しなければならないことである。敬意表現法体系上の注目すべき点が、ここにある。)

○シー ヤ。

しなさいよ。

○シ<sup>ト</sup>キ ヤー。

しておきなさいよ。

○コ<sup>ッ</sup>チ ム<sup>キ</sup> ヤ。

こっちへおむきよ。

など、動詞連用形の言いきりを受ける「ヤ」もまた、よく見られるものである。府下の一知友は、「掃き ヤ。」と「掃き ヨ。」とをならべ示して、“「ヤ」の冷たさ”“「ヨ」のあたたかさ”との解説をしてくれた。「待<sup>チ</sup> ヤ。」などと、年長の女性が、年少のものに言った時など、やさしさがあっても、念おしのつよさもあろう。敬語法助動詞「ヤス」の用いられるばあいには、「どうどうしヤッシャ。」など、「ヤ」文末詞の、上にむすびついたものが見られる。禁止のばあいは、「……ヤスナ ヤ。」である。

命令表現の「ヤ」のばあいのほかで、「よ」という文末詞に相当すると見うるものが、つぎのようにおこなわれている。

クラヤ 例 学校へいてくらや(来ますよ)

これは、南要氏の『和泉郷荘村方言』に見られるものである。竹内徹氏責任編集の『和泉方言の研究』（大阪府立佐野高等学校国語研究室 昭和24年12月）に見える例は、

シヌヒトモアルン ウマレルモノモアルンヤシヤ（死ぬ人もあるし生まれる者もあるのだ。）

である。

「ヤ」と言っ、さそいになることもある。

「貸して ヤ。」（貸してよ。）「どうどうしといて ヤ。」など、「動詞連用形＋て」を受ける「ヤ」もまた、「よ」と言いかえてみることができる。もっとも、この種のもののばあい、全体を、命令表現の一種とも見ることができる。——依頼表現とも言うべきか。ともあれ、この種の「ヤ」の用法も、府下にさかんである。（近畿弁の一特色をなすものとしてよかるうか。）

前掲の『和泉方言の研究』には、

「オイヤァ、オイヤァ」（そうだ。そうだ）

という、応答表現での「ヤー」も見える。

「ヤ」が、「ヤイ」の形をとることもある。和泉地方に「どうどうしてくれヤイ。」など、命令表現での「ヤイ」が、よくおこなわれているらしい。

摂津北部などに、「ヤン」もあるのか。山本俊治氏は、「大阪方言における文末助詞（池田市のことばを中心として）」（『方言研究年報』第一巻）で、

○シラン ヤン。

しらないわよ。（女学生同志）

などの例をあげられ、「ヤン」は、わかい世代のおんなのことばである。」としてられる。

※ ※ ※

大阪府下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ナヤ」「エヤ」「カイヤ」「ケヤ」「ワイヤ」などがある。『全国方言資料』第4巻の「大阪府大阪市」の条に見える、

mソーデンナヤ      ウチワ      イツモ      (fン)      アノ      ホンマチバシカラ  
 そうなんですよ。      わたしは      いつも                本町橋から  
 フネニ      ノッテネ  
 船に      乗ってね。

での「ナヤ」は、ここにとりあげてよいものなのであろうか。

### 和歌山県

本県下についての、私の今日までの観察結果では、動詞命令形を受ける、単純な命令表現の「ヤ」の例が、あまり得られていない。新宮市で聞いた、

○ノマサセマセヤ。

飲まなさい。

では、助動詞命令形の下に「ヤ」がきている。『和歌山県方言』には、

キタアヤ      来なさい

イカマヤ      行きなさい

という命令表現が見られる。(ともに東牟婁郡のものである。)

問いの「ヤ」が見られる。『和歌山県方言』には、

ナンスリヤ      何するのですか

というのが見える。(那賀郡のものである。)『南紀土俗資料』にも、

鱈はどうですりや

というのが見える。「リヤ」とあるのは、「リャ」であろうか。「リャ」の問いことばの中には、「ヤ」があるのだろうかどうだろうか。私が、南岸の串本町で聞いたものには、

○ソガイニ      ヨーケ      キタラ      アツイヤロ      ヤー。

そんなにたくさん着たら暑いだろう？

というのがあ。——問いとはいいながら、これは推想の問いであろう。似たような例には、

○ソガ<sup>ニ</sup> ヨーケ キタラ アツイン<sup>ド</sup> ヤ。

そんなにたくさん着たら暑いだろ？

○ダーレ<sup>モ</sup> ナカッタジャロ ヤー。

だれもいなかったらう？

などがある。『和歌山県方言』には、伊都郡の、

ンツテルヤア 知つてるでせう

というのが見える。串本町で聞いた、

○オモタイン<sup>デ</sup> ヤ。

おもたいんだらう？ きっと。

は、「ヤ」でたずねてはいるが、推想のおもむきがつよい。いずれにもせよ、「…………ド ヤ。」「…………デ ヤ。」などとあると、「ヤ」のよびかけ性能が、くっきりとするようである。（訴えの効果が明瞭だとも言えよう。）

反駁の「ヤ」がある。『和歌山県方言』の例は、

ナツタアリヤ 何ともあるものか

である。南紀で私が聞き得た一例は、

○アラ<sup>イ</sup>デ ヤ。

あるとも！

である。

依頼・願望の「ヤ」がある。「どうどうして ヤ(ヤー)。」の「ヤ」である。

○ヨン<sup>デ</sup> ヤ。

○ヨン<sup>デ</sup> ヤー。

読んでよ。（読んでちょうだい。）

は、私が串本で聞いたものである。

命令表現関係のものではなくて、「よ」と言いかえられるものがある。『全国方言資料』第4巻の「和歌山県東牟婁郡古座町」の条には、

mナ<sup>ン</sup>ヤ ヨノ ツナー アマリー タグッタアンノ オッキヤヤ コ  
 なんだ、 この 綱は。 あまり たぐってあるのが 大きいぜ、 こ

リャー

れは。

というのが見える。

よびかけや感嘆の「ヤ」がある。『和歌山県方言』には、

エレヤア あれエ

オツテヤ おゝさうだ

などの言いかたが出ており、『和歌山方言集』には、

アレヤー 間 何といふぎまだ。(驚き呆れたる時に用ふ)

との言いかたが出ている。

○コレヤ。イネハマ ヤ。ワキヤ フーシ。

これさ。わえさんよ。私はね。

は、新宮市域で聞き得た、よびかけの「ヤ」の見える例である。

県下の南北で、「ヤ」が「ヤイ」にもなっている。

○エイイエ。アジャ ジャ セン ヤイ。

いえ。わしはしやしないよ。(多少反抗的な気もち)

は、南部での一例である。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞を見る。

「ナヤ」が、かなりよくおこなわれているか。「ナイヤ」もある。

「ノヤ」も見られる。私が、西牟婁郡奥を調査した時は、土地の人の、“女が「アヤ」を言う。”“女の人で、ちょっと上品に言うると「アヤ」と言う。”との説明もあった。——男性は「アラ」を言う、というわけか。ところで、老男からも、私は、

○スル コトガ ハヤイ アヤ。

することが早いねえ。

などを聞いた。県下に、「ノヤ」「ノーヤ」も、かなりよくおこなわれているようである。「ノーラヤ」というものもある。

南紀の東牟婁郡には、「ネヤ」がよくおこなわれている。（「ネーヤ」ともある。）この状況は、東の三重県南牟婁郡にもつづく。「アノ ネヤ。」「何々はネヤ。」など、南紀に「ネヤ」がかなりよくおこなわれているのは、注目にあたいます。阪神方面では、ふつう、「ネヤ」が言われていないであろう。近畿地方の、いわば中心域には、「ネヤ」がなくて、そこからへだたった所に、「ネヤ」が存立している。「ナ」文末詞の頻用される近畿の、いわば、中心部を距った所に、「ネヤ」が見られるのは、興味ぶかいことである。考えてみると、四国も、伊予土佐その他、広い範囲に、「ネヤ」が存立している。近畿的なものを共有する四国であって、しかも、近畿中心部からはなれた所に、やはり、「ネヤ」がさかんなのは、おもしろいことである。「ネヤ」の存立ひとつも、私どもに、いろいろな問題をなげかけてくれるようである。

「ヨヤ」という複合形もある。

「カヤ」（「カイヤ」も）「ガヤ」がおこなわれている。

『和歌山県方言』には、

エエワラヤ 勝手にせよ

というのが見える。（日高郡のものである。）「ワラヤ」複合形がとりたてられようか。「ワ」は「いい ワ。」などという「ワ」で、つぎに「ラ」文末詞がきて、「ヤ」文末詞がきている。

### 三重県

三重県下に、「ヤ」のおこなわれることがまたさかんである。他県地方でと同様、ここでもまた、その表現品位は、高いものではない。

問いの「ヤ」が、よくおこなわれている。

○ホントヤ。

ほんとかね。

は、伊勢市で聞いたものである。「ソレ ナン ヤ。」（それはなんだ？）

(それ何?)のおこなわれることは全域的であろう。

命令(ないしはたのみ)の「ヤ」が、よくおこなわれている。

○チカイ ハイリマセ ヤ。

中へおはいり下さいよ。(初老男)〔福江〕

は、佐藤虎男氏の「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一卷)に見えるものである。

○マタ オイデ ヤ。

またおいでね。(小学生三男→藤原)

(「おいで」形は、「おいでなさい」命令形に近いものと見られる。)

などの言いかたは、県下に、よくおこなわれていよう。常態のただの命令、「行ケ ヤ。」などの言いかたも、むろんよくおこなわれている。

○マッテー ヤ。

まってよお。

のような、動詞命令形のこない、依頼表現での「ヤ」もまた、おこなわれることのいちじるしいものである。伊賀で聞いた、

○ハヨ カエッテッテー ヤー。

早く帰ってきてちょうだいね。

は、人を送り出す時の、一つの慣用的な言いかたである。——「ヤ」を「よ」の意と見てもよい。

単純に「よ」と言いかえられてもよさそうなものが、いろいろに見られる。佐藤虎男氏の上掲論文に見える、

○イマン ガクセーガ ヤー。

今さっき学生がねえ。(中女→同)〔安乗〕

は、「学生がよお」ととってもよいのではなからうか。——けっきょくは、「ねえ」にもなるうが。佐藤氏の同論文には、

○アリャ。オリャ ネー ヤ。

ありゃ? おれのがないや。(小男→同)〔篠島〕

というの見える。山下喜善氏の「桃取方言集——言語生活指導の上から——」(『三重県方言』第5号)には、

おおきんやあ ありがとう

というの見える。伊賀での一例、

○モー ハナオ キレタ ヤー。

もうはなおが切れたよ。(来客中女→店老女)

にも、「ヤ」の自由な使用ぶりが見られる。

つぎに、動詞の志向形(未来形)をつかって言う、さそいの「ヤ」がある。

○ハヨ イコ ヤー。

早く行こうよ。

は、伊勢南部での一例である。

人の名をつかっての、単純よびかけの「ヤ」もある。「ヒロミ ヤー。」(ひろみや。)のようなものである。

「ええ？」と聞きかえす言いかた「ヤ<sup>↑</sup>ー。」というのもある。

「うれし ヤ。」などの、感嘆の言いかたもおこなわれている。佐藤氏論文に見える実例は、

○ウレッシ ヤ。

やあ、うれしい! (小女→同)〔尾鷲〕

である。

県下に、「ヤ」の変形「ヤイ」が、かなりよくおこなわれている。志摩半島東岸で聞いた例には、

○サンベ ヤイ。

というのがある。これは、三吉という人へのよびかけのことばである。よびかけでの「ヤイ」、あるいはさそいの「ヤイ」などが、志摩地方には、よくおこなわれているようである。

○ハヨ コラン ヤーイ。

“早く来なさい。”

は、紀州長島弁での一例である。“目上の人に対して言う時だけ、「ヤイ」をつかう。”という。（「コラン」は「コランツ」か。）山口幸洋氏の「尾鷲方言の談話資料分析」（『三重県方言』第24号）には、

アンタ「モ」ユータレ「ーヤ」イ、

というのが見える。伊勢の北部にも伊賀にも、「ヤイ」がある。

「ヤ」の「ヤン」となったものもあるか。県下紀州の西辺で聞いたものには、

○バーチャン フク キヤシテ クレ ヤン。

ばあちゃん服を着せておくれよ。

がある。「ヤー」とむすぶのがふつうであるという。人が「ヤン」に「ヤー」を対置させているのは、「ヤン」が「ヤ」相当のものであることを示すものであろう。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ネヤ」がある。

○ツヤ ネヤ。

そうだね。

などと言っている。（伊賀例）県下の紀州には、和歌山県下からのつづきで、「ネヤ」が、そうとうにさかんである。

○メカケノ アネジャ ユータ ネヤ。

めかけの姉だと言ったねえ。

は、県下紀州西辺での一例である。（ここで、人は、“よく「ネヤ」を言う。女も「ネヤ」をよく言う。”などと言っている。）伊勢内にも、南北に「ネヤ」が見られるようである。

近畿・四国とも、「ナ」文末詞のいちじるしい領域に、「ネ」はあまりおこなわれなくて、「ネヤ」が見えるのは、興味ぶかいことである。

志摩の東岸では、かつて、「ネーヤイ」というのを、私は聞いている。「サ  
ムイ ヒヤ ネーヤイ。」（さむい日だねえ。）など。（“ひとりごとは「ネ」でとめる。「ヤイ」は、つれに向かって言……ともあった。）

県下に、「ノーヤ」「ノイヤ」もあるらしい。志摩東岸では、つぎのように、「ノーヤイ」が聞かれる。

○テンパ サ<sup>マ</sup>イ <sup>ヒ</sup>ヤ <sup>ア</sup>ーヤイ。

ひどくさむい日だねえ。

(「ヤナー」の言いかたも、県下に見える。)

「ゼヤ」という複合形がある。倉田正邦氏の「桑名武家 ことば 語彙」(『三重県方言』第2号)には、

イケンゼヤ 駄目だぞ、イケンゼともいう。

日常に使われる言葉には多い。

などの記事が見える。

県下に、「ゾヤ」もあるらしい。

「カヤ」(「カヤイ」も)「カイヤ」がある。「ガヤ」「ガイヤ」がある。

○ネ<sup>下</sup>ンジャ ガヤ。

ねてるんだよ。

は、紀州での「ガヤ」の一例である。

「テヤ」もおこなわれている。『三重県方言資料集 志摩篇』には、

みよてや 見なさい(和)

そーやてや そうですよ(国・船)

などが見える。

「ワヤ」などもあるらしい。

## 奈良県

「ヤ」のおこなわれることがさかんである。

問いの「ヤ」がある。「ソレ <sup>チ</sup>ン ヤ。」(それなんだ? それなあに?)  
などは、県下に広くおこなわれていよう。——「ヤ」が、指定断定の助動詞と見られるかもしれないが、現状では、ものが、まさに文末詞然としていよう。

○フートー ヤ。

封筒をね?

は、吉野郡下で私が聞いた、問いかえしの「ヤ」である。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条には、

*m*オー ベントーワ ドガイシテ クレトリヤー  
ああ、弁当は どうして くているんだ。

というのが見える。県北にも、問いの「ヤ」がある。

命令の「ヤ」が、よくおこなわれている。「マ オイデ ヤー。」(またおいでよ。)などは、一般的なものであろう。——女性に多い言いかたか。上例は、命令とはいいながら、ていねいな言いかたである。「早ウ 行キ ヤー。」など、動詞連用形の言いかたを受けてむすぶ「ヤ」が、またよくおこなわれている。「行キナ ヤ。」は、禁止命令である。もとより、

○ハヨ シマエ ヤー。

早くおしまいにせよな。

など、単純命令のばあいにも、「ヤ」がよく出ている。前記「奈良県吉野郡十津川村小原」の条の、

*m*オカユ タートイテ クレリヤ  
おかゆを にておいて くれよ。

の「クレリヤ」は、どういう言いかたなのであろうか。

依頼の言いかたがある。

○スエチャン エー。モット ワカシトイテ ヤ。

すえちゃんよ。もっとお湯をわかしていてね。

のような言いかたが、一般的であらう。

「よ」と言いかえてもよい「ヤ」がある。吉野郡東部で私が聞いたものには、

○ムリジャ ヤー。

むりだよ。

との言いかたがある。

「ヤ」の変形と見られる「ヤイ」がある。『中和郷土資料』には、

クレヤイ 下サイ

と見える。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ネヤ」が、じつにさかんである。吉野郡東部域では、ことに、「ネヤ」がよくおこなわれているようである。かつて、十津川の人には、私に、北山すじでは、「ネヤ。アノ ネヤ。」などの言いかたがよくおこなわれていると語ってくれた。上北山・下北山の地方に、「ネヤ」がよくおこなわれている。北山から北上した所の川上村で、私が聞いた「ネヤ」例は、

○オッサン、ソヤケド マニアウ ンカネヤ。

おじさん、だけどまにあうのかねえ。

などである。「ネヤ」は、吉野郡の外にも見いだされるようである。県東北の宇陀郡下にも「ネヤ」がある。西宮一民氏は、「奈良県方言の待遇表現について」(『国語学』36)の中で、

奈良県方言	中間部	}	$\begin{pmatrix} \text{(ナ-敬)} \\ \text{(ニヤ親)} \\ \text{(ナ-敬)} \\ \text{(ネヤ親)} \end{pmatrix}$
-------	-----	---	--

としるしてられる。——「ネヤ」とともに「ニヤ」もあるのか。

「ネ」のふつうにおこなわれることはなくて、「ネヤ」はふつうにおこなわれているのは、注目すべきことである。「ネ」が「ヤ」とむすびあわされたものは、独特の語感のものとして、近畿の人たちにも、よく受けいれられているということなのか。(吉野郡下の「ネヤ」は、「ニヤ」とあい近い性質のものなのかもしれない。私が、川上村で聞いた「コリヤ ツマラン ネヤ。」のカードには、土地の識者が、——「ネヤ」のところへ、“「ニヤ」なるべし。”と注記してられる。)

「フーヤ」もある。

「カヤ」がよくおこなわれている。その、問いになることは言うまでもないとして、ほかに、『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条には、

f ケッコーナ アリガター モンジャカヤ  
結構な ありがたい ものですねえ。

f アリヤー クローントルワカヤ  
それは 苦勞していますよ。

などの言いかたが見える。

「カイヤ」があり、「ケヤ」もある。

○十八年に ナル ケヤー。

十八年になるかい。(受けひきことば)

などと言っている。

「ガヤ」「ガイヤ」もある。

○ナロタ ガイヤー。

習ったよ。

は、吉野郡下での「ガイヤ」例である。

## 京都府

全般に、「ヤ」がさかんである。

問いの「ヤ」が、よくおこなわれている。

○ボクモ ヤー。

ぼくもね? (男児→先生)

これは、丹後半島で聞いた一例である。一年生の男子も、先生に、「ニキヤー  
シタラ ナン スル ヤ。」(二回したら、つぎは何をするの?)と、たずねて  
いた。「ヤ」の問いかけは、かならずしも、品等の低いものになるのではない

らしい。地ことばの「ヤ」の習慣というものが、そこにあるのだろう。京都市方面での一例は、

○シンプ<sup>ア</sup> ソッチニ ナイ ヤ。

新聞はそちらにないか？

である。

つぎに、命令の「ヤ」が注意される。「ヨイ<sup>↑</sup>ヤ。」(来いよ。)などのばあいはもとよりとして、「どうどうしトクナハレ<sup>↑</sup>ヤ。」などの、ていねいな言いかたが、よくおこなわれている。また、「オ聞キ<sup>↑</sup>ヤ。」(お聞きなさい。)のような言いかたも、よくなされている。

○ゴメンヤッ<sup>↑</sup>ジャ。

ごめんなさいね。

○オアガリヤシテ<sup>↑</sup> オクレヤッ<sup>↑</sup>ジャ。

お上がりになってくださいね。

などの「……………～ヤス ヤ。」の言いかたは、いわゆる京都弁での特異なものであろう。

「どうどうシテ ヤ。」の、依頼の言いかたも、府下にある。さそいの言いかたもある。

丹後で聞いたことば、「……………デショー<sup>ア</sup> ヤー。」(……………でしょうよ。)の言いかたは、山陰がわの、西の地方の言いかたに通うものであろうか。丹後半島中部での例、

○モ<sup>ア</sup>ス<sup>ゴ</sup>イ エラカッタ イヤ。

ものすごくえらかったよ。

というもある。

単純なよびかけの「ヤ」や感嘆の「ヤ」もある。

「ヤ」の変形「ヤイ」もおこなわれている。「それは何だ？ それなあに？」にあたる、「…………… ナン ヤイ。」がある。

※ ※ ※

府下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ナーヤ」「ノイヤ」「イヤ」「ド  
イヤ」が丹後にある。

○オートル ドイヤー。

合っているのによお!

は、「ドイヤ」の一例である。

「カイヤ」が、やはり、丹後方面によくおこなわれている。

「ンヤ」は、府下に広くおこなわれていよう。

丹後に「トヤ」「ダーヤ」などもある。

○オテライ キトイデル トヤー。

お寺へ来ていられるそうだよ。

は、「トヤ」の一例である。

「ワヤ」「ワイヤ」は、丹後その他におこなわれていよう。

#### 滋賀県

「ヤ」がよくおこなわれている。

問いの「ヤ」が、よく見られる。

○ドコイッキヤ。

○ドコイキ ヤ。

「どこ行き」か?

は、湖西での例である。

命令の「ヤ」が、よくおこなわれている。

○アッチ イケ ヤ。

あっちへ行けよ。

○アガレー ヤ。

上がれよ。

などと言っている。

たのみ・依頼の「ヤ」もある。彦根ことばでは、

○コー シテ タモ ヤノ。

こうしてくださいよねえ。 (古老女)

などの言いかたがなされている。

さそいの「ヤ」もある。

単純に「よ」と言いかえてよいような「ヤ」もある。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県高島郡朽木村」の条には、

*m*アケノヒニ ミリャ オンナ コッチャケンドヤー  
翌日 見れば 同じ ことだけれどね。

というのが見える。

「ヤ」の「ヤイ」となったものも見られる。「ここへ 来い ヤイ。」など。

「ヤン」もあるのか。前記の「滋賀県高島郡朽木村」の条には、

*m*ソソデ カナワンヤン

それで かなわないよ。

とある。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ネヤ」があり、「ニヤ」も湖東<sup>注</sup>にあり、「イヤ」があり、「カヤ」「カイヤ」があり、「ワヤ」「ワイヤ」がある。

「ダヤ」もある。前記の「滋賀県高島郡朽木村」の条には、

*f*ゴツイ ザイモク ダシター カキ シトッタッタダヤ  
大きい 材木を 出して 垣を していましたよ。

というのも見いだされる。

注 佐藤虎男氏は「滋賀県東辺東浅井郡吉槻部落とその周辺」(『国文学叢』第十七号)で、

モー「ニヤ」(文末部) ユワントコニヤ。オレ(君)。 (老男による)  
〔吉槻〕

との例文をあげていられる。

近畿地方に関しては、「それ なん や(やい)?」の言いかたを、あらためて問題にする必要があるだろうか。「や」は、一般的には、指定断定の助動詞としうるものである。「それ なん や?」などのばあいにも、「や」は、助動詞ではないかとうたがわれもする。近畿地方の記述のさい、私は、この点についての疑問を、兵庫県出身の清瀬良一氏にただした。清瀬氏は、「それ…なん や?」の「や」は文末詞だと、直下に答えられた。“文末詞と考えたのがすなおである。”とも言われ、「それ なん や?」の「や」に、今は、助動詞の観念はない。”とも言われた。

いま言う「や」が、もともと、指定断定の助動詞であったとしても、現用の、上来、とりたててきたような「ヤ(ヤイ)(ヤン)」は、もはや文末詞化していると見ることができるのではないか。

## 七 中部地方の「ヤ」ほか

この地方もまた、「ヤ」のよくおこなわれる所である。

### 福井県

若狭・越前の全体に、「ヤ」がよくおこなわれている。

命令の「ヤ」が、さかんにおこなわれている。ぞんざいに言いはなす「ヤ」から、「オイデ ヤー(おいでよ。)」などの類にいたるまで、「ヤ」の用いられかたに、はばひろいものがある。

問いの「ヤ」がおこなわれている。

m オクエ ゴン<sup>2)</sup>シタヤ

1) 「谷の奥」の意。

奥<sup>1)</sup>へ いらっしゃったのですか。

2) 「ゴンス」は「来る」の敬語。

は、『全国方言資料』第3巻の「福井県遠敷郡名田庄村納田終」の条に見える

ものである。

「何々だよ。」と告げる「ヤ」がある。

○アカンクン ヤー。

“だめだと言うんだよ。”

は、越前中部での一例である。なお、私は、福井市で、初老の男子が女兒に、  
「いいかい？ こうするんだよお。」との気もちで、

○……………ヤー。

いいかい？ こうするんだよ。よお。

と、言いかけているのを聞いたことがある。ここには、独立のセンテンス「ヤ  
ー。」が出ているが、今はこれに、「ヤ」の「よ」的なものが明らかである。

○モヒトツ ワルイ ヤ。

(泊という所は) もういちだんことばがわるいよ。

は、若狭中部での一例である。

さそいの「ヤ」がある。よびかけの「ヤ」がある。

「ヤ」が、「ヤイ」ともなっている。

○ハヨ セー ヤイ。

早くしろよ。

は、若狭中部での一例である。(この地方に、「何ヤイヤ。」などの言いかたもある。さて、「何ヤイ」の「ヤイ」は何であろうか。最後の「ヤ」が明らかかな文末詞であるのからすると、その上に重なる「ヤイ」は、「何」を受けての助動詞かのようにも思われる。土地の永江秀雄氏に、同様のお考えがある。)

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ネヤ」がある。——若狭によくおこなわれていようか。「ネーヤ」ともある。(若狭に、「ネヤ」の「ニヤ」となったものもある。)

若狭に、「ノヤ」もある。

越前に、「ヨヤ」がある。

若狭・越前に、「イヤ」がある。

○モツト ノンデ グレ イヤ。

もっと飲んでくれよ。

は、若狭の「イヤ」例である。

○ナニ アルジャ イヤー。

何があるんだ。

は、越前西岸の「イヤ」例である。

問いなどの「カヤ」が、県下に広くおこなわれている。「カイヤ」も広くおこなわれている。「カイヤ」の変じた「ケヤ」もある。

○ドクショナ モンジャ ネー ケヤ。

毒性なものではないのかい？

は、越前東部での「ケヤ」例である。

「ガヤ」「ガイヤ」もある。

「テヤ」「ワヤ」などもある。

○キタ ワヤー。

来たよお。(敦賀行きの列車がはいってきたことを言う。) (高校  
生男間)

は、若狭小浜駅で聞いたものである。

## 石川県

本県下にも、「ヤ」のおこなわれることがさかんである。

まず、命令の「ヤ」がある。ぞんざいな命令の言いかたに、「ヤ」がよく用いられている。とともに、一方では、能登の、

○チャット イッテ ゴザエーシ ヤ。

さっさと行っておいでよ。

のように、中等品位のすすめの言いかたにも、「ヤ」が用いられている。

たのみの「ヤ」もある。

問いの「ヤ」もある。

「よ」と言いかえてよい「ヤ」もある。

○オーゼ オッタ ヤー。

おおぜいおったよ。

は、加賀での一例である。

○オヤ, イトシゲナエイ ヤー。

“おや、いとじげないこった。”

は、能登での一例である。

よびかけの「ヤ」もあり、感嘆の「ヤ」もある。

「ヤ」に該当する「ヤイ」もある。能登半島輪島で聞いたことには、

○クエイ ヤイ。

たべろよ。

というのがある。半島西北部の人に聞いた実例には、

○サトイ ヤイ。

佐藤よ。(佐藤という人によびかけることば)

というのがある。「クエ」の言いかたが、しぜんに、「クエイ」になっている。

——「イ」音ができており、それとともに「ヤイ」の形が成りたっている。また、「サト」の言いかたが、しぜんに「サトイ」になっており、それとともに、「ヤイ」の言いかたが成りたっている。これらの事例に徴するのに、「ヤイ」は、「ヤー」からしぜんに派生したものかと察せられる。能登に「ヤイ」のおこなわれることが多く、

○アリガト ヤイ。 オーキニ ヤイ。

ありがとうよ。おおきによ。

などとも言われている。加賀にも、「ヤイ」がおこなわれている。『石川県方言彙集』には、

いってこやい

などとある。なお、同書では、助詞の「ヤノ部」に、「ヤー」と「やい」とがとりあげられている。

能登には、「ヤ」に該当する「ヤン」もあるのが、『全国方言資料』第8巻の「石川県輪島市海士町」の条には、

*m*ソッデ <sup>2)</sup>コンダー マダ アトガ ナンニャロガヤン

それで 今度は また あとが 何だろうね。

2) 「コ」の「K」はヤや有声化している。

などに見える。同巻の他地の例にも、問題視しうる「ヤン」が見える。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナヤ」「ネヤ」「イヤ」「ゾヤ」などがある。「ネヤ」が、このほう（ことに能登）にもまた、よくおこなわれている。愛宕八郎康隆氏は、能登島で、「ネヤ」が「ネ」よりも品位が低いことを見ていられる。

○ソリャ チゴーゾヤ。

それはちがうよ。

は、能登の「ゾヤ」例であり、

○アレニャ ビックリシタ ゾヤ。

あれにはびっくりしたよ。(川ねずみにかまれた話し) (中男間)

は、加賀での「ゾヤ」例である。

「カヤ」「カヤン」も「カイヤ」「カエヤ」もよくおこなわれている。「ケヤ」もある。

「カトヤ」もある。

「ガ(ガ)ヤ」「ガ(ガ)イヤ」もよくおこなわれている。これらのばあい、総体に、品位度の低い表現ができていよう。「ガ(ガ)」の音感の作用があるろうか。

「テヤ」があり、「ワイヤ」「ワヤ」があり、「モンヤ」もある。

## 富山県

本県下にも「ヤ」がよくおこなわれている。

命令の「ヤ」は、

○カ<sup>ン</sup>ニ<sup>ン</sup> セ ヤー。

ごめんな。

○ヤスマ<sup>レ</sup> ヤ。

おやすみなさい。(晩のあいさつ)

などである。命令とはいいいながら、後者例のように、敬語法がとられると、命令も、ていねいな勸奨となる。

さそいの「ヤ」は、

○オ<sup>ッ</sup>カ<sup>ン</sup>チャ<sup>ン</sup>, ハヨ ゴ<sup>ハ</sup>ン<sup>オ</sup> タベ<sup>ヨ</sup> ヤ。

お母ちゃん, 早くごはんをたべようよ。

などである。

問いの「ヤ」は、

○ヤー。

(問いかえしの返事)

などである。

単純に、「よ」と言いかえることのできるものは、

fア<sup>レ</sup>ー ヨカ<sup>ッ</sup>タヤ

あれ, よかったよ。

などである。(『全国方言資料』第3巻「富山県下新川郡入善町小摺戸」)もの売りの人に対する老女の返事,

○ア<sup>レ</sup> キ<sup>ョ</sup>ー ヨカ<sup>ッ</sup>タ ヤ。

あれ, きょうはよかったよ。

というのも、「ヤ」が「よ」にあたっていようか。

よびかけの「ヤ」は、

○オ<sup>バー</sup>チャン。オ<sup>バー</sup>チャン ヤー。

おばあちゃん。おばあちゃんよお。(隣室からよびかける。) などである。

感嘆の「ヤ」もある。

本県下に、「ヤ」の「ヤイ」もある。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ノイヤ」があり、「ネヤ」がある。

○ウナヅケ 行って <sup>ネ</sup>ヤ。ハス ワタッテ <sup>ネ</sup>ヤ。

宇奈月へ行ってねえ。橋を渡ってねえ。

は、県東部での「ネヤ」例である。

「ゾヤ」もある。県南隅では、

○タノム ゾヤ。

たのむよ。

などと言っている。(—これは、友人間でのものであった。)

「カヤ」があり、「カイヤ」があり、「ケヤ」がある。

○ハー <sup>ケ</sup>ソーデス ケヤ。

はあ、そうですかい。(受けひき) (老女→中女)

は、富山市近郊の「ケヤ」例である。

「ガ(ガ)ヤ」がよくおこなわれる。

○カラ ムイテ <sup>ダ</sup>シャ エー <sup>ガ</sup>ヤ。

皮をむいて出せばいいんだよ。

は、県北での一例であり、

○マタ ココイ カエッテ <sup>ゴ</sup>ザッタ <sup>ガ</sup>ヤ。

またここへ帰っていらしたんだよ。

は、県南での一例である。「エー <sup>ガ(ガ)</sup>ヤ。」の言いかたは、県下によくおこなわれていよう。

「テヤ」などもおこなわれている。

## 新潟県

本県下にも、「ヤ」がよくおこなわれている。命令の「ヤ」があり、さそいの「ヤ」があり、問いの「ヤ」がある。

○イカ<sup>ン</sup>シ ヤー。

行きなさいよ。

は、佐渡での、ていねいな命令（すなわち勸奨）の「ヤ」の例である。

○コレ クレレ ヤ。

これをくれろよ。

は、長岡市方面での、通常命令の「ヤ」の一例である。（——命令とは言っても、動詞「クレル」が用いられているので、現実には、これはたのみになっている。）

○トーチャ ドコイ イッタ ヤー。

父ちゃんはどこへ行ったか。（大男→小男）

は、県西南辺での、問いの「ヤ」の一例である。これは、おとなが子どもに、すこしもつくりわなないで、いわばぞんざいに、しかもある程度のやわらかさをもってたずねているものである。

本県下に、単純に「よ」と言いかえてよさそうな「ヤ」の用法がさかんである。

まず、佐渡にこれがいちじるしく、

○マ<sup>ワ</sup>シテ ノムン<sup>↑</sup>ジャ ヤ。

かきまわして飲むだよ。（コップの砂糖水）（母おや→幼児）

○ドーカ タ<sup>ン</sup>マス ヤ。

どうかたのみますよ。

などと言われている。

○ハゼギン ノボッテ トリヤイーンダヤ。〈架稲木に登って取ればいいんだよ〉

これは子供同志のことばである。

は、押見虎三二氏が、「佐渡方言の文末助詞について——両津市大字片野尾における——」（『方言研究年報』第一巻）の中にあげられたものである。越後での例は、長岡市方面の、

○モト コロイ スベリダイ ツクッテ ヤー。アチ ホッテ ヤー。

もと、ここへすべり台をつくってよ。穴を掘ってよ。（と、雪にあそぶ少年の説明がつづく。）

などである。『全国方言資料』第2巻の「新潟県糸魚川市砂場」の条には、

m タイショー オー ジューイチネンカ ニネンゴロ ツイタダナイケヤー  
大正 11年か 2年ごろ ついたのじゃないか

オレ ソー オモエダヤー

な。おれは そう 思うんだよ。

などと言うのが見える。

本県下に、「ヤ」に相当する「ヤイ」もある。『佐渡昔話集』には、

「あゝ寒いこつた、居るかやい」

などとあり、『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

f キータラ ソンマ モドッテ コーヤイ ジーヤ  
聞いたら すぐ 帰って 来なさいよ、 じいさん。

とある。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナヤ」「ノヤ」「ネヤ」がある。当地域にも「ネヤ」形の見いだされるのが注目される。

f ホント エー コラッタガノーヤ

ほんとうに いい 子でしたがねえ、

は、『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡相川町大倉」の条に見える「ノ

「ヤ」例である。「ノヤ」などは、さほどよい言いかたではないらしい。

「ヨヤ」「イヤ」がある。『全国方言資料』第2巻の「新潟県中魚沼郡津南町結束」の条には、

f ホットニ タノシミダッケガナー イヤ  
ほんとうに 楽しみでしたがねえ。

と見える。

○ミヅ クンジョケ ヨヤー。

水をくんでおけよお。

は、佐渡西北で聞いたものである。ここでは、念おしのよびかけに「ヨヤー。」とも言っている。

「ゼヤ」が、佐渡にも越後にもある。押見虎三二氏教示の、県南陲、秋山郷方言での「ゼヤ」例は、

○ムカシカラノ オジーサンナンカ インネン ゼヤ。

昔からのことを知っている大年寄りのおじいさんなどはいないようですよ。

である。

「カヤ」が、問いやさそいや受けひきや抗弁などに、よくおこなわれている。

○ヤー、アツバン カヤー。

よお、あそばないかね。

は、越後西南辺でのさそいの「カヤ」の一例である。——このばあい、文頭での「ヤー」のよびかけがあって、またしても文末で「ヤー」と言っているのが注目される。「カヤー」の「ヤー」も、「よ」ととってもよいものである。気やすくさそう時、こういうよびかけになるのであろう。

「ケヤ」もある。

「ガヤ」もある。

「トヤ」も見られる。『佐渡昔話集』での一例は、

兎どんは火をつけて置いて逃げて了うたとヤア。

である。「トヤ」が、越後北部では、しぜんに、「ドヤ」ともなっている。  
その他のものに、「テヤ」「ワイヤ」「ワヤ」などがある。

### 岐阜県

本県下では、「ヤ」の、つぎのような用法が、おもにとりたてられる。

まず、命令の「ヤ」がとりたてられる。

○コイツ チョット ミトクレサイ ヤ。

これをちょっと見てくださいよ。

などともある。(飛騨高山での一例)『岐阜県方言集成』には、不破郡の、

とってきいや [句] 取って来なさい。

が見える。同書には、岐阜市の、

くるや [句] お出でなさい。(小児語)

との言いかたも見える。

つぎに、問いの「ヤ」がとりたてられる。

○チンテ ユー ナマエ ヤー。

なんという名前なの？

は、美濃北部での一例である。『岐阜県方言集成』には、可児郡の、

行くのを止めてや=行くのを止めましたか。

が見える。

感嘆の「ヤ」もとりたてられる。『岐阜県方言集成』には、

おっとろしや [句] 驚いたな。

などが見え、『郡上方言』にも、

インチャ マー ウイコトヤ (あれまあ、お気の毒ねえ)

などが見える。

つぎに、単純に「よ」と言いかえてよいような「ヤ」の用法がとりたてられる。美濃北部で聞いた言いかたには、

○チサイ ウキブクロヤッタモンデ ヤ。ホイタラ ヤ。………… ヤ。……  
…。

小さい浮袋だったもんでよ（ね）。そしたらよ（ね）。…………よ（ね）。  
…………。（少女——藤原）

などがある。上の例では、「ヤ」のよびかけが連発されており、「よ」とよびかけているのではあるが、その意は、共通語の「ね」のぼあいのようなものにもなっている。『全国方言資料』第3巻の「岐阜県揖斐郡久瀬村西津汲」の条には、

mソーユー フシモ アッターシ  $\left( \begin{matrix} \text{（笑）} \\ f \end{matrix} \right)$  マンダ チガッタ  
 そういう 歌も あったし、 まだ（ほかに） 違った  
 フシモ アッター<sup>2)</sup> ワスレテマッター  
 歌も あったが 忘れてしまったねえ。

2) 上昇的イントネーション。「……が」の意をあらわす。

とあって、「ワスレテマッター」が、「忘れてしまったねえ」と言いかえられている。

「ヤナー」の言いかたも、慣用されているらしい。

○ヨー キトクレンサッタ ヤナー。

よく来ておくれなざったよね。

は、飛騨高山で聞いたものである。「よな」と言ったような調子で、「ヤナ」を言っているか。

「ヤ」に相当する「ヤイ」がおこなわれている。『岐阜県方言集成』『東濃方言集』などに、「おくれやい」が見える。『岐阜県方言集成』には、なお、

かんねしていやい [句] 堪忍して下さい。

などともある。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ナヤ」「ノヤ」「ネヤ」、「エヤ」、「ゾヤ」、「カヤ」「カイヤ」、「ガヤ」「テヤ」、「モヤ」などがある。

○ムカシノ ナヤ。

昔のねえ。

は、美濃北部での「ナヤ」例である。

○イエノ ヒカリモ トッチョルシ ネヤ。

雑誌『家の光』もとってるしねえ。(中男間)

は、美濃南部での「ネヤ」例である。——やはり本県下にも、「ネヤ」がおこなわれている。『岐阜県方言集成』の揖斐郡の条には、「ねや」についての、

〔感〕ねえ。(同輩に)

との記事が見える。

○ミヨコサン。イツノ コト エヤー。

みよ子さん。いつのことなの？

は、美濃北部での「エヤ」例である。「エ」の間に、「ヤ」がついているといったようなものか。(この「ヤ」は、「よ」と言いかえてよいものであろう。)

○ハヤ オヒル カヤー。モー ジキ カー。

もうおひるかね？もうすぐかい？

は、よくおこなわれている「カヤ」の一例である。さそいの「カヤ」もある。抗弁の「カヤ」もある。

○ソーデス カシランテヤ。

そうですかしらねえ。(“ここには長命の人が多いですね。”と私がたずねたのに対する老男の返事)

は、「テヤ」の見える例である。

○ソージャ モヤ。

そうだもんね。

は、飛騨高山で、北方、古川町のことばとして教示されたものである。教示者は、“ミンチ ヌー モ。”(みんな言うもの。)とよく言った。この「モ」とおなじ「モ」に「ヤ」のついたのが、上の「モヤ」か。

## 愛知県

本県下では、「ヤ」の、つぎのような用法がとりたてられる。

命令の「ヤ」がある。「コッチ コイ ヤー。」(こっちへ来いよ。)などの言いかたは、つねのことである。動詞連用形の言いかたに「ヤ」をつけることが、よくおこなわれている。江端義夫氏教示の「愛知県常滑市方言」の言いかたは、

○タベリヤ。(おあがりなさいよ。)

○スワリヤ。(座りなさいよ。)

などである。私が知多半島で聞いたものには、

○ヒコーキガ キタニ ミ ヤー。

飛行機が来たからお見よ。

などがある。「ミ ヤー」は、“ちょっと上品なことば。”“よその子に言うのには、ふつうこれをつかう。”とのことであった。知多半島に「見リ ヤ。」もおこなわれている。佐藤虎男氏教示の、知多半島頸部での他のものは、

○メジロ ヤリ<sup>ン</sup> ヤ。アノ コニ。

メジロおやりよ。あの子に。

である。尾張北域でも、「マー ユックリ シ ヤー。」(まあゆっくりおしよ。)などの言いかたがおこなわれている。

問いの「ヤ」がある。尾張では、

○ドケー イキヤース ヤ。

“どこへ行きなざるかね。”

などと言われている。三河渥美半島では、

○イットクレン ヤー。

“行ってくれませんか。”

などと言われている。三河奥の一例は、

○オットー, ドコイ イッタ ヤー。

おやじ, どこへ行ったかい?

である。高瀬徳雄氏の、「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」という、  
私に寄せられたご手稿には、

○ホイドーダンヤー。ナオルカンヤー。

どうだね。なおるかねえ。(自転車修理) (中男——同)

などの例が見える。

感嘆の「ヤ」がある。

○マー キノドクナ ヤー。

まあきのどくなこと!

○キサンジー ヤー。

すばらしいなあ。(すてきだなあ。)

などと言われている。

共通語の「よ」とか「な」とかにあたる「ヤ」がある。三河例は、

○ナニモ シラン オジサンダ ヤー。

何も知らないおじさんだよ(なあ)。

などである。高瀬徳雄氏の「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」(『方言  
研究年報』第一巻)には、

○ダイジョーブカネ。ヒヤヒヤサセル ヤー。

大丈夫かしら。ひやひやさせるわ。(青女=女学生——同)

の記事が見える。この種の言いかたは、三河方面によくおこなわれているらしい。  
『全国方言資料』第3巻の「愛知県南設楽郡作手村菅沼」の条には、

f ソンナ ナンダ<sup>5)</sup>ナエーア イカンデイカンデヤー

そんな なんですわねえ, 行かないわけにはいきませんわねえ。

5) [næ:]

その他の「ヤ」例が見えている。

三河では、「ヤイ」が聞かれる。

○ワシノ ウチ コイ ヤイ。

わしのうちへ来いよ。

は、渥美半島での一例である。高瀬徳雄氏の前掲の論文には、下のものがある。

○イマ ナンジダ ヤイ。

(おい) いま何時だ。 (青男→同)

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナヤ」(「ナーヤ」も)がある。

○ヤー、ツンドル ナヤ。

やあ、こみあっているねえ。(バスの混雑のこと)

は、三河南部での一例である。——「ナーヤ」もよく言われているか。「ナーヤイ」もあって、よくおこなわれている。佐藤虎男氏は、尾張、知多半島頸部での「ナーヤイ」を教示せられた。

○キレ セン ナーヤイ。

切れはしないねえ。(刃物のこと)

というのである。

「ネヤ」もある。清瀬良一氏は、三河西部の刈谷付近の文末詞について、

○ヨク カワッタ ネヤ。

よくかわったねえ。

○ツレテ イッテ クレテ ネーヤ。

(旅行に) つれていって来てねえ。

などの例を教示せられた。

「ゾヤ」「ゾヤイ」もある。芥子川律治氏は、『方言の旅』に寄せられた「愛知」に関する記事の中で、「旧藩士のことば」

『外で食べるということなどは何事だぞや!』

を示してられる。私が渥美半島で聞き得たものには、

○カエッテ エー ゾヤ。

(それをやったら) 帰ってええぞよ! (中男間)

(「ゾヤ」は当地域にふつうにおこなわれているとのことである。) などがある。『全国方言資料』第3巻の「愛知県南設楽郡作手村菅沼」の条には、

f ソイカラ シモノ シューガ ( ) カミノヤー オヒツ  
 それから しも[下]の 人たちが, 「かみ[上]のね おひちさ  
 ン キタゾヤイ コーリャ マタ オドルゾ<sup>1)</sup> ナンテ  
 んが 来たぞ。 これは また 踊るぞ。」などと、

1) 「r」は舌先のふるえ音。

との「ゾヤイ」例が見える。

県下に広く、「カヤ」がおこなわれている。

○オリャース カヤ。

いなさいますか。

は、尾張での女性のことばである。

○オマイ コンヤ ウチニ オル カヤー。

あんた今夜うちにおるかね。

は、三河奥での一例である。

「ガヤ」もある。これまた、尾張・三河によくおこなわれているらしい。

『名古屋方言の語法』には、

ソレ ダ モン ダ デ エーカ 来タ ノ ダ ガヤ  
 それだからさ、来たんだよ

とある。知多半島での一例は、

○マー メジニ セラメ カヤ。

もうめしに“せられまいか”? (漁師男)

である。

「ワヤ」「ワイヤ」も聞かれる。佐藤虎男氏教示の尾張西部での「ワイヤ」例は、

○ミツヅ イ<sup>レ</sup>ルミ<sup>タ</sup>イナ モン<sup>ヂ</sup>ャ ワイヤ。 (中男→同)

である。

## 静岡県

本県下には、主として、次下のような「ヤ」がおこなわれている。

命令の「ヤ」が、ふつうにおこなわれている。ていねいな命令、すなわち勸奨の「ヤ」もある。ていねいな命令の一態とすべきものに、

キメテク<sup>リ</sup>ョーヤ

のような言いかたがある。山口幸洋氏の『静岡県本川根方言の文』に見えるものである。氏に、“命令形に添えて、命令をじかにぶつけるのをやわらげる。”との説明もある。私が、浜名湖畔で聞き得た一例は、

○ヤイ。ちよつとこの手紙を ヨン<sup>デ</sup> ク<sup>リ</sup>ョー ヤイ。

おい。ちよつとこの手紙を読んでおくれよ。

である。——発文の「ヤイ。」は、“若い衆の同僚のことば”であるとのことだった。(ここに、発文と次文末とに「ヤイ」があって、対応しているので、「ヤイ」文末詞のよびかけ性は明瞭である。「ヤ」に関連する「ヤイ」の出ているのが注目される。)さて、私が伊豆半島内で聞いた、

○ア<sup>リ</sup>ョー ミ<sup>ロ</sup> ヤ。

あれを見ろよ。 (中男問)

○ヤーイ。マ<sup>ッ</sup>テロ ヤー (ヤーイ)。

よお。まってるよお。

では、「〜ロ」という命令形の言いかたのつぎに、あらためて、「ヤ」(「ヤー」「ヤーイ」)がきている。「ヤ」からひるがえって考えてみるのに、「ミロ」(見ろ)などという形の、一つの完結した動詞活用形であることが明白である。なお、ここにも「ヤーイ」形が注目される。

問いの「ヤ」がまた、よくおこなわれている。伊豆半島例は、

○ネーチャン、アカイ コモリワ ヤー。

ねえちゃん、赤いこうもり傘はね？（所在を問う。）

である。

○オトーサン 下コイ イッター ヤー。

お父さんはどこへ行ったな？

は、熱海市に属する初島での一例である。「イッター ヤー」のように、「ヤ」が、前のことばの長音のつぎにくるようであれば、「ヤ(ヤー)」の、文末詞としての独立性は、いよいよ明瞭であろう。

○ドー シタ ヤー。

どうしたんだ？（ぞんざい）

は、大井川奥での一例である。遠江内にも、問いの「ヤ」がよくおこなわれているらしい。反問とされているものもある。「ヤ」の問いは、下のものや後輩に、ゆとりをもって、したがって、ときにはやさしくなされているがちか。

共通語の「よ」にあたる「ヤ」が、県下によくおこなわれているようである。『静岡県方言辞典』には、「ヤー」が「ヨウ」とされていて、

嫌だヤー

とある。私が伊豆半島南部で聞いたものには、

○エッカнде エー ヤ。

○エーカнде エー ヤ。

○エッカラゲンデ エー ヤ。

“ある程度でいいということ。”

などがある。『全国方言資料』第3巻の「静岡県吉原市吉永」の条には、

mンジャ マー ジュエンデモ イーヤ

それでは まあ 10円でも いいよ。

などとある。

単純よびかけの「ヤ」は、

○ヤー。オマイラ ヤー。

よお。お前らよ。

のように用いられている。——これは御前崎ちかくでの一例である。

感嘆の「ヤ」もある。

○アレ ヤー。

あれ!

は、伊豆での一例である。

本県下に、「ヤ」に相当する「ヤイ」が、かなりよくおこなわれているようである。(すでに、一・二の実例をかかげた。)

○オイ。ヨレ ヤイ。

おい。はいれ(上がれ)

は、大井川上流での一例である。『静岡県方言辞典』には、「なーやい」(ネー)が、“同輩以下の人と談話する時に用ふ”とされており、

「あのなーやい」

の例が見える。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナーヤ」がある。

○ヘンダ ナーヤー。

変だなあ。

は、御前崎ちかくでの一例である。

「ヨヤイ」というものもある。

「カヤ」がよくおこなわれている。

○ウチノ オヂーニ アワンケ カヤ。

うちのおじいに会わなかったか?(ぞんざい)

は、大井川奥での一例である。

「ダカヤ」の言いかたも認められる。山口幸洋氏の前掲書には、

イマデモナゲルダカヤ

などが見える。

「カイヤ」もある。

「ガヤ」もある。

「ダヤ」もある。(「ダンヤ」もあるらしい。)

「ワヤ」もある。

## 長野県

本県下では、「ヤ」の、つぎのような用法がとりたてられる。

命令の「ヤ」がよくおこなわれている。県北、木崎湖畔で聞き得たものには、

○ヤスマナデ、ハヤク エベ ヤ。

やすまないで早く行けよ。

がある。『全国方言資料』第2巻の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条には、

f マメデ イッテ カワレロヤー

「元気で 行って 飼ってもらいなさい」

と見える。「カワレロ」を受けた「ヤ」が目される。諏訪湖付近でのことであるが、

○ヨイ ヤー。

来いよ。

の言いかたとともに、「ヨイ ヤレ。」の言いかたもおこなわれている。人は、前者を“よぶだけのことば”とし、後者を“はっきりこっちへ来いというところ。”だとしている。“「ヤレ」は、先方へ圧力をかけてる。”とも、“「ヨイ ヤレ。」は、オ<sup>○</sup>ル イミダ ネー。(怒る意味ではない。)”などとも、人々は説明している。「ヤレ」に関しては、考えるべきことが多いように思う。「ヤー」に、どのようにか関連していることも認められよう。が、私は、「ヤレ」を、「ヤ」からは区別して、のちにこれを感動詞系の文末詞の条でとりあげる。命令の「ヤ」のばあい、「クレ ヤ」(くれよ)が、「クリヤ」ともなっている。

ていねいな命令表現にも、むしろ、「ヤ」がついている。県西北辺で聞いた、

○オセテ クリ ヤ。

教えてくれよ。

の「クリ」は、「クレ」の「クリ」か、それとも、「クリョー」の「クリ」か。『信州上田附近方言集』には、

イロロヤ (句) 「仲間に入れて下さい」の意。

との記事が見える。「〜ロ」の言いかたの下に、「ヤ」のあるのが注目される。

問いの「ヤ」がある。

○ドコダイ ヤー。

どこなんだ？

は、県北での一例である。

共通語の「よ」に言いかえてもよい「ヤ」がある。齊藤武雄氏の『下高井の言葉』には、「エベ」についての、

行こうの意、「山へエベヤ」。活用はしなく、この活用だけである。

との記事が見える。『信州方言読本』にも、この種の「ヤ」の指摘がある。『信州上田附近方言集』には、

氷ミタデヤ 氷の様でありますよ。

とある。

単純よびかけの「ヤ」、感嘆の「ヤ」もおこなわれている。

「ヤイ」がある。『全国方言資料』第2巻の「長野県上伊那郡高遠町山室(旧三義村)」の条には、

f ドノクリー カクレタモンダカ シレンヤイ

どのくらい (わたしは) 隠れたものだから わからないですよ。

とある。

※ ※ ※

本県下の「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ナーヤ」、「イヤ」、「サヤ」、

「ゾヤ」「ゾヤイ」, 「カヤ」, 「ダヤ」「ダイヤ」, 「ワヤ」などがある。

○ソー サヤー。

“お友だちどうして、「そうです。」の意。”(中年の一主婦の教示)  
は、県北での「サヤ」の一例である。

○マメッテー カヤ。

“おまめですか。”

は、県北での「カヤ」の一例である。

○ソージャン カヤー。

そうではないかね。

は、松本市での「カヤ」例である。

○ドシテ ハッシャ シネー ダヤー。

どうして発車しないの? (幼児→母)

は、県北での「ダヤ」の一例である。

## 山梨県

本県下では、「ヤ」の、つぎのような用法がとりたてられる。

命令の「ヤ」がある。県西南部例は、

○コレ モッテテ ヤレ ヤ。コイツ。

これを持って行ってやれよ。こいつを。(息子さんらの所へ、菓子を持って行かせる。)

○スコシ アラケロ ヤー。

すこし火をかきおこせよ。(「アラケル」は「イケル」の反対という。)

○オレノ ウチー コー ヤー。

おれのうちへ来いよ。(“「ヤー」をつけてやわらかく言う。”)

などである。

受けひきの「ヤ」がある。望月克己氏は「山梨県峡南地方の敬卑の表現」

(『言語生活』第五十四号 昭和31年3月)で、

次に下山村独特の言葉で人に話し掛けられた時、「そうですか」と相槌を打つのに二つの表現がなされている。目上に向かって「ほう<sup>○</sup>エ」、同等や目下には「ほう<sup>○</sup>ヤ」二者がはっきりした待遇価を示すのは面白い。

と述べていられる。春日正三氏は「山梨県南巨摩郡身延町の言語生活」(『立正大学人文科学研究報告』2 昭和39年)で、

[Fo:ja] (目下に) (ソーカの意味を持つが、その待遇表現は、はっきり、意識的なものではないと話者は言っているが、

と記述していられる。

単純に「よ」と言いかえてよいもの(非命令のばあいとして)が、よくおこなわれている。『全国方言資料』第2巻の「山梨県北都留郡上野原町西原」の条には、

mアー      メッケテ      イマニ      ヤローヤー

ああ、見つけて いますぐ (貸して)やろうよ。

とある。また、

mアカリモ      ワリアイ      ツオシヤ

あかりも      割合      強いしさ。

ともある。

単純よびかけの「ヤ」がある。

「ヤイ」の形が、かなりよくおこなわれているか。『奈良田の方言』には、

こがーにどーやい      物を贈られた時の済ません。「こんな沢山いただいて恐縮です」

とある。単純な問いの「ヤイ」もおこなわれている。

※      ※      ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「カヤ」「ダヤイ」「ワヤ」などがある。

『全国方言資料』第2巻の「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」の条の、

fセーサイ ノンデッテ クレデヤ

たくさん 飲んで行って くださいよ。

では、「デヤ」の複合形が認められるのかどうか。——「くださいよ」と言いかえられているのからすると、「クレデ」がひとまとまりのものかとも思われる。

## 八 関東地方の「ヤ」ほか

### 神奈川県

単純よびかけの「ヤ」があり、命令の「ヤ」があり、さそいの「ヤ」がある。

○イグバー ヤー。

（“人をさそう。”“行きましょう。”）

は、県西部での、さそいの「ヤ」の一例である。

問いの「ヤ」のおこなわれることがさかんのようである。

○ナソダ ヤー。マシャー。

“なに用か。おまえは。”

○オチャ 下ー ヤ。ヤッテ イキナ。

お茶はどうですか。飲んで行きなさい。

などとも言っている。

単純に「よ」と言いかえてよいもの（非命令のばあい）もよく聞かれる。

○シラネー ヤ。

知らないよ。

○ソソナ コタ ネー ヤ。

そんなことはないよ。

といった調子である。県西部での例、

○ハッチャンチノ オバサンワ ハヤイデ ヤー。

はっちゃんのうちのおばさんは早口だよ。 (老男→中女)

の「ヤー」も、「よ」的なものであろう。

感嘆の「ヤ」もおこなわれている。

本県下でも、「ヤイ」形が見いだされる。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞としては、「ナヤ」などが見いだされるか。

○イー ナヤ。××ポー。

いいことね。××ぼうや。 (中女→幼男)

は、県西部での一例である。

## 東京都

関東地方の「ヤ」は、およそ、東京を本位に見て、大観することができるものであろう。

いわゆる東京語の「ヤ」は、さほど多彩には用法分化を見せていないのではないか。——とすることができよう。

命令の「ヤ」は、伊豆諸島でよくおこなわれている。『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村坪田」の条には、

f ジャ ヤスミヤー ネロヤー

おやすみなさい。

とあり、同巻の「東京都利島村」の条には、

f …… ハヤク タベリヤ

早く お食べなさい。

とある。旧東京域では、「早く シロ ヤ。」ではない「早く シロ ヨ。」が、よくおこなわれていよう。

問いの「ヤ」が、伊豆諸島の、さきの「東京都利島村」では、

f …… ハンジガ ミッケライタダッケヤ  
 ハンジが 見つけ出したのでしたかね。

のようにおこなわれている。八丈島では、「来てくださいますか。」が、  
 ○オジャッテ タモーリクレロ ヤ。  
 と言われている。

単純に「よ」と言いかえてよいもの（非命令のばあい）が、いわゆる東京語で、よくおこなわれている。「このへんで いい ヤ。」「ムズカシイ ヤ。」など。品物を買う時、その値段におどろいて言う「高い ヤ。」というのも、まさに「よ」の「ヤ」であろう。

○コイツワ イケネー ヤ。

などの言いかたもよくなされていよう。山田修氏は「共通語教育のあり方 関東甲信越地方」（『方言と文化』）で、

事実を確める意に「ヤ」がある、 負けたあやー。食ったあやー。勝ったあやー、とったあやー、なかったあやー。

と述べていられる。伊豆諸島については、『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村坪田」の条の、

f アー ソレガ イーヤイヤ  
 ああ それがいいですよ。

などを見ることができる。同条に、

f ヒダカラヤ<sup>3)</sup>

ですからね。

3) 「ヘダカラヤ」のなまり。

ともある。『方言誌』第一輯（八丈島方言）（国学院大学方言研究会 昭和6年12月）には、

叔父さんが銭をこちらでなくしたとき。 シードガ、ジエニー {ココラ  
 ン} デマチカシタツテヤ。

というのが見える。飯豊毅氏は「八丈島方言の語法」（国立国語研究所論集 1 『ことばの研究』）で、

オヨメニイカッテエヤ。 お嫁に行ったそうだ。

の例を見せていられる。柴田武氏編の『お国ことばのユーモア』に寄せられた宮川敏雄氏の「神津島」の条には、

あれやあ ウチワの 話だあやあ。(老女→筆者)

というのが見える。

金田一春彦氏は「関東地方 伊豆列島の言葉」(『方言と文化』)で、利島のことば、

(“利島で二人のおばあさんが道で立話をしています。”)

ドーセコドモダモノ，ドーサレペーヤ。

どうすることができようか

をしるしていられ、「ヤ」を反語の意味のものとしていられる。「よ」ともとれる「ヤ」であろう。

東京都下に「ヤイ」形もある。いわゆる東京語では、「よせ ヨ。」とも「よせ ヤイ。」とも言われていよう。よびかけの「ヤーイ」もおこなわれていよう。さきの金田一氏の「伊豆列島の言葉」には、やはり利島の、

ソレデマー，カンニンシテクレロヤイ。

というのが見える。——「クレロヤイ」は，“クレルカという問掛けの意味”であるという。「ヤイ」は疑問の「ヤイ」だとある。大島一郎氏は、「伊豆利島方言の語法」(Ⅱ)(『国語学』49)で、

デキロニッテ オレニヤラセリヤイ

(できるからおれにやらせてくれよ)

というのを示していられる。『全国方言辞典』には、

いけやーい 𠄎 (行けよの意) 客を送り出す時の詞。さよなら。伊豆大島。

が見える。伊豆大島のあいさつことばでは、送辞の「行け ヤーイ。」がよくおこなわれているらしい。(「イゲー ヤーイ。」ともなっているか。『八丈島三ツ根村方言集』には、

## ノーオヂヤレヤイ

「また来い」「またいらっしやい」の意味で、出船の時など見送の人々が船に乗込んだ人に声を掛るのだそうである。などが見える。(伊豆大島に、「ヤイ」がよくおこなわれているらしい。しかもその用法には、変相が認められるようである。)

※ ※ ※

東京都下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞としては、今、さしてのものを指摘することができない。

「ヤ」がはじめにくる複合形のものでは、「ヤネ」などが指摘される。

## 千葉県

本県下では、「ヤ」の、つぎのような用法がおもにとりたてられる。

単純よびかけの「ヤ」がある。

○バーチャン、バーチャン ヤー。

ばあちゃん、ばあちゃんよお。

などと言われている。『全国方言資料』第2巻の「千葉県香取郡小見川町神里」の条には、

mナイ オッカーヤ

ねえ、 おかみさんよ。

とある。

命令の「ヤ」がよくおこなわれている。

ミろや 見よ

ともあり(『千葉方言 山武郡篇』),

来いよ コーヤー

ともある。(齋藤達夫氏「東総地方方言集」『方言誌』第三輯)

さそいの「ヤ」が多くおこなわれている。「行くべ ヤ。」(行こうよ。)など、

「〜ベ ヤ」の言いかたがよくおこなわれている。「〜ベ ヤ」は、関東地方に特色をなすものであろう。千葉県南部での一例には、

○イッ<sup>ツ</sup>シヨ<sup>ン</sup> インベ ヤ。

いっしょに行こうよ。

がある。

問いの「ヤ」がある。上の「千葉県香取郡小見川町神里」の条には、

*m*ナンダヤー

何を言ってるんだ。

などとある。

大岩正仲氏は、国立国語研究所編の『日本方言の記述的研究』に寄せられた「千葉県館山市竹原（旧九重村）」の条で、

ヤは推量のペーに添えて、念を押す場合に使われることが多い。

サ<sup>ツ</sup>コ  
寒うっぺえヤ。

とするしていられる。

「よ」（非命令）と言いかえてよい「ヤ」のおこなわれることがいちじるしい。県南での一例は、

○ココダ<sup>ダ</sup> イヤー。

ここだよお。（車内で座席の位置を知らせる。）

である。『全国方言資料』第2巻の「千葉県香取郡小見川町神里」の条には、

*m*ナンダワーヤ

あれだよ、

とあり、同巻の「千葉県安房郡富崎村布良」の条には、

*f*ホイテ ソイッテ オイネーヤ

そんなふうに 言っは だめですよ。

とある。

感嘆の「ヤ」もある。「アラ ヤー。」（あらら！）などと言われている。

「ヤイ」形が見いだされる。本山桂川氏の『千葉県郡別方言集 上篇』には、

東葛飾郡のことば、

ナンテッヤイ 何と言ひしか

というのが見える。『千葉方言 山武郡篇』には、

コーやえ 来い

が見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「カヤ」などがある。「カヤ」は、問いに用いられ、また、「そうですか。」という受けひきにも用いられている。——「ソー ガヤ。」などともある。

埼玉県

県下に、さそいの「ヤ」がよくおこなわれている。やはり、「〜ベ ヤ」の言いかたがさかんである。県東部例は、

○ハヤグ イグベ ヤー。

早く行こうよ。

などである。県西の一例は、

○イグベー ヤ。

行こうよ。

である。『全国方言資料』第2巻の「埼玉県秩父郡両神村」の条には、

mへー タカク コーベヤ

ああ、高く 買おうや。

とある。

「よ」（非命令）と言いかえてよい「ヤ」のおこなわれることが、またさかんである。

○ワカンネー ヤ。

わからないよ。

○ブタガワガ イー ヤ。

豚皮がいいよ。

など、形容詞の終止形や、「ない」打消助動詞の終止形の言いかたのもで、「ヤ」と言われることが、とくに目だっている。

○ツマンネー ヤー。

つまらないな。

○イガネ ヤー。

行かないよ。

というようなアクセントにもなっている。県西部での実例は、

○ホンネー ヤ。

“はずかしい”よ。

などである。

「……………<sup>な</sup>い ヤ。」は、関東地方に通有の特色形式であろう。これといい、「まあ、いい ヤ。」などのばあいの「ヤ」といい、かるく発言されれば（あるいは氣がるに発言された時は）、「ヤ」が、そんなに品わるくはひびかない。のみか、ときには、それが、軽快な気分のものにひびいて、こだわりのなさが、そこによく表現される。——他へのあたりがやわらかである。「よ」と言いかえてもよいありさまである。反面、「……………ネー ヤ。」などの「ヤ」がつよく発言されれば、訴えかたが露骨になって、これは、品よくはひびかないことになる。

県下に「ヤイ」形もあるか。柴田武氏編の『お国ことばのユーモア』に寄せられた、齊藤広一氏の、「秩父地方」についての一文には、

子供たち

「ヤーイ、ビッコじゃあねえやい。ビッキだい。」

とある。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞に、「ナーヤ」などがある。

## 群馬県

単純よびかけの「ヤ」がおこなわれており、かつ、「ヤイ」もあるらしい。命令の「ヤ」がある。「クレ ヤー。」(くれよ。)<sup>○</sup>「オリテ コイ ヤー。」(おりて来いよ。)などと言われており、

コーヤ 来なさい

などともある。(『全国方言集』)上野勇氏の『ことばのスケッチ——利根のことば』には、

おとうがどろがきすけろやといったからすけた。

という文が見える。「すけろや」の言いかたが注目される。

さそいの「ヤ」がよくおこなわれている。やはり、「〜ベ ヤ」の言いかたがさかんである。前橋市東北郊の言いかたは、

○マエバン<sup>↑</sup>ー イクベ ヤ。

前橋へ行こうよ。

などである。大橋勝男氏の教示によれば、県西の我妻郡六合村の内では、

○ヤマエ エグベ<sup>↑</sup>ー ヤン。

山へ行きましょうよ。

などの言いかたがおこなわれているという。同等の人には「ヤマエ エグベ<sup>↑</sup>ーヤ。」と言い、年上の人には「……………〜ベ<sup>↑</sup>ー ヤン。」と言うよしである。

問いの「ヤ」も多くおこなわれている。

「よ」(非命令)と言いかえてもよい「ヤ」が、またよくおこなわれている。「モッテ ナイ ヤ。」(持ってないよ。)などである。「それが いい ヤ。」などの、形容詞を受けるものもよく見られる。

中沢政雄氏は「<sup>群馬県利根郡</sup>片品村言語調査報告」(『季刊 国語』昭和24年度 1)で、

ヤ、ヤイ=ハイクコーヤー(早く来いよ)クイヤー(くれよう)ヤレヤイ

(やりなさい) オレニモクイヤイ (私にもくれよう) = 動詞の命令形に添えて、命令の意を確かめたり、促したりする意を現わす。ヨッタツケヤ (寄つたそうだね) ソダツペヤ (そうだろう) のようにも用いる。と記述していただける。

「ヤ」に関する「ヤイ」形とともに「ヤン」形の認められるのは、めずらしいことである。大橋氏の教示には、なお、

○コネー ヤン。

“来ないのだよ。”

などの実例もある。「ソ ヤン。」「ハ イグベ ヤン。」など、“とくに女性が「ン」をつかうと、気もちがよい。”という。ここでは、「そうです。」も「ソ ダン。」と言っているよしである。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「カヤ」「ケヤ」などがある。

○オワ ッタ ンケヤ。ホント ケヤ。

おわったのかい。ほんとかい。 (青男問)

は、「ケヤ」例である。

栃木県

本県下では、「ヤ」の、つぎのような用法が、おもにとりたてられる。

命令の「ヤ」がある。

○ツンダ シテ クレ ヤ。

出してくれよ。

○タバ コ クロ ヤ。

たばこをおくれよ。

などと言われている。もとより、

○ナニカ オ チャガシ モッテ オイデ ヤ。

何かお茶菓子を持っておいでよ。

などの、ていねいな言いかたもおこなわれている。(勸奨)『<sup>本県に於ける</sup>方言訛語の調査』には、

クンロヤ 下さい みかんクンロヤ 那須郡馬頭町  
というのも、

コーヤ 来なさい こつちへコーヤ 上都賀郡上粕尾村  
というの見える。『栃木県塩谷郡泉村方言集』にも「ヨセヤー」(止めよ)「クンロヤ」(下さい)などが見える。

さそいの「ヤ」がある。『栃木県方言』には、

アスンビヤ 遊びませう (児童中心方言調査)  
というの見える。県北の一例は、「上がろうよ。」の意の、

○ヤ, アガッペー ヤ。

である。『<sup>本県に於ける</sup>方言訛語の調査』には、

イグベヤー 行かう 一緒にイグベヤー 上都賀郡永野村  
が見える。中沢政雄氏は、『方言の旅』に寄せられた「栃木」の条に、

「ゴイワイスッペヤー」は「お祝いをしよう」「ヨカッペ」は「よかろう」,「ヤッペデネーカ」は「やろうではないか」「アソンペーヤ」は「遊ぼうよ」という意味で話す人の意志や推し量ることや誘いを表わしています。

とするしてられる。「〜ペ ヤ」の言いかたが、当地方でもまた注目される。

「よ」と言いかえてよい「ヤ」(非命令のばあい)がある。「ヨカンペ ヤ。」は、「いいでしょうよ。」である。県北例の、

○サッキ ユータッペ ヤー。

さっき“言ったことだね”。

にしても、「ヤ」が、「よ」的ではないか。——「ね」とされているのもわかる。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ナヤ」「ヨヤ」「ゾヤ」「カヤ」「ガヤ」とも「ケヤ」「ワヤ」などが見える。(おそらく、他県下でも、この程度には複合形が見られがちなのではなからうか。)

○カゼガ サムイ ナヤ。

風がさむいねえ。

は、「ナヤ」の一例である。『全国方言資料』第2巻の「栃木県那須郡黒羽町」の条には、

*m*ハヤグ シテ モレーデナーヤー

早く して もらいたいねえ。

とある。

○モー アッチノ ホーサ イッタ ゾヤ。ネーチャンワ。

もうあっちのほうに行ったよ。ねえちゃんは。

は、「ゾヤ」の一例である。「デッカシタ ゾヤ。」(でくわしたよ。)というのものもある。

○トーフワ ネー ケヤ。

とうふはないかい？

は、「ケヤ」の一例である。

○オカシカッタ ワヤ。

おかしかったよ。(大男)

は、「ワヤ」の一例である。

## 茨城県

本県下では、「ヤ」が、つぎのようにおこなわれている。

まず、命令の「ヤ」がおこなわれている。「クレロ ヤー。」(くれるよ。)など。『全国方言資料』第2巻の「茨城県新治郡葦穂村」の条には、

fイーノ モッテ<sup>1)</sup>キテクレヤー

いいのを 持って来ててくださいよ。

1) 「テ」の母音は無声。

とある。「クレ ヤ」の言いかたは、よくおこなわれていよう。

問いの「ヤ」がおこなわれている。「何時ダ ヤー。」(今、いく時だ?) などと言われている。「よ」「ね」などと言いかえてよい「ヤ」がおこなわれている。『方言の旅』に寄せられた野元菊雄氏の「茨城」の条には、新治郡韋穂村の、女性の言、

裏ニ牛ガイルガラ見デヤッテクレヤ。イガク(大きく)ナッタベヤ。

が見える。県下の多賀郡で聞きとめた、

○ア<sup>↑</sup>ー ソ<sup>↑</sup>ー カー。オ<sup>↑</sup>レンダト オモッタ ヤー。

ああ、そうか。おれのだと思ったよ。

では、明らかな非命令のばあいの、「よ」相当の「ヤ」が見られる。『全国方言資料』第2巻の「茨城県新治郡韋穂村」の条には、

fンー ナンデモ イーヤ

うん、何でも いいですよ。

などの言いかたが見られる。

fイガグ ナッタベヤ

大きく なったでしょうよ。

などともある。

「よ」と言いかえてよいような「ヤ」が、感嘆表現をささえることにもなっている。

○オ<sup>↑</sup>レギ<sup>↑</sup>ア<sup>↑</sup>ーノダ モノ<sup>↑</sup>ヤー。

自分のうちのだもの!

などと言われている。『茨城方言集覧』には、

<sup>マ</sup>てけ<sup>マ</sup>えーやー 大ナルコトヨノ意 西茨城郡

などとある。

## ※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞には、「ナヤ」（「ナーヤ」も）「ネヤ」「ガヤ」（かヤ）「ドヤ」「デヤ」などがある。

○ジド<sup>ー</sup>シャデ モッテ キテ ナヤ。

自動車を持ってきてねえ。（老男→中男）

は、県西南辺での、「ナヤ」の一例である。ところで、この「ナヤ」が、ときに、「ナ」の不明確なものにも聞こえた。そうして、別に「ネヤ」も聞かれた。

○セガレガ ネヤ。

せがれがねえ。（老女→中男）

などとあった。「ネヤ」が当地方にもあるのは、注目される。（老男には、「セガレガ ナヤ。」の発言があった。）主として関西地方によく聞かれる「ネヤ」であるが、発音しだいでは、当地方の人たちも、しぜんに「ネヤ」を造出し得たことなのか。

*m*タマゴ ウッテ クンニェガヤー

卵を 売って くないかね。

は、「かヤ」の一例である。（『全国方言資料』第2巻 「茨城県新治郡葦穂村」）おなじく「葦穂村」の、

*f*ダメダデヤ

だめですよ、

からは、「デヤ」がとりたてられようか。

## 九 東北地方の「ヤ」ほか

東北地方に、「ヤ」のおこなわれることはさかんである。

福島県

本県下では、「ヤ」のつぎのような用法がとりたてられる。

命令の「ヤ」がある。「ヨセ ヤ。」(よせよ。)  
「シロ ヤ。」(しろよ。)など  
と言われており、また、ていねいに、

○カマツズ[ü], オイ[i]テ ク[ü]ダサイ ヤ。

かまわずに、そのままにしておいてくださいよ。

などとも言われている。

問いの「ヤ」がある。

単純に「よ」(非命令)と言いかえてよい「ヤ」がおこなわれている。『全国  
方言資料』第1巻の「福島県相馬郡石神村」の条での例は、

*m*イヤー ゴツォー ナルツテネーヤ

いや ごちそうに なるてはいられないよ。

などである。『福島県方言辞典』にも、

イヤ [句] 善いよ ○その位にしておいていーや 南濱会

などとある。『福島県中村町方言集』に見える、

「ほんなごど、おら、しらねえあ。」

での、末尾の「あ」は、「ヤ」に相当するものであろうか。旧相馬藩(県東北隅)  
に関しての、いわゆる旧藩ことばは、ずいぶんていねいなものであって、これ  
には「ヤ」が出てこないありさまであった。(かつての聴録経験である。——  
対話の文末には、ていねいに「ナ」がつかわれるふうであった。)飯豊毅一氏は  
「福島県における文末助詞——岩瀬郡天栄村を中心として——」(『方言研究年  
報』第一巻)で、南<sub>2</sub>津郡大宮村のことばにつき、

「ソーダベーヨ」「ソーダベーヤ」では前者はやさしみがあり嫁が親に対  
して用いるにふさわしく後者は息子が親に対して用いるに適っているとい  
う。

と述べていられる。会津地方には「ヤ」がよくおこなわれているようである。

『会津若松市方言集稿』には、

ソ二  $\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ヤ}} \\ \overline{\text{サ}} \\ \overline{\text{ヤエ}} \end{array} \right.$  それだよ、さうだよ

というのが見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞では、「ナヤ」が注目される。（「ナヤー」ともなっており、「ナーヤ」ともなっている。）『福島県棚倉町方言集』には、

「そおだなあや。」

などが見える。

「ゾヤ」もある。野元菊雄氏が「みちのくの巻(2)——太平洋筋の巻——<福島市・会津若松市>」（『方言の旅』）に示された、福島市のことばには、

女「…………… 早く起ギナグチャナラネーゾヤ、ハー、……………」

というのが見える。

### 宮城県

「ヤ」の諸態が見られる。

単純よびかけの「ヤ」があり、また、感嘆の「ヤ」がある。『細倉の言葉』には、

「ザアマヤ、スカネエコト」（あら嫌だ、いけすかない）

などというのが見えている。『仙台の方言』には、

「なんだや、おら」（あら〜。なんとまあ）

などとある。

命令の「ヤ」がある。『仙台の方言』には、

「最後までやらせてみさえや。」（最後までやらせてごらんよ。）

などとある。——このように勸奨表現になるものが多い。

さそいの「ヤ」がある。「……………べ ヤ。」との言いかたが、一つ、熟している。『仙台の方言』には、

「ざっとむかしすんべや。皆こねか」（お伽噺しようよ、皆来ないか）  
などというのがある。

問いの「ヤ」のおこなわれることがさかんである。松島湾岸には、

○ミ[i]ヤケッテ ドー カク[ü]ンダ ヤ。

ミヤケってどう書くんだい？

などの言いかたがある。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、

*m*アイ ドコサ イッテキタヤ  
やあ、 どこへ 行ってきたんだい。

とある。『仙台の方言』には、

「みづのみでどぎ、なちよすんべや」（水の飲みたい時にはどうしようか）  
などとある。

仙台弁をはじめとして、本県下によく聞かれるものに、「ノッシャ」という文末詞がある。ちょっと聞きには、これに「ノシヤ」が聞きわけられもする。その点で、「ノッシャ」に「ヤ」文末詞が認められるかに思われてくるのであるが、これは誤認とされることを、今も明らかにしておきたい。すでに、文末訴え「ア」音の記述で明らかにしたように、「ノッシャ」は、「ノシ」という文末詞に文末訴え「ア」音のつけ加えられたものである。「シ」の訴えの、母音の狭さを拡大しようとして、[a]母音化がおこなわれ、「ノシ」は「ノッシャ」になったものと見られる。「ノッシャ」は、やや厳密に表記すれば、「ノッシャー」と記録されるべきものである。さて、仙台弁で、

○ドゴサ イッタ ノッシャヤ。

どこに行ったんですか。

などと言われているのは、明らかに、「ノッシャ」に「ヤ」文末詞のつけそえられたものである。『仙台の方言』には、

「あんまりわかんねからまづ、はっけおいてもらうかと思うのっしゃや」

(あまり解らないから、占ひして貰はうと思ふのだよ)

などというのが見える。

「よ」(非命令)相当の「ヤ」のおこなわれることがさかんである。『仙台の方言』の二例は、

「昨日大掃除でうんと働いたっけ、今日かぼねいてーやー」(昨日は大掃除でうんと働いたので今日は身体が痛いよ)

「なんだかんだかさむくてや」(妙に寒くてね)

である。『細倉の言葉』には、

「始メテ出来タヤア」(あゝ始めて出来たよ)

というのが見える。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、

mソノトーズニガラズモノ<sup>3)</sup> タイスタモンデガスヤー

その当時というものは 大変なものでしたよ。

3) この意味は確かでない。

というのがある。県南に、

○コライン ヤー。

おいでよ。

などの言いかたがあり、県北に、

○タマゲタ カチ[i]コイ ヤロッパコダ ヤー。

おどろいたかしこい野郎っ子だよ。(自宅の孫、小学二年生男をほめる。)

などの言いかたがある。松島湾岸方面では、老若の人たちが、よく、「……知ラネーケド ヤー。」、「ガッコニ イク トキ ヤー。」などと、「ヤ」をつかっているのを見ることがある。

○キノー ヤー。

きのうね。

などと、「一々おわりに「ヤ」がはいる。」「ヤ」をつかわないとものと言えなくなるくらい。」と、人も言っている。「ヤ」は、「ね」とも言いかえられるありさまにもなっている。——上の『仙台の方言』の例もそうであった。なお、同書には、

「餅かぶれしたこら。こいなかぶれもちになんね<sup>うち</sup>中、水さ漬ければいかったやー」（餅がかびましたよ。こんなかび餅にならない中に水に漬ければよかつたねえ）

などとある。

よびかけの「ヤ」は、「ヤーイ」の音形にもなっている。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞には、諸態が見えて興味ぶかい。まず、「ナヤ」がさかんである。（「ナーヤー」「ナヤー」ともある。）県北では、

○サーミ<sup>ミ</sup>[i]ー ナヤー。

さむいねえ。

○ゼンゼン<sup>ゼン</sup> ワガンネ<sup>ン</sup>ー<sup>ン</sup>ダ モノナヤー。

全然わからないんだものねえ。

などとある。「ナヤ」の「ヤ」の音調が、特別にきわだちがちである。

○オラ<sup>ラ</sup> ジャーネ<sup>ネ</sup>ー ナヤー。

おれは知らないねえ。

のような音調になることも（上例も）、別にありはする。『仙台市史』6<別篇4>には、「ナヤ」に関して、

感動のナアに呼掛けのヤのついたもの。「この花たまげて美しいナヤ。」

との説明が見える。『仙台の方言』には、「お前も聞いたらうが困つたものだ。」の言いかたの、

おめー<sup>め</sup>聞い<sup>き</sup>だべ<sup>べ</sup>どきに<sup>に</sup>（困つたもんだなや（男）ねす（女）

が見える。「なや（男）」が注意される。石巻での調査経験であるが、人々は、

「ナヤ」を、あまりよいことばとはしていないようであった。ともあれ、県下に「ナヤ」はよく流行している。秋田県下だと、本県下の「ナヤ」は「ナー」と言われている。「ナヤ」に類似の「ナンヤ」もあるか。県南で聞いた、「ホダ<sup>ナ</sup>ニヤ。」(そうですね。)は、「ニヤ」文末詞をとらえさせるものなのかどうか。

本県下に「ネヤ」もおこなわれている。注目すべきことである。「ネヤ」は、けっして関西地方流のものにはとどまらない。)『仙台の方言』には、

(女) あのね、もし、(同等の親しい者、又は目下の者への呼びかけ)

「ねや」より多く使はれる。 「あれな」に対する語。

との記事が見える。私は、松島湾岸の一地で、「ネヤ」もかなりよくおこなわれるのを聞いた。——したしく言うことばであるという。

○ホツ[i]テ、ネヤ。

そしてねえ。

などがその例である。なお、

○ミ[i]ヤギケンデモ、チ[i]ガウベツチャ、ネヤ。

宮城県でも、所によって、方言がちがうでしょうねえ。 (中男  
——藤原)

などの例がある。「ワネヤ」などともある。(「ナヤ」のばあいにも、「サナヤ」などの言いかたがなされてもいる。)「ナヤ」が存在する所に「ネヤ」が存在するのは、存在して当然のことではないか。両者は同気分でつかわれてもよいはずである。「ネンヤ」形もあるのか。

「サヤ」の言いかたがある。

○オレ、ダス[ü]ンデ、ネー、サヤー。

おれが(錢を)出すのではないのだよ。

は、その一例である。

「ゾヤ」の言いかたもある。

つぎに、「カヤ」の言いかたがさかんである。「カヤ」が「ガヤ」と発音さ

れることも多い。——「カヤ」は問いにもなっており、また、受けひきのことばにもなっている。

「ノヤ」の言いかたもよく聞かれる。これはだいたい問いの用にたっている。おなじく問いの「ノッシャヤ」の言いかたも、よく聞かれるものである。『仙台の方言』には、

「なにひとりくちたってんのっしゃや」(何をひとりこと言つてるのさ。) などとある。ところで、同書には、また、

「あんまりわかんねからまづ、はっけおいてもらうかと思うのっしゃや」  
(あまり解らないから、占ひして貰はうと思ふのだよ)

などと、自己の思いを言う「のっしゃや」も見える。(p. 572)

「トヤ」(「ドヤ」とも)の言いかたが、またよくおこなわれている。なにかを伝えて言うことばになっている。ところで、

「よく氣つけてとかねと、いぼこになったらとけえんとや」(よく氣をつけて解かないと、むすぼれたら解けないわよ)

「寒くなると思うだけでもきにひまなくてねす、雑誌きたって小説よむべともおもいんとや。」(寒くなると思ふだけでも暢気になれないでねえ、雑誌がきても小説を読まうとは思はないよ)

など、自己の思いを言う「トヤ」もある。(『仙台の方言』)

「チャヤ」の言いかたがある。石巻弁での一例は、

○オレニ<sup>〔i〕</sup>モ ケロ チャヤ。

(わしにも)くれろってばよお。

である。

「テバヤ」「デバヤ」もある。

○フラッタ デバヤー。

笑ったってばよ。

は、県北でのその一例である。

「オンヤ」がある。

○タイシ[i]タ モンダ オンヤー。

たいしたものだなあ！（私が“こうしてくわしく書いておかないと、あとでわからなくなりますから。”と言って、カードにいろいろ書くのに対して、一老男がこう述べた。）

などとある。（「オン」は「もの」に相当するものらしい。）

「ワヤ」もある。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条から例をひくならば、

f …… ヤー      ズゼエムン      ハコベワヤーノ      リクツデ  
『やあ      次左衛門      運べよ』と      いうわけで

3) 人名。当時の小使さんの名前。

などがとりあげられる。

## 山形県

本県下の「ヤ」では、つぎのような用法がとりたてられる。

よびかけの「ヤ」がある。

命令の「ヤ」がある。県東北の新庄弁では、

○コッチャ デハラッサイ ヤー。

こっちにいらっしゃいよ。

○コッチャ ゴザラッサイ ハー ヤー。

こっちへおいでよねえ。

などと言われている。後者例では、「ハー」のあとに「ヤー」があって、「ヤー」のよびかけが明瞭である。——気のおけない言いかたであるという。以上、命令とは言いながら、ていねいな勸奨である。おなじく新庄弁の、

○ホンタ ゴト ス[ü]ンナ チャヤー。

そんなことをするなよ。

は、通常命令のものである。（「チャヤー」とある。）『山形県方言集』には、

あんまりあらげんなやあ。(余りあばれるなよ。)

などの例が見える。斎藤義七郎氏は「勸奨的語法『〇〇ンダ』(山形県村山地方の例)」「『言語生活』第七十八号 昭和33年3月)で、

親が子どもに対して「学校におくれると悪いから早くエゲ(行け)」と命令的に言うべき所を「早くエグンダ」(普通更に終助詞をつけて「エグンダナ」「エグンダヤ」「エグンダチャ」という)と語尾下り調に言うと、やわらかい婉曲な勸奨的表現となつて、(早く行ったらどうか、早く行けばよいのに、ねえ早く行きなさいよ)という情愛こもった感じがする。

と述べていられる。

さそいの「ヤ」がある。「アベ ヤー。」(行こうよ。)|「アベ チャヤー。」(いっしょに行こうよ。)などと言われている。新庄弁の、

○ハジ[i]メヤンス[ü]ベ ハー ヤー。

はじめましようもうねえ。

も、さそいの表現であろう。

問いの「ヤ」がある。「ナンボダ ヤー。」(いくらなの?)などと言われている。三矢重松氏は『荘内語及語釈』で、

や (以下は第四種で語の終につくのだ)。疑問に用ゐるのは横柄な軽蔑した様な場合又極存在な語に。

何や(ナニカ)

誰書いたなや(ダレ書イタノカ)

感嘆なのは

今日は日曜だや(日曜ダッタナ) 自省の語

是は立派だや(立派ダナ)

忘れんなや(忘レルナネ)

なんでがんすや(何デゴザンスネ)

おらもうけらや(オイラモウ帰ラウワイ)

遊ぼうでや(アソビマセウヨ)

前提法に付くのは色々の意味になる。

ひよつとして間違つたらや (……タラ何様ショウ)

<sup>だれ</sup>誰かも<sup>バツ</sup>をばや (誰構フモノカ)

せ<sup>エ</sup>つだ (セエツゲダ) 事したて出来るばや (ソレ式ノ事ヲンタリト  
テ出来バコソアラメ 出来ヌモノナリ, 止ミネ〜)

やだ<sup>で</sup>ばや (厭ダツテヘバサ)

と記述してられる。種々の「ヤ」が見られ、当地方独自の「バヤ」が見られる。(最後例の「やだ<sup>で</sup>ばや」は、「いや<sup>だ</sup>ッテバヤ。」というのか。)

「よ」(非命令のばあい)と言いかえられる「ヤ」が、よくおこなわれている。

○ヨーヤラサット デキ [kçī] タ ヤー。

ようやくできたよ。

は、県北での一例である。『全国方言資料』第1巻の「山形県東田川郡黒川村」の条には、

mエマ ココサ ゼン オエタケドヤ

いま ここに お金を 置いたけれどもよ。

とある。『山形県方言集』には、

今日はみんな遊ばねで勉強すつことだや。(今日はみんな遊ばないで勉強することだよ。)

というのが見える。(意味は命令表現になっていよう。)<sup>よ</sup>と言いかえてもよければ、「ね」と言いかえてもよいというようなものもある。

感嘆の「ヤ」もおこなわれている。

「ヤ」が「ヤイ」形にもなっているか。外村繁氏の作品「東北」(『中央公論』昭和25年5月)には、

「いやあ、ほがやい。」(あゝ、そうかい)

(湯ノ目のあんつあん→甚四郎あんつあん)

「……………おぼこ十二人も産まねかやい。」

(停車場のおんつあん→てい子)

などである。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞を見れば、「(「ヤナ」というのもあるけれども)「ナヤ」がよくおこなわれている。

○サム[ü]イ ナヤー。

さむいねえ。

というようなよびかけの「ナヤ」もあれば、また問いの「ナヤ」もある。斎藤義七郎氏の『村山方言会話集』には、

母「スゲ<sup>△</sup>オ<sup>○</sup> ンサ ネナテ(又は、ナンシテ) ガツコサ、エガネナヤ」。

(茂夫 お前 どうして 学校に 行かないのか)

というのが見える。ただし、問いの「ナヤ」には、「ノヤ」からの転ということも考えられるか。つぎには、新庄弁の単純な「ナヤ」をかかげる。

○フツ<sup>△</sup>タ<sup>○</sup>リ ハッ<sup>△</sup>ダ<sup>○</sup>リ コマ<sup>△</sup>ツ<sup>○</sup>タ モン<sup>△</sup>ダ<sup>○</sup> ナヤ。

降ったり晴れたり、こまったもんだねえ。

「ネヤ」もおこなわれている。

○ハ<sup>△</sup>サ<sup>○</sup>ン<sup>△</sup>デ<sup>○</sup> ア<sup>△</sup>ガ<sup>○</sup>ツ<sup>△</sup>テ<sup>○</sup> ケ<sup>△</sup>ヤ<sup>○</sup>ッ<sup>△</sup>シ<sup>○</sup>ヤ<sup>△</sup>イ<sup>○</sup> ネヤ。

挟んで召しあがってくださいね。(中男→藤原)

○ン<sup>△</sup>ダ<sup>○</sup> ヅ[ü]ネヤー。

そうだってことだねえ。(老男問)

は、山形市を出ての西南方で聞いたものである。

○ン<sup>△</sup>ダ<sup>○</sup> ン<sup>△</sup>ダ<sup>○</sup> ン<sup>△</sup>ダ<sup>○</sup>。アノ バス[ü] マガリ[ī]カドノ ネヤ。

そうなのそうなの。あのバスの曲り角のねえ。(中女問)

は、酒田駅で聞きとめたものである。『日本方言の記述的研究』に寄せられた、斎藤義七郎氏の「山形県北村山郡東根町」には、

neja (強意) [hōdadzū neja] (そうだわね), [honnaeke neja]

(そうでなかったよね)

との記述が見える。宮城県下に対して、本県下にも「ネヤ」のおこなわれているのが注目される。もっとも、東北弁でのことである。「ネヤ」の「ネ」は [ne] と発音されがちであり、したがって、ちょっと聞きには、これが「ニヤ」に近くも聞こえる。いずれにしても、「ネヤ」ことばが、べつにわるいことばではないのが注意される。

「ノヤ」もある。『山形県方言集』には、

のや noya 感動詞 ね 庄内 「これ俺ののだ。」「ほだのや。」  
 (「さうですね。」)

との記述が見える。「ノー」のさかんな庄内に「ノヤ」もあるのは、もっとも  
 のことに思われる。

さきの、外村氏の「東北」には、「ゼヤ」が見えている。「放つておけば、一  
 日でも立つて人だぜや。」などとある。

伝聞の「トヤ」がある。「ドヤ」と言われがちである。その「ドヤ」に近い  
 形の「デヤ」もあるか。

問いの「カヤ」があり、ほとんど「ガヤ」と言われている。

問いの「ノヤ」がある。

「バヤ」は庄内地方にいちじるしいものであろうか。さきの三矢重松氏のも  
 のについては、『山形県方言集』の、

いろばや irobaya 連続語 いりませんよ 庄内 そんなものいろば  
 や。(そんなものいりませんよ。)

などをあげることができ、また、斎藤秀一氏の「庄内方言の副詞」(『方言と土  
 俗』第四巻第一号 昭和8年5月)の中の用例、

「シエーホデ贅沢志て置えて、今更暮ラ志困ルタて誰知ロバヤ」

などをあげることができる。私が酒田駅で聞いた一例は、「アロー バヤ。」  
 である。「バヤ」は、いわゆる反語表現にたつのがその本性であろうか。――  
 斎藤義七郎氏は、『方言学講座』第2巻に寄せられた「宮城・山形」で、

バヤ。庄内で。(どうしたというんだ)疑問。  
ド-シタ・バヤ

とするしてられる。「出来ろばや」など、「バヤ」の直前の形が「〜ろ」であるのは、注目すべきことである。ところで、斎藤義七郎氏は、上の「宮城・山形」で、

バ・バヤ。山形の若い女性に。(そうなのよ、 そうでないわよ) 咏歎。  
ホダ・バ ホンナエ・バヤ

ともしてられる。ここには、「ほんなえ」を受けた「バヤ」が見られる。いったん「バヤ」が成立すると、これの使用は、また、自在になっていたのであろうか。さて、「バヤ」の起源は何であろう。三矢氏は、上掲のような、実例の解説を示してられる。

「オンヤ」という複合形も見られる。(「オン」は「もの」に相当するものであろう。)『全国方言資料』第1巻の「山形県東田川郡黒川村」の条には、

*m*ン      ソノウチ   アメデモ   フッテケバ   ヤジャカネンダオンヤ  
うん、   そのうち   雨でも   降ってくると   だめだからね。

というのが見える。

#### 秋田県

本県下では、「ヤ」の、つぎのような用法が、おもにとりたてられる。

命令の「ヤ」がある。「コッチャ   コイ   ヤ。」(こっちに來いよ。)などと言われている。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条に見られる、

*f* ハイ       $\left( \begin{matrix} m & \text{エ} \\ & \text{え} \end{matrix} \right)$       ドーダゲヤ       $\left( \begin{matrix} m & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{matrix} \right)$       ヤスンデクナシエヤ  
はい。      どうです。      やすんでください。

というのでは、勸奨表現での「ヤ」が見られる。

さそいの「ヤ」がある。

○イグ[ü]べ      シ[i]ヤ。

行こうよ。

は、北部、東能代での一例である。

問いの「ヤ」がある。

○ナシ[i]テ ヤー。

なぜだ？

は、県中部奥での一例である。「……………〜ベヤー。」の推量の問いもよく聞かれる。

「よ」（非命令）と言いかえてよい「ヤ」がある。『秋田方言』には、

ごめや（連）〔市\*〕御免よ。 ・市=秋田市

んでねあんすや（連）〔平\*〕さうではありませんよ。 ・平=平鹿郡

などが見られる。私が東能代で聞いたものは、「ナモ ヤ。」（「何もよ。」“ちがいます。”）などである。県中部奥で聞いたものには、

○アツツァ ランゾォ ケンテ ヤ。

ねえさん、ラジオを消してよ。 （老女→孫嫁）

がある。

「ね」と言いかえてよいものもある。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条には、

mウーン ナーニ ワジカ シルシヨバリヤー

うん、なあに わずか するしばかりでねえ。

というのが見える。「よお」と言いかえてもよいものであろう。男鹿半島の船川港で聞いたものには、

○オレノ オカ キョー イネク[ü]テ ヤー。

おれの女房はきょうはいなくてねえ(よお)。

がある。

感嘆の「ヤ」もある。

○キャツァ ヤー。

こいつめ！

は、横手弁での一例である。

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ナヤ」が指摘される。「ソندا ナヤ。」(そうだねえ。)などとあり、「ナヤ」が「ナーヤ」とも言われている。『鹿角方言考』には、

あのな・や 呼ヒカケの声、あのねニ同シト雖モな・ヤト重ネタルトコロニ言ヒ知レヌ暖カミラ感セシム。自下ノ者ニ対シテ用キル。之ヲ約メテあのなァェトモイフ。此ノ場合ハねト全ク同様ナリ。

との記述が見える。

問いの「カヤ」がある。「ガヤ」ともなりがちである。『秋田むがしこ』には、

「これ 貴方<sup>あんだ</sup>どごさ かぶせるのだがや。」

などが見える。

「ケヤ」もあるか。

伝聞の「トヤ」がある。さそいの「シヤ」もある。

#### 岩手県

本県下での「ヤ」には、つぎのようなものが見られる。

単純よびかけの「ヤ」がある。昔話では、「せがれ ヤ。」などとある。

命令の「ヤ」がある。「食<sup>め</sup>せろ ヤ。」「来い ヤ。」などと言われている。

ていねいな言いかたになると、県南一関弁では、

○コッ<sup>チ</sup>ャ キ [kçi] テ ケライ ヤ。

こっちに来てくださいよ。

などがある。県北例は、

○ヤス[ü]マ<sup>ネ</sup>デ イガッ<sup>シ</sup>ャイ ヤー。

やすまないでお行きなさいよ。

などである。県東南隅での一例は、

○マ<sup>タ</sup> オンナハリ<sup>ャ</sup>セ ヤー。

またおいでなさいませよ。

である。昔話の記録に、「…………… 呉ろや。」などというのも見えている。

さそいの「ヤ」がある。

『岩手方言の語彙』には、「旧伊達領」の、「アバエンヤ」(行きませんか)が見える。

問いの「ヤ」がある。『岩手県南昔話集』(『伝承文芸』第六号)には、「そんなじゃそれを借してみらんや」というのが見える。水沢ことばでの一例は、

○ア $\overline{\text{ナタ}}$  コー $\overline{\text{デ}}$  ガシ $\overline{[i]}$ タラ ヤー。

あなた，“こうでしたでしょう？”

である。県中部の東域で聞いた一例は、

○ニ $\overline{[i]}$ ジュ $\overline{[ü]}$ ーナン $\overline{\text{ボダ}}$  ヤー。

二十いくつだ？(年令を問う。)

である。

「よ」と言いかえてよいばあい(非命令)の「ヨ」がある。『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条には、

*m*ホンケヌ ステ ノンダホダヤー

本気に して 飲んだそうだよ。

というのが見える。私は県南で、かつて人から、“だから、場所のかた(「都会の人」の意)は、へんなことに思うでしょう ヤー(よ。)”と、言われたことがある。県北での例をあげるなら、

○ハヤグ オ $\overline{\text{マンマ}}$  ク $\overline{\text{テ}}$ ー ヤー。

早くごはんがたべたいよお(わあ)。

○タ $\overline{\text{ベテ}}$ ー ヤ。

“たべてください。”

などがある。

反語表現の「ヤ」と見てよいものがあるか。『平泉方言の研究』には、「おめあつかったのであすべと、だれあそんなごどすってますべや(少しぞんざ

い)」（おまえあなたが使ったのでしょうよっ、誰がそんなことを知っていきましょうか）というのが見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ナヤ」のおこなわれることがさかんである。「ナヤー」「ナーヤ」ともあり、また、「サム[ü]ーナイヤ。」(さむいねえ。)などともある。「何々だ モノナヤ。」の「モノヤ」もある。

「ノヤ」もあるのか。『岩手方言の語彙』には、「旧南部領」の「ネァケノォヤー」(無かつたよ)が見える。

『全国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条には、  
f トンデ マナクサ ヘァヨータノオ クテァタンダモノェャ

飛んで 目にはいるほどのものを 食べていたんですものね。

とある。末尾に「ェャ」が見られる。県北の「コンヤ アメ フ[ü]ル[ü]ソッダ イヤー。」(今夜は雨が降るらしいよ。)には、「イヤ」が見られるともしうるか。(「ヤー」の訴えがつかいものであるう。)

「カヤ」があり、問いのこれは「ガヤ」と言われがちである。

『岩手方言の語彙』に見られる「旧南部領」の「ヤンタガヤ」(あらいやだ!)は、別の「ガヤ」である。

問いの「ノヤ」がある。

問いの「トヤ」もあり、伝聞の「トヤ」(「ドヤ」とも)もある。

「デヤ」がある。『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条には、

m トヌカク シバ デーズニ シンダデヤ

とにかく 火は 大事に するんだよ。

とある。

「チャヤ」がある。「行け チャヤ。」などと言われている。「チャ」は、「と言やあ」的なものであろう。

「モノヤ」式の「モヤ」がある。「そだ モヤ。」は「そうですよ。」であり、「そでな モヤ。」は「そうではありませんよ。」である。県北、軽米弁での一例は、

○イ<sup>ー</sup>ヤ<sup>ー</sup>, ナ<sup>ー</sup>ニ<sup>ニ</sup>[i], セ<sup>ワ</sup>モナ<sup>ニ</sup>[i]モ デ<sup>ー</sup>キ [kçi] ナ<sup>エ</sup>ンダ  
 モヤ<sup>エ</sup>。

いいや、なあに、せわもなにもできないんだものね。(できないんだよ。)

である。人は、この例の「ヤエ」に関して“「ナー」とながめるのよりも、もっと下のほうの人に対して、「ヤエー」と言う。”と語った。

「モヤ」に相当する「オヤ」もある。(「モノヤ」は「モンヤ」となり、「モンヤ」は「オンヤ」となる。「モンヤ」が「モヤ」になり、「オンヤ」が「オヤ」になる。)

## 青森県

単純よびかけの「ヤ」がよくおこなわれている。県東部での一例は、「ゴダゲ<sup>ヤ</sup>。」(ご大儀さま。)である。県西部での一例は、「チモ<sup>ヤ</sup>。」(なにも、そんなことはしないよ。)である。津軽例、

○ノ<sup>ン</sup>デ キ<sup>タ</sup>バッテ ヤ<sup>ー</sup>。

(酒を)飲んできたけどよ。

などにも、よびかけのさまが明らかである。

さそいの「ヤ」がある。

○オ<sup>ド</sup>ンベ ヤ<sup>ー</sup>。

みんなでおどりましょう。

は、県東南部での一例である。

問いの「ヤ」がある。「ナ<sup>ニ</sup>[i] ヤ。」(何や?)などと言っている。

「よ」と言いかえてよいばあい(非命令)の「ヤ」が、よくおこなわれている。

る。弘前弁の一例は、「ヤス[ü]ミ[i]へ<sup>↑</sup>ヤ<sup>ね</sup>。」(おやすみなさいよ。)<寄りあいの席で別れる時とか、他家を辞去する時とかのあいさつ>である。『津軽方言えはがき』第二輯には、「ワ、ナ、モテ ネエヤ<sup>ね</sup>」（僕か、持つていないよ）というのが見える。『青森県方言訛語』には、「が<sup>ア</sup>ばれ 男でね<sup>エ</sup>や」（お前ばかり男でないよ）などが見える。『野辺地方言集』には、「ヤ」に関しての、

「そうだヤ、ヤは女が多くつかふ。ヤにエを添へてもつかふ。

との説明が見える。

「ね」と言いかえてもよいほどの「ヤ」も見える。県東部での例は、

○モ<sup>ー</sup>シ[i]ワ<sup>ダ</sup> ネ<sup>ー</sup>ドモ<sup>ー</sup>ヤ。

申しわけないけどね(よ)。(電話でのことば)

などである。

県下に、「ヤ」相当の「ヤイ」も見える。十和田湖畔の一例は、

○オ<sup>レ</sup> ド<sup>ゴ</sup>サモ イガネ ヤ<sup>イ</sup>。

わしはどこへも行かないよ。

である。上北郡野辺地町での一例は、

○オ<sup>ラ</sup> コ<sup>ン</sup>ニヤ ド<sup>ゴ</sup>サモ イガネ ヤ<sup>イ</sup>。

わしは今夜、どこへも行かないよ。

である。「ヤイ」は、県東部のいわゆる「南部」によく見られるか。“自分から見て目下に言う”「ゴ<sup>↑</sup>タイギヤ<sup>ー</sup>イ。」(ご大儀ね。)も、「ヤイ」をやどしているものか。

※ ※ ※

本県下の、「ヤ」に関する複合形の文末詞では、「ナヤ」が指摘される。——県東部に見いだされがちのものか。

「イヤ」がある。「カヤ」がある。

「ノヤ」がある。『野辺地方言集』には、「ノヤ」についての説明，“ノと共に女がつかふ。ノヤと云へばた<sup>ノ</sup>といふより一層親みがある。ノは<sup>↑</sup>東京の

ありませんの」のノに当る、たゞノ丈け使ふ場合もある。”というのが見える。

「トヤ」がある。『野辺地方言集』には、「ヤなんだとヤ」の言いかたが見える。昔話の語りなどには、伝聞の「トヤ」がよく出ている。（おおかた「ドヤ」とある。）

ついでに考えることであるが、当地方で頻用されている「ネハ」は、他地方での「ネヤ」に、多少とも似たところがあるかもしれない。

## 十 北海道地方の「ヤ」ほか

命令の「ヤ」がよくおこなわれている。「アレ ミレ ヤ。」（あれを見ろよ。）などと言われている。「…………… 行ケ ヤ。」などのぞんざいな命令のばあいとともに、「…………… 行キナサイ ヤ。」式のていねいな命令の言いかたも、もとよりおこなわれている。

さそいの「ヤ」がおこなわれている。『北海道風土記 童戯と方言』には、「えくべや」（行きますせう）などがある。

問いの「ヤ」もよくおこなわれている。小樽での一例は、「ソんなニタクサン キタラ アツイベ ヤー。」（そんなにたくさん着たら暑かろう？）である。

「よ」と言いかえてよいばあい（非命令）の「ヤ」が、またよくおこなわれている。上の『北海道風土記 童戯と方言』には、「ずれいや（づるいやの転訛）」が見える。土居重俊氏は「北海道方言素描」（『方言研究』第五輯 昭和17年6月）で、「ジンバル（見詰める）」の用例、「アノ男オジンバッテ見てヤッター 逃げタヤ」をあげていられる。「よ」と言いかえてよいばあい、推量の表現やたのみの表現になることもある。

「ね」と言いかえてよい「ヤ」もできている。『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

f コドスワ コリヤ ホーサクダペヤー

ことしは こりゃ 豊作だろかね。

とある。——「ヤー」を、「よ」とよびかけるところと見てもよかろうか。

## ※ ※ ※

北海道地方の、「ヤ」に関する複合形の文末詞では、「ナヤ」「カヤ」(「ガヤ」とも)「デヤ」などが指摘される。

上記の「美唄市西美唄山形」の条には、

fホテ ミズオケダラ オマエ ミズ ハエドゴ ナエーグラエ  
 そして 水おけだって おまえ 水が はいるところが ないくらいに  
 スバツタンダ スバレッケナエヤー  
 凍っているんだ、 凍ったね。

というのが見える。

石垣福雄氏は、『日本方言の記述的研究』に寄せられた「北海道檜山郡江差町」の記述で、「ガヤ」に関して、

共通語の「カイ」に当たる。疑問の意を添える。

ママ クタガヤ「飯を食ったかい」

オメ エがネンダガヤ「お前行かないのか」

と述べていられる。

「デヤ」に関しては、石垣福雄氏の「北海道は方言試練の場 死滅したことばと生き残ることば」(『放送文化』第22巻第2号 昭和42年2月)から、

道南のある漁村で女の子が、共通語なら「私知らないわ」というべきところを「オラ、シラネデヤ」といった。

などの記事をひくことができる。『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条にも、

mソレア イーナー マー ソレダバ ハー ナニヨリノ ゴツォーダ  
 それは いいねえ、 まあ それは もう 何よりの ごちそうだね  
 デヤ  
 え。

とある。

## 十一 むすび

以上、全国にわたって、「ヤ」文末詞の生活を見てきた。

いろいろな用法が見いだされたけれども、原本は、単純なよびかけであると解される。人についてのよびかけは、まったく全国的なものであろう。ところで、いまやこれが、古めかしいことばになりつつあるのが注目される。「ヤ」のよびかけは、時代とともに生きていくことができなくなっている。——「ネーヤ。」(ないよ。)の言いかたが、感じのよくないものとされるにいたっていることも注目される。

しかしながら、地方の諸用法では、「ヤ」の親愛感のそうとうに出ていることも認められる。よびかけであれば、もともと、親愛感はやどりうるものであろう。これは、よびかけの、もっとも人間的な事情かもしれない。

「ヨ」と「ヤ」とをくらべると、「ヤ」では、親愛感がうすれやすくもあったかのようである。なぜ、「ヤ」が「ヨ」よりもそうであったのだろうか。「ヤ」の中にどういふ因子がひそんでいるのであろう。ナ行音であれば、〔a〕母音の「ナ」のほうが、〔o〕母音の「ノ」よりも、一般的には、むしろ上品ともされやすい。(ただし、「ネ」〔e〕は、「ノ」よりも上品らしく感じられるにいたっている。)単純感声的な文末詞での感情価値の分化は、まことにふしぎでもある。

上来、私は、「ヤ」の諸用法を見て、たとえば、命令の「ヤ」などと言ってきた。今、あらためて、諸用法の分化発現を整理して見るならば、つぎのようなことが言えようか。もっとも感動的な、よびかけの「ヤ」が、訴えの気もちをつよくするうちに、念おしや命令の「ヤ」になったであろう。命令気分の「ヤ」は、また、勧誘気分の「ヤ」に転化する。(願望気分への「ヤ」に転化することがあってもしぜんである。)さて、対他的な「ヤ」表現が、一方、対内的なものになれば、これは、しきりに自己を表明する「ヤ」表現になる。それに、また諸相が起ころうる。要するに、「単純よびかけ」の度あいが複雑化するに

つれて、そのよびかけの重さが、種々、訴えの類型となっていくたであろう。こうなって、用法の範疇が生起したと見られる。

上来の記述中、私は、多くはかんたんに「命令の『ヤ』」などと言ってきた。これは、かなり便宜的な言いかたでもあることを、あらためて断っておきたい。「命令の『ヤ』」は、命令の表現を完結させる強力効果の「ヤ」である。

「ヤ」や「ヨ」には、とくに、命令表現を収束する効果が大であると言えようか。これは、ナ行音文末詞の「ナ」「ネ」「ノ」などが非命令的用法にたちがちであるのと対照的である。

「ヤ」のかもす文表現品位は、総じて中等品位以下と言える。見さげてのものの言いに、「ヤ」の用いられることが多い。「ヤ」は、おとなが子どもに言うのにふさわしいものでもある。ところで、そういうものであるため、また、「ヤ」がやさしみをを持った言いかたにもなり、さきにも述べた、親愛感の言いかたにもなる。表現の音調が、そういうばあい、ものを言う。(近畿・四国などでの「行け ヤ。」ではない「行き ヤ。」には、「ヤ」にも、しぜん、やさしみがやどりがちである。)

一般に、「ヤー」と長呼されてしかも高品位ということは、まずあるまい。「ヤ」の「ヤイ」形にしても同様である。さらに一考をつけ加えるならば、「ヤ」には、「ワ」(「知らない ワ。」など)ほどの、感情の高揚がなかり。「ワ」表現よりも「ヤ」表現のほうがおちついている。それだけにまた、「ヤ」の言いかたには、投げやりなところもあるか。そこが、「ヤ」の卑俗みというところでもあろう。

「ヤ」に関する複合形の多汎多角的であることは、くりかえして言うまでもない。複合分子として、「ヤ」が上接者になるばあいも合わせ考えれば、「ヤ」の用法の、はなはだしくはばびろいものであることが理解される。

複合形おのおのに、習慣上、アクセントの山のできかたがあつて、これにもまた、注意すべきものがある。——そのことは、すべて、複合形文末詞の対他効果にかかわっている。ナ行音の「ネ」に「ヤ」が下接してできた複合形の

「ネヤ」は、通常、「ネヤ」となっており、男性に用いられることが多く、また、これが、なんの遠慮もなく相手に言いかけられることも多い。

日本語の主体のもとでの「ヤ」のありようには、巨細にわたって、吟味深究すべきものがある。いずれにしても、その「ヤ」の活動の、現実の一々は、日本語の歴史的推移に即応するものであり、日本語生活の社会的な動力を反映するものである。

以下、中巻につづく。

# 索引

○二種の索引を設定する。

○語句排列は、アイウエオ順によらないところもある。

## I 方言事象索引

### 〔ア〕

「ア」音	87, 90, 93, 109
ア行音文末詞	446
アッ	103
アナ	220
アリマス	335
アン	105
アンガネ	106
アンサ	106
アンタナ	169
アンネ	106

### 〔イ〕

イ	190, 446, 447
ィ	41
「イ」音	87
「イ」音尾	448
イナ	167, 169, 178, 190, 194, 201, 202, 205, 207, 212, 219, 224, 226, 240
イネ	330, 334, 350, 352, 355, 357, 361, 362
イ(エ)ネ	366
イノ	261, 264, 266, 285, 288, 292, 310

〔i〕母音	24
イヤ	469, 483, 487, 494, 511, 512 529, 530, 533, 535, 540, 552, 585, 587
イヨノ	264

### 〔ウ〕

ウエーナー	213
ウエーネ	352
ウエノー	289

### 〔エ〕

エ	446, 447, 477
エーノ	273
「エ」音	87
エナ	190, 205, 212, 219, 234
エネ	350, 352, 355, 357, 361
エ〔i〕ネ	339
エノ	288
〔e〕母音	24
エヤ	516, 542
エヰ	585

## 〔オ〕

オ	129
〔オ〕音	87
オキヨ	31
オキルナ	31
オキロ	31
オナ	235, 238
オナー	145
オネ	371
オマイ	35
オンナ	240
オンネ	371
オンノ	315
オンヤ	575
オンヤ	581

## 〔カ〕・〔ガ〕

カ	17, 18, 28, 29, 45
カー	35, 36, 38
カイ	41, 43, 456
カイナ	143, 146, 156, 161, 164, 167, 169, 173, 175, 178, 185, 187, 191, 194, 196, 197, 199, 201, 202, 205, 212, 215, 217, 219, 231
カイ(ニ)ナ	177
ガイナ	147, 179, 186, 192, 195, 202, 207
カイナー	46, 53
カイナー	161
カイニ	389, 403, 424
カイナー	328, 329, 333, 339, 341, 344, 346, 347, 349, 352, 361, 362
カイ(ニ)ネ	355
ガイナー	329, 350
ガ(カ)イナー	352, 355

カイナー	255, 264, 266, 269, 270, 273, 276, 280, 283, 285, 286, 288, 292, 295, 298
ガイナー	254, 276, 295
カイヤ	448, 456, 469, 472, 483, 487, 489, 494, 502, 508, 513, 516, 520, 524, 527, 529, 530, 533, 535, 537, 542, 551
ガイヤ	489, 508, 524, 527, 533
ガ(カ)イナー	535
カイヤイ	513
カイナー	146, 191
ガイナ	147
カイナー	288
ガイナ	254
カイナー	304
カイナー	535
ガサ	202
カイナー	235
カトヤ	535
カナ	32, 47, 143, 146, 156, 161, 164, 167, 169, 172, 173, 175, 177, 178, 182, 184, 185, 187, 191, 194, 197, 199, 201, 202, 205, 207, 209, 212, 215, 217, 219, 221, 222, 223, 224, 226, 227, 230, 231, 240, 242
カ(ガ)ナ	232, 234, 237
カナ(ガナ)	242
ガナ	144, 147, 156, 161, 164, 167, 169, 172, 175, 177, 179, 182, 184, 186, 187, 192, 194, 196, 197, 199, 201, 202, 205, 212, 215, 217, 219, 221, 226, 240
ガナ	209, 212
カナ	47
カナ	156, 161, 164
カナ	230
ガナ	156

カナヨナ…………… 161  
 カナン…………… 156, 161  
 カニ…………… 405, 408, 424  
 カ(ガ)ニ…………… 389  
 ガニ…………… 423  
 カニ一…………… 400, 407  
 ガニシ…………… 430  
 カニャー…………… 156  
 カネ…………… 328, 329, 330, 331, 332, 333,  
                   339, 347, 350, 352, 355, 357, 358,  
                   360, 361, 362, 363, 364, 366, 371,  
                   372, 373, 375  
 カネ(ガネ)…………… 366  
 ガネ…………… 328, 329, 330, 331, 339, 349,  
                   350, 357, 360, 361, 364, 367, 373  
 ガ(カ°)ネ…………… 352, 355  
 カノ…………… 255, 257, 258, 260, 261, 264,  
                   266, 269, 273, 274, 276, 279, 280,  
                   281, 283, 286, 288, 292, 295, 296,  
                   298, 301, 303, 307, 310  
 ガノ…………… 264, 266, 269, 270, 273, 274,  
                   275, 288, 292, 295, 297, 307  
 カノイ…………… 280  
 カノン…………… 274, 301  
 「カ+文末訴えア音」…………… 102  
 カヤ…………… 448, 449, 450, 454, 455, 456,  
                   459, 472, 479, 483, 492, 494, 501,  
                   507, 508, 513, 520, 524, 527, 530,  
                   533, 535, 537, 540, 542, 547, 550,  
                   553, 554, 561, 564, 566, 574, 580,  
                   583, 585, 587, 589  
 ガヤ…………… 450, 464, 466, 469, 472, 483,  
                   487, 489, 492, 494, 503, 507, 508,  
                   520, 524, 527, 533, 540, 542, 547,  
                   551, 580, 583, 585, 589  
 「ガヤ」(カヤ)…………… 568  
 ガ(カ°)ヤ…………… 535, 537  
 カヤー…………… 59

カヤイ…………… 524  
 カヤン…………… 535  
 カヨ…………… 507  
 カヨナ…………… 146  
 ガヨナ…………… 147  
 カヨネ…………… 329  
 ガヨネ…………… 329  
 カヨノ…………… 255  
 ガヨノ…………… 254  
 カレーナ…………… 191  
 ガンス…………… 313  
 感声系のナ行音文末詞「ノ」…………… 247  
   「の」助詞系文末詞の「ノ」…………… 247  
 感声系の「ノ」文末詞…………… 310  
 カンタナー…………… 170

[キ]

キッ…………… 115  
 キャー…………… 513  
 キャーナ…………… 156, 179, 191, 212  
 キャーノ…………… 285  
 キャーヤ…………… 472  
 キャナイ…………… 161  
 キャノ…………… 279

[ク]

クサ…………… 66  
 クサナ…………… 165, 167  
 クサネ…………… 332, 333  
 クサヤ…………… 477  
 クンツェア…………… 96  
 クンニャー…………… 420  
 クンニャニ…………… 420

## 〔ケ〕・〔ゲ〕

ケ	41
ケー	35, 41
ケーネ	352
ケーノ	288
ケナ	143
ゲナ	68
ケネ	350, 355
ゲネ	367
ゲ(ゲ)ネ	352
ケノ	280, 292
ゲノ(かいの)	295
ケノ	288
〔ケ(かい)+文末訴えア音〕	102
ケヤ	502, 508, 516, 527, 533, 535, 537, 540, 564, 566, 583
ケヤー	513
〔ケ〕は, 「これ」起源	293

## 〔コ〕・〔ゴ〕

コト	30, 52, 70
〔コト+文末訴えア音〕	103
ゴワンス	335

## 〔サ〕・〔ザ〕

サ	6, 8, 9, 45, 362, 363
サーヘ	325
ザイノ	258
サ行音ザ行音文末詞	131
サ・ザ行音文末詞	45
サナ	155, 160, 197, 199, 210, 221, 226, 229, 240
サナヤ	574
ザニ	394

サネ	365, 366, 373, 374
サネー	362
サノ	283, 296, 300
ザノ	288
サヤ	552, 574
ザンナ	160
ザンノ	261

## 〔シ〕・〔ジ〕

シ(もし)	88
シオナー	236
シテナー	200
〔シ(セ)+文末訴えア音〕	104
シナ	223, 240
シノ	292
シヤ	583
シ〔i〕ヤ	581
シヤ, ジャー	88
ジャ	492
ジャ	69
ジャ, デア	56
〔ジャ〕音	104
〔ジャ〕助動詞	64
〔ジャ〕文末詞	89
ジョ	41
助詞系の「ニ」	398
助詞系の「ニ」文末詞	399, 424, 426, 434
助動詞「へ」(←セ←サイ ＜なさい＞)	93
ジョナ	161

## 〔ズ〕・〔ヅ〕

ズ	94
ズナ	169
〔ズネ〕	339

スヤ…………… 450  
ズヤ…………… 492

〔セ〕・〔ゼ〕

ゼ…………… 45  
せあな…………… 236  
ゼナ…………… 205  
ゼ(ジェ)ナ…………… 212  
ゼネ…………… 355, 357  
ゼネヤ…………… 506  
ゼノ…………… 273, 288, 296  
「ゼ+文末訴えア音」…………… 102  
ゼヤ…………… 506, 524, 540, 580  
ゼヨ…………… 506

〔ソ〕・〔ゾ〕

ソ…………… 70  
ゾ…………… 41, 53, 503  
ゾイナ…………… 175, 178, 182, 191, 196, 197,  
199  
ゾイナ…………… 185  
ゾイネ…………… 341, 352, 355  
ゾイノ…………… 268, 270, 275, 276  
ゾ(ド)イノ…………… 273  
ゾイヤ…………… 483, 489, 494  
ゾイヤ, ドイヤ…………… 513  
ゾカノイ…………… 274  
ゾナ…………… 160, 167, 169, 171, 173, 174,  
178, 182, 184, 185, 187, 191, 199,  
202, 212, 215, 232, 240  
ゾナモシ…………… 53  
ゾニ…………… 400  
ゾネ…………… 341, 347, 352, 360, 367, 373  
ゾ(ド)ネ…………… 329  
ゾネ(「ドネ」も)…………… 342  
ゾネヤ…………… 506

ゾノ…………… 268, 273, 274, 275, 276, 288  
ゾ(ド)ノ…………… 261, 264  
ゾヤ…………… 483, 492, 494, 501, 524, 535,  
537, 542, 546, 553, 566, 570, 574  
ゾヤイ…………… 546, 547, 553  
ゾラ…………… 71  
ゾン…………… 41

〔タ〕・〔ダ〕

ダ…………… 63, 68  
ダーナ…………… 179  
ターネ…………… 331  
ダーヤ…………… 529  
タイナ…………… 156, 162, 164, 167  
ダイナ…………… 162, 179  
タイナイ…………… 162  
タイナン…………… 162  
タイネ…………… 330, 331, 332, 333  
タイノ…………… 260, 261  
代名詞系転成文末詞…………… 46  
ダイヤ…………… 495, 553  
ダガナ…………… 177  
ダガヤ…………… 550  
「ダ」助動詞…………… 71  
ダデナ…………… 177  
タナ…………… 43, 169  
ダナ…………… 201, 221  
タナチコ…………… 43  
タネ…………… 331, 333  
ダネ…………… 361, 366  
ダノ…………… 301  
ダヤ…………… 530, 551, 553  
ダヤイ…………… 554  
タラ…………… 30  
タンシ…………… 96  
単純感声系の「ニ」…………… 429  
タンナ…………… 162

タンナーイ	162
ダンネ	361, 362

## 〔チ〕

チコ	43
チナ	146, 162
チヤ	469, 477
チヤー	454
チャネ	355, 371
チャノー	297
チャヤ	575, 585
チャヤー	576
長音, 「イ」音	149

## 〔ツ〕・〔ヅ〕

ヅ (ズ) ャネ	374
ツカナ	156
ツナ	146, 156, 161
ツネ	46
ツノ	255
ツバナ	162
ヅモナ	237
ツヤ	466, 469

## 〔テ〕・〔デ〕

デー	57
テーネー	335
テナ	146, 161
デナ	164, 172, 175, 177
テネ	357
テノ	266, 297
デノ	264, 266, 288
「デ」の文末詞	189
テバ	30
テバナ	223

テバネ	357
テバヤ	575
テヤ	466, 469, 472, 473, 474, 477, 483, 487, 489, 493, 494, 503, 513, 524, 533, 535, 538, 541, 542
デヤ	483, 487, 555, 568, 580, 585, 589
でょんナ, ジョ ンナ	236

## 〔ト〕・〔ド〕

ト	68
トイナ	162, 213
ドイナ	191, 199
トイナー	144
トイニ	423
トイネ	333, 352
トイ (エ) ネ	355
トイノ	264, 289
トイヤ	483, 489, 494, 503, 513
ドイヤ	529
トエノ	289
ドーヤー	454
ドカイニ	389
ドカイヤ	464
トカナ	156, 161
トカナイ	161
トカ (ガ) ニ	389
トカネ	331
トカヤ	479
トコトイネ	355
トコトネ ャー	352
トサナ	155
トタイナ	162
トナ	143, 146, 156, 161, 167, 172, 177, 186, 192, 235
ドナ	143, 146, 155, 169, 172, 182, 191, 199, 202
トナイ	156

トナン…………… 156, 161  
 ドニ…………… 389  
 ド(ゾ)ニ…………… 389  
 トニ…………… 394  
 ドニ…………… 388  
 トネ…………… 330, 331, 352, 355, 357, 373  
 ト(ツ)ネ…………… 329  
 ドネ…………… 328  
 トノ…………… 255, 258  
 ド(ゾ)ノ…………… 255  
 トノ…………… 288  
 トバイネ…………… 331  
 トバナ…………… 162  
 トバナイ…………… 162  
 トバネ…………… 331  
 トミー…………… 70  
 トモイナハイ…………… 70  
 トヤ…………… 464, 466, 469, 472, 477, 479,  
 483, 489, 492, 494, 513, 529, 540,  
 580, 583, 588  
 トヤ(「ドヤ」とも)…………… 575, 585  
 トヤ→ドヤ…………… 541  
 ドヤ…………… 568, 580  
 トヤナ…………… 234  
 トヨ…………… 143  
 トヨニ…………… 389  
 トヨニー…………… 388  
 トヨネ…………… 328  
 トヨノ…………… 255, 258  
 ドンケーノ…………… 294

## [ナ]

ナ…………… 24, 32, 41, 42, 43, 45, 46, 48, 56,  
 71, 75, 83, 132, 245, 443, 496, 500  
 ナ→(ナハイ)…………… 515  
 ナ…………… 6, 51, 53, 57, 74  
 ナーエ…………… 202

ナーシ…………… 341  
 「ナー」長呼形…………… 133  
 ナーナー…………… 143  
 ナーモ…………… 154  
 ナーヤ…………… 464, 489, 512, 529, 546, 550,  
 552, 562, 568, 570, 583, 585  
 ナーヤイ…………… 546  
 ナーヤン…………… 464  
 ナーヨ…………… 202  
 なァーん…………… 209  
 なあんおす…………… 233  
 ナイ…………… 24, 41, 133, 134, 136, 141, 145,  
 148, 150, 158, 163, 165, 171, 176,  
 181, 184, 193, 196, 197, 198, 202,  
 206, 208, 210, 211, 215, 216, 218,  
 223, 224, 226, 227, 229, 230, 234,  
 237, 242  
 ナイ, ナエ…………… 228  
 ナイナ…………… 178  
 ナイヤ…………… 476, 519, 585  
 ナイン…………… 229  
 ナウ…………… 223  
 「ナウ」形文末詞…………… 153  
 ナエ…………… 218, 232  
 ナエイ…………… 206  
 ナ行音…………… 441, 590  
 ナ行音の「ヌ」…………… 440  
 ナ行音文末詞…………… 45, 75, 130, 319, 441,  
 442, 443, 445  
 ナ行音文末詞  
 「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」…………… 131  
 ナ行音文末詞の「ノ」…………… 317  
 ナタ…………… 34  
 「ナ」短呼形…………… 133  
 ナッソ…………… 42  
 ナッス…………… 36  
 「ナ」と「ノ」…………… 247  
 ナナ…………… 159, 204

ナナー	154
ナノ	288
「ナ」の属	132
「ナ」ほか—南島地方	134
「ナ」ほか—九州地方	140
「ナ」ほか—中国地方	170
「ナ」ほか—四国地方	180
「ナ」ほか—近畿地方	187
「ナ」ほか—中部地方	203
「ナ」ほか—関東地方	221
「ナ」ほか—東北地方	227
「ナ」ほか—北海道地方	241
ナフ	185
「ナ+文末訴えア音」	98
「ナ」文末詞	243, 245
ナモ	359
ナモ, ナム	215
ナモン	25, 30, 41, 43
「ナモン」類	71, 385
ナヤ	46, 448, 512, 516, 519, 535, 539, 542, 546, 556, 566, 568, 570, 573, 579, 583, 585, 587, 589
ナヤナー	164
ナヨ	160
ナラ	64
ナリャ	64
ナン	24, 133, 134, 148, 152, 158, 171, 174, 181, 183, 184, 207, 211, 214, 219, 225, 227, 239, 242
ナンシ	42
ナンタ	46
ナンホイ	219
ナンモ	97
ナンヤ	574
〔二〕	
ニ	378, 380

ニャ	338
ニャー, ネ	230
ニー	185, 351
「ニー」「ニン」	404
ニージ	393
ニュー	350, 354
「ニ」形	433
ニン	393, 411, 429, 430, 437
「ニン」「にし」「ニス」[nisi]	431
「に」助詞系と見られる文末詞	415
ニセ	410, 411
「ニ」文末詞	337, 384
ニナ	219, 221
「ニ」の属	378
「ニ」ほか—南島および九州 地方	385
「ニ」ほか—中国地方	396
「ニ」ほか—四国地方	400
「ニ」ほか—近畿地方	405
「ニ」ほか—中部地方	419
「ニ」ほか—東国地方	426
ニヤ	198, 352, 392, 393, 394, 398, 401, 402, 405, 405, 410, 411, 413, 415, 416, 417, 423, 448, 512, 526, 530
ニャ	158, 171, 183
ニャ, ネャ	89
ニャー	141, 151, 163, 166, 187, 198, 204, 206, 208, 210, 215, 218, 223, 225, 394, 402, 405, 422
ニャー→「ニャ」系	185
ニャー→ネー	176
ニャーナ	155
ニヤイ	394
ニャイ	211, 394
「ニャ」文末詞	89
ニヤン	174
ニユ	429

ニヨ…………… 417  
 ニョ…………… 390, 417, 424  
 ニョー…………… 281, 290, 391, 396, 417,  
 418, 421  
 ニョーン…………… 253  
 ニン…………… 185, 392, 403, 432

〔ヌ〕

ヌ…………… 311, 437, 438, 439  
 ヌイ…………… 438  
 ヌー…………… 437, 439  
 「ヌ」の属…………… 435  
 「ヌ」文末詞…………… 440

〔ネ〕

ネ…………… 5, 12, 13, 15, 16, 17, 18, 19, 23,  
 28, 29, 34, 37, 48, 52, 56, 57, 71,  
 75, 319, 375, 380, 427, 443, 455,  
 456, 457  
 ね…………… 34  
 ネア…………… 99, 100, 338, 349, 351, 354,  
 355, 370, 371, 372  
 ネア, ニア…………… 337  
 ね或ねい(感詞)…………… 398  
 ネイ…………… 327, 330, 342, 354, 356, 367,  
 368, 371, 377  
 ねい…………… 365  
 ねい…………… 34  
 ネー…………… 387  
 ネェス…………… 370  
 ネーナ…………… 199, 202  
 ネーネ…………… 357  
 ネーへ…………… 325  
 ネーヤ…………… 476, 479, 520, 532, 546  
 ネーヤイ…………… 523  
 ネサ…………… 372

ネシ…………… 373, 429, 430  
 「ネシ+文末訴えア音」…………… 104  
 ネス…………… 372  
 ネナ…………… 204, 240  
 「ネ」に関する複合形文末詞…………… 325  
 ネノ…………… 283  
 「ネ」の成立…………… 321  
 「ネ」の属…………… 319  
 「ネ」ほか——南島地方…………… 325  
 「ネ」ほか——九州地方…………… 326  
 「ネ」ほか——中国地方…………… 334  
 「ネ」ほか——四国地方…………… 341  
 「ネ」ほか——近畿地方…………… 343  
 「ネ」ほか——中部地方…………… 349  
 「ネ」ほか——関東地方…………… 363  
 「ネ」ほか——東北地方…………… 368  
 「ネ」ほか——北海道地方…………… 375  
 「ネ」の分布…………… 320  
 「ネ」の用法…………… 324  
 「ネ+文末訴えア音」…………… 99  
 「ネ」文末詞…………… 399  
 ネハ…………… 70, 588  
 ネミ…………… 368  
 ネヤ…………… 75, 76, 83, 102, 334, 342, 346,  
 347, 349, 352, 401, 402, 405, 413,  
 433, 483, 491, 499, 500, 503, 505,  
 508, 520, 523, 526, 530, 535, 537,  
 539, 542, 546, 568, 574, 579  
 ネヤ, ニヤ…………… 532, 580  
 ネヤ, ニャー…………… 492  
 「ネヤ」(「ネーヤ」も)…………… 471  
 ネレ…………… 370  
 ネン…………… 351, 354, 356, 359, 365, 367,  
 370, 373, 377  
 ネンガナ…………… 195  
 ネンナ…………… 192, 194  
 ネンヤ…………… 448, 574

## 〔ノ〕

ノ	24, 48, 56, 71, 75, 76, 443, 500
ノア	272, 306
ノ	38, 42, 50, 371
ノ	302
ノウエ	301
ノシ	183, 273, 342
ノヤ	464, 471, 473, 476, 479, 482, 487, 489, 491, 494, 500, 508, 519, 524, 539~540
ノヤイ	524
ノラヤ	519
ノイ	24, 250, 257, 258, 260, 273, 276, 280, 283, 291, 294, 300
ノイ (のよ?)	263, 265
ノイネ	291
ノイノ	291
ノイヤ	448, 473, 482, 494, 524, 529, 537
ノイン	280
ノシ	43, 60, 277
〔ノシ+文末訴えア音〕 (〔ノ〕 は助詞系文末詞)	105
〔の〕助詞系の〔ノ〕文末詞	307, 310
〔の〕助詞系の〔ノン〕	269
ノッシャ	571
ノナ	184, 187
〔のに〕系の〔ニ〕	425
ノネ	363
〔ノ〕の属	246
〔ノ〕——南島地方	251
〔ノ〕ほか——九州地方	251
〔ノ〕ほか——中国地方	262
〔ノ〕ほか——四国地方	271
〔ノ〕ほか——近畿地方	276
〔ノ〕ほか——中部地方	286

〔ノ〕ほか——関東地方	304
〔ノ〕ほか——東北地方	311
〔ノ〕ほか——北海道地方	316
〔ノ+文末訴えア音〕	99
ノマイ	36, 259, 473
ノモシ	47
ノヤ	476, 482, 500, 519, 532, 539, 542, 575, 580, 585, 587
〔ノヤ〕の〔ネ〕	346
〔ノヤ〕の〔ネ〕〔ネン〕	345
〔のや〕の〔ネー〕〔ネ〕〔ネン〕	347
〔のや〕の〔ネン〕	348, 350
〔ノヨノ〕が〔ネーノ〕とも なっているか	266
ノラ	519
ノワ	272
ノワエノ	293
ノン	24, 250, 260, 263, 265, 268, 272, 273, 283, 285, 288, 290, 299, 302, 306
ノ (ン) カノ	264
ノンケノ	293
ノンシ	277, 279, 300
ノンタ	263
ノンナ	184
ノ (ン) ヤ	513
ノ (ン) ヨノ	266

## 〔ハ〕・〔バ〕

ハ	70
バーナ	157
バイナ	163
バイナイ	163
バイネ	331
バナ	162, 167, 169
バナーン	157
バナイ	162

バナナー	163
バナン	162
バノ	261
バヤ	472, 578, 580
バヤ, バイヤ	484
ハラ	71

## 〔ヒ〕

ヒヤ	451
ヒン	453

## 〔ブ〕

文末「ア」音	88
文末訴えア音	87, 89, 91
文末訴え「エ」「イ」「オ」「ン」音	109
「エ」音	109
「イ」音	110
「オ」音	110
「ン」音	111
文末訴え音	45, 85
文末詞「ノ」	246
文末詞「ラー (オー)」	116
九州地方の「ラー (オー)」	117
九州外に関連事象を見る	123

## 〔ベ〕

「ベ」助動詞	92, 93
--------	--------

## 〔木〕・〔朮〕

ホイヤ	484
ポーヤ	454
ホカナ	172

## 〔マ〕

ましょう (ミツツ)	421
マネ	352
マンナー	144

## 〔ム〕

ムナ	162
ムヌヤ	454
ムンナ	147, 162
ムンノ	255, 259
ムンヤ	455

## 〔メ〕

メー	356
----	-----

## 〔モ〕

モン	7, 41, 43
モン, モ, シ	42
モンァ	43
モナ	162, 237
モナ, ムナ	232
モナー	213, 219
モナヤ	585
モネ	330, 367
モネー	375
モネーヤ	465
モネナイ	156
モノ	30, 70
モノ, オノ	235
モノナ	235, 237, 242
モノネ	366, 375
モノ (ン) ネ	328
モノノ	307

モノヤー	567
モヤ	464, 465, 542, 586
モヤ—オヤ	586
モンナ	144, 147, 156, 165, 167, 169, 213, 221, 230, 240
モンナ, オンナ	162
モンナ, ムンナ, オンナ	232
モンナーイ	156
モンナイ	162
モンニ	408
モ(ム)ンニェ	389
モンネ	330, 331, 355, 357, 366, 367, 371, 373
モンノ	255, 259, 260, 261, 275, 297
モンハン	144
モンヤ	448, 464, 472, 535

## 〔ヤ〕

ヤ	18, 32, 41, 45, 46, 445, 447, 477, 504, 590, 591
ヤ→ナハレ	515
ヤー	57, 58, 59
ヤーイ	548, 573
ヤーナ	167
ヤーン	476
ヤイ	448, 463, 468, 471, 473, 482, 489, 491, 499, 511, 516, 519, 522, 526, 528, 530, 532, 534, 537, 539, 542, 545, 548, 550, 552, 554, 556, 558, 560, 562, 563, 564, 578, 587
ヤイネ	352
ヤイ(エ)ネ	366
ヤ行音文末詞	45, 445
ヤ行音文末詞, 「ヤ」「ヨ」	131
ヤ行音文末詞の系列	446
ヤナ	160, 166, 177, 190, 207, 211, 217, 220, 222, 223, 224, 232, 234,

240, 242, 448, 579

ヤナー	524
ヤネ	333, 339, 364, 366, 374, 375, 559
ヤノ	254, 261, 266, 268, 269, 273, 274, 279, 448
「ヤ」の属	447
「ヤ」ほか—南島地方	449
「ヤ」ほか—九州地方	459
「ヤ」ほか—中国地方	480
「ヤ」ほか—四国地方	495
「ヤ」ほか—近畿地方	509
「ヤ」ほか—中部地方	531
「ヤ」ほか—関東地方	555
「ヤ」ほか—東北地方	568
「ヤ」ほか—北海道地方	588

「ヤ」の発音がしぜんに変じて

「ニャ」となったか	478
「ヤ」の「ヤイ」形	591
「ヤ」文末詞の生活	590
ヤラ	42
「ヤレ」	551
ヤン	448, 453, 463, 468, 476, 479, 482, 507, 516, 523, 530, 535, 563, 564
ヤンタ	473
ヤンナー	232

## 〔ヨ〕

ヨ	18, 25, 26, 40, 42, 45, 46, 53, 445, 447, 449, 458, 477, 493, 504, 590, 591
よ	33
ヨ—	26, 39, 310
ヨナ	143, 146, 160, 164, 167, 173, 178, 182, 184, 190, 197, 199, 202, 211, 217, 219, 221, 223, 224, 226, 227, 229, 240, 242

ヨニ…………… 408  
 ヨ (ヨ-) ニ…………… 400  
 ヨネ…………… 328, 331, 336, 360, 364, 365,  
 366, 367, 375  
 ヨノ…………… 254, 258, 261, 264, 266, 269,  
 273, 274, 275, 288, 296, 298  
 ヨノ-…………… 42  
 ヨヤ…………… 479, 506, 520, 532, 540, 566  
 ヨヤイ…………… 550

[ラ]

ラ…………… 18

[ロ]

ロナ…………… 169

[ワ]

ワ…………… 34, 43, 52  
 ワ-ノ…………… 289  
 ワイ…………… 32, 42, 43, 274  
 ワイエヤ…………… 514  
 ワイナ…………… 147, 167, 179, 182, 192, 195,  
 202, 205, 230, 240  
 ワイ (エ) ナ…………… 182  
 ワイナ-…………… 42, 43, 207  
 ワイニ…………… 423  
 ワイニ-…………… 400  
 ワイネ…………… 346, 350, 361, 366  
 ワイ (エ) ネ…………… 352  
 ワイネ (「ワイネン」も)…………… 355  
 ワイノ…………… 255, 261, 270, 276, 280, 283,  
 286, 292, 298, 303  
 ワイ (エ) ノ…………… 269  
 ワイノ-…………… 289  
 ワイヤ…………… 479, 487, 490, 495, 503, 508,

513, 516, 529, 530, 535, 541, 547

ワイヤ-…………… 53, 58  
 ワエーナ…………… 192  
 ワエナ…………… 147, 192, 200  
 ワエノ…………… 292  
 ワカイノシ…………… 43  
 ワケノ…………… 293  
 ワサナ…………… 200  
 ワテナ…………… 200  
 ワナ…………… 147, 162, 165, 167, 169, 177,  
 179, 187, 192, 195, 196, 197, 200,  
 202, 205, 207, 213, 215, 219, 221,  
 222, 224, 226, 227, 242  
 ワナイ…………… 220  
 ワナノ…………… 269  
 ワニ…………… 389, 408, 424  
 ワネ…………… 339, 346, 347, 348, 350, 352,  
 355, 357, 358, 361, 362, 364, 366,  
 367, 371  
 ワネヤ…………… 574  
 ワノ…………… 255, 269, 274, 279, 280, 283,  
 286, 288, 289, 292, 295, 297, 298,  
 304  
 ワノシ…………… 301  
 ワヤ…………… 465, 472, 495, 503, 524, 529,  
 530, 533, 535, 541, 547, 551, 553,  
 554, 566, 576  
 ワヤ-…………… 458  
 ワヤナ…………… 229  
 ワヤナ-…………… 202  
 ワヨナ…………… 147  
 ワヨノ…………… 255  
 「ワラージ」 「ワライジ」 「ワ  
 ランジ」…………… 149  
 ワラヤ…………… 520

	[ワ]		
ワ, ウォ	.....	123	
ワー	.....	58	
「ワー」「オー」	.....	116	
	[ン]		
「ン」音	.....	87	
	「ン」音尾	.....	448
	ンカメ	.....	261
	ンカヤ	.....	479
	ンタナー	.....	167
	ンナ	.....	187, 212, 214, 216, 217, 219
	ンナ, ニナ	.....	200
	ンネ	.....	361, 362
	ンノ	.....	298, 302
	ンヤ	.....	479, 529

## II 事項索引

### 〔ア〕

愛想ことば	8
上がり調子	10, 20, 24
上げ調子	10, 12, 18, 92
安芸方言	64
アクセント	46
アクセント波	67

### 〔イ〕

生きた会話のキー・ポイント	27
文末詞	27
異形分化	149
出雲弁	89
已然形	32
因幡方言	68
意味	50, 79
表現	79
意味作用	xviii, xix, 40, 44, 51, 133
意味内容	39
意味論	23, 79
意味論的な価値	23
伊予方言	47
隠在の主部	50
隠在の文末詞	42
インドシナ語	18

### 〔ウ〕

訴え	3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 15, 24, 40, 43, 56, 85
訴え音	85
訴えかけ	72

訴えことば	5, 16
訴え心情	85
訴え成分	20
訴え成分「文末詞」	25
訴えの意味作用	43
訴えの機能	85
「訴え」の基本性	3
訴えの効果	87, 445
訴え効果	65
訴えの作用	3
訴えの心理	24
訴え心理	25
訴えの心理の表現	24
訴えの度あい	44
「訴え」の内容に関する省察	5
訴えの中味	44
訴えのはたらき	5
「訴え」の表現	3
訴えの方向	44
訴えの役わり	83
訴え要素	10, 20
訴え要素とその出現の位置	6

### 〔エ〕

英語	13, 28
現代英語	14
エジャキュレーション	48
越前弁	66

### 〔オ〕

大阪弁	21, 195
音	24
音韻論	86

音感	246, 432, 535
音形	23, 25, 85, 86
音声言語	54, 86
音声現象	xviii, 134
音声表現法	109
音声表現論	87
音節	25
音節文字	25
音素	86
音素論	86
音相	33, 45, 50
音調	21
音調の上げ下げ	21
音変化	33, 41

## 〔カ〕・〔ガ〕

外的言語学	75
会話	27
会話生活	27
会話の世界	15
会話のセンテンス	27
書きことば	49
格助詞	9, 52
下接者重点	9
語りかけ	38
活用	32, 33
活用形	12, 31, 32
感詞	34
感情価値	590
感声化	65
感声的	14, 15
感声的文末詞	45, 46, 48, 87, 130, 131, 250
感声的な文末詞	445
感動音	129
感動詞	41
感動詞系 (=文系) の文末詞	71

感動助詞	xvi, 30, 32
間投	35
間投詞	29, 35, 36, 48
間投助詞	28, 29, 34
間投助詞と終助詞	xv
間投成分	34, 35, 36
間投成分=間投部 (間投話部)	35

## 〔キ〕

聞き手	6, 9, 28
記述	77
記述, 叙述説明	83
記述体系の二方向	75
記述方法	83
既成文末詞二つ以上の複合形	42
機能	9, 48, 50, 56, 57, 58, 60, 61, 63, 66, 67, 83
待遇機能	57, 58, 59, 60
機能体	86
機能的連関	132
機能総論	48
機能論	48
表現論	48
九州弁	46
九州方言	243
共時態	78
共時論的処理	323
共時論的たちば, 通時論的たちば	44
強調表現	149
共通語	7, 245, 443
共通語の流布	340
共通語文末詞	61, 62
共通語文末詞界, 方言文末詞界	61
京都弁	446
近畿方言	21
近畿ことばの特色	187
近畿弁	47, 187

近畿弁のアクセント, 四国弁の  
 アクセント…………… 188  
 禁止形…………… 31

[ク]

口ことば…………… 49, 54  
 国の西半地方…………… 434

[ケ]・[ゲ]

敬意…………… 59  
 敬語法…………… 60  
 形式観…………… 40  
 形態…………… 23, 24, 30, 32  
 形態素…………… 8  
 形態の省略…………… 72  
     機能…………… 72  
 系統・脈絡, 系脈…………… 78  
 言語…………… 3, 7, 16, 18  
 言語活動…………… 3  
 言語記号…………… 3  
 言語教育…………… 78  
 言語研究…………… 86  
 言語研究での次元観…………… 74  
 言語研究の方法…………… xviii  
 言語社会…………… 443  
 言語心理…………… 18  
 言語生活…………… 3, 23, 77, 78, 109  
 言語発達…………… 443  
 言語表現…………… 3, 4, 26  
 言語表現作用…………… 3  
 言語表現の生活…………… 26, 38  
 原始的感動音…………… 442  
 言主…………… 25  
 言主の意識…………… 25  
 原生的文末詞…………… 44, 45, 245  
     原生的な文末詞…………… 71

{感声的文末詞…………… 45  
 {非感声的文末詞…………… 45  
 原生の感声的文末詞…………… 130  
 現代英語…………… 17, 22, 63  
 現代英語の文構造…………… 12  
 現代共通語…………… 61  
 現代語研究…………… 62  
 現代日本語…………… 62

[コ]・[ゴ]

語…………… xviii, 25, 28, 35  
 語彙現象…………… xviii  
 語意識…………… 30  
 高次共時論…………… xix, 77, 78  
 高次共時方言学, 記述態度…………… xix  
 構造…………… 18  
 構造連関・意味連関…………… xx  
 構造論…………… xix  
 膠着…………… 12, 13, 39  
 膠着要素…………… 12  
 口頭語…………… 11  
 高平調…………… 21  
 広母音…………… 87, 246, 443, 445  
 語感…………… 443  
 語気詞…………… 16  
 語句…………… 35, 61  
 国土辺周分布…………… 434  
 語形…………… 25  
 古語意識…………… 42  
 語詞…………… 48  
 語序…………… 13, 16, 17, 18  
 個人癖, 方言習慣…………… 115  
 古態敬語法…………… 140  
 「語」単位の次元, 文表現次元…………… 25  
 語としての文末詞…………… xviii  
 ことばづかい…………… 24  
 ことばづかい, 意味作用…………… 50

語尾	9
コミュニケーション	4
孤立助詞	29
孤立性	52

## 〔サ〕・〔ザ〕

下げ調子	18, 19, 21
薩摩弁	68
讃岐方言	57
残存分布	435

## 〔シ〕・〔ジ〕

詞	31, 32, 38
辞	31, 32, 38, 53
四国弁	47
指示代名詞	35
実際社会の文法生活	40
実詞	29
しめくりのはたらき	53
終助詞	xvi, 28, 29, 30, 59, 60, 62
収約的頂点	33
主述関係	51
主述形態	17
主述構造	50
述部	11, 12, 50
述部化傾向	51
主部	12, 50, 51
準体助詞	70
承接	12
使用頻度	133
昭和日本語の全方言状態	xix
昭和日本語方言	xix
昭和日本語方言状態	xix
昭和日本語方言文末詞<文末助詞>の統合的記述	81
助詞	29, 30, 33, 35, 37, 52, 59, 60,

## 65, 68, 70

助詞概念	30
助詞観	28
助詞系のもの(文末詞)	68
叙述	3, 11, 53, 54, 55
叙述構造	52, 54, 55
叙述構造収約の機能	50
叙述構造統一収約の機能	51
助動詞	11, 12, 33, 57, 59, 64, 71, 91
助動詞系の文末詞	68
助動詞による尊敬表現法	57
自律的発展	77
新複合形	43
新文末詞	42, 67, 72
新文末詞生成	42
心理的休止	66
心理的なポーズ	51

## 〔ス〕

スピーチのパート, 話部	38
スペイン語	16

## 〔セ〕

生活語意識	8
生態	xix, 77
生態・動態	79
接続詞	31, 32, 36
接続詞, 文的性格	31
接続助詞	51, 52, 108
接着	13
瀬戸内海大三島北部	42
仙台弁	87, 89
センテンス	3, 10, 15, 16, 32, 36, 39, 49, 50, 51, 61, 73
センテンス, 訴えの表現	xvii
センテンス本位の記述, 表現記述	61

〔夕〕・〔ダ〕

待遇意識……………55  
 待遇意識の展開…………… 55, 56  
 待遇機能…………… 57, 58, 59, 60  
 待遇敬卑の表現……………56  
 待遇表現……………56, 57, 61  
 待遇表現, 待遇敬卑の表現……………55  
 待遇表現文…………… 55, 56, 57, 83  
 待遇表現法…………… 140  
 待遇表現法展開……………55  
 待遇表現法研究……………60  
 待遇品位……………61, 432  
 体系的存在……………76  
 体言……………35  
 代名詞……………35  
 代名詞系の文末詞……………70  
 対話……………53  
 対話効果…………… 133  
 対話センテンス……………55  
 対話の文法……………49  
 対話「文表現」……………65  
 対話「文」表現の収約点…………… 130  
 単語論……………32, 67, 73  
 単語論, 文論……………61  
 単純感声的な文末詞…………… 590  
 単純感声文末詞…………… 447  
 単純形の文末詞…………… 130  
 単純よびかけ…………… 590  
 単数……………49  
 単文……………52  
 段落……………11  
 談話…………… 3  
 談話語……………49

〔チ〕

地域社会……………72  
 地方人…………… 27, 28  
 地方的な一文アクセント傾向…………… 369  
 中国語……………17  
 中舌母音…………… 385  
 長呼部分……………24  
 朝鮮語, 現代朝鮮語……………17  
 陳述……………53, 54, 55

〔ツ〕

通時態……………78  
 通時態, 共時態……………77  
 通時論, 共時論……………77  
 津軽弁……………88, 89, 91  
 強さのアクセント……………37

〔テ〕

定形文末詞…………… 130  
 転訛……………24  
 転成……………45  
 転成<転生>……………41  
 転成文末詞……………39, 42, 52  
 転成(転生)文末詞……………44  
     転成の文末詞……………45  
     転成した文末詞……………43

〔ト〕・〔ド〕

ドイツ語…………… 15, 18  
 東京語…………… 24, 39, 47, 70  
 東京弁……………70, 247  
 統合的記述……………84  
 動詞…………… 11, 12  
 動詞系の文末詞……………69  
 読点……………39  
 「東北～裏日本」系の分布…………… 107

「東北～裏日本」系の方言地帯	107
東北弁	21, 22
東北方言	243
特定訴え成分	7
特定訴え要素	6
特定文末部	28, 48, 49, 50, 51, 53, 55, 56, 57
特定文末部 (←文末詞)	48, 58
特定文末話部 (→文末詞)	74
特定文末要素 (文末詞)	13, 17
特定文末成分	17
特定文末部化	67
特定文末部の機能	48
独立詞	29, 32, 86
土地っ子	60

## 〔ナ〕

内的言語学	75
内的言語学の記述	75
ナ行音「ニ」文末詞存立	435
「ナ [na]」のよびかけの音効果	243

## 〔二〕

日常談話文	18
日本語	xvii, xix, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 22, 26, 38, 41, 43, 63, 65, 72, 75, 79, 83, 592
日本語史	130
日本語生活	10, 592
日本語対話文表現での訴え法	20
日本語対話文表現での文末要点	8
日本語対話文表現の文末の訴え 要素	20
日本語特有の文構造	17
日本語の構造論的特質	14、

日本語の文表現構造	18
日本語の文表現の構造, 文末決 定性の表現構造	12
日本語の文表現の構造論的特質	11
日本語の文法学	79
日本語の文法構造	14
日本語の文法構造上の特性	46
日本語の文法論的特質	xvii
日本語の文末特定要素	15
日本語の歴史	39
日本語の歴史的推移	592
日本語表現生活	9
日本語表現法の文末決定性	11, 12
日本語文表現	9, 10, 17
日本語文表現の構造	10
日本語文表現の構造・機能と文 末特定要素——日本語「文 表現」の文末決定性——	10
日本語「文表現」の文末決定性	10
日本語文表現の文末決定性	18
日本語「文表現法」の特質	130
日本語文法	9
日本語方言共時態	75
日本語方言状態	67
日本語方言状態の全域	384
「ニ」討究	385
「ニ」の探査	384
「ニ」の発生	432
人間生活	86
人間存在の歴史	77
人間対話	27
人間対話での訴え	27

## 〔ネ〕

「ネ」に対する違和感	340
------------	-----

[ハ]・[パ]

発展的動向……………77  
 話しことば…………… 11, 38  
 話し手……………6, 9, 11  
 パロール化（表現活動の現場化）……………54  
 パロール追求の方言学…………… 432

[ヒ]

筆者生活語の「ニ」に関する昭  
 和二十一年の記述…………… 379  
 表現……………3, 39  
 表現, 表現内容……………44  
 表現意識…………… 7  
 表現意図…………… 7  
 表現意味論…………… xviii  
 表現活動……………86  
 表現機能……………52, 133  
 表現気分……………26  
 表現形式…………… 39, 40  
 表現形態……………39  
 表現効果……………34  
 表現効果, 待遇効果…………… xviii  
 表現構造……………12  
 表現作用…………… 3  
 表現次元……………28  
 表現者……………3, 6, 7, 10, 11, 38  
 表現重点……………8, 9, 10  
 表現生活……………10, 443  
 表現前の次元……………28  
 表現待遇価……………22  
 表現転換……………28  
 表現内容……………6, 11, 17, 30  
 表現の音調…………… 591  
 表現の決定……………11  
 表現「文末決定」の構造…………… xvii

表現法…………… 12, 18, 384  
 表現要素…………… 4  
 表現欲求……………19  
 表出…………… 3  
 標準語…………… 443  
 標準語体系…………… 245  
 品位差…………… 486  
 品詞…………… xviii, 17, 28, 35, 37, 38, 42,  
 43, 86  
 品詞「文末詞」……………xviii  
 品詞処理……………28  
 品詞論…………… 28, 29, 35, 86

[フ]・[ブ]

複合……………58  
 複合形…………… 444  
 複合形態, 下方要素……………46  
 複合形文末詞…………… 42, 43, 46, 47, 58, 59  
     複合文末詞……………62  
 複合方式…………… 444  
 複合形文末詞の新作……………42  
 複合形文末詞の処理……………46  
 複語尾……………11  
 副詞系の文末詞……………70  
 副助詞…………… 9  
 複数……………49  
 文……………17  
 文アクセントのパターン<特質  
     傾向>……………38  
 文アクセント, 高平調……………38  
 文完体……………39  
 文構造…………… 15, 17, 18, 39, 63, 65  
 文章……………49  
 文章作品……………11  
 文章表現……………6, 11  
 文章表現（連文表現）……………79  
 文章表現論……………79

文節	37, 38	文表現の対他作用	27
文待遇表現	59	文表現の流れ(叙述構造)	53
文待遇表現(敬卑表現)	60	文表現の認定	40
文待遇表現法	57	文表現の文末特定成分	xvii
文中助詞, 文末助詞	29	文表現法	11
文中の助詞, 文中助詞	52	文表現本位(センテンス本位)	61
文的性格	17, 32, 37, 65	文表現末尾特定成分, 文末詞	xix
文的性格, 文的表現	36	文表現論	67, 73, 74, 79
文的性格, 文表現相当	65	文表現論, 文章表現論	79
文の待遇表現の流れの収約	55	分布	xix
文の表時効果	xviii	分布, 系脈分布	78
文の分析	23	分布図	78
文把握	39	文法	18, 39, 50
文表現	xvi, xvii, xix, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 15, 20, 21, 22, 23, 25, 27, 31, 32, 35, 36, 38, 39, 40, 46, 48, 52, 53, 54, 55, 60, 63, 65, 67, 71, 72, 73, 74, 79, 83, 85, 88, 91, 109	文法学	80, 86
「文」表現	63	文法研究	10, 87
文の表現	40, 53	文法現象	xviii
文表現, 対話文	xviii	文法理論	40
文表現, 文の叙述構造	50	文法論	86
文表現形態	51	文末訴え「ア」音	87
文表現構造	xvii	「文末訴えア音」出現の諸相	91
文表現の構造	54	「文末訴えア音」の分布と活動	107
文表現収約の機能	63, 64	文末訴え音	23, 24, 25, 43, 86, 87
文表現上の末尾の特異特定なもの	26	文末の訴え音	22
文表現体	75	文末訴え音, 文末詞形	85
文表現特定化の機能	49	文末訴え音, 特類文末詞	42
文表現の訴え	3, 42	文末訴え音, 準文末詞	86
文表現の完結	40	文末訴え成分	23
文表現の完結と完体	39	文末の訴え成分	20
文表現の研究	23	文末訴え法	18, 19, 25
文表現の次元	29	文末訴え要素	12
文表現の生活	10	文末の訴え要素	10
文表現の待遇価	60	文末ことば	9
		文末詞というもの	xv
		「文末詞」という呼称	28
		文末詞	xvi, xvii, xix, 12, 17, 25, 27, 28, 29, 34, 36, 37, 38, 39, 41, 42, 43, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 61, 66, 70, 71, 73,

- 75, 76, 77, 83, 85, 86, 98, 441, 445
- 文末詞, 終助詞, 感動助詞…………… xv
- 文末詞, 文末助詞…………… 28
- 文末詞<文末助詞>…………… 83
- 文末詞, 特定文末部…………… 59, 60
- 文末詞(——特定文末部)…………… 49
- 文末詞即特定文末部…………… 53
- 文末詞, 独立詞…………… 33
- 文末詞の独立性…………… 33
- 文末詞, 単純新生, 転成…………… 72
- 文末詞, 文的性格…………… 65
- 「文末詞」化…………… 63, 64, 65, 66, 67, 68,  
69, 70, 71, 72
- 文末収約特定要素化, 「文末詞」  
  化…………… 65, 66
- 文中の「『文』の部分」収約要  
  素の「文末詞」化…………… 65
- 「文末詞」化の一般的可能性…………… 63
- 「文末詞」化の可能性…………… 65
- 「文末詞」化の経路…………… 67
- 文末詞活動…………… 130
- 「文末詞」観…………… 28
- 文末詞記述…………… 73, 75, 76, 83
- 文末詞の記述…………… 73
- 文末詞記述, 高次の共時論…………… 77
- 文末詞記述の次元…………… 73
- 文末詞記述の内的言語学…………… 74
- 文末詞形…………… 86
- 文末詞研究…………… xviii, xix, 10, 41, 60,  
62, 79, 85, 117
- 文末詞の研究…………… 59
- 文末詞研究, 言語研究…………… 74
- 文末詞効果…………… 33
- 文末詞生成の可能性…………… 39
- 文末詞相当性…………… 63, 65
- 文末詞即特定文末部の叙述構造
- 収約の機能…………… 52
- 文末詞即文末特定話部の, 叙述
- 構造収約の機能…………… 53
- 文末詞体系…………… 72
- 文末詞体系の流動・発展, 日本
- 語そのものの体系的発展…………… 72
- 「文末詞」着眼の重要性…………… xvii
- 文末詞「ナ」の地位・はたらき…………… 244
- 文末詞なるものの分類…………… 84
- 文末詞(一特定文末部)の機能…………… 48
- 文末詞の機能論的研究…………… 61
- 文末詞の叙述…………… 83
- 文末詞の生態…………… 44
- 文末詞(文末特定の訴え成分)
- の成立自在…………… 38
- 文末詞の世界…………… 80
- 文末詞の総合的記述…………… 83
- 文末詞の体系的記述…………… 61
- 文末詞の転成新生…………… 72
- 文末詞の特異特定性——文表現
- と文末詞——…………… 26
- 文末詞の分類…………… 41, 43
- 文末詞の分類処理…………… 46
- 文末詞法, 文末法…………… 60
- 文末重点の訴え法…………… 12
- 文末助詞…………… xvi, 29, 37
- 文末助詞, 文末詞…………… 32
- 文末待遇表現法…………… 55, 57
- 文末詞による文末待遇表現法…………… 57
- 文末での訴え法…………… 14
- 文末での特定訴え要素…………… 12
- 文末特定成分…………… xvii, 12, 24, 27
- 文末特定の成分…………… 63
- 文末特定成分(文末詞)…………… xviii
- 文末特定成分, 文末詞…………… xviii
- 文末特定成分, 特定文末部…………… xviii
- 文末特定の訴え成分…………… 27, 28
- 文末の特定訴え成分…………… 12, 25
- 文末の特定の訴え成分…………… 20, 22
- 文末の特定の「訴え成分」の

諸相	20
文末特定要素	6, 10, 11, 13, 15, 17, 18, 19, 33, 64
文末特定要素 (文末詞)	58
文末の特定要素——〈文末詞 〉——	73
文末に来る特定の訴え要素	xv
文末特定の訴えことば	86
文末の訴え作用の自在性	39
文末表現法	11
文末法	61
文末部	8
文末要点	9
文末要素, 文末特定要素	14
文末の声調	20, 21, 22, 24, 54
文末声調	10, 11, 12
文末の上げ調子	10
文末の上昇調	134
分類されるべき文末詞	41
「文」論	39
〔へ〕	
辺域分布	435
〔木〕・〔木〕	
母音	23, 24, 441
方言	8, 21, 27, 47
方言, 生活語	xvii
方言——という体系的存在	75
方言特性	27
方言界	9, 64
方言界, 共通語界	62
方言会話	xvii, 3
方言会話者	3
方言会話の世界	3
方言研究	xviii, xix, 22, 23, 27, 384

方言研究, 音声言語研究	86
方言の研究, 音声言語の研究	86
方言研究, 文末詞研究	79
方言研究者	xvii, 21
方言研究の表現論的深化	384
方言事象	384
方言習慣	21, 116
方言生活	26, 27, 61, 72
方言生活者	76
方言世界	9
方言待遇表現の世界	60
方言地質	149
方言調査	xvii, 10
方言人	3, 9, 27, 60, 67, 71
方言による変差	133
方言の音韻的基盤	150
方言の純粹記述	61
方言の生命	xvii
方言の世界	xvii, 21, 58
方言の文表現	21, 22
方言表現の生活	xviii
方言風土	149
方言「文表現」	58
方言文末詞研究, 方言学	79
ポーズ	51, 52
方法論	384
本来的な文末詞	41

〔マ〕

間……………39

〔ミ〕

未然形……………32

〔メ〕

名詞系の文末詞……………70  
 命令形……………31  
 命令表現……………447

〔モ〕

目的格……………9  
 文字言語……………54

〔ヤ〕

「ヤ」に関する複合形……………591  
 「ヤ」の活動……………592  
 「ヤ」の諸用法……………590  
 「ヤ」の親愛感……………590  
 「ヤ」文末詞の用法……………447  
 山口弁……………70

〔ヨ〕

用語気分……………310, 432  
 要素論……………74  
 用法の分化拡張……………448  
 用法分化……………132, 443  
 抑揚……………66  
 よびかけ……………3, 6, 16, 32, 56  
 よびかけ・訴えかけ……………32  
 よびかけことば……………4, 5, 71, 443  
 よびかけことば・訴えことば……………40

よびかけの性格……………87  
 よびかけ文……………67

〔レ〕

歴史的記述……………77  
 歴史的共時態……………78  
     歴史的な共時態……………77  
 歴史的な存在としての人間……………77  
 歴史的把握……………78  
 連語……………9

〔ワ〕

話者の深層心理……………394  
 私の方言「文末詞」研究の意図……………xix  
 話部……………65, 66, 67  
 話部末……………65, 66, 67  
 話部論……………38

〔ヲ〕

「を」格……………9

藤原与一（ふじわら・よいち）

略 歴

明治42年1月 愛媛県に生まれる  
昭和12年3月 広島文理科大学卒業  
昭和47年3月 広島大学文学部教授を退官  
現在 広島方言研究所をいとなむ  
広島大学名誉教授・文学博士

主要著書

『方言学』（三省堂・昭和37年）

『方言研究法』（東京堂出版・昭和39年）

『方言研究の回顧と展望』〈方言研究叢書第1巻〉

（三弥井書店・昭和47年）

『昭和日本語の方言』第1・2・3・4巻（同上・昭和48・49・51・52年）

『瀬戸内海言語図巻』上巻・下巻・説明書

（東京大学出版会・昭和49・49・51年）

---

昭和57年1月25日 ©

著 者 藤 原 与 一

発行者 和 田 欣 之 介

---

発行所 東京都中央区 株式会社 春 陽 堂 書 店  
日本橋3-4-16 会 社

---

印刷所 三協美術印刷・製本所 丸山製本